

貸本問屋の研究

松永

瑠成

〈目次〉

序章 貸本問屋の研究とその意義

5

第一章 貸本問屋の史的展開

9

第一節 丁子屋平兵衛の躍進 — 貸本屋世話役から貸本問屋へ —

11

はじめに

11

一、丁子屋平兵衛の概要とその系譜

12

二、貸本屋世話役から貸本問屋へ

17

三、広域的な書籍流通網の形成

21

おわりに

25

第二節 「中本」受容と大島屋伝右衛門

31

はじめに

31

一、大島屋伝右衛門の概要とその系譜

31

二、中本と大島屋伝右衛門

35

三、大島屋伝右衛門の書籍流通

39

おわりに

41

第三節 大島屋伝右衛門と池田屋一統 — 売葉「処女香」を端緒として —

46

はじめに

46

一、処女香について	46
二、大島屋伝右衛門と池田屋清吉	51
三、大島屋伝右衛門と池田屋一統	54
おわりに	59
第四節 黎明期の初代大川屋錠吉	62
はじめに	62
一、貸本屋としての大川屋	62
二、明治十年代の出版物と周辺人物	65
三、大島屋武田伝右衛門との関係をめぐって	69
おわりに	73
第二章 貸本問屋の出版書目	77
第一節 丁子屋平兵衛出版書目年表稿	79
第二節 大島屋伝右衛門出版書目年表稿	120
第三節 初代大川屋錠吉出版書目年表稿	172
(参考) 第二十三回大川屋出版 <small>小説</small> 総目録 <small>図書</small> (明治三十二年八月改正増訂)	258

第三章 貸本文化の変容とその諸相

第一節 貸本屋の諸相

はじめに

一、小林某

二、春日堂播磨屋伊三郎

おわりに

第二節 誠光堂池田屋清吉の片影

はじめに

一、池田屋清吉について

二、当座帳と出入帳

おわりに

第三節 近代金沢における書籍受容と春田書店

はじめに

一、春田篤次・徳太郎から春田書店へ

二、貸本屋としての春田書店

三、春田書店の仕入れと古本業

おわりに

終章 本論文の到達点と今後の課題

396	369	367	365	362	361	361	358	337	334	334	334	331	299	276	275	275	273
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

序章 貸本問屋の研究とその意義

近世・近代の日本において、長らく娯楽的な読み物は自ら購入するよりも、貸本屋から借りて読む方が一般的であった。それは人々が自らの読書体験を振り返った回想類のほか、蔵書目録や営業文書、あるいは書籍に貼付された摺物や押捺された蔵書印などから浮かび上がる貸本屋の蔵書内容を一瞥すれば明らかである。したがって、娯楽的な読み物の受容を考える上で、貸本文化からのアプローチは有効であるどころか、必要不可欠だといっても過言ではない。

貸本屋の蔵書内容は、具体的にどのような書籍が貸本をとおして読まれていたかを如実に物語る。近世期の貸本屋が蔵書を形成するまでの過程、特に書籍の入手に関しては長友千代治氏が四つの方法を提示している。すなわち、①版元からの直接購入、②貸本屋からの購入、③「貸本類仕入所」や「古本売買所」などからの購入、④貸本屋自身による制作（特に写本）の四つである。¹このうち①③については、貸本屋旧蔵本にみられる広告や摺物から書籍の仕入れ方法を分析した長友氏のほか、馬琴の書簡に基づく調査により、貸本屋が版元から読本

を購入していく様子を浮かび上がらせた浜田啓介氏の研究がある。³こうした研究をとおして、貸本屋がどのようにして書籍を入手したかが明らかになった時、初めて「版元↓貸本屋↓読者」という版元から貸本屋、そして貸本屋から読者へと書籍が行き届くまで、換言すれば、娯楽読み物の出版・流通・受容を一つの流れとして捉えられるようになる。しかしながら、版元・貸本屋間の書籍の動きについては、近世だけでなく近代においても、未だ十全に明らかにされているとは言い難い。

本論文では、こうした版元・貸本屋間における書籍の動きを明らかにすべく貸本問屋に注目する。第一章第一節「丁子屋平兵衛の躍進——貸本屋世話役から貸本問屋へ——」で定義するように、貸本問屋とは「貸本向けの書籍を出版・蔵版し、それらを卸す問屋としての機能を有した書肆」であり、先の図式でいえば「版元」に位置する存在である。このように貸本問屋は、貸本をとおして受容される娯楽読み物の起点に位置するにも関わらず、その実態は今なお詳らかになっていな

い。だが、前述した娯楽読み物の「版元↓貸本屋↓読者」という流れを捉える上でも重要であるため、貸本問屋がどういった書籍を、どのように出版・流通させていたかという実態解明はなされなければならぬ。

貸本問屋のうち、本論文では文溪堂丁子屋平兵衛・文永堂大島屋伝右衛門・聚栄堂大川屋錠吉を取り上げる。それぞれ近世後期から近代にかけて活躍した代表的な貸本問屋である。彼らの活動時期は多少異なる部分があるものの、大別すると近世後期（丁子屋）・近世後期～近代初頭（大島屋）・近代初頭～近代末葉（大川屋）となる。つまり、それぞれの活動とその意義を調査・研究することは、貸本問屋の実態解明に留まらず、近世・近代におけるその史的展開をも明らかにすることとなる。また、本論文ではあわせて近世・近代の貸本屋の具体的な蔵書内容や営業の様子をも明らかにしていく。これにより、丁子屋・大島屋・大川屋ら貸本問屋を起点に出版・流通した娯乐的な読み物が、貸本屋をとおして受容されるまでを一つの流れとして捉えることが可能となる。

以上のように、娯楽読み物の出版・流通・受容、そして貸本文化を考える上で貸本問屋という存在は重要である。本論文で丁子屋・大島屋・大川屋らを取り上げることにより、近世・近代といった時代区分に囚われない、一貫した貸本問屋史、そして娯楽読み物の出版・流通・受容の歴史を紡ぐことが期待できる。

本論文は、貸本問屋の実態解明とその史的展開を明らかにする第一章および第二章、個々の貸本屋の様相と変遷を取り上げた第三章に序章・終章を加えた全五章から構成される。

第一章「貸本問屋の史的展開」は、丁子屋平兵衛・大島屋伝右衛門・大川屋錠吉ら、それぞれの活動とその意義を明らかにするなかで、近世から近代における貸本問屋の実態とその史的展開を通観するものである。

第一節「丁子屋平兵衛の躍進——貸本屋世話役から貸本問屋へ——」では、丁子屋平兵衛が貸本屋世話役から貸本問屋となり、その地位を確かなものにしていくまでの過程を書籍の売捌と貸本屋に向けられた販路の形成といった点に着目して明らかにした。まず、三代続いた歴代平兵衛の系譜を再検討し、初代平兵衛が貸本屋・版元としての土台を築き上げたこと、また二代目が兄である大坂屋半蔵を介して曲亭馬琴との距離を縮めていき、その著作を刊行するなかで丁子屋が全盛期を迎えたことを指摘した。次に書籍の売捌に注目し、丁子屋が貸本屋世話役という立場を利用して自らの組はもとより、江戸市中の貸本屋に向けられた販路を形成し、書籍の売捌をおこなっていたことを明らかにした。最後に丁子屋が保持した全国規模の広域的な書籍流通網が、豊富な貸本向け書籍の蔵版や貸本屋に向けられた流通網を売りにして、江戸近郊の流通拠点となる書肆、そして上方の書肆と結びつくなかで築き上げられたと論じた。

第二節「中本」受容と大島屋伝右衛門」では、中本の版元として知

られていながらも実態がよくわかっていなかった大島屋伝右衛門を取り上げ、その系譜と出版活動および具体的な書籍流通を明らかにするなかで、大島屋が中本受容に果たした役割について考察した。まず、これまで詳らかになつていなかった歴代伝右衛門の系譜を整理し、大島屋が三代にわたつて続いていくことを明らかにした。次に初代および二代目伝右衛門時代の蔵版目録から、大島屋が中本の出版および求版に力を入れていたことを指摘するとともに、表紙文様や附載された広告から、そうした中本が明治まで印行されていたことを示した。そして最後に、大島屋伝右衛門の書籍流通網が江戸の書肆丁子屋平兵衛や上方の河内屋茂兵衛らの助力を得ながら形成されていたことを論じた。

第三節「大島屋伝右衛門と池田屋一統——売薬「処女香」を端緒として——」では、大島屋が精剤・販売していた売薬「処女香」を取り上げ、その広告や引札などを精査するなかで、大島屋と池田屋清吉をはじめとする池田屋一統との結びつきを指摘するとともに、彼らとの間で築き上げられた書籍流通網について論じた。まず、為永春水ではなく、大島屋によつて処女香が精剤・販売されていたことを種々の資料から明らかにした。次に処女香の広告や引札からその売弘に貸本屋池田屋清吉が携わっていることを指摘し、最後に池田屋清吉・池田屋利三郎・池田屋幸吉ら池田屋一統との結びつきが、大島屋独自の流通網へと繋がったことを明らかにした。

第四節「黎明期の初代大川屋錠吉」では、講談本の版元として知られ

る大川屋錠吉（後の大川屋書店）の黎明期の動向と出版物に着目し、後に彼が貸本問屋として躍進できた要因を明らかにした。まず、従来から知られていた大川屋の貸本屋としての経歴を再検討し、その営業が明治二十八年ごろまで続けられていたことを明らかにするとともに、書籍の出版・取次・販売と並行して長らく続けられたこの貸本業が、貸本問屋として躍進を遂げられた一つの要因であったことを指摘した。次に明治十年代の出版物から浅草区の高梨弥三郎と瀬山直次郎との結びつきを指摘し、大川屋の当初の活動が同地域の書籍業者によつて支えられていたことを明らかにした。最後に同じく浅倉屋久兵衛方で奉公していた経歴を持つ三代目大島屋武田伝右衛門は、大川屋とともに書籍の出版・求版をおこなうだけでなく、彼に貸本問屋としての道を歩ませる直接のきっかけであり、要因であったことを論じた。

第二章「貸本問屋の出版書目」は、大島屋・丁子屋・大川屋ら貸本問屋が出版・蔵版・求版した書籍を年代順に概観し、彼らの出版活動の変遷を明らかにすることを目的とする。これは貸本問屋の実態解明のみならず、貸本屋をとおして人々がいかなる書籍を受容していたのかを、貸本問屋の側から浮かび上がらせていくことともなる。

それぞれ第一節「丁子屋平兵衛出版書目年表稿」では丁子屋、第二節「大島屋伝右衛門出版書目年表稿」では大島屋、第三節「初代大川屋錠吉出版書目年表稿」では大川屋の出版書目を取り上げる。なお、大川屋関連の書籍は残存状況がよくないため、参考として明治三十年代の出版・蔵版の様子を窺い知ることのできる「第二十三回大川屋出

版小説総目録（明治三十二年八月改正増訂）を附録した。

第三章「貸本文化の変容とその諸相」では、丁子屋・大島屋・大川屋らが活躍していた時期、とりわけ幕末から明治・大正において貸本屋はいかなる変容を遂げていったのか、その様相を通観して貸本文化の流れを捉える。

第一節「貸本屋の諸相」では、反古として残された種々の記録類から、幕末に営業していた小林某と春日堂播磨屋伊三郎らの蔵書内容やその実態を明らかにした。

第二節「誠光堂池田屋清吉の片影」では、坪内逍遙も利用したこと知られる貸本屋池田屋清吉の実態を営業文書や旧蔵書などから浮かび上がらせた。

第三節「近代金沢における書籍受容と春田書店」では、石川県立図書館辻家貸本文庫の分析をとおして、金沢市尾張町で営業していた貸本屋兼古本屋の春田書店の蔵書内容や貸本業・古本業の実態を明らかにするなかで、同地における書籍受容の様相を明らかにした。

以上の構成により、本論文では貸本問屋の実態解明に留まらず、近世・近代における「貸本問屋↓貸本屋↓読者」といった貸本問屋を起点とする娯楽読み物の出版・流通・受容の流れをも捉えていく。

注

- 1 長友千代治著『近世貸本屋の研究』（東京堂出版、一九八二年）四五頁。
- 2 注1前掲書（四六―五〇頁）および『江戸時代の図書流通』（思文閣出版、二〇〇二年）一三四頁。
- 3 浜田啓介「馬琴をめぐる書肆・作者・読者の問題」『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年所収。初出は一九五三年。

第一章

貸本問屋の史的展開

第一節 丁子屋平兵衛の躍進——貸本屋世話役から貸本問屋へ——

はじめに

貸本問屋という存在は、これまでも知られている。前田愛氏はこれを「個人営業の貸本屋を対象に、営業用の貸本の戯作小説・写本類を卸す問屋」¹とし、浜田啓介氏はその業態を「貸本屋向きの本を刊行し、貸本屋に仲問売りをする業態」²としている。

この「貸本問屋」自体は、近世後期から使用が認められる語である。たとえば、曲亭馬琴の文政元年（一八一八）十月二十八日鈴木牧之宛書簡³には、「拙者が引つけ遣候かし本問屋にて、本の下がりいたし、拙者が拵之遣候得意方をまはり、かしつけ候て、小石川辺に罷在候」とある。これは馬琴の長女さきの婿候補であった貸本屋に関する記述である。⁴書簡によれば、この貸本屋は馬琴が懇意にしている貸本問屋で「本の下がり」によって貸本向けの書籍を入手している。この記述により、文政元年にはすでに貸本問屋と呼ばれる存在、あるいは業態が確立されていることを確認できる。また文政十一年（一八二八）五月二十一日殿村篠斎宛書簡には、「此板元素人故、自分にて売捌き候事

不叶、丁子やハ書林なれども、かし本問屋にて、此もの引受、売捌き候故、凡五六わりの高利を得「候」ハねば引請不申候」とある。書物問屋仲間に属さない版元に代わって、貸本問屋である丁子屋平兵衛は手数料と引き替えに売捌を担っていたという。同様に天保十一年（一八四〇）十二月十四日殿村篠斎宛書簡でも「如仰の、如此くたれ本ハ、貸本問屋^江頼置候ても得安く候得ども、元摺二而無きずの本は、久敷丁子屋^江頼置候へども、手二入かね候間、無抛其御地^江奉頼候事二御座候」と貸本問屋として丁子屋平兵衛があげられている。馬琴は「元摺二而無きずの本」、つまり摺りも状態もよい本は、たとえ丁子屋でも手に入れるのは難しいと述べている。馬琴の書簡以外でも、為永春水作『春告鳥』二編（天保年間刊・丁子屋平兵衛版）の序文に「今年^{ことし}も新著^{しんしゅ}の発行^{うり}を巳午^{みま}の間^{あいだ}から万^{よろ}よしとは面白^{おもしろ}き笑顔^{えがほ}ぞ貸本問屋衆^{かしほんどひやしゆ}の喜^{よろこ}悦^び重なる二編^{べん}三編^{さんべん}」、『藤岡屋日記』第二十九「嘉永三庚戌年 珍話八月^{つぎ}」に「九月二日夜雨降ニ、大伝馬町三丁目貸本問屋丁子屋平兵衛極日^{ごくひ}迄」に「九月二日夜雨降ニ、大伝馬町三丁目貸本問屋丁子屋平兵衛方江、手先之者参り候て申候ハ」⁵などの用例がみられる。

以上をもとに改めて整理するならば、貸本問屋とは貸本向けの書籍を出版・蔵版し、それらを卸す問屋としての機能を有した書肆ということになる。だが、さして出版をおこなっていない水戸の書肆山本作兵衛も自身を「貸本問屋」と称しているため、貸本屋に書籍を卸す仲卸業者をも貸本問屋と言ったようである。

先の貸本問屋の用例で幾度も名前があがっていた丁子屋平兵衛は、江戸における貸本問屋の先駆けであるとともに、その代表的な存在である。『画入外題作者画工書肆名目集』⁷（以下『名目集』）によれば、文化五年（一八〇八）五月時点で丁子屋は本町組の貸本屋世話役となっている。本稿では、丁子屋が貸本屋世話役から貸本問屋となる過程と、丁子屋が保持した書籍流通網について明らかにしていく。

一、丁子屋平兵衛の概要とその系譜

丁子屋平兵衛については、次の『日本古典籍書誌学辞典』の記述（藤沢毅氏執筆）が現在最もまとまっており、参考になる。

江戸の地本問屋、のち書物問屋を兼ねる。堂号文溪堂、姓は岡田。貸本屋出身。初代は宝暦十二年（一七六二）生、文政十一年（一八一八）没。養子の左兵衛が二代目となる。二代目はまた琴秀を名乗る。兄は大坂屋半蔵（江戸の書肆。千翁軒）。住所は江戸小伝馬町三丁目。天保十三年（一八四二）冬頃に大伝馬町二丁

目（庄三郎地借）に転居。これは天保の改革の出版規制による答めを受けたことが原因だが、店を子の名義にして営業を続けた。『南総里見八犬伝』を始め、馬琴の長編読本の出版に大きく関わった。読本の他、人情本・滑稽本の出版が多く、また『画像稗史外題鑑』に始まる目録の製作も行う。河内屋茂兵衛などの大坂書肆とは、本替などの機構により営業活動を共にした。

しかしながら、残念なことに出典となる文献が一々示されていない。そこで本稿では、まず『日本古典籍書誌学辞典』の記述を参考にしつつ、資料を補いながら初代から二代目、そして藤沢氏が言及していない三代目に至るまでの丁子屋の概要と系譜を整理してみた。

初代丁子屋平兵衛の出自や経歴は詳らかでないが、当初は貸本屋だったようである。貸本印や摺物など直截的に貸本業の様子を物語る資料はないものの、前述のとおり文化五年（一八〇八）五月には本町組の貸本屋世話役となっていたことが『名目集』から窺い知れる。おそらく貸本業は、文化初年ごろからおこなわれていたのだと考えられる。

文化期に丁子屋が携わった出版物は、文化五年刊の熟睡亭主人作『復讐独揺新語』、同七年刊の四方歌垣作『古実月宵鄙物語』前編、同九年刊の神屋蓬洲作『利生天縁奇遇』、十返舎一九作『討はいたさぬ世の中貧福論』前編、赤須賀米作『成田道中黄金の駒』、同十一年刊の岡山鳥作『四季春廿三夜待』、文化末年ごろの刊行と思しい一楊軒玉山編『出像外日待春廿三夜待』、文化末年ごろの刊行と思しい一楊軒玉山編『碑史外題鑑』でそれほど多くはない。⁹ 当時丁子屋は貸本屋と貸本屋世話役の

業務が主で、出版活動はまだ徒だったようである。出版活動が本格化するのは文政四年（一八二二）の十返舎一九作『清談峰初花』後編（植村藤右衛門・秋田屋太右衛門・菱屋金兵衛・鶴屋金助との相版）からである。文政四年以降、断続的に出版物が世に送り出されていくことから、貸本屋のみならず、版元としての土台も初代平兵衛によって作り上げられたとみてよい。

『曲亭馬琴日記』文政十一年（一八二八）七月二十三日の条に「昼後、大坂や半蔵来ル。丁子や平兵衛、当月七日^二病死、五十三歳、内損のよし¹⁰」とあるように、初代平兵衛は文政十一年七月七日に亡くなっている。没年から逆算すれば生まれは安永五年（一七七六）となる。『日本古典籍書誌学辞典』において藤沢氏は、初代平兵衛の生年を宝暦十二年（一七六二）としていたが、これがどの資料に基づき確定されたのかは不明である。

初代亡き後、養子の佐兵衛（左兵衛）が継いで二代目平兵衛となる。二代目が養子であったことやその名前については、たとえば『曲亭馬琴日記』文政十年（一八二七）六月朔日の条にある「予他行中、丁子や平兵衛養子某来ル」や、同文政十二年（一八二九）十一月二日の条の「四時比、丁子屋左兵衛事平兵衛来ル」といった記述などから判明する。文化十三年（一八一六）六月六日、丁子屋のもとを訪れた信濃国松本の書肆、慶林堂高美屋甚左衛門は『江都紀行』に「伝馬町丁子屋佐兵衛（中略）へ寄¹¹」と記している。文化末年には、後の二代目となる佐兵衛がすでにおり、丁子屋の経営を支えていたのである。

かつて丁子屋のもとで奉公していた「当年七十五歳」の二代目大島屋伝右衛門が、明治三十九年（一九〇六）に「主人平兵衛は馬喰町の書林若林清兵衛の所で年季を仕上げた人」と証言している。¹² 二代目伝右衛門は幼名を安次郎といい、初代伝右衛門が亡くなった安政三年（一八五六）五月に大島屋を継いでいる。¹³ 「当年七十五歳」から逆算すれば、生まれは天保三年（一八三二）となる。初代丁子屋平兵衛は文政十一年に亡くなっているため、二代目伝右衛門が奉公していたのは、二代目平兵衛の時代ということになる。つまり、佐兵衛は逍遥堂若林清兵衛のもとで奉公した後、文化十三年までの間に丁子屋の養子となり、初代亡き後二代目平兵衛となったのであった。

二代目平兵衛時代の丁子屋で特筆すべきは、曲亭馬琴との結びつきを強め、その著作を刊行したことである。文政五年（一八二二）ころ、刊行が遅れていた『南総里見八犬伝』五輯の制作を手伝うなかで、初代平兵衛は馬琴の知遇を得ている。¹⁴ その後も親交はあったようで、小伝馬町周辺を焼いた文政十年（一八二七）二月十四日の火事の際して、馬琴は丁子屋を見舞っている（『曲亭馬琴日記』文政十年二月十四日の条）が、初代平兵衛は馬琴と密接な関係を築いてはいなかった。次にみていくように、二代目平兵衛が兄である千翁軒大坂屋半蔵を介して馬琴との距離を縮めていくなかで、丁子屋は馬琴の著作を刊行するようになる。以下、『曲亭馬琴日記』を中心にその様子を窺ってみたい。

文政十年（一八二七）二月十二日、大坂屋半蔵は弟佐兵衛こと後の二代目平兵衛を伴い、『松浦佐用媛石魂録』後編の彫板の担当が丁子屋

になったことを馬琴へ報告するとともに、その執筆を催促している。『松浦佐用媛石魂録』は、双鶴堂鶴屋金助を版元として文化五年に前編が刊行された。しかし、前編奥付で予告されながらも、後編はすぐには刊行されなかった。馬琴は自身の多忙ゆえとするが、¹⁵佐藤悟氏が指摘するように文化露寇の影響もあったのであろう。¹⁶文政年間に前編の版木を入手した大坂屋半蔵は、馬琴に後編の執筆を乞う。「前編を綴りしより既に二十許年きよねんに及びて、いたく流行に後れしものなれば、作者のこゝろ、こゝにあらず」と当初は執筆を固辞していた馬琴であったが、大坂屋の再三にわたる要求に屈し、最終的にこれを了承したのであった。¹⁸なお、丁子屋は彫板だけでなく、書物問屋でなかった大坂屋に代わって『松浦佐用媛石魂録』後編の売捌をも請け負うこととなる（文政十一年五月二十一日殿村篠斎宛書簡）。

その後も二代目平兵衛は『松浦佐用媛石魂録』後編執筆の催促（四月五日および六月一日）のほか、嫁を迎えた息子宗伯への祝儀（四月二十一日）や暑中見舞い（閏六月十四日）を大坂屋とともに送るなどして、馬琴との距離を少しずつ縮めていく。翌十一年に『松浦佐用媛石魂録』後編が刊行された後も、丁子屋は大坂屋を介して今度は『近世説美少年録』初輯の売捌に携わる（文政十二年二月九日殿村篠斎宛書簡）。また、馬琴の方でも文政十一年八月五日に『鎌倉管領九代記』を大坂屋を介して丁子屋から取り寄せるなどしている。こうした結びつきも関係してか、丁子屋は『南総里見八犬伝』七輯上帙の売り出しを担当し（文政十二年十一月二日および四日の条など）、続く下帙で

は質に置かれた版木を請け出して売り出すなどしている（『近世物之本江戸作者部類』巻之二上）。「七輯は丁平の資たすけを得て発販することを得たるものから」（『近世物之本江戸作者部類』巻之二上）と馬琴も述べているとおり、七輯における丁子屋の働きは大きかったようである。下帙の奥付にはその名が記されている。

丁子屋と馬琴の結びつきは、仲介役ともいえるべき大坂屋半蔵の死をきっかけにしてさらに強まる。大坂屋は文政十二年（一八二九）六月ごろから体調を崩しながらも、『近世説美少年録』二輯の制作を進めていたが、翌文政十三年（一八三〇）一月二十三日に亡くなってしまふ。¹⁹製本途中だった『近世説美少年録』二輯は丁子屋に引き継がれることとなるが、この当時馬琴は二代目平兵衛を「としわか故、万事行届不申候」と評しており、大坂屋ほど信頼してはいなかったようである。²¹しかし、二代目平兵衛は『近世説美少年録』二輯だけでなく、大坂屋が携わっていた『開巻驚奇侠客伝』初集をも引き継ぎ、その版元である河内屋茂兵衛と馬琴との間を取り持った。²²こうした動きから、二代目平兵衛には大坂屋の後任となることで、馬琴との結びつきを強めていこうという企みがあったのだと考えられる。この企みは実際に功を奏したようで、その後丁子屋から『近世説美少年録』三輯と『開巻驚奇侠客伝』二〜四集のほか、八輯以降の『南総里見八犬伝』や『新局玉石童子訓』が刊行されるようになっていく。

馬琴の著作を刊行するようになった天保期は、丁子屋にとっての全盛期である。この時期の出版物については第二章第二節「丁子屋平兵

衛出版書目年表稿」に譲るとして、ここではその様子を蔵版目録から窺ってみたい。

蔵版目録としてよく知られているのは、丁子屋が携わった書籍に時折附載されている「書林文溪堂蔵版目録」と「東都書林文溪堂蔵版中形絵入よみ本之部目録」である。「書林文溪堂蔵版目録」には読本や随筆類が三十三作品、「東都書林文溪堂蔵版中形絵入よみ本之部目録」には中本を中心とする四十作品が掲載され、それぞれ書名・著編者・画工・員数に加え、簡単な紹介文が記されている。鈴木圭一氏によれば、これら二つの目録は天保七年（一八三六）の蔵版状況を示すものであり、翌八年正月にはすでに存在していたという。²³ 文化期はわずかに七点の出版物しか世に送り出すことができなかった丁子屋は、天保期に至って七十以上の書籍を出版・蔵版するまでに成長している。當時著名な名物・店・文人・絵師などをまとめた天保年間刊と思しい『東都名所旧跡諸名家名物高名競』²⁴には「書林 小テンマ丁 丁子屋」とある。貸本屋として歩み始めてから約四十年の間に、丁子屋は江戸を代表する書肆へと変貌を遂げたのである。

精力的に活躍し、全盛期を迎えていた丁子屋だったが、天保の改革に伴う出版取締りを受け、勢いがやや衰えることとなる。まず、取締りを受けたのは人情本と好色本である。人情本は天保三年（一八三二）の為永春水作『春色梅児誉美』初編以降、活況を呈しており年々新版が刊行されていた。市中取締懸がかねてからの調査に基づき作成し、天保十二年（一八四一）十二月に提出した「絵草紙并人情本好色本等

之義二付申上候書付」²⁵（以下、「書付」）には「人情本之義者、滑稽本ニなそらへ色情之義ヲ専ニ綴、好色本ニ紛敷姪風之甚敷、婦女子等江者以外風俗ニ抱候処、読本掛名主共改之詮無之、追年数十篇出版差出候趣相聞候ニ付、当年迄差出候表題并来春売出候分共荒増左ニ申上候」として、大島屋伝右衛門・徳兵衛・丁子屋平兵衛・菊屋幸三郎・永楽屋東四郎・加賀屋源助・釜屋又兵衛ら版元七名が所持していた人情本および好色本の名が記されている。丁子屋については、以下のように人情本十一作品、好色本八作品があげられている。

小伝馬町三丁目書物問屋家主平兵衛所持

一 処女七種	初篇方 五篇迄	拾五冊	『処女七種』
一 梅の春	初篇方 三篇迄	九冊	『梅の春』
一 まゆみの花	初篇方 三篇迄	九冊	『眉美の花』
一 六玉川	初篇方 二篇迄	六冊	『六玉川』
一 春告鳥	初篇方 五篇迄	拾五冊	『春告鳥』
一 三人娘	初篇方 三篇迄	九冊	『三人嬢児』
一 若紫	同断	九冊	『和可紫』
一 藤枝恋の柵	初篇方 四篇迄	拾二冊	『藤枝恋情柵』
一 お玉か池	初篇方 四篇迄	拾二冊	『お玉ヶ池』
一 さとの桜	初篇方 三篇迄	九冊	『花街桜』
一 恋の若竹	同断	九冊	『恋の若竹』

前書平兵衛所持之分

一 秋の七草	三冊	〔阿幾の七艸〕前編
一 花筏	同 三冊	〔花以嘉多〕
一 忠臣蔵	同 三冊	〔仮名夜光玉〕 手本
一 大江山	三冊	〔逢悦弥誠〕
一 色のはさま	同 三冊	〔春情肉婦寿満〕
一 肉ふすま	同 三冊	
一 四季園	大本 三冊	
一 須摩	同 三冊	〔亥中須磨琴〕 源氏

26

取締りの後、これら「書付」記載の書籍は焼き捨てられ、その版木は打ち砕かれた。さらに丁子屋を含む版元七名には、過料として五貫文の支払いが命じられ、人情本の代表作者である為永春水は手鎖に処された。「書付」および前述の「東都書林文溪堂蔵版中形絵入よみ本之部目録」の存在が示すとおり、丁子屋は為永春水のほか鼻山人や松亭金水の人情本や滑稽本を多く刊行していた。そのため、この取締りは大きな損害を与えたようで、馬琴は「就中丁平ハ、中本之板多く有之、且当暮売出し候新板、既ニ製本致候も有之、彫ハ大抵出来、頭ヲ未ダ彫ざる板も有之、是等皆損失ニテ」と述べている（天保十三年正月十二日殿村篠斎宛書簡（別紙））。

天保十三年（一八四二）六月、さらに追いつちをかけるかのように、今度は天保三年（一八三二）の初編以降、すでに五編まで刊行されて

いた寺門静軒作『江戸繁昌記』が取締りを受ける。『著作堂雜記抄』²⁷によれば、かつて丁子屋が初編・二編の出版を願った際、林大学頭から「此書は不_レ宜物に候、売買無用可_レ為と被_レ申候に付、右之書は御差止に相成、出板仕間敷旨」が伝えられていたにも関わらず、丁子屋は五編まで摺刷し、売り出していたのである。この一件は先の人情本および好色本よりも悪質と見做され、丁子屋は所払を命じられる。²⁸これにより二代目平兵衛は一人高砂町へ移るが、しばらくは六歳だった息子平吉名義で丁子屋の営業を続けている。²⁹実際に天保十四年（一八四三）の出版物には「小伝馬町三丁目 丁子屋平吉」とあるものがいくつかある（『改正大増補早引永代節用大全』『日本廿四孝子伝』³⁰『御公令謹身録』など）。

高砂町と小伝馬町はそれほど離れていないが、丁子屋を営む上で別居生活は不便だと思つた二代目平兵衛は、都合のよい売り地があれば一家一同そこへ移ろう考えていたようだが、妻子の反対もありすぐに転居できなかつた（天保十三年九月二十三日殿村篠斎宛書簡（別紙・代筆））。天保十四年十月刊『訂正補刻 絵本漢楚軍談』初輯では、所在地が大伝馬町二丁目となっていることから、おそらく天保十四年の後半に丁子屋は大伝馬町へと移つたのだと思われる。³¹大伝馬町へ転居後、数年のうちに丁子屋は代替わりする。

興面合に興じた人々の横顔（影絵）と伝記を記した嘉永三年（一八五〇）刊の梅畦編『くまなき影』には、発句とともに次のようにある。

通称丁字屋平兵衛書号文溪堂といふ父は是好勸弥壮盛の頃勝負見連の大棟梁たり発刻の書数多成事は古人春水が著し、外題鏡にくはし榮寿父が譲りをうけて活業尚もとのごとくまた発兌の三板数部に及べり

「父は」云々とあるように、この「榮寿」なる人物は二代目平兵衛の息子平吉である。平吉は文桂舎（文溪舎）榮寿と号し、興画合のほか三題漸に興じていた。³²「榮寿父が譲りをうけて活業尚もとのごとくまた発兌の三板数部に及べり」とあることから、嘉永三年時点ですでに二代目平兵衛は退いており、平吉が名実ともに三代目平兵衛となっていたことがわかる。

現時点で三代目平兵衛時代の丁子屋の足取りはつかめておらず、不明な部分が多くある。慶応三年（一八六七）から明治二年（一八六九）にかけての間、丁子屋が書物問屋仲間の行事もしくは「添年行司」であったことが、慶應義塾大学図書館蔵『書林書留』³³から窺い知れる。そのほか、明治六年（一八七三）十一月官許の太田勘右衛門編『戊辰新刻書目便覧』附載の「東京府管下書物問屋姓名記」と、明治十四年（一八八一）に新たに設立された東京書林組合の名簿³⁵に名前が記載されていることを確認できる。

各記録に記載された情報や明治以降の出版物から、三代目平兵衛は「大谷」あるいは「大溪」平兵衛と名乗っていたようである。現時点で確認できている最後の出版物は、明治十四年（一八八一）刊の『暁

斎鈍画』初編（朝野文三郎との相版）である。これ以後の足取りは掴めておらず、丁子屋がいつまで営業していたのか、また二代目および三代目の没年などは定かでない。

二、貸本屋世話役から貸本問屋へ

前述のとおり、文化期の丁子屋は貸本屋と貸本屋世話役の業務が主で、出版活動はまだ従だった。とはいえ、文化五年の段階で『復讐独揺新語』を刊行している以上、出版への意欲は早くから持ち合わせていたに違いない。それにもかかわらず、文化期の刊行点数が少ない理由の一つは、出版に必要な費用の不足であろう。

一口に出版といっても、書籍が出来上がるまでには作者と版元だけでなく、筆耕・彫師・摺師・製本師のほか、絵がある場合は絵師が制作に従事する。彼らに支払う代金のほか、版木や紙をはじめとする原材料費がなくては書籍を出版できない。後に丁子屋も多く手掛けることになる読本のうち、五冊ものの読本の出版について浜田啓介氏は、およそ八十両ほどの費用が必要であり、しかも「一般的には三百部が元手回収の堺目と見てよいだろう」と述べている。³⁶つまり、読本の出版で利益を得るには三百部以上を売る必要がある、それ以下では赤字となったのである。これは読本の例だが、いかに出版がリスクを伴うものであったかが理解されよう。

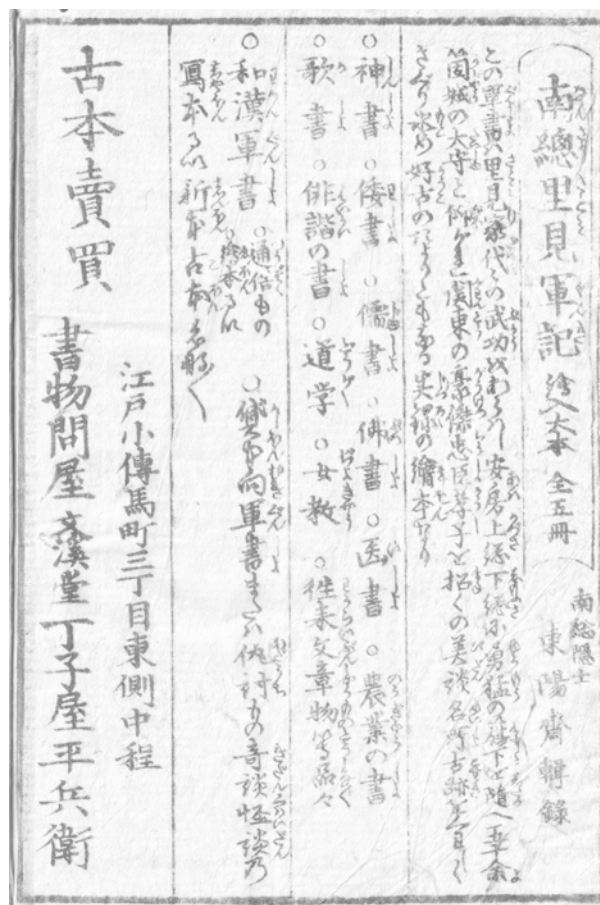


図1 「東都書林文溪堂藏販中形絵入よみ本之部目録」の末尾（架蔵『処女七種』四編下）

このように決して少なくないリスク、そして何より費用を要するために、丁子屋の文化期の刊行点数は少なかったのである。丁子屋の出版活動が軌道に乗るのは文政四年（一八二二）以降である。したがって、文政三年までは出版に必要な費用を貯えていた時期であったと考えられる。ではどのようにしてその費用を工面したのだろうか。「東都書林文溪堂藏販中形絵入よみ本之部目録」の末尾に「古本売買」と記されている（図1）ように、丁子屋は貸本業のほか古本業もおこなっていた。この二つが収入源だったのは確かだが、ここでは丁子屋がおこなった書籍の売捌に注目したい。

加藤在止作『太平国恩俚談』全三編十五巻は、安永三年（一七七四）に江戸の雁金屋久兵衛から刊行された。中野三敏氏によれば、丁子屋は本書を求版し、見返しを新刻した上で『太平国恩俚譚』と改題し再版している。³⁷ 国立国会図書館蔵『太平国恩俚譚』（請求記号…一四六一三）の奥付は次のようなものである。

右全部拾五巻加藤在止作
 安永三^甲_午 歳六月十七日
 御免開版所 雁金屋久兵衛
 東都小伝馬町三丁目
 丁子屋平兵衛

『太平国恩俚談』のものをほとんどそのまま用いており、わずかに末尾の版元名「東都書林／雁金屋久兵衛」を「雁金屋久兵衛／東都小伝

馬町三丁目 丁子屋平兵衛」と改めているだけである。気にかかるのは、版元名の部分を一度全て削っているにもかかわらず、丁子屋の名だけでなく雁金屋の名をも埋木している点である。見返しにこそ「東都 文溪堂発梓」とあるものの、丁子屋は雁金屋と『太平国恩俚譚』の板株を分かち合い、『太平国恩俚譚』の売捌を優先的に請け負っていたのではなからうか。

同様の例として、「東都書林文溪堂蔵版中形絵入よみ本之部目録」掲載の『絵本八幡太郎一代記』『絵本将門一代記』『絵本保元平治物語』『絵本楠一代軍記』『絵本尊氏勲功記』などをあげることができる。これらはいずれも仙鶴堂鶴屋喜右衛門から求版されたものだが、その奥付には「東都書肆 鶴屋喜右衛門／小伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛販」とある。『太平国恩俚譚』同様、版元名部分を全て削った後、鶴屋の名を再び埋木しているのである。先の『太平国恩俚譚』の例に加え、これら絵本類とその奥付にみられる「丁子屋平兵衛販」の語を考えあわせるならば、やはり丁子屋は板株を分割するなどした上で、書籍の売捌を優先的に請け負っていた可能性がある。

丁子屋が書籍の売捌を請け負っている様子は、後年の例ながら前述の『松浦佐用媛石魂録』後編や『近世説美少年録』初輯のほか、次にみる『南総里見八犬伝』の一件からも窺い知れる。『近世物之本江戸作者部類』には「大凡京撰・江戸の貸本屋等、初輯より五輯までを買かまく欲ほりするもの多かれども、これを得るによしなかりしを、丁子屋平兵衛、美濃甚に代りて権しほ且くその板を購ひ出して、毎輯百五十部摺刷

製本して、欲りせしものに売与しけり」といったように、丁子屋が美濃屋甚三郎に代わって『南総里見八犬伝』の「板を購ひ出して」摺刷・製本・売捌をおこなったことが記されている。

以上を踏まえるならば、板株の実態は不明ながらも、先の『太平国恩俚譚』や『絵本八幡太郎一代記』などの売捌も丁子屋は請け負っていたのだとみてよさそうである。おそらく丁子屋は同様にほかの書籍の売捌も積極的におこなっていたと思われる。自ら開版するのに比べて、リスクも出費も少ない売捌に丁子屋は力を入れていたのである。

とはいえ、書籍を効率よく捌くためには、安定して書籍を供給できる販路が必要不可欠となる。先に引用した『近世物之本江戸作者部類』によれば、丁子屋は「大凡京撰・江戸の貸本屋等」の求めに応じて『南総里見八犬伝』の摺刷・製本・売捌をおこなっていた。ここからその販路が貸本屋へ開かれたものだった可能性を指摘できる。文化末年ごろの刊行とらしい『出像外題鑑』の存在と、丁子屋が本町組の貸本屋世話役であったことは、この可能性を裏付けるものであるとともに、貸本問屋としての丁子屋を考える上で重要である。

『出像外題鑑』は、読本九十三作品と滑稽本二十八作品の著编者・画工・員数を列挙した両面摺りの摺物である。³⁸このうち読本には、「かなでほん忠臣蔵をもろこしの小説水滸伝になぞらへて作る」（山東京伝作『忠臣水滸伝』）といったような簡単な紹介文がそれぞれ記されている。刊記には蔦屋重三郎・丸屋文右衛門・鶴屋金助・塩屋長兵衛・丁子屋平兵衛らが名を連ねるが、標題下にある一楊軒玉山の言によれば

ば、「文溪堂主人」すなわち丁子屋平兵衛（初代）の求めに応じて作成されたという。読本の項の後には、次のような文章が挿入されている。

右にあらはす外題はよみ本を翫ひ給ふ○ひめ○との○たちの為に備ふれば出来の巧拙甲乙をわくるにあらす只その数の荒増を挙て次第の順は思ひいだせるまゝにしるせば必しも論し給ふな何の本を今一度よまんとおぼす時の便とするのみ

読本を手取る読者が「何の本を今一度よまんとおぼす時」の参考にするため、編まれたのが『出像外題鑑』だというのである。だが、高木元氏が指摘しているように、読本が気軽に入手できるような安価な書籍でなかった以上、この『出像外題鑑』は「貸本屋の品揃えのための手引きや在庫目録」として用いられたものだと思われる³⁹。このような貸本屋向けの『出像外題鑑』を自らが中心となって刊行していることから、丁子屋は貸本屋に開かれた販路を有していたとみてよいだろう。そして、そうした販路と丁子屋が貸本屋世話役であったことは無関係ではない。

『名目集』によれば、文化五年（一八〇八）五月には江戸市中に十二の組があり、そこには計六五六人の貸本屋が属していたという。これらの組には、貸本屋世話役がそれぞれ複数人配置されており、丁子屋はその一人であった。実際にこの貸本屋世話役がどのような役割を担っていたのかはわかっていないが、各組に属する貸本屋を監視・統括する存在であったことは想像に難くない。丁子屋が世話役を務める

本町組には、七十四人の貸本屋が属していた。したがって、文化五年五月の時点で少なくとも彼ら七十四人に向けた販路を丁子屋は有していたということになる。だが、丁子屋は自身の組だけでなく、ほかの世話役の協力を得ながら、江戸市中の十二組に属する貸本屋を包括するネットワークを利用していたものと思われる。このネットワークについては、時代は下るものの貸本屋長門屋で奉公していた村田幸吉による次の証言が参考になる。

江戸時代の貸本屋といふものは中々盛んだつたもので、其中でも名高かつたのは本芝の長門屋、両国の加賀屋又兵衛、山谷の万屋弥三郎などで、長門屋などは雇人の十四五人も使つて、それは／＼繁盛したものです。其頃草双紙の出るは重に初春で、私の覚えて其売高の多かつたのは丁子屋から出た八犬伝、大島屋の神稲水滸伝などです。かういふ本を売出すときには、来ル幾日売出しに付以前御申込被下度といふ様な廻状を本屋や貸本屋仲間に廻はして置いて、売出当日迄にどの店は何部どの店からは何十部といふ様に、今いふ予約をして貰つて置いて、扱いよ／＼当日には出来上つた本を三宝に載せて店前きに飾り、それに御神酒を供へたもので、其日は素人には小売りは一切しないで、黒人側の取引ばかり。それでも店前は中々の雑間で一寸買ひ切れなかつた程でした。⁴⁰

貸本向けの新版が出版される際には、本屋のみならず「貸本屋仲間」へも廻状が廻され、宣伝がなされたという。貸本向けの書籍の宣伝に、

「貸本屋仲間」内に張り巡らされた貸本屋のネットワークが利用されているのである。村田幸吉の述べる「貸本屋仲間」が、文化五年時に江戸市中に存在した十二組と同じ、あるいはその後継にあたるものかどうかは定かでない。しかし、どちらも貸本屋を中心に構成された組織であることは疑いない。そのため、「貸本屋仲間」と同じく組織内に張り巡らされた貸本屋のネットワークが、文化五年五月の十二組内にも存在していたとしてもおかしくはないだろう。こうしたネットワークをとおして、丁子屋は江戸市中の貸本屋へ効率よく、かつ安定して書籍を捌くことのできる販路を形成していたのだと考えられる。

以上のように、江戸市中の貸本屋へと向けられた販路を有していた丁子屋は、安定して書籍を供給することができた。そうして着実に出版に必要な費用を貯えていき、文政四年（一八二二）に満を持して『清談峰初花』後編の刊行に参画する。以降、続々と読本・滑稽本・人情本をはじめとする貸本向けの書籍を丁子屋は刊行していくこととなる。精力的に出版活動をおこなうなかで役立ったのは、すでに形成されていた貸本屋に向けた販路であったことは言うまでもない。自らが刊行した貸本向けの書籍を、貸本屋に向けて送り出していくなかで、丁子屋は貸本問屋としての地位を確かなものにしていったのである。

三、広域的な書籍流通網の形成

最後に丁子屋の書籍流通網について考えてみたい。

江戸市中においては、前述のとおり貸本屋に開かれた販路を丁子屋は有していたと考えられる。それ以外の地域を含む広域的な書籍流通網については、曲亭馬琴の天保十二年（一八四一）正月二十八日殿村篠斎宛書簡に「上方筋ハ殊之外行れ、東北ハ奥州迄、西ハ長崎を限り、春水の中本多売候由、丁子屋悦吹聴致候事ニ御座候」とあるのが参考になる。天保期には上方はもとより東は奥州、西は長崎に至るほとんど全国的な流通網を丁子屋は保持していたのである。博多や長崎が物語の舞台となっている天保九年（一八三八）刊の為永春水作『春色恋白波』初編（大島屋伝右衛門・河内屋長兵衛・大文字屋専蔵との相版）などは、こうした流通網の片鱗を窺わせる。では丁子屋はいかにして、これほどまでに広域的な流通網を手にすることができたのであろうか。

文化から天保までの出版物をみてみても、三都のほか名古屋の書肆以外が奥付等に記されるのは、常陸国水戸の茗荷屋弥兵衛とともに刊行された文政十四年（一八三二）刊の松亭金水作『青柳草摺』のほか、紀伊国の阪本屋喜一郎の名がみえる天保十三年（一八四二）刊の暁鐘成校閲『武蔵坊弁慶異伝』後編を除いてない。つまり、丁子屋が全国各地の書肆と直接結びついている様子を出版物から確認することはできないのである。

大和博幸氏は、『松浦佐用媛石魂録』後編の売捌を丁子屋が担うにあ

たり、①「貸本屋仲間の世利市会で売り捌く方法」、②「大坂の河内屋茂兵衛との間で交易（本替）を行うことで上方方面での引受人を確保し、刊行本の売弘め（販売）を確実にするという方法」、③大坂屋「半蔵の抱えている菓の取次所をベースとして、刊行本の売弘め（販売）を確実にするとともに、菓の取次所を増加させることで東国方面の販路を拡大させて行くという方法」の三つを構想していた可能性を指摘している。⁴¹ 丁子屋の書籍流通網を考える上で傾聴すべき指摘だが、①②については少しく訂正する必要がある。

まず①は、馬琴の文政十一年（一八二八）五月二十一日殿村篠齋宛書簡にみられる「中ケ間うり正味十五匁二うり出し」という記述を踏まえたものだが、この「中ケ間うり」は「貸本屋仲間の世利市会」ではなく、同業者への卸売りを意味する語である。また②は、その根拠として『曲亭馬琴日記』文政十一年十月四日の条をあげているが、それを見る限り本替は大坂屋半蔵と河内屋茂兵衛との間で取り決められており、そこに丁子屋は介在していない。しかも、この時本替されることとが決まったのは、すでに刊行されている『松浦佐用媛石魂録』後編ではなく、『近世説美少年録』二輯と『開巻驚奇侠客伝』初集である。⁴² 丁子屋が河内屋茂兵衛と本替をおこなない、密接な関係を築くのは、大坂屋半蔵の没後にその後任となつてからのことである。

さて、③にある「半蔵の抱えている菓」は、大坂屋半蔵が精削・販売していた順補丸を指す。順補丸の広告は大坂屋か丁子屋が携わった書籍の巻末にたびたび附されている。この広告には「秘じゅんほ丸功

能書」とある中本サイズのもの、「順補丸」「じゅんほぐわんこうのうあらまし」とある半紙本サイズのものがあるが、大和氏が取り上げているのは、江戸をはじめ武蔵国・相模国・安房国・下総国・常陸国・上野国・下野国・信濃国・陸奥国・越後国の取次所が記されている前者の方である。取次所の分布状況や書籍の流通と売菓あるいは小間物類の販売ルートの親和性⁴³に加えて、大坂屋半蔵の没後に刊行された書籍にも、順補丸の広告が附載されていることをも考慮するならば、確かに丁子屋の東国方面の書籍流通に順補丸が関係している可能性はある。しかしながら、取次所として記された者たちが実際に順補丸だけでなく、丁子屋の書籍も取り次いでいることのわかる資料等がない以上は想像の域を出ない。そこで、本稿では別の角度から丁子屋と東国方面の書肆との結びつき、そしてそこから想定される書籍流通網を指摘したい。

鈴木俊幸氏は、江戸近郊の書肆が江戸を訪れ、書籍類を仕入れている事例をいくつか紹介している。⁴⁵ そのなかには、丁子屋から仕入れをおこなっているもの、あるいは仕入れを思わせるものが僅かに含まれている。たとえば、すでに「一、丁子屋平兵衛の概要とその系譜」で取り上げた信濃国松本の書肆、高美屋甚左衛門の事例である。文化十三年（一八一六）六月に江戸を訪れた際の記録（『江都日記』）には「伝馬町丁子屋佐兵衛（中略）へ寄」とあった。この記述からは仕入れがおこなわれていることを確認できないが、江戸滞在中の貴重な時間を割いてわざわざ丁子屋を訪れているからには、普段から交流があり、

書籍の取引もなされていたとみてよいだろう。また、時代は下るもの、弘化ごろには上総国東金の書肆、能勢嘉左衛門尚貞（後の多田屋）が丁子屋で広覚道人編『広求大成和漢書画集覽』（弘化元年（一八四四）序）を仕入れている。⁴⁶

高美屋も多田屋もそれぞれ地域における書籍需要を支えるだけでなく、周辺地域への流通拠点的存在ともなっていたことは鈴木俊幸氏によつて論じられている。⁴⁷江戸で仕入れられた書籍は、彼らを起点としてさらに流通していったのである。貸本向けの書籍を豊富に取り扱う丁子屋は、江戸近郊の書肆にとつては、自らの貸本用としてはもちろん、地域のほかの書肆、あるいは貸本屋への卸売のための仕入れ先として魅力的であったことだろう。天保二年（一八三一）に『青柳草昏』を刊行した水戸の茗荷屋弥兵衛も、おそらくは貸本向けの書籍の仕入れをおして丁子屋と結びついたのでと思われる。水戸は貸本屋への仲卸をおこなっていたと思しい山本作兵衛を有するほど、貸本向け書籍の需要の高い地域であった。江戸から水戸街道を経て水戸へもたらされた書籍は、同地の需要を満たすとともに、さらに水戸を起点として奥州方面へと広まっていたことであろう。水戸の書肆もまた流通拠点の一つだったのだと考えられる。

今回提示できた事例は僅かだが、これは資料の残存状況によるもので、江戸近郊の書肆による仕入れの少なさを示すものではない。仕入れをおして、丁子屋は東国方面への流通拠点となる書肆と結びつき、彼らの流通網によつて広く書籍を行き渡らせることができたのである。

一方で、長崎に至る西国方面への書籍流通は、上方、とりわけ大坂の書肆によつて支えられていたと考えられる。文政三年（二八二〇）刊の『商人買物独案内』には、「書物江戸積問屋」を称する書肆が記載されている。そのうち、秋田屋市兵衛・秋田屋太右衛門・河内屋喜兵衛・河内屋太助・河内屋長兵衛・塩屋長兵衛は、文化から天保にかけての間に丁子屋とともに書籍を刊行している。大坂の書肆が北陸・近畿のほか、西国方面への流通網を持っていたことはすでに知られており、たとえば河内屋太助は帯屋伊兵衛をはじめとする紀伊国の書肆との結びつきが強く、⁴⁸また秋田屋太右衛門は紀伊国・播磨国・備前国・備中国・筑前国に売弘書肆を有していた。⁴⁹秋田屋市兵衛をはじめとする彼ら上方の書肆にとつて、丁子屋は豊富な貸本向け書籍を取り扱う仕入れ先、あるいは取引先としてだけでなく、江戸市中の貸本屋へ向けられた販路、そして東国方面への流通網を保持しているという点において重要だったのだと思われる。つまり、書籍の取引をおこなうことは、西国方面へ書籍を流通させたい丁子屋だけでなく、江戸、ひいては東国方面へ書籍を流通させたい上方の書肆にもメリットがあったのである。

こうした丁子屋と上方の書肆、双方の思惑が結実した一つの表れが天保九年（一八三八）刊の『増補外題鑑』であろう。丁子屋は『増補外題鑑』を自身を中心となつて刊行しただけでなく、その蔵版主でもあった。しかも、版元としてだけでなく、本書には著述者として二代目平兵衛が関わっている（『増補外題鑑』名義）。『増補外題鑑』の「補正」を担った

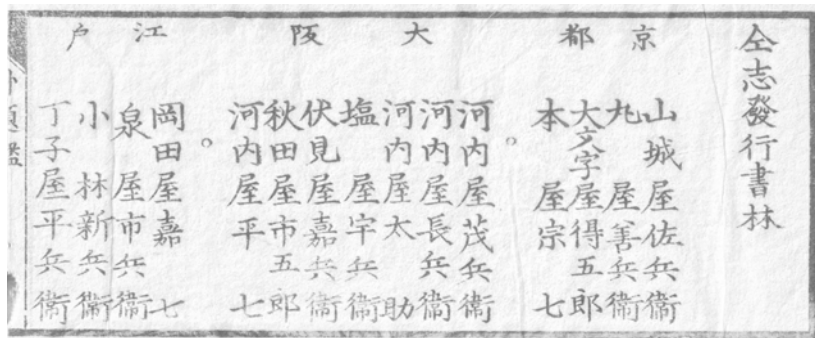


図2 架蔵する『増補/外題鑑』の奥付

鷓鴣貞高こと為永春水は、その序文で次のように述べている。

茲に東都の書林二世の文溪堂主人は、諸の書籍を彫刻させ製本を發行する事丹誠なり猶世に稀なる奇書珍書を探り人に益あるものは必ず書写し或は梓に上して是を弘む別て出像稗史物の本を鬻ぐに出精なれば所蔵の販本のみならず三都の新著も漏す事なく捌くに多欲を慎めり依之諸国の得意月々に倍すされば年来心を用ひて其業体同商の人々に有益の書あらんことをはかりしが先代の志を継で物の本の外題鑑を増益し最細かに再販す

二代目平兵衛が「先代の志を継で物の本の外題鑑を増益し最細かに再販」したのが本書であるという。「外題鑑」にあたるのは、言うまでもなく初代平兵衛が中心となって刊行された『出像外題鑑』である。『出像外題鑑』同様、『増補外題鑑』にも作品の書名・著编者・画工・員数に加えて、簡単な紹介文が添えられているが、収録される作品数はその三倍強の約四〇〇作品となっている。これは「諸国の得意月々に倍すされば」という世相が反映された結果だと考えられる。全国各地で貸本向け書籍の需要が高まりつつあったなかで、丁子屋は「先代の志」を継いで『出像外題鑑』と同じく貸本屋向けのカタログのような『増補外題鑑』を刊行したのである。

そして『増補外題鑑』には、「全志發行書林」として丁子屋のほか京都の山城屋佐兵衛・丸屋善兵衛・大文字屋得五郎・本屋宗七、大坂の河

内屋茂兵衛・河内屋長兵衛・河内屋太助・塩屋宇兵衛・伏見屋嘉兵衛・秋田屋市五郎・河内屋平七、江戸の岡田屋嘉七・和泉屋市兵衛・小林新兵衛らが名を連ねる(図2)。全国的に機運が高まりつつあったタイミングを逃すことなく、三都の書肆たち「全志発行書林」は貸本屋向けの『増外題鑑』に参画している。貸本向け書籍を広く流通させたい書肆たちの思惑は、こうして『増外題鑑』^補として実を結んだのである。かくして、江戸近郊と上方の書肆と結びついた丁子屋は、「上方筋ハ殊之外行れ、東北ハ奥州迄、西ハ長崎」に至る広域的な書籍流通網を形成することができたのであった。

おわりに

文化五年(一八〇八)五月時の貸本屋世話役のなかには、読本の版元として活躍する者が幾人もいる。彼らは自身の貸本屋、そして世話役としての経験をもとに読本の出版へと乗り出していったのだと思われるが、丁子屋とは異なり貸本屋向けに特化した業態を確立してはいない。貸本屋世話役から、やがて貸本問屋となっていく丁子屋は、むしろ例外的な存在であったといつてよい。だが、こうした道を丁子屋が歩んだのは偶然ではなからう。後に『出像外題鑑』^{稗史}が編まれるほど、貸本向け書籍の需要が高まっていくことを見込み、初代平兵衛は自らの世話役としての立場を最大限に活用して、貸本屋に開かれた販

路を形成していったのだと考えられる。初代平兵衛なくして、貸本問屋としての丁子屋はあり得なかったといっても過言ではない。

また、初代の志を継ぐのみならず、当代の人気作者曲亭馬琴との距離を縮め、その著作を刊行した二代目平兵衛なくして、天保期に丁子屋が全盛期を迎えることはなかった。機を見るに敏い初代、商才に長けた二代目と逸材が続いたからこそ、江戸を代表する書肆、そして貸本問屋として丁子屋は目覚ましい躍進を遂げることができたのである。やがて、丁子屋が切り拓いた貸本問屋としての道を追従する者が現れる。中本の出版・流通において、丁子屋と双壁をなすといつても過言ではない文永堂大島屋伝右衛門はその一人であった。

注

- 1 中野三敏ほか校注『新編日本古典文学全集 洒落本・滑稽本・人情本』(小学館、二〇〇〇年)四二二頁の頭注。
- 2 浜田啓介「馬琴をめぐる書肆・作者・読者の問題」『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年所収。初出は一九五三年)。
- 3 以下、馬琴の書簡については全て柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』第一〜六卷(八木書店、二〇〇二〜二〇〇三年)による。

- 4 この貸本屋については服部仁「馬琴の娘婿になりそこなった貸本屋」(『彷彿月刊』一七五号、弘隆社、二〇〇〇年三月)に詳しい。
- 5 『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』四卷(三一書房、一九八八年)一八八頁。
- 6 秋山高志著『近世常陸の出版』(青裳堂書店、一九九九年)三七頁の図版にみえる「水戸青柳町／貸本問屋／山本作兵衛」印、および国立国会図書館蔵『今昔物語』(W六七—N二〇)に押捺された「水戸本五丁目／貸本問屋／山本作兵衛」印による。
- 7 慶應義塾大学国文学研究会編『西鶴 研究と資料』(至文堂、一九五八年)所収の松本隆信による翻刻を参照。
- 8 井上宗雄ほか編『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、一九九九年)。
- 9 第二章第二節「丁子屋平兵衛出版書目年表稿」を参照のこと。
- 10 以下、『曲亭馬琴日記』の記述は全て柴田光彦新訂増補『曲亭馬琴日記』第一～四卷(中央公論社、二〇〇九年)による。
- 11 鈴木俊幸著『信州の本屋と出版 江戸から明治へ』(高美書店、二〇一八年)所収の翻刻を参照。
- 12 四葩山人「文溪堂と八犬伝(上)」(『高潮』第三号、吉川弘文館、一九〇六年五月)。また、二代目大島屋伝右衛門が二代目丁子屋平兵衛のもとで奉公していたことは、吉田久兵衛「明治初年東京書林評判記」(『古本屋』第三号、荒木伊兵衛書店、一九二七年十一月)にある「大島屋伝兵衛及麴町古本屋森田鉄五郎其外丁忠、丁善等皆この出身也」という記述からも裏付けられる。
- 13 詳細は第一章第二節「中本」受容と大島屋伝右衛門」を参照のこと。
- 14 文政六年(一八二三)正月九日殿村篠齋宛書簡(別紙)による。また、神田正行「文溪堂丁子屋平兵衛と『八犬伝』——板株の確立まで——」(『国語と国文学』第九十一巻第五号、明治書院、二〇一四年五月)のなかで、この『南総里見八犬伝』五輯の一件が丁子屋が馬琴の著作に関与した最初であることが指摘されている。
- 15 早稲田大学図書館蔵本(請求記号…へ一三一〇〇七〇八)をはじめとする『松浦佐用媛石魂録』後編卷之一の初印本に収められた馬琴の「再識」に「後集の討求ありといへども。筆硯煩多の故をもて。いまだ果さざりけるに。」とある。
- 16 佐藤悟氏は「名主改の創始——ロシア船侵攻の文学に与えた影響について——」(『読本研究新集』第三集、読本研究の会、二〇〇一年十月)のなかで、作中の蒙古襲来が文化露寇を想起させる恐れがあったゆえ、後編の刊行が二十年後になったと述べている。
- 17 『近世物之本江戸作者部類』卷之二上。なお本文は曲亭馬琴著・徳田武校注『近世物之本江戸作者部類』(岩波書店、二〇一四年)に拠った。以下同様。
- 18 前編の版本を大坂屋が入手してから、馬琴が後編執筆を了承す

- るまでの経緯については、すでに高木元『松浦佐用媛石魂録』論
 『江戸読本の研究——十九世紀小説様式攷——』ぺりかん社、一
 九九五年所収。初出は一九八〇年）や徳田武著『馬琴京伝中編読
 本解題』（勉誠出版、二〇一二年）でまとめられている。本稿で
 も両氏が用いている前述の「再識」や文政十年三月二日殿村篠齋
 宛書簡および同年十一月二十三日篠齋宛書簡を参照した。
- 19 大坂屋半蔵の死については、柴田光彦「版元大坂屋半蔵病没の
 こと」『新編日本古典文学全集月報』七十七、小学館、二〇〇一
 年九月）に詳しい。
- 20 文政十三年正月二十八日殿村篠齋宛書簡のほか、『近世物之本
 江戸作者部類』巻之二上に「明年〔己丑〕、又『近世説美少年録』
 第二集五巻を綴る。并に大坂屋半蔵板也。その書いまだ発兌に及
 ばず、庚寅の春正月、半蔵身故す。半蔵の弟丁子屋平兵衛代りて
 これを発販せり。是より丁平の蔵板になりぬ」とある。
- 21 文政十三年正月二十八日殿村篠齋宛書簡による。同書簡で馬琴
 は大坂屋について「心ばえよきもの二候」「とかく好人物ハ短命
 多く候事、和漢今昔一致ニ御座候。右板元大半ハ、享年四十才、
 飽まあでよミ本好ニて、よき板元ニ候処、ケ様之仕合、最歎しき
 事ニ御座候」と述べている。
- 22 文政十三年九月朔日河内屋茂兵衛宛書簡に『侠客伝』著述之
 事、当地丁平殿より追々御承知と奉存候」とあるによる。当初『開
 卷驚奇侠客伝』初集は大坂屋半蔵と河内屋茂兵衛とで出版した上
 で、『近世説美少年録』と本替をおこなうつもりだったようであ
 る（文政十二年八月六日河内屋茂兵衛宛書簡および文政十三年正
 月二十八日殿村篠齋宛書簡）。
- 23 鈴木圭一「資料報告『書林文溪堂蔵販目録』・『東都書林文溪堂蔵
 販中形絵入よみ本之部目録』——『増外題鑑』成立の一過程——」
 『読本研究』第四輯下套、広島文教女子大学『読本研究』編集部、
 一九九〇年六月）。
- 24 早稲田大学図書館蔵『芸海余波』六集（請求記号：イ五―一六
 四六（六））所収。
- 25 東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 市中取締類集 十八』
 （東京大学出版会、一九八八年）所収。
- 26 「好色本」の特定については林美一著『秘板梅ごよみ』（緑園
 書房、一九六五年）を参照した。
- 27 早川純三郎編『曲亭遺稿』（国書刊行会、一九一二年）所収。
- 28 『著作堂雜記抄』のほか天保十三年九月二十三日殿村篠齋宛書
 簡（別紙・代筆）に『江戸繁昌記』一件、八月廿三日ニ致落着
 候。作者静軒ハ武家奉公御構也。丁子屋平兵衛ハ所払ニ相成候。
 但し、家材ハ妻子ニ被下候」とある。
- 29 天保十三年九月二十三日殿村篠齋宛書簡（別紙・代筆）に「丁
 平ハ四五日店の戸を閉候て隠れ罷在、六才の倅平吉名まへニて、

小伝馬町の店を開き、家主役ハ組合持ニ致、彼身ハ高砂町の借家ニ別宅致、夜分ハひそかに小伝馬丁の宅^江罷帰り、帳合等致候由也。」とある。

30 服部仁「天保改革時の出版状況瞥見——『孝子顕彰』の読売と『御触書集覧 修身孝義鑑』の相関関係、及び『日本廿四孝子伝』等の出版を手がかりに——」(『雅俗』十九号、雅俗の会、二〇二〇年七月)にて紹介。

31 『藤岡屋日記』巻十四「天保十三年壬寅年日記」に「一 江戸繁昌記作者、板本小伝馬町丁子屋平兵衛御咎メ、所構ニ而、大伝馬町二丁目^江引越ス」(『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第二巻、三一書房、一九八八年所収)とあるが、これは後年に天保の改革関連のことをまとめて追記したゆえであろう。

32 佐藤悟「パトロンの時代(二)——近世文学史の空白域」(『江戸文学』十八号、ぺりかん社、一九九七年十一月)や大久保尚子「人情本にみる江戸時代後期の服飾文化——趣味人たちの芝居、書画の享受、交遊と装いの趣向」(『江戸の服飾意匠——文芸、美術、芸術との交流と近代への波及』中央公論美術出版、二〇一五年所収。初出は一九九八年および一九九九年)などに詳しい。なお、両氏も指摘しているように、三代目平兵衛の伝記は、文久三年(一八六三)序の仮名垣魯文・山々亭有人合輯『粹興奇人伝』にもみられる。

33 請求記号：九九―二七―一。本稿では藤實久美子「翻刻『書林書留』(慶應大学義塾大学図書館所蔵)」(『官版日誌類に関する史料学の構築および戊辰戦争期の情報と地域に関する学際的研究』研究成果報告、二〇一九年四月版)を参照した。

34 本稿では朝倉治彦・佐久間信子編『明治三都新刻書目』(日本古書通信社、一九七一年)所収の影印によった。なお、鈴木俊幸『^{戊辰以来}新刻書目便覧』の諸本(『書籍流通史料論序説』勉誠出版、二〇一二年所収。初出は二〇一〇年)によって、『^{戊辰以来}新刻書目便覧』は七度の修訂がおこなわれ、八種の刊本が存在すること、八種の刊本間には異同がみられることが指摘されているが、丁子屋に関する部分に異同はみられない。

35 弥吉光長「明治初年の出版団体(その一)——書物問屋仲間から東京書籍出版業者組合へ——」(『弥吉光長著作集四 明治時代の出版と人』日外アソシエーツ、一九八二年所収。初出は一九五三年。)を参照。

36 注2前掲論文。

37 『日本古典文学大辞典』第四卷(岩波書店、一九八四年)の解説(中野三敏氏執筆)を参照。

38 『^{出像}外題鑑』については、『^{増補}外題鑑』(和泉書院、一九八五年)の解説(横山邦治執筆)および高木元『^{出像}稗史外題鑑』について——文化期江戸読本書目年表稿——(『読本研

- 究』第三集上巻、広島文教女子大学研究出版委員会『読本研究』編集部、一九八九年六月）に詳しい。
- 39 高木元「江戸読本の板元——貸本屋の出板をめぐる——」『江戸読本の研究 十九世紀小説様式攷』ぺりかん社、一九九五年所収。初出は一九八八年。
- 40 村田幸吉「会員談叢（四）」『集古会誌』壬子巻三、集古会、一九一三年九月。なお、引用に際して句読点を補った。
- 41 大和博幸「江戸期広域出版流通の一形態——本の取次と葉の取次の関わり——」『國學院雑誌』第一二〇巻第二号、國學院大学、二〇一九年二月。
- 42 『曲亭馬琴日記』文政十一年十月四日の条に「よミ本来春綴り遣し候つもり、江戸表一切之事、潤筆等之事も、大半引請」云々とあることから、文政十一年刊の『松浦佐用媛石魂録』後編ではありえない。『近世説美少年録』初輯と『開巻驚奇侠客伝』初集の本替については文政十三年正月二十八日殿村篠齋宛書簡に『侠客伝』も、すり本『美少年録』と交易のつもりにて」とある。
- 43 大和博幸「広告からみた近世後期出版ルート考」『國學院大學近世文学会会報』第七号、二〇〇一年三月。同「江戸期広域出版流通の一形態——本の取次と葉の取次の関わり」『國學院雑誌』第一二〇巻第二号、國學院大学、二〇一九年二月）、長友千代治「本屋と売葉」『江戸時代の図書流通』、思文閣出版、二〇〇二年
- 所収）、鈴木俊幸「近世日本における薬品・小間物の流通と書籍の流通」『書籍流通史料論序説』、勉誠出版、二〇一二年所収。初出は二〇〇七年）、同「須原屋茂兵衛の薬商売——引札と広告葉書」『書籍文化史料論』、勉誠出版、二〇一九年所収。初出は二〇一七年）などで指摘されている。
- 44 大坂屋は半蔵の息子が二代目となって存続しており、その間は順補丸の製剤・販売が続けられていたようである。
- 45 鈴木俊幸「地方の本屋さん——信州松本書肆高美屋甚左衛門を中心に——」『江戸の読書熱 自学する読者と書籍流通』平凡社、二〇〇七年所収。初出は一九九七年）、同「上総国における書籍流通拠点の成立——江戸時代の東金書肆多田屋——」『近世読者とそのゆくえ 読書と書籍流通の近世・近代』勉誠出版、二〇一七年所収。初出は二〇一六年）、同「磐城三春の書肆とその江戸仕入れ」(同。初出は二〇一四年) など。
- 46 鈴木俊幸「上総国における書籍流通拠点の成立——江戸時代の東金書肆多田屋——」『近世読者とそのゆくえ 読書と書籍流通の近世・近代』勉誠出版、二〇一七年所収。初出は二〇一六年)。
- 47 注45前掲論文。
- 48 山本卓「文運東漸と大坂書肆」『舌耕・書本・出版と近世小説』清文堂出版、二〇一〇年所収。初出は二〇〇〇年)。
- 49 鈴木俊幸「明日の見物——新しい読者と蔦重・泉市——」『江戸

の読者熱 自学する読者と書籍流通』平凡社、二〇〇七年所収。

第二節 「中本」受容と大島屋伝右衛門

はじめに

大島屋伝右衛門は「人情本中その大半はこの文永堂から発行されたと云つても可い位」¹、または「中本版元の第一人者」²などと称されるほどに中本との関わりが指摘されていながらも、これまで研究のされてこなかった書肆である。本稿では、そうした大島屋の出版活動を概観していくなかで、版元が貸本屋へ中本を供給していく構造の一例を明らかにするとともに、大島屋が人々の中本受容に果たした役割について考察していく。

一、大島屋伝右衛門の概要とその系譜

大島屋伝右衛門は、江戸京橋弥左衛門町の書肆。文永堂と号した。明治以降は「武田伝右衛門」「武田文永堂」「文永堂書店」とも称している。「書物問屋名前帳（古組）」³、「地本双紙問屋仮組」⁴の双方に名

前を見出せることから、書物問屋・地本草紙問屋を兼任していたようである。

管見の限りで大島屋の携わった最初の出版物は、文化十二年（一八一五）に和泉屋市兵衛・三崎屋清吉・中村屋幸蔵らとの相版で出版された振鷲亭作『御利生正札附千社参』初編である。⁵ 対して最後の出版物は、大正九年（一九二〇）二月五日発行の行徳王江著『日本名勝詩選』第六版および近藤元粹著『篆刻鍼度』第六版、同著『杜工部詩醇』第六版である。⁷ これら三書は、全て大正七年（一九一八）に廃業した青木嵩山堂から求版したものである。⁶ よって出版物から確認できる活動時期は、文化十二年から大正九年となる。大島屋は少なくとも文化年間から明治・大正にわたる約百年もの間、営業を続けていた書肆であったのである。

大島屋のように、近世後期に創業した書肆が大正年間まで営業を続ける例はそうみられない。稀有な存在であるにも関わらず、歴代伝右衛門の系譜や具体的な出版活動の実態はこれまで明らかにされてこな



図3 「山形に大伝」印
(架蔵『よし原雀』)

かった。そこで、まずは断片的な資料や記述を整理しながら歴代伝右衛門の系譜を辿り、大島屋の概要を整理していく。なお、現時点では系図および墓碑を見出だせていないため、便宜的に存在を確認し得る最初の伝右衛門を仮に初代としている。

初代伝右衛門の生年や出自、『御利生正札附千社参』初編を刊行するまでの経歴は一切不明だが、当初は初代丁子屋平兵衛同様、貸本業を営んでいたと考えられる。これは架蔵の写本『よし原雀』に押捺された「山形に大伝」の矩形墨印(図3)の存在に基づく推測だが、後述する貸本問屋としての活動にも、こうした経験が活かされていると思われるため、その蓋然性は高い。

初代伝右衛門の名がみえる確かな資料には、先に触れた嘉永四年(一八五二)、問屋仲間再興時の名前帳「地本双紙問屋仮組」がある。なお、引用に際して読点を補った。

弥左衛門町家主 大島屋伝右衛門
安政三辰年五月十八日、播磨守殿御内寄合、此伝右衛門病死二付、同人伴安次郎事伝右衛門と改、名跡相続願濟、同廿日申渡
同人伴安次郎事伝右衛門

この安政三年(一八五六)五月に病死しているのが、初代伝右衛門であろう。とすれば、必然的に天保の改革で処罰されたのも、この初代ということになる。市中取締懸が天保十二年(一八四二)十二月に提出した「絵草紙并人情本好色本等之義二付申上候書付」には、天保の改革で処罰された版元ならびに、その版元が蔵版していた書籍の一覧が記されている。このうち、大島屋の項を抜粋する。

弥左衛門町家主書物問屋伝右衛門所持罷在候板木

- 一 恵の花 初篇方 六冊 『春色恵の花』
- 一 梅暦 初篇方 拾貳冊 『春色梅児誉美』
- 一 辰巳の園 同断 拾貳冊 『春色辰巳園』
- 一 英対暖語 エイタイダンゴ 初篇方 拾五冊 『春色英対暖語』
- 一 懐中歴 初篇方 拾五冊 『花暦懐中暦』
- 一 貞操深雪松 初篇方 六冊 『貞操深雪松』
- 一 八堅志 初篇方 拾貳冊 『婦女八賢誌』
- 一 雪の梅 初篇方 六冊 『春色雪の梅』
- 一 蘭蝶記 初篇方 九冊 『蘭蝶記』
- 一文のはやし 初篇 三冊 『文のはやし』

再板もの

一二筋道 初篇方
後篇迄 六冊 〔傾城買二筋道〕

天保の改革で摘発された大島屋を含む版元七人には、次のような判決が下された。

弥左衛門町家主地本屋伝蔵 (マダ) 外六人

右之もの共儀、絵本草双紙類渡世致し、風俗之ためニ不相成猥かましき事、又は異説等書綴候書物類売買いたす間敷旨之町触相背、人情本と唱候小冊物之内ニは、男女之勸善にも相成苦かる間敷と心得違ニ而、長次郎ニ著述為致候小本は、改受候而も追々増補いたし、風俗ニ拘不宜候所、売渡、売徳取候段不埒ニ付、売渡取上、過料五貫文つゝ、

右本類板木共取上ル、本類は焼捨間、其旨可存¹¹

先にみた『春色恵の花』や『春色梅児誉美』をはじめとする人情本が風紀を乱すとして、売上金の取り上げと過料五貫文の支払い、および版木の取り上げと書籍の焼き捨てが命じられたのである。この時、初代伝右衛門の蒙った損害は並大抵ではなかったはずだが、彼は亡くなる安政三年まで大島屋を存続させ、次の世代へと引き継いでいる。

二代目伝右衛門は、先に引用した「地本双紙問屋仮組」の記述にあってたとおり、初代伝右衛門の亡くなった同年同月に名跡を継いだ俵の「安次郎」である。正確な生年は不明だが、ある程度の経歴と没年は以下

の資料から判明する。

一つは、四葩山人が書き留めた二代目伝右衛門自身による回想である。¹²

青山堂の父大島屋伝右衛門といへる人あり当年七十五歳の高齢なるが、鏝鏤として記憶明晰、嘗つて丁子屋の小厮として、馬琴に親しく面会し、又当時の状況を詳にすと聞き、一日伝右衛門氏を青山堂に訪ひ、其懐旧談を聞き、聞くに随つて筆記せるもの左の一篇なり、(中略)ハイ何から申上げてよいのか、大分古いお話でも御座いますし、記憶して居らぬ事も沢山御座いますから、其お積りでお聞取りを願ひます。当時私の奉公して居つた文溪堂の主人が即ち丁子屋平兵衛で御座います

「青山堂」は雁金屋清吉のことであり、ここでは八代目を指している。『東京書籍商組合史及組合員概歴』¹³に「当主ハ江戸ニ生レ、九代武田伝右衛門ノ次子ニシテ幸次郎ト称ス」とあるように、青山堂八代目当主は二代目伝右衛門の次子であった。さて、二代目伝右衛門自身の口から、かつて丁子屋平兵衛のもとで奉公していたと語られている。この二代目の言は文淵堂浅倉屋吉田久兵衛の証言からも裏付けられる。¹⁴

もう一つの資料は、浅倉屋による「紙魚の跡 浅倉屋の巻(四)」¹⁵である。ここで浅倉屋は「七月(大正九年七月か)に亡くなった和書出版界の古老大島屋武田伝右衛門老人から嘗て聞いた話」として、福沢諭吉の本屋仲間加入について紹介している。括弧で示された注は『読

売新聞』の編集者によるものと思われる。この没年については、東京書籍商組合が発行した機関誌『図書月報』第十八巻第七号（大正九年（一九二〇）七月一五日）掲載「組合員死亡」欄に「大島屋 武田伝右衛門君」とあることから裏付けられる。大正九年は、現時点で確認できている最後の出版物『日本名勝詩選』『篆刻鍼度』『杜工部詩醇』の刊年とも合致する。

三代目伝右衛門に関しては、反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』¹⁶に収められた書肆の談話が参考になる。とりわけ浅倉屋のそれは情報に富んでいる。

大島屋さんは武田伝右衛門の二代目の人で、私共の店に居た時は政吉とっていました。極く根気がよく、若い時分「彙刻書目」など写しておりました。年季がすんで貸本問屋でした生家へ戻ると、ちようどその時分、大切な米櫃の「梅暦」やその他の人情本の蔵版が続々と活版に出来てしまったので、貸本問屋もやりにくく、セドリに転向してしまつたのです。そして市会を青柳で開くようになり、会主となつて一時はなかなか盛んなものでした。惜しい事にまだ働き盛りに亡くなりました。舎弟が吉川弘文館さんの御出身で、後に雁金屋清吉さんの跡をついだ青山さんでした。¹⁷

「二代目の人」が「私共の店に居た」「惜しい事にまだ働き盛りに亡くなりました」と述べているが、先ほどみたように二代目伝右衛門の奉公先は丁子屋平兵衛方であった。また、「和書出版界の古老」と

も称され、大正九年に没した二代目を「働き盛り」とするのは些か不自然ではなからうか。

明治二十四年（一八九一）に刊行された春秋園武田編・佳峰園等校『俳諧新五百題』¹⁸の著作者は「武田正吉」、発行者兼印刷人は「武田伝右エ門」である。このうち前者は浅倉屋のいう「政吉」だとわかるが、後者は一見すると何代目の伝右衛門を指しているのかわからない。しかし、当時存命しているのは、「政吉」を除けば先に確認した二代目ただ一人である。したがって、「舎弟」が八代目雁金屋清吉である「政吉」は、二代目伝右衛門の長子であるとともに、後の三代目であると考えられる。要するに、浅倉屋は本来三代目である「政吉」を「二代目」としていたのだが、同様の呼称は『紙魚の昔がたり 明治大正篇』に収められたほかの談話にもみられる。その理由は判然としないが、彼らは「政吉」が三代目だと知らなかったのではなく、単に「後嗣」という意で「二代目」の呼称を用いていただけなのかもしれない。なお、『俳諧新五百題』以降の出版物に「武田正吉（政吉）」の名がみえないため、三代目は少なくとも明治年間に没したようである。

これまで確認してきた三代にわたる歴代伝右衛門の系譜をまとめると次のようになる。

初代：天保の改革で処罰を受ける。安政三年没。

二代目：幼名「安次郎」。かつて丁子屋平兵衛方で奉公。初代の

死没により、安政三年に二代目伝右衛門となる。大正九年七月没。

三代目：通称「政吉（正吉）」。二代目伝右衛門の長子。浅倉屋久兵衛方で奉公の後、三代目伝右衛門となる。明治年間に死没か。

三代目早世の後、大島屋の営業は再び二代目伝右衛門の手に委ねられたのであろう。だが、前述のとおり大正九年以降の出版物を確認できないため、大島屋は二代目伝右衛門の死とともに廃業したものと推察される。

二、中本と大島屋伝右衛門

次に大島屋の出版活動を種々の蔵版目録から概観していく。

『御利生正札附千社参』初編の刊行後、文政二年（一八一九）には古今亭三鳥作『籠細工はなし』、翌文政三年（一八二〇）には滝亭鯉丈作『花暦八笑人』初編を刊行し、以後本格的に出版活動を展開していく。翌文政四年に刊行された鼻山人作『玉散袖』下巻には「文永堂蔵版目録」が附載されており、こうした大島屋の初期の様子が垣間見える。

「文永堂蔵版目録」には、滝亭鯉丈作『花暦八笑人』初・二編（文政三～四年（一八二〇～一八二一）刊）、一筆庵主人作『人世栄枯松の操物語』（同三年刊）、鼻山人作『玉散袖』（同年刊）、滝亭鯉丈・南

仙笑楚満人作『明鳥後正夢』初編（同四年刊）、山東京山作『驚談伝奇桃花流水』（文化六年（一八〇九）刊）の蔵版が謳われるとともに、『松の操物語』後編（『貞烈竹の節談』）と『花暦八笑人』三編から八編までの刊行が予告されている。なお『驚談伝奇桃花流水』は求版本である。

「文永堂蔵版目録」と同時期の目録に、梅暮里谷峨作『斯波遠説七長臣』巻五（文政四年刊）附載の「文永堂蔵版目録」がある。¹⁹ 記載された書目は多く重複しているが、こちらにはさらに梅園主人作『奇談園の梅』（文政四年刊）、式亭三馬作『七癖上戸』（文化七年（一八一〇）刊）の蔵版が謳われ、鼻山人作『契情意味張月』（文政六年（一八二三）刊）の刊行が予告されている。『七癖上戸』も『驚談伝奇桃花流水』同様に求版本である。

為永春水作『春色英対暖語』五編上巻所収の「米八婀娜吉丹治郎の物語類本目録」は、『春色梅児誉美』初～四編（天保三～四年（一八三二～一八三三）刊）、『春色辰巳園』初～四編（同四～六年（一八三三～一八三五）刊）、『春色恵の花』初～後編（天保七年（一八三六）刊）、『春色英対暖語』初～五編（同九年（一八三八）刊）、『春色梅美婦祢』初～四編（同十二年（一八四一）刊）などの所謂「梅暦シリーズ」の蔵版を示す目録である。先に浅倉屋が「梅暦」を大島屋の「大切な米櫃」と称していたように、これら一連の諸作品は明治期に至るまで大変な人気を博した当たり作であった。

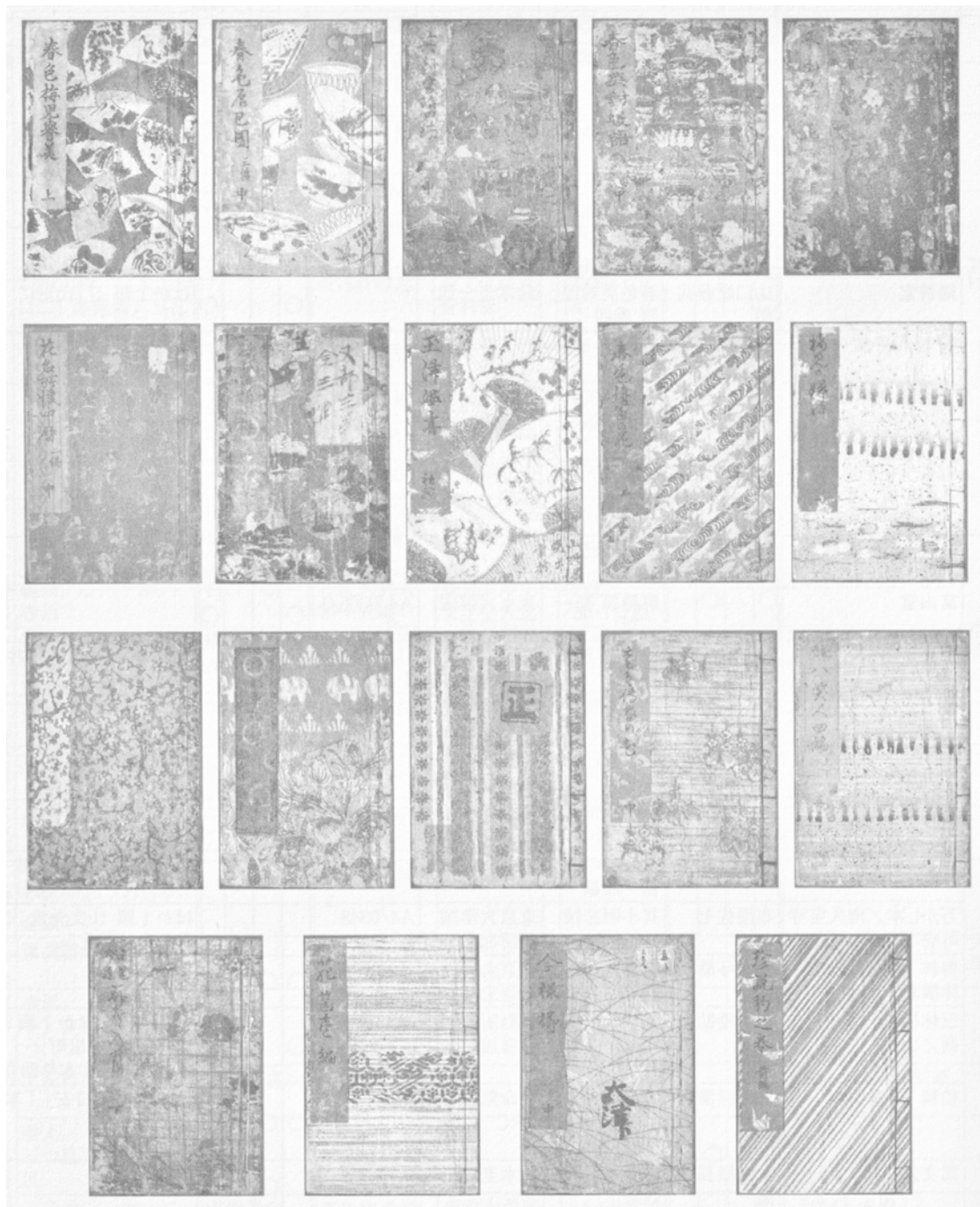


图 4 大島屋伝右衛門所用表紙文様一覧

梅暦シリーズ刊行を経て、大島屋は全盛期を迎える。この時期の様子を伝えるのが「書林文永堂蔵版目録」²⁰である。この目録には計四十二の書目が列挙されているのだが、そのうち中本は三十八作品（滑稽本は七、人情本は三十一）というかなりの割合を占めている。そのうち、求版本と判明しているものは次のとおりである。

十返舎一九作『諸用附会案文』（享保四年（一八〇四）序）

式亭三馬作『戯場粹言幕之外』（文化三年（一八〇六）刊）

同作『無而七癖酩酊氣質』（同年刊）

同作『例之酒癖一杯綺言』（同十年（一八一三）刊）

同作『古今百馬鹿』（同十一年（一八一四）刊）

同作『素人狂言紋切形』（同年刊）

鼻山人作『傾城蘭蝶記』初〜三編（文政七年（一八二四）序）

以上のように、種々の蔵版目録からは中本を積極的に出版するだけでなく、他書肆から求版している様子が窺える。²¹その割合からみても、大島屋の出版活動は中本が軸になっていたといっても過言ではない。

こうした中本と大島屋の関係性に加え、明治期まで中本を印行していた様子は、現存する中本そのものからも指摘できる。

現存する中本には、見返しや奥付を欠いた本が多いため、出版もしくは流通に携わった版元を書籍から特定するのは困難である。しかしながら、版元を特定する術が全くないわけではない。書籍の表紙と附載された広告は、十分その手掛かりとなり得る。

中本のなかでも特に人情本の表紙には、華やかな千代紙風の料紙がよく用いられている。この料紙の文様には、書名や作品内容との相互関係が²²みられるだけでなく、版元ごとに異なる意匠が凝らされている場合もある。「大島屋伝右衛門所用表紙文様一覽」（図4）は、大島屋が蔵版していた作品や、後述する処女香・初みどりの広告を有する書籍の表紙、つまり大島屋特有と思われる表紙文様を架蔵本から集成した一覽である。梅暦シリーズに好んで用いられているものから、作品を問わず用いられているものまで様々ある。これらの表紙は一編三巻が一冊に合冊され、口絵が藍摺（墨摺の場合もある）となっている後印本にも用いられている。

書籍に附載された広告も、版元を特定する手掛かりの一つである。中本を出版した版元には売薬を兼業している者もおり、彼らは自らが発行した書籍にその広告をたびたび附載した。菊屋幸三郎の清涼香、大坂屋半蔵の順補丸、丁子屋平兵衛の花橘や雪の梅などがよく知られた例であろう。大島屋の場合、処女香と初みどりを商っている（図5・図6）。このうち処女香は、「為永春水精剤」と謳われる白粉下だが、実際は大島屋によって製剤・販売がなされていた。その様子は第一章第三節「大島屋伝右衛門と池田屋一統——売薬「処女香」を端緒として——」で詳述したので参照されたい。

こうした表紙や処女香・初みどりの広告を有する中本、特にその後印本は非常に多く、大学図書館や公共図書館にもかなりの割合で収蔵されている。それはまさしく、大島屋が長期にわたって中本を印行し



図5 処女香の広告（架蔵『娜真都翳喜』三編）

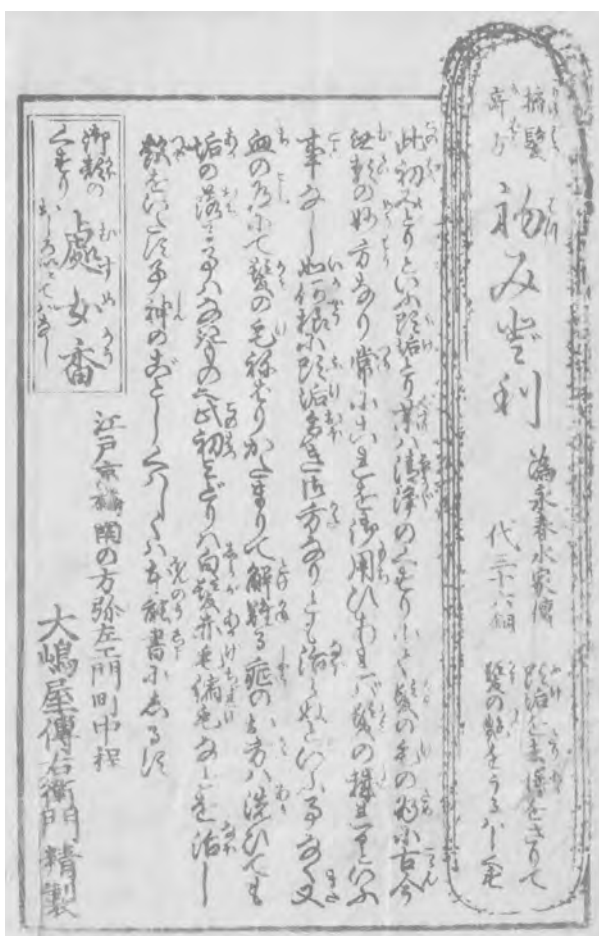


図6 初みどりの広告（架蔵『娜真都翳喜』三編）

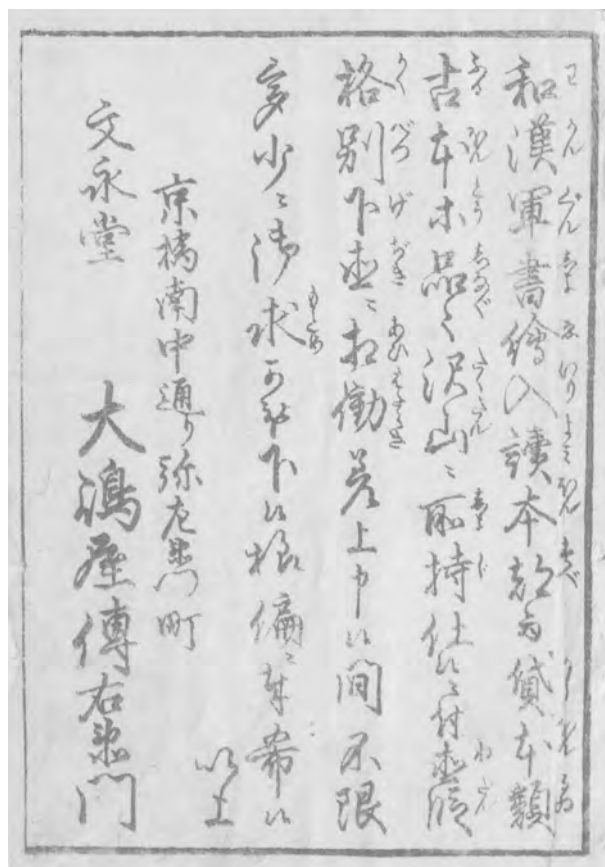


図7 貸本屋向けの広告（架蔵『娜真都翳喜』三編）

ていたことの証左であるとともに、変わりなく中本が人々に受容されていた事実を物語っているといえよう。

第三章第一節「貸本屋の諸相」および第二節「誠光堂池田屋清吉の片影」からも明らかのように、近世後期から近代初頭において中本をはじめとする戯作は貸本屋の主力商品であった。先に浅倉屋も「貸本問屋でした生家」と回想していたように、大島屋は明らかに貸本屋を顧客として意識し、中本を軸に据えた営業をおこなっていたのである（図7）。

三、大島屋伝右衛門の書籍流通

先に浅倉屋が回想していたように大島屋もまた貸本問屋であり、その営業は近代にまで及ぶ長期的なものであった。では、主として中本を取り扱う版元であるとともに、貸本問屋でもあった大島屋はどのような書籍流通網を保持していたのであろうか。

大島屋を中心とする書籍流通を明らかにするため、大島屋が蔵版していた作品や、前述した表紙・広告を有する書籍を対象に調査をおこない、それらに押捺された貸本屋のものと思われる蔵書印を収集し表にまとめた（【別表】）。蔵書印からその印を使用していた貸本屋を特定するのは難しく、地域の判明した例はそれほど多くないが、流通の片鱗を窺い知るには十分であろう。この表から大島屋の携わった書籍

が流通を経て、最終的に行き着いた地点が判明する。

【別表】の地域には、江戸・京都・大坂をはじめとして、陸奥国・出羽国・加賀国・越後国・常陸国・上野国・武蔵国・信濃国・甲斐国・遠江国・尾張国・伊豆国・紀伊国・伊勢国・近江国・播磨国・備中国・備後国・安芸国・伊予国・筑前国・肥後国を確認できる。本が卸された時期や仕入れた書肆もわからず、扱いにくいデータであるが、ほぼ全国的ともいえるかなり広い範囲に書籍が流通している様子が窺える。だが、明治期も含めた大島屋の出版物にみえる売弘所や売捌所からは、こうした全国的な流通の痕跡を確認できない。はたして、大島屋は広域的な流通網を本当に保持していたのであろうか。

第二章第二節「大島屋伝右衛門出版書目年表稿」をもとに、文化十二年（一八一五）から明治元年（一八六八）までの間に大島屋と共同で出版をおこなっている書肆を集計した。そのうち、上位に位置する書肆は次のとおりである。なお、集計にあたっては、大島屋にとって画期となったと考えられる『春色梅児誉美』の刊行以前と以後にわけている。

『春色梅児誉美』以前

（文化十二〜天保二年（一八一五）〜一八三二）

越前屋長次郎	10
鶴屋金助	9
西村屋与八	9

丁子屋平兵衛	7
大坂屋茂吉	6
河内屋茂兵衛	5

『春色梅児誉美』以後（天保三〜明治元年（一八三二）〜一八六八）	
丁子屋平兵衛	12
河内屋茂兵衛	10
西村屋与八	8
秋田屋市兵衛	5
河内屋長兵衛	4
菊屋幸三郎	3

『春色梅児誉美』以前は、ほかの江戸の書肆と出版をおこなうなかで地本問屋としての足場を固めている感がある。加えて首位に立つ越前屋長次郎（後の為永春水）という存在は、梅暦シリーズをはじめ春水作品を多く出版・蔵版していくことになる大島屋の今後を予感させるものである。対して『春色梅児誉美』以降では、河内屋茂兵衛や河内屋長兵衛、秋田屋市兵衛といった上方の書肆との出版が増加する。とりわけ、近世後期から近代初頭にかけて絶大な勢力を誇った河内屋一統の存在は見逃せない。²⁴このような傾向は大島屋だけでなく、中本の出版全体にみられる。鈴木圭一氏は、ここにすでに全国に拓かれていた読本の流通網が利用されていると指摘している。²⁵

だが、本稿ではさらに大島屋と丁子屋平兵衛との関係に注目しておきたい。丁子屋は共同で出版をおこなっている書肆として常に上位にあるだけではない。越前屋長次郎は馬琴の天保九年（一八三九）十月二十二日殿村篠斎宛書簡²⁶のなかで「丁子屋のふところ小刀」と称されるほどに丁子屋と懇意であった。また、丁子屋は河内屋茂兵衛と相版で読本や人情本を多く出版しており、両者が近い間柄であったことは容易に想像される。大島屋の書籍流通網には、丁子屋の影が見えてきはしないだろうか。

丁子屋が江戸市中の貸本屋に向けられた販路と全国的な書籍流通網を保持していたことは、第一章第一節「丁子屋平兵衛の躍進——貸本屋世話役から貸本問屋へ——」で詳述したとおりである。おそらく、二代目伝右衛門が丁子屋方で奉公するより前から、つまり初代伝右衛門の時代から大島屋と丁子屋は親しかつたのであろう。丁子屋の斡旋により越前屋長次郎や河内屋一統との知遇を得た大島屋は、彼らと丁子屋の書籍流通網をベースとする販路を獲得できた。これにより、豊富な中本の蔵版を売りとしながら、全国各地の書肆や貸本屋を対象とした営業をおこなうことが可能となったのだと考えられる。

おわりに

大島屋伝右衛門は、文化年間の創業から中本を多く刊行するだけでなく、ほかの書肆から積極的に求版することによって、次第にその蔵版書目を豊かなものとしていた。そして丁子屋平兵衛の流通網や、丁子屋の協力により得た河内屋一統をはじめとする上方の流通を利用しながら、中本を明治期まで世に送り出していたのであった。

版元、そして貸本問屋として、書籍を市場へ供給し続けることで、大島屋は近代初頭に至るまで貸本屋を、また彼ら貸本屋を通じた人々の中本受容を支えていたのである。

地域	印記	印主	書名	所蔵	請求記号	表紙	処女香	初みどり	蔵書目録	備考
常陸国	粗毛 [山形にス]		三日月阿専 前・後編	架蔵			○			
上野国	上州 [曲尺形に大] 二軒在家/石原/金銀 不用		質屋雀 初編上	架蔵						大島屋版
武蔵国	横浜書林 紀伊国屋		春色梅児誉美 巻6	弘前市弘前図書館	W913.54-16	○			○	
	横浜/ [山形に高一] 高橋屋/相生		花街寿々女	玉川大学 学術情報図書館	W913.54/サ		○		○	
信濃国	上田書林 宮島舎	宮島舎喜兵衛	珍説豹の巻 前・後編	架蔵		○				
	信上/ [一つ引きに三 つ星] 大藤/塩尻		春色伝家の花 初-4編	架蔵		○	○		○	
	玉壺堂	浜屋為吉	春色梅美婦祢 2編	東京大学 国語研究室	M-0378	○			○	
	慶林堂/高美記	高美屋甚左衛門	春色英対暖語 初-5編	早稲田大学図書館	へ13-03076		○		○	
甲斐国	甲府/女々堂/三井		花暦八笑人 初-5編	早稲田大学図書館	へ13-03094					
遠江国	掛川 [山形に万] 金 銀/山崎/不用		契情肝粒志 後編上	鈴木圭一氏					○	
尾張国	熱田神戸町/竹葉堂/ 笹屋徳右衛門	笹屋徳右衛門	三日月阿専 前編	架蔵		○				求版本
伊豆国	豆州三島市ヶ/原町 畷堂/朝且仲次郎	朝且仲次郎	花暦八笑人 五編下	鈴木圭一氏					○	
紀伊国	若山/京屋福之助/書 林	京屋福之助	席雑談 3編上	鈴木圭一氏		○			○	
	湯浅/橋義/中町		貞烈竹の節談 中	鈴木圭一氏			○		○	
	若山/坂木屋喜市郎/ 書林	坂木屋喜市郎	貞烈竹の節談 中	鈴木圭一氏			○		○	
伊勢国	松阪 [丸形に加] お しろい町/木屋嘉助	木屋嘉助	軒並娘八丈 4編中	鈴木圭一氏			○			求版本か
	勢州/ [山形に久] 柏 屋久八/松阪	柏屋久七	春色梅児誉美 巻8	関西大学図書館 中村幸彦文庫	L24/11-2-B/3	○	○		○	
近江国	江州/ [方形に十] 西 川勝助/八幡	西川勝助	春色伝家の花 初-5編	早稲田大学図書館	へ13-02925	○	○		○	
	八幡魚屋町/万国書籍 所/西川勝助	西川勝助	春色伝家の花 初-5編	早稲田大学図書館	へ13-02925	○	○		○	
播磨国	播中 [曲尺形にモ] 中嘉		郷真都贈喜 4編	架蔵		○				大島屋版
備中国	岡山 [山形に二] 浜 田町/貸本所/中嶋屋		娘太平記操早引 初-4編	鈴木圭一氏			○		○	
	岡山橋本町/御書物所/ 片山屋孫兵衛	片山屋孫兵衛	春色辰巳園 巻9	鈴木圭一氏		○			○	
	玉泉堂 岡山橋本町北 側/貸本所/片山屋孫 兵衛	片山屋孫兵衛	春色辰巳園 巻9	鈴木圭一氏		○			○	
備後国	備後府中/加藤書肆		春色玉襷 初-3編	架蔵		○				
安芸国	広島 [井桁形に口] 播磨屋町北側/書籍処 /井筒屋出店		清談松の調 中	鈴木圭一氏		○		○		
伊予国	イヨ [山形に圭] 松 山本町三丁目/貸本所 /野中栄三郎	野中栄三郎	仇比今様櫛 初-3編	早稲田大学図書館	へ13-02922	○			○	
筑前国	筑前国/親愛社/山家 伝		春色梅児誉美 初-4編	架蔵		○	○		○	
肥後国	熊本県 山鹿町/万屋/ 坂口		貞操婦女八賢誌 4編	関西大学図書館 中村幸彦文庫	L24/11-112- A/4-1~2				○	
	肥後山鹿町/和漢書籍 /同文具類/井出郡太	井出郡太	貞操婦女八賢誌 4編	関西大学図書館 中村幸彦文庫	L24/11-112- A/4-1~2				○	

地域	印記	印主	書名	所蔵	請求記号	表紙	処女番	初みどり	蔵書目録	備考
江戸	笠亦	笠屋又兵衛	花街鑑	架蔵			○		○	
	紙徳	紙屋徳八	三国一夜物語	京都大学 文学研究科図書館 浜田啓介文庫	Pg-92					求版本
	〔山形〕 两国 大重		春色辰巳園 初-4編	国立国会図書館	A4-0383		○		○	
	京橋/村田/太刀亮		花暦八笑人 三編追加下	鈴木圭一氏					○	
	錦耕堂	山口屋藤兵衛	春色英対暖語 巻4	鈴木圭一氏			○		○	
	貸本 松寿堂	大黒屋平助	質屋雀 初-2編	国文学研究資料館	ナ4-245-1~4					大島屋版
	貸本商 芝区西久保/ 八幡二十一番地/大野 屋金七	大野屋金七	花暦八笑人 初-5編	国文学研究資料館	ナ4-11-6		○		○	
牛込〔丸形に木〕池 清	池田屋清吉	縁結月下菊	国立国会図書館	208-714		○	○		求版本	
京都	亀武	亀屋武助	春色辰巳園 巻9	架蔵			○		○	ほか1顆（「大勝」）
	富山堂		席雑談 初-3編	東京大学 国語研究室	A4-0305-1~5		○		○	
	京館富角/安井		風見種 初-3編	東京大学 国語研究室	4L-130-1~3		○	○		ほか1顆（「貸本安井」）
大坂	〔丸形に上〕具重	具足屋重兵衛	春色辰巳園 巻1	架蔵			○		○	ほか1顆（「具重」）
	三木与	三木屋与助	花暦懐中曆 巻8	架蔵			○		○	
	木亦	木屋亦兵衛	清談松の調 初-4編	架蔵			○			ほか2顆 （「なら久」「吉田 屋」）
	万かし木/南久宝寺町 窓丁目/布屋佐七	布屋佐七	其小唄恋情紫 2編	東京大学 国語研究室	A4-0348			○	○	ほか1顆（「文秀堂」）
	書林 大阪塩町/三休 橋北/山本与助	山本与助	春色英対暖語 初-5編	東京大学 国語研究室	4L-78-1~14		○	○	○	
	三休橋通/博旁町南/ 山本勘助	山本勘助	清談松の調 4編	早稲田大学図書館	へ13-03229- 0002		○			大島屋版
柏精	柏原屋清右衛門	春色梅見咎美 春-4編	立命館大学ARC	hayBK03- 0822-01~12		○	○	○	ほか2顆 （「鴻安」「木熊」）	
陸奥国	嵩文堂	大塚屋長兵衛	花暦八笑人 四編下	鈴木圭一氏			○		○	
	弘前/〔入山形に二〕 樽沢/百石町		秋色絞朝顔 4編	弘前市弘前図書館	W913.54-42		○			ほか1顆（「木亦」）
	磐城平/飯田商店/窓 丁目		清談松の調 初-4編	鈴木圭一氏			○			ほか1顆（「飯田」）
出羽国	羽前/〔山形に一〕万 屋/大山		春色英対暖語 初-5編	国文学研究資料館	ナ4-199-23~ 27		○	○	○	
	出羽〔曲尺形に入と 一〕山形/尾園/鉄炮 町		花篋 初-5編	東京大学 国語研究室	A4-0174		○			
	〔山形にや〕米沢桐 町/高田屋仙松		契情肝粒志 後編	専修大学図書館 向井信夫文庫	000-200- M2507.3~4				○	
	山形/〔山形に二〕小 松屋/十日町		春色辰巳園 巻10	鈴木圭一氏			○		○	
	秋田〔山形にイ〕茶 町扇之丁/貸本所/伊 藤源吉	伊藤源吉	清談若緑 3編	鈴木圭一氏			○			
	上茶屋町/日新堂/武 丁目		花暦八笑人 初-4編追加	岐阜大学図書館	913.55-17.8- 25430		○		○	
	羽州山形/〔入山形に 二〕加藤屋/三日町		契情肝粒志 3編	国文学研究資料館	ナ4-692-7~9				○	
	羽州〔丸形に藤〕置 場郡/藤屋/大町上		恩愛二葉紳 三編上	鈴木圭一氏			○		○	
加賀国	金沢区御徒町/テカ/ かし木所/ナヌ/二番 丁廿五番地	寺田屋	席雑談 初-3編	東京都立中央図書館 東京誌料	477-31		○	○		ほか1顆（「桜溪」）
越後国	書林 北越口□□/東 江堂/川村屋勘兵衛	川村屋勘兵衛	貞操婦女八賢誌 4編巻2	鈴木圭一氏			○	○	○	
	越後/石川平助/寺泊	石川平助	花暦八笑人 初-5編	東京大学 国文学研究室	近世-36-11- 21		○		○	
	和漢御書物所/越後柴 田上町/新津屋木治兵 衛	新津屋木治兵衛	郷貞都囃喜 初-3編	架蔵			○	○		ほか3顆（「小田嶋」「浜 崎」「新発田/青林堂/蔵 書記」）

【別表】

注

- 1 人情本刊行会叢書『人情本略史』（人情本刊行会、一九二六年）。
- 2 前田愛「出版社と読者——貸本屋の役割を中心として」（『前田愛著作集第二巻 近代読者の成立』筑摩書房、一九八九年所収。初出は一九六一年）。
- 3 彌吉光長著『未刊史料による日本出版文化』第三巻（ゆまに書房、一九八八年）所収。
- 4 国立国会図書館蔵『諸問屋仮組名前帳』四巻（請求記号：八一—一九）所収。
- 5 井上隆明氏は『改訂増補近世書林板元総覧』（青裳堂書店、一九九八年）において、西島長孫撰『歴代題面詩類絶句抄』と酒井抱一編『光琳百図』（求版本。原版は文化十二年刊『光琳百図』前編二冊）の二書をあげ、大島屋の活動時期を文化十年（一八一三）から明治三十年（一八九七）としている。だが、『歴代題面詩類絶句抄』の版元は、『割印帳』によれば大島屋ではなく宝翰堂堀野屋儀助である。また、後述するように明治三十年以降の出版物も存在する。
- 6 中本。二巻二冊。歌川国芳画。関西大学図書館蔵本（請求記号：L二三一九〇〇—六三一九〇六三二〇）の奥付は次のとおり。「文化十二乙亥歳正月発兌／江戸書賈 和泉屋市兵衛／三崎屋清吉／中村幸蔵／大島屋伝右衛門梓」。なお、本書の見返し・口絵にはそれぞれ「江戸書賈 文耕堂梓」「板元文耕堂」とあるが、これが当時大島屋の名乗っていた堂号かどうかは現段階では不明である。
- 7 いずれも活版印刷の袖珍本。発行者は「武田伝右衛門」、発行所は「文永堂」。
- 8 青木嵩山堂の廃業年は、青木育志・青木俊造著『青木嵩山堂——明治期の総合出版社』（アジア・ユーラシア総合研究所、二〇一七年）による。
- 9 半紙本。十巻十冊。内題は「火宅罪火消」。
- 10 東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 市中取締類集 十八』（東京大学出版会、一九八八年）所収。
- 11 『天保雑記』第五十一冊（内閣文庫所蔵史籍叢刊『天保雑記（三）』汲古書院、一九八三年所収）。なお、引用に際して読点を補った。
- 12 四葩山人「文溪堂と八犬伝」（『高潮』第三号、吉川弘文館、一九〇六年五月）。
- 13 東京書籍商組合、一九一二年。
- 14 「明治初年東京書林評判記」（『古本屋』第三号、荒木伊兵衛書店、一九二七年十一月）には、「大島屋伝兵衛及麴町古本屋森田鉄五郎其外丁忠、丁善等皆この出身也」、「紙魚の跡 浅倉屋の巻（一）」（『読売新聞』一八四六三号、一九二八年七月二十五日）には『八犬伝』や『梅暦』や其他いろいろな人情本の版元丁子

屋さん、文溪堂大溪半兵衛といつて、ずる分派出な人でした。近火のあつた翌朝など力士や役者が見舞に来て店にゐたので、大に人目を引いたものです。大伝馬町二丁目に居られました、大島屋武田伝兵衛、麴町の古本屋森田鉄五郎、その他、「丁忠」「丁善」皆「この出身です」とある。

15 『読売新聞』一八四六号（一九二八年七月二十八日）。

16 八木書店、一九九〇年。

17 浅倉屋吉田久兵衛「和本屋生活半世紀の思い出」。

18 春秋園瀧川編・佳峰園等裁校『明治玉簾集』（明治二十二（一八八九）年刊）の改刻改題本。

19 『斯波遠説七長臣』の刊行年については、第二章第二節「大島屋伝右衛門出版書目年表稿」を参照のこと。

20 本目録は、大島屋が携わった書籍にたびたび附載されているが、本稿では東京大学附属図書館蔵『文永堂文溪堂蔵販目録』（E二四・三九二）所収のものを参照した。『文永堂文溪堂蔵販目録』は大島屋伝右衛門・丁子屋平兵衛・加賀屋源助らの目録が、後人の手によって一冊に合冊されたものである。

21 中本、とくに文政期の人情本を大島屋が求版していたことは、注2前掲論文でも指摘されている。

22 例えば、鶴亭秀賀作『安矢女艸』初〜四編（安政五〜六年（一八五八〜一八五九）刊）の表紙には菖蒲の絵、忠臣蔵を題材とし

た為永春水ほか作『いろは文庫』初〜十八編（天保七〜明治五年（一八三六〜一八七二）刊）の表紙には大石内蔵助の家紋（二つ巴）の文様が用いられているなど。

23 大島屋が貸本問屋であったことは、注2前掲論文および前田愛「明治初期戯作出版の動向——近世出版機構の解体——」（『前田愛著作集第二巻 近代読者の成立』筑摩書房、一九八九年所収。初出は一九六三・一九六四年）でも指摘されている。

24 浜田啓介「近世後期における大阪書林の趨向——書林河内屋をめぐって」（『近世文学・伝達と様式に関する私見』京都大学学術出版会、二〇一〇年所収。初出は一九五六年）を参照。

25 鈴木圭一「人情本の全国展開——洒落本・中本の出版動向より」（『中本研究 滑稽本と人情本を捉える』笠間書院、二〇一七年所収。初出は一九九七年）。

26 柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』第五卷（八木書店、二〇〇三年）所収。

〔附記〕資料の閲覧・利用にご協力いただいた鈴木圭一氏および各機関にお礼申し上げます。

第三節 大島屋伝右衛門と池田屋一統——売薬「処女香」を端緒として——

はじめに

近世から近代初頭にかけての出版業界は、現代のように出版・取次・小売が明確にわかれていないばかりか、一つの書肆が複数の業種を兼ねている場合が多かった。のみならず、隣接する貸本業や古本業との兼業も一般的であったため、かつての出版業界は書籍にまつわる複数の業種を横断した、謂わば書籍業界とも称すべき総合的なまとまりに包括されていたといえる。

書籍業者が売薬・文房具・小間物類をも取り扱っていたこと、また反対に薬屋や小間物屋が書籍を取り扱っていたことなどは、すでにいくつもの事例が紹介されており、書籍流通との連関を論じている研究も多くある¹。書籍は複合的な回路のなかで流通していたのであり、書籍そのものだけに目を向けていたのでは、当然ながら業界内外に張り巡らされた流通網を把握することなど到底望めない。

本稿では、大島屋が取り扱っていた売薬「処女香」に着目すること、丁子屋や河内屋一統とは異なる業者間の結びつきを浮かび上が

せるとともに、その結びつきを介して展開された大島屋を中心とする近代初頭における書籍流通網について考察していく。

一、処女香について

まず、いくつかの広告から処女香の概要を整理する。第一章第二節「中本」受容と大島屋伝右衛門」でもすでに述べているように、大島屋が出版もしくは流通に携わった書籍には、時折処女香の広告が附載されている。この広告には大きく分けて三系統の版がある。以下、それぞれの版を仮にA版・B版・C版とする。

いずれの版も全一丁である。図8にはそのうちB版を見開きの形で掲出した。見開き右（本来のオモテ）には女性の胸像と表題および価格（楊太真遺伝／処女香 精製切の箱入／一廻り／百二十文）、「そもく此御薬は」と説き起こされた効能書き、見開き左（本来のウラ）

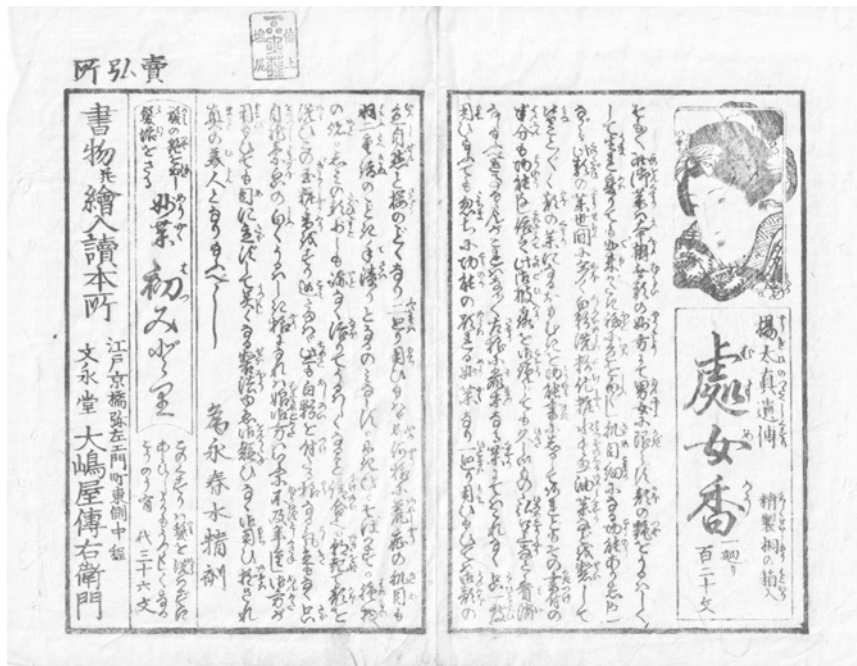


図8 処女香の広告（架蔵『春色伝家の花』四編中巻）

には効能書きの続きと髪薬「初みどり」の広告と価格、そして売弘所が記されている。この売弘所は管見の限り大嶋屋伝右衛門のみだが、「書物并繪入讀本所 江戸数寄屋橋御門外弥左エ門町東側中程」（A版）、「書物并繪入讀本所 江戸京橋弥左エ門町東側中程」（B版）、「書物并繪入讀本問屋 江戸京橋弥左エ門町東側中程」（C版）といったように、冠された名称もしくは所書きがそれぞれ版によって異なっている。また、三つの版を比較すると、広告を囲む枠や使用されている仮名の字母などに違いがみられるものの、内容自体に違いはない。

さて、効能書きをみる限り、処女香には「生れ変りても出来がたき程に色を白くし肌目細になる」とともに、「一廻り用ひ給ひては御顔の色自然と桜の花の如くなり二廻り用ひ給はゞ如何様に荒症の肌目も羽二重絹の如き手障りとなるのみならず」「にきび」「そばかす」「腫物の跡」「しみの類」を治す効果があるという。さながら薬効を有した化粧品といったところであろうか。「男女に限らず」と謳っているものの、滑稽本・人情本をはじめとした中本を手にとる読者のなかでも、主な購買者として女性を想定していることは想像に難くない。

効能書きの末尾に「為永春水精剤」と記されているが、この語の真偽のほどは定かでない。かつて春水は「美艷の白粉に丁子車のかほりをそへて益繁昌せんことを余慶のしごとこひねがふ其口上を演るものは 東都戯作者 南仙笑楚満人」（文政七年（一八二四）刊『牛島土産』中巻）、「文政十一年戊子春の新販にとて同十年亥の冬股引掛にて筆を採る 通油町丁子車のはみかき店 楚満人」（同十一年（一八二

八) 刊『玉濃枝』序)、「御ひいきつよき糸三齒みがき丁子車の精製所 狂訓亭主人」(同年刊『婦女今川』三編)、「文政十一子春新絵双紙 魁本 丁子車の主人 狂訓亭楚満人」(同年刊『風俗女西遊記』序)、「油街の市人 丁子車はみがき見世の主人改名いたして 為永春水再識」(同十二年(一八二九)刊『菊廼井草紙』三編序)、「はみがき丁子車精製のいとま 狂訓亭主人為永春水誌」(同年刊『菊廼井草紙』四編序)、「油街の市中翠橋の辺にひさく丁子車梅我齒磨精製のいとま筆を狂訓亭の南窓に採て 為永春水老人誌」(同年刊『孝女二葉錦』序)などのように、自身が製剤・販売する齒磨き粉「丁子車」をことある毎に宣伝していた。しかしながら、こうした自らの商品を積極的に売り込もうとする姿勢が、処女香にはみられないのである。

為永春水作『春色伝家の花』二編中巻には、登場人物にこと寄せて種々の化粧品と薬が宣伝されている場面がある。

姿は見えねど暗闇にても隠れはあらぬ梅が香の薫りに増る仙女香の化粧の匂ひほのめきて肌にはたしか花橘処女香の功能深く口にふくみし梅の雪ゆかしき常の身たしなみ真の美人と賞すべし

因によつて言右にするす薬は女中衆の常に用ひたまはねばならぬ化粧の品又たしなみの妙薬なり

○美艶仙女香当世白粉の第一番 南伝馬町 坂本氏製

○御化粧水花橘 硝子入 小伝馬町 丁子屋店

○おしろい下 処女香 しぜんといろの白く 弥左衛門町 大嶋屋

肌のくすり なるみやうやく

○御懐中たしなみ薬 梅の雪 小伝馬町 丁子屋²⁾

仙女香の坂本氏以外には「製」の字がみられないため、丁子屋や大島屋がそれぞれの化粧品や薬の売捌きにのみ携わっていたのか、それとも製剤をも手掛けていたのかは今一つ判然としない³⁾。だが処女香の場合、早稲田大学図書館西垣文庫所蔵の上包み(請求記号・文庫一〇一〇八〇一八—〇〇〇二)に「文永/堂製」という朱印がみられることから、製剤していたのは春水ではなく大島屋であったと考えられる。つまり、『春色伝家の花』では処女香の製剤・販売を担う者として大島屋が宣伝されていたということになる。広告にみられた「為永春水精剤」の語は、あくまで宣伝用の謳い文句にすぎないのである。

天保三年(一八三二)に大島屋から刊行された為永春水作『新春竜宮物語』の後ろ見返しには、また異なる処女香の広告がみられる。管見に及んだ立命館大学アトリサーチセンター・京都大学文学部図書館・アドミュージアム東京所蔵の『新春竜宮物語』全てに確認できるため、この広告自体も天保三年、それも「新春」と書名にあることから正月時のものと考えて差し支えないであろう。こちらの広告には、先のA・B・C版と異なり、効能書きの末尾に「為永春水精剤」と記載されていない。こうした広告における「為永春水精剤」という語の有無には、『春色梅児誉美』が関係していると思われる。

大島屋は天保三年(一八三二)正月に西村屋与八との相版で為永春水作『春色梅児誉美』初・後編を刊行する。周知のとおり、本作は人情

本の代表作であるとともに、春水の出世作でもある。その成功は春水の人気を不動のものとし、以後の人情本に多大なる影響を及ぼした。人情本というジャンルにとって、そしてなにより作者春水自身にとつて、この『春色梅児誉美』という作品は一つの転機であったといえる。

こうした背景を勘案したとき、「為永春水精剤」の有無はそれぞれの広告が制作された当時の春水人気、あるいはその名前が持つ影響力の多少を表していると考えられよう。つまり、『新春竜宮物語』は『春色梅児誉美』と同時期に刊行されたため、附載広告にはまだ「為永春水精剤」の語がみられないのである。対してA・B・C版の広告は『春色梅児誉美』の刊行以降、その成功に伴う作者春水の人気・影響力の増大に肖るため、「為永春水精剤」の語を追加し、訴求効果をさらに高めようとしたのだと考えられるのである。早稲田大学図書館西垣文庫所蔵の初みどりの引札（請求記号：文庫一〇〇八〇一八—〇〇〇一）で、大島屋が「梅暦の版元」と宣伝されているのも、『春色梅児誉美』ひいては春水の人気・影響力のほど、そしてさらなる訴求効果を求める版元の姿を示していよう。以上の作為は大島屋が処女香の製剤・販売を担っていたとともに、『春色梅児誉美』の版元であったからこそ可能だったのである。

ところで前述のB版には、価格部分（「二百二十文」「代三十六文」）の削られたものが間々みられる。おそらく新貨条例の施行された明治四年（一八七二）以降にも広告を使い回すべく、時代にそぐわない価格部分を削除したのだと思われる。処女香は近代初頭においてもなお販

売が続けられていたのである。

大島屋伝右衛門・大川屋錠吉相版の萩原乙彦作『新門辰五郎游俠譚』初・二編（明治十二年（一八七九）五月御届）、松村春輔作『春風日記』初編下（同十三年（一八八〇）十二月二十八日御届）にそれぞれ処女香の広告（図9および図10）がみられる。なお、架蔵する『春風日記』初編下は後述する貸本屋池田屋清吉の旧蔵本である。図9には効能書きの末尾に「文栄堂記」とあるが、これは大島屋の堂号「文永堂」の誤記、あるいは「文永堂」と大川屋の堂号「聚栄堂」とを合わせた称だと思われる。もし後者であるならば、大川屋も処女香の販売に携わっていたことになるが、残念ながら今のところそれを裏付ける資料を見い出せていない。しかしながら、第一章第四節「黎明期の初代大川屋錠吉」で詳述するように、三代目大島屋伝右衛門と初代大川屋錠吉は両者とも浅倉屋久兵衛のもとで奉公していた経歴を持つ。そのため、浅倉屋での奉公を終えた後も両者の間に親交が保たれており、やがて大川屋が処女香の販売および取次に関与するようになっていたとしても不思議ではない。

次にみるのは、明治五年（一八七二）七月五日付の河内屋茂兵衛方利助宛松川半山書簡である。

五月前分

一金壹朱 登龍丸、上包の龍

一金三朱 むすめ香、上包はり張



図 10 架蔵『春風日記』初編下にある広告

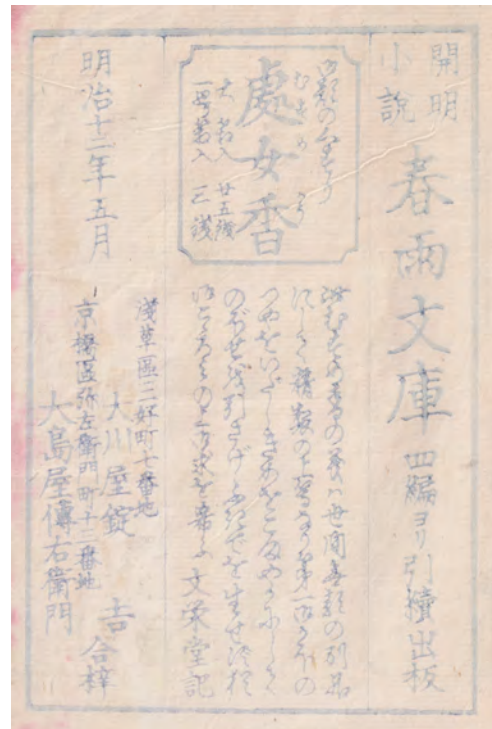


図 9 架蔵『新門辰五郎遊俠譚』初編にある広告

一金百疋 用文章、袋伝信機
 一金九両老ふ式朱 明治用文章、草稿百丁
 但し、老丁金老朱半宛
 〆 金九両三步式朱
 申七月前
 右之通二御座候、毎度乍自由、十日頃迄ニ為持被下候ハゞ、大ニ
 都合宜敷大慶奉存候、呉と茂希上候、已上
 七月五日ノ松川半山ノ群玉堂御店利助様⁴

「登龍丸」は書肆青雲堂英文蔵が製剤していた咳止め薬で、ここで
 言及されている上包みは、国際日本文化研究センターの宗田文庫に
 所蔵されている。⁵ 上包みには「大坂 河内屋茂兵衛」と明記されてお
 り、上部には確かに龍が描かれている。この龍を半山が描いたとい
 うのであろう。さらに書簡には「一金三朱 むすめ香、上包はり張」と
 ある。「上包はり張」の意味するところはわからないが、河内屋が処
 女香の上包みの作成に、登龍丸と同じく半山を起用していたのは確か
 である。大川屋だけでなく、河内屋茂兵衛もまた処女香を取次いでい
 たのであった。

広告ではないものの、『驢尾団子』一一四号（明治十四年一八八
 一）一月五日発行）に掲載された梅亭蕩人作「新曆溪間桜」第九回に
 処女香が登場している。

貧士族の娘然たる粧ひで居てさへ彼だから石鹸で洗った上をまた

極製の糠で磨き香水で荒打をし処女香で上塗を掛なぞと来た日に
やア柳橋や金春で幅を利せて居る白い顔も是に比べる馬の草鞋へ
霜を置たとしか見えやすめへ

以上のように、処女香は少なくとも『新春竜宮物語』の刊行された
天保三年から明治十四年までの間、大島屋によって製剤・販売されて
いたのであり、その取次には現段階でわかっているだけでも河内屋茂
兵衛と大川屋錠吉が関与していた。両者ともに大島屋との関わりが深
い書肆である。書肆による売薬の取次が、結びつきの強い間柄のなか
で展開されていた様子をここに認めることができる。

二、大島屋伝右衛門と池田屋清吉

貸本に供された近世期の書籍には、処女香に限らず売薬・化粧品類
の広告が貼付・附載されていることが多い。たとえば、江戸西ノ久保
神谷町で酒屋兼貸本屋を営んでいた三河屋磯吉は、「万通膏」という売
薬を製剤・販売している。その様子は架蔵の引札（図11）および鈴木
俊幸氏所蔵の岳亭岳山訳『絵本西遊記』三編巻四に貼付された引札の
ほか、架蔵の為永春水作『春暁八幡佳年』初編上巻や高井蘭山作『平
家物語図絵』巻一〜六に貼付された広告から確認できる（図12・図13
）。このうち広告は、一見どちらも同じ版木で摺られたものようだ
が、前者は取次所の部分が「取次 外神田 松住丁 貸本所 伊勢屋伝兵衛」、後

者は「取次 両国元丁 貸本所 大和屋惣八」となっている。埋木に
よって広告の取次所が改変されているのであり、三河屋磯吉が複数の
貸本屋を利用して万通膏の宣伝活動をおこなっていたことがわかる。
これは不特定多数の読者の手に渡る貸本が、ある程度の宣伝効果を期
待できる広告媒体であったことを示す証左であるともいえよう。それ
ゆえ、貸本には広告が貼付されるのである。

また、貸本屋が一般的におこなっていた継本という営業方法も、広
告と密接に結びついていると思われる。継本とは貸本屋がそれぞれに
設定した期限にあわせて家々を巡回し、以前貸し出した作品の続編等
を持ち込むといった営業方法のことである。換言すれば、この継本に
よって読者のもとには書籍が定期的にくく仕組みとなっていたといえ
る。つまり貸本に貼付・附載された広告は、さながら現代の折り込み
広告のような側面をも持ち合わせていたのである。

天保九年（一八三八）刊の為永春水作『春色恋白波』巻三には、貸
本屋の中尾幸吉が登場する。

家内に入折節来るは今駕籠町の貸本屋中尾幸吉、幸「へい、今日
は能お天気でございます。小「ヲヤ幸吉さんかへ。お前マア、
此間の後は何様被成だ。私きやアモウ、前編の章は忘れてしまつ
たヨ。幸「左様サ、為永の弟子の作にも面白ひのがござあます
そふだが、まだ大坂から下してよこしません。小「アレサ、じ
れつたいねへ。耳が遠ひから外の返事をするにはこまるねへ。



図 11 万通膏の引札 (架蔵)



図 13 大和屋惣八の万通膏の広告
(架蔵『平家物語図絵』巻一～六)



図 12 伊勢屋伝兵衛の万通膏の広告
(架蔵『春暁八幡佳年』初編上巻)

幸「アハ、ハ、ハ、ハ、又何だか間違た挨拶を仕ましたかネ。其代り今日はお前さんの御注文ものを不残持て参りました、ト風呂敷の包をひらき、幸「まづお顔の薬の仙女香。これはモシ、江戸の第一番の白粉でございますから」。

中尾幸吉が注文の品として仙女香を得意先へ届けている。先の万通膏も仙女香同様、取次所となっていた貸本屋が利用者の求めに応じて届けていたことだろう。このように貸本屋は広告による宣伝ばかりでなく、化粧品をはじめとする売薬の取次・販売をおこなうこともあった。処女香もその例外ではない。

株式会社オリコミサービスが国文学研究資料館に寄託している増田コレクションには、処女香の引札が所蔵されており、そこには効能書きとともに「貸本 東京牛込細工町 池田屋清吉述」と記されている。池田屋清吉は「池清」の通称で親しまれた貸本屋であり、坪内逍遙をはじめとする文士が利用していたことで知られている。なお、その蔵書と実際の営業については、第三章第二節「誠光堂池田屋清吉の片影」で取り上げた。引札には効能書きに加え、薬の上包みを持つ女性が描かれている。

この女性を描いた構図には、為永春水作『処女七種』三編上巻の口絵が利用されている。『処女七種』は七編各三巻三冊の人情本で、初編から五編は為永春水作、溪斎英泉・静斎英一画。六編から七編は梅亭金鷲作、梅の本鶯齋画。初編は天保七年（一八三六）刊。四編は同十

一年（一八四〇）刊。五編は同十二年（一八四一）刊。そのほかはみな刊年不詳である。¹⁰ 丁子屋平兵衛の「東都書林文溪堂蔵版中形絵入よみ本之部目録」¹¹に初編から四編までが掲載されているほか、天保の改革に際して市中取締懸がまとめた「絵草紙人情本好色本等之義二付申上候書付」¹²に「小伝馬町三丁目書物問屋家主平兵衛所持」として「処女七種」^{初篇迄}と記載されていることから、五編までは丁子屋が版元であったようである。

丁子屋版『処女七種』三編上巻の口絵が図14である。処女香ではなく、丁子屋が取り扱っていた「梅の雪」と「花橘」を宣伝してはいるものの、構図は池田屋清吉の引札と類似している。しかし、この『処女七種』には、三編上巻の口絵にのみ改刻された異版が存在する。その口絵が図15である。丁子屋版の口絵より目新しさを感じさせる描線で描かれた女性は、池田屋清吉の引札と瓜二つである。効能書きの末尾に「板元 京橋弥左衛門町東側 大しまや伝右衛門述」とあるように、この口絵は丁子屋平兵衛から大島屋伝右衛門へと『処女七種』の版木が移動した後、作成されたものようである。落款はないが、画風からみて絵師は安達吟光であろう。大島屋は前述の明治十三年（一八八〇）刊『春雨日記』初編のほか、明治十五年（一八八二）五月刊の高島藍泉作『赤穂節義録』初編および同十七年（一八八四）十月刊の二編などで吟光を絵師として起用している。『処女七種』の口絵もこれらと同時期に作成されたものと推察される。

以上のように池田屋清吉の引札は、丁子屋平兵衛から版木が移った



図 15 架蔵の大島屋版『処女七種』三編上巻の口絵



図 14 架蔵の丁子屋版『処女七種』三編上巻の口絵

後、大島屋が吟光を起用し新たに作成した『処女七種』三編上巻の口絵を利用して描かれた女性の表情等の細部に注目してみれば、引札と口絵とで同一の版木が用いられていないのは明らかである。とはいえ、口絵の構図をほぼそのまま踏襲しているからには、大島屋と池田屋清吉との間に版元（もしくは貸本問屋）と貸本屋以上の関係を想定できよう。

三、大島屋伝右衛門と池田屋一統

増田コレクションには、池田屋清吉の「御あらゐこ」とともに、処女香が宣伝されている引札も所蔵されている。¹³ 正確な作成時期はわからないが、図9と図10の広告よりも処女香の価格が安いことから、これら二つよりも前に作成されたものである可能性が高い。効能書きの末尾には「為永春水精剤」と記されているが、為永春水は天保十四年（一八四三）にすでに亡くなっている。そのため、文字どおり受け取ればここでの「為永春水」は二世春水こと染崎延房を指しているということになる。しかし、かつて式亭三馬亡き後、息子小三馬が三馬名義で商品を宣伝していた例と同様、知名度・影響力のある初代春水の名をあえて用いているものと思われる。たとえこの「為永春水」が本来は染崎延房を指しているようとも、貸本屋をとおして春水人情本が未だ受容されていた当時において、人々はその名から初代春水をも想起

したことであろう。引札の売弘所には、これまで確認してきた大島屋伝右衛門・池田屋清吉に加え、新たに池田屋利三郎の名がみえる。

架蔵の池田屋清吉旧蔵『大岡政談』村井長庵調合机』巻四には、『近世嶋田一郎実録』をはじめとする諸作品とともに、処女香を宣伝した摺物が附載されている(図16)。「誠光堂述」とある機能書きは、先にみた池田屋清吉の引札および大島屋版『処女七種』三編上巻の口絵とほぼ同文となっている。末尾には売弘所ではなく「東京書林」として、前述の「御あらゐる」の引札と同じく大島屋伝右衛門・池田屋清吉・池田屋利三郎とある。

この池田屋利三郎なる人物は、横山錦柵編『東京商人録』(横浜商人録社、明治十三年(一八八〇)刊)の「貸本商之部」「〇牛込区」に「細工町十六番地 池田利三郎」とみえるように、池田屋清吉と同じ牛込区細工町の貸本屋である。前述した増田コレクション所蔵の処女香の引札にある池田屋清吉の所在地「同所(筆者注、牛込細工町)廿六番地」は、『東京市及接続郡部 地籍台帳』(明治四十五年(一九一二)四月二十五日刊)では「池田利三郎」の所有地となっている。同じく細工町で貸本業を営むだけでなく、池田屋清吉が居住する(もしくはしていた)土地の所有者でもあった利三郎は、彼と血縁関係あるいは別家にあたる人物であるとしか考えられない。同じく架蔵の池田屋清吉旧蔵『大岡政談』村井長庵調合机』巻三に附載された書肆の一覧にも池田屋利三郎の名がみえる(図17)。

近世後期・近代初頭における東西の有力書肆に、大島屋伝右衛門・

池田屋利三郎・池田屋清吉らが肩を並べている。池田屋清吉の部分には「蔵版」ではなく「蔵書」とあることから、これは一般的な売捌書肆の一覧とは異なるものようである。ここにもまた新たな「池田屋」号の書肆「池田屋幸吉」が顔を見せている。

池田屋幸吉は、横山錦柵編『横浜商人録』(横浜商人録社、明治十四年(一八八一)刊)の「書籍商之部 Book Store」「〇横浜区」に「全(筆者注、弁天通四丁目)八十番 池田幸吉」と立項されている書肆で、川井景一著『横浜新誌』初編(明治十年(一八七七)刊)にて紹介されている「中幸」こと中屋幸吉と同一人物である。ほかにも池田屋幸吉は「池田孝吉」「中屋孝吉」等の名も用いている。管見の限りでも最も早い出版物は、明治八年(一八七五)刊の高島藍泉著『一新要文』である。本書の出版人は武田伝右衛門、すなわち大島屋伝右衛門である。池田屋幸吉は「中屋孝吉」名義で発兌書林の一人に数えられている。なお、そのほかの発兌書林は中屋政太郎と森田鉄五郎の二人である。中屋政太郎については未詳だが、同じく「中屋」号を用いていた池田屋幸吉や、横浜の書肆中屋銀次郎らとなんらかの関係下にある者だと思われる。森田鉄五郎はかつて二代目大島屋伝右衛門と同じく丁子屋平兵衛のもとで奉公していた経歴を持つ書肆である。¹⁴『読売新聞』一六〇九号(明治十三年(一八八〇)五月三十日発行)には、「板木摩滅」によるこの『一新要文』の再版が宣伝されている。

高島藍泉著 故佐瀬得所書一新用文

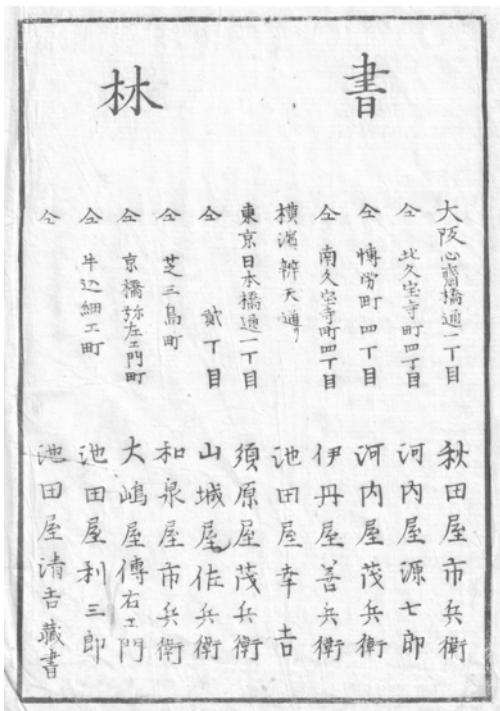


図 17 架蔵の『大岡政談／村井長庵調合机』
巻三にある摺物



図 16 架蔵の『大岡政談／村井長庵調合机』
巻四にある摺物

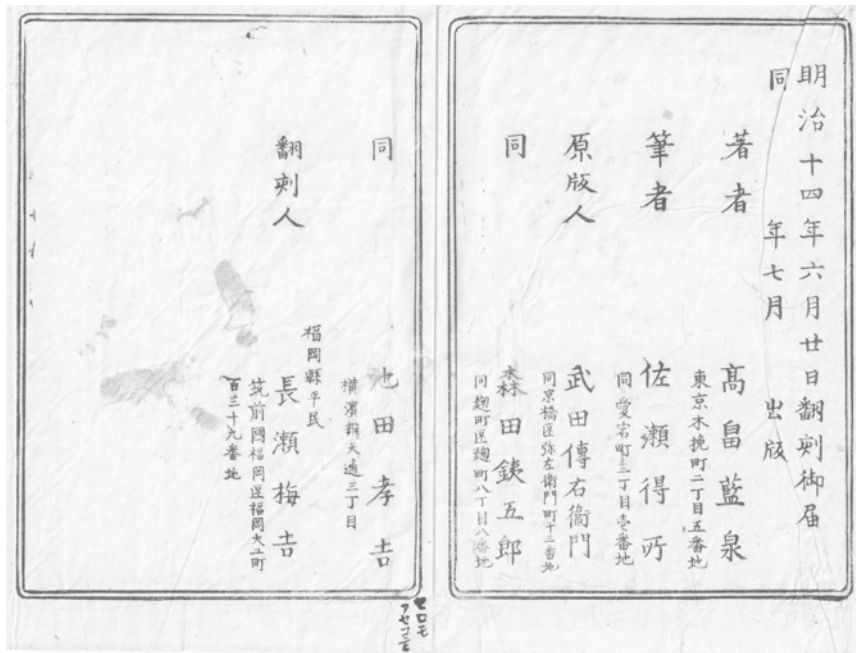


図 18 架蔵する明治十四年版『一新要文』の奥付（見開き）

右ハ盛大販売高にて板木摩滅仕候に付今般再板仕候間諸君何卒御
求を奉願上候也

横浜弁天通り三丁目

池田孝吉

発兌書肆 東京麴町八丁目八番地

森田鉄五郎

同弥左衛門町十三番地

武田伝右衛門

発兌書肆として池田屋幸吉をはじめとする三者が名を連ねている。

求版された後の明治十四年（一八八一）版や明治十九年（一八八六）版の奥付でも、池田屋幸吉・森田鉄五郎・武田伝右衛門の名が原版人としてあげられていることから、この書は当初から三者による相版で刊行されたのだと考えられる（図18）。書籍の出版に携わりはじめた時から、池田屋幸吉は大島屋とすでに結びついていたのである。

『一新要文』以降も池田屋幸吉は出版物を手掛けていたが、その数はそれほど多くない。出版よりもむしろ取次に力を入れていた書肆だったようである。たとえば、売捌書肆に名のみえる書籍には次のようなものがある。¹⁵

『神奈川県地誌提要』

（師岡屋伊兵衛、明治八年十月二十五日版權免許）

『神奈川県地誌略』

（池田真七・高梨栄蔵、明治九年七月二十九日出版）

『華謡新聞』十六号（風香月影社、明治九年十一月十五日出版）

『東京新誌』第五十六号（九春社、明治十年七月二十一日発行）

『東京新誌』第七十九号（九春社、明治十一年一月二十六日発行）
『神奈川県地誌略字引』

（今井徳次郎、明治十二年十月十五日出版）

『小学必用神奈川県違式註違註訳』

（半田研吉、明治十二年十月十六日出版）

『貞烈明治烈女伝』（明治十四年六月二日版權免許）
節義

『暁齋楽画』

（武田伝右衛門・森田鉄五郎、明治十四年七月三日出版）

『諸職雛形北齋図式』初編

（武田伝右衛門、明治十五年四月五日出版）

『英国蝶舞奇縁』初編（桑野鋭、明治十五年五月出版）
情史

『新伝一名智慧の緒環』（丸谷新八、明治十六年三月二十日出版）
秘法

『英国私犯法』（山田喜之助、明治十六年四月出版）

『花街膝栗毛』初編（矢尾弥一郎、明治十六年五月一日出版）

『胡蝶草誌』後編（九春社、明治十六年六月十五日出版）

『東都仙洞余譚』（九春社、明治十六年八月出版）

『勸懲繡像奇談』（九春社、明治十六年十月出版）

『第二世夢想兵衛胡蝶夢物語』前編

（丸谷新八、明治十七年一月出版）

『徴兵必携陸軍刑法治罪法俗解』

（酒井忠誠、明治十七年二月出版）

『情天比翼縁』（丸谷新八、明治十七年二月出版）

『世界周遊旅日記』（穂山徳三郎、明治十七年三月出版）

『人情磯馴草紙』（早川熊吉、明治十八年五月出版）
美談

横浜のみならず、東京の書肆が発行している書籍・雑誌類も取次いでいることから、関東近郊の書籍・雑誌を横浜という立地を活かし、海運によって西国方面へと流通させていたのだと思われる。

このように、処女香に着目することにより、池田屋一統とも称すべき池田屋清吉・池田屋利三郎・池田屋幸吉らと大島屋との結びつきが見えてきた。では最後に、こうした結びつきから想定される書籍流通網について考えていきたい。

近代初頭における大島屋の書籍流通の片鱗を窺わせる資料には、架蔵する明治十四年（一八八二）六月二日版權免許の松村春輔著『貞烈明治烈女伝』の売捌書肆一覧がある。貞烈明
節義

大坂	岡田茂兵衛
同	前川善兵衛
同	前川源七郎
同	大野木市兵衛
同	岡島真七
尾州名古屋	美濃屋代助
信州長野	西澤喜太郎
武州横浜	池田幸吉
甲府	西川庄右衛門

東 京 発 売 書 肆

山中市兵衛
山中孝之助
山中喜太郎
覚張栄次郎
大倉孫兵衛
荒川藤兵衛
水野慶次郎
小林鉄次郎
辻岡文助

まず目を引くのは、岡田茂兵衛・前川善兵衛・前川源七郎・岡島真七ら河内屋一統と、山中市兵衛・山中孝之助・山中喜太郎らの存在であろう。当時においても河内屋一統の勢いは健在で、西日本への流通を考えるならば、まず彼らの助力を得るのが何よりの近道であった。なかでも河内屋真七は、幕末に河内屋佐助から独立した新興の書肆でありながら、全盛期には「大阪書林の雄鎮」と称されるほどの繁栄を誇った存在である。また、山中市兵衛を筆頭に名を連ねる山中姓の者は、みな「和泉屋」号の書肆である。とりわけ和泉屋市兵衛は、往来物等の書籍によって東日本を中心とする地方への流通網を近世後期から整備しており、近代初頭においては支店を多く抱えながら、当時では最大規模の流通網を保持していた。¹⁷このように大島屋は、西日本・東日本における広域的な流通網をすでに保持している書肆との連携を

図る一方で、名古屋の美濃屋代助や長野の小枡屋西澤喜太郎、甲府の西川庄右衛門など地方の流通拠点¹⁸となっていたと思われる書肆とも結びついているのである。こうした流通の片鱗は、仕入印からも確認することができる。

仕入印とは書肆が書籍を仕入れた際に押捺するもので、多くは後ろ見返し裏にみられる。書き添えられた仕入先や仕入値等を示す符牒とともに、書籍がどういったルートで流通していたかを知り手掛かりとなり得る史料である。¹⁹近代初頭における大島屋の出版物に確認できた仕入印は次のとおりである。²⁰

「泉市」（架蔵・松村春輔作『復古夢物語』初編）

「泉市」「蔦伴」（架蔵・高島藍泉著『一新要文』）

「寿々喜」（架蔵・松村春輔作『復古夢物語』初・二編）

「小枡喜」（架蔵・松村春輔作『復古夢物語』初編）

それぞれ「泉市」は和泉屋山中市兵衛、「蔦伴」は蔦屋岩下伴五郎、「寿々喜」は播磨屋鈴木喜右衛門、「小枡喜」は小枡屋西澤喜太郎の仕入印である。確認できた仕入印が僅かではあるものの、『貞烈明治烈女伝』で確認した売弘書肆のもとへ実際に書籍が流通していることがわかる。

以上のように、近代初頭の大島屋は、近世期同様すでに全国的な流通を保持していた書肆との連携を図りながら、書籍を流通させていた。だが、一方で地域の流通拠点的な書肆とも結びついていた点からは、

大手の書肆に依存しない独自の流通網を確立しようとしていた様子が窺える。これまでみてきた池田屋一統との結びつきは、そうした流通網の一つの表れであったのではなからうか。第一章第一節「丁子屋平兵衛の躍進——貸本屋世話役から貸本問屋へ——」でみた丁子屋と江戸近郊の書肆たちのように、大島屋は貸本問屋として貸本に供するための書籍を供給するなかで、池田屋清吉や池田屋利三郎との関係を深めていき、やがて彼らをとおして池田屋幸吉との知遇を得たのである。前述の架蔵する池田屋清吉旧蔵『春風日記』の存在は、こうした様子を何よりも物語るものである。それにより大島屋は、池田屋幸吉を紹介した横浜を起点とする流通網を手中に収めることができたのである。つまり、大島屋と池田屋一統との結びつきは、そのまま具体的な書籍流通の形成過程を物語るものだといえるのである。

おわりに

大島屋伝右衛門と池田屋一統、とりわけ池田屋幸吉との関係を考える上で、その所在地は無関係ではなからう。大島屋の所在地は東京の京橋弥左衛門町。対して池田屋幸吉の所在地は横浜である。この二つの土地は、明治五年（一八七二）九月十二日、新橋・横浜間に開通した日本初の鉄道によって、当時すでに繋がっていた。大島屋の所在地から新橋駅へは二、三町を隔てているにすぎない。鉄道によって東京

から横浜へ、そして横浜から海運で西日本方面へと書籍が流通していくルートをここに想定できる。

処女香から浮かび上がった大島屋と池田屋一統の結びつきは、近代初頭における大島屋の書籍流通のみならず、鉄道を利用した東京・横浜間、また横浜を経て海運によって西日本へといく書籍流通を考える上でも、一つの材料となり得る事例でもあった。

注

- 1 大和博幸「広告からみた近世後期出版ルート考」『國學院大學近世文学会会報』第七号、二〇〇一年三月。同「江戸期広域出版流通の一形態——本の取次と葉の取次の関わり」『國學院雑誌』第一二〇巻第二号、國學院大學、二〇一九年二月、長友千代治「本屋と売葉」『江戸時代の図書流通』思文閣出版、二〇〇二年所収)、鈴木俊幸「近世日本における葉品・小問物の流通と書籍の流通」『書籍流通史料論序説』勉誠出版、二〇一二年所収。初出は二〇〇七年)、同「須原屋茂兵衛の葉商売——引札と広告葉書」『書籍文化史料論』勉誠出版、二〇一九年所収。初出は二〇一七年)など。
- 2 本文は架蔵本による。
- 3 雀泰和「趣向としての広告」『春水人情本の研究——同時代性を中心に』若草書房、二〇一四年所収。初出は二〇一一年)では、為永春水作『春色湊の花』の記述をもとに、梅の雪が春水によって製剤されていたとしている。
- 4 多治比郁夫・佐藤敏江「明治六年の松川半山——河内屋茂兵衛あて書簡と著画刊行年表——」『大阪府立図書館紀要』二十四号、大阪府立中之島図書館、一九八八年三月)内で紹介されている。
- 5 資料番号：二―二〇四。なお、国際日本文化研究センターの宗田文庫図版資料データベースにおいて画像が公開されている。
- 6 名義は「貸本屋磯吉」。
- 7 前田愛「出版社と読者——貸本屋の役割を中心として」『前田愛著作集第二巻 近代読者の成立』筑摩書房、一九八九年所収。初出は一九六一年)。
- 8 本文は神保五弥校『春色恋白波』(古典文庫、一九六七年)による。
- 9 資料番号：一二八八。国文学研究資料館の増田太次郎広告コレクションシヨンドータベース上で画像を確認することができる。
- 10 『日本古典文学大辞典』第五卷(岩波書店、一九八四年)の解説(神保五弥執筆)を参照。
- 11 架蔵の『処女七種』初編下に附載された目録による。なお、この目録については鈴木圭一「資料報告『書林文溪堂蔵販目録』・『東都書林文溪堂蔵販中形絵入よみ本之部目録——増補外題鑑』

- 成立の一過程——』、『読本研究』第四輯下套、広島文教女子大学
 研究出版委員会、一九九〇年六月）に詳しい解説と考察がある。
- 12 東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 市中取締類集 十八』
 （東京大学出版会、一九八八年）所収。
- 13 資料番号：一八七六。こちらも国文学研究資料館の増田太次郎
 広告コレクションデータベース上で画像を確認することができる。
- 14 「明治初年東京書林評判記」、『古本屋』第三号、荒木伊兵衛書
 店、一九二七年十一月）の丁子屋平兵衛の項目に「大島屋伝兵衛
 及麴町古本屋森田鉄五郎其外丁忠、丁善皆こゝの出身也」という
 記述による。
- 15 鈴木俊幸編『近世日本における書籍・摺物の流通と享受につい
 ての研究——書籍流通末端業者の網羅的調査を中心に』（一九九
 九年）では「中屋孝吉」として立項され、森田友昇著『横浜地名
 案内』（明治八年跋）をはじめ、売捌に名のみえる書籍が紹介さ
 れている。本稿ではそちらと重複しないもののみ取り上げる。
- 16 『玉淵叢話』中巻（東京開成館・大阪開成館、一九〇二年）。
- 17 鈴木俊幸著『江戸の読書熱 自学する読者と書籍流通』（平凡
 社、二〇〇七年）および同著『近世読者とそのゆくえ 読書と書
 籍流通の近世・近代』（勉誠出版、二〇一八年）による。
- 18 小枅屋西澤喜太郎については、鈴木俊幸著『信州の本屋と出版
 江戸から明治へ』（高美書店、二〇一八年）に詳しい。
- 19 鈴木俊幸「仕入印と符牒」、『書籍流通史料論序説』、勉誠出版、
 二〇一二年所収。初出は二〇〇〇年）による。
- 20 架蔵本に押捺された仕入印は、すべて国文学研究資料館の蔵
 書印データベース ([http://basel.nijl.ac.jp/~collectors_](http://basel.nijl.ac.jp/~collectors_seal/)
[seal/](http://basel.nijl.ac.jp/~collectors_seal/)) で公開されている。

第四節 黎明期の初代大川屋錠吉

はじめに

第三章第三節「近代金沢における書籍受容と春田書店」で取り上げた春田書店に顕著なように、明治も後半に差し掛かるころには、貸本屋の蔵書にはもはや近世の面影がみられなくなる。そこにあるのは、貸本屋の新しい姿であった。

新たに蔵書を中心となったのは、講談本や小説類である。特に前者は近世期の読本・滑稽本・人情本と同様、貸本向けに出版されていたといっても過言ではない書籍である。このような貸本向けの書籍を出版・蔵版し、それらを卸す貸本問屋は、明治になっても営業を続けるが、やがては新興の書肆にその地位を譲ることとなる。そうした新興書肆のなかでも、出版点数や活動面で抜きん出ていたのは、聚栄堂大川屋錠吉（後の大川屋書店）であった。

これまでも前田愛氏¹や柴野京子氏²の研究のなかで大川屋は取り上げられているが、いずれもその実態を明らかにできていたとは言い難い。新たに貸本屋の蔵書を中心となった講談本の出版と流通、ひいてはそ

の受容への理解を深めるためにも、大川屋の実態解明は急務であろう。そこで、本稿では営業の基盤を築き上げた初代大川屋錠吉に着目する。そして、その黎明期の動向から、大川屋が貸本問屋として躍進できた要因を明らかにしていく。

一、貸本屋としての大川屋

大正十五年（一九二六）三月六日、初代大川屋錠吉（以下、大川屋）は脳溢血のため亡くなった。享年八十一歳。同月十一日の『読売新聞』朝刊には、次のような訃報が掲載された。

大川屋主人逝く

東京書店界屈指の老舗として重きをなしている浅草区三好町大川屋の主人大川屋錠吉氏は去六日脳溢血で逝去八日根岸西蔵寺で葬儀が行はれた享年八十一歳、誠に天寿を完うしたもの、出版界に於

ける業績も前後五十年の久しきに亘り其間東京地本彫画営業組合の評議員東京出籍出版業者組合の協議員、東京書籍商組合の評議員等に重任し斯界の巨頭と仰がれ巨万の資産を興した弘化三年六月武州入間郡横沼村の生れで十二歳初て江戸に出た時には書林浅倉屋久兵衛方の貸本小僧をしていたが勤続十年独立して深川に小さな貸本屋を開業したのが出世の最初で正に立志伝中の人物であつた

ここに記される華々しい経歴は『東京書籍商組合史及組合員概歴』³から、「斯界の巨頭と仰がれ巨万の資産を興した」活躍ぶりについては橋本求著『日本出版販売史』⁴や『全国出版物卸商業協同組合三十年の歩み』⁵、また誠文堂新光社の小川菊松⁶や大東館の藤井誠治郎⁷、甥にあたる集文堂の大川義雄⁸ら書籍業界の者による回想などからそれぞれ窺い知ることができる。

『東京書籍商組合史及組合員概歴』(以下、『概歴』)は、この訃報だけでなく、前述の前田氏や柴野氏⁹に加え事典類¹⁰も参照している基本的な資料である。まずは『概歴』をもとに大川屋の経歴を確認しておく。

大川屋 大川錠吉 初代(弘化三年六月九日生)東京市浅草区三好町七番地 創業 慶応四年八月二十三日
生国ハ武蔵入間郡横沼村ニシテ、幼ニシテ父ニ從ヒ江戸ニ出デ、十二歳ニシテ書店浅倉屋久兵衛ノ店員トナリ、貸本部ニ勤続スルコト十年、慶応四年八月独立シテ深川西町ニ貸本業ヲ営ム。明治二年現在地ニ移転シ、同十八年ニ至リ貸本業ヲ廃シ書籍出版及取

次販売ヲ開始ス。

明治二十五年以降三十一年迄東京地本彫画営業組合ノ評議員ニ当選シ、翌三十二年ヨリ今日迄同頭取ニ就任ス。明治二十七年及三十四年ニ東京書籍出版業者組合ノ協議員ニ当選シ、同三十五年ヨリ今日迄東京書籍商組合ノ評議員ニ当選ス。別ニ聚栄堂ノ商号ヲ併用ス。

父に連れられ江戸へ出てきた十二歳の大川屋は、書肆浅倉屋吉田久兵衛のもとで奉公することとなった。浅倉屋は「浅倉屋書店」の名で現在も営業を続けている古本業界の老舗であり、その創業は貞享・元禄年間と伝えられている。大川屋が奉公していたのは、文積と号した八代目久兵衛の時代であった。¹¹「貸本部ニ勤続スルコト十年」とあるように、浅倉屋は古本業のみならず貸本業、それに加えて出版業もこなっている。貸本業については史料や記録が残っておらず不明な点が多いものの、木更津市立図書館蔵『真書太閤記』巻十九・二十に押捺された貸本印(「浅草東仲浅倉」)から、その営業時期は浅草東仲町に店を構えていたころであつたと考えられる。

浅倉屋貸本部での奉公後、独立し深川で貸本屋として歩み始めたのが、大川屋の書肆としての第一歩である。しかしながら、この深川時代は一年半ほどと短く、すぐに浅草三好町へと移っている。三好町移転後の大川屋は、往時の貸本屋を偲ぶ回想に名をみせるほど奮っていた。たとえば、坪内逍遙は「東京の貸本屋で、明治以後に名を知られ



図 20 大川屋の貸本印
(架蔵『天竺得瓶／仙蛙奇録』卷之三)



図 19 大川屋の票
(架蔵『天竺得瓶／仙蛙奇録』卷之三)

てみた主なものは、先づ、芝の長門屋、本所相生町の三又、牛込山伏町の池清、聖堂脇の伊勢屋、市ヶ谷の村田、浅草の大河屋(マユ)など¹²としている。また、俳人岡野知十も「本所の上総屋、浅草の大川屋、牛込の池田屋これなんか先づ貸本屋として大きくやつてゐた店だらう」とその名をあげている。¹³

鈴木圭一氏は、所蔵する大川屋旧蔵本『実生儀談』『元正間記』『花筐』『処女七種』『大岡仁政録』『花曆封じ文』を紹介し、大川屋の「出版物および商法も貸本屋としての実地が活かされている」と指摘している。¹⁴ 鈴木氏所蔵本によれば、大川屋は自身の蔵書に「大川屋錠吉」もしくは「本錠」という貸本印を捺し、書籍の表紙に「浅草三好町／三好町／大川屋錠吉」と「亀印」あるいは「梅印」の字が印刷された票を貼付している。架蔵する為永春水作『天竺得瓶仙蛙奇録』卷之三にも、「浅草三好町／三好町／大川屋錠吉」の票(図19)と「本錠」印(図20)を確認できる。架蔵本に貼付された票には「鶴印」と印刷されている。旧蔵本からみる限り、大川屋は鶴亀や松竹梅といった分類のもと、読本・人情本・実録など近世期に出版もしくは筆写されたと思われる蔵書を整理している。¹⁵ この時期の大川屋は、牛込の池田屋清吉同様、昔ながらの背負いの貸本屋であったという。¹⁶ 蔵書内容だけでなく営業形態も旧来の貸本屋そのものである。現時点で大川屋旧蔵の講談本や小説類を確認できていないことから、おそらくこうした形の営業は貸本業を廃するまで変わらなかったものと思われる。

『概歴』によれば、大川屋は明治十八年(一八八五)に貸本屋から

「書籍出版及販売取次」に転じたとあるが、この記述については検討を要する。『商人東京買物独案内』(上原東一郎、明治二十三年(一八九九〇)刊)で「種史小説出版販売所」と紹介されていることから、確かに明治二十三年の段階で大川屋は「書籍出版及販売取次」を始めていることがわかる。管見の限りでは、明治十八年ごろからボール表紙本を中心とする書籍の売捌書肆として、大川屋の名は散見するようになる。明治十年代後半から次第に出版・販売・取次へ参入していったのである。だが一方で、『日本紳士録』第一版(交詢社、明治二十二年(一八九九)刊)や同第二版(交詢社、同二十五年(一八九二)刊)、賀集三平編『東京諸營業員録』(賀集三平、同二十七年(一八九四)刊)では、いずれも大川屋を「貸本屋」あるいは「貸本商」としている。また、論拠は不明ながら沓掛伊左吉氏も「大川貸本店は、貸本のかたわら軍記、実録物、通俗小説の出版を兼ねながら、明治二十四、五年頃には貸本業を切り捨てて、出版屋へ転業し、自家刊行書をもって貸本問屋として大をなした」と述べている。¹⁷大川屋は書籍の出版・販売・取次をしながらも、しばらくの間は貸本業を続けていたのである。『日本紳士録』第三版(交詢社、明治二十九年(一八九六)刊)で「書籍商」とされて以降は「貸本屋(貸本商)」と記されなくなるため、貸本業を廃したのはおそらく明治二十七、八年ごろであったと考えられる。

第二章第三節「初代大川屋錠吉出版書目年表稿」において「再版」の語を奥付に有する書籍がみられるように、明治二十年代の大川屋は他書肆からの求版本を中心に出版活動を精力的におこなっている。そ

うした活動の陰で、貸本業が継続されていた点は大川屋を考える上で重要である。前述するような貸本業界の変容の一部始終を、大川屋は出版・販売・取次としてだけでなく、一貸本屋として目の当たりにしていたのである。書籍を供給する側・供給される側という二つの視点を持ち合わせていた大川屋は、日々刻々と変わりゆく世の中で、どのような書籍に需要があるかをいち早く知り、それらを供給することができたと考えられる。これは貸本問屋として躍進を遂げられた一つの要因であろう。

二、明治十年代の出版物と周辺人物

貸本屋を営みながら、大川屋は出版業へと乗り出していく。その時期は『概歴』記載の明治十八年よりも早い。架蔵する著編者不詳の『敵討鶯塚美談』(大川錠吉、明治十九年(一八九六)刊)には、大川屋の蔵版目録が附載されている(図21)。本書は明治十九年二月廿五日出版御届、同年四月刻成の水野幾太郎版『今古実録敵討鶯塚美談』の口絵をそのままに、異なる序文を附し本文を全て組み直した求版本である。蔵版目録記載の『集古画譜』『女用文宝箱』『当世女用文』『早引塵劫記』『売買往来』『消息往来』『十五いろは』『紋帳雛形』『一寸用文』『手品種本』『富士見十三州輿地全図』『日本道中細見図』『日本府県全図』『日本之図』『東京図』東京『東京国分全図』は、いずれも明治十年代に刊行さ

古歌集古苗譜一冊	一寸用文	一冊
女用文寶箱	全	年出種本
當世女用文	全	〔東京〕三洲海運堂
早割塵劫記	全	日本道中細見書
賣買往來	全	日本府縣全書
消息往來	全	日本一冊
十五のろは	全	東京圖
致帳雜記	全	〔東京〕全書

図 21 架蔵する『敵討鶯塚美談』附載の目録

れた、大川屋が早い段階で携わった出版物である。

そのほかの明治十年代の出版物を第二章第三節「初代大川屋錠吉出版書目年表稿」で確認してみると、単独ではないにせよ、明治十二年（一八七九）からすでに大川屋は出版に携わっていることがわかる。概してこれら明治十年代の出版物には相版と求版、あるいは求版と思しきものが多い。後半には地図類の出版が目立つが、これらも求版だと考えられる。出版に関わる人物に注目してみると、武田伝右衛門・瀨山直次（治）郎・高梨弥三郎らの名が頻出している。次にこれらの人物を取り上げるなかで、明治十年代における大川屋の動向を探ってみよう。

まずは高梨弥三郎についてみていく。先の一覧で高梨弥三郎の名が最初に見えるのは、大川屋が武田伝右衛門との相版で出版した松村春輔著『春風日記』初編の発売書肆としてである。所在地は浅草区新福井町。前田健次郎編『郵便葉書一寸用文』（高梨弥三郎、明治十二年〔一八七九〕刊）の見返しに、「明十堂」という堂号を確認できることから、その創業は明治十年（一八七七）だと思われる。なお、後にこの堂号は「十」を「輯」に改めた「明輯堂」となっている。明治十四年には新たに設立された東京書林組合に加盟していることを確認できる。¹⁸

高梨弥三郎の早期の出版物は、明治十一年（一八七八）刊の『洋算独稽古』である。その後、明治二十年（一八八七）ごろまで出版を続けているが、その数はそれほど多くない。明治二十六年（一八九三）

刊の戸川耕城著『生涯安泰安全儲蓄法』は、発行所が「高梨東神堂」、発行者が「高梨弥三郎」だが、所在地はいずれも「神戸市下山手通七丁目二百八十六番地」となっている。この神戸の高梨弥三郎が同一人物であるとするならば、業界内で「神戸落ち」と称されているもの早い例であるかもしれない。¹⁹ 仮にここでは両者を同一人物とする。その後、代がかわった後も神戸で営業を続けていたようだが、大正十四年（一九二五）には閉店している。²⁰

大川屋は明治十四年（一八八一）に岡田霞船編『明治都鄙人名録』を刊行する。その売捌書肆一覧には七十七もの書肆が列挙されているが、末尾に名のみえるのは高梨弥三郎である。同年に出版された岡田良策編『近世名婦百人撰』の売捌には山中市兵衛・水野慶次郎・石川治兵衛・山口藤兵衛・山中孝之助・山中喜太郎・稲田佐兵衛など当時の東京における有力書肆が名を連ねているが、こちらも末尾は高梨弥三郎となっている。大川屋は明治十四年の段階では東京書林組合・東京地本錦絵営業者組合のいずれにも加盟していない。そのため、当初流通等が高梨弥三郎になんらかの形で頼っていた可能性が考えられる。ただ明治十五年（一八八二）一月十八日の『読売新聞』二〇九四号に掲載された『近世名婦百人撰』の広告に「但遠国より御注文ハ定価の金御届次第郵送致候事」、また同年三月三日の同紙二一三一号掲載『明治都鄙人名録』の広告に「但本編出来の上御求めの君ハ定価金三十五銭御届次第郵税持にて御通送申上候也」とあるように、大川屋は郵便を使って遠国の顧客と結びついていた。必ずしも高梨弥三郎や

ほかの有力書肆に頼らない流通網も保持していたようであるが詳細はわかっていない。

さて、大川屋は高梨弥三郎が刊行した書籍の蔵版などを受け継いでいる。たとえば、武田伝右衛門が出版人、高梨弥三郎が発売人として明治十四年（一八八一）に刊行された高島藍泉編『近世四大家画譜』には、発売人の部分だけが高梨弥三郎の名義に埋木されている版がみられる（図22）。また、福城駒太郎編『和漢読史玉篇』はもとも高梨弥三郎が出版したものであるが、後に大川屋が『新撰明治玉篇』と改題し、明治十九年（一八八六）に刊行している。このように、大川屋は発売人もしくは出版人が高梨弥三郎であった書籍の権利を後に得ている。おそらくは高梨弥三郎が何らかの理由により神戸へ移る際に、彼の持つ書籍の一部を高梨弥三郎が求版、もしくは高梨自身から譲渡されたのだと思われる。これも偏に両者が親しい間柄にあったが故であろう。

次に瀬山直次郎についてみていく。瀬山直次郎が大川屋の出版物に名をみせるのは、明治十二年（一八七九）刊の井沢保治編『対山画譜』の発売人としてである。所在地は大川屋や高梨弥三郎と同じ浅草区の蔵前片町。明治十四年（一八八一）時、東京書林組合に加盟していることを確認できる。瀬山直次郎は『対山画譜』や『漢画指南』初・二集など美術関係の書籍を多く手掛けているが、その本業はセドリであった。『東京古書組合五十年史』は、当時目利きとして知られていた求古堂松崎半造の弟であり、明治十年代に名の知られていたセドリとして瀬山直次郎を紹介している。²¹ このセドリについては、小林善八著『日

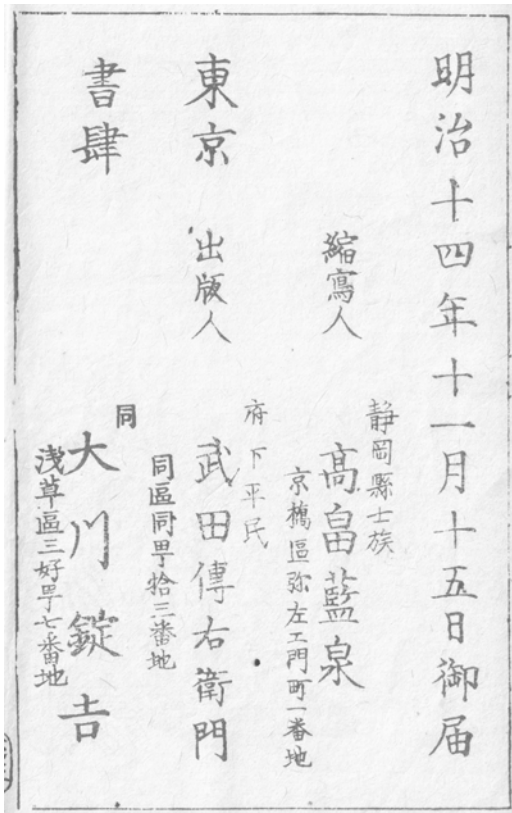


図 22 埋木された『近世四大家画譜』の奥付（架蔵）

本出版文化史』に詳しい説明がある。²²

此年、警視庁は古物商取締令を發布された、その当時の書店は多く新古書を取扱った。古本商の取締を銀座三丁目の稲田政吉が指定され取扱ふ事になり、同店にて古物商の鑑札を出した、手数料は一件式拾銭。この古物商の取締が頗る嚴重になつたので、新古書店漸次分離し専門に傾いた。古本仲買人は団体をつくる事になり、長尾文蔵、大屋房太郎等が幹事となり三十人ほどの一団となつた、この古本仲買人を「せどり」と云つた。この一団には仁義があつて下駄は履かず泥鯔草履ばきで風呂敷を背負ひ、先に店に入つた者が風呂敷を開けぬ内は、後から這入つた者は決して開けぬと言う習慣であつた。その店先へは腰を下さずかぐんで商ひをした、この糶取の事を俗に風呂敷と云つた。

古本仲買人の別称が「セドリ」であること、そのセドリには団体、つまり組合があつたこととその商習慣を知ることができる。また、反町茂雄は端的にセドリを「一般のお客は相手とせず、同業者間での売買による利鞘かせぎを主な仕事とする人々」とし、彼らが日本橋・京橋・浅草広小路の古本屋を相手に営業していたとしている。²³

浅倉屋は古物商条例発布後、結成された仲買、つまりはセドリの組合の幹事の一人として、瀬山直次郎の名前をあげている。²⁴ この組合の設立に関する文書は現代まで残されている。橋口候之介氏が紹介している文書（大屋書房瀬瀬公夫氏所蔵）がそれである。

古本商仲買設立

古本仲買ノ者は迄数年御店方ノ御蔭ヲ以テ渡世仕居候処、今般売買御規則厳重ノ御布告ニ付、町名番地不明ニテハ御取引ニ御疑念有之候ト存ジ、左ノ人名協議ノ上仲買同盟取結、町名番地相認メ差上置キ不都合無之様売買仕候。

一品物御買入ニ相成候節ハ必ず御帳面へ目録相認メ、左ノ印章ヲ以テ証ト仕候。右品物ニ付、万一苦情有之候節ハ御報知次第、本人罷出御迷惑無之様為致可申候間、是迄通御疑念ナク御取引願上候也。

從二月至四月々番 長尾銀次郎

幹 横尾卯之助

從五月至八月々番 小林米造

事 岩田七五郎

從九月至十二月々番 高木和助

瀬山直次郎

結 合 人 名

神田五軒町 精板会社林安之助印行²⁵

古物商取締令により、売買規則が厳しくなり、仲買人の所在する町名番地が不明では認められないので、長尾銀次郎・横尾卯之助・小林米造・岩田七五郎・高木和助・瀬山直次郎の六人で協議の上、仲買同盟（セドリの組合）を取り結び、その同盟に所属する者たちの町名番

地を認め、不都合なく取引できるようにしたという。幹事は三期にわけて交代で当番を担っていたようで、瀬山直次郎は九月から十二月までを担当している。

このように、瀬山直次郎は美術関係の書籍を出版するだけでなく、組合の幹事を務めるほどのセドリであった。なぜセドリの瀬山直次郎と大川屋が結びついたのか、その理由は出版物からは浮かび上がってこない。だが、後述する武田伝右衛門が両者の間に介在していたのだと考えられる。

以上みてきた高梨弥三郎・瀬山直次郎の両人は、いずれも浅草区の者で、大川屋からすれば近隣にいた同業者ということになる。大川屋の当初の活動が、同じ浅草区の書籍業者によって支えられていた様子をここに認めることができよう。しかしながら、先の明治十年代の出版物の一覧で際立っていたのは武田伝右衛門という存在であった。次にこの人物に着目してみたい。

三、大島屋武田伝右衛門との関係をめぐって

武田伝右衛門は、第一章第二節「中本」受容と大島屋伝右衛門」で取り上げた文永堂大島屋伝右衛門である。以下に歴代伝右衛門の略歴を再掲する。

初 代：天保の改革で処罰を受ける。安政三年没。

和漢書籍專賣古本買入所

發賣 書林

東京本郷區本柳春木町三百十五番

武田傳右衛門

關濟單區三好町七番地

大川 銳吉

久モト

図 23 「和漢書籍專賣古本買入所」の広告（架蔵『人相独稽古』下巻）

附番立見屋本古國全本日

●次第不同●著作の年月、著作者未詳。これを基礎に毎年訂正いたします（其中堂書賣書目廿七號附録）	大關東京	文求堂別格京城金氏	●明治四十一年一月一日
	大關東京	文求堂別格京城金氏	
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏
大關東京	文求堂別格京城金氏	大關東京	文求堂別格京城金氏

（宿市）方語世

東京東京名京都大東
東京京都都都京京
伊大土下 山伊大
藤福矢勝村源茂丑屋

明治四十一年の日本全国古本屋見立番附

図 24 「明治四十一年の日本全国古本屋見立番付」（『古本屋』五号）

二代目：幼名「安次郎」。かつて丁子屋平兵衛方で奉公。初代の死没により、安政三年に二代目伝右衛門となる。大正九年七月没。

三代目：通称「政吉（正吉）」。二代目伝右衛門の長子。浅倉屋久兵衛方で奉公の後、三代目伝右衛門となる。明治年間に死没か。

明治十年代には、二代目と三代目が存命していた。このうち、特に大川屋と関わりが深いのは、同じく浅倉屋で奉公していた経歴を持つ武田政吉こと三代目伝右衛門である。²⁶

多くの書籍を共に出版している大川屋と三代目伝右衛門（以下、大島屋）だが、明治二十年以降も両者は近い間柄にあったようである。たとえば、「明治廿四年十月廿五日印刷／全年十月廿七日出生」の奥付を持つ求版本『風来六々部集後編』は、著作者が「武田正吉」、発行者兼印刷人が「武田伝右工門」となっている。前者が三代目、後者がその父二代目である。なお、同様の奥付は『明治玉簾集』を改題改修した『俳諧新五百題』にもみえる。おそらく、大島屋もしくは大川屋が求版した書籍に附されたのが、この奥付なのであろう。「明治十五年八月廿八日板権御届／同廿九年十月二日求版」の奥付を持つ松岡正盛画『漢画独楽譜』が示すとおり、少なくとも明治二十九年まで両者のこうした関係性は継続している。

図23は、架蔵する『人相独稽古』下巻に附載された広告である。こ

ちらの広告も先ほどの奥付同様、求版された書籍に附載されたものだと考えられるが、「和漢書籍専売古本買入所」とある点が興味深い。この広告は『人相独稽古』のほかにも、次に書名をあげる書籍の後印本にもみられる。

中田潜竜子編『楽焼秘囊』（元文元年〈一七三六〉刊）

墨憨齋編『笑府』（明和五年〈一七六八〉刊）

馮夢竜撰『刪笑府』（安永五年〈一七七六〉刊）

『老子釋解』（寛政九年〈一七九七〉刊）

『四季雅筵插花衣之香』（寛政十一年〈一七九九〉）

池永栄春撰『訂正篆書字引』（享和二年〈一八〇二〉序）

※もとの書名は『聯珠篆文』

石川雅望著『都の手ぶり』（文化五年〈一八〇八〉刊）

『米庵墨談』正編（文化九年〈一八〇九〉刊）

『蕪村翁文集』（文化十三年〈一八一六〉刊）

『米庵墨談』続編（文政十年〈一八二七〉刊）

藤原貞幹著『神代宝器抄』（嘉永二年〈一八四九〉刊）

萩原広道著『弓爾乎波係辞辨』（同年刊）

『応挙画譜』（嘉永三年〈一八五〇〉刊）

『岩陰存稿』（明治三年〈一八七〇〉刊）

郭象注『莊子南華真経』（刊年不詳）

村上五雄校『人相独稽古』（刊年不詳）

石梁撰『草字彙』（刊年不詳）

いずれも大島屋もしくは大川屋、あるいは両者が資金を出し求版した書籍なのだと思う。前田愛氏も指摘しているように、明治三十年（一八九七）の時点で大川屋は春陽堂に次ぐ出版点数を誇ったが、その大半がほかの版元から求版したものであった。²⁷ なお出版点数の多さは、第三章に附録した「参考」第二十三回大川屋出版小説総目録（明治三十二年八月改正増訂）から窺い知ることができる。求版に必要な資金は、こうした大島屋とともにまだまだ需要のある古い版を入手し、それらを販売して得た利益であったのかもしれない。先の広告にあった「和漢書籍専売古本買入所」の表記からも明らかのように、大川屋と大島屋の両者は古本業もおこなっていた。とりわけ、大島屋は古本業界では比較的大きな存在であった。

全国でも有数の古本屋を紹介した「明治四十一年の日本全国古本屋見立番付」²⁸（図24）のなかで、大島屋は「世話方（市宿）」に位置づけられている。この「世話方（市宿）」とは、丸括弧内の「市宿」が示すとおり、当時催されていた古書の市の会主を指している。明治期の古書市については橋口侯之介氏の解説が参考になる。

島屋の市に活気がなくなつたこともあつて、田中菊雄らは別に和本を扱う古書市を開設する。そのひとつが神田・青柳亭の市である。明治二十年代にはあつた。田中菊雄は屋号を田菊書店といひ、万延元年（一八六〇）生まれで、セドリで生計を立てていた。

明治十年頃、吉川半七（現吉川弘文館）の店で月に一回定市を開くようになったときの会主となつた。この市は長続きせず、その後、いくつかの市を作つては廃止するという変転を経て、伊藤福太郎、武田伝右衛門（大島屋）、土井勝吉と四人で青柳亭に市を開いたのである。これは盛んな市になつた。大量の売り立てなどがあると徹夜で続けたというエピソードがあるくらいである。²⁹

大島屋は青柳亭に新たな古書の市を開くとともに、その会主となつたようなのである。ちなみにこの青柳亭は集会貸席であり、古本の市以外にも諸商人の寄合がおこなわれていた場所であつた。³⁰

南陽堂深沢良太郎は「旧派のセドリの親方があつて組合があつた。田中さんは話さなかつたけれども、連名帳があつて皆セドリには判があつて、同じやうな判をいくつも拵えてあつたものです」と回想している。³¹「セドリの親方」にあたるのが、瀬山直次郎をはじめとする先ほどの六人である。連名帳は、橋口侯之介氏が紹介している三十二名の一覧を指していると思われる。³² その京橋区の項には、「武田政吉／弥左衛門町十三番地」とある。つまり大島屋は、青柳亭で催される市を設立し、その会主となるばかりでなく、セドリの組合にも属する者であつたのである。組合の一覧には、もちろん幹事を務めていた瀬山直次郎の名もみえる。ここから、大川屋と瀬山直次郎との間を取り持つたのが、自身もセドリであり、組合にも属していた大島屋であつたのだと考えられる。

大島屋は瀬山直次郎との間を取り持っただけでなく、大川屋のその後の経営方針にも影響を与えていると思われる。

「全国の貸本屋や絵草子屋等が華客」とされる大川屋同様、大島屋も近世後期から中本（滑稽本や人情本）を主に取り扱う貸本問屋であった。同じく浅倉屋で奉公したのみならず、その後も共に書籍を出版・求版していた大島屋に、大川屋が影響を受けたとしても不思議ではない。つまり、自身の貸本屋としての経験、そして身近な大島屋の影響によって、大川屋は貸本問屋としての道を歩み始めたのだと考えられるのである。

大正二年（一九一三）刊の石井研堂著『独立自営営業開始案内』第二編では、貸本に供する東京出来の講談本の仕入れ先として、大川屋が筆頭にあげられている。明治末年から大正にかけての時代において、大川屋は東京を代表する貸本問屋へと成長を遂げているのである。こうした躍進の要因の一つが、長らく書籍の出版・取次・販売と並行して続けられていた貸本業であったことはすでに述べた。だが、身近に大島屋という存在がなければ、そもそも大川屋は貸本問屋になっただけで済んだかもしれない。大島屋がいたからこそ、大川屋は貸本問屋としての道を歩み、やがては「斯界の巨頭と仰がれ巨万の資産を興」す活躍ができたのである。

おわりに

初代大川屋錠吉にとつての黎明期は、貸本業に勤しみながら、同じ浅草区の書肆高梨弥三郎や瀬山直次郎、同門の三代目大島屋伝右衛門と協力し合い、力を蓄えていた時期であったといえる。後の成功は、この時期を経なければあり得なかった。明治二十七、八年ごろまで続けられた貸本業と、三代目伝右衛門との関係および彼から受けた影響の大きさは計り知れない。

前述のとおり、明治も後半に差し掛かるころの貸本屋には、もう近世の面影は残されていない。しかしながら、彼らの営業は大川屋という近世的な土壌の中で生まれ、成長した書肆によって支えられていたのであった。

丁子屋平兵衛・大島屋伝右衛門の後を受け、大川屋は近代の貸本文化を下支えする存在となっていたのである。

注

- 1 前田愛「明治初期戯作出版の動向——近世出版機構の解体——」
〔前田愛著作集 第二巻 近代読者の成立〕筑摩書房、一九八九年所収。初出は一九六三・六四年。
- 2 柴野京子「赤本の近代」〔書棚と平台 出版流通というメディア
ア〕弘文堂、二〇〇九年所収。初出は二〇〇七年。

- 3 東京書籍商組合編『東京書籍商組合史及組合員概歴』（東京書籍商組合、一九二二年）一一二頁。
- 4 講談社、一九六四年。三二一―三三三頁。
- 5 全国出版物卸商業協同組合、一九八一年。三二一―三三三頁および三七頁。
- 6 小川菊松著『出版興亡五十年』（誠文堂新光社、一九五三年）一八四―一八七頁。
- 7 『回顧五十年 藤井誠治郎遺稿』（藤井誠治郎遺稿刊行会、一九六二年）一三〇―一三二頁。
- 8 大川義雄「大川文庫」三〇〇点の歴史（尾崎秀樹・宗武朝子編『日本の書店百年』青英舎、一九九一年所収）。
- 9 前田・柴野両氏は特に注記していないものの、大川屋の経歴に關する記述は明らかに『概歴』を踏まえている。
- 10 たとえば、稲岡勝監修『出版文化人物事典』（日外アソシエーツ、二〇一三年）など。
- 11 浅倉屋の創業年および八代目久兵衛については浅倉屋吉田久兵衛「和本屋生活半世紀の思い出」（反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』八木書店、一九九〇年所収）を参照。
- 12 坪内逍遙著『少年時に觀た歌舞伎の追憶』（日本演芸合資会社出版部、一九二〇年）一〇七頁。
- 13 「紙魚の跡 貸本屋の巻（一）」（『読売新聞』一八四九〇号、一九二八年八月二十一日）。
- 14 鈴木圭一「明治期二題」（『書籍文化史』二、二〇〇一年一月）。
- 15 鈴木俊幸氏所蔵の松本万年著『田舎繁昌記』二編には、「本錠」印に加えて「大イ印」という貸本印がみられる。大川屋は鶴亀や松竹梅のほか、イロハによる分類も用いていたようである。
- 16 注8前掲書のなかで「その貸本屋というのは昔ながらの運びの貸本屋ですか、それとも店を開いた形で」という問いに対し、甥の大川義雄は「運びらしいです」と答えている。
- 17 沓掛伊左吉「貸本屋の歴史」（『沓掛伊左吉著作集 書物文化史考』八潮書店、一九八二年所収。初出は一九七一年）。
- 18 弥吉光長「明治初年の出版団体（その一）——書物問屋仲間から東京書籍出版業者組合へ——」（『弥吉光長著作集四 明治時代の出版と人』日外アソシエーツ、一九八二年所収。初出は一九五三年）を参照。なお、表記は「高梨孫三郎」となっている。以下、東京書林組合および東京地本錦絵営業業者組合の加入者については本稿を参照。
- 19 注7前掲書二二頁に「小川氏（筆者注 小川菊松）の次に至誠堂から独立し『主婦之友』の創刊当時一手扱いをやった、止善堂原猛君が、失敗して神戸落ちした時」とある。
- 20 出版タイムス社編『日本出版大観』（出版タイムス社、一九三一年）の大阪盛文館支店の項に「大正十四年閉店した高梨熊太郎

氏経営の店舗を買収し開設された」とある。

21 東京都古書籍商業協同組合編『東京古書組合五十年史』（東京古書組合、一九七四年。五頁。

22 日本出版文化史刊行会、一九三八年）八八五頁。

23 反町茂雄著『蒐書家・業界・業界人』（八木書店、一九八四年）二三五頁。

24 注11前掲書に「古物商条例発布後、仲買の人達が申し合わせ、残らず同じ小判形の印章に苗字を入れて、品物取引の時はこれを

判取帳へ押す事になりました。この時には結合の人名三十二人、

幹事が長尾銀次郎さん・横尾卯之助さん・小林米蔵さん・岩田七五郎さん・高木和助さん・瀬山直次郎さんの六人でした」とある。

25 橋口侯之介著『江戸の古本屋 近世書肆のしごと』（平凡社、二〇一八年）。三二二頁。

26 大川屋は大島屋が製剤・販売していた売薬「処女香」の売弘所であった可能性がある。これも両者の関わりの深さを示す一例と

いえよう。なお、処女香については第一章第三節「大島屋伝右衛門と池田屋一統——売薬「処女香」を端緒として——」を参照の

こと。

27 注1前掲論文。

28 『古本屋』五号（荒木伊兵衛書店、一九二八年五月）所収。この番付は、もともと明治四十一年の「其中堂書賈目録」の附録で

ある。しかしながら、現在目録および番付そのものの所在を確認することはできていない。

29 注25前掲書。

30 金子春夢編『東京新繁昌記』（東京新繁昌記発行所、一九九七年）に貸席として「○青柳、○福田屋、○相模屋」の三つをあげ、

「共に集会貸席にて、外神田仲町大時計の前にあり、書生、商人の寄合多し、席料一日六十銭以上」と解説している。

31 南陽堂深沢良太郎「明治大正期のセドリについて その二、洋本屋の巻」（反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』八木書店、一九九〇年所収）。

32 注25前掲書。三二四頁。

33 注6前掲書。一八四頁。

第二章

貸本問屋の出版書目

第一節 丁子屋平兵衛出版書目年表稿

凡例

- 一、文溪堂丁子屋平兵衛が出版に携わった書籍のうち、現段階で確認できたものを年代順に記載した。
- 一、丁子屋が求版した書籍についても、その年代の明らかなものは記載した。
- 一、書名ことに立項し、分類と員数に加え、書誌事項を次の項目に従って示した。

- 【著編者】…著者・編者・校閲者等を通行の名に改めて示した。
【序年・序者】…序文の記された年・序文を記した人物を示した。
また、序文が複数ある場合は、①・②・③とそれぞれ項目を設けた。
【跋年・跋者】…跋文の示された年・跋文を記した人物を示した。
【画工】…通行の名に改めた画工名を示した。
【筆耕】…通行の名に改めた筆耕名を示した。
【奥付等】…奥付を抜粋した。奥付を確認できていない場合は「未

見」とした。

【備考】…特記すべき事項を示した。

- 一、【序年・序者】【跋年・跋者】【画工】【筆耕】【備考】の項目は、該当する書誌事項がない場合は省略した。
- 一、明治以降は基本的に分類の項を省略した。

文化五年（一八〇八） 戊辰

復讐
古実 独揺新語 五卷六冊 読本

【著編者】熟睡亭主人【序年・序者】文化四・熟睡亭主人【跋年・跋者】文化四・忍の持摺【画工】栄松斎長喜【筆耕】不詳【奥付等】「文化四年丁卯五月稿成／全五年戊辰正月発兌／浪花 心齋橋筋 河内屋太助／馬喰町三丁目 若林清兵衛梓／小伝馬町三丁目 丁子

屋平兵衛梓」【備考】見返しに「逍遙堂／文溪堂 梓」とある。彫師は「一二ノ巻 沖重左衛門／三ノ巻 中村吉左衛門／四ノ巻 木村嘉兵衛／五ノ巻」^上 小泉新八」。

文化七年（一八一〇） 庚午

月宵鄙物語 前編 四巻五冊 読本

【著編者】四方歌垣【序年・序者】四方歌垣【画工】柳々居辰斎【筆耕】石原駒知道【奥付等】未見【備考】彫師は田代吉五郎。下巻末に「四方歌垣主人著述読本目録」があり、「文溪堂梓」とみえる。

文化九年（一八一二） 壬申

観音天縁奇遇 三巻一冊 読本
利生

【著編者】神屋蓬洲【序年・序者】①文化九・蘿月野人②文化九・神屋蓬洲【画工】神屋蓬洲【筆耕】不詳【奥付等】「文化九壬申年孟春発兌／書肆 大坂心斎橋筋唐物町 河内屋太助／江戸十軒店 西村源六／同大伝馬町二丁目 前川弥兵衛／同小伝馬町三丁目 武蔵屋直七／同所 丁子屋平兵衛」

討はいたさぬ世の中貧福論 前編 三巻三冊 滑稽本
金がかたき

【著編者】十返舎一九【序年・序者】文化九・十返舎一九【跋年・跋者】十返舎一九【画工】十返舎一九【筆耕】不詳【奥付等】「文化九年壬申春正月発版／東都書林 麴町平川町二丁目 角丸屋甚助／小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／日本橋檜物町 大橋文蔵」

成田道中黄金の駒 一巻二冊 滑稽本

【著編者】赤須賀米【序年・序者】文化九・赤須賀米【画工】葛飾北岱【筆耕】不詳【奥付等】「文化九年壬申春正月吉辰発版／東都書肆 西村源六／西村与八／丁子屋平兵衛／大嶋屋惣兵衛／中村幸蔵」

文化十一年（一八一四） 甲戌

四季春廿三夜待 三巻三冊 滑稽本
日待

【著編者】岡山鳥【序年・序者】文化九・岡山鳥【画工】歌川国貞・歌川国繁【筆耕】不詳【奥付等】「文化十一甲戌春発行／江戸書林 馬喰町二丁目 西村与八／小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／神田通鍋町 柏屋半蔵」【備考】下巻末に『廿三夜士至而舞楼』、『十五番竹馬鞍』、『勸善常世物語』、『雲絶間雨夜月』、『俊寛僧都島物語』、『三国妖婦伝』、『浮世床』、また「曲亭翁画賛扇」と牛肉丸の広告あり。

文政四年（一八二二） 辛巳

清談峰初花 後編 三卷三冊 人情本

【著編者】十返舎一九【序年・序者】文政四・十返舎一九【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「書林 京都堀川通 植村藤右衛門／大坂安堂寺町 秋田屋太右衛門／名古屋永安寺町 菱屋金兵衛／江戸小伝馬町 丁子屋平兵衛／同人形町通 鶴屋金助」【備考】奥付に『遠の白浪』の広告あり。

文政五年（一八二三） 壬午

木曾義仲 鼎臣録 初編 五卷五冊 読本

【著編者】瀬川如臯【序年・序者】①文政五・散木居士②文政五・瀬川如臯【画工】溪斎英泉【筆耕】藍庭晋米・田中正造・千形道友【奥付等】「文政壬午陽旦発行同志東都書房 馬喰町 永寿堂 西村屋与八／乗物町 双鶴堂 鶴屋金助／通油町 仙鶴堂 鶴屋喜右衛門／日本橋 文魁堂 大坂屋茂吉／長者町 連玉堂 加賀屋源助／弥左衛門町 文永堂 大島屋伝右衛門／新泉町 文龜堂 伊賀屋勘右衛門／松坂町 平林堂 平林庄五郎／小伝馬町 文溪堂 丁子屋平兵衛／文政五年壬午閏正月発鬻 江戸書房 青林堂 越前屋長次郎」【備考】卷五卷末に『鼎臣録』二編の近刊予告あり。

太田道灌雄飛録 六卷六冊 読本

【著編者】木村忠貞【序年・序者】大田南畝【跋年・跋者】石川雅望【画工】北尾美丸・勝川春亭【筆耕】不詳【奥付等】「文政三年庚辰秋八月脱稿鐫梓／江戸 希言子 木村忠貞著編／全 画工 北尾美丸／勝川春丸／全 画凶彫匠 加藤利助／全五年壬午孟春発鬻／大坂書林 心斎橋筋唐物町 河内屋太助／尾陽書林 名護屋本町 永楽屋東四郎／江戸書林 小伝馬町三丁目 葛屋重三郎／全 同町 丁子屋平兵衛／全 深川森下町 榎本平吉／全 人形町通乗物町 鶴屋金助」

世の中貧福論 後編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】十返舎一九【序年・序者】文政五・十返舎一九【画工】竜斎正澄【筆耕】不詳【奥付等】「文政五年壬午春正月発版／書林 江戸糺町平川町二丁目 角丸屋甚助／全小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／全人形町 鶴屋金助／全檜物町 大橋文蔵」【備考】見返しには「文昌堂梓」とある。

文政六年（一八二三） 癸未

相馬将門 総援借語 五卷五冊 読本

【著編者】瀬川如臯【序年・序者】文政五・為一陳人【画工】溪斎英泉【筆耕】瀧埜音成・千形道友・田中正道【奥付等】「文政六稔癸未春正月発兌／新春喜慶大吉利市／東都書肆 耕書堂 蔦屋重三郎／青林堂 越前屋長次郎／木蘭堂 榎本平吉／双鶴堂 鶴屋金助／文溪堂 丁子屋平兵衛／平川館 伊勢屋忠右衛門／文永堂 大島屋伝右衛門／永寿堂 西村屋与八郎」【備考】卷末に『総媛借語』二編の近刊予告あり。奥付の「文政六稔」を「文政七稔」とするものもある。

滑稽和合人 初編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】溪斎英泉【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政六癸未年正月吉日発行／人形町乗物町 双鶴堂 鶴屋金助／橋町二丁目 青林堂 越前屋長次郎／馬喰町二丁目 永寿堂 西村屋与八郎／小伝馬町三丁目 耕書堂 蔦屋重三郎／京橋弥左衛門町 文永堂 大嶋屋伝右エ門／小伝馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛」【備考】上巻に「諸先生著編 文溪堂開版目録」を備える。

工夫痴会話 二卷二冊 滑稽本

【著編者】玉蛟楼一泉【序年・序者】花笠文京【跋年・跋者】玉蛟楼一泉【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政六年未春正月吉辰梓行／東都書賈 丁子屋平兵衛／つる屋金助／か賀屋利助／小島

屋藤七／遠州屋治助／丁子屋藤助」【備考】おおさわまこと著『溪斎英泉』（郁芸社、一九七六年）による。

明烏後正夢 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】南仙笑楚満人・滝亭鯉丈【序年・序者】瀬川路考【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政六年未正月発行／西村屋与八／鶴屋金助／大坂屋茂吉／丁子屋平兵衛／越前屋長次郎」

文政七年（一八二四） 甲申

廿三夜 如月稻荷祭 三卷三冊 滑稽本

【著編者】岡山鳥【序年・序者】文政七・神田豈山人【画工】溪斎英泉【筆耕】浜山考【奥付等】「文政七甲申／江戸書肆 馬喰町二丁目 西村屋与八／人形町通乗物町 鶴屋金助／小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／深川六間堀町 堺屋国蔵」【備考】下巻卷末に『廿三夜如月稻荷祭』追加、『廿三夜上己雛祭』、『早衣喜之助藤枝紫後咲』二編の広告あり。

勸善松の月 三卷三冊 人情本

【著編者】亀友山人（稿本）・駅亭駒人（閲序）【序年・序者】駅亭駒人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政七甲申陽春新板／

書林 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同町 鶴屋平蔵／大坂心齋橋博労町 伊丹屋善兵衛／江戸人形町通乗物町 鶴屋金助

文政八年（一八二五） 乙酉

忠孝比玉伝 六卷六冊 読本

【著編者】岡野養拙庵（戯作）・南仙笑楚満人（校訂）【序年・序者】①文政八・四方歌垣真顔②文政八・岡野養拙庵【跋文】南仙笑楚満人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政八拾乙酉孟春／精工佳紙善本六卷／書房 京都 伏見屋半三郎／大坂 河内屋茂兵衛／江戸 大坂屋茂吉／全 蔦屋重三郎／全 丁子屋平兵衛」【備考】卷六卷末に『太平国恩俚談』『太田道灌雄飛録』『木曾義仲鼎臣録』初〜三編の広告とともに「文政八乙酉陽春／越前屋長次郎／丁子屋平兵衛／中村屋幸蔵」という奥付を有する諸本（早稲田大学図書館蔵本など）あり。

春宵朧月夜 後編 三卷三冊 人情本
美談

【著編者】不詳【序年・序者】文政八・五息齋主人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「乙酉の春新刻発行／東都書林 丁子屋平兵衛／西村与八／小島屋藤七／大阪屋茂吉」

新製艶油舗 三卷三冊 人情本

【著編者】南仙笑楚満人【序年・序者】滝亭鯉丈【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「東都書林 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／田所町 鶴屋金助／甚左衛門町 柴屋文七」【備考】見返しに「文政八年乙酉陽旦発行」とある。

寢覚線言 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】南仙笑楚満人【序年・序者】①文亭綾継②文狂亭綾丸【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「東都書店 西村屋与八／丁子屋平兵衛／越前屋長次郎」

文政九年（一八二六） 丙戌

伽婢子 十三卷十三冊 仮名草子

【著編者】瓢水子松雲（浅井了意）【序年・序者】①寛文六・瓢水子松雲②寛文六・雲樵【画工】春川英笑【筆耕】瀧野音成【奥付等】「文政九年丙戌正月補刻／書林 前川六左エ門／丁子屋平兵衛」【備考】求版本。卷五卷末に『怪小夜時雨』の広告あり。

梅之由兵衛 梅花春水 四卷四冊 読本
物語後編

【著編者】南仙笑楚滿人【序年・序者】文政九・南仙笑楚滿人【画工】柳川重山【筆耕】不詳【奥付等】「文政九年丙戌正月良旦上梓／江戸馬喰町二丁目 西村屋与八／小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／横山町二丁目 大坂屋半蔵板」【備考】見返しに「東都書賈 千翁軒鐫」とある。巻四巻末に『松浦佐用姫』後編と仙女香の広告あり。

文政十一年（一八二八） 戊子

松浦佐用媛石魂録 後集 七巻七冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】文政十一・曲亭馬琴【画工】溪斎英泉【筆耕】谷金川・筑波仙橋【奥付等】「文政十一年戊子春正月吉日発行／大坂心斎橋筋博労町 河内屋茂兵衛／江戸小伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛／同横山町二丁目 大坂屋半蔵梓」【備考】見返しに「千翁軒梓」とある。「剗刷」は原喜智。奥付に『近世説美少年録』および『松浦佐用媛石魂録』前集の広告あり。また家伝神女湯・精製奇心丸・熊胆黒丸子・婦人つぎ虫の妙薬の広告あり。

長者永代鑑 三巻三冊 人情本

【著編者】南仙笑楚滿人（補綴）【序年・序者】琴通舎英賀【画工】貞斎泉晁・北雅【筆耕】不詳【奥付等】「戊子陽春／書林 馬喰町二丁目角 西村屋与八／小伝馬町三丁目 葛屋重三郎／通油町 越前

屋長次郎／小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛」

文政十二年（一八二九） 己丑

近世説美少年録 初輯 五巻五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】文政十一・曲亭馬琴【画工】歌川国貞【筆耕】谷金川【奥付等】「文政十二年己丑春正月吉日発行／大坂心斎橋筋博労町 河内屋茂兵衛／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同両国横山町二丁目 大坂屋半蔵梓」

本朝悪狐伝 前編 五巻五冊 読本

【著編者】岳亭丘山【序年・序者】文政十二・岳亭丘山【画工】英齋国景【筆耕】不詳【奥付等】「文政十二己丑年／書房 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／名古屋本町六丁目 永楽屋東四郎／大阪心斎橋博労町北へ入 河内屋長兵衛」

関西 野乘 大内多々羅軍記 六巻六冊 読本

【著編者】白頭子柳魚【序年・序者】文政十二・清狂道人【画工】柳川重春【奥付等】「文政十二己丑年十一月発兌／書肆 江戸 丁子屋平兵衛／京都 山城屋佐兵衛／同 吉野屋仁兵衛／大坂 伏見屋嘉兵衛／同 長門屋嘉七／同 伊丹屋善兵衛」【備考】見返しに「文

政己丑歳冬十二月発／浪速書房前川文栄堂梓」とある。

稗史畧目」（千翁軒蔵梓）あり。

玉川日記 五編 三卷三冊 人情本

総撰借語 第三輯 五卷五冊 読本

【著編者】為永春水（元稿）・松亭金水（補綴）【序年・序者】①文政十二・古松花②松亭金水【画工】歌川国丸【奥付等】「江戸 西村屋与八郎／大坂 河内屋茂兵衛／江戸 丁子屋平兵衛」【備考】下巻巻末に丁子車・美玄香・仙女香・初みどりの広告あり。

【著編者】白頭子柳魚【序年・序者】文政十二・岳亭岳山【跋年・跋者】文政十二・白頭子柳魚【画工】不詳【筆耕】洪斎逸士【奥付等】「文政十三年寅正月発兌／書肆 皇都 伏見屋半三郎／山城屋佐兵衛／浪華 河内屋長兵衛／尾陽 美濃屋清七／東都 丁子屋平兵衛／大嶋屋伝右衛門／大坂屋茂吉」

拾遺の玉川 三卷三冊 人情本

出雲物語 五卷五冊 読本

【著編者】南仙笑楚満人【序年・序者】津賀女【画工】歌川国直【奥付等】「文政十二年乙丑序刊／江戸書林 馬喰町二丁目角 西村与八／小伝馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛」

【著編者】池田東籬（刪補）・紀美磨（原稿）【画工】森川保之【筆耕】不詳【奥付等】「文政十三年寅孟春／書房 東武 大嶋屋伝右衛門／丁字屋平兵衛／撰陽 河内屋長兵衛／河内屋茂兵衛／尾陽 永楽屋東四郎／皇都 山城屋佐兵衛」

文政十三年・天保元年（一八三〇） 庚寅

大内十杉伝 初編 五卷五冊 読本
興隆

近世説美少年録 二輯 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】文政十二・曲亭馬琴【画工】魚屋北溪【筆耕】谷金川【奥付等】「文政十三年庚寅春正月吉日刊／発販書行／大坂心斎橋筋博勞町 河内屋茂兵衛／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同横山町二丁目 大坂屋半蔵梓」【備考】見返しに「庚寅孟春嗣梓／書行 千翁軒」とある。「著作堂編撰有像国字

【著編者】為永春水（稿）・松亭金水（校正）【序年・序者】文政十二・為永春水【画工】歌川国安・歌川国芳・歌川国丸【筆耕】松亭金水【奥付等】「文政一三歳庚寅孟春新鑄発梓／書林 江戸弥左右工門町 文永堂 大島屋伝右衛門／同横山町二丁目 千翁軒 大坂屋半蔵／同小伝馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛／大坂心斎橋通

博労町 群玉堂 河内屋茂兵衛

南総里見八犬伝 七輯下帙 三卷三冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】文政十・曲亭馬琴【画工】溪斎英泉・柳川重信【筆耕】筑波仙橋・谷金川【奥付等】「文政十三年庚寅正月吉日発行／書林 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／書林 江戸数寄屋橋御門通り加賀町 美濃屋甚三郎梓」【備考】見返しに「湧泉堂梓」とある。巻七巻末に「著作堂新旧国字綉像小説湧泉堂蔵版略目」あり。

本朝悪狐伝 後編 五卷五冊 読本

【著編者】岳亭丘山【序年・序者】文政十二・白頭子柳魚【画工】英齋国景【筆耕】不詳【奥付等】「文政十三寅孟春／書肆 名古屋 永楽屋東四郎／江戸 丁子屋平兵衛／大阪 河内屋長兵衛」

天保二年（一八三一） 辛卯

大内十杉伝 二輯 五卷五冊 読本
興隆

【著編者】為永春水【序年・序者】文享綾継【画工】溪斎英泉・歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「天保二年陽春発版／全志書林 江戸 文永堂 大島屋伝右衛門／大坂 群玉堂 河内屋茂兵衛／江戸

文溪堂 丁子屋平兵衛【備考】見返しには「文溪堂／文永堂／全志梓」とある。「東都狂訓亭為永春水新鑄稗史目錄」あり。

青柳草帑 三卷三冊 人情本

【著編者】松亭金水【序年・序者】未見【画工】葛飾北堤【筆耕】不詳【奥付等】「文政十四辛卯年孟春発市／書舗 江府小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／水府 茗荷屋弥兵衛」【備考】下巻巻末に丁子車・美玄香・仙女香・初みどりの広告あり。

清談常盤色香 三卷三冊 人情本

【著編者】笠亭仙果【序年・序者】池田東籬【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「文政十四年卯孟春／三都書房 東武 西村与八／丁子屋平兵衛／大坂屋半蔵／尾陽 美濃屋清七／浪速 河内屋茂兵衛／河内屋長兵衛／秋田屋市五郎／皇都 山城屋佐兵衛」

天保三年（一八三二） 壬辰

鴨東老楼志 三卷三冊 洒落本
訛言

【著編者】胡蝶庵主人【序年・序者】天保二・棟亭琴魚【画工】暁鐘成【筆耕】不詳【奥付等】「天保三壬辰陽春／書房 江戸 丁子屋平兵衛／大坂 河内屋茂兵衛／尾州 大野屋嘉兵衛／京都 石見屋

九兵衛／丸屋善兵衛／山城屋佐兵衛【備考】見返しに「文政堂寿梓」とある。巻五巻末に『鴨東老楼志』二編の広告あり。

大内十杉伝 三輯 五巻五冊 読本
興隆

【著編者】為永春水【序年・序者】文政十三・文亭綾繼【画工】歌川国安・歌川国芳・歌川国丸【筆耕】松亭金水【奥付等】「天保三歳壬辰孟春新鐫発梓 書林 江戸弥左工門町 文永堂 大島屋伝右衛門／同横山町二丁目 千翁軒 大坂屋半蔵／同小伝馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛／大坂心斎橋通博勞町 群玉堂 河内屋茂兵衛」【備考】『仁行録』の広告あり。

近世説美少年録 三輯 五巻五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保二・曲亭馬琴【画工】魚屋北溪【筆耕】谷金川【奥付等】「天保三年歳次壬辰春正月吉日發行／大阪心斎橋筋博勞町 河内屋茂兵衛／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛」【備考】「繡像刊字」は朝倉伊八・原喜知。「曲亭翁編述国字小説新旧略目」(文溪堂蔵梓)あり。

南総里見八犬伝 八輯上帙 四巻五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保三・曲亭馬琴【画工】柳川重信【筆耕】谷金川【奥付等】「天保三年歳次壬辰夏五月吉日發行／

江戸書林 京橋水谷町 美濃屋甚三郎／本所松坂町二丁目 平林庄五郎／小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板【備考】見返しに「江戸書林文溪堂精刊」とある。巻四下帙巻末に『南総里見八犬伝』八輯下帙、『開卷驚奇侠客伝』二集、『近世近世説美少年録』四輯、『松浦佐用媛石魂録』前後集の広告あり。「剗刷」は浅倉伊八・横田守・桜木藤吉・原喜知。

武蔵坊弁慶異伝 前編 五巻五冊 読本

【著編者】白頭子柳魚(馱亭駒人)【序年・序者】①花笠文京②白頭子柳魚【奥付等】「天保三年壬辰春正月新刻／書林 江戸小伝馬町 丁子屋平兵衛／尾州名古屋小巻町 美濃屋伊八／京都麴屋町 吉野屋仁兵衛／大阪博勞町心斎橋 河内屋善兵衛／同所 河内屋茂兵衛」【備考】見返しに「前川文栄堂／岡田群玉堂」とあり。

大内十杉伝 四輯 五巻五冊 読本
興隆

【著編者】為永春水【序年・序者】①天保二・為永春水②為永春水【画工】歌川国直【筆耕】松亭金水【奥付等】「天保三年壬辰稔陽旦發行／江戸小伝馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛／大阪心斎橋筋博勞町 群玉堂 河内屋茂兵衛／江戸京橋弥左衛門町 文永堂 大島屋伝右衛門」

開卷驚奇侠客伝 初集 五巻五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保二・曲亭馬琴【画工】溪斎英泉【筆耕】谷金川【奥付等】「天保三年壬辰正月吉日印発／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／大坂心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛」【備考】見返しには「羣玉堂精刊」とある。「繡像劄劇」は朝倉伊八と原喜知、「全巻刊字」は井上治兵衛。巻五巻末に『開卷驚奇侠客伝』二集および『近世説美少年録』一〜三輯の広告あり。奥付には家伝神女湯・精製奇応丸・熊胆黒丸子・婦人つぎ虫の妙薬・仙女香の広告あり。

天保四年（一八三三） 癸巳

尼子七国士伝 初輯 五巻五冊 読本

【著編者】為永春水・松亭金水【序年・序者】天保四・赤山人【画工】柳川重信【筆耕】不詳【奥付等】「天保四癸巳季猛陽発兌／書林 大坂心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛／全 河内屋長兵衛／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛」【備考】『七国士伝』二輯および『南総里見八犬伝』九輯の広告あり。

開卷驚奇侠客伝 二集 五巻五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保三・曲亭馬琴【画工】柳川重信【筆耕】谷金川【奥付等】「天保四年癸巳正月吉日発行／書林

江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／大坂心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛板」【備考】見返しには「羣玉堂精刊」とある。「劄劇」は桜木藤吉・横田守・田中三八。巻五巻末に『開卷驚奇侠客伝』三集および『近世説美少年録』四輯、『水滸略伝』一集、『水滸後画伝』一集の広告あり。奥付には『美少侠客衆議評判記』および家伝神女湯・精製奇応丸・婦人つぎ虫の妙薬・仙女香の広告あり。

南総里見八犬伝 八輯下帙 四巻五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保三・曲亭馬琴（附録）【画工】柳川重信【筆耕】谷金川・黒田仙橋【奥付等】「天保四年癸巳春正月吉日発行／書林 大坂 心齋橋筋博労町 河内屋長兵衛／同所同町 河内屋茂兵衛／江戸 本所松阪町二丁目 平林庄五郎／小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】見返しに「文溪堂印発」とある。巻八下帙巻末に『開卷驚奇侠客伝』二〜三集、『近世近世説美少年録』四輯、『松浦佐用媛石魂録』前後集、『美濃旧衣八丈綺談』、『南総里見八犬伝』九輯の広告あり。「劄劇」は浅倉伊八・横田守・桜木藤吉・原喜知・田中三八。

木曾鼎臣録 三輯 五巻五冊 読本

義仲【著編者】為永春水【序年・序者】天保二・文亭綾継【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「天保四癸巳年夏発兌／書林 大坂 河内屋茂兵衛／同 河内屋長兵衛／江戸 丁子屋平兵衛板」【備考】

「教訓亭主人新著目録」（三都書林合梓）を備える。『開卷驚奇侠客伝』三輯および『近世説美少年録』四輯の広告あり。

淀屋形金鶏新話 前編 五卷五冊 読本

【著編者】岳亭岳山【序年・序者】天保四・六々園主人【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保四年巳孟春／書賈 江戸小伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛／同南伝馬町三丁目 中村屋幸蔵／京三条富小路 近江屋治助／大阪心斎橋南久太郎町 秋田屋市五郎」

淀屋形金鶏新話 後編 五卷五冊 読本

【著編者】岳亭岳山【序年・序者】花笑林高井金守【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保四癸巳年十月発行／書肆 大坂心斎橋博労町 河内屋茂兵衛／江戸日本橋通壹町目 須原屋茂兵衛／同通貳町目 小林新兵衛／同小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛」

義仲勲功図会 前編 五卷五冊 読本

【著編者】山田案山子【序年・序者】天保三・好華堂野亭【画工】有阪蹄斎【筆耕】不詳【奥付等】「天保四癸巳歳孟春発行／書林 江戸 丁子屋平兵衛／同 中村屋幸蔵／京都 吉野屋仁兵衛／同 伏見屋半三郎／同 丸屋善兵衛／尾陽 玉野屋新右衛門／泉州堺 住吉屋弥三郎／大坂 河内屋喜兵衛／同 河内屋長兵衛」【備考】見

返しに「京撰書林 積玉圃／宝珠軒」とある。卷五卷末に『画三世相日用宝鑑』の広告あり。

綿圃要務 二卷二冊 農業

【著編者】大蔵永常【序年・序者】天保四・石田醒斎【画工】長谷川雪堤【筆耕】不詳【奥付等】「天保四癸巳年十月発行／書肆 大坂心斎橋博労町 河内屋長兵衛／江戸日本橋通壹町目 須原屋茂兵衛／同通貳町目 小林新兵衛／同小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛」

天保五年（一八三四） 甲午

開卷驚奇侠客伝 三集 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保四・曲亭馬琴【画工】歌川国貞【筆耕】谷金川【奥付等】「天保五年甲午正月吉日発行／書林 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／大坂心斎橋筋博労町 河内屋茂兵衛板」【備考】見返しには「羣玉堂精刊」とある。「剗刷」は朝倉伊八と桜木藤吉。卷五卷末に『開卷驚奇侠客伝』四集および『近世説美少年録』一～四輯、『水滸略伝』一集、『水滸後画伝』一集、『侠客少年』一書衆議評判記』の広告あり。奥付には『南総里見八犬伝』九輯および家伝神女湯・精製奇心丸・熊胆黒丸子・婦人つぎむしの妙薬・仙女香の広告あり。

復仇越女伝 前編 五卷五冊 読本

【著編者】柳川春種【序年・序者】天保三・柳川春種【画工】柳斎重春【筆耕】不詳【奥付等】「天保五甲午初春発兌／書肆 大坂 河内屋茂兵衛／河内屋長兵衛／勝尾屋六兵衛／江戸 前川弥兵衛／角丸屋甚助／英大助／丁子屋平兵衛」

復仇越女伝 後編 五卷五冊 読本

【著編者】柳川春種【序年・序者】天保三・黙々山人【画工】柳斎重春【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】見返しに「書林 石倉堂／文溪堂」とある。

繪本和田軍記 前編 六卷六冊 読本

【著編者】速水春暁斎（遺稿）・山田案山子（校合）【序年・序者】山田案山子【画工】柳斎重春【筆耕】不詳【奥付等】「天保五年甲午正月発兌／書房 東武 丁子屋平兵衛／尾陽 大野屋惣八／浪華 河内屋長兵衛／堺 住吉屋弥三郎／皇都 近江屋治助／同 山城屋佐兵衛」

繪本和田軍記 後編 六卷六冊 読本

【著編者】速水春暁斎（遺稿）・山田案山子（校合）【序年・序者】山

田案山子【画工】柳斎重春【筆耕】不詳【奥付等】「天保五年甲午正月発兌／書房 東武 丁子屋平兵衛／尾陽 大野屋惣八／浪華 河内屋長兵衛／堺 住吉屋弥三郎／皇都 近江屋治助／同 山城屋佐兵衛」

嵐峡花月奇譚 後編 五卷五冊 読本

【著編者】瀬川恒成（作）・関亭京鶴（校）【序年・序者】関亭京鶴【画工】菱川清春【筆耕】不詳【奥付等】「天保五年初春発兌／書林 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同南伝馬町三丁目 中村屋幸藏／尾州名古屋樽屋町巾下 玉野屋新右工門／京都三条通富小路 近江屋治助／同寺町通錦小路 伏見屋半三郎／大坂心斎橋筋南久太良町 秋田屋市五郎」【備考】卷五卷末に『八代駒下駄物語』『敵討雨夜傘』の広告あり。

滑稽和合人 二編追加 二卷三冊 滑稽本

【著編者】速水春暁斎（遺稿）・山田案山子（校合）【序年・序者】山田案山子【画工】柳斎重春【筆耕】不詳【奥付等】「天保五年甲午正月発兌／書房 東武 丁子屋平兵衛／尾陽 大野屋惣八／浪華 河内屋長兵衛／堺 住吉屋弥三郎／皇都 近江屋治助／同 山城屋佐兵衛」

虚南留別志 二卷二冊 滑稽本

【著編者】木屑庵成貨【序年・序者】①覚蓮房②天保五・木屑庵成貨
【筆耕】愛花道人(序)【奥付等】「天保五甲午仲夏発行／東都書林
小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／両国吉川町 山田佐助／馬食町
三丁目 宮屋源兵衛」【備考】見返しに「天保甲午孟秋鐫」「東都
向榮堂蔵」とある。巻末に『虚南留別志』後編の広告あり。

教外俗文娘消息 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】三文舎自樂【序年・序者】三文舎自樂【画工】柳川重信
【筆耕】不詳【奥付等】「維時天保五甲午年孟陽発販／書房 大阪
河内屋長兵衛／江戸 丁子屋平兵衛」【備考】下巻末に『教外俗文
娘消息』三編の広告あり。

花物がたり 前編 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】天保四・鼻山人【画工】不詳【筆
耕】不詳【奥付等】「天保五甲午年初春発兌／書肆 大阪 河内屋
茂兵衛／河内屋長兵衛／勝尾屋六兵衛／江戸 前川弥兵衛／角丸屋
甚助／英大助／丁子屋平兵衛」

花物がたり 後編 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】天保四・鼻山人【画工】不詳【筆
耕】不詳【奥付等】「天保五甲午年初春発兌／書肆 大阪 河内屋

茂兵衛／河内屋長兵衛／勝尾屋六兵衛／江戸 前川弥兵衛／角丸屋
甚助／英大助／丁子屋平兵衛」

天保六年(一八三五) 乙未

南総里見八犬伝 九輯上函 六卷六冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保五・曲亭馬琴【画工】二世柳
川重信【筆耕】谷金川【奥付等】「天保六年乙未春正月黄道大吉日
発販／書林 大阪 心齋橋筋博労町 河内屋長兵衛／同所 河内屋
茂兵衛／江戸 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】見返し
に「文溪堂精刊」とある。巻六巻末に「著作堂編演国字稗史新旧略
目」あり。「剗刷」は朝倉伊八・横田守・桜木藤吉。

開卷驚奇侠客伝 四集 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保五・曲亭馬琴【画工】柳川重
信【筆耕】谷金川【奥付等】「天保六年乙未正月吉日発行／書林
江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／大坂心齋橋筋博労町 河内屋
茂兵衛板」【備考】見返しには「羣玉堂精刊」とある。「剗刷」は朝
倉伊八・横田守・桜木藤吉・田中三八。巻五巻末に『開卷驚奇侠客
伝』五集および『近世説美少年録』四輯、『水滸略伝』一集、『水滸
後画伝』一集の広告あり。奥付には『侠客少年二書衆議評判記』お

よび家伝神女湯・精製奇応丸・熊胆黒丸子・婦人つぎむしの妙薬・
仙女香の広告あり。

西海浪間月 五巻五冊 読本

【著編者】森川保之【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保六乙未孟陽発販／東武 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同 京橋弥左衛門町 大嶋屋伝右衛門／浪華 心斎橋筋博労町 河内屋茂兵衛／同 心斎橋筋博労町北 河内屋長兵衛／本町通七丁目 大野屋嘉兵衛／皇都 寺町通錦小路 伏見屋半三郎／三條通麩屋町角 山城屋佐兵衛」

廓中浪花夢 三巻三冊 人情本
奇談

【著編者】平亭銀鷄【序年・序者】壺中庵主人【画工】歌川貞広・歌川貞芳【筆耕】不詳【奥付等】「天保六年己未秋 書林 京都 大文字屋得五郎／同 吉野屋仁兵衛／江戸 丁子屋平兵衛／左海 住吉屋弥三郎／大阪 河内屋長兵衛」【備考】見返しには「石倉堂板」とある。

春情美佐尾の巻 三巻三冊 人情本

【著編者】八路駒彦【序年・序者】天保六・八路駒彦【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】中巻挿絵に「ハンモト」「丁

平」と記された千社札が描かれている。

太平楽皇国性質 二巻二冊 随筆

【著編者】木公亭主人(松亭金水)【序年・序者】天保五・木公亭主人(松亭金水)【筆耕】不詳【奥付等】「天保六年己未年秋季大吉祥日／浪花書林 心斎橋通博労町 群玉堂 河内屋茂兵衛／東都書林 小伝馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛」【備考】見返しに「浪華 群玉堂蔵」とある。下巻末に『太平楽皇国性質』第二編の広告あり。

銀河艸紙 三巻三冊 風俗

【著編者】池田東籬【序年・序者】池田東籬【画工】菱川清春【筆耕】井上治兵衛【奥付等】「天保六年己未六月／書房 東部小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／尾陽名古屋本町七丁目 永楽屋東四郎／泉州堺天神北門前 住吉屋弥三郎／摂陽心斎橋筋博労町北へ入 河内屋長兵衛／皇都三条通東洞院東へ入 大文字屋得五郎」

天保七年(一八三六) 丙申

南総里見八犬伝 九輯中帙 六巻七冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保六・曲亭馬琴（附言）【画工】二世柳川重信【筆耕】谷金川・千形道友【奥付等】「天保七年丙申春正月吉日辰發行／書林 大阪 心齋橋筋博労町 河内屋長兵衛／同所 河内屋茂兵衛／江戸 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】見返しに「文溪堂精刊」とある。卷十二下卷末に「著作堂手集国字稗史新旧略目」あり。「劄劂」は横田守・桜木藤吉・高木剪樞。

復讐野路の玉川 前編 五卷五冊 読本

【著編者】滄海堂主人【序年・序者】滄海堂主人【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保七申年九月／大阪書林 河内屋茂兵衛／河内屋長兵衛／塩屋喜兵衛／塩屋利助／江戸書林 森屋治兵衛／丁子屋平兵衛」

復讐野路の玉川 後編 四卷四冊 読本

【著編者】滄海堂主人【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保七申年九月／大阪書林 河内屋茂兵衛／河内屋長兵衛／塩屋喜兵衛／塩屋利助／江戸書林 森屋治兵衛／丁子屋平兵衛」

濡燕栖傘雨談 初編 五卷五冊 読本

【著編者】墨川亭雪麿（編）・曲亭馬琴（閲）【序年・序者】①天保六・

曲亭馬琴【画工】柳川重信【筆耕】谷金川【奥付等】「天保七丙申年正月吉日／皇都 丸屋善兵衛／全 山城屋佐兵衛／江戸 平林庄五郎／大坂 河内屋茂兵衛／全 河内屋長兵衛／堺 住吉屋弥三郎／江戸 丁子屋平兵衛」【備考】見返しに「東都文溪堂梓」とある。

清談花可都美 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】二世十返舎一九【序年・序者】天保六・金鈴舎一宝【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】「天保七丙申孟春発市／洛陽書肆 山城屋佐兵衛／東都書肆 丁子屋平兵衛」

恋の若竹 後編 三卷三冊 人情本

【著編者】二世十返舎一九【序年・序者】天保七・二世十返舎一九【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】「東都書肆 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛販」

骨董集 上編前帙 二卷二冊 随筆

【著編者】山東京伝【序年・序者】杏園主人（大田南畝）【画工】不詳【筆耕】傭書は嶋岡長盈（上巻）・橋本徳瓶（中巻）【奥付等】「文化十一年甲戌冬十二月発行／天保七丙申年季春吉旦求版／東都書肆 文溪堂 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛」【備考】見返しに「東都書肆 文溪堂梓」とある。劂人は名古屋治平と鈴木栄次郎。

骨董集 上編後帙 二卷二冊 隨筆

【著編者】山東京伝【序年・序者】文化十二・山東京伝【画工】不詳
【筆耕】嶋岡長盈・藍庭林信【奥付等】「天保七年丙申初夏／江戸書肆 大伝馬町二丁目 文溪堂丁子屋平兵衛」【備考】見返しに「東都書肆 文溪堂梓」とある。刷人は名古屋治平と朝倉吉次郎。『骨董集』三編の広告あり。

南総里見八犬伝 前編 二卷二冊 浄瑠璃

【著編者】山田案山子【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保七年丙申秋 山田案山子作」
「江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／大阪心齋橋筋博労町北へ入 河内屋長兵衛／同北堀江市場 綿屋喜兵衛／京寺町通松原上ル町 菊屋七郎兵衛／同寺町通夷川上ル町 鶴屋喜右衛門／同寺町通二條下ル町 柏屋宗七／同四条通寺町西へ入 吉野屋勘兵衛／板元／京寺町通高辻下ル町 菱屋治兵衛／同六角通堺町東へ入 平野屋茂兵衛／同三条通東洞院東へ入 大文字屋得五郎」

北越雪譜 初編 三卷三冊 地誌

【著編者】鈴木牧之（編撰）・山東京山（刪定）【序年・序者】①天保六・山東京山②天保六・岩瀬京水【画工】岩瀬京水【筆耕】不詳

【奥付等】「天保七丙申年九月発兌／書肆 大坂心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛／江戸小伝馬町三丁目東側 丁子屋平兵衛寿梓」【備考】見返しに「江戸書肆 文溪堂梓行」とある。

天保八年（一八三七） 丁酉

南総里見八犬伝 九輯下帙上 六卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保七・曲亭馬琴【画工】二世柳川重信【筆耕】谷金川【奥付等】「天保八年丁酉年春正月吉日令辰 発行／書林 大阪 心齋橋筋博労町 河内屋長兵衛／同所 河内屋茂兵衛／江戸 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】見返しに「文溪印発」とある。卷十八卷末に『南総里見八犬伝』一〜九輯上帙、『近世説美少年録』一〜四輯、『開卷驚奇侠客伝』一〜五集、『花蝶翁再遊外紀』『著作堂一夕話』の広告あり。「剗刷」は横田守・桜木藤吉・鳥山某。

花街清史 風俗吾妻男 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】三亭春馬【序年・序者】三亭春馬【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保八年初春発販／書林 江戸 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同 南伝馬町三丁目 中村屋幸蔵／尾州 名古屋樽屋町中下 玉野屋新右工門／京都 三条通富小路 近江屋治助／同

同通寺町西 丸屋善兵衛／大阪 心齋橋通南久太郎町 秋田屋市
五郎」【備考】奥付に『八代駒下駄物語』の広告あり。

清談花可都美 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】二世十返舎一九【序年・序者】坂東秀調【画工】歌川国直
【筆耕】不詳【奥付等】「天保八年丁酉初春発兌／洛陽書肆 山城屋
佐兵衛／東都書肆 丁子屋平兵衛」

南総里見八犬伝 花魁蒼八総 後編 二卷二冊 浄瑠璃

【著編者】山田案山子【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保八
年丁酉春 山田案山子作」
「江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／
大阪心齋橋筋博労町北へ入 河内屋長兵衛／同北堀江市場 綿屋喜
兵衛／京寺町通松原上ル町 菊屋七郎兵衛／同寺町通夷川上ル町
鶴屋喜右衛門／同寺町通二條下ル町 柏屋宗七／同四条通寺町西へ
入 吉野屋勘兵衛／板元／京寺町通高辻下ル町 菱屋治兵衛／同六
角通堺町東へ入 平野屋茂兵衛／同三条通東洞院東へ入 大文字屋
得五郎」

天保九年（一八三八） 戊戌

南総里見八犬伝 九輯下帙中 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保八・曲亭馬琴【画工】二世柳
川重信【筆耕】谷金川【奥付等】「天保九年戊戌春正月吉日發行／
書林 大阪心齋橋筋博労町 河内屋長兵衛／同所 河内屋茂兵衛／
江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】見返しに「江戸書
林文溪堂精刊」とある。卷二十三卷末に『南総里見八犬伝』一／九
輯下帙下、『近世説美少年録』一／三輯、『開卷驚奇侠客伝』一／四
集、『花蝶翁再遊外紀』『著作堂一夕話』『玄同放言』三集の広告あ
り。「彫工」は横田守・森田某・桜木藤吉。

倭寵愛児 春色恋白波 初編 三卷三冊 人情本
漢余模妓

【著編者】為永春水【序年・序者】①天保九・陽風亭柳外②為永春水
③為永春水【画工】溪斎英泉【筆耕】瀧野音成【奥付等】「全志書
林 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／江戸京橋弥左エ門町 大
島屋伝右衛門／大阪心齋橋博労町北江入 河内屋長兵衛／京都三条
通東洞院東江入 大文字屋専蔵」【備考】神保五弥校『春色恋白波』
（古典文庫、一九六七年）による。

春色籬之梅 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】①文溪堂主人・②天保八・為永春

水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見

春色籬之梅 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】為永春江校合。序文に「文溪堂へ。進て梓の縁」とある。

増補外題鑑 一卷一冊 書目

【著編者】岡田琴秀（著述）・為永春水（補正）【序年・序者】①天保九秋・為永春水②岡田琴秀【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「天保九戊戌年仲秋発行／全志書林／京都 山城屋佐兵衛／丸屋善兵衛／大文字屋得五郎／本屋宗七／大阪 河内屋茂兵衛／河内屋長兵衛／河内屋太助／塩屋宇兵衛／伏見屋嘉兵衛／秋田屋市五郎／河内屋平七／江戸 岡田屋嘉七／泉屋市兵衛／小林新兵衛／丁子屋平兵衛」【備考】後版には東条琴台の序（天保十年）がみられる。

新改正万国地球全図 一鋪 地誌

【著編者】栗原信晁【序年・序者】天保九・阿部喜任【画工】栗原信晁【筆耕】不詳【奥付等】「書肆 東都大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛発行」

天保十年（一八三九） 己亥

南総里見八犬伝 九輯下帙上下編 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保九・曲亭馬琴【画工】二世柳川重信【筆耕】谷金川・白馬台音成【奥付等】「天保十年己亥春正月吉日発行／書行 京都 大文字屋得五郎／大阪 河内屋長兵衛／大阪 河内屋茂兵衛／大阪 河内屋太助／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】見返しに「江戸書林文溪堂精刊」とある。卷二十八巻末に「著作堂新編国字稗史略目」あり。「剗剗」は鏤廉士・森田甲・横田守・常盤園。

閑情末摘花 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】松亭金水【序年・序者】天保十・松亭金水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見

いろは文庫 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十・為永春水【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「全志書林 江戸 文溪堂 丁子屋平兵衛／江戸 連玉堂 加賀屋源助／大阪 群玉堂 河内屋茂兵衛」

春色籬之梅 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十・為永春水【画工】不詳
【筆耕】不詳【奥付等】未見

春色籬之梅 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「売弘所小伝馬町三丁目 書物問屋 丁子屋平兵衛」

春色籬之梅 五編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【跋年・跋者】為永春笑
【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「小てんま町 丁子屋平兵衛」
【備考】序文に「文溪堂の園に満て」とある。中巻末に『近世花多知
波奈』の広告あり。

教外俗文娘消息 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】三文舎自楽【序年・序者】為永春水【画工】歌川国直【筆
耕】不詳【奥付等】「同志発客 江戸小伝馬町三丁目中程 文溪堂
丁子屋平兵衛／大坂心斎橋通博労町北江入 石倉堂 河内屋長兵
衛／京三条通洞院東江入 宝珠堂 大文字屋得五郎」

教外俗文娘消息 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】三文舎自楽【序年・序者】天保十・為永春水【画工】静斎

英一【筆耕】不詳【奥付等】「三都書林 東武 丁子屋平兵衛／浪
花 秋田屋市兵衛／皇都 大文字屋仙蔵」

天保十一年（一八四〇） 庚子

南総里見八犬伝 九輯下帙下中編 四卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保十・曲亭馬琴【画工】二世柳
川重信・歌川貞秀【筆耕】谷金川【奥付等】「天保十一庚子年春正月
吉日発行／書行 京都 大文字屋得五郎／大阪 河内屋茂兵衛／同
河内屋太助／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】見
返しに「書林文溪堂正舖刊」とある。卷三十二巻末に「曲亭翁新旧
著編略目」あり。彫工は沢金次郎・朝倉伊八・常磐園・鏤近吉。

南総里見八犬伝 九輯下帙下之貳 三卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保十・曲亭馬琴【画工】歌川貞
秀【筆耕】谷金川【奥付等】「天保十一庚子年春正月吉日発行／発
販書行 京都三条通東洞院東へ入 大文字屋得五郎／大阪心斎橋筋
博労町 河内屋茂兵衛／大坂心斎橋筋唐物町南へ入 河内屋太助／
江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】見返しに「江戸書
林文溪堂精刊」とある。卷三十五巻末に「曲亭翁の新編本房近刻の
者」あり。「劄劂」は沢金次郎・常盤園・高谷熊五郎。

芳薫好文士伝 五卷五冊 読本
功話

【著編者】為永春水【序年・序者】①天保十一・福内鬼外②天保十・
文亭綾継【画工】溪齋英泉【筆耕】不詳【奥付等】「三都全志小説発
行書林／京都三条通東洞院東江入 大文字屋得五郎／大坂心齋橋筋
博労町 河内屋茂兵衛／大坂心齋橋筋安堂寺町 秋田屋太右衛門／
江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／江戸京橋弥左工門町 大寫屋
伝右工門販」【備考】卷五卷末に為永春水作『太平吉野物語』、曲亭
馬琴作『著作堂一夕話』、『好文士伝』二輯・三輯の広告あり。

閑情末摘花 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】松亭金水【序年・序者】天保十一・松亭金水【画工】不
詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】上巻広告に「東都書林 小
説の問屋 小伝馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛」とある。上巻
に『春色初嘉寿視』、『こっけい 和合人』、『絵入中形 外題鑑』と梅の雪の広
告あり。

閑情末摘花 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】松亭金水【序年・序者】天保十一・松亭金水【画工】不詳
【筆耕】不詳【奥付等】未見

青郊春色初若那 初編 三卷三冊 人情本
美景

【著編者】為永春江【序年・序者】天保十一・為永春江【画工】静齋
英一【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】下巻末に『青郊春色初若
那』二編の広告あり。

青郊春色初若那 二編 三卷三冊 人情本
美景

【著編者】為永春江【序年・序者】為永春水【画工】静齋英一【筆
耕】不詳【奥付等】「東都書林 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛販」
【備考】序文に「文溪堂の丹誠備ふ」とあるほか、口絵に「丁子屋／
職人中」と記された提灯が描かれている。下巻末に『青郊春色初若
那』三編の広告あり。

天保十二年（一八四一） 辛丑

南総里見八犬伝 九輯下帙下之上 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保十一・曲亭馬琴【画工】二世
柳川重信・溪齋英泉【筆耕】谷金川【奥付等】「天保十二年辛丑春正
月吉日発行／発販書行 京都蛸薬師東洞院西へ入 大文字屋仙蔵／
大坂心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛／大坂心齋橋筋唐物町南へ入
河内屋太助／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】見返
しに「江戸書林文溪堂精刊」とある。卷四十巻末に「曲亭翁精編本

房藏板略目」あり。「劔削」は沢金次郎・常盤園・高谷熊五郎。

南総里見八犬伝 九輯下帙下中下 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保十一・曲亭馬琴【画工】二世柳川重信【筆耕】谷金川【奥付等】「天保十二年辛丑春正月吉日発行／発販書行 京都 河内屋藤四郎／同地 大文字屋仙蔵／大阪 河内屋太助／同地 河内屋直助／同地 河内屋茂兵衛／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】卷四十五卷末に『著作堂一夕話』『菅聖廟御伝記』『南総里見八犬伝』の広告あり。「劔削」は高谷熊五郎・沢金次郎。

重扇五十三駅 五卷五冊 読本

【著編者】梅菊山人【序年・序者】梅菊山人カ【画工】歌川景松【筆耕】不詳【奥付等】「天保十二辛丑年五月吉日／書林 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／京東洞院蛸薬師西入 大文字屋専蔵／大阪心斎橋通博労町北入 河内屋長兵衛」【備考】卷五卷末に『重扇五十三駅』後編の広告あり。

鎮西菊池軍記 後編 五卷五冊 読本

【著編者】暁鐘成【序年・序者】文政十三・松堂散人村直【画工】暁鐘成【筆耕】九雀山樵陸寅（序）【奥付等】「天保十二辛丑春正月発

兌／書肆 京二条車屋町 本屋宗七／同寺町通錦小路下ル 伏見屋半三郎／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／名古屋本町十丁目 松屋善兵衛」

寄生木草紙 後編 五卷五冊 読本

【著編者】栗杖亭鬼卯【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保十二丑年初春発販／書林 江戸 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同京橋弥左エ門町 大寫屋伝右エ門／尾州 名古屋樽屋町巾下 玉野屋新右エ門／江戸 馬喰町四丁目 菊屋幸三郎／京都 三条通寺町西 丸屋善兵衛／大阪 心斎橋通南久太郎町 秋田屋市兵衛」

滑稽和合人 三編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】天保十二・滝亭鯉丈【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見

青郊春色初若那 三編 三卷三冊 人情本
美景

【著編者】為永春江【序年・序者】天保十二・為永春笑【画工】歌川国貞・歌川貞重【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】中巻に長寿円と『未通色新粉』初編の広告あり。
風流

赤実語教並童子経 一卷一冊 教訓本

【著編者】八島五岳【序年・序者】八島五岳カ【奥付等】「天保十二辛丑年孟春／書賈 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／京三条東洞院 大文字屋得五郎／京東洞院蛸薬師 大文字屋専蔵／大阪心斎橋博労町 河内屋長兵衛」【備考】見返し題は「赤本実語教」。見返しに「書肆 石倉堂」とあり。

俳家奇人談 三卷三冊 俳諧・伝記

【著編者】窓玄玄一（遺稿）・蓬盧青青（参訂）【序年・序者】①文化十二・臥舫散人②八朶園寥松【筆耕】不詳【奥付等】「天保十二辛丑年孟春新刻／書林 大阪心斎橋通博労町 河内屋茂兵衛／江戸大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】求版本。下巻末に「蓬盧青青先生撰目」として『俳家奇人談』『続俳家奇人談』『椿年画譜』および同二編の広告あり。

倭寵愛児 春色恋白浪 二編 三卷三冊 人情本
漢余模妓

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十二春・為永春水【画工】静斎英一【筆耕】瀧野音成【奥付等】「全志書林 江戸 丁子屋平兵衛／大坂 河内屋長兵衛／江戸 大嶋屋伝右衛門／京都 大文字屋専蔵」【備考】神保五弥校『春色恋白波』（古典文庫、一九六七年）による。

鑑識要覧 一巻一冊 書画

【著編者】中川凹凸【序年・序者】天保十二・中川凹凸【筆耕】不詳【奥付等】「天保十二辛丑新板／東都書林 須原屋茂兵衛／岡田屋嘉七／丁子屋平兵衛／尾州書林 永樂屋東四郎／大坂書林 柳原木兵衛／岡田茂兵衛／京都書林 寺町通仏光寺角 中川藤四郎」【備考】刊記に「京 森何某刀」とある。

天保十三年（一八四二） 壬寅

武蔵坊弁慶異伝 後編 五巻五冊 読本

【著編者】暁鐘成（校閲）【序年・序者】壺処散人【奥付等】「天保十三年寅十二月吉旦／御免／書肆 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／京都寺町三条通 丸屋善兵衛／名古屋本町七丁目 永樂屋東四郎／若山駿河町 阪本屋喜一郎／大阪心斎橋通博労町 河内屋茂兵衛／同全所 塩屋喜兵衛／同全所 伊丹屋善兵衛」【備考】見返しに「浪速 文栄堂梓」とある。

南総里見八犬伝 結局編 四巻五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】天保十二・曲亭馬琴【画工】二世柳川重信・溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「天保十三年壬寅春正月吉日／大阪心斎橋筋博労町 河内屋茂兵衛／江戸小伝馬町三丁目

丁子屋平兵衛板」【備考】見返しに「東都文溪堂精刊」とある。

南総里見八犬伝 結局下編 四卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【画工】二世柳川重信・溪斎英泉【筆耕】谷金川・亀井金水・対二楼音成【奥付等】「時天保十三年壬寅春正月吉日先刊所成五冊発行／同年春三月吉日後刊五冊追販全書無闕遺焉／発販書行 京都 河内屋藤四郎／同地 大文字屋仙蔵／大阪 河内屋太助／同地 河内屋直助／同地 河内屋茂兵衛／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】見返しに「文溪堂精刊」とある。巻五十三卷末に『近世説美少年録』第四集、『著作堂一夕話』、『南総里見八犬伝』の広告あり。「劊刷人」は高谷熊五郎・沢金次郎・米蔵幸太郎。

北越雪譜 二編 四卷七冊 地誌

【著編者】鈴木牧之（編撰）・山東京山（増修）【序年・序者】天保十一年・山東京山【画工】岩瀬京水【筆耕】不詳【奥付等】「天保十三年壬寅孟春／全志発行書林 大坂 心斎橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛／心斎橋筋博労町 河内屋茂兵衛／江戸 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛蔵版」【備考】見返しに「天保辛丑新刻／書肆 文溪堂／発販」とある。

天保十四年（一八四三） 癸卯

海川夜話仙家月 五卷五冊 読本

【著編者】岳亭五岳【序年・序者】天保十三・岳亭五岳【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保十四癸卯歳三月発販／書肆 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同京橋弥左エ門町 大島屋伝右エ門／同馬喰町四丁目 菊屋幸三郎／京都寺町通六角下ル 近江屋治助／同五条橋通堺町東へ入町 丁子屋定七／大阪心斎橋通南久太良町 秋田屋市兵衛」

訂正 補刻 繪本漢楚軍談 初輯 十卷十冊 読本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】葛飾北斎【筆耕】不詳【奥付等】「天保十四癸卯年十月御免開板／発行書林 大阪 河内屋茂兵衛／江戸 岡田屋嘉七／同 須原屋茂兵衛／同 山城 屋佐兵衛／同 小林新兵衛／同 西宮弥兵衛／同大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】巻十卷末に『新編繪本漢楚軍談』二輯、『北斎老人肉筆画帖』、『万物一夕話』の広告あり。また、広告の後に「書林 江戸 文溪堂丁子屋平吉梓」とある。

日本廿四孝子伝 五卷五冊 教訓

【著編者】島定賢【序年・序者】天保十四・島定賢【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保十四癸卯年閏九月立冬日／三都書房 江

戸日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同小伝馬町三丁目 丁子屋平吉
／京寺町仏光寺角 河内屋藤四郎／大坂心齋橋博労町 河内屋長兵
衛／同所西北角 河内屋茂兵衛【備考】服部仁「天保改革時の出
版状況瞥見——『孝子顕彰』の読売と『御触書集覧 修身孝義鑑』
の相関関係、及び『日本廿四孝子伝』等の出版を手がかりに——」
〔『雅俗』十九号、雅俗の会、二〇二〇年七月）を参照。

女童教訓女大学宝鑑本朝女廿四孝 一卷一冊 教訓

【著編者】不詳【奥付等】「天保十四卯夏新板／諸国売弘書肆 江戸
丁子屋平兵衛／大坂 秋田屋太右衛門／名古屋 菱屋藤兵衛／紀
州 総田屋平左衛門／東都 近江屋佐太郎／東都 人形町通 吉田
屋文三郎板」【備考】服部仁「天保改革時の出版状況瞥見——『孝子
顕彰』の読売と『御触書集覧 修身孝義鑑』の相関関係、及び『日
本廿四孝子伝』等の出版を手がかりに——」〔『雅俗』十九号、雅俗
の会、二〇二〇年七月）を参照。

女訓女子訓牒種 一巻一冊 心学
姿見

【著編者】手島堵庵【画工】不詳【筆耕】下川辺拾水【奥付等】「天
保二年辛卯新板／同十四年癸卯補刻／三都書林 京 吉野屋仁兵衛
／江戸 須原屋茂兵衛／同 山城屋佐兵衛／同 岡田屋嘉七／同
丁子屋平兵衛／大坂心齋橋通博労町角 河内屋茂兵衛」【備考】見
返しに「群玉堂梓」とある。

改正大増補早引永代節用大全 一卷一冊 辞書・節用集

【著編者】山崎美成【序年・序者】天保十三・北峰成【画工】不詳
【筆耕】中村源八【奥付等】「天保十三壬寅年御免／天保十四癸卯年
新刻／発行書林 大坂安堂寺町 秋田屋太右衛門／全所 河内屋喜
兵衛／全所唐物町 河内屋太助／江戸日本橋通壱丁目 須原屋茂兵
衛／全浅草茅町二丁目 須原屋伊八／全芝神明前 岡田屋嘉七／全
日本橋通二丁目 小林新兵衛／全所 山城屋佐兵衛／全芝神明前
和泉屋市兵衛／全日本橋通四丁目 須原屋佐助／全小伝馬町三丁目
丁子屋平吉版」

天保十五・弘化元年（一八四四） 甲辰

風俗三石土 二巻二冊 洒落本

【著編者】胴脈先生（遺稿）【序年・序者】天保十二・安穴道人【画
工】溪斎英泉【筆耕】晋上齋熨斗人（序）【奥付等】「弘化元甲辰冬
新板／書林 江戸 丁子屋平兵衛／大坂 河内屋茂兵衛／京都 越
後屋治兵衛／林芳兵衛」

報 繪本高尾外伝 五巻五冊 読本
仇

【著編者】南仙笑楚満人（為永春水）【序年・序者】天保十四・南仙笑楚満人（為永春水）【画工】溪齋英泉【筆耕】晋上齋熨斗人（序）【奥付等】「天保十五甲辰正月吉日／書肆／大阪心齋橋筋安土町角 河内屋儀助／京都三条通麩屋町角 山城屋佐兵衛／尾州名古屋本町 通七丁目 永楽屋東四郎／東都麴町平川二丁目 角丸屋甚助／全小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛」【備考】文政十年刊『紅葉塚』の改題改修本。

広求 和漢書画集覧 一卷一冊 書画

【著編者】広覚道人【序年・序者】弘化元・海西漁夫【筆耕】不詳【奥付等】「大坂書肆 心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛／心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛／安堂寺町 秋田屋太右衛門／東都書肆 日本橋通二丁目 須原屋茂兵衛／同二丁目 山城屋佐兵衛／四日市 山城屋政吉／通二丁目 小林新兵衛／芝神明前 岡田屋嘉七／同 和泉屋市兵衛／十軒店 英大助／横山一丁目 出雲寺万次郎／同 三丁目 和泉屋金右衛門／浅草茅町 須原屋伊八／同 山崎屋清七／大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」

弘化二年（一八四五） 乙巳

大内十杉伝 五輯 五卷五冊 読本
興隆

【著編者】為永春水【序年・序者】①弘化二・二世為永春水②二世為永春水【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】見返しに「浪花／東都 書林 群玉堂／文永堂／文溪堂」とある。

新局玉石童子訓 第一版 三卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】弘化二・曲亭馬琴【画工】歌川豊国【筆耕】谷金川【奥付等】「弘化二年乙巳春正月吉日開板／大坂書肆 心齋橋筋博労町角 河内屋茂兵衛／心齋橋筋南久太郎町 秋田屋市兵衛／江戸書肆 大伝馬町式丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】卷之三上冊に『雛虎新話』『莊蝶翁再遊外記』『開卷驚奇俠客伝』五集の広告あり。また家伝神女湯・精製奇応丸・熊胆黒丸子・婦人つぎ虫の妙薬の広告あり。

新局玉石童子訓 第二版 三卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】弘化二・曲亭馬琴【画工】歌川豊国【筆耕】谷金川【奥付等】「弘化二年乙巳秋八月発行／大坂書肆 心齋橋筋博労町角 河内屋茂兵衛／江戸書肆 大伝馬町式丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】卷之五下冊に『新局玉石童子訓』三版および『開卷驚奇俠客伝』五集の広告あり。また家伝神女湯・精製奇

応丸・熊胆黒丸子・婦人つぎ虫の妙薬の広告あり。

滑稽和合人 四編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】二世為永春水【序年・序者】二世為永春水【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「東都書肆 大伝馬町二丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛」【備考】上巻に「諸先生著編 文溪堂開版目録」を備える。

滑稽夢輔譚 二編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】一筆庵主人【序年・序者】弘化二・一筆庵主人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】上巻に「一筆庵主人新著目録 文溪堂発販」あり。

弘化三年（一八四六） 丙午

新局玉石童子訓 第三版 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】弘化二・曲亭馬琴【画工】歌川豊国【筆耕】谷金川・丸喜知【奥付等】「弘化三年丙午春正月吉日発行／大坂書肆 心斎橋筋博労町角 河内屋茂兵衛／心斎橋筋北久宝寺町 河内屋源七／江戸書肆 大伝馬町式丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】卷十五卷末に『開卷驚奇俠客伝』五集および『新局玉石童子

訓』四版の広告あり。また家伝神女湯・精製奇応丸・熊胆黒丸子・婦人つぎ虫の妙薬の広告あり。

新局玉石童子訓 第四版 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】弘化二・曲亭馬琴【画工】歌川豊国【筆耕】丸喜知・谷金川【奥付等】「書林 京都寺町通仏光寺 河内屋藤四郎／江戸日本橋通壺丁目 須原屋茂兵衛／同式丁目 山城屋佐兵衛／同式丁目 須原屋新兵衛／同四日市 山城屋政吉／同本石町十軒店 英大助／同下谷御成道 英文蔵／同大伝馬町式丁目 丁子屋平兵衛／同芝神明前 岡田屋嘉七／江州八日市 小杉文右衛門／大坂心斎橋筋博労町角 河内屋茂兵衛」【備考】卷二十卷末に『新局玉石童子訓』五版の広告あり。

滑稽夢輔譚 三編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】一筆庵主人【序年・序者】弘化二・一筆庵主人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「版元丁子屋平兵衛」（下巻末）

続俳家奇人談 三卷三冊 俳諧・伝記

【著編者】蓬廬青々山人（著）・八朶園寥松（編）【序年・序者】八朶【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「弘化三丙午年六月発兌／大坂書肆 河内屋喜兵衛／河内屋茂兵衛／江戸書肆 須原屋茂兵衛

／岡田屋嘉七／山城屋佐兵衛／須原屋伊八／丁子屋平兵衛梓」【備考】求版本。

新刻日本輿地路程全図 一鋪 地誌

【著編者】長久保赤水【序年・序者】①安永四・柴邦彦②弘化三・栗原信充【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「弘化三丙午年三月刻成／東都書肆 須原屋茂兵衛／岡田屋嘉七／泉屋市兵衛／山城屋佐兵衛／丸屋善兵衛／丁子屋平兵衛合梓」【備考】安永八年版の再版。

倭大学 一卷一冊 往来物

【著編者】三止坊【序年・序者】天保十四・三止坊【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】見返しに「弘化丙午夏」「江戸書肆 丁子屋平兵衛発兌」とある。

永代年代記大成 一卷一冊 年代記

【著編者】細河並輔【序年・序者】弘化二・山崎美成【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「弘化元辰年春發行／弘化三丙午二月開版／細河並輔編輯／東都 芝神明前 和泉屋市兵衛板／書林 岡田屋嘉七／須原屋茂兵衛／須原屋伊八／山城屋佐兵衛／英大助／丁子屋平兵衛／西宮弥兵衛」

弘化四年（一八四七） 丁未

新局玉石童子訓 第五版 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】弘化三・曲亭馬琴【画工】歌川豊国【筆耕】谷金川【奥付等】「弘化三年丙午冬月刊彫成／四年丁未春正月吉日發行／大坂書肆 心齋橋筋博勞町角 河内屋茂兵衛／江戸書肆 大伝馬町式丁目 丁子屋平兵衛板」【備考】卷之二十五卷末に『新局玉石童子訓』六版の広告あり。また家伝神女湯・精製奇応丸・熊胆黒丸子・婦人つぎ虫の妙薬の広告あり。

滑稽夢輔譚 五編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】一筆庵主人【序年・序者】弘化三・一筆庵主人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「弘化四丁未年新春発兌／江戸大伝馬町式丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛寿梓」

三国東西集 三卷六冊 仏教 因縁

【著編者】不詳【序年・序者】不詳【画工】栗原信兆【筆耕】不詳【奥付等】「弘化四年丁未五月開版／東都書林 須原屋茂兵衛／岡田屋嘉七／丁子屋平兵衛／大坂書林 河内屋平七／河内屋茂兵衛／袋屋亀次郎／皇都書林 村上勘兵衛／須磨勘兵衛／山城屋佐兵衛／丸屋善兵衛／山形屋宇兵衛」【備考】見返しに「弘化二年乙巳新版」「村上平楽寺」とある。

三国
因縁 南北集 三卷六冊 仏教

【著編者】不詳【序年・序者】不詳【画工】栗原信兆【筆耕】不詳
【奥付等】「弘化四年丁未五月開版／東都書林 須原屋茂兵衛／岡田
屋嘉七／丁子屋平兵衛／大坂書林 河内屋平七／河内屋茂兵衛／袋
屋龜次郎／皇都書林 村上勘兵衛／須磨勘兵衛／山城屋佐兵衛／丸
屋善兵衛／山形屋宇兵衛」【備考】見返しに「三都書林」とある。

兵家紀聞 五卷五冊 雜史

【著編者】栗原信充【序年・序者】天保十四・栗原信充【画工】栗原
信兆【筆耕】不詳【奥付等】「弘化四年丁未春發兌／栗原孫之丞信
充著／東都書肆大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛板」

大日本道中細見絵図 一鋪 地誌

【著編者】不詳【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「弘化四年未春
／京都六角通 平野屋茂兵衛／同 大文字屋仙蔵／江戸大伝馬町
丁子屋平兵衛」【備考】後ろ表紙には「江戸大伝馬町 丁子屋平兵
衛／馬喰町 菊屋幸三郎」とある。

弘化五・嘉永元年（一八四八） 戊申

新局玉石童子訓 第六版 五卷五冊 読本

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】弘化四・曲亭馬琴【画工】歌川豊
国【筆耕】谷金川【奥付等】「弘化四年丁未秋月彫成／五年戊申
春正月吉日發行／大坂書肆 心齋橋筋博勞町角 河内屋茂兵衛／心
齋橋筋南久太郎町 秋田屋市兵衛／江戸書肆 大伝馬町式丁目 丁
子屋平兵衛板」【備考】卷三十卷末に『新局玉石童子訓』七版の広
告あり。また家伝神女湯・精製奇応丸・熊胆黒丸子・婦人つぎ虫の
妙薬の広告あり。

奥羽道中膝栗毛 三編 三卷三冊 滑稽本
一覽

【著編者】十返舎一九【序年・序者】弘化五・千柳亭綾彦【画工】蛟
齋北岑【筆耕】不詳【奥付等】「嘉永改元年戊申年六月發兌／書舖
大阪心齋橋筋博勞町角 河内屋茂兵衛／江戸大伝馬町二丁目 丁
子屋平兵衛／同馬喰町二丁目 山口屋藤兵衛／同浅草福井町 山崎
屋清七」

仮名読八犬伝 初編 二卷二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】弘化五・二世為永春水【画工】
歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町式丁目 丁子
屋平兵衛版」【備考】各巻見返しに「弘化五新版」「文溪堂」とある。

仮名読八犬伝 二編 二巻二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】弘化五・二世為永春水【画工】歌川国芳【筆耕】董仙【奥付等】「文溪堂 大伝馬町式丁目 丁子屋平兵衛版」【備考】上巻表紙に「弘化五申新板」、各巻見返しに「文溪堂梓」とある。

仮名読八犬伝 三編 二巻二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】弘化五・二世為永春水【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町式丁目 丁子屋平兵衛版」【備考】各巻見返しに「文溪堂」とある。

随筆 春雨譚 五巻五冊 随筆 奇事

【著編者】高井蘭山【序年・序者】天保十四・高井蘭山【画工】速水春暁斎【筆耕】不詳【奥付等】「嘉永元歳申十月／京都書肆 丸屋善兵衛／榎屋勘兵衛／近江屋佐太郎／経師屋太七／山城屋佐兵衛／大阪書肆 河内屋平七／江戸書肆 丁子屋平兵衛」【備考】奥付に『人未末一生記』『諸陰陽集』の広告あり。見返しに「嘉永元年戊申晩春刻成」「三都書肆 五山堂合梓」とある。

閑度雑談 三巻三冊 随筆

【著編者】中村弘毅【序年・序者】嘉永元・嶋田周忠【筆耕】不詳【奥付等】「天保三辰年御免／嘉永元年申四月刻成／大坂書林 河内屋茂兵衛／江戸書林 丁子屋平兵衛／京都書林 亀屋善兵衛／菱屋正次郎／丁子屋源次郎」

改正 商売往来 一巻一冊 往来物 新刻

【著編者】不詳【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「嘉永元戊申年五月新刻／東都書肆 大伝馬町二丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛板」

嘉永二年（一八四九） 己酉

開巻驚奇侠客伝 五集 五巻五冊 読本

【著編者】萩原広道（蒜園主人）【序年・序者】嘉永二・萩原広道【画工】柳川重信【筆耕】不詳【奥付等】「京都書林 二條通堀川下ル 越後屋治兵衛／東都書林 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛／浪華書林 心斎橋筋本町 河内屋藤兵衛／心斎橋筋博労町 河内屋茂兵衛板」【備考】見返しには「羣玉堂精刊」とある。巻五巻末に『開巻驚奇侠客伝』六集の広告あり。

左刀奇談 五巻五冊 読本

【著編者】池田東籬(校合)・手塚兎月(遺稿)【序年・序者】池田東籬【画工】松川半山【筆耕】不詳【奥付等】「嘉永二己酉歲初春発兌／京都書舗 山城屋佐兵衛／浪華書肆 藤屋善七／秋田屋市兵衛／藤屋禹三郎／江都書房 須原屋茂兵衛／丁子屋平兵衛／版元 本屋又助」【備考】見返しには「嘉永己酉春／三書堂発兌」とある。

奥羽道中膝栗毛 四編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】十返舎一九【序年・序者】嘉永二・百舌鳥廼屋【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「嘉永二年己酉正月／発行書房 大阪心齋橋筋博労町角 河内屋茂兵衛／江戸大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛／同馬喰町式丁目 山口屋藤兵衛／同浅草福井町壹丁目 山崎屋清七」【備考】奥付に『奥羽道中膝栗毛』五編の広告あり。

仮名読八犬伝 四編 二卷二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】嘉永二・二世為永春水【画工】歌川国芳【筆耕】金交【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛版」【備考】上巻表紙に「嘉永二年酉新板」、各巻見返しに「文溪堂梓」とある。

仮名読八犬伝 五編 二卷二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】嘉永二・二世為永春水【画

工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛版」【備考】各巻見返しに「嘉永二年酉新板」「文溪堂(梓)」とある。

仮名読八犬伝 六編 二卷二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】嘉永二・二世為永春水【画工】歌川国芳【筆耕】金交【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛版」【備考】上巻表紙に「嘉永二年酉新板」とある。

仮名読八犬伝 七編 二卷二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】嘉永二・為永春水【画工】歌川国芳【筆耕】董仙【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】各巻見返しに「文溪堂(梓)」とある。

風錦のし 一巻一冊 歌謡

【著編者】不詳【画工】橘庵貞房【筆耕】不詳【奥付等】「嘉永二年己酉初春発行／江戸 丁子屋平兵衛／京 丸屋善兵衛／大坂 河内屋藤兵衛／心齋橋博労町 河内屋茂兵衛」【備考】柱題は「一休二へん」。奥付に『一休繪本狂哥問答』『繪本新柳樽』の広告あり。

掌中増補 千代尼発句集 一巻一冊 俳諧

【著編者】 關更【序年・序者】 宝曆十三・關更【跋年・跋者】 嘉永二・直山大夢【筆耕】 不詳【奥付等】「加陽 金沢上堤町 八尾屋喜兵衛／同安江町 近岡屋太兵衛／東都 本石町十軒店 英大助／大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛／浅草福井町 山崎屋清七／下谷池之端仲町 東国屋長五郎」【備考】 見返しに「笈古堂梓」とある。

嘉永三年（一八五〇） 庚戌

仮名読八犬伝 八編 二卷二冊 合巻

【著編者】 二世為永春水【序年・序者】 嘉永三・二世為永春水【画工】 歌川国芳【筆耕】 董仙・金交【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】 下巻見返しに「文溪堂」とある。

仮名読八犬伝 九編 二卷二冊 合巻

【著編者】 二世為永春水【序年・序者】 嘉永三・二世為永春水【画工】 歌川国芳【筆耕】 不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】 上巻表紙に「嘉永三戊辰板」、各巻見返しに「文溪堂」とある。

仮名読八犬伝 十編 二卷二冊 合巻

【著編者】 二世為永春水【序年・序者】 嘉永三・二世為永春水【画工】 歌川国芳【筆耕】 不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】 下巻表紙に「嘉永三庚戌春新板」、下巻見返しに「文溪堂梓」とある。

改正大増補早引永代節用集 二卷二冊 俳諧

【著編者】 山崎美成【序年・序者】 天保元・北峰成【画工】 不詳【筆耕】 中村源八【奥付等】「天保十四卯年新刻／嘉永三戊辰再刻／発行書房 大阪 河内屋茂兵衛／秋田屋太右衛門／江戸 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／小林新兵衛／岡田屋嘉七／出雲寺万次郎／和泉屋金右衛門／須原屋伊八／山崎屋清七／和泉屋市兵衛／大伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛版」【備考】 求版本。見返しに「文溪堂」とある。

嘉永四年（一八五二） 辛亥

仮名読八犬伝 十一編 二卷二冊 合巻

【著編者】 二世為永春水【序年・序者】 嘉永四・二世為永春水【画工】 歌川国芳【筆耕】 不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】 上巻表紙に「嘉永四辛亥新春」、各巻見返しに「文溪堂（梓）（版）」とある。

仮名読八犬伝 十二編 二巻二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】嘉永四・二世為永春水【画

工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目

丁子屋平兵衛【備考】上巻見返しに「嘉永四辛亥初春新刻」、各巻

見返しに「文溪堂（板）」とある。

仮名読八犬伝 十三編 二巻二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】嘉永四・二世為永春水【画

工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目

丁子屋平兵衛【備考】下・巻見返しに「嘉永四辛亥初春」、各巻見

返しに「文溪堂（版）（梓）」とある。

仮名読八犬伝 十四編 二巻二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】嘉永四・二世為永春水【画

工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目

丁子屋平兵衛【備考】下巻見返しに「嘉永四辛亥初春」、各巻見返

しに「文溪堂（寿梓）（梓）」とある。

雨窓閑話 三巻三冊 随筆

【著編者】不詳【序年・序者】嘉永四・河田興【跋年・跋者】小林畏

堂【筆耕】河田興（序）【奥付等】「嘉永四辛亥十月／京都 五条寺

町 勝村治右衛門／大阪 心斎橋北久太郎町 河内屋喜兵衛／同博

勞町 河内屋茂兵衛／東都 大伝馬町 丁子屋平兵衛／芝神明前

和泉屋吉兵衛梓【備考】見返しに「嘉永辛亥新鑄」「東都書肆 名

山閣」、奥付に「小林重介改読」とある。

纏雛形 一巻一冊 消防

【著編者】紀賤丸【序年・序者】嘉永四・紀賤丸【画工】紀賤丸【筆

耕】不詳【奥付等】「嘉永四亥年春刊行／柎亭賤丸図／書林 大伝

馬町二丁目 丁子屋平兵衛」

増補 夢合長寿宝 一巻一冊 卜占

【著編者】松亭金水【序年・序者】嘉永四・松亭金水【筆耕】不詳【奥

付等】「東都書林 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛版」【備考】見返

しに「東都文溪堂発兌」とある。『早引永代節用集大全』『万代大雑

書懷宝曆』『御鬮判断鈔』『古状揃講釈』『夢合長寿宝』の広告あり。

嘉永五年（一八五二） 壬子

仮名読八犬伝 十五編 二巻二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】嘉永五・二世為永春水【画

工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目

丁子屋平兵衛【備考】下巻見返しに「文溪堂寿梓」とある。

仮名読八犬伝 十六編 二巻二冊 合巻

【著編者】二世為永春水【序年・序者】嘉永五・二世為永春水【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】各巻見返しに「文溪堂(版)(梓)」とある。

農業自得 二巻二冊 農業

【著編者】田村吉茂【序年・序者】天保十二・平田篤胤【筆耕】不詳【奥付等】「嘉永五年壬子新刻／大坂 心齋橋通北久太郎町 河内屋善兵衛／同博労町 茂兵衛／同筋木町角 河内屋藤兵衛／江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／同二丁目 山城屋佐兵衛／同小林新兵衛／芝神明前 岡田屋嘉兵衛／本石町十軒店 英大助／大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛／横山町三丁目 和泉屋金右衛門／浅草茅町二丁目 須原屋伊兵衛／筋違御門外旅籠調一丁目 紙屋徳八」【備考】見返しに「東都書林 智新堂發行」とある。

嘉永六年(一八五三) 癸丑

楠家木石余譚 第一輯 六巻六冊 読本
外伝

【著編者】曲亭馬琴(閲)・伊藤丹丘(校合)・斎藤湖南(編述)【序年・序者】①弘化元・曲亭馬琴②黒田梁洲【跋年・跋者】斎藤湖南【画工】斎藤湖南【筆耕】伊藤丹丘【奥付等】「嘉永六年丑春発兌書誌／東武 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／浪華 心齋橋筋北久太郎町 秋田屋市兵衛／全 心齋橋筋本町角 河内屋藤兵衛／皇都寺町通五条上ル 山城屋佐兵衛」【備考】見返しに「文政堂梓」とある。

仮名読八犬伝 十七編 二巻二冊 合巻

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】嘉永六・曲亭琴童【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】見返しは歌川芳幾画。上巻見返しに「文溪堂蔵」とある。

仮名読八犬伝 十八編 二巻二冊 合巻

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】嘉永六・曲亭琴童【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】見返しは歌川芳幾画。

文溪古状永代宝 一巻一冊 往来物

【著編者】不詳【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「嘉永六年丑春

再刻／大伝馬町式丁目 丁子屋平兵衛板【備考】『増万代大雑書懷
宝曆』『夢合長寿盃』『大日本輿地全図』『暦日注解』『商人用文章』
『元三御鬮判断抄』『庭訓往来絵抄』『古状揃講釈』の広告あり。
大師

庭訓往来絵抄 一卷一冊 往来物

【著編者】不詳【画工】広貫斎【筆耕】不詳【奥付等】「天保十三年
寅正月新刻／嘉永六年丑十月再刻／東都書林 大伝馬町二丁目 丁
子屋平兵衛板」【備考】『増万代大雑書懷宝曆』『夢合長寿盃』『大日
本輿地全図』『暦日注解』『商人用文章』『元三御鬮判断抄』『庭訓往
来絵抄』『古状揃講釈』の広告あり。

嘉永七年・安政元年（一八五四） 甲寅

仮名読八犬伝 十九編 二卷二冊 合卷

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】嘉永七・曲亭琴童【画工】歌川国
芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵
衛」【備考】下巻見返しに「文溪」とある。

仮名読八犬伝 二十編 二卷二冊 合卷

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】嘉永七・曲亭琴童【画工】歌川国
芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵

衛」【備考】各巻見返しに「文溪堂板」とある。

仮名読八犬伝 二十一編 二卷二冊 合卷

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】嘉永七・曲亭琴童【画工】歌川国
芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵
衛」【備考】各巻見返しに「文溪堂梓」とある。

安政二年（一八五五） 乙卯

浮世滑稽 質屋雀 二編 二卷二冊 滑稽本

【著編者】葎窓貞雅【序年・序者】葎窓貞雅【画工】富士川船麿【筆
耕】不詳【奥付等】「乙卯之春 京橋弥左衛門町 大嶋屋伝右衛門
／下谷御成道 紙屋徳八／目白坂 万屋弥吉／大伝馬町二丁目 丁
子屋平兵衛」

仮名読八犬伝 二十二編 二卷二冊 合卷

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】嘉永八・曲亭琴童【画工】歌川国
芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵
衛」【備考】各巻見返しに「文溪堂（梓）」とある。

安政三年（一八五六） 丙辰

笠松峠鬼神敵討 一二巻一冊 読本

【著編者】松風亭琴調【序年・序者】安政三・松亭金水【画工】歌川国芳【奥付等】未見【備考】見返しに「東都書肆 文溪堂梓」とある。

仮名読八犬伝 二十三編 二巻二冊 合巻

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】安政三・曲亭琴童【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」

安政四年（一八五七） 丁巳

仮名読八犬伝 二十四編 二巻二冊 合巻

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】曲亭琴童【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「東都書林 文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】刊年は仮の判断。

仮名読八犬伝 二十五編 二巻二冊 合巻

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】安政四・曲亭琴童【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「東都書林 文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」

仮名読八犬伝 二十六編 二巻二冊 合巻

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】曲亭琴童【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「東都書林 文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】刊年は仮の判断。

安政五年（一八五八） 戊午

仮名読八犬伝 二十七編 二巻二冊 合巻

【著編者】曲亭琴童【序年・序者】曲亭琴童【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】「東都書林 文溪堂 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」【備考】各巻見返しに「文溪堂梓」とある。

積翠閑話 四巻四冊 隨筆

【著編者】中村経年（松亭金水）【序年・序者】嘉永二・鸚溪樵夫枚【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「安政五戊午年立春発行／三都書肆 京麩屋町通姉小路上ル 俵屋清兵衛／同三条通御幸町角 吉野屋仁兵衛／大坂心齋橋筋博芳町 河内屋茂兵衛／同心齋橋筋本町角

河内屋藤兵衛／江戸大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛【備考】見返しに「書肆 文溪堂／群鳳堂」とある。

安政六年（一八五九） 己未

本朝錦繡談図会 五卷五冊 読本

【著編者】池田東籬【序年・序者】安政六・和菊久公【画工】梅川東
【筆耕】不詳【奥付等】「安政六己未年九月刻成／三都発行書房
江戸 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／岡田屋嘉七／丁子屋平兵衛
／菊屋幸三郎／大嶋屋伝右衛門／大和屋喜兵衛／京 山城屋佐兵衛
／越後屋治兵衛／大阪 河内屋藤兵衛／河内屋茂兵衛」

安政七年（一八六〇） 庚申

役者商売往来 三卷三冊 役者評判記

【著編者】俳優堂夢遊【筆耕】不詳【奥付等】「板元 江戸大伝馬町二
丁目 丁子屋平兵衛／大坂心齋橋南本町北江入 河内屋平七」【備
考】内題は「俳優商売往来」。

役者新世帯 三卷三冊 役者評判記

【著編者】戲場堂夢遊【筆耕】不詳【奥付等】「安永七年庚申三月／
板元 江戸大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛／京四条寺町西へ入丁
吉野屋勘兵衛／大坂心齋橋南本町 河内屋平七」

万延二・文久元年（一八六一） 辛酉

傍廂 前集 三卷三冊 隨筆

【著編者】齋藤彦磨【序年・序者】嘉永六・齋藤彦磨【画工】不詳
【筆耕】不詳【奥付等】「官許 齋藤氏藏板／万延二年酉孟春 発行
書肆 大坂心齋橋博労町 河内屋茂兵衛／同久宝寺町 河内屋源七
郎／同心齋橋南江壹丁目 秋田屋市兵衛／江戸日本橋通壹丁目 須
原屋茂兵衛／同通貳丁目 山城屋佐兵衛／同芝神明前 岡田屋嘉七
／同大伝馬町貳丁目 丁子屋平兵衛／同京橋弥左衛門町 大島屋伝
右工門」

役者研言草 三卷三冊 役者評判記

【著編者】戲場堂夢遊・梅月亭有蝶【序年・序者】戲場堂夢遊【筆
耕】不詳【奥付等】「江戸大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛／名古屋
本町 金網屋伴七／大坂心齋橋南本町 河内屋平七／万延二年酉正

月吉日」

慶応三年（一八六七） 丁卯

風狂文艸 五卷三冊 俳諧

【著編者】田中水友子【序年・序者】延享二・田中水友子【奥付等】「慶応三庚戌正月／東都 丁子屋平兵衛／京都 枡屋勘兵衛／丸屋善兵衛／浪花 河内屋平七板」【備考】延享二年刊大野木市兵衛版を求版力。

文久三年（一八六三） 癸亥

役者日本鑑 三卷三冊 役者評判記

【著編者】戲場堂夢遊【筆耕】不詳【奥付等】「板元 大坂心齋橋南本町北江入 河内屋平七／京四条通寺町西江入 吉野屋勘兵衛／尾州名古屋本町十一丁目 金網金網屋伴七／江戸大伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／文久三亥年正月吉日」

明治二年（一八六九） 己巳

名乗字引 一卷一冊

【著編者】高井蘭山【序年・序者】高井蘭山【筆耕】不詳【奥付等】「嘉永二年己酉発兌／明治二年己巳再刻／東京書肆 須原屋茂兵衛／須原屋伊八／山城屋佐兵衛／小林新兵衛／岡田屋嘉七／和泉屋吉兵衛／丁子屋平兵衛／和泉屋金右工門／出雲寺万次郎／森屋治兵衛／山口屋藤兵衛／藤岡屋慶次郎／山崎屋清七／吉田屋文三郎」

硝石製煉法 一卷一冊 火術

【著編者】平野元亮（桜寧居士）【序年・序者】漁村老人【画工】福島隣春【筆耕】不詳【奥付等】「文久三癸亥年／東都書林 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／小林新兵衛／岡田屋嘉七／和泉屋吉兵衛／内野屋弥平治／播磨屋勝五郎／英文蔵／須原屋伊八／和泉屋金右衛門／丁子屋平兵衛発兌」【備考】見返しに「書肆 文溪堂発兌」、巻末に「文久三癸亥年／平野元亮著蔵」とある。

明治三年（一八七〇） 庚午

童蒙 漢語図解 初編 一卷一冊
必携

【著編者】山々亭有人【序年・序者】明治三・山々亭有人【画工】歌川芳幾【筆耕】不詳【奥付等】「明治三午年秋発行／官許／東京書肆 丁子屋平兵衛／丁子屋善五郎／丁子屋忠七」【備考】見返しに「東京書肆 文玉堂／文鱗堂」とある。

童解英語図会 初帙 一卷一冊

【著編者】山々亭有人【序年・序者】明治三・山々亭有人【画工】歌川芳幾【筆耕】不詳【奥付等】「東京書林 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／岡田屋嘉七／和泉屋市兵衛／丁子屋平兵衛／藤岡屋慶治郎／森屋治兵衛／山口屋藤兵衛／大嶋屋伝右工門」【備考】見返しに「東京書房 文永堂梓」とある。

明治四年（一八七二） 辛未

童解英語図会 貳帙 一卷一冊

【著編者】山々亭有人【序年・序者】明治四・山々亭有人【画工】歌川芳幾【筆耕】不詳【奥付等】「東京書林 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／岡田屋嘉七／和泉屋市兵衛／丁子屋平兵衛／藤岡屋慶治郎／森屋治兵衛／山口屋藤兵衛／大嶋屋伝右工門」【備考】見返しに「東京書肆 文永堂梓」とある。

明治六年（一八七三） 癸酉

朝鮮国細見全図 一舗

【著編者】不詳【奥付等】「明治六年癸十月／東京書肆 出雲寺万次郎／丁子屋平兵衛／大島屋伝右衛門／丁子屋善五郎／丁子屋忠七 発兌」【備考】『朝鮮事情』の広告あり。

陽曆漢語月儀要文 一卷一冊

【著編者】萩原乙彦【序年・序者】明治六・萩原乙彦【筆耕】不詳【奥付等】「明治六年夏四月／東京書肆 弥左衛門町 大寫屋伝右衛門／東京書林 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／小林新兵衛／和泉屋市兵衛／岡田屋嘉七／浅倉屋久兵衛／須原屋伊八／山口屋藤兵衛／森屋治兵衛／藤岡屋慶次郎／丁子屋平兵衛／椀屋喜兵衛／大嶋屋伝右衛門」

開智童子通 一卷一冊

【著編者】一貫斎【序年・序者】一貫斎【筆耕】不詳【奥付等】「紀元二千五百三十三年／明治六年／東京書肆 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛梓」【備考】見返しに「東京書肆 文溪堂発兌」とある。

明治八年（一八七五） 乙亥

近來支那新報 一卷一冊

【著編者】藤井淑【序年・序者】藤井淑カ【筆耕】不詳【奥付等】「明治八年一月／丁子屋平兵衛／山城屋佐兵衛」【備考】見返しには「二酔舎蔵板」とある。

明治九年（一八七六） 丙子

合衆国民業律 五卷五冊

【著編者】抵巴留孫（原著）・藤田九二（訳述）【画工】①明治九・三島毅②明治八・藤田九二【筆耕】高木春園（序）【奥付等】「明治八年十一月十三日版權免許／明治九年五月十日出版／定価一円廿五銭／訳述人 東京第四大区表小区神田淡路町二丁目式番地 藤田九二／出版人 同第四大区三小区 青山清吉／東京書林 出雲寺万次郎／太田金右衛門／大溪平兵衛／北沢伊八／山崎勝蔵／岡村莊助／別所平七／太田勘右衛門／牧野吉兵衛／牧野善兵衛／稲田佐兵衛／青山清吉」【備考】卷一見返しに「明治九年 玉山堂／青山堂 発兌」とある。

小学用文填字法 一卷一冊

【著編者】波多野英一【画工】①明治九・波多野英一【筆耕】片桐霞峰【奥付等】「明治九年十二月廿日版權免許／編輯人 第五大区六小区下谷南稻荷町五十八番地加納敬慎方寄留 波多野英一／出版人 第一大区十四小区大伝馬町二丁目四番地 大溪平兵衛」【備考】見返しに「東京書肆 文溪堂蔵版」とある。

明治十四年（一八八一） 辛巳

暁齋鈍画 初編 一卷一冊

【著編者】河鍋暁齋【画工】河鍋暁齋【奥付等】「明治十四年四月廿一日版權免許／同年八月出版／画工 東京府平民 本郷区湯島四丁目二十二番地 河鍋洞郁／出版人 東京府平民 日本橋区通式町目二十番地 増山尚義／発兌 神田区紺屋町三十五番地 朝野文三郎／大溪平兵衛」

刊年不明

滑稽和合人 二編 二卷三冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】滝亭鯉丈【画工】歌川景松・静斎英一【筆耕】音成【奥付等】「江戸書林 馬喰町二丁目角 西村屋

与八／伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛【備考】下巻末に『清談花勝見』の広告あり。

松月拾遺の玉川 三卷三冊 人情本
露談

【著編者】為永春水【序年・序者】清の江津賀女【画工】歌川国直
【筆耕】松亭金水【奥付等】「江戸書林 馬喰町二丁目角 西村屋与八／小伝馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛 全梓」【備考】下巻末に「教訓亭著編 文溪堂上梓新板目錄」あり。

春色湊の花 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見

春色湊の花 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】中巻末に『春告鳥籠之梅 拾遺加寿美の里』天竺篤瓶環海異聞』と売薬「花橋」の広告あり。

春色湊の花 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十二・為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見

春色湊の花 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見

春色湊の花 五編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】不詳【画工】鶯齋梅児【筆耕】不詳【奥付等】未見

春色鶯日記 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「全志書林 江州八日市 小杉文右衛門／江戸 大島屋伝衛門／丁子屋平兵衛／大坂 河内屋茂兵衛」

出像稗史外題鑑 一枚 書目

【著編者】一楊軒玉山【序年・序者】一楊軒玉山【筆耕】千形仲道【奥付等】「東都書賈 蔦屋重三郎／丸屋文右衛門／鶴屋金助／大坂 塩屋長兵衛／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛」

訂曆日註解 一卷一冊 曆

【著編者】松亭金水【序年・序者】松亭金水【画工】不詳【筆耕】不詳

【奥付等】「東都書林 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛版」【備考】

『早引永代節用集大全』『万代大雑書懷宝曆』『御鬮判断鈔』『古状揃講釈』『夢合長寿宝』の広告あり。見返しに「嘉永新鑄増補」とみえる。

増補 元三大師御鬮判断鈔 一巻一冊 占卜

【著編者】不詳【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「東都書林 大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛版」【備考】『早引永代節用集大全』『万代大雑書懷宝曆』『御鬮判断鈔』『古状揃講釈』『夢合長寿宝』の広告あり。

幼学
必読 文鴻商売往来 一巻一冊 往来物

【著編者】不詳【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「江戸書林 文溪堂／文鴻堂合梓」【備考】見返しに「安政新刻」「誤字改正 文鴻堂蔵板」とある。

正風遠州流挿花独稽古 一巻一冊 花道

【著編者】貞松齋米一馬【序年・序者】文化三・貞松齋米一馬【跋年・跋者】文化三・碎花山人【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「文化三丙寅歳春二月／（中略）／江戸書林 本石町二丁目 西村源六／日本橋南二丁目 小林新兵衛／小伝馬町三丁目 丁子屋平兵

衛」【備考】求版本。

第二節 大島屋伝右衛門出版書目年表稿

凡例

- 一、文永堂大島屋伝右衛門が出版に携わった書籍のうち、現段階で確認できたものを年代順に記載した。
- 一、大島屋が求版した書籍についても、その年代の明らかなものは記載した。
- 一、書名ごとに立項し、分類と員数に加え、書誌事項を次の項目に従って示した。

- 【著編者】…著者・編者・校閲者等を通行の名に改めて示した。
- 【序年・序者】…序文の記された年・序文を記した人物を示した。
- また、序文が複数ある場合は、①・②・③とそれぞれ項目を設けた。
- 【跋年・跋者】…跋文の示された年・跋文を記した人物を示した。
- 【画工】…通行の名に改めた画工名を示した。
- 【筆耕】…通行の名に改めた筆耕名を示した。
- 【奥付等】…奥付を抜粋した。奥付を確認できていない場合は「未

見」とした。

【備考】…特記すべき事項を示した。

- 一、【序年・序者】【跋年・跋者】【画工】【筆耕】【備考】の項目は、該当する書誌事項がない場合は省略した。
- 一、明治以降は基本的に分類の項を省略した。

文化十二年（一八一五） 乙亥

御利生正札附千社参 初編 二卷二冊 滑稽本

【著編者】 振鷺亭 【序年・序者】 ①振鷺亭②文化十二・米々斎 【画工】 歌川国芳 【筆耕】 不詳 【奥付等】 「文化十二乙亥歳正月発兌／江戸書賈 和泉屋市兵衛／三崎屋清吉／中村屋幸蔵／大島屋伝右衛門梓」 【備考】 内題次行には「米々斎述」とあるが、おそらくこれ

は振鷺亭の別号。なお、見返し・口絵には「江戸書賈 文耕堂梓」
「板元文耕堂」とそれぞれある。

文政二年（一八一九） 己卯

籠細工はなし 一巻一冊 咄本

【著編者】古今亭三鳥【序年・序者】①式亭三馬②古今亭三鳥【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「江戸書房 弁けいはし 丸屋文右衛門」としま町 加賀屋佐兵衛／やざへもん町 大嶋屋伝右衛門【備考】宮尾しげを編注『東洋文庫196 江戸小咄集』二（平凡社、一九七一年）による。

文政三年（一八二〇） 庚辰

花八笑人 初編 二巻二冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】琴通舎英賀【画工】溪斎英泉・歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】巻二巻末に滝亭鯉丈作『栗毛後駿足』三編の近刊予告あり。また後印本には『人心視機関』後編の広告が備わる。

文政四年（一八二二） 辛巳

斯波遠説七長臣 五巻六冊 読本

【著編者】梅暮里谷峨【序年・序者】文政三秋・烏有山人【画工】歌川国直・溪斎英泉・直繁・国雪【筆耕】田中正蔵・嶋田道友【奥付等】「大坂書房 心斎橋筋唐物町 河内屋太助／久太郎町北江入 河内屋平七／京都書房 寺町錦上ル 伏見屋半三郎／江戸書房 人形町通乗物町 鶴屋金助／日本橋砥店 大坂屋茂吉／橋町二丁目 越前屋長次郎／弥左エ衛門町 大嶋屋伝右衛門」【備考】大坂本屋仲間記録「出勤帳」文政四年十一月廿日の項に「同人（引用者注 河内屋太助）と、斯波遠説七長臣出本持参、添章認置」（大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第三巻、清文堂出版、一九七七年）とあることから、藤沢毅氏は本書の刊年を文政五年としている（『翻刻 斯波遠説七長臣』尾道市立大学芸術文化学部日本文学科近世文学原典講読ゼミ、二〇一八年）。だが、文政五年の刊記を持つ本を確認できない以上、本書の刊年は文政四年とすべきであろう。

奇談園の梅 五巻五冊 読本

【著編者】梅園主人【序年・序者】文政四・梅園主人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政四巳年季秋／江戸書房 人形町通乗物町 鶴屋金助／弥左エ門町 大嶋屋伝右衛門」【備考】雲府観天歩作『邂逅物語』（寛政九年刊）の改題改修本。

花八笑人 二編 二卷二冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】①文政四・大八海老人②文政四・滝亭鯉丈【画工】溪斎英泉・歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】上卷に一筆庵主人作『松の操物語』、同作『松操 鼻山情の聞書』（『貞烈竹節談』か）の広告および『明烏後正夢』二編、鼻山人作『言葉花』の近刊予告あり。

生死流転 玉散袖 五卷五冊 人情本

【著編者】東里山人（鼻山人）【序年・序者】文政四・東里山人（鼻山人）【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政四辛巳歳春発兌／東都書肆 鶴屋金助／大阪屋茂吉／加賀屋佐兵衛／大島屋伝右衛門梓」【備考】下巻末に「文永堂蔵版目録」を備える。

人生栄枯 松の操物語 三卷三冊 人情本

【著編者】一筆庵主人【序年・序者】文政三・一筆庵主人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政四辛巳歳孟春／江戸書賈 神田弁慶橋 丸屋文右衛門／同豊嶋町 加賀屋佐兵衛／京橋弥左エ門町 大寫屋伝右エ門版」【備考】下巻末に一筆庵主人作『貞烈竹節談』の広告あり。また「文永堂新鑄目録」を備える。

文政五年（一八二二） 壬午

木曾義仲 鼎臣録 初編 五卷五冊 読本

【著編者】瀬川如臯【序年・序者】①文政五・散木居士②文政五・瀬川如臯【画工】溪斎英泉【筆耕】藍庭晋米・田中正造・千形道友【奥付等】「文政壬午陽旦発行同志東都書房 馬喰町 永寿堂西村屋与八／乗物町 双鶴堂鶴屋金助／通油町 仙鶴堂鶴屋喜右衛門／日本橋 文魁堂 大坂屋茂吉／長者町 連玉堂加賀屋源助／弥左衛門町 文永堂大島屋伝右衛門／新泉町 文亀堂 伊賀屋勘右衛門／松坂町 平林堂 平林庄五郎／小伝馬町 文溪堂丁子屋平兵衛／文政五年壬午閏正月発鬻 江戸書房 青林堂越前屋長次郎」【備考】巻五巻末に『鼎臣録』二編の近刊予告あり。

全伝 玉菊花街鑑 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政五・鼻山人【画工】白水漁人【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】下巻末に『契情買伝授の巻』の近刊予告あり。

文政六年（一八二三） 癸未

相馬将門 総援借語 五卷五冊 読本

【著編者】瀬川如阜【序年・序者】文政五・為一陳人【画工】溪斎英泉【筆耕】瀧埜音成・千形道友・田中正道【奥付等】「文政六稔癸未春正月発兌／新春喜慶大吉利市／東都書肆 耕書堂 蔦屋重三郎／青林堂 越前屋長次郎／木蘭堂 榎本平吉／双鶴堂 鶴屋金助／文溪堂 丁子屋平兵衛／平川館 伊勢屋忠右衛門／文永堂 大島屋伝右衛門／永寿堂 西村屋与八郎」【備考】卷末に『総媛借語』二編の近刊予告あり。奥付の「文政六稔」を「文政七稔」とするものもある。

花 八笑人 三編 二卷二冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】馱亭駒人【画工】溪斎英泉・歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】上卷に滝亭鯉丈作『和合人』初編、滝亭鯉丈・南仙笑楚満人作『千社参利生札数』の広告あり（「文永堂開販目録」）。

滑 和合人 初編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】溪斎英泉【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政六癸未年正月吉日発行／人形町乗物町 双鶴堂 鶴屋金助／橘町二丁目 青林堂 越前屋長次郎／馬喰町二丁目 永寿堂 西村屋与八郎／小伝馬町三丁目 耕書堂 蔦屋重三郎／京橋弥左衛門町 文永堂 大嶋屋伝右エ門／小伝馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛」【備考】上卷に「諸先生著編 文溪堂開販

目録」を備える。

契情意味張月 前編 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政六・鼻山人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見

契情意味張月 後編 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】鼻山人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見

文政七年（一八二四） 甲申

花 八笑人 三編追加 二卷二冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】琴通舎英賀【画工】溪斎英泉・歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】「文政七稔甲申陽春発販冊子／江戸書賈 双鶴堂 鶴屋金助／青林堂 越前屋長次郎／文永堂 大島屋伝右エ門」【備考】下卷末に滝亭鯉丈作『牛島土産』、馱亭駒人・滝亭鯉丈・南仙笑楚満人・東里山人作『秋雨物語』の広告あり。

滑 牛島土産 三卷三冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】①文政七春・南仙笑楚満人②文政

七・滝亭鯉丈【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政七稔甲申陽春発販冊子／江戸書賈 双鶴堂 鶴屋金助／文永堂 大島屋伝右衛工門／青林堂 越前屋長次郎」【備考】下巻巻頭に『花八笑人』三編追加、滝亭鯉丈作『浮世床』四編、南仙笑楚満人作『錦本草紙』、巻末に滝亭鯉丈作『祇園ばやし俄当振』、『牛島土産』、『秋雨物語』の広告あり。

貞烈竹の節談 三卷三冊 人情本

【著編者】南仙笑楚満人・馱亭駒人【序年・序者】琴通舎英賀【画工】溪斎英泉【筆耕】瀧野音成【奥付等】「文政七申春発兌／江戸書房 人形町乗物町 鶴屋金助／日本橋砥石店 大坂屋茂吉／橘町二丁目 越前屋長次郎／弥左エ門町 大嶋屋伝右エ門」【備考】下巻末に難船章楚満人作『松廼操演説梅香物語』の近刊予告あり。
第三輯

文政八年（一八二五） 乙酉

風俗粹好伝 前編 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政八春・鼻山人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見

風俗粹好伝 後編 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政八春・鼻山人【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】上巻挿絵に「大寫伝」とある千社札が描かれている。

契情肝粒志 初編 二卷二冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政八春・味吐山人【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】下巻巻末に『廓遊女』〔契情肝粒志〕二編の広告あり。

文政九年（一八二六） 丙戌

幼婦孝義録 第一輯 五卷五冊 読本

【著編者】南仙笑楚満人【序年・序者】文政九・藍水漁隠【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政九稔戌春発兌／大吉利市／東都書肆 馬喰町二丁目角 西村屋与八郎／橘町二丁目 越前屋長次郎／京橋弥左エ門町 大島屋伝右衛門」【備考】巻二挿絵に「大寫屋」とみえる。

幼婦孝義録 第二輯 五卷五冊 読本

【著編者】南仙笑楚満人【序年・序者】文亭綾継【画工】溪斎英泉
【筆耕】不詳【奥付等】「于時文政九丙戌孟旦／東都 物の本版元
文永堂寿梓」【備考】奥付を「文政十稔亥春発兌／大吉利市／東武
書肆 馬喰町二丁目 西村屋与八郎／橋町二丁目 越前屋長次郎／
京橋弥左衛門町 大島屋伝右衛門」とするものもある。

伊勢土産二見盃 二巻二冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】滝亭鯉丈【画工】春川英笑【筆
耕】瀧野音成【奥付等】「江戸書肆 馬喰町二丁目角 西村屋与八
／下谷長者町一丁目 加賀屋源助／京橋弥左エ門 大島屋伝右衛門
／通油町 越前屋長次郎」【備考】下巻巻末に滝亭鯉丈作『家花王
傾城姿』の近刊予告あり。

契情肝粒志 二編 三巻三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】四方人【画工】不詳【筆耕】不詳
【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

契情肝粒志 三編 三巻三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政九春・鼻山人【画工】英斎泉寿
【筆耕】不詳【奥付等】未見

余興 廓鑑花街寿々女 三巻三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政九春・鼻山人【画工】溪斎英
泉【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】鼻山人作『花街鑑』の続編。
下巻巻末に鼻山人作『通子弁解廓論語』の広告あり。

永明 廓雑談 初編 三巻三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政九・鼻山人【画工】白水漁人
【筆耕】不詳【奥付等】未見

永明 廓雑談 二編 三巻三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政九春・鼻山人【画工】白水漁人
【筆耕】不詳【奥付等】未見

永明 廓雑談 三編 三巻三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政九秋・鼻山人【画工】白水漁人
【筆耕】不詳【奥付等】未見

文政十年（一八二七） 丁亥

山陽 千代物語 前編 五巻五冊 読本
奇談

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政十・東里山人（鼻山人）【画工】
溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政十稔亥孟春発兌／東都書林
西村屋与八／大嶋屋伝右工門」【備考】卷五卷末に『千代物語』後
編の広告あり。

山陽千代物語 後編 五卷五冊 読本
奇談

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政十・鼻山人【画工】溪斎英泉
【筆耕】不詳【奥付等】「文政十稔亥孟春発兌／東都書林 西村屋与
八／大嶋屋伝右工門」

契情肝粒志 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政十・鼻山人【画工】菱川政信
【筆耕】不詳【奥付等】未見

契情肝粒志 五編 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政十・鼻山人【画工】菱川政信
【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】下巻卷末に鼻山人作『傾城極内
伝』の広告あり。
傾城
胸中

北里通 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政十・鼻山人【画工】英斎泉寿

【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】『廓雑談』の続編。

珍説豹の巻 前編 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政十・鼻山人か【画工】菱川政信
【筆耕】不詳【奥付等】未見

珍説豹の巻 後編 三卷三冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政十・東里山人（鼻山人）【画工】
菱川政信【筆耕】不詳【奥付等】未見

孝婦貞鑑 実之巻 前編 四卷四冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】文政十・鼻山人【画工】英斎泉寿
【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】全三卷三冊とした版がある。

孝婦貞鑑 実之巻 後編 四卷四冊 人情本

【著編者】鼻山人【序年・序者】鼻山人【画工】英斎泉寿【筆耕】不
詳【奥付等】未見【備考】全三卷三冊とした版がある。

文政十一年（一八二八） 戊子

名勇発功譚 五卷五冊 読本

【著編者】十返舎一九【序年・序者】文政十一・南仙笑楚満人【画工】春齋英笑【筆耕】不詳【奥付等】「文政十一戊子孟春発販／三都書房 大阪心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛／京三条寺町 山城屋佐兵衛／江戸馬喰町二丁目 西村屋与八／同通油町 越前屋長次郎／同京橋弥左衛門町 大嶋屋伝右衛門」

花八笑人 四編 二卷二冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】東船笑登満人【画工】溪齋英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政十一季戊子孟春発販／江戸書房 馬喰町二丁目 西村屋与八／弥左工門町 大嶋屋伝右衛門」

人情言葉花 三卷三冊 人情本

【著編者】東里山人（鼻山人）【序年・序者】文政十・東里山人（鼻山人）【画工】溪齋英泉【筆耕】不詳【奥付等】「文政十一戊子歳春新鑄／京都 丸屋善兵衛／山城屋佐兵衛／大阪 河内屋茂兵衛／江戸 大阪屋茂吉／大嶋屋伝右工門」

雪窓玉濃枝 前編 三卷三冊 人情本

【著編者】南仙笑楚満人【序年・序者】文政十一・南仙笑楚満人【画工】英齋泉寿【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「此書は書林文永堂にさる婦人より乞請て補綴を予にゆだねしのみ」とある。

文政十三・天保元年（一八三〇） 庚寅
総撰借語 第三輯 五卷五冊 読本

【著編者】白頭子柳魚【序年・序者】文政十二・岳亭岳山【跋年・跋者】文政十二・白頭子柳魚【画工】不詳【筆耕】洪齋逸士【奥付等】「文政十三年寅正月発兌／書肆 皇都 伏見屋半三郎／山城屋佐兵衛／浪華 河内屋長兵衛／尾陽 美濃屋清七／東都 丁子屋平兵衛／大嶋屋伝右衛門／大坂屋茂吉」

出雲物語 五卷五冊 読本

【著編者】池田東籬（刪補）・紀美麿（原稿）【画工】森川保之【筆耕】不詳【奥付等】「文政十三年寅孟春／書房 東武 大嶋屋伝右衛門／丁字屋平兵衛／摂陽 河内屋長兵衛／河内屋茂兵衛／尾陽 永楽屋東四郎／皇都 山城屋佐兵衛」

大内十杉伝 初編 五卷五冊 読本

【著編者】為永春水（稿）・松亭金水（校正）【序年・序者】文政十二・為永春水【画工】歌川国安・歌川国芳・歌川国丸【筆耕】松亭金水【奥付等】「文政十三歳庚寅孟春新鑄発梓／書林 江戸弥左右工門町 文永堂 大島屋伝右衛門／同横山町二丁目 千翁軒 大坂屋半蔵／同小伝馬町三丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛／大坂心斎橋通博労町 群玉堂 河内屋茂兵衛」

仇競今様櫛 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】紀山人（二世十返舎一九）【序年・序者】高敷【画工】吳鳥齋【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

仇競今様櫛 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】二世十返舎一九【序年・序者】二世十返舎一九【画工】吳鳥齋【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

人情
其伝
女大学 前編 三卷三冊 人情本

【著編者】司馬山人【序年・序者】司馬山人【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

人情
其伝
女大学 後編 三卷三冊 人情本

【著編者】司馬山人【序年・序者】文政十三・司馬山人【画工】不詳

【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「彫刻全成文永堂が。肩持つ鼻肩に取ついて」とある。

天保二年（一八三一） 辛卯

大内
興隆
十杉伝 二編 五卷五冊 読本

【著編者】為永春水（稿）・松亭金水（校）【序年・序者】文亭綾繼【画工】溪齋英泉【筆耕】松亭金水【奥付等】「天保二陽春発版 製本最善／全志書林 江戸 文永堂 大島屋伝右衛門／大坂 群玉堂 河内屋茂兵衛／江戸 丁子屋平兵衛」

枯木の花 二卷二冊 読本

【著編者】水鏡山人【画工】豊齋主人【奥付等】「文政十四辛卯春／京橋弥左衛門町 大嶋屋伝右衛門／馬喰町二丁目南角 西村屋与八」【備考】成田仏教図書館蔵本は上下巻を三冊に分冊している。

天保三年（一八三二） 壬辰

大内
興隆
十杉伝 三編 五卷五冊 読本

【著編者】為永春水（稿）・松亭金水（校正）【序年・序者】文政十三・
文亭綾継【画工】歌川国安【筆耕】松亭金水【奥付等】「天保三歳壬
辰孟春新鐫発梓／書林 江戸弥左右エ門町 文永堂 大島屋伝右衛
門／同横山町二丁目 千翁軒 大坂屋半蔵／同小伝馬町三丁目 文
溪堂 丁子屋平兵衛／大坂心斎橋博労町 群玉堂 河内屋茂兵衛」

大内十杉伝 四編 五卷五冊 読本
興隆

【著編者】為永春水（著）・松亭金水（校正）【序年・序者】①天保
二・為永春水②為永春水③為永春水【画工】歌川国直【筆耕】松亭
金水【奥付等】「天保三壬辰稔陽旦発行／江戸小伝馬町三丁目 文
溪堂 丁子屋平兵衛／大坂心斎橋筋博労町 群玉堂 河内屋茂兵衛
／江戸京橋弥左衛門町 文永堂 大島屋伝右衛門」

六六水滸太平記 二編 五卷五冊 読本
士伝

【著編者】岳亭定岡【序年・序者】岳亭定岡【画工】溪斎英泉【筆
耕】不詳【奥付等】「天保三壬辰春発行 書房 書房 京都 丸屋
善兵衛／大坂 河内屋長兵衛／加賀屋源助／江戸 大島屋伝右エ門
／中村屋幸蔵」【備考】卷十卷末に『木曾勲功図会』の広告のほか、
『水滸太平記』の続編と『絵本和田軍記』の近刊予告あり。

春色梅児誉美 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保三・為永春水【画工】柳川重
信【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「花の兄文永堂の引
立に」とある。また卷三口絵に「大嶋」とみえる。

春色梅児誉美 後編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【跋者】九返舎主
人【画工】柳川重信【筆耕】不詳【奥付等】「天保三壬辰年／春正月
吉旦 江戸書林 永寿堂 西村与八／文永堂 大島屋伝右エ門」

新竜宮物語 一卷一冊 合巻
春

【著編者】為永春水【序年・序者】天保三・為永春水【画工】歌川
国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】管見に及んだ立命館大学
アートリサーチセンター蔵本、京都大学文学部図書館蔵本、アド・
ミュージアム東京蔵本全ての後ろ見返しに大島屋による処女香の広
告がある。

天保四年（一八三三） 癸巳

仇競今様櫛 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】二世十返舎一九【序年・序者】天保四・二世十返舎一九
【跋者】四方正木【画工】呉鳥齋【筆耕】不詳【奥付等】「維

時天保四年癸巳孟陽発販／東都書肆 馬喰町二丁目 西村屋与八／京橋弥左工門町 大島屋伝右衛門」

操形黄楊小櫛 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】二世十返舎一九【序年・序者】二世十返舎一九【画工】花岡光宣【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

春色梅児誉美 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保四・金鈴舎一宝【跋年・跋者】桜川善孝【画工】柳川重信【筆耕】不詳【奥付等】「天保四年癸巳孟陽発販／江戸書房 西村屋与八／大島屋伝右工門」【備考】卷八卷末に為永春水作『婦女八賢伝』 同作『楽焼の櫛の政子形黄木の櫛の操形当世娘身持扇』の広告、卷九卷末に『十杉伝』五編の近刊予告あり。

春色梅児誉美 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保四・為永春水【画工】柳川重信・柳川重山【筆耕】不詳【奥付等】「天保四年癸巳季正月発行／江戸書林 永寿堂 西村屋与八／文永堂 大島屋伝右衛門」【備考】卷十に為永春水作『浮世人情万歳曆』、卷十二に同作『美艶仙女玉手篁浦島日記』、同作『貞操婦女八賢志』初輯・二輯の近刊予告あり。

梅暦 春色辰巳園 初編 三卷三冊 人情本
余興

【著編者】為永春水【序年・序者】天保四・三亭春馬【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見

天保五年（一八三四） 甲午

花八笑人 四編追加 二卷二冊 滑稽本
暦

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】天保五・滝亭鯉丈【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】「天保五甲午年孟春開販／江戸書房 西村屋与八／大嶋屋伝右工門」【備考】上巻挿絵に「大嶋屋」とみえる。また下巻卷末には『花八笑人』五編の近刊予告あり。

梅暦 春色辰巳園 二編 三卷三冊 人情本
余興

【著編者】為永春水【序年・序者】桜川善孝【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見

操形黄楊小櫛 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】二世十返舎一九【序年・序者】天保五・金鈴舎一宝【画工】歌川貞秀【筆耕】不詳【奥付等】「維時天保五年甲午春王発販／江戸書肆 西村屋与八／大嶋屋伝右衛門」

四季 恩愛二葉艸 前編 三卷三冊 人情本
眺望

【著編者】鼻山人【序年・序者】天保五・鼻山人か【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序者を「甲午春睦月 江戸人情本作者の元祖 狂訓亭為永春水誌」とするものもある。

四季 恩愛二葉艸 後編 三卷三冊 人情本
眺望

【著編者】鼻山人【序年・序者】天保五・鼻山人か【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序者を「甲午春正月 江戸人情本作者の元祖 狂訓亭為永春水誌」とするものもある。

四季 恩愛二葉艸 三編 三卷三冊 人情本
眺望

【著編者】鼻山人【序年・序者】鼻山人【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

貞操婦女八賢誌 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保五・為永春水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】「天保五甲午年孟陽発版／東都書房 馬喰町二丁目 西村屋与人／本所松阪町二丁目 平林庄五郎／京橋弥左エ門町 大島屋伝右エ門」【備考】下巻巻末に『貞操婦女八賢誌』二輯の近刊予告あり。

天保六年（一八三五） 乙未

梅曆 春色辰巳園 三編 三卷三冊 人情本
余興

【著編者】為永春水【序年・序者】天保六・一松舎竹里【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見

梅曆 春色辰巳園 四編 三卷三冊 人情本
余興

【著編者】為永春水【序年・序者】①天保六・為永春水②為永春水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】卷一二巻末に為永春水作『辰巳采代暖語』、『春色英対暖語』、同作『花懐中曆』拾遺（『花名所懐中曆』の近刊予告あり。名所）

其小唄恋情紫 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保六・為永春水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見

須磨の月 三卷三冊 人情本

【著編者】風亭馬流【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保六歳宿乙未春正月発行／東都書肆 馬喰町二丁目 永寿堂 西村屋与人／京橋弥左衛門町 文永堂 大島屋伝右エ門梓」【備考】下巻のみ現存（架蔵）。

西海浪間月 五卷五冊 読本

【著編者】森川保之【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保六乙未孟陽発販／東武 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同 京橋弥左衛門町 大嶋屋伝右衛門／浪華 心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛／同 心齋橋筋博労町北 河内屋長兵衛／本町通七丁目 大野屋嘉兵衛／皇都 寺町通錦小路 伏見屋半三郎／三條通麩屋町角 山城屋佐兵衛」

天保七年（一八三六） 丙申

春色恵の花 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】①天保七・為永春水②琴通舎英賀【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「文永堂が寿梓の中に」とある。

春色恵の花 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】桜川由次郎【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。序文に「梅暦を開版て文永堂が常に吉日良辰となりし」とある。

おさん花名所懐中曆 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保七・為永春水【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「天保七甲申孟春発兌／版元 西村屋与八／鶴屋喜右衛門／若狭屋与市／製本所 大島屋伝右衛門」

おさん花名所懐中曆 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保七・為永春水【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見

操形黄楊小櫛 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】二世十返舎一九【序年・序者】天保七・二世十返舎一九【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見

天保八年（一八三七） 丁酉

盛衰娘太平記操早引 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】曲山人【序年・序者】三文舎主人【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

盛衰娘太平記操早引 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】曲山人【序年・序者】天保八・松亭金水【画工】歌川国直
【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

天保九年（一八三八） 戊戌

おさん 花名所懐中曆 三編 三卷三冊 人情本
茂兵衛

【著編者】為永春水【序年・序者】天保九・鈴の屋杜蝶【画工】溪斎
英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見

春抄 春色英対暖語 初編 三卷三冊 人情本
媚景

【著編者】為永春水【序年・序者】天保八・桃華庵【画工】歌川国
直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「文永堂が。好に応
じて」とある。

春抄 春色英対暖語 二編 三卷三冊 人情本
媚景

【著編者】為永春水【序年・序者】天保八・為永春水【画工】歌川
国直・静斎英一【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は序文に
「天保九戊戌年春正月發行」とあるによる。

倭寵愛児 春色恋白波 初編 三卷三冊 人情本
漢余模妓

【著編者】為永春水【序年・序者】①天保九・陽風亭柳外②為永春水
③為永春水【画工】溪斎英泉【筆耕】瀧野音成【奥付等】「全志書
林 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／江戸京橋弥左工門町 大
島屋伝右衛門／大坂心斎橋博労町北江入 河内屋長兵衛／京都三条
通東洞院東江入 大文字屋専蔵」【備考】神保五弥校『春色恋白波』
（古典文庫、一九六七年）による。

春色雪の梅 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春雅【序年・序者】為永春水【画工】歌川国直【筆
耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

春色雪の梅 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春雅【序年・序者】天保九・為永春水【画工】歌川国
直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】弘化四年に再刻（奥付は「弘
化四年丁未歳新刻／書房 大坂 心斎橋通南久太郎町 秋田屋市兵
衛／大坂 心斎橋通博労町 河内屋茂兵衛／江戸 大伝馬町二丁目
丁字屋平兵衛／江戸 京橋弥左工門町 大嶋屋伝右工門板」）。

天保十年（一八三九） 己亥

其小唄恋情紫 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】平亭銀鷄【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】上巻口絵に「大伝」とみえる。刊年は仮の判断。

其小唄恋情紫 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十・為永春江【画工】静斎英一【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「文永堂の主人へ送りぬ」とある。

娘太平記操早引 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】松亭金水【序年・序者】天保十・松亭金水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】下巻巻末に松亭金水作『花筐』の広告あり。

娘太平記操早引 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】松亭金水【序年・序者】天保十・松亭金水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】下巻巻末に松亭金水作『花筐』の広告あり。

貞操婦女八賢誌 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】文亭綾継【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見

貞操婦女八賢誌 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十・最上羊齋【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。上巻に為永春水作『唾方三人豊腹揃』同作『好文士伝』初編・二編の広告あり。

天保十一年（一八四〇） 庚子

芳薫 好文士伝 五卷五冊 読本
功話

【著編者】為永春水【序年・序者】①天保十一・福内鬼外②天保十・文亭綾継【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「三都全志小説発行書林／京都三条通東洞院東江入 大文字屋得五郎／大坂心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛／大坂心齋橋筋安堂寺町 秋田屋太右衛門／江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／江戸京橋弥左エ門町 大寫屋伝右エ門販」【備考】巻五巻末に為永春水作『太平奇聞吉野物語』、曲亭馬琴作『著作堂一夕話』、『好文士伝』二輯・三輯の近刊予告あり。

清談松の調 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十一・松亭金水【画工】不詳
【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「書林の多かる中に。文
永堂の花園は」とある。

天保十二年（一八四一） 辛丑

寄生本草紙 後編 五卷五冊 読本

【著編者】栗杖亭鬼卯【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保十
二丑年初春発販／書林 江戸 小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同
京橋弥左工門町 大寫屋伝右工門／尾州 名古屋樽屋町巾下 玉野
屋新右工門／江戸 馬喰町四丁目 菊屋幸三郎／京都 三条通寺町
西 丸屋善兵衛／大阪 心齋橋通南久太郎町 秋田屋市兵衛」

倭寵愛児 春色恋白浪 二編 五卷五冊 人情本
漢余模妓

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十二春・為永春水【画工】静
斎英一【筆耕】瀧野音成【奥付等】「全志書林 江戸 丁子屋平兵
衛／大坂 河内屋長兵衛／江戸 大嶋屋伝右衛門／京都 大文字屋
専蔵」【備考】神保五弥校『春色恋白波』（古典文庫、一九六七年）
による。

清談松の調 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十二・文亭綾繼【画工】不詳
【筆耕】不詳【奥付等】未見

春色梅美婦禰 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不
詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

春色梅美婦禰 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春鶯【画工】静斎英一【筆
耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

春色梅美婦禰 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】真柴庵鶯雪【画工】不詳【筆耕】
不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

春色伝家の花 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】歌川貞重【筆
耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

春色伝家の花 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】歌川貞重【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。序文に「目出度筆に大嶋屋が手入」とある。

春色伝家の花 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】歌川貞重【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

春色伝家の花 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】歌川貞重【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。序文に「文永堂大嶋屋の伝家花の一株」とある。

春色伝家の花 五編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。序文に「一小冊を。題号て伝家の花とよび。弥左衛門町の花園へ」とある。

天保十三年（一八四二） 壬寅

春色梅美婦禰 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十二・静春主人【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

春色梅美婦禰 五編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

天保十四年（一八四三） 癸卯

海川夜話仙家月 五卷五冊 読本

【著編者】岳亭五岳【序年・序者】天保十三・岳亭五岳【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「天保十四癸卯歳三月発販／書肆 江戸小伝馬町三丁目 丁子屋平兵衛／同京橋弥左エ門町 大島屋伝右エ門／同馬喰町四丁目 菊屋幸三郎／京都寺町通六角下ル 近江屋治助／同五条橋通堺町東へ入町 丁子屋定七／大阪心齋橋通南久太良町 秋田屋市兵衛」

益身鏡 二卷二冊 滑稽本

【著編者】為永春水【序年・序者】天保十四・為永春水【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「書林 京橋弥左工門町東側 大嶋屋 伝右衛門版」

弘化二年（一八四五） 乙巳

箱根草 三編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「弘化二年乙巳歲新刻／書房 江戸 京橋弥左工門町 文永堂 大嶋屋伝右工門板」

天保十五・弘化元年（一八四四） 甲辰

箱根草 四編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】為永春水【序年・序者】弘化二・二世為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見

箱根草 初編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈（綴）・為永春水（補）【序年・序者】為永春水【画工】溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「天保十五年甲辰歲新刻／書房 大坂 心齋橋通博勞町 群玉堂 河内屋茂兵衛／江戸 京橋 弥左工門町 文永堂大嶋屋伝右工門板」

貞操婦女八賢誌 四編 五卷五冊 人情本

【著編者】二世為永春水【序年・序者】弘化二・二世為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「書賈文永堂 主来つて」とある。

箱根草 二編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】滝亭鯉丈【序年・序者】弘化元・為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「文永堂が好に出来た新版」とある。

名譽三十六佳撰 五卷五冊 和歌

【著編者】為永春水【序年・序者】一陽軒主人【画工】歌川国直・溪斎英泉【筆耕】不詳【奥付等】「弘化二年乙巳歲／書肆 大坂心齋橋筋博勞町 河内屋茂兵衛／同心齋橋筋南久太郎町 秋田屋市兵衛／江戸京橋弥左工門町 大嶋屋伝右衛門板」

古今笑句柳の翠（絵本川柳点） 一巻一冊 川柳

【著編者】文屋廼安麻呂【序年・序者】文屋廼安麻呂【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

弘化四年（一八四七） 丁未

貞操婦女八賢誌 七編 三巻三冊 人情本

【著編者】二世為永春水【序年・序者】弘化四・二世為永春水【画工】歌川貞重【筆耕】不詳【奥付等】未見

弘化三年（一八四六） 丙午

貞操婦女八賢誌 五編 三巻三冊 人情本

【著編者】二世為永春水【序年・序者】二世為永春水【画工】不詳

【筆耕】不詳【奥付等】未見

弘化五・嘉永元年（一八四八） 戊申

大内
興隆十杉伝 五編 五巻五冊 読本

【著編者】二世為永春水【序年・序者】弘化二・二世為永春水【画工】歌川国芳【筆耕】不詳【奥付等】未見

貞操婦女八賢誌 六編 三巻三冊 人情本

【著編者】二世為永春水【序年・序者】二世為永春水【画工】不詳

【筆耕】不詳【奥付等】未見

貞操婦女八賢誌 八編 三巻三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】弘化五・二世為永春水【画工】歌川貞重【筆耕】不詳【奥付等】未見

故人俳諧画譜 一巻一冊 俳諧

【著編者】松亭金水【序年・序者】松亭金水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「こゝに文永堂主人嚮に柳の翠を輯録して」とある。

嘉永二年（一八四九） 己酉

大伴金道忠孝函会 前編 五巻五冊 読本

【著編者】山田意斎【序年・序者】宮田南北【画工】柳斎重春・宮田南北【筆耕】青霞逸人（序）【奥付等】「嘉永二己酉十二月／東都書林 大島屋伝右衛門／浪華書林 河内屋茂兵衛」

花八笑人 五編 三卷三冊 滑稽本

【著編者】一筆庵主人（上）・与鳳亭枝成（中・下）【序年・序者】一筆庵主人【画工】歌川国芳・歌川芳綱【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】扉に「己酉歳春新版 書肆 文永堂寿梓」とある。

嘉永三年（一八五〇） 庚戌

大伴金道忠孝図会 後編 五卷五冊 読本

【著編者】山田意斎【序年・序者】嘉永二・松亭金水【画工】柳斎重春【筆耕】不詳【奥付等】「嘉永三庚戌十一月／東都書林 大島屋伝右衛門／浪華書林 河内屋茂兵衛」

安政二年（一八五五） 乙卯

質屋雀 初編 二卷二冊 滑稽本

【著編者】葎窓貞雅【序年・序者】葎窓貞雅【画工】富士川船麿【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

浮世質屋雀 二編 二卷二冊 滑稽本

【著編者】葎窓貞雅【序年・序者】葎窓貞雅【画工】富士川船麿【筆耕】不詳【奥付等】「乙卯之春 京橋弥左衛門町 大嶋屋伝右衛門／下谷御成道 紙屋徳八／目白坂 万屋弥吉／大伝馬町二丁目 丁子屋平兵衛」

易学諺解 二卷二冊 漢字

【著編者】佐久間順正【序年・序者】安政二・吉田為政【筆耕】不詳【奥付等】「安政二年乙卯新鑄／故人 佐久間順正著／発兌書肆 東京府平民 東京市神田区仲町二丁目六番地 武田伝右衛門」【備考】求版本か。

安政三年（一八五六） 丙辰

鶯塚千代迺初声 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】松亭金水【序年・序者】松亭金水【画工】歌川芳虎【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

鶯塚千代迺初声 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】松亭金水【序年・序者】松亭金水【画工】歌川芳虎【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

安政六年（一八五九） 己未

本朝錦繡談図会 五卷五冊 読本

【著編者】池田東籬【序年・序者】安政六・和菊久公【画工】梅川東
挙【筆耕】不詳【奥付等】「安政六己未年九月刻成／三都発行書房
江戸 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／岡田屋嘉七／丁子屋平兵衛
／菊屋幸三郎／大嶋屋伝右衛門／大和屋喜兵衛／京 山城屋佐兵衛
／越後屋治兵衛／大阪 河内屋藤兵衛／河内屋茂兵衛」

万延二・文久元年（一八六一） 辛酉

傍廂 前集 三卷三冊 随筆

【著編者】斎藤彦麿【序年・序者】嘉永六・斎藤彦麿【画工】不詳
【筆耕】不詳【奥付等】「官許 斎藤氏蔵板／万延二年西孟春 発行
書肆 大坂心斎橋博労町 河内屋茂兵衛／同久宝寺町 河内屋源七
郎／同心斎橋南江壹丁目 秋田屋市兵衛／江戸日本橋通壹丁目 須

原屋茂兵衛／同通貳丁目 山城屋佐兵衛／同芝神明前 岡田屋嘉七
／同大伝馬町貳丁目 丁子屋平兵衛／同京橋弥左衛門町 大島屋伝
右工門」

傍廂 後集 三卷三冊 随筆

【著編者】斎藤彦麿【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「故人 斎藤
可怜著／斎藤一郎蔵板／弥左工門町 書物問屋 大島屋伝右工門」
【備考】刊年は仮の判断。

元治元年（一八六四） 甲子

おくみ 春色江戸紫 初編 三卷三冊 人情本
惣次郎

【著編者】山々亭有人【序年・序者】山々亭有人【画工】歌川芳虎
【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。

おくみ 春色江戸紫 二編 三卷三冊 人情本
惣次郎

【著編者】山々亭有人【序年・序者】元治元・仮名垣魯文【画工】歌
川芳虎【筆耕】不詳【奥付等】未見

元治二・慶応元年（一八六五） 乙丑

註釈用文章 一巻一冊 往来物

【著編者】鶴亭秀賀【序年・序者】慶応元・鶴亭秀賀【筆耕】不詳
【奥付等】未見【備考】見返しに「東都書林 文永堂蔵板」とある。

慶応二年（一八六六） 丙寅

孟子集註 四巻四冊 漢学

【著編者】朱熹（集註）【筆耕】塚田為徳【奥付等】「慶応二丙寅正月刻成／島村孝司蔵版／塚田為徳謹書／東都書肆 大伝馬町二丁目 文溪堂 丁子屋平兵衛発兌」

慶応三年（一八六七） 丁卯

花鳥山水早引漫画 初編 一巻一冊 絵画

【著編者】葛飾為斎【画工】葛飾為斎【筆耕】不詳【奥付等】「慶応三卯壬月刻成 弥左衛門町 大島屋伝右衛門版」

明治二年（一八六九） 己巳

鶯塚千代迺初声 三編 三巻三冊 人情本

【著編者】山々亭有人【序年・序者】明治二・温克松田【画工】歌川芳虎【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】刊年は仮の判断。上巻に「文永堂寿梓」として『鶯塚千代迺初声』四編の広告あり。

鶯塚千代迺初声 四編 三巻三冊 人情本

【著編者】山々亭有人【序年・序者】明治二・山々亭有人【画工】歌川芳虎【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】袋に「文永堂寿梓」とある。

烈女銘々伝 一巻一冊 伝記

【著編者】山々亭有人【序年・序者】慶応五・山々亭有人【画工】歌川芳虎【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】表紙に「文永堂寿梓」とある。

明治三年（一八七〇） 庚午

童解英語図会 初帙 一巻一冊

【著編者】山々亭有人【序年・序者】明治三・山々亭有人【画工】歌川芳幾【筆耕】不詳【奥付等】「東京書林 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／岡田屋嘉七／和泉屋市兵衛／丁子屋平兵衛／藤岡屋慶治郎／森屋治兵衛／山口屋藤兵衛／大嶋屋伝右工門」【備考】見返しに「東京書房 文永堂梓」とある。

明治四年（一八七二） 辛未

童解英語図会 貳帙 一卷一冊

【著編者】山々亭有人【序年・序者】明治四・山々亭有人【画工】歌川芳幾【筆耕】不詳【奥付等】「東京書林 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／岡田屋嘉七／和泉屋市兵衛／丁子屋平兵衛／藤岡屋慶治郎／森屋治兵衛／山口屋藤兵衛／大嶋屋伝右工門」【備考】見返しに「東京書肆 文永堂梓」とある。

明治五年（一八七三） 壬申

童解英語図会 三帙 一卷一冊

【著編者】山々亭有人【序年・序者】明治五・弄月亭綾彦【画工】歌川芳幾【筆耕】不詳【奥付等】「京橋弥左工門町 文永堂大嶋屋伝

工門板」【備考】見返しに「東京書肆 文永堂梓」とある。

明治六年（一八七三） 癸酉

復古夢物語 初編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治六・松村春輔【画工】歌川国輝【筆耕】不詳【奥付等】「東京書肆製本所 京橋弥左衛門町 大嶋屋伝右衛門」【備考】下巻末に「明治六年嘉平月」とある。

朝鮮国細見全図 一舗

【著編者】不詳【奥付等】「明治六年癸十月／東京書肆 出雲寺万次郎／丁子屋平兵衛／大島屋伝右衛門／丁子屋善五郎／丁子屋忠七 発兌」【備考】『朝鮮事情』の広告あり。

陽曆漢語月儀要文 一卷一冊

【著編者】萩原乙彦【序年・序者】明治六・萩原乙彦【筆耕】不詳【奥付等】「明治六年夏四月／東京書肆 弥左衛門町 大寫屋伝右衛門／東京書林 須原屋茂兵衛／山城屋佐兵衛／小林新兵衛／和泉屋市兵衛／岡田屋嘉七／浅倉屋久兵衛／須原屋伊八／山口屋藤兵衛／森屋治兵衛／藤岡屋慶次郎／丁子屋平兵衛／椀屋喜兵衛／大嶋屋伝

右衛門」

掌中大統略記 一舖

【著編者】高橋易治【奥付等】「明治六年七月 白山 高橋易治編輯
発行書肆 東京京橋弥左衛門町 武田伝右衛門」

明治七年（一八七四） 甲戌

朝鮮事情 二卷二冊

【著編者】染崎延房【序年・序者】明治六・染崎延房【画工】石塚寧
斎【筆耕】不詳【奥付等】「明治七甲戌三月発行／東京発兌書肆
丁子屋忠七／丁子屋善五郎／大島屋伝右衛門」

復古夢物語 二編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治七・鎮西雄飛居士【画工】歌
川国輝【筆耕】不詳【奥付等】「明治七年五月吉日発行／書肆 文
永堂大嶋屋伝右衛門」【備考】下卷末に「桜雨園主人春輔著篇之表」
を備える。

復古夢物語 三編 三卷三冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治七・松村春輔【画工】歌川国
輝【筆耕】不詳【奥付等】「明治七歳十二月発市／東京書房 大嶋
屋伝右衛門／政田屋兵吉」

明治八年（一八七五） 乙亥

寄笑新聞 第壹号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥
付等】「東京本石町四丁目 岩本忠藏／同京橋弥左工門町 大島屋
伝右工門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴
田源作／信州上田原町三丁目 田中長右工門／同長野吉田村 長田
忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄
七／本局 寄笑社」【備考】副題は「金貸大評議」。

寄笑新聞 第二号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥
付等】「東京本石町四丁目 岩本忠藏／同京橋弥左工門町 大島屋
伝右工門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴
田源作／信州上田原町三丁目 田中長右工門／同長野吉田村 長田
忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄
七／本局 寄笑社」【備考】副題は「金借手前目算」。

寄笑新聞 第三号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥付等】「東京本石町四丁目 岩本忠藏／同京橋弥左工門町 大島屋 伝右工門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴田源作／信州上田原町三丁目 田中長右工門／同長野吉田村 長田忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄七／本局 寄笑社」【備考】副題は「貸借問答」。

寄笑新聞 第四号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥付等】「東京本石町四丁目 岩本忠藏／同京橋弥左工門町 大島屋 伝右工門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴田源作／信州上田原町三丁目 田中長右工門／同長野吉田村 長田忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄七／本局 寄笑社」【備考】副題は「孔子郎釈迦蔵耶蘇人の閉口」。

寄笑新聞 第五号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥付等】「東京本石町四丁目 岩本忠藏／同京橋弥左工門町 大島屋 伝右工門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴

田源作／信州上田原町三丁目 田中長右工門／同長野吉田村 長田忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄七／本局 寄笑社」【備考】副題は「放屁弁」。

寄笑新聞 第六号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥付等】「東京本石町四丁目 岩本忠藏／同京橋弥左工門町 大島屋 伝右工門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴田源作／信州上田原町三丁目 田中長右工門／同長野吉田村 長田忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄七／本局 寄笑社」【備考】副題は「うそ論」。

寄笑新聞 第七号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥付等】「東京本石町四丁目 岩本忠藏／同京橋弥左工門町 大島屋 伝右工門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴田源作／信州上田原町三丁目 田中長右工門／同長野吉田村 長田忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄七／本局 寄笑社」【備考】副題は「のぞき眼鏡欧行論」。

寄笑新聞 第八号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥付等】「東京本石町四丁目 岩本忠蔵／同京橋弥左エ門町 大島屋伝右エ門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴田源作／信州上田原町三丁目 田中長右エ門／同長野吉田村 長田忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄七／本局 寄笑社」【備考】副題は「商法論の一」。

寄笑新聞 第九号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥付等】「東京本石町四丁目 岩本忠蔵／同京橋弥左エ門町 大島屋伝右エ門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴田源作／信州上田原町三丁目 田中長右エ門／同長野吉田村 長田忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄七／本局 寄笑社」【備考】副題は「商法論の二」。

寄笑新聞 第十号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年・年益【筆耕】不詳【奥付等】「東京本石町四丁目 岩本忠蔵／同京橋弥左エ門町 大島屋伝右エ門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴田源作／信州上田原町三丁目 田中長右エ門／同長野吉田村 長田忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄七／本局 寄笑社」【備考】副題は「学ものすゝめ」。

寄笑新聞 第十一号 一卷一冊

【著編者】橋爪錦造（梅亭金鷲）【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥付等】「東京本石町四丁目 岩本忠蔵／同京橋弥左エ門町 大島屋伝右エ門／横浜弁天通四丁目 中屋銀次郎／上州高崎町三丁目 柴田源作／信州上田原町三丁目 田中長右エ門／同長野吉田村 長田忠之助／武州熊谷本町三丁目 和田貞節／東京照降町 恵比寿屋庄七／本局 寄笑社」【備考】副題は「士商論」。

復古夢物語 四編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治八・松村春輔【画工】歌川国輝・歌川芳虎【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】見返しに「閑居明治八年三月廿三日」「東京 文永堂」とある。

近世桜田記聞 初編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】服部誠一【画工】月岡芳年【筆耕】佐瀬得所（序）【奥付等】「明治八年五月刻成／東京書林 京橋弥左衛門町 武田伝右衛門発兌」【備考】卷二卷末に「官許明治八年三月十九日 桜雨園社中蔵版」とある。

上野戦争実記 二卷二冊

【著編者】高島藍泉【序年・序者】明治八・高島藍泉【画工】鮮齋永濯【筆耕】不詳【奥付等】「官許明治八年五月廿四日／高島藍泉蔵版／東京書林 京橋弥左衛門町 武田伝右衛門発兌」

近世桜田記聞 二編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治八・近藤芳樹【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥付等】「明治八年十月十日出版／東京浜町二丁目十一番地寄留 著人 松村春輔／東京書肆 弥左衛門町四番地 出版人 武田伝右衛門」

一新要文 一卷一冊

【著編者】高島藍泉（著）・岸田吟香（閱）【序年・序者】岸田吟香【筆耕】佐瀬得所【奥付等】「明治八年十一月五日出版／著人 木挽町二丁目五番地 高島藍泉／発兌書林 横浜弁天通三丁目 中屋孝吉／麴町十三丁目十八番地 中屋政太郎／同八丁目八番地 森田鉄五郎／出版人 弥左工門町四番地 武田伝右衛門」

復古夢物語 五編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治八・仮名垣魯文【画工】鮮齋永濯【筆耕】不詳【奥付等】「明治八年十一月十三日版權免許／東京浜町二丁目十一番地寄留 著人 松村春輔／弥左衛門町四番地

出版人 武田伝右衛門」

明治九年（一八七六） 丙子

復古夢物語 六編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【画工】鮮齋永濯【筆耕】不詳【奥付等】「明治九年一月十日出版／東京浜町二丁目十一番地寄留 著人 松村春輔／東京書肆 弥左衛門町四番地 出版人 武田伝右衛門」

春雨文庫 初編 二卷二冊

【著編者】松村春輔（著）・大久保春驪（校）【序年・序者】明治九冬・大久保春驪【画工】鮮齋永濯【筆耕】鶴田容（序）【奥付等】「明治九年第四月一日出版／著述兼出版人 東京府下第壹大区拾三小区 浜町式丁目拾壹番地寄留 山口県平民 松村春輔／壳弘所 京橋弥左工門町 大島屋伝右衛門」

復古夢物語 七編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治九・松村春輔【画工】鮮齋永濯【筆耕】不詳【奥付等】「明治九年六月十日出版／東京浜町二丁目十一番地寄留 著人 松村春輔／東京書肆 弥左衛門町四番地

出版人 武田伝右衛門

復古夢物語 八編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治九・大久保春驪【画工】鮮齋永濯【筆耕】不詳【奥付等】「明治九年十二月十日出版／東京浜町二丁目十一番地寄留 著人 松村春輔／東京書肆 弥左衛門町四番地 出版人 武田伝右衛門」

近世桜田記聞 三編 三卷三冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】①明治九・松村春輔②明治九・松村春輔【画工】月岡芳年【筆耕】小室樵山（序①）・鶴田容（序②）【奥付等】「明治九年五月十日出版／東京浜町二丁目十一番地寄留 著人 松村春輔／東京書肆 弥左衛門町四番地 出版人 武田伝右衛門」

明治十年（一八七七） 丁丑

春雨文庫 二編 二卷二冊

【著編者】松村春輔（著）・大久保春驪（校）【序年・序者】明治十・松村春輔【画工】鮮齋永濯【筆耕】不詳【奥付等】「明治十年第三月十日出版／著人 東京府第壹大区拾三小区浜町式丁目拾壹番地寄留

山口県平民 松村春輔／出版人 東京府第壹大区八小区弥左衛門町四番地 大島屋伝右衛門

二橋春話 二卷二冊

【著編者】筆鍊閣主人（編）・服部誠一（評点）【序年・序者】明治九・石井南橋【筆耕】不詳【奥付等】「版權免許明治九年九月十九日同十年四月癸兌／第五大区四区鍊堀町十五番地 服部誠一評点／東京書林 第一大区八小区弥左衛門町四番地 武田伝右衛門／第一区六小区下槇町十一番地 江藤喜兵衛」

参考鹿兒島新誌 初編 二卷二冊

【著編者】和田定節【序年・序者】梅亭金鷲【画工】晴齋年一【筆耕】不詳【奥付等】「明治十年九月十日御届／同年十月三日出版／編集兼出版人 東京府士族 第五大区八小区浅草北田原町三丁目六番地 和田定節／発売書肆 東京弥左衛門町四番地 大島屋伝右衛門」

参考鹿兒島新誌 二編 二卷二冊

【著編者】和田定節【画工】晴齋年一【筆耕】不詳【奥付等】「明治十年廿日御届／同年十一月三日出版／編集兼出版人 東京府士族 第五大区八小区浅草北田原町三丁目六番地 和田定節／発売書肆 東京弥左衛門町四番地 大島屋伝右衛門」

参考鹿兒島新誌 三編 二卷二冊

【著編者】和田定節【序年・序者】高島藍泉【画工】晴齋年一【筆耕】不詳【奥付等】「明治十年十二月五日御届／同年十二月十一日出版／編集兼出版人 東京府士族 第五大区八小区浅草北田原町三丁目六番地 和田定節／発売書肆 東京弥左衛門町四番地 大島屋伝右衛門」

参考鹿兒島新誌 五編 二卷二冊

【著編者】和田定節【序年・序者】梅塘迂叟【画工】晴齋年一【筆耕】不詳【奥付等】「明治十一年四月五日御届／著者出版人 東京府士族 第五大区八小区浅草北田原町三丁目六番地 和田定節／発売書肆 東京弥左衛門町 武田伝右衛門」

【備考】見返しに「東京書肆 文永堂発兌」とある。

明治十一年（一八七八） 戊寅

春雨文庫 三編 二卷二冊

【著編者】松村春輔（閱）・和田定節（著）【序年・序者】明治十一年祥狂【画工】晴齋年一【筆耕】不詳【奥付等】「明治十一年二月十一日御届／著者 東京府士族 第五大区八小区浅草北田原町三丁目六番地 和田定節／出版人 東京府平民 第一大区八小区弥左衛門町四番地 武田伝右衛門」

参考鹿兒島新誌 六編 二卷二冊

【著編者】和田定節【序年・序者】和田定節【画工】晴齋年一【筆耕】不詳【奥付等】「明治十二年三月四日御届／編集兼出版人 東京府士族 浅草区北田原町三丁目六番地 和田定節／発売書肆 東京弥左衛門町十三番地 大島屋伝右衛門」

明治十二年（一八七九） 己卯

山中人饒舌 二卷二冊

【著編者】竹田生【序年・序者】①篠崎小竹②天保五・角田簡【奥付等】「嘉永七年甲寅四月 原版／明治十二年四月二十五日 翻刻御届／原板主 田能村氏蔵板／発行者 東京市京橋区弥左衛門町十三

参考鹿兒島新誌 四編 二卷二冊

【著編者】和田定節【序年・序者】和田定節【画工】晴齋年一【筆耕】不詳【奥付等】「明治十一年一月十一日御届／編集兼出版人 東京府士族 第五大区八小区浅草北田原町三丁目六番地 和田定節」

番地 武田伝右衛門」

新門辰五郎游俠譚 初編 二卷二冊

【著編者】萩原乙彦【序年・序者】明治十二・萩原乙彦【画工】歌川芳春【筆耕】不詳【奥付】「明治十二年五月 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉／京橋区弥左衛門町十三番地 大島屋伝右衛門 合梓」

新門辰五郎游俠譚 二編 二卷二冊

【著編者】萩原乙彦【序年・序者】明治十二・萩原乙彦【画工】歌川芳春【筆耕】不詳【奥付】「明治十二年五月 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉／京橋区弥左衛門町十三番地 大島屋伝右衛門 合梓」

春雨文庫 四編 二卷二冊

【著編者】和田定節【序年・序者】明治十二・井住屋のあるじ蛙生【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十二年六月五日御届／著者 東京府土族 浅草区北田原町三丁目六番地 和田定節／発兌書肆 出版人 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門」

巷説兇手栞 初編 二卷二冊

【著編者】高島藍泉【序年・序者】明治十二・高島藍泉【画工】月岡芳年・落合芳幾【筆耕】不詳【奥付等】「明治十二年九月一日御届／

東京京橋区弥左衛門町十三番地 出版人 武田伝右衛門／同日本橋区南茅場町四十番地 著述人 高島藍泉」

明治十三年（一八八〇） 庚辰

子弟訓 一卷一冊

【著編者】鈴木勇之助【序年・序者】明治十三・栗本鋤雲【奥付等】「明治十三年一月版權免許全三月出版／著述出版人 東京本所区永倉町七番地 鈴木勇之助／発兌書肆 全京橋区竹川町廿番地 聚珍社／全 全弥左衛門町十四番地 武田伝右衛門」

春雨文庫 五編 二卷二冊

【著編者】和田定節【序年・序者】旧秋園頑湖【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十三年二月廿五日御届／編輯人 浅草区北田原町三丁目六番地 和田定節／東京書肆 出版人 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門」

琢華堂画譜 一卷一冊

【著編者】高島藍泉【画工】高島藍泉【跋年・跋者】明治十三・高島藍泉【奥付等】「明治十三年四月十三日御届／臨写人 静岡県土族 浅草区元吉町十七番地 高島藍泉／東京書肆 出版人 府下平民

京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発売人 同 浅草区北清島町 小林米蔵」

蘭竹譜 一卷一冊

【著編者】貫輪吉五郎【序年・序者】明治十三・青木可笑【跋年・跋者】明治十三・秋香小史【画工】渡辺崋山【奥付等】「明治十三年五月十九日御届／編輯兼出版人 東京府平民 日本橋区龜島町一丁目四十一番地 貫輪吉五郎／東京書肆 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／浅草区北清島町 小林米蔵」

註釈和解古文真宝後集 二卷二冊

【著編者】田中善明（註）【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十三年六月廿五日御届／同年七月出版／註解人 神田区佐久間町三丁目廿一番地 東京府平民 田中善明／出版人 日本橋区通四丁目十番地 同 松田幸助／同京橋区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門／発売人 芝区三島町 山中市兵衛／京橋区銀座二丁目 山中孝之助」

書家自在 三卷三冊

【著編者】道富元礼・藤原良国【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十三年七月二十九日翻刻御届／同年九月出版／編輯人 道富

元礼／同 藤原良国／翻刻出版人 同日本橋区本石町四丁目三十五番地 東京府平民 中山勝次郎／同 京橋区南伝馬丁巷丁目十番地 東京府平民 村上真助／同 京橋区弥左工門町十三番地 東京府平民 武田伝右工門／同 神田区佐柄町二十一番地 東京府土族 大場助一／同 京橋区南伝馬町一丁目十番地村上真助方寄留 高橋平三郎／同 日本橋区通四丁目十番地 東京府平民 松田幸助」

絵入国会早合点 一卷一冊

【著編者】松村春輔【奥付等】「明治十三年八月廿四日御届／著述人 東京日本橋区蛸殻町二丁目七番地寄留 山口県平民 松村春輔／同京橋区弥左衛門町十三番地 東京府平民出版人 武田伝右工門」

註釈和解古文真宝前集 三卷三冊

【著編者】田中善明（註）【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十三年十月廿六日御届／同年同月出版／註解人 神田区佐久間町三丁目廿一番地 東京府平民 田中善明／出版人 日本橋区通四丁目十番地 同 松田幸助／同京橋区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門／発売人 芝区三島町 山中市兵衛／京橋区銀座二丁目 山中孝之助」

山水花鳥早引漫画 二編 一卷一冊

【著編者】葛飾為齋(遺稿)・安達吟光(編画)【画工】安達吟光【奥付等】未見【備考】見返しに「東京書肆文永堂」とある。刊年は『出版書目月報』および『東京絵入新聞』『読売新聞』掲載の広告による。

山水花鳥早引漫画 三編 一巻一冊

【著編者】葛飾為齋(遺稿)・安達吟光(編画)【画工】安達吟光【奥付等】「明治十三年十一月廿五日御届／編輯人 京橋区南鍋町一丁目七番地 安達平七／東京書肆 出版人 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門」

春風日記 初編 二巻二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】二世為永春水【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十三年十二月廿八日御届／著述人 府下日本橋区蛸殻町二丁目七番地寄留 松村春輔／出版人 同京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発兌人 同浅草区三好町七番地 大川屋錠吉」【備考】巻二巻末に処女香の広告あり。

春雨文庫 六編 二巻二冊

【著編者】和田定節【奥付等】「明治十三年十二月廿八日御届／編集人 府下本所区北二葉町二十番地 和田定節／出版人 同京橋区弥

左工門町十三番地 武田伝右衛門／発兌人 同浅草区三好町七番地 大川屋錠吉」

明治十四年(一八八二) 辛巳

山水花鳥早引漫画 四編 一巻一冊

【著編者】葛飾為齋(遺稿)・安達吟光(編画)【跋者】明治十四・高島藍泉【画工】安達吟光【奥付等】「明治十四年二月二日御届／故人 葛飾北齋筆／画工編輯人 京橋区南鍋町十七番地 安達平七／出版人 同区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門」

春風日記 二編 二巻二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治十四・松村春輔【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十四年八月八日御届／著述人 山口県平民 府下京橋区南鍋町老丁目老番地 松村春輔／出版人 東京府平民 府下同区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門／同 浅草区三好町七番地 大川錠吉／発売人 同浅草区新福井町五番地 高梨弥三郎」

春風日記 三編 二巻二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治十四・松村春輔【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十四年八月八日御届／編集人 京橋区南鍋町壱丁目壱番地寄留 松村春輔／出版人 京橋区弥左工門町十三番地武田伝右工門／同 浅草区三好町七番地 大川錠吉」

明治烈婦伝 一巻一冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治十四春・松村春輔【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十四年六月二日板権免許／著述人 京橋区南鍋町壱丁目壱番地 松村春輔／出版人 同区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門／大阪 岡田茂兵衛／同 前川善兵衛／同 前川源七郎／同 大野木市兵衛／同岡島真七／尾州名古屋 美濃屋代助／信州長野 西澤喜太郎／武州横浜 池田幸吉／甲府 西川庄右衛門／東京発売書肆 山中市兵衛／山中孝之助／山中喜太郎／覚張栄次郎／大倉孫兵衛／荒川藤兵衛／水野慶次郎／小林鉄次郎／辻岡文助」【備考】整版。慶応五年（一八六九）刊『烈女銘々伝』の改題補刻本。

暁斎楽画 二巻二冊

【著編者】河鍋暁斎【序年・序者】明治十四・蒲生重章【画工】河鍋暁斎【筆耕】跡見花蹊（序）【奥付等】「明治十四年五月十六日板権免許／同年七月三日出版／画工 本郷区湯嶋四丁目四十二番地 河鍋洞郁／出版人 京橋弥左工門町十三番地 武田伝右衛門／麹町区

麹町八丁目八番地 森田鉄五郎／彫工 東京府下南葛飾郡中之郷村七十四番地 大塚鉄五郎／発兌書肆 大阪心斎橋博労町 岡田茂兵衛／同南久宝寺町 前川善兵衛／同北久宝寺町 前川源七郎／同心斎橋一丁目 大野木市兵衛／同本町四丁目 岡嶋真七／信州長野 西澤喜太郎／相州横浜 池田幸吉／同 師岡屋幸助／東京日本橋通一丁目 北島茂兵衛／同通二丁目 稲田佐兵衛／同全 小林新兵衛／同通三丁目 丸屋善七／同通一丁目 大倉孫兵衛／同通四丁目 金花堂佐助／同全 松田幸助／同南伝馬町二丁目 小林新蔵／同全 壱丁目 吉川半七／同芝宇田川町 牧野吉兵衛／同浅草茅町 北澤伊八／東京浅草広小路 吉田久兵衛／同浅草須賀町 松寄半蔵／同全 瀬山直次郎／同浅草清島町 小林米蔵／同新大坂町 小林喜右工門／同湯島松住町 別所平七／同通油町 水野慶次郎／同馬喰町二丁目 石川治兵衛／同全 荒川藤兵衛／同通旅籠町 東生龜次郎／同麹町四丁目 磯部太郎兵衛／同飯倉五丁目 鈴木忠蔵／同横山町二丁目 内田弥兵衛／同本石町十軒店 江島喜兵衛／同本町二丁目 柳川梅次郎／同芝露月町 覚張栄次郎／同銀座四丁目 山中喜太郎／同全二丁目 山中孝之助／同芝三島町 山中市兵衛」

赤穂義士烈婦銘々伝 一巻一冊

【著編者】山々亭有人（編）・高島藍泉（閱）【序年・序者】明治十三・高島藍泉【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十四年八月補刻／東京文永堂蔵」（見返し）

華椿靄隆近世四大家画譜 一卷一冊

【著編者】高島藍泉【序年・序者】明治十四・高島藍泉【画工】高島藍泉（縮写）【筆耕】雲溪春（序）【奥付等】「明治十四年十一月十五日御届／縮写人 静岡県士 京橋区弥左衛門町壹番地 高島藍泉／出版人 府下平民 同区同町十三番地 武田伝右衛門／発売人 浅草区新福町五番地 高梨弥三郎」

明治十五年（一八八二） 壬午

春風日記 四編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治十四・松村春輔【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十五年二月廿四日御届／編輯人 京橋区南鍋町一丁目一番地 松村春輔／出版人 同区弥左工門町十三番地 東京府平民 武田伝右工門／発売人 浅草区三好町七番地 同 大川錠吉／発売人 同区福井町五番地 同 高梨弥三郎」

春風日記 五編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十五年二月廿四日御届／著述人 府下京橋区南鍋町一丁目一番地 松村春輔／出版人 同区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門／同浅

草区三好町七番地 大川錠吉／発売人 同区福井町五番地 高梨弥三郎」

春風日記 六編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治十四・松村春輔【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十五年二月廿四日御届／編輯人 京橋区南鍋町一丁目一番地 松村春輔／出版人 同区弥左工門町十三番地 武田伝右工門／浅草区三好町七番地 大川錠吉／発売人 同区福井町五番地 高梨弥三郎」

蝶舞奇縁 初編 二卷二冊

【著編者】顧柳散人【序年・序者】明治十五・服部精一【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十五年四月一日版權免許／同年五月日出版／訳述兼出版人 福岡県士族 東京下谷区西町三番地寄留 桑野鋭／発売書肆 武田伝右衛門／売弘書肆 大阪 岡田茂兵衛／前川善兵衛／前川源七郎／大野市郎兵衛／岡島真七／尾州名古屋 美濃屋代助／信州長野 西澤喜太郎／武州横浜 池田孝吉／東京 北島茂兵衛／稻田佐兵衛／小林新兵衛／小林新造／吉川半七／大倉孫兵衛／水野慶次郎／荒川藤兵衛／辻岡文助／山中喜太郎／山中孝之助／山中市兵衛／九春社／静霞堂／巖々堂／法木徳兵衛【備考】「発売書肆」の部分を「発売所 竹川町十一番地 九春社」とする版もある。

諸職雛形北齋図式 初編 二卷二冊

【著編者】葛飾北齋【序年・序者】明治十五・柳亭種彦【画工】葛飾北齋【筆耕】隅田了古(序)【跋年・跋者】明治一五・隅田了古【奥付等】「明治十四年十二月十七日版權免許／同十五年四月五日出版／画工 故人 葛飾為一老人／出版人 東京府下京橋区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門／発兌書肆 大阪 岡田茂兵衛／前川善兵衛／前川源七郎／大野木市兵衛／岡島真七／尾州名古屋 美濃屋代助／信州長野 西澤喜太郎／武州横浜 池田孝吉／東京 北島茂兵衛／稻田佐兵衛／小林新兵衛／小林新造／吉川半七／大倉孫兵衛／水野慶次郎／荒川藤兵衛／辻岡文助／山中喜太郎／山中孝之助／山中市兵衛」

春色梅児誉美 初編 三卷一冊

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】柳川重信【奥付等】「明治十五十月十一日再版御届／著者 故 為永春水／出版人 東京府平民 武田政吉 京橋区弥左衛門町十三番地／府下大壳捌所 神田雉子町 巖々堂／同小川町 秩山堂／人形町通り元大坂町 法木徳兵衛／飯田町二丁目 武田平治／外神田末広町 扇川堂／木挽町老丁目 万字堂／両国横山町 辻岡屋文助／馬喰町式丁目 山口屋藤兵衛／通り油町 藤岡慶治郎／日本橋通り三丁目 丸屋鉄治郎／府下壳捌所 尾張町二丁目 津田源七／南伝馬町二丁目 伊

勢屋喜三郎／本石町二丁目 武蔵屋昇平／大伝馬町二丁目 三宅半四郎／浅草瓦町 森本順三郎／浅草馬道 山田屋彦兵衛／下谷池之端仲町 伏見屋重兵衛／牛込肴町 深野弥兵衛／四ツ谷伝馬町三丁目 伊勢屋久兵衛／麴町五丁目 篠崎忠雄／各地壳捌所 横浜太田町二丁目 伊勢屋梅蔵／備前岡山西大寺町 阿倍勝忠／信州南佐久郡白田駅 依田儀三郎／陸前仙台大町四丁目 木村文助／三重県津東町 浅野東助／大坂備後町 此村彦輔／同本町四丁目 岡島真七／千葉県千葉町 立真舎／常州土浦田宿町 柳旦堂／兵庫仲町老丁目 清水瀧／江州大津京町 澤一二郎／但馬豊岡宵田町 由利安助／加州金沢尾張町 雲根堂／長崎酒屋町角 安中与兵衛／信州小諸 小山九郎兵衛／三州豊橋上伝馬町 錚々堂／駿州沼津 中村九郎／尾張名古屋本町 石版舎／江州彦根西大工町 田中伍郎／西京寺町通り 駿々堂／信州小室 小枡屋喜太郎／尾州名古屋本町 美濃屋代助／上州高崎町 文心堂／相州小田原緑町 石寿堂喜右工門／尾州知多郡半田村 小栗太郎兵衛／同厚木天王町 米屋新吉／信州上田原町 堺屋武右工門／同松本仲町 竹内禎十郎／越後水原町 西村六平／同三條町 樋口小左工門／陸前石ノ巻二百一番地 三陸屋利兵衛／陸中盛岡本町 澤田正助／陸奥青森米町 池田吉助／同弘前土手町 野崎九郎兵衛／羽前鶴ヶ岡五日町 小池藤次郎／函館港内浜町 魁文社／同地蔵町 脩文堂／豆州熱海温泉場 鈴木良三／三州豊橋呉服町 高須又八／雲州松江本町 園山喜三右工門／土州高知種崎町 澤本駒吉／右之外各府県書林絵双紙店江差出シ候

間御求可被下候」【備考】口絵・挿絵は整版。

春色梅児誉美 二編 三卷一冊

【著編者】為永春水【画工】柳川重信・柳川重山【奥付等】「明治十五年十一月十一日再版御届」著者 故 為永春水／出版人 東京府平民京橋区弥左衛門町十三番地 武田政吉／発売 神田区裏神保町八番地 鶴声社／府下大壳捌所 両国横山町 辻岡屋文助／馬喰町貳丁目 山口屋藤兵衛／通り油町 藤岡慶治郎／日本橋通り三丁目 丸屋鉄治郎／神田雉子町 殿々堂／同小川町 秩山堂／人形町通り元大坂町 法木徳兵衛／飯田町二丁目 武田平治／外神田末広町 扇川堂／木挽町老丁目 万字堂／両国横山町 辻岡屋文助／馬喰町貳丁目 山口屋藤兵衛／通り油町 藤岡慶治郎／日本橋通り三丁目 丸屋鉄治郎／府下壳捌所 尾張町二丁目 津田源七／南伝馬町二丁目 伊勢屋喜三郎／本石町二丁目 武蔵屋昇平／大伝馬町二丁目 三宅半四郎／浅草瓦町 森本順三郎／浅草馬道 山田屋彦兵衛／下谷池之端仲町 伏見屋重兵衛／牛込肴町 深野弥兵衛／四ツ谷伝馬町三丁目 伊勢屋久兵衛／麴町五丁目 篠崎忠雄／各地壳捌所 横浜太田町二丁目 伊勢屋梅蔵／備前岡山西大寺町 阿倍勝忠／信州南佐久郡白田駅 依田儀三郎／陸前仙台大町四丁目 木村文助／三重県津東町 浅野東助／大坂備後町 此村彦輔／同本町四丁目 岡島真七／千葉県千葉町 立真舎／常州土浦田宿町 柳且堂／兵庫仲町老丁目 清水瀧／江州大津京町 澤一二郎／但馬豊岡宵田町

由利安助／加州金沢尾張町 雲根堂／長崎酒屋町角 安中与兵衛／信州小諸 小山九郎兵衛／三州豊橋上伝馬町 錚々堂／駿州沼津 中村九十郎／尾張名古屋本町 石版舎／江州彦根西大工町 田中伍郎／西京寺町通り 駿々堂／信州小室 小枡屋喜太郎／尾州名古屋本町 美濃屋代助／上州高崎町 文心堂／相州小田原緑町 石寿堂 喜右工門／尾州知多郡半田村 小栗太郎兵衛／同厚木天王町 米屋新吉／信州上田原町 堺屋武右工門／同松本仲町 竹内禎十郎／越後水原町 西村六平／同三條町 樋口小左工門／陸前石ノ巻二百一番地 三陸屋利兵衛／陸中盛岡本町 澤田正助／陸奥青森米町 池田吉助／同弘前土手町 野崎九郎兵衛／羽前鶴ヶ岡五日町 小池藤次郎／函館港内浜町 魁文社／同地蔵町 脩文堂／豆州熱海温泉場 鈴木良三／三州豊橋呉服町 高須又八／雲州松江本町 園山喜三 右工門／土州高知種崎町 澤本駒吉／右之外各府県書林絵双紙店江差出シ候間御求可被下候」【備考】口絵・挿絵は整版。

春色梅児誉美 三編 三卷一冊

【著編者】為永春水【画工】柳川重信【奥付等】「明治十五年十二月日再版御届」著者 故 為永春水／出版人 京橋区弥左衛門町十三番地 武田政吉／発兌 神田区裏神保町八番地 鶴声社【備考】口絵・挿絵は整版。

春色梅児誉美 四編 三卷一冊

【著編者】為永春水【画工】柳川重信【奥付等】「明治十五年十月十一日再版御届／著者 故 為永春水／出版人 東京府平民 京橋区 弥左衛門町十三番地 武田政吉／発売 神田区裏神保町八番地 鶴声社／府下大売捌所 両国横山町 辻岡屋文助／馬喰町貳丁目 山口屋藤兵衛／通り油町 藤岡慶治郎／日本橋通り三丁目 丸屋鉄治郎／神田雉子町 巖々堂／同小川町 秩山堂／人形町通り元大坂町 法木徳兵衛／飯田町二丁目 武田平治／外神田末広町 扇川堂／木挽町老丁目 万字堂／両国横山町 辻岡屋文助／馬喰町貳丁目 山口屋藤兵衛／通り油町 藤岡慶治郎／日本橋通り三丁目 丸屋鉄治郎／府下売捌所 尾張町二丁目 津田源七／南伝馬町二丁目 伊勢屋喜三郎／本石町二丁目 武蔵屋昇平／大伝馬町二丁目 三宅半四郎／浅草瓦町 森本順三郎／浅草馬道 山田屋彦兵衛／下谷池之端仲町 伏見屋重兵衛／牛込肴町 深野弥兵衛／四ツ谷伝馬町三丁目 伊勢屋久兵衛／麴町五丁目 篠崎忠雄／各地売捌所 横浜太田町二丁目 伊勢屋梅蔵／備前岡山西大寺町 阿倍勝忠／信州南佐久郡白田駅 依田儀三郎／陸前仙台大町四丁目 木村文助／三重県津東町 浅野東助／大坂備後町 此村彦輔／同本町四丁目 岡島真七／千葉県千葉町 立真舎／常州土浦田宿町 柳旦堂／兵庫仲町老丁目 清水瀧／江州大津京町 澤一二郎／但馬豊岡宵田町 由利安助／加州金沢尾張町 雲根堂／長崎酒屋町角 安中与兵衛／信州小諸 小山九郎兵衛／三州豊橋上伝馬町 鈴々堂／駿州沼津 中村九十郎／尾張名古屋本町 石版舎／江州彦根西大工町 田中伍郎／西京

寺町通り 駿々堂／信州小室 小枡屋喜太郎／尾州名古屋本町 美濃屋代助／上州高崎町 文心堂／相州小田原緑町 石寿堂喜右工門／尾州知多郡半田村 小栗太郎兵衛／同厚木天王町 米屋新吉／信州上田原町 堺屋武右工門／同松本仲町 竹内禎十郎／越後水原町 西村六平／同三條町 樋口小左工門／陸前石ノ巻二百一番地 三陸屋利兵衛／陸中盛岡本町 澤田正助／陸奥青森米町 池田吉助／同弘前土手町 野崎九郎兵衛／羽前鶴ヶ岡五日町 小池藤次郎／函館港内浜町 魁文社／同地蔵町 脩文堂／豆州熱海温泉場 鈴木良三／三州豊橋呉服町 高須又八／雲州松江本町 園山喜三右工門／土州高知種崎町 澤本駒吉／右之外各府県書林絵双紙店江差出シ候 間御求可被下候」【備考】口絵・挿絵は整版。

春色辰巳園 初編 三卷一冊

【著編者】為永春水【序年・序者】天保四・三亭春馬【画工】不詳【奥付等】「明治十五年十月十一日再版御届／著者 故 為永春水／出版人 東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田政吉／発兌 神田区裏神保町八番地 鶴声社」【備考】序文・口絵は整版。巻末に「鶴声社書目」あり。

春色辰巳園 二編 三卷一冊

【著編者】為永春水【序年・序者】桜川善孝【画工】不詳【奥付等】「明治十五年十月十一日再版御届／著者 故 為永春水／出版人

東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田政吉／発兌 神田区
裏神保町八番地 鶴声社【備考】序文・口絵は整版。巻末に「鶴
声社書目」あり。

春色辰巳園 三編 三卷一冊

【著編者】為永春水【序年・序者】天保六・一松舎竹里【画工】不
詳【奥付等】「明治十五年十月廿三日再版御届／著者 故 為永春
水／出版人 東京府平民 東京京橋弥左衛門町十三番地 武田政吉
／発兌 神田裏神保町八番地 鶴声社」【備考】序文・口絵は整版。

春色辰巳園 四編 三卷一冊

【著編者】為永春水【序年・序者】天保六・為永春水【画工】不詳
【奥付等】「明治十五年十月廿三日再版御届／著者 故 為永春水／
出版人 東京府平民 東京京橋弥左衛門町十三番地 武田政吉／発
兌 神田裏神保町八番地 鶴声社」【備考】序文・口絵は整版。

春雨文庫 七編 二卷二冊

【著編者】和田定節【序年・序者】明治十四・二世叟齋了古【画工】
不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十五年十月廿五日御届／編集人
下谷坂木町一丁目十四番地 和田定節／東京書肆出版人 京橋区
弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発売書肆 長野県善光寺 小

杵屋西澤喜太郎」

仮名文章娘節用 二編 三卷一冊

【著編者】曲山人【序年・序者】三文舎主人【画工】不詳【奥付等】
「明治十五年十一月廿七日再版御届／著者 故 曲山人／出版人
東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田政吉／発兌 神田裏
神保町八番地／横山町 辻岡屋文助／日本橋通二 丸屋鉄次郎／神
田雉子町 巖々堂／同小川町 秩山堂／飯田町 武田平治／通り油
町 藤岡屋慶治郎／人形町通り 法木徳兵衛／馬喰町二 山口屋藤
兵衛／木挽町一丁目 万字堂／芝三崎町 和泉屋市兵衛」

仮名文章娘節用 三編 三卷一冊

【著編者】曲山人【序年・序者】天保五・三文舎主人【画工】不詳
【奥付等】「明治十五年十一月廿七日再版御届／著者 故 曲山人／
出版人 東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田政吉／発兌
神田裏神保町八番地／横山町 辻岡屋文助／日本橋通二 丸屋鉄
次郎／神田雉子町 巖々堂／同小川町 秩山堂／飯田町 武田平治
／通り油町 藤岡屋慶治郎／人形町通り 法木徳兵衛／馬喰町二
山口屋藤兵衛／木挽町一丁目 万字堂／芝三崎町 和泉屋市兵衛」
【備考】発兌は「鶴声社」。

明治十六年（一八八三） 癸未

春雨文庫 八編 二卷二冊

【著編者】和田定節【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十六年十月十九日御届／編集人 下谷区坂木町一丁目十四番地 東京府士族 和田定節／東京書肆出版人 京橋区弥左工門町十三番地 東京府平民 武田伝右衛門／発売書肆 長野県善光寺 小枡屋西澤喜太郎」

続明治烈婦伝 一卷一冊

【著編者】高島藍泉【序年・序者】明治十五・高島藍泉【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十六年十一月廿一日御届／編輯人 静岡県士族 東京々橋区南鍋町二丁目三番地 高島藍泉／出版人 東京府平民 同京橋区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門」

明治十七年（一八八四） 甲申

茶道手引草 二卷二冊

【著編者】堀口精一【序年・序者】①明治十六・鞆南居士②明治十六・堀口精一【筆耕】成瀬温（序②）【奥付等】「明治十七年一月廿八日御届／同三月出版／編輯人 群馬県平民 群馬県下碓氷郡下磯

部村廿番地 堀口精一／出版人 東京府平民 浅草区北清島町十六番地 小林米造／発売人 同平民 浅草区北東仲町五番地 吉田久兵衛／同平民 京橋区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門」

赤穂節義録 二編 五卷五冊

【著編者】高島藍泉【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十七年九月五日板権免許／同年十月出版／著者 静岡県士族 東京京橋区南鍋町二丁目二番地 高島藍泉／出版人 東京府平民 同京橋区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門／壳捌書林 東京芝神明前山中市兵衛／日本橋通二丁目 稲田佐兵衛／横山町三丁目 辻岡屋文助／日本橋通一丁目 大倉孫兵衛／大阪心齋橋博労町 岡田茂兵衛／同南久宝寺町 前川善兵衛／同北久宝寺町 前川源七郎／同本町四丁目 岡嶋真七」

明治十八年（一八八五） 乙酉

三体千字文 一卷一冊

【著編者】南谷新七【筆耕】村田海石【奥付等】「明治十八年三月廿六日出版御届／同十八年四月三十日刻成／訓点兼出版人 大阪府平民 南区安堂寺橋通三丁目五十三番地 南谷新七／諸国発売書肆 尾州名古屋 川瀬代助／越中富山 大橋甚吾／加賀金沢 益智館／

筑前福岡 林斧助／薩摩鹿兒島 吉田幸兵衛／東京市 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門」

初学必携英学独稽古 一巻一冊

【著編者】和田定節【序年・序者】明治十八・和田定節カ【奥付等】「明治十八年十月五日出版御届／編輯人 東京府土族 下谷区坂本二丁目三十番地 和田貞節／出版人 東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発行書林 横山町三丁目 辻岡文助／横山町二丁目 鶴声社／馬喰町二丁目 山口藤兵衛／芝露月町 覚張栄次郎／日本橋通三丁目 小林鉄次郎／西国薬研堀町 鈴木喜右衛門」

古代錦繡集古図譜 一巻一冊

【著編者】加藤為直【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十八年十二月廿八日御届／編輯人 千葉県土族 赤坂区青山北町三丁目三十九番地寄留 加藤為直／出版人 東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門」【備考】巻末に『北斎図式』『晝斎楽画』『花鳥山水早引漫画』『華山蘭竹譜』『琢華堂画譜』『近世四大家画譜』の広告あり。

明治十九年（一八八六） 丙戌

縁結月下菊 三巻一冊

【著編者】柳亭種彦【序年・序者】天保十・柳亭種彦【画工】不詳【奥付等】「明治十九年一月■日御届／同年出版／出版人 東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発兌 日本橋区横山町二丁目 鶴声社／全 大坂心齋橋筋南詰 鶴声社支店東京屋／全 横浜吉田町二丁目 鶴声社支店／全 日本橋区新和泉町一番地 今古堂／大壳捌 兎屋誠／上田屋栄次郎／金桜堂内藤／春陽堂／丸屋鉄次郎／山口屋藤兵衛／鈴木喜衛門／辻岡屋文助」

卅三間堂 柳の糸 五巻一冊
棟材奇伝

【著編者】小枝繁【画工】不詳【奥付等】「明治十八年十二月廿四日御届／同十九年四月日出版／著者故人 小枝繁／出版人 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発兌 同所 鵬文社／発売人 浅草区三好町七番地 大川錠吉」

世間手代気質 巻之一 一巻一冊

【著編者】江島其磧【序年・序者】江島其磧【画工】不詳【奥付等】「明治十九年五月五日御届／全五月出版／著者 故人 其磧／出版人 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／東京発兌書林京橋南鍋町一丁目 兎屋／全 全弥左衛門町 大島屋／全 全南伝馬町

一丁目 春陽堂／全 日本橋橋町一丁目 鶴声社／全 全通り四丁目 金桜堂／全 神田淡路町 巖々堂／全 麴町四丁目 磯部屋／此他各書林絵双紙屋へ出差し置候」

世間手代気質 卷之二 一巻一冊

【著編者】江島其磧【画工】不詳【奥付等】「明治十九年五月五日御届／全六月出版／著者 故人 其磧／出版人 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／東京発兌書林京橋南鍋町一丁目 兔屋／全 全弥左衛門町 大島屋／全 全南伝馬町一丁目 春陽堂／全 日本橋橋町一丁目 鶴声社／全 全通り四丁目 金桜堂／全 神田淡路町 巖々堂／全 麴町四丁目 磯部屋／此他各書林絵双紙屋へ出差し置候」【備考】卷之三以降は未刊。

近世桜田紀聞 七巻一冊

【著編者】松村春輔【画工】月岡芳年【筆耕】不詳【奥付等】「明治八年三月十九日出版御届／同十九年六月廿四日別製合本御届／蔵版書林 東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／大発売人 鶴声社／春陽堂／辻岡文助／兔屋誠」【備考】『近世桜田紀聞』三編七巻の合本再版本。

近世桜田紀聞 七巻一冊

【著編者】松村春輔【画工】不詳【奥付等】「明治八年十月廿三日版權免許／同十九年六月廿九日再版御届／東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発兌人 東京日本橋区橋町四丁目十一番地 鶴声社本店／同 大坂心齋橋南詰 鶴声社支店／同 横浜区吉田町一丁目六番地 鶴声社支店」

三日月阿專 六巻一冊

【著編者】為永春水【序年・序者】文亭綾繼【画工】不詳【奥付等】「明治十九年十月二日御届／同年全月十六日出版／故人 為永春水作／出版人 東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／大売捌 日本橋区横山町三丁目 辻岡文助／京橋区南鍋町一丁目 兔屋誠／日本橋区橋町一丁目 鶴声社／日本橋区通四丁目 春陽堂／日本橋区本石町二丁目 上田屋栄三朗／日本橋区薬研堀町 鈴木喜右衛門」

園雪三勝草紙 三巻一冊

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【奥付等】「明治十九年十月五日御届／同年十一月日出版／故人 為永春水作／出版人 東京府平民 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／大売捌 日本橋区横山町三丁目 辻岡文助／京橋区南鍋町一丁目 兔屋誠／日本橋区橋町一丁目 鶴声社／日本橋区通四丁目 春陽堂／日本橋区本石町二丁目 上田屋栄三朗／日本橋区薬研堀町 鈴木

木喜右衛門」

明治二十二年（一八八九） 己丑

人情解剖詩 一卷二冊

【著編者】中島嵩【序年・序者】仮名垣魯文【跋年・跋者】①仮名垣魯文②明治二十一・大槻如電【画工】不詳【奥付等】「明治二十二年一月三日印刷／同年同月十二日出版／著作者 東京牛込区市谷田町二丁目四十番地 中島嵩／発行兼印刷者 全本郷区春木町三丁目十三番地 武田伝右衛門／発売人 全日本区川瀬石町二番地 林平次郎」

風来先生春遊記 三卷三冊

【著編者】陳奮翰【序年・序者】①安永八・陳奮翰②醉多道士【跋年・跋者】安永八・板部羅甫【奥付等】「明治十四年四月新刻／同廿二年五月求版／東京市本郷区春木町三丁目十三番地寄留 武田伝右衛門／同浅草区三好町七番地 大川錠吉」【備考】整版。明治十四年（二八八一）刊の『風来山人春遊記』（弘令社版）を求版。改題本。

明治二十三年（一八九〇） 庚寅

易学通解 二卷二冊 漢学

【著編者】井田龜学（著）・栗原龜山（校）・田井龜戴（校）【序年・序者】寛政八・【筆耕】不詳【奥付等】「明治廿三年七月十日三版印刷出版／発行兼印刷者 東京書舗 東京市神田区仲町二丁目六番地 武田伝右衛門」【備考】嘉永四年（一八五二）再印の『易学通解』（英大助版）を求版か。

明治二十四年（一八九一） 辛卯

俳諧新五百題 二卷二冊

【著編者】鳥越等裁（校）・武田正吉（編）【序年・序者】①明治二十四・鳥越等裁②明治二十三・幹朶園【奥付等】「明治廿四年十月廿五日印刷／全年十月廿七日出生／著作者 東京府平民 京橋区弥左工門町拾二番地 武田正吉／発行兼印刷者 本郷区春木町三丁目拾三番地 武田伝右工門／発行所 浅草区三好町七番地 大川錠吉」【備考】整版。明治二十二年（一八八九）刊の春秋園瀧川編・佳峰園等裁校『明治玉簾集』（稲田佐兵衛版）の改題再印本。

明治二十五年（一八九二） 壬辰

美術彫刻画譜 一巻一冊

【著編者】不詳【序年・序者】明治四・岡本竺二【奥付等】「明治廿五年二月二十日印刷／明治廿五年三月日出版／印刷兼発行者 東京市京橋区弥左工門町拾三番地 武田伝右衛門／発売元 東京市本郷区春木町三丁目拾三番地 文永堂／特別発売書肆 辻岡屋文助／上田屋栄三郎／大川屋錠吉／山口屋藤兵衛／金桜堂／春陽堂／明道堂／辻本九兵衛／目黒支店／小林喜右衛門／大倉書店」【備考】弘文館から求版か。

明治二十九年（一八九六） 丙申

明治開化用文 一巻一冊

【著編者】佐久間米三郎【筆耕】不詳【奥付等】「明治廿九年八月廿九日求版／著者 佐久間米三郎／発行兼印刷者 本郷区春木町三丁目十三番地 武田伝右衛門／売捌所 浅草区三好町七番地 大川錠吉」【備考】明治十七年（一八八四）刊『明治小学用文』（青琳堂高橋松之助版）の改題後印本。

漢画独楽譜 一名うひ学 二巻二冊

【著編者】松岡正盛（著）・吉田信孝（閲）・松岡鉛吉（閲）【序年・序者】明治十五・松岡正盛【画工】松岡正盛【奥付等】「明治十五年八月廿八日板権免許／同廿九年十月二日求版／著者并画工 東京府平民 下谷区下谷西町三十三番地 松岡正盛／発行兼印刷者 本郷区春木町三丁目十三番地 武田伝右衛門／売捌所 浅草区三好町七番地 大川錠吉」【備考】整版。明治十五年（一八八二）刊の『漢画独楽譜』二巻二冊（北澤伊八版）を求版。

明治三十年（一八九七） 丁酉

光琳百図 二巻二冊

【著編者】尾形光琳【序年・序者】亀田鵬斎【奥付等】「明治三十年八月三十日求版／明治三十年九月一日印刷／明治三十年九月五日発行／発行兼印刷者 東京市本郷区春木町三丁目十三番地 武田伝右衛門」【備考】文化十二年（一八一五）刊の『光琳百図』前編二巻二冊を求版。

明治三十一年（一八九八） 戊戌

近世先哲叢談 正編 二巻二冊

【著編者】松村操【序年・序者】明治十三・阪谷朗廬【奥付等】未見
【備考】整版。上巻見返しに「版權所有 文永堂藏版」とある。明
治十三年（一八八〇）刊の『近世先哲叢談』正編（巖々堂岩崎好正
版）を求版。

近世先哲叢談 続編 二卷二冊

【著編者】松村操【序年・序者】明治十五・蒲生重章【奥付等】「明
治十三年七月十日板権所有／明治三十一年四月十日再版／著者 東
京浅草東三筋町五十九番地 松村操／発行兼印刷者 同本郷春木町
三丁目十三番地 武田伝右衛門」【備考】整版。明治十五年（一八
八二）刊の『近世先哲叢談』続編（巖々堂岩崎好正版）を求版。

明治三十二年（一八九九） 己亥

本朝画史 五卷五冊

【著編者】狩野永納【序年・序者】①延宝六・林鶯峰②元禄六・狩野
永納【跋年・跋者】元禄六・狩野永納【奥付等】「明治三十二年二月
求版／発行所 東京市京橋区南紺屋町十八番地 尚栄堂 小川寅松
／発行所 東京市本郷区春木町三丁目十三番地 文永堂 武田伝右
衛門」【備考】整版。

仏像図彙 五卷五冊

【著編者】土佐秀信【序年・序者】天明三・土佐秀信【跋年・跋者】
元禄三・指月軒義山【画工】土佐秀信【筆耕】不詳【奥付等】「明
治十九年五月二十日御届／同卅三年三月廿八日求版／発行兼印刷者
京橋区弥左エ門町拾三番地 武田伝右衛門」【備考】明治十九年
（一八八六）刊の『仏像図彙』（寺田熊治郎版）を求版か。

明治三十四年（一九〇一） 辛丑

篆隸十体千字文 一卷一冊

【著編者】孫丕顯（編）・王基（校）【奥付等】「明治卅四年一月十
五日購版／発行者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛
門」【備考】整版。文化十四年（一八一七）刊の『篆隸十体千字文』
（西村屋与八版）を求版。

明治三十六年（一九〇三） 癸卯

育児衛生顧問 一卷一冊

【著編者】東京衛生協会【序年・序者】柴田伊勢牟【奥付等】「明治
三十六年六月二十日印刷／明治三十六年六月廿五日／纂訳者 東京

衛生協会／右代表者 柴田伊弉牟／発行者 東京市麴町四丁目十三番地 磯部太郎兵衛／同 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷者 東京市京橋区京橋水谷町七番地 山村郁作／発元 東京市麴町区麴町四丁目十三番地 文昌堂／同 東京市神田区仲町二丁目六番地 文永堂／東京大売捌 東京堂／林六合館／岡崎屋／南江堂／関西大売捌 森村九兵衛／盛文堂／積善館」

小児歯牙衛生論 一卷一冊

【著編者】伊澤信平（校閲）・重城養二（著）【序年・序者】明治三十六・重城養二【奥付等】「明治三十六年十一月二十日印刷／明治三十六年十一月廿六日発行／校閲者 伊澤信平／著者 東京市京橋区南伝馬町一丁目一番地 重城養二／発行兼印刷者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発売所 東京市神田区仲町二丁目 文永堂書店」

明治三十九年（一九〇六） 丙午

小説字林 一卷一冊

【著編者】桑野銳【序年・序者】明治十七・三木愛花【奥付等】「明治十四年四月十九日版權免許／同三十九年八月二日求版／纂輯人 福岡県土族 京橋区築地二丁目十六番地 桑野銳／発行者 東京市京

橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発行所 東京市神田区仲町二丁目六番地 文永堂 武田伝右衛門【備考】明治十七年（一八八四）刊の『小説字林』（九春社版）を求版。

歴史参考 集古図譜 一卷一冊

【著編者】好古社出版部【序年・序者】明治三十九・宮崎幸麿【奥付等】「編輯兼発行者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 好古社出版部／代表者 青山清吉／発行兼印刷者 東京市神田区仲町二丁目六番地 武田伝右衛門／発行所 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 青山堂書房／全 東京市神田区仲町二丁目六番地 文永堂書房」

明治四十二年（一九〇九） 己酉

世界新おとぎ 一卷一冊

【著編者】雨谷幹一【序年・序者】明治四十二・猿蟹山人【画工】谷洗馬【奥付等】「明治四十二年四月十七日印刷／明治四十二年四月廿二日発行／編者 雨谷幹一／発行者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発行者 東京市神田区仲町二丁目六番地 中島卯三郎／印刷者 東京市芝区桜田鍛冶町四番地 高宗啓蔵／発行所 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田文永堂／東京市神田区仲町二丁目六番地 中島辰文館」

明治四十四年（一九一〇） 辛亥

芸者 一卷一冊

【著編者】田村西男【奥付等】「明治四十三年十二月十五日印刷／明治四十四年一月三日発行／著者 田村西男／発行者 東京市神田区仲町二ノ六 中島卯三郎／印刷者 東京市京橋区新柴町五ノ二 山内歙次郎／発行所 東京市神田区仲町 中島辰文館／発行所 東京市京橋区弥左衛門町 武田文永堂」

陽明学と偉人 一卷一冊

【著編者】仙洞隠士【序年・序者】明治四十四・仙洞隠士【奥付等】「明治四十四年一月三十日印刷／明治四十四年二月十五日発行／著者 佐藤庄太／発行者 東京京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発行者 東京市神田区仲町二丁目六番地 中島卯三郎／発行所 東京京橋区弥左衛門町十三番地 武田文永堂／発行所 東京市神田区仲町二丁目六番地 中島辰文館」

俳諧江戸調 一卷一冊

【著編者】熊谷無漏【序年・序者】明治四十四・小泉迂外【奥付等】「明治四十四年八月二日印刷／明治四十四年八月十日発行／著者 熊谷発之介／発行者 東京市神田区仲町二ノ六 中島卯三郎／印刷者 東京市京橋区新柴町五ノ二 山内歙次郎／発行所 東京市神田区仲町

明治四十三年（一九一〇） 庚戌

偉人幽斎 一卷一冊

【著編者】池辺義象【序年・序者】明治四十三・池辺義象【奥付等】「明治四十三年九月十五日印刷／明治四十三年九月二十日発行／著者 池辺義象／発行者 東京市神田区仲町二丁目六番地 中島卯三郎／印刷者 東京市神田区蠟燭町八番地 武木信賢／発行所 東京市京橋区南伝馬町一丁目 吉川弘文館／同 京都市上京区寺町二條下ル 松田庄助／同 東京市京橋区弥左衛門町 武田文永堂／東京市神田区仲町二丁目 中島辰文館」

古文後集講話 二卷一冊

【著編者】森伯容（訳）【奥付等】「明治四十三年十月五日印刷／明治四十三年十一月一日発行／著者 森伯容訳／発行者 東京市京橋区南紺屋町十八番地 小川寅松／発行者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷者 東京市京橋区弓町廿四番地 金子久太郎／印刷所 東京市京橋区弓町廿四番地 三協印刷株式会社／発行所 京橋区南紺屋町 尚楽堂／京橋区弥左衛門町 文永堂」

中島辰文館／発行所 東京市京橋区弥左衛門町 武田文永堂

義太夫の心得 一巻一冊

【著編者】竹本撰津大掾・熊谷無漏【序年・序者】①明治四十四・岡鬼太郎②明治四十四・竹本撰津大掾【奥付等】「明治四十四年十月五日印刷／明治四十四年十月十日発行／著者 二見金助／著者 熊谷登之介／発行所 東京市神田仲町二ノ六 中島卯三郎／印刷者 東京市京橋区新栄町五ノ二 山内鋏次郎／発行所 東京市神田区仲町 中島辰文館／発行所 東京市京橋区弥左衛門町 武田文永堂」

大正二年（一九一三） 癸丑

廓模様 一巻一冊

【著編者】生田蝶介【序年・序者】大正二・生田蝶介【画工】武田ひさし【奥付等】「大正二年七月一日印刷／大正二年七月十日発行／著者 生田蝶介／発行所 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷者 東京市神田区松下町七、八番地 堀藤太郎／発行所 東京市京橋区弥左衛門町 文永堂／発売所 東京市神田区仲町 辰文館」

大正三年（一九一四） 甲寅

草書日要集字 一巻一冊

【著編者】小野鷺堂【奥付等】「大正三年壹月廿五日印刷／大正三年壹月参拾日発行／書者 東京市神田区猿楽町三丁目二番地 小野之助／発行所 東京市京橋区鈴木町十二番地 斯華会出版部 右代表者 林縫之助／発行兼印刷者 東京市神田区表神保町六番地 斎藤藤次郎／印刷所 東京市京橋区木挽町式丁目十番地 電新堂印刷所／発行所 東京市神田区表神保町六番地 文永堂／発行所 東京市京橋区新栄町五丁目 合資会社吉川弘文館」

書家自在 三巻三冊

【著編者】梅辻春樵【奥付等】「大正三年一月廿五日印刷／大正三年二月五日発行／校閲者 梅辻春樵／編輯兼発行所 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発行所 東京市京橋区弥左衛門町 文永堂／発売本 東京市神田仲町 辰文館」

大正四年（一九一五） 乙卯

改正戸籍願届一斑 一巻一冊

【著編者】中島忠一【奥付等】「大正四年一月十日印刷／大正四年一月十五日発行／著作兼発行者 中島忠一／印刷者 東京市芝区南佐久町二丁目十二番地 吉田鍵吉／印刷所 東京市芝区南佐久町二丁目十二番地 吉田活版所／発行所 東京市京橋区弥左衛門町 武田文永堂／名古屋市中区横三蔵町五丁目 梶尾文光堂」

町五丁目二番地 山内鉄次郎／発行元 東京市京橋区弥左衛門町文永堂」

大正六年（一九一七） 丁巳

草書の書方 一卷一冊

【著編者】齋藤春村【序年・序者】①大正六・瀧澤菊太郎②大正六・齋藤春村【奥付等】「大正六年四月十日印刷／大正六年四月十五日発行／編書者 齋藤春村／発行兼印刷者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄町五丁目二番地 新栄社印刷所／発行元 東京市京橋区弥左衛門町 文永堂／売捌所 東京市神田区仲町 辰文館／東京市浅草区三好町 大川屋／神田区表神保町 精文館」

大正五年（一九一六） 丙辰

漢字のくづし方 一卷一冊

【著編者】齋藤春村【序年・序者】大正五・齋藤春村【筆耕】不詳【奥付等】「大正五年九月十日印刷／大正五年九月廿日発行／編著者 齋藤春村／発行兼印刷者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄町五丁目二番地 山内鉄次郎／発行元 東京市京橋区弥左衛門町 文永堂／売捌所 東京市神田区仲町 辰文館／同 東京市浅草区三好町 大川屋」

近世詩作幼学便覧 続 二卷一冊

【著編者】福井淳【奥付等】「明治拾六年一月廿七日出版御届／大正六年七月二十七日第拾七版／編輯人 福井淳／発行者 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷者 京橋区新栄町五丁目二番地 山内鉄次郎／発行所 京橋区弥左衛門町十三番地 文永堂／売捌所 神田区仲町二丁目六番地 辰文館」【備考】花井卯助から求版か。

論画竹偶筆 竹石小言 一卷一冊

【著編者】伊藤茂右衛門【序年・序者】大正五・伊藤茂右衛門【跋年・跋者】宮内黙三【奥付等】「大正五年九月十日印刷／大正五年九月廿日発行／編輯者 伊藤茂右衛門／発行兼印刷者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄

新案女子文のかき方 一巻一冊

【著編者】斎藤春村【序年・序者】大正六・斎藤春村【奥付等】「大正六年九月五日印刷／大正六年九月十日発行／編書者 斎藤春村／発行兼印刷者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄町五丁目二番地 新栄社印刷所／発行元 東京市京橋区弥左衛門町 文永堂／売捌所 東京市神田区仲町 辰文館／東京市浅草区三好町 大川屋／神田区表神保町 精文館」

かなの書方 一巻一冊

【著編者】斎藤春村【序年・序者】大正六・斎藤春村【奥付等】「大正六年九月五日印刷／大正六年九月十日発行／著書者 斎藤春村／発行兼印刷者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄町五丁目二番地 新栄社印刷所／発行元 東京市京橋区弥左衛門町 文永堂／売捌所 東京市神田区仲町 辰文館／東京市浅草区三好町 大川屋／神田区表神保町 精文館」

大正七年（一九一八） 戊午

実験奇薬自宅療法 一巻一冊

【著編者】本草研究会【奥付等】「大正七年四月廿五日印刷／大正七年五月一日発行／本草研究会編／東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄町五丁目二番地 新栄印刷合資会社／発行所 京橋区弥左衛門町十三 武田文永堂」

濟世致富 坤元術 一巻一冊

【著編者】岩本梓石【序年・序者】大正七・咫尺庵主人【奥付等】「大正七年九月五日印刷／大正七年九月十日発行／著者 岩本梓石／発行者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄町五丁目二番地 岩本菊雄／印刷所 東京市京橋区弥左衛門町 文永堂／売捌所 東京市神田区仲町 辰文館／東京市浅草区三好町 大川屋／神田区表神保町 精文館」

大正八年（一九一九） 己未

素人早わかり民間日用 まじなひ秘法 一巻一冊

【著編者】顕神学会【序年・序者】大正七・陶々主人【奥付等】「大正八年二月十日印刷／大正八年二月十五日発行／顕神学会編纂／発行兼印刷者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄町五丁目二番地 新栄印刷合資会社／発行

所 武田文永堂

杜工部詩醇 六卷三冊

大正九年（一九二〇） 庚申

日本名勝詩選 六卷五冊

【著編者】陳克恕（述）・行徳王江（校）【序年・序者】明治三二・藤沢恒【奥付等】「大正九年一月五日六版印刷／大正九年二月五日六版発行／著作者 行徳王江／發行者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄町五丁目式番地 新栄印刷合資会社／發行所 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 文永堂」【備考】活版。明治三十二年（一八九九）刊の『日本名勝詩選』（青木嵩山堂版）を求版。

【著編者】近藤元粹【奥付等】「大正九年一月五日六版印刷／大正九年二月五日六版発行／著作者 近藤元粹／發行者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄町五丁目式番地 新栄印刷合資会社／發行所 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 文永堂」【備考】明治三十年（一八九七）刊の『杜工部詩醇』（青木嵩山堂版）を求版。

刊年不明

篆刻鍼度 八卷二冊

【著編者】近藤南州【序年・序者】明治三十一・近藤南州【奥付等】「大正九年一月五日六版印刷／大正九年二月五日六版発行／著作者 近藤元粹／發行者 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／印刷所 東京市京橋区新栄町五丁目式番地 新栄印刷合資会社／發行所 東京市京橋区弥左衛門町十三番地 文永堂」【備考】明治三十一年（一八九八）刊の『篆刻鍼度』（青木嵩山堂版）を求版。

春抄 春色英対暖語 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】卷七口絵に「大でん」という千社札がみえる。また卷九卷末に為永春水作『勤なればいともかしこき鶯の声音楽談軒端の梅』の広告あり。

春抄 春色英対暖語 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】卷十に為永春水作『春色梅美婦祢』、同卷末に為永春水作『六女競今様六桂撰』の広告あり。

春抄 春色英対暖語 五編 三卷三冊 人情本
娯景

【著編者】為永春水【序年・序者】平亭銀鷄【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】卷十三に「米八婀娜吉丹次郎の物語類本目録」を備える。また卷十五卷末に『春色梅実婦祢』の近刊予告あり。

雪窓 玉濃枝 二編 四卷四冊 人情本
閑語

【著編者】南仙笑楚満人【序年・序者】①琴通舎英賀②南仙笑楚満人【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文②に「本文彫刻揃し日文永堂の帳場に座し」とある。

貞操婦女八賢誌 九編 三卷三冊 人情本

【著編者】二世為永春水【序年・序者】二世為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見

花名所懐中曆 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】陽風亭柳外【画工】溪齋英泉【筆耕】不詳【奥付等】未見

春色雪の梅 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春雅【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不

詳【奥付等】未見

春色雪の梅 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春雅【序年・序者】①為永春水②為永春笑【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文①に「文永堂が題号し」とある。

清談松の調 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】松亭金水【画工】歌川芳藤【筆耕】不詳【奥付等】未見

清談松の調 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】上巻口絵に「大島屋」とみえる。

春色鶯日記 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「全志書林 江州八日市 小杉文右衛門／江戸 大島屋伝衛門／丁子屋平兵衛／大坂 河内屋茂兵衛」

娜真都翳喜 初編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見

娜真都翳喜 二編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】中巻挿絵に「大伝」とみえる。

娜真都翳喜 三編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春笑【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見

娜真都翳喜 四編 三卷三冊 人情本

【著編者】為永春水【序年・序者】為永春水【画工】歌川国直【筆耕】不詳【奥付等】未見【備考】序文に「文永堂が。例ながらの丹誠に」とある。

おくみ 春色江戸紫 三編 三卷三冊 人情本
惣次郎

【著編者】山々亭有人【序年・序者】山々亭有人【画工】歌川芳虎【筆耕】不詳【奥付等】「文永堂寿梓」（下巻末）

絵本実語教 一巻一冊 教訓

【著編者】為永春水【跋年・跋者】為永春水【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「江戸書林 京橋南中通り弥左エ門町中程 大嶋屋伝右衛門梓」【備考】巻末に為永春水撰『三十六佳撰』の広告あり。

絵本大学幼稚講釈 一巻一冊 教訓

【著編者】不詳【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「江戸書林 京橋南中通り弥左エ門町中程 大嶋屋伝右衛門梓」【備考】巻末に為永春水撰『三十六佳撰』の広告あり。

第三節 初代大川屋錠吉出版書目年表稿

凡例

- 一、聚栄堂大川屋錠吉が出版に携わった書籍のうち、現段階で確認できたものを年代順に記載した。
- 一、大川屋が求版した書籍についても、その年代の明らかなものは記載した。
- 一、書名ごとに立項し、分類と員数に加え、書誌事項を次の項目に従って示した。

- 【著編者】…著者・編者・校閲者等を通行の名に改めて示した。
- 【序年・序者】…序文の記された年・序文を記した人物を示した。
- また、序文が複数ある場合は、①・②・③とそれぞれ項目を設けた。
- 【跋年・跋者】…跋文の示された年・跋文を記した人物を示した。
- 【画工】…通行の名に改めた画工名を示した。
- 【筆耕】…通行の名に改めた筆耕名を示した。
- 【奥付等】…奥付を抜粋した。奥付を確認できていない場合は「未

見」とした。

【備考】…特記すべき事項を示した。

- 一、【序年・序者】【跋年・跋者】【画工】【筆耕】【備考】の項目は、該当する書誌事項がない場合は省略した。
- 一、奥付等に記載された電話番号と振替番号は省略した。

明治十二年（一八七九） 己卯

新門辰五郎游俠譚 初編 二卷二冊

【著編者】萩原乙彦【序年・序者】明治十二・萩原乙彦【画工】歌川芳春【筆耕】不詳【奥付】「明治十二年五月 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉／京橋区弥左衛門町十三番地 大島屋伝右衛門 合梓」

新門辰五郎游俠譚 二編 二卷二冊

【著編者】萩原乙彦【序年・序者】明治十二・萩原乙彦【画工】歌川芳春【筆耕】不詳【奥付】「明治十二年五月 浅草区三好町七番地

大川屋錠吉／京橋区弥左衛門町十三番地 大島屋伝右衛門 合梓」

対山画譜 二卷二冊

【著編者】伊沢梅陵【序年・序者】明治十二・伊藤桂洲【跋年・跋者】明治十二・伊沢梅陵【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付】「明治十二年九月十七日御届／同十月出版／編輯人 広島国函館山ノ上町壹丁目廿六番地前田清助全居 青森県平民 伊沢保治／出版人 浅草区浅草三好町七番地 東京府平民 大川錠吉／発売人 同区浅草蔵前片町廿五番地 同平民 瀬山直治郎」【備考】下巻末に「鐘香園発行画譜目録」あり。

明治十三年（一八八〇） 庚辰

春風日記 初編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】二世為永春水【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十三年十二月廿八日御届／著述人 府下日本橋区蛸殻町二丁目七番地寄留 松村春輔／出版人 同京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発兌人 同浅草区三好町七番

地 大川屋錠吉」【備考】巻二巻末に処女香の広告あり。

春雨文庫 六編 二卷二冊

【著編者】和田定節【序年・序者】倭田散人【奥付等】「明治十三年十二月廿八日御届／編集人 府下本所区北二葉町二十番地 和田定節／出版人 同京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発兌人 同浅草区三好町七番地 大川屋錠吉」

新漢画指南 初集 二卷二冊

【著編者】伊沢梅陵【序年・序者】①明治十二・大沼沈山②明治十二・藤堂凌雲【跋年・跋者】明治十二・伊沢梅陵【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付】「明治十二年十一月廿日版權免許／全十二月刻成／全十三年一月発兌／著者 広島国函館山ノ上町一丁目前田清助全居 伊沢保治／出版人 浅草区浅草三好町五番地 大川錠吉／出版兼発売人 全区蔵前片町二十五番地 瀬山直次郎」【備考】坤巻末に「鐘香園発行画譜目録」あり。

新漢画指南 二集 二卷二冊

【著編者】伊沢梅陵【序年・序者】明治十三・平田虚舟【跋年・跋者】明治十三・王鄭章【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付】「明治十三年三月九日版權免許／全四月刻成／全五月発兌／著者 広島国函館

山ノ上町一丁目前田清助全居 伊沢保治／出版人 浅草区浅草三好町七番地 大川錠吉／出版兼発売人 全区蔵前片町二十五番地 瀬山直次郎

靄崖画譜 二卷二冊

【著編者】矢野西洲【序年・序者】藤森弘庵【跋年・跋者】明治十三年八月十日御届／全十月廿五日出版／編輯人 浅草新旅籠町十七番地 矢野晋六／出版人 浅草三好町五番地 大川錠吉／全兼発売人 浅草蔵前片町十一番地 瀬山直次郎【備考】下卷に「鐘香園発行画譜目録」あり。

明治十四年（一八八二） 辛巳

春風日記 二編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治十四・松村春輔【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十四年八月八日御届／著述人 山口県平民 府下京橋区南鍋町老丁目老番地 松村春輔／出版人 東京府平民 府下同区弥左エ門町十三番地 武田伝右衛門／同 浅草区三好町七番地 大川錠吉／発売人 同浅草区新福井町五番地 高梨弥三郎」

春風日記 三編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治十四・松村春輔【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十四年八月八日御届／編集人 京橋区南鍋町老丁目老番地寄留 松村春輔／出版人 京橋区弥左エ門町十三番地武田伝右エ門／同 浅草区三好町七番地 大川錠吉」

明清巾箱画譜 四卷四冊

【著編者】矢野西洲【序年・序者】①明治十三・巖谷一六②日下部鳴鶴③明治十三・松田雪柯【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十三年龍集庚辰十一月二十五／日蒙版權充可全十四年辛巳之歳第一月発売著者東京府平民浅草区新／旅籠街第十七号地居西洲矢野晋六／刊行者東京府平民浅草区三好街第十一号／地住書肆鍾香園瀬山直次郎」「東京書画舗／田沢静雲／麴地省三／岡田英朗／鈴木松三郎／遠藤武兵衛／岡部精吉／翠雲堂勝作／馬島杏雨／原政房／阿部柳所／栗原城山／中邨市造／朝陽堂松茂／赤松徳三／新井瓢九／岡部薇香／文醜堂／鹿間欽保／岡部銘」【備考】卷四卷末に『明清巾箱画譜』二集および『鄭板橋墨蘭譜』『天下有山堂蘭竹画譜』の広告あり。

孝貞近世名婦伝 初輯 二卷二冊

【著編者】岡田霞船【序年・序者】明治十三・岡田霞船【画工】伊藤静斎【筆耕】不詳【奥付等】「明治十三年十二月廿七日御届／同十四年一月卅一日出版／編輯人 神田区神田末広町十一番地 東京府平民 岡田良策／出版人 浅草区浅草三好町七番地 東京府平民 大川錠吉／発売人 高梨弥三郎」【備考】見返しに「東京 聚栄堂梓」とある。

明治都鄙人名録 一卷一冊

【著編者】岡田霞船【序年・序者】①明治十四・大沼沈山②明治十四・小野湖山③明治十四・亀谷省軒【跋年・跋者】明治十四・溝口桂巖【筆耕】不詳【奥付等】「明治十四年／四月七日御届／編輯人 下谷区西黒門町十八番地 東京府平民 岡田良策／出版人 浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉／定価三十五銭」日本橋通一丁目 北畠 須原屋茂兵衛／同二丁目 稲田 山城屋佐兵衛／芝三島町 山中 和泉屋市兵衛／浅草茅町二丁目 北沢 須原屋伊八／日本橋通二丁目 小林 須原屋新兵衛／芝宇田川町 牧野 和泉屋吉兵衛／横山町一丁目 出雲寺 出雲寺万次郎／小石川町大門町 青山 雁金屋清吉／浅草北東仲町 吉田 浅倉屋久兵衛／下谷数寄屋町 岡村 岡村屋庄助／通四丁目 中村 須原屋佐助／通二丁目 丸屋 丸屋善七／銀座三丁目 稲田 山城屋政吉／芝口一丁目 牧野 和泉屋善兵衛／芝宇田川町 内野 内野屋弥平治／芝飯倉

町五丁目 鈴木 万屋忠蔵／湯島松住町 別所 嶋屋平七／神田須田町 太田 和泉屋勘右工門／下谷南稻荷町 松沢 和泉屋庄次郎／馬喰町二丁目 石川 森屋治兵衛／馬喰町二丁目 荒川 山口屋藤兵衛／通り油町 水野 藤岡屋慶次郎／神田鍛冶町 柳川 紀伊国屋梅二郎／本石町二丁目 江島 椀屋喜兵衛／大伝馬町三丁目 吉川 近江屋半七／横山町二丁目 内田 岩本屋弥兵衛／檜物町 目黒 島屋儀三郎／蛸壳町一丁目 山田 若林屋喜兵衛／南伝馬町一丁目 吉川 松本屋亀吉／池之端仲町 矢沢 越後屋亀吉／神田柳町 川越 川越屋松二郎／芝日影町 岩本 二三屋三二／木原店 岡田 河内屋文助／馬喰町四丁目 木村 吉田屋文三郎／浅草寺地内 小玉 小田原屋弥七／同森田町 瀬山 万屋直次郎／神田柳町 丸山 園原屋正助／下槇町 江藤 大和屋喜兵衛／南伝馬町一丁目 堀江 武蔵屋惣五郎／同三丁目 池多 三河屋善兵衛／麹町八丁目 森田 本屋鉄五郎／湯島一丁目 角松 尼屋久次郎／浅草寺地内 鯨井 本屋利助／浅草須賀町松寄 本屋半蔵／両国吉川町松木 大黒屋平吉／浪花町 小林 鶴屋喜右工門／弥左工門町 武田 大島屋伝右工門／麹町四丁目 磯部 磯部屋太郎兵衛／銀座三丁目 和泉屋孝之助／尾張町 和泉屋喜太郎／通り塩町内藤伝右工門／日本橋通一丁目 万屋孫兵衛／南伝馬町二丁目 小林新造／本町三丁目 河内屋文助／日本橋西河岸 須原鉄二／南伝馬町二丁目 穴山篤太郎／通り新石町 雁金屋仙造／日本橋通四丁目 松田幸助／南伝馬町一丁目 武蔵屋惣五郎／南伝馬町三丁目 村上真助

／村松町 三河屋友吉／■■■■ 山城屋清八／本所亀沢町 竹
内屋伊兵衛／下谷御徒町一丁目 相模屋七兵衛／小伝馬町三丁目
山崎屋清七／■■■■ 嶋屋武八／人形町通り 法木徳兵衛／本郷
元町一丁目 原田庄右工門／神田末広町 横尾宇之助／御成道栄町
大橋操吉／下谷稻荷町 小林米造／浅草諏訪町 万屋佐吉／浅草
元町 亀清／御成道五軒町 林安之助／湯島切通シ 沢田伝兵衛／
浅草新福井町 高梨弥三郎

新漢画指南 三集 二卷二冊

【著編者】伊沢梅陵【序年・序者】①明治十四・松田雪柯②明治十
四・佐々木溥把【跋年・跋者】明治十三・萩原国【画工】不詳【筆
耕】不詳【奥付】「明治十四年二月廿四日免許全十月廿日刻成発兌
／著者渡嶋国箱館山之上町老街目梅陵并沢保治／刊行者東京浅草三
好町大川錠吉／全兼発鬻東京浅草蔵前片町瀬山直次郎」

大岡村井長庵調合机 初編 三卷三冊
政談

【著編者】元岡維則【序年・序者】明治十四・元岡維則【画工】伊藤
静斎【筆耕】大代蔦屋（序）【奥付】「明治十四年六月十四日御届／
同年七月九日出版／編輯人 浅草区浅草田原町二丁目十五番地 東
京府平民 元岡徹太郎／出版人 浅草区浅草三好町七番地 同 大
川錠吉／発売人 京橋区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門／浅草
区浅草新福井町五番地 高梨弥三郎」【備考】見返しに「聚栄堂蔵

版」とある。

大岡村井長庵調合机 二編 三卷三冊
政談

【著編者】元岡維則【序年・序者】明治十四・大代蔦屋【画工】伊藤
静斎【筆耕】不詳【奥付】「明治十四年七月廿七日御届／同年九月九
日出版／編輯人 浅草区浅草田原町二丁目十五番地 東京府平民
元岡徹太郎／出版人 浅草区浅草三好町七番地 同 大川錠吉／發
売人 京橋区弥左工門町十三番地 武田伝右衛門／浅草区浅草新福
井町五番地 高梨弥三郎」【備考】見返しに「聚栄堂蔵版」とある。

大岡村井長庵調合机 三編 三卷三冊
政談

【著編者】元岡維則【序年・序者】元岡維則【画工】伊藤静斎【筆
耕】大代蔦屋【奥付】「明治十四年十一月廿一日御届／同年十二月
十九日出版／編輯人 浅草区浅草田原町二丁目十五番地 東京府平
民 元岡徹太郎／出版人 浅草区浅草三好町七番地 同 大川錠吉
／出像画工 同区浅草西三筋町三十四番地 同 伊藤静斎／浄書
下谷区下谷西町一番地 同 大代蔦屋／繡像刊字 深川区深川常盤
町一丁目七番地 同 片田長次郎／発売書肆 京橋区弥左工門町十
三番地 武田伝右衛門／浅草区浅草新福井町五番地 高梨弥三郎」
【備考】見返しに「聚栄堂蔵版」とある。下巻卷末に『大岡畦蔵根接
柱』の広告あり。

近世名婦百人撰 二卷二冊

【著編者】岡田霞船【序年・序者】明治十四・岡田霞船【画工】伊藤静斎【筆耕】大代蔦屋【奥付】「明治十四年十二月十七日版權免許／同年十二月二十四日出版発売／定価金三十五錢／編輯人 下谷区西黒門町十八番地 岡田良策／出版人 浅草区三好町七番地 同 大川錠吉／画工 浅草区西三筋町三十四番地 同 伊藤静斎／浄書 下谷区西町一番地 同 大代蔦屋／彫刻 深川区常盤町一丁目七番地 同 片田長次郎／東京書肆 芝三島町 山中市兵衛／通油町 水野慶次郎／馬喰町 石川治兵衛／同 山口藤兵衛／銀座二丁目 山中孝之助／同四丁目 山中喜太郎／通り二丁目 稲田佐兵衛／浅草新福井町 高梨屋三郎」【備考】見返しに「聚栄堂蔵版」とある。下巻巻末に『大岡畦蔵根接柱』の広告あり。

明治十五年（一八八二） 壬午

春風日記 四編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治十四・松村春輔【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十五年二月廿四日御届／編輯人 京橋区南鍋町一丁目一番地 松村春輔／出版人 同区弥左エ門町十三番地 東京府平民 武田伝右エ門／発売人 浅草区三好町七番地 同 大川錠吉／発売人 同区福井町五番地 同 高梨弥三郎」

春風日記 五編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十五年二月廿四日御届／著述人 府下京橋区南鍋町一丁目一番地 松村春輔／出版人 同区弥左エ門町十三番地 武田伝右衛門／同浅草区三好町七番地 大川錠吉／発売人 同区福井町五番地 高梨弥三郎」

春風日記 六編 二卷二冊

【著編者】松村春輔【序年・序者】明治十四・松村春輔【画工】安達吟光【筆耕】不詳【奥付等】「明治十五年二月廿四日御届／編輯人 京橋区南鍋町一丁目一番地 松村春輔／出版人 同区弥左エ門町十三番地 武田伝右エ門／浅草区三好町七番地 大川錠吉／発売人 同区福井町五番地 高梨弥三郎」

孝貞 近世名婦伝 二卷二冊

【著編者】岡田霞船【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十五年二月二十日御届／同年三月二十一日出版／定価二十二錢／編輯人 下谷区西黒門町十八番地 東京府平民 岡田良策／出版人 浅草区三好町七番地 同 大川錠吉／発売人 京橋区弥左エ門町十三番地 同 武田伝右衛門／浅草区新福井町五番地 同 高梨弥三郎」

【備考】下巻に『近世名婦百人撰』大岡村井長庵調合机六編の広告あり。

大岡村井長庵調合机 四編 三卷三冊

【著編者】元岡維則【序年・序者】明治十五・岡田霞船【画工】伊藤静斎【筆耕】大代蔦屋【奥付】「明治十五年五月十五日御届／同年六月十日出版／編輯人 浅草区浅草田原町二丁目十五番地 東京府平民 元岡徹太郎／出版人 浅草区浅草三好町七番地 同 大川錠吉／出像画工 同区浅草西三筋町三十四番地 同 伊藤静斎／浄書 下谷区下谷西町一番地 同 大代蔦屋／繡像刊字 深川区深川常盤町一丁目七番地 同 片田長次郎／発売書肆 京橋区弥左エ門町十三番地 武田伝右衛門／浅草区浅草新福井町五番地 高梨弥三郎」
【備考】見返しに「聚栄堂蔵版」とある。下巻卷末に『大岡畦蔵根接柱』の広告あり。

大岡村井長庵調合机 五編 三卷三冊

【著編者】元岡維則【序年・序者】明治十五・子徳散史【画工】伊藤静斎【筆耕】大代蔦屋【奥付】「明治十五年十月六日御届／同年十一月十日出版／編輯人 浅草区浅草田原町二丁目十五番地 東京府平民 元岡徹太郎／出版人 浅草区浅草三好町七番地 同 大川錠吉／出像画工 同区浅草西三筋町三十四番地 同 伊藤静斎／浄書 下谷区下谷西町一番地 同 大代蔦屋／繡像刊字 深川区深川常盤

町一丁目七番地 同 片田長次郎／発売書肆 京橋区弥左エ門町十三番地 武田伝右衛門／浅草区浅草新福井町五番地 高梨弥三郎」
【備考】見返しに「聚栄堂蔵版」とある。下巻卷末に『大岡畦蔵根接柱』の広告あり。

隸弁 四卷四冊

【著編者】元岡維則【序年・序者】明治十五・子徳散史【画工】伊藤静斎【筆耕】大代蔦屋【奥付】「明治十五年十月十三日版權免許／全十五年七月十五日出版発売／増訂者 下谷金杉村百三番地今泉元長同居 東京府士族 安藤龍淵／出版者 浅草三好町七番地 同府平民 大川錠吉」【備考】『新訂漢画指南』名家『増訂隸弁補遺』の広告あり。

女用文たから箱 一卷一冊

【著編者】島不苦子【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付等】「明治十五年五月御届／同年同月出版／編輯人 東京府平民 日本橋区西河岸町九番地 島不苦子／出版人 東京府平民 浅草区新福井町五番地 高梨弥三郎／発行元 東京浅草区三好町七番地 大川錠吉」

明治十六年（一八八三） 癸未

大岡村井長庵調合机 六編 五卷五冊
政談

【著編者】元岡維則【序年・序者】元岡維則【画工】伊藤静斎【筆耕】大代蔦屋【奥付】「明治十五年十一月十四日御届／同十六年一月廿五日出版／編輯人 浅草区浅草田原町二丁目十五番地 東京府平民 元岡徹太郎／出版人 浅草区浅草三好町七番地 同 大川錠吉」【備考】見返しに「聚栄堂蔵版」とある。

忠勇阿佐倉日記 初編 五卷五冊

【著編者】松亭金水【序年・序者】嘉永五・松亭金水【画工】歌川貞秀【筆耕】不詳【奥付】「明治十六年二月九日求版御届／書肆浅草区浅草三好町七番地 東京府平民 大川錠吉」【備考】求版本。『増訂隸弁』『明清中箱画譜』『明治都鄙人名録』『新訂漢画指南』『近世名婦百人撰』『孝貞近世名婦伝』『大岡畦蔵根接柱』『春風日記』『大岡村井長庵調合机』『忠勇阿佐倉日記』『芳薫高木廼実伝』『妙竹七偏人』の広告あり。

忠勇阿佐倉日記 二編 五卷五冊

【著編者】松亭金水【序年・序者】松亭金水カ【画工】歌川貞秀【筆耕】不詳【奥付】「明治十六年二月九日求版御届／書肆 浅草区浅草三好町七番地 東京府平民 大川錠吉」【備考】求版本。『増訂隸

弁』『明清中箱画譜』『明治都鄙人名録』『新訂漢画指南』『近世名婦百人撰』『孝貞近世名婦伝』『大岡畦蔵根接柱』『春風日記』『大岡村井長庵調合机』『忠勇阿佐倉日記』『芳薫高木廼実伝』『妙竹七偏人』の広告あり。

忠勇阿佐倉日記 三編 五卷五冊

【著編者】松亭金水【序年・序者】嘉永七・松亭金水【画工】歌川貞秀【筆耕】不詳【奥付】「明治十六年二月九日求版御届／書肆浅草区浅草三好町七番地 東京府平民 大川錠吉」【備考】求版本。『増訂隸弁』『明清中箱画譜』『明治都鄙人名録』『新訂漢画指南』『近世名婦百人撰』『孝貞近世名婦伝』『大岡畦蔵根接柱』『春風日記』『大岡村井長庵調合机』『忠勇阿佐倉日記』『芳薫高木廼実伝』『妙竹七偏人』の広告あり。

百美術画譜 一卷一冊

【著編者】小神野孫叟【画工】葛飾北斎【奥付】「明治十六年六月十九日出版御届／全年六月出版／筆者 深川区東森下町八十一番地 小神野孫叟／出版人 浅草区三好町七番地 大川錠吉／各市諸県書林絵双紙店エ差出置候間御最寄ニテ御求メアランコトヲ願」

明治十七年（一八八四） 甲申

大日本府県名所独案内 一鋪

【著編者】不詳【奥付】「明治十七年四月卅日出版御届／編輯兼出版人 浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉」

名所 東京区分全図 附四日めぐり独案内 一鋪
絵入

【著編者】不詳【奥付】「明治十七年四月卅日御届」編輯兼出版人 浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉」

大日本全図 一鋪

【著編者】不詳【奥付】「明治十七年四月三十日御届」編輯兼出版人 浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉」

明治十八年（一八八五） 乙酉

八門九星初学入門 一卷一冊

【著編者】杉本敬徳【序年・序者】杉本敬徳【奥付】「明治十八年九月五日御届／全十一月一日出版／定価金廿五銭／編輯人 深川区伊勢崎町三十七番地 東京府平民 杉本伊助／出版人 浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉」東京書肆 北畠茂兵衛／稲田佐

兵衛／山中市兵衛／北沢伊八／小林新兵衛／牧野吉兵衛／出雲寺万次郎／青山清吉／吉田久兵衛／岡村庄助／柳川梅二郎／江島喜兵衛／東生龜次郎／吉川文助／近江屋半七／内田弥兵衛／森田鉄五郎／別所平七／目黒儀三郎／法木徳兵衛／和泉屋孝之助／和泉屋喜太郎／丸家喜七／稲田政吉／牧野善兵衛／内野弥平治／松沢庄次郎／石川治兵衛／荒川藤兵衛／水野慶次郎／三河屋友吉／須原鉄二／万屋孫兵衛／瀬山直次郎／松崎半蔵／松本平吉／小林喜右エ門／武田伝右エ門／磯部太郎兵衛／小林鉄次郎／大阪 岡田茂平／岡島真七／東京書林 高梨弥三郎／鶴声社／嵯峨野／春陽堂／正札屋／高崎修介／佐々木広吉【備考】見返しに「聚栄堂蔵」とある。

明治十九年（一八八六） 丙戌

卅三間堂柳の糸 五卷一冊
棟材奇伝

【著編者】小枝繁【画工】不詳【奥付等】「明治十八年十二月廿四日御届／同十九年四月日出版／著者故人 小枝繁／出版人 京橋区弥左衛門町十三番地 武田伝右衛門／発兌 同所 鵬文社／発売人 浅草区三好町七番地 大川錠吉」

花鳥画譜 一卷一冊

【著編者】大川新吉【画工】大川新吉【奥付等】「明治十九年四月二十六日御届／同年五月出版／編輯兼画工 浅草区馬道町六丁目十五番地 東京府平民 大川新吉／出版人 東京浅草区三好町七番地 大川錠吉」

英語 入
十五伊呂波 一卷一冊

【著編者】仁科静太郎【奥付等】「明治十九年四月廿七日御届／同年五月二十日出版／編者 神田区東松下町廿二番地 東京府土族 仁科静太郎／出版人 浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉」
【備考】見返しに「東京書林 聚栄堂」とある。

新お花
半七
春色娘節用 一卷一冊

【著編者】梅亭金鷲【序年・序者】梅亭金鷲【画工】扶桑園南斎【奥付】「明治十九年六月一日御届／同年月日出版／定価三十五錢／編輯兼出版人 日本橋区新和泉町一番地寄留 長野県平民 中島雅司／発兌 日本橋区新和泉町一番地 今古堂／同 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉／同 麹町区飯田町一丁目五十四番地 栄泉堂／大売捌 全国各書林」【備考】表紙に「栄泉堂梓」とある。

唐紋帳雛形 一卷一冊

【著編者】岡田霞船【画工】岡田霞船【奥付】「明治十九年七月八日御

届／同年同月出版／編画者 浅草区西三筋町三十四番地 東京府平民 岡田良策／出版者 同区三好町七番地 同府平民 大川錠吉」
【備考】表紙に「東京書肆 聚栄堂」とある。

頭書
略解
新選明治玉篇 一卷一冊

【著編者】福城駒太郎（編輯）【奥付】「明治十五年一月十四日版權免許／同十九年七月十七日改題御届／編輯人 東京府土族 本所区林町二丁目 福城駒太郎／出版人 東京府平民 浅草区三好町七番地 大川錠吉」
「西京 村上勘兵衛／同 出雲寺文治郎／同 辻九右衛門／同 田中治兵衛／大阪 杉村九兵衛／同 柳原喜兵衛／同 大野木市兵衛／同 前川善兵衛／同 田中太右衛門／同 岡田茂兵衛／同 岡島真七／越後 中村政治／同 山本久兵衛／同 樋口屋小左衛門／同 上田屋治八／同 三條屋七十郎／同 高乘屋小兵衛／同 中村作平／信州 小桝屋喜太郎／上総 恵比寿屋半右工門／下総 正文堂利兵衛／熊谷 近江屋平吉／甲州 内藤伝右工門／橡木 山中八郎／同 河内屋甚兵衛／仙台 伊勢屋安右工門／羽州 八文字屋太右工門／同 荒井太四郎／東京書林 北畠茂兵衛／稲田佐兵衛／小林新兵衛／山中市兵衛／北沢伊八／牧野吉兵衛／出雲寺万次郎／高橋松之助／朝倉久兵衛／内野弥平治／吉川半七／江藤喜兵衛／丸屋善七／柳川梅二郎／金港堂亮三／水野慶次郎／石川治兵衛／山口藤兵衛／松崎半造／瀬山直次郎／島屋武八／児玉弥七／辻岡屋文助／富田彦次郎／岡村屋庄介／博文堂庄左工門／高崎修介

／榎原友吉】【備考】見返しに「東京 聚栄堂蔵版」とある。明治十五年（一八八二）の高梨弥三郎版『頭書略解和漢読史玉篇』を求版。

繪本 三國志 一巻一冊
通俗

【著編者】覚張栄三郎【画工】不詳【奥付】「明治十八年六月五日出版御届／明治十九年十一月四日再版御届／編輯人 日本橋区本石町二丁目十六番地 覚張栄三郎／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／発兌 浅草三好町七番地 大川屋」

敵討高田馬場 一巻一冊

【著編者】不詳【序年・序者】明治十九・竹葉舎晋升【画工】不詳【奥付】「明治十九年十一月二十二日御届／出版人 麹町区飯田町二丁目五十四番地 栄泉堂 水野幾太郎／発兌 浅草区三好町 大川屋錠吉／印刷所 日本橋区新和泉町 今古堂」

東海道 滑稽膝栗毛 一巻一冊
五十三駅

【著編者】十返舎一九（遺作）【画工】不詳【奥付】「明治十九年十一月廿九日御届同廿年出版／編輯兼出版人 浅草黒船町五番地 平民 瀬山佐吉／大売捌 同区三好町七番地 大川錠吉」【備考】見返しに「順成堂」とある。

繪本 甲越軍記 一巻一冊

【著編者】不詳【奥付】「明治十九年十一月二十七日御届／同十九年十二月日納本／（定価金八十錢）／編輯人 不詳／出版人 浅草区三好町七番地 大川錠吉／発兌元 浅草区三好町七番地 大川屋」

新撰端唄大全 一巻一冊

【著編者】栗原吉五郎【奥付】「明治十九年十二月二日出版御届／同年同月出版／（定価金三十錢）／編輯人 芝区佐久間一丁目一番地 東京府平民 栗原吉五郎／出版人 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷人 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／発兌 浅草区三好町七番地 聚栄堂」

明治二十年（一八八七） 丁亥

一休諸国物語 一巻一冊

【著編者】森仙吉【画工】不詳【奥付】「明治十九年十月五日翻刻御届／翻刻兼出版人 日本橋区橋町四丁目一番地 森仙吉／印刷者 浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 浅草区三好町廿六番地 大川屋活版所／発行所 浅草三好町七番地 聚栄堂 大川屋書

店」

当世番匠雛形 二卷二冊

【著編者】不詳【序年・序者】浄水賤生【画工】不詳【奥付】「明治廿年二月二日翻刻御届／同年三月出版／原版人 東京府平民 山田藤助／出版人 東京府平民 浅草三好町七番地 大川錠吉／発兌同 浅草三好町七番地 大川錠吉／大壳捌全国各書林」

岩見武勇伝 一卷一冊

【著編者】不詳【画工】不詳【奥付】「明治廿年二月五日印刷／全年全月八日翻刻出版／翻刻兼発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 小石川区掃除町卅三番地 小林由造／発行所 浅草三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】ほかに印刷者に小宮定吉を加える版、印刷所を大川屋活版印刷所とする版がある。

貞節雪之梅 一卷一冊

【著編者】鶯亭昌安【序年・序者】海癡老漁【画工】歌川国保【奥付】「明治二十年三月九日翻刻御届／同二十年四月日出版／（定価七十銭）／原版人 不詳／翻刻出版人 神田南神保町四番地 日吉堂 菅谷与吉／発兌元 浅草区三好町七番地 大川錠吉／壳捌所 横山町三丁目 辻岡文助／橘町四丁目 鶴声社／南鍋町 兔屋誠／

南伝馬町二丁目 自由閣／本石町二丁目 上田屋栄三郎／通四丁目 春陽堂／馬喰町二丁目 山口藤兵衛／通四丁目 内藤加我」

繪本 大阪軍記 一卷一冊

【著編者】岡田霞船【序年・序者】不詳【画工】不詳【奥付】「明治二十年四月二日御届／同二十年四月日出版／（定価金壹円五拾銭）／編輯人 東京浅草区三筋町三拾四番地 東京府平民 岡田良策／出版人 東京浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉／大壳捌書林 京橋区南鍋町 兔屋誠／日本橋区橘町 鶴声社／横山町三丁目 辻文／馬喰町二丁目 荒川藤兵衛／横山町 鈴木喜右衛門／南伝馬町一丁目 春陽堂／横山町二丁目 文事堂／本石町 上田屋栄三郎／日本橋区通四丁目 内藤加我／全 自由閣／下谷北大門 木村巳之吉／京橋区弓町 丸山幸次郎／浅草区北富坂町 村上真助／日本橋区材木町二丁目 神先次郎助／深川 斎藤彦蔵」

当世女用文章 一卷一冊

【著編者】岡田霞船【序年・序者】明治二十・岡田霞船【画工】伊藤静斎【奥付】「明治二十年四月十一日御届／全年五月日出版／定価金三十五銭／編輯人 浅草区西三筋町三十四番地 東京府平民 岡田良策／出版人 浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉／壳捌 全国書肆各店」

大岡烟草屋喜八之件 一卷一冊
政談

【著編者】不詳【序年・序者】明治十九・竹葉舎晋升【画工】尾形月耕【奥付】「明治二十年八月廿二日翻刻御届／同年九月日出版／同年九月七日別製本御届／定価五十五錢／編輯人 不詳／翻刻出版人 浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉／發兌元 同所 聚栄堂」

開明奇談写真迺仇討 一卷一冊

【著編者】二世五明楼玉輔（口演）・伊東橋塘（編輯）【序年・序者】明治十六・伊東橋塘【画工】歌川芳年【奥付】「明治廿年八月十九日翻刻御届／同年九月廿日出版／同年九月七日別製本御届／定価七十錢／編輯人 伊東専三／翻刻出版人 浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉／發兌元 同所 聚栄堂」
「壳捌所 南鍋町二丁目 兎屋誠／横山町三丁目 辻岡屋文助／橋町四丁目 鶴声社／本石町二丁目 上田屋／南伝馬町一丁目 春陽堂／馬喰町二丁目 山口藤兵衛／薬研堀町 鈴木喜右衛門／浅草三好町 大川屋錠吉／本材木町一丁目 自由閣」

北斎略画 一卷一冊

【著編者】不詳【画工】不詳【筆耕】不詳【奥付】「明治二十年八月廿二日翻刻御届／同年十一月日出版／編輯人 不詳／翻刻出版人

浅草三好町七番地 東京府平民 大川錠吉／各府県下書林壳捌」

日本
志那 料理独案内 一卷一冊
西洋

【著編者】青陽楼主人（校閲）【序年・序者】明治十・青陽楼主人【奥付】「明治廿年十月廿二日翻刻御届／同年十一月日出版發市／原本人 吉田正太郎／翻刻出版人 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷人 日本橋区新和泉町壹番地 瀧川三代太郎／發兌 浅草区三好町七番地 大川屋」

曲垣
実伝 愛宕山馬術勲 一卷一冊

【著編者】岡田霞船【序年・序者】明治二十・岡田霞船【画工】不詳【奥付】「明治二十年二月十二日版權免許／同年十一月日出版／（定価金三拾錢）／編輯人 浅草区西三筋町三十四番地 東京府士族 岡田良策／出版人 浅草区三好町七番地 東京府平民 大川錠吉／發兌元 同所 聚栄堂」

明治二十一年（一八八八） 戊子

四天王鬼賊退治実伝 一卷一冊

【著編者】山崎又三郎【序年・序者】明治十八・聚栄堂主人【画工】石斎国保【奥付】「明治廿一年三月十日印刷／同年三月十二日出版

／定価金七十銭／著作兼印刷者 京橋区八官町廿四番地 山崎又三郎／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉

大岡於半長右衛門実記 一卷一冊
政談

【著編者】山崎又三郎【画工】石斎国保【奥付】「明治廿一年三月十六日印刷／同年三月十九日出版／定価五十銭／著作兼印刷者 京橋区八官町廿四番地 山崎又三郎／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／大売捌所 同所 大川屋」

絵本慶安太平記 一卷一冊

【著編者】山崎又三郎【序年・序者】明治二十一・東海清楓【画工】尾形月耕【奥付】「明治廿一年三月廿一日印刷／同年三月廿三日出版／定価金九拾銭／著作兼印刷者 京橋区八官町廿四番地 山崎又三郎／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／売捌所 同所 大川屋」

滑稽和合人 一卷一冊

【著編者】滝亭鯉丈【画工】不詳【奥付】「明治二十一年四月二十日印刷／同年四月廿四日出版／定価金一円廿銭／印刷人 京橋区八官町廿四番地 山崎又三郎／発行人 浅草区三好町七番地 大川錠吉／著作者 故人 滝亭鯉丈／発兌 浅草区三好町七番地 聚栄堂」

敵討天下茶屋 一卷一冊

【著編者】山崎又三郎【序年・序者】明治二十一・猗々堂主人【画工】尾形月耕【奥付】「明治廿一年五月十五日印刷／同年同月二十二日出版／定価金五十銭／印刷兼発行者 東京々橋区八官町二十四番地 山崎又三郎／発兌元 同区同町貳拾貳番地 猗々堂／同浅草区三好町七番地 大川屋」

月謡荻江一節 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（口述）・小相英太郎（筆記）【画工】不詳【奥付】「明治廿一年五月二十五日印刷／同年五月二十六日翻刻出版／翻刻発行者 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 今古堂活版所 瀧川三代太郎」

侠骨今に響く松の操美人の生理 一卷一冊
賊胆猶ほ腥し

【著編者】三遊亭円朝（口述）・小相英太郎（速記）【画工】石斎国保【奥付】「明治廿一年五月廿五日印刷／同年同月廿六日翻刻出版／定価五拾銭／発行者 東京浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 開進社 東京々橋区新看町十七番地 能勢新太郎／発兌元 東京浅草区三好町七番地 大川屋／東京麴町区飯田町貳丁目五十番地 泉堂／売捌各地書林」【備考】扉に「東京 泉堂発兌」とある。

大岡政談松田於花仇討美談 一卷一冊

【著編者】山崎又三郎【序年・序者】明治二十一年・東海晴楓【画工】石齋国保【奥付】「明治廿一年六月十三日印刷／明治廿一年六月十六日出版／定価金五十銭／著作兼印刷者 東京々橋区八官町廿四番地 山崎又三郎／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／発売元 同所 大川屋」

新板と逸 一卷一冊

【著編者】中西惣次郎【奥付】「明治廿一年七月卅日印刷／同年八月一日出版／編纂兼発行者 浅草区八幡町四番地 中西惣次郎／印刷者 京橋区銀座式丁目拾貳番地 宮本敦／発兌元 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉」

文句新選と逸 一卷一冊

【著編者】中西惣次郎【奥付】「明治廿一年七月卅日印刷／同年八月一日出版／編纂兼発行者 浅草区八幡町四番地 中西惣次郎／印刷者 京橋区銀座式丁目拾貳番地 宮本敦／発兌元 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉」

新選開化大津急 一卷一冊

【著編者】中西惣次郎【奥付】「明治廿一年七月卅日印刷／同年八月一日出版／編纂兼発行者 浅草区八幡町四番地 中西惣次郎／印刷者 京橋区銀座式丁目拾貳番地 宮本敦／発兌元 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉」

新撰はうた大一座 一卷一冊

【著編者】中西惣次郎【奥付】「明治廿一年八月三日印刷／同年八月六日出版／編纂兼発行者 浅草区八幡町四番地 中西惣次郎／印刷者 京橋区銀座式丁目拾貳番地 宮本敦／発兌元 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉」

袖珍義太夫合本 第一編 一卷一冊

【著編者】中西惣次郎【奥付】「明治廿一年八月十五日印刷／同年同月十八日出版／編纂兼発行者 浅草区八幡町四番地 中西惣次郎／印刷者 神田区西今川町三番地 山本新吉／発兌元 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉」

蝦夷錦古郷の家土産 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（口述）・小相英太郎（速記）【序年・序者】採菊散人【奥付】「明治廿一年十一月十一日印刷／同年十一月二十日出版／編纂者 京橋区和泉町五番地 鈴木金輔／発行者 浅草区三

好町七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿六番地 小宮定吉
／発行所 浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

文のはやし 一卷一冊

【著編者】佐々木広吉【奥付】「明治二十一年十二月日印刷／全年十二月日出版／印刷兼著作者 浅草区福富町廿八番地 佐々木広吉／
発行者 全区三好町七番地 大川錠吉」

九十七時月世界旅行 一卷一冊
二十分間

【著編者】ジュールスベルン（原著）・井上勤（訳述）【序年・序者】
片岡徹【奥付】「明治十九年八月九日版權免許／明治十九年九月出版
版発兌／明治廿一年十二月四日印刷発兌／訳述者 東京糺町区上六
番町四十七番地 井上務／発行者 東京浅草区三好町七番地 大川
錠吉／印刷者 東京日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／発兌
東京浅草区三好町七番地 大川屋」

水戸
祭礼 沖田二子仇討 一卷一冊

【著編者】不詳【序年・序者】明治十九・補綴者【奥付】「明治廿一
年十二月十八日印刷／明治廿一年十二月廿五日翻刻出版御届／原版
人 日本橋区横山町三丁目二番地 辻岡文助／印刷兼発行者 京橋
区八官町廿四番地 山崎又三郎／印刷所 日本橋区新和泉町一番地

今古堂活版所／発行元 浅草区三好町七番地 大川錠吉

明治二十二年（一八八九） 己丑

操競女学校 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（口演）・酒井昇造（速記）【序年・序者】小説
館のあるじさむる【画工】水野年方【奥付】「明治廿二年三月十四
日印刷／全年八月十五日出版御届／発行者 東京浅草区三好町七番
地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町二十六番地 小宮定吉／発
行所 同浅草区南元町二十六番地 大川屋活版所／発行所 東京市
浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

しぐれの江戸美人 一卷一冊
かきもり

【著編者】春錦亭柳桜（口演）・酒井昇造（速記）【序年・序者】明治
二十二・夢廻屋さむる【画工】芦原国直【奥付】「明治廿二年十二月
十七日印刷／明治廿二年十二月二十日出版／編輯兼発行者 浅草区
三好町七番地 大川錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川
三代太郎／発行所 浅草区三好町七番地 大川屋／印刷所 日本橋
区新和泉町一番地 今古堂活版所」

明治二十三年（一八九〇） 庚寅

松と藤芸妓の替紋 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（口演）・酒井昇造（速記）【序年・序者】椿陵亭隣柳【画工】飯沼玉亀・水野年方・尾形月耕【奥付】「明治廿三年一月廿八日印刷／全年全月廿九日出版／編輯者 四ツ谷区内藤新宿北裏町四十八番地 出淵次郎吉／發行者 京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／發行所 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉」

義勇山本貞婦伝 一卷一冊
壮話

【著編者】放生舎桃林（講述）・酒井昇造（速記）【序年・序者】明治二十三年・夢廼家さむる【画工】声郁亭玉亀【奥付】「明治廿三年三月廿日印刷／同年同月廿二日出版／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／發行所 浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

翻刻六十四品漬物塩加減 一卷一冊

【著編者】小田原屋主人【序年・序者】①琴台②好食外史③花笠文京【奥付】「明治二十三年八月廿五日印刷／明治二十三年九月日翻刻出版／原版人 東京府平民 山中市兵衛／翻刻人 東京府平民

浅草区北富坂町四番地 米山栄吉／印刷人 東京府平民 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／壳捌所 浅草区三好町七番地 大川錠吉【備考】表紙に「聚栄堂発兌」とある。

妾の罪 一卷一冊

【著編者】黒岩涙香（訳）【画工】不詳【奥付】「明治廿三年九月十六日印刷／明治廿三年九月十九日出版／編輯兼發行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／發兌 浅草区三好町七番地 大川屋」

繪本石山軍記 一卷一冊

【著編者】小田原屋主人【序年・序者】明治十七・梅亭鷺叟【画工】不詳【奥付】「明治二十年四月十八日出版御届／全廿三年十月十一日印刷／翻刻者 本郷区下駒込村百六十一番地 足立庚吉／發行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 浅草区南元町廿六番地 大川屋活版所／發行所 浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋錠吉」

繪本源平盛衰記 一卷一冊

【著編者】小田原屋主人【序年・序者】寛政十一・東橋外史松本【画工】尾形月耕【奥付】「明治十九年九月廿七日出版御届／廿三年十

月廿六日印刷／編輯兼發行者 神田区南乗物町十五番地 鈴木源四郎／印刷者 神田区南乗物町十五番地 小宮定吉／印刷所 神田区南乗物町十五番地 九臯館活版所／發行所 浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋錠吉

明治二十四年（一八九二） 辛卯

黒田騒動箱崎文庫 一卷一冊

【著編者】鈴木源四郎【序年・序者】明治十九・柳葉亭繁彦【画工】尾形月耕【奥付】「明治廿四年一月十一日印刷／全年全月十二日出版／編輯兼發行者 神田区南乗物町十五番地 鈴木源四郎／印刷者 神田区南乗物町十五番地 小宮定吉／印刷所 神田区南乗物町十五番地 九臯館活版所／發行所 浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋錠吉」

日用新撰作文独稽古 一卷一冊
往復

【著編者】桜井貢【序年・序者】明治二十三・曙家主人【奥付】「明治二十四年二月十三日印刷／全年全月廿五日出版／編輯人 日本橋区浜町壹丁目三番地 東京府士族 桜井貢／發行所 浅草区三好町七番地 全平民 大川錠吉／印刷者 本所区石原町九十二番地 全平民 綾部乙松」

白浪五人男 一卷一冊

【著編者】河竹黙阿弥（披閱）・伊東橋塘（編輯）【序年・序者】明治十六・伊東橋塘【画工】石齋国保【奥付】「明治廿四年三月日印刷／明治廿四年四月日出版／編輯兼發行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／發兌 浅草区三好町七番地 大川屋」

決闘の果 一卷一冊

【著編者】黒岩涙香（訳述）【序年・序者】明治二十四・笠園主人【画工】不詳【奥付】「明治廿四年五月十日印刷／同年同月十二日發行／編輯者 東京市日本橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／發行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町二十六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町二十六番地 大川屋活版所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

熱海の湯煙 一卷一冊

【著編者】放牛舎桃林（口演）・佃与次郎（速記）【序年・序者】明治二十四・孤竹小史【画工】不詳【奥付等】「明治廿四年五月廿九日印刷／明治廿四年五月三十日出版／編輯兼發行者 京橋区本材木町

三丁目廿六番地 鈴木金輔／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／発兌 浅草区三好町七番地 大川屋【備考】天理図書館蔵本（請求記号：H九一三・七七―九七）は、本来「京橋区本材木町三丁目廿六番地 三友舎」とあったのを張り紙で訂正している。

俳諧新五百題 二卷二冊

【著編者】鳥越等栽（校）・武田正吉（編）【序年・序者】①明治二十四・鳥越等栽②明治二十三・幹菜園【奥付等】「明治廿四年十月廿五日印刷／全年十月廿七日出版／著者 東京府平民 京橋区弥左エ門町拾二番地 武田正吉／発行者印刷人 本郷区春木町三丁目拾三番地 武田伝右エ門／発行所 浅草区三好町七番地 大川錠吉」【備考】整版。明治二十二年（一八八九）刊の春秋園瀧川編・佳峰園等栽校『明治玉簾集』（稲田佐兵衛版）の改題再印本。

明治二十五年（一八九二） 壬辰

大津あぶし 一卷一冊

【著編者】大川錠吉【序年・序者】不詳【奥付】「明治廿五年九月十三日印刷／明治廿五年九月廿五日出版／編輯兼発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代

太郎／発兌 浅草区三好町七番地 聚栄堂」

点 両作文いろは節用 一卷一冊

【著編者】山口亀吉【序年・序者】不詳【奥付】「明治廿五年七月一日印刷 全年全月日出版／編輯者 東京市本所区本所松坂町二丁目四番地 山口亀吉／発行兼印刷者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉」【備考】見返しに「東京書林 聚栄堂版」とある。千松堂細木藤七からの求版本か。

増補 改正 俳諧歳時記菜艸 一卷一冊

【著編者】曲亭馬琴（纂輯）・藍亭青藍（増補）【序年・序者】嘉永三・藍亭青藍【奥付】「明治廿五年九月五日印刷／全廿五年九月八日翻刻出版／編輯者 曲亭馬琴／藍亭青藍／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 全浅草区南元町二十六番地 小宮定吉／発行所 全全 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】扉に「東京 聚栄堂発行」とある。

明治二十六年（一八九三） 癸巳

水戸
尾州 三家三勇士伝 一卷一冊
紀州

【著編者】放牛舎桃林（講述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治二十六・蕉雨逸人【画工】尾形月耕【奥付】「明治廿六年二月廿七日印刷／明治廿六年三月八日発行／口演者 神田区駿河台南甲賀町八番地 島左右助／発行者 東京市小石川区指ヶ谷町十七番地 足立庚吉／印刷者 全区掃除町三十三番地 小林由造／発行所 浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

大日本刑法 一卷一冊

【著編者】不詳【奥付】「明治二十六年四月五日印刷／同年四月十一日出版／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町二十六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町二十六番地 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】表紙に「東京 聚栄堂蔵版」とある。

大岡名譽政談 卷ノ七廿八件合本 一卷一冊

【著編者】鈴木源四郎【序年・序者】梅亭鷺叟【画工】安達吟光【奥付】「明治二十六年十二月七日印刷／明治二十六年十二月十日出版

／編輯者 東京市神田区南乗物町十五番地 鈴木源四郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

明治二十七年（一八九四）

雪おろし 一卷一冊

【著編者】高橋太華【画工】小林永興【奥付】「明治廿七年五月十五日印刷／同年同月十八日発行／編輯兼発行者 京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／印刷者 京橋区三十間堀二丁目壹番地 染谷仙三／印刷所 京橋区三十間堀二丁目壹番地 明教社印刷所／発行所 浅草区三好町七番地 大川屋」

草花
木竹 栽培秘録 一卷一冊

【著編者】三木愛花【序年・序者】明治二十七・三木愛花【画工】不詳【奥付】「明治廿七年六月十五日印刷／明治廿七年六月十八日出版／発行者 東京市 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／印刷所 日本橋区新和泉町一番地 今古堂／発兌 浅草区三好町七番地 大川屋／関西一手大売捌 大阪市心齋橋筋安堂寺町角 青木嵩山堂」【府下特別大売捌

京橋区南伝馬町二丁目 青木嵩山堂／同二丁目 目黒書店／日本橋区通り一丁目 大倉孫兵衛／同三丁目 鳳林館／同四丁目 金桜堂／同馬喰町二丁目 山口藤兵衛／同大伝馬町 長島恭次郎／元石町二丁目 上田屋書店／神田区神保町 東京堂／日本橋区横山町三丁目 辻岡文助／日本橋区本町三丁目 金港堂本店／日本橋区通り油町 水野慶次郎／日本橋区通四丁目 春陽堂／各書肆雜誌店各勸業場等」

明治二十八年（一八九五）

人耶鬼耶 一卷一冊

【著編者】黒岩涙香（訳述）【序年・序者】黒岩涙香【画工】不詳【奥付】「明治廿一年十二月一日印刷／同年十二月四日出版／明治廿六年四月日再版／明治廿八年二月日三版／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／発兌 浅草区三好町七番地 大川屋／印刷所 日本橋区新和泉町一番地 今古堂活版所」【備考】表紙に「東京大川屋蔵版」、見返しに「東京書肆 大川屋発行」とある。

仙石家騒動記 一卷一冊

【著編者】伊東潮漁（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】菊葉散人【画工】光方【奥付】「明治廿六年五月卅一日内務省許可／明治廿七年七月十二日印刷発行／明治廿八年三月再版／編輯者 日本橋区長谷川町一番地 鈴木源四郎／発行者 同三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 同南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

明治浮世風呂 一卷一冊

【著編者】愛柳癡史（笑闊）・浮世粹史（戯著）【序年・序者】愛柳癡史【画工】尾形月耕【奥付】「明治二十年五月十二日版權免許／全六年六月日出版／全廿八年三月日再版／編輯者 京橋区銀座一丁目六番地 千葉茂三郎／発行者 浅草区三好町七番地 大川屋錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／印刷所 日本橋区新和泉町一番地 今古堂活版所」

洪川流名譽之柔術 一卷一冊

【著編者】岡田霞船【序年・序者】明治十九・岡田霞船【画工】不詳【奥付】「明治廿五年三月廿七日印刷／明治廿五年三月三十日出版／明治廿八年三月廿五日再版／著述者 浅草区神吉町一番地 岡田良策／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／発兌 浅草区三好町七番地 大

川屋／印刷所 日本橋区新和泉町一番地 今古堂活版所」

梅花郎 一巻一冊

【著編者】黒岩涙香（訳述）【序年・序者】黒岩涙香【画工】不詳【奥付】「明治廿三年一月日印刷／明治廿三年一月日出版／明治廿八年四月日再版／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／発兌 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷所 日本橋区新和泉町一番地 今古堂活版所」

小説 仏蘭西 有罪無罪 一巻一冊

【著編者】黒岩涙香（訳）【序年・序者】明治二十二・中江兆民【画工】不詳【奥付】「明治廿二年十一月一日印刷／明治廿二年同月五日出版／同年十二月廿五日再版／同廿八年四月十五日三版／編輯兼発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 瀧川三代太郎／発行者 浅草区三好町七番地 大川屋／印刷者 日本橋区新和泉町一番地 今古堂活版所」【備考】表紙に「東京大川屋蔵版」とある。

玉手箱 一巻一冊

【著編者】黒岩涙香（訳）【序年・序者】黒岩涙香【画工】不詳【奥付】「明治廿四年五月十八日印刷／明治廿四年五月十九日出版／明

治二十八年八月再版／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 聚栄堂活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋」

二人兵士 一巻一冊

【著編者】榎本破笠【序年・序者】榎本破笠【画工】不詳【奥付】「明治廿八年八月九日印刷／明治廿八年八月十三日発行／著作者 東京市下谷区二長町五十二番地 榎本虎彦／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

決闘の果 一巻一冊

【著編者】黒岩涙香（訳述）【序年・序者】明治二十四・笠園主人【画工】不詳【奥付】「明治廿四年五月十日印刷／同年同月十二日出版／明治二十八年九月再版／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 聚栄堂活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】扉に「東京書肆 大川

屋発行」とある。

操競女学校 一巻一冊

【著編者】三遊亭円朝（口演）・酒井昇造（速記）【序年・序者】明治二十二・小説館のあるじさむる【画工】水野年方【奥付】「明治廿二年三月十四日印刷／全年三月十五日発行／明治二十八年十一月再版／編輯者 京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 聚栄堂活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

地理 台湾事情 一巻一冊
風俗

【著編者】天野馨【序年・序者】明治二十八・上原関洲【画工】不詳【奥付】「明治廿八年十月九日印刷／同年同月十四日発行／同年同月廿五日再版／同年十一月十日三版／編輯者 東京市神田区柳原河岸第拾四号地 天野馨／発行者 東京市浅草区黒船町十五番地 瀬山佐吉／印刷者 東京市神田区柳原河岸第十四号地（旧十一号地）龍雲堂 大場沃美／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋／発行所 東京市日本橋馬喰町 山口屋」

探偵 銀行の賊 一巻一冊
小説

【著編者】黒岩涙香（訳述）【序年・序者】明治二十二・読破書齋主人【画工】不詳【奥付】「明治廿二年七月印刷／全年全月日出版／全廿二年八月三十日版權譲請／全廿六年五月廿九日外題替御届／全廿八年十一月再版／編輯者 日本橋区通三丁目八番地 野村銀次郎／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 浅草区南元町廿六番地 大川屋活版所／発行所 浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

明治二十九年（一八九六） 丙申

紀伊国屋文左衛門 一巻一冊

【著編者】村井一（後述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治二十七・夢界道人【画工】不詳【奥付】「明治貳拾七年三月廿四日印刷／明治貳拾七年四月廿六日発行／明治廿九年四月再版／編纂者 東京市日本橋区元大坂町十三番地 福島棟三郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

柳生旅日記 一卷一冊

【著編者】桃川燕林（講演）・中村卓巳（速記）・蘆野島子（速記）【序年・序者】鳴雀【画工】不詳【奥付】「明治廿七年五月五日印刷発行／同廿九年一月四日再版／同年五月三版／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町二十四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

絵本楠公記 一卷一冊

【著編者】鈴木源四郎【画工】不詳【奥付】「明治十九年二月廿六日出版御届／全廿二年四月十四日印刷／全廿九年七月再版／編輯者 神田区南乗物町十五番地 鈴木源四郎／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 浅草区南元町廿六番地 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

积迦御実伝記 一卷一冊

【著編者】大川錠吉【序年・序者】笹の家【画工】不詳【奥付】「明治十九年十二月廿八日御届／全二十年二月八日出版／全廿九年八月再版／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 同浅草区南元町

廿六番地 大川屋活版所／発行所 同浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

本町五福屋政談 前編 一卷一冊

【著編者】邑井一（講演）・加藤由太郎（速記）【画工】不詳【奥付】「明治廿七年三月五日印刷発行／全廿九年九月三版／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 全浅草区南元町二十六番地 小宮定吉／発行所 全全 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

探偵 俠芸者 二巻二冊
実話

【著編者】不詳【序年・序者】明治二十九・菊醉山人【画工】不詳【奥付】「明治廿九年九月十七日印刷／全年全月二十一日発行／編輯兼発行者 東京市京橋区南横町十二番地 鈴木金輔／印刷者 東京市浅草区南元町二十六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町二十六番地 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店／東京市日本橋区本石町二丁目十六番地 三誠堂書店」

栗田口露笛竹 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（口述）・酒井昇造（速記）【序年・序者】明治二十九・菊醉山人【画工】不詳【奥付】「明治廿一年十二月十九日印

刷／明治廿一年十二月廿日出版／明治廿九年十二月再版／編輯者
東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行者 同浅草
区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 小
宮定吉／印刷所 同浅草区南元町廿六番地 大川屋活版所／発行所
東京浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

明治三十年（一八九七） 丁酉

松の操美人の生理 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（口述）・小相英太郎（速記）【画工】不詳【奥
付】「明治廿一年五月廿五日印刷／明治廿一年五月廿六日翻刻出版
／明治廿八年二月再版／明治三十年一月三版／発行者 東京市浅草
区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小
宮定吉／印刷所 同浅草区南元町廿四番地 大川屋活版所／発行所
東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

栗山大膳誠忠録 一卷一冊

【著編者】桃川如燕（講演）・今村次郎（速記）【画工】春郊【奥付】
「明治廿八年四月三日印刷／全年全月六日出版／明治三十年二月再
版／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京
市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／発行所 東京市浅草区三好町

七番地 聚栄堂 大川屋書店」

玉手箱 一卷一冊

【著編者】黒岩涙香（訳）【画工】歌川国峰【奥付】「明治廿四年五
月十八日印刷／同年同月廿二日出版／同三十年三月三版／編輯者
東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行者 東京市
浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六
番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋活
版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

松平知恵伊豆 一卷一冊

【著編者】獲麟居士【序年・序者】明治二十七・獲麟居士【画工】不
詳【奥付】「明治廿七年六月八日印刷／同年同月十一日出版／同三
十年三月三版／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴
木源四郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者
東京市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区
南元町廿六番地 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番
地 聚栄堂 大川屋書店」

訂繪本太平記 信 一卷一冊

【著編者】大川錠吉【画工】不詳【奥付】「明治廿七年六月十八日印

刷／同年同月廿五日発行／同三十年九月十日再版／飛刻(2)発行者
東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元
町廿四番地 本城松之輔／印刷所 東京市浅草区南元町廿四番地
浅草印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋
書店

天保怪鼠伝 前編 一卷一冊

【著編者】松林伯円（講述）・酒井昇造（速記）【序年・序者】明治三十
十・菟道春千代（水花園主人）【画工】松本洗耳【奥付】「明治三十
年八月廿三日印刷／全年九月十二日発行／講演者 東京市日本橋区
久松町十五番地 若林義行／発行所 東京市浅草区三好町七番地
大川錠吉／印刷所 東京市浅草区南元町二十六番地 小宮定吉／発
行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

明治三十一年（一八九八） 戊戌

天保怪鼠伝 後編 一卷一冊

【著編者】松林伯円（講演）・酒井昇造（速記）【序年・序者】明治三十
十・水花園主人【画工】不詳【奥付】「明治三十年十二月廿七日印刷
／全卅一年一月二日発行／講演者 東京市日本橋区久松町十五番地
若林義行／発行所 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者

同浅草区森田町五番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版所／
発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

水戸

尾州 三家三勇士伝 一卷一冊

紀州

【著編者】放牛舎桃林（講述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明
治二十六・蕉雨逸人【画工】尾形月耕【奥付】「明治廿六年二月廿七
日印刷／明治廿六年三月八日発行／全年卅一年再版／口演者 東京
市駿河台南甲賀町八 島左右助／発行所 同浅草区三好町七番地
大川錠吉／印刷者 同浅草区森田町五番地 小宮定吉／印刷所 同
所 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店」

義賊 木鼠長吉 一卷一冊

【著編者】松林円玉（講演）・高島政之助（速記）【序年・序者】明治
十九・管の家【画工】不詳【奥付】「明治三十一年二月十二日印刷
／全年二月十五日発行／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六
番地 鈴木金輔／発行所 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷
者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印
刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」
【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

沖田二子の仇討 一巻一冊

【著編者】双龍齋貞鏡（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】明治十九・補綴者【画工】不詳【奥付】「明治三十一年六月廿五日印刷／明治三十一年六月廿六日発行／口演者 双龍齋貞鏡／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区森田町五番地 小宮定吉／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

柳生但馬守 一巻一冊

【著編者】放牛舎桃湖（講演）・石原明倫（速記）【序年・序者】明治三十一・愛小説史【画工】不詳【奥付】「明治三十年一月廿四日印刷／全三十年九月廿八日発行／全三十一年十月再版／講演者 放牛桃湖事 鈴木紋次郎／発行者 浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版印刷所／発行所 浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

塚原左伝 一巻一冊

【著編者】一立齋不車（講演）・今村次郎（速記）・宮沢彦七（速記）【序年・序者】明治二十九・文廼家主人【画工】不詳【奥付】「明治廿九年十一月五日印刷／明治廿九年十一月九日発行／明治三十一年十二月譲受再版／講演社 東京市京橋区南八丁堀一丁目七番地 放

牛舎桃湖事 鈴木紋次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区森田町五番地 本城松之助／印刷所 東京市浅草区森田町五番地 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

大岡小間物屋彦兵衛 一巻一冊
政談

【著編者】一立齋不車（講演）・今村次郎（速記）・宮沢彦七（速記）【序年・序者】明治三十一・竹蔭居士【画工】石齋国保【奥付】「明治三十一年十二月十四日印刷／明治三十一年十二月十八日発行／編輯者 東京市神田区佐久間町三丁目卅七番地 春日岩吉／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区森田町五番地 本城松之助／印刷所 東京市浅草区森田町五番地 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

明治三十二年（一八九九） 己亥

蒙訓 日本外史 七巻七冊

【著編者】大槻東陽（解）・長田簡齋（校）【奥付】「明治八年十二月十三日版權免許／明治二十年三月二十三日版權譲受御届／明治二十年四月四日再版御届／明治二十年四月七日製本替御届／明治二十五

年六月五日別製本御届／明治三十二年一月二十五日五版／解釈者
東京市小石川区上富坂町二十三番地 大槻東陽／発行者 同浅草区
三好町五番地 斯波二郎／印刷者 同浅草区左衛門町壹番地 三好
守雄／発行者 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／発売所 大坂市
南区心齋橋北詰八十九番地 鐘美堂 中村芳松／発売所 東京市浅
草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「大川屋
印刷所川崎印行」とある。

都新聞

探偵
実話 蝮のお政 後編 一卷一冊

【著編者】鈴木金輔【序年・序者】馬脚生【画工】不詳【奥付】「明
治卅二年二月八日印刷／明治卅二年二月十二日発行／編輯者 東京
市京橋区南横町十二番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町
七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印
刷所 浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 浅草区三好
町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

長曾我部武勇伝 一卷一冊

【著編者】田辺大龍（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】竹蔭居
士【画工】豊川秀静【奥付】「明治三十二年四月十三日印刷／明治
三十二年四月十六日発行／発行者 東京市浅草区南元町廿四番地
三輪逸次郎／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印
刷所 同所 大川屋印刷所／大売捌所 東京市浅草区三好町七番地

聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とあ
る。

元和三勇婦伝 一卷一冊

【著編者】一立斎文車（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】竹蔭
居士【画工】豊川秀静【奥付】「明治卅二年五月五日印刷／同年五
月八日発行／口演者 一立斎文車／発行者 浅草区三好町七番地
大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所
同所 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

本町五福屋政談 後編 一卷一冊

【著編者】邑井一（講演）・加藤由太郎（速記）【画工】不詳【奥付】
「明治廿七年三月五日印刷発行／明治卅二年九月四版／発行者 東
京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四
番地 小宮定吉／発行所 同浅草区南元町廿四番地 大川屋活版所
／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

四声 篆書 広通字林玉篇大全 一卷一冊

【著編者】佐藤楚材【序年・序者】明治三十二・堀中徹【奥付】「明
治二十三年八月十三日印刷／同年同月十六日発行／同三十二年九月

十五日再版発行／編輯者 故人 佐藤楚材／発行者 東京市浅草区
黒船町拾五番地 瀬山佐吉／同 全市南区南元町二十四番地 三輪
逸次郎／同 全市三区三好町七番地 大川錠吉／石版印刷者 全市
日本橋区樽正町拾番地 柴田茂平

佐倉義民伝 一卷一冊

【著編者】不詳【序年・序者】鶯亭金升【画工】不詳【奥付】「明治
二十九年四月五日印刷／同年同月十二日発行／同三十二年十月再版
／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草
区森田町五番地 本城松之助／印刷所 同浅草区森田町五番地 大
川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋
書店」

月の輪草紙 中編 一卷一冊

【著編者】渡辺黙禪【画工】不詳【奥付】「明治三十二年十月廿一日印
刷／明治三十二年十月廿五日発行／編輯者 東京市浅草区栄久町六
番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／
印刷者 東京市浅草区森田町五番地 本城松之助／発行所 東京市
浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE
IN JAPAN」とある。

月の輪草紙 後編 一卷一冊

【著編者】渡辺黙禪【画工】不詳【奥付】「明治三十二年十一月十八
日印刷／明治三十二年十一月廿一日発行／編輯者 東京市麹町区内
幸町一丁目五番地 井上米次郎／発行者 東京市京橋区南横町十二
番地 鈴木金輔／印刷者 東京市京橋区新富町二番地 松山堂 山
田与四郎／発行所 東京市京橋区南横町十二番地 金楨堂／発行所
東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

明治三十三年（一九〇〇） 庚子

探偵
実話 染井一郎 後編 一卷一冊

【著編者】無名氏【序年・序者】明治三十三・あをば【画工】不詳
【奥付】「明治三十三年六月十二日印刷／明治三十三年六月十五日発
行／明治卅五年十一月再版／編輯者 東京市京橋区南横町十二番地
鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷
者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川
屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書
店」

大岡
裁判 煙草屋喜八 一卷一冊

【著編者】桃川燕林（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】文事堂
主人【画工】呂雲【奥付】「明治廿九年十月三十日印刷／全年十一

月五日発行／明治三十三年十一月再版／講演者 東京市浅草区公園第六区三号百四 蘆野万吉／速記者 東京市日本橋区薬研堀町四番地 今村次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区森田町五番地 本城松之助／印刷所 同所 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】明治二十九年（一八九六）十一月五日発行の文事堂版を旧版。

塚原卜伝 一卷一冊

【著編者】神田小伯山（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】千万夢堂主人【画工】不詳【奥付】「明治廿九年七月五日内務省許可／明治廿九年八月三日逓信省認可／明治卅三年四月九日印刷／明治卅三年四月十日発行／明治三十三年十一月再版／編輯者 東京市神田区田代町九番地 岡田常三郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町二十四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

明治三十四年（一九〇一） 辛丑

繪本真田三代記 下ノ巻 一卷一冊

【著編者】田辺南麟（講演）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治三十三・蚯蚓【画工】不詳【奥付】「明治廿一年十二月廿六日御届／全廿二年一月十日出版／全廿九年八月再版／全卅四年一月三版／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区森田町五番地 本城松之助／印刷所 全 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

中将姫 一卷一冊

【著編者】田辺南麟（講演）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治三十三・蚯蚓【画工】不詳【奥付】「明治三十二年十二月廿五日印刷／同三十三年一月四日発行／明治三十四年九月再版／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

佐竹騒動 一卷一冊

【著編者】神田伯治（講演）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治三十二・加藤由太郎【画工】不詳【奥付】「明治三十二年十月五日印刷／明治三十二年十月九日発行／明治三十四年九月再版／口演者

東京市浅草区馬道町八丁目一番地 神田伯治事 大沢常次郎／発行
者 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿
四番地 小宮定吉／印刷所 同浅草区南元町廿四番地 大川屋活版
所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

元和三勇士 一卷一冊

【著編者】大原武雄【序年・序者】醉柳閑人【画工】岡田梅邨【奥
付】「明治廿四年三月廿九日出版／同廿四年十二月十二日再版印刷
／明治三十四年九月第卅五版／編輯者 東京市小石東京市小石川区
指ヶ谷町百四十番地 大原武雄／発行者 東京市浅草区三好町七番
地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷
所 同浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草
区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

梅野 迎駕籠 聚楽町の段 一卷一冊
由兵衛

【著編者】不詳【奥付】「明治三十四年六月五日翻刻印刷／明治三十
四年六月十日／翻刻兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠
吉／印刷者 東京市浅草区北富坂町十一番地 北川忠次郎／発行所
東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店／右義太夫本は各地書籍
店小間物系紙商店にて売捌申候」

記留物 一卷一冊

【著編者】笠園主人（訳）【序年・序者】明治二十四・黒岩涙香【画
工】不詳【奥付】「明治二十四年五月廿四日印刷／明治二十四年五
月廿五日出版／明治三十四年十月再版／編輯者 東京市京橋区本材
木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番
地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷
所 同浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草
区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】明治二十四年（一
八九一）五月二十五日出版の三友舎版を求版。

九紋龍喜三郎 一卷一冊

【著編者】揚名舎桃李（講述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】蚯
蚓【画工】富田秋香【奥付】「明治三十二年六月三日印刷／明治三
十二年六月十日発行／明治三十四年十一月再版／発行者 東京市浅
草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地
小宮定吉／印刷所 同浅草区南元町廿四番地 大川屋活版所／発行
所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥
付に「MADE IN JAPAN」とある。

木曾義仲軍記 一卷一冊

【著編者】邑井一（講）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治三十
二・加藤蚯蚓【画工】不詳【奥付】「明治三十二年十一月一日印刷／

明治三十二年十一月七日発行／明治三十四年十一月再版／発行者
東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿
四番地 小宮定吉／印刷所 同浅草区南元町廿四番地 大川屋活版
所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

探偵
実話 官員小僧 一卷一冊

【著編者】錦城斎貞玉（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞
鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治三十四年十一月八日印刷／同年
同月十一日発行／編輯者 東京市浅草区南元町廿四番地 三輪逸次
郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京
市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所
／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備
考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

慶安太平記 一卷一冊

【著編者】大川錠吉【序年・序者】明治十九・菅の家【画工】不詳
【奥付】「明治三十四年十一月廿五日印刷／明治三十四年十二月一日
発行／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷
者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同浅草区南元町
廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚
栄堂 大川屋書店」

森家三勇士伝 一卷一冊

【著編者】揚名舎桃李（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨
主人【画工】不詳【奥付】「明治廿九年三月廿九日印刷／明治廿九
年四月二日発行／明治三十四年十二月再版／口演者 東京市日本橋
区馬喰町廿三番地 南沢半次郎／発行者 同浅草区三好町七番地
大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同
所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

明治三十五年（一九〇二） 壬寅

探偵
小説 黒眼鏡 一卷一冊

【著編者】榎本破笠【序年・序者】明治二十六・榎本破笠【画工】水
野年方【奥付】「明治二十六年五月十日印刷／明治二十六年五月廿
日発行／明治三十五年一月三版／編輯兼発行者 東京市浅草区三好
町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉
／印刷所 同浅草区南元町廿四番地 大川屋活版所／発行所 東京
市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

夢想兵衛胡蝶物語 一卷一冊

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】文化六・曲亭馬琴【画工】不詳
【奥付】「明治廿四年一月十五日印刷／全廿四年一月十九日発行／明治三十五年三月三版／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

都新聞 探偵 蝮のお政 中編 一卷二冊
実話

【著編者】鈴木金輔【序年・序者】乾坤堂贅竹【画工】不詳【奥付】「明治三十二年二月八日印刷／全年二月十一日発行／明治三十五年三月再版／編輯者 東京市京橋区南横町十二番地 鈴木金輔／発行者 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

敵討霞初嶋 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝(作)・採月庵主(抄録)【序年・序者】不詳【画工】不詳【奥付】「明治三十五年五月五版／〔明治二十三年十二月二十四日印刷出版〕同二十六年三月七日再版」
／編輯者 東京市京橋区新肴町十二番地 山口徳太郎／発行者 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同浅草区南元町廿四番地 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

片手美人 一卷一冊

【著編者】黒岩涙香(訳述)【序年・序者】明治二十三・梅廻家かほり【画工】不詳【奥付】「明治廿三年二月十二日印刷／明治廿三年二月十七日出版／明治卅五年五月再版／編輯者 東京市日本橋区檜物町四番地 岩本五一／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

佐野鹿十郎後日譚 一卷一冊

【著編者】一心斎明龍(口演)・加藤由太郎(速記)【序年・序者】明治三十三・蚯蚓【画工】富田秋香・小島勝月・小林永興【奥付】「明治三十三年三月三日印刷／全年三月十日発行／全三十四年十一月再版／明治卅五年五月三版／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

都新聞 探偵 蝮のお政 前編 一卷一冊
実話

【著編者】鈴木金輔【序年・序者】明治三十一・青々園【画工】不詳

詳【奥付】「明治卅一年十二月十八日印刷／全卅一年十二月廿一日
発行／全卅三年五月再版／全卅五年六月三版／編輯者 東京市京橋
区南横町十二番地 鈴木金輔／発行者 同浅草区三好町七番地 大
川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同
浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好
町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

町七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／
印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地
聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とあ
る。

真影流名人塚原卜伝 後編 一卷一冊

軍学 山鹿甚五左衛門 一卷一冊
【著編者】飄々亭玉山（講演）・秋元房次郎（速記）【序年・序者】明
治三十一・飄々亭玉山【画工】後藤芳景【奥付】「明治卅三年三月
二十一日版權譲受印刷／全年四月一日発行／明治卅五年六月四版／
講演者 東京市浅草区茅町二丁目廿七番地 西村富次郎／発行者
同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番
地 小宮定吉／印刷所 同浅草区南元町廿四番地 大川屋活版所／
発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】
奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

【著編者】揚名舎桃湖（講演）【序年・序者】明治三十・銀花堂主人
【画工】不詳【奥付】「明治三十年一月廿五日出版／明治三十年一月
廿九日発行／明治卅五年九月六版／講述者 東京市京橋区南八丁堀
一丁目七番地 放牛舎桃湖事 鈴木紋次郎／発行者 東京市浅草区
三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地
川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三
好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

山田長政遠征記 一卷一冊

侠賊 岡山市之丞 一卷一冊
【著編者】柴田南玉（講演）・高島政之助（速記）【序年・序者】島本
鳥歌【画工】不詳【奥付】「明治卅二年十一月三十日印刷／明治卅
二年十二月三日発行／明治卅五年八月再版／口演者 東京市下谷区
竹町一番地 柴田南玉事 大橋源三郎／発行者 東京市浅草区三好

【著編者】桃川燕林（口演）・中村卓三（速記）・芦野島子（速記）【序
年・序者】鳴雀【画工】不詳【奥付】「明治廿七年四月三十日印刷
／全年五月五日発行／全廿九年七月再版／全卅三年十一月三版／全
卅五年九月四版／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／
印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川
屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書

店」

自然之享福 一名二十世紀之吉凶学 一卷一冊

【著編者】久佐賀顛州（著述）・零屈学人（編述）【序年・序者】①編者之一知友②明治三十五・零屈学人【奥付】「明治三十五年九月卅日印刷／明治三十五年十月五日發行／著作者 東京市本郷区湯島三組町三十番地 久佐賀満吉／著作兼発行者 群馬県高崎市東在上大類村四十八番屋敷 長井平之助／印刷者 群馬県高崎市田町六十六番地 篠原卯三郎／印刷所 群馬県高崎市田町六十六番地 成立舎支店／発兌元 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

妾の罪 一卷一冊

【著編者】黒岩涙香（訳）【序年・序者】骨皮道人【画工】不詳【奥付】「明治廿三年九月十六日印刷／明治廿三年九月十九日出版／明治卅五年十二月八版／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

義勇 山本貞婦伝 一卷一冊
社説

【著編者】放牛舎桃林（講述）・酒井昇造（速記）【序年・序者】夢廼家さむる【画工】不詳【奥付】「明治廿八年八月十五日再版印刷

／明治廿八年八月廿日發行／明治卅五年十二月五版／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」がある。

明治三十六年（一九〇三） 癸卯

日本三馬術 一卷一冊

【著編者】一龍齋文車（講演）・宮沢彦七（速記）【画工】不詳【奥付】「明治卅一年四月廿四日印刷／明治卅一年四月廿七日發行／明治三十六年一月五版／講演者 東京市神田区佐久間町三丁目卅七番地 文車事 春日岩吉／発行者 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】架蔵本は序文を欠く。

玉手箱 一卷一冊

【著編者】黒岩涙香（訳）【序年・序者】黒岩涙香【画工】不詳【奥付】「明治廿四年五月十八日印刷／明治廿四年五月廿二日出版／明治三十六年二月再版／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番

地 鈴木金輔／発行者 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者
同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷
所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

五郎正宗 一卷一冊

【著編者】神田伯龍（講演）・山田都一郎（速記）【序年・序者】吞鯨
主人【画工】不詳【奥付】「明治三十二年五月十日印刷／明治三十
二年五月十五日発行／明治三十六年四月再版／講演者 真龍齋貞水
／発行者 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 全浅草区南
元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版所／発行所
東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に
「MADE IN JAPAN」とある。

成田 祐天之伝 一卷一冊 利生記

【著編者】真龍齋貞水（講演）・吉田欽一（速記）【序年・序者】蚯蚓
【画工】不詳【奥付】「明治三十二年六月卅日印刷／明治三十二年七
月五日発行／明治三十六年五月五版／講演者 真龍齋貞水／発行者
東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 全浅草区南元町
廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京
市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】表紙に「聚
栄堂発行」とある。

横浜 赤帽子三楽 一卷一冊 名物

【著編者】無名氏【序年・序者】不詳【画工】不詳【奥付】「明治三
十六年五月二十八日印刷／明治三十六年五月三十一日発行／編輯者
東京市浅草区栄久町六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三
好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区森田町五番地 本城
松之輔／印刷所 東京市浅草区森田町五番地 本城活版所／発行所
東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

楠正成 千早籠城 一卷一冊

【著編者】伊東潮花（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】鶴声居
士【画工】後藤芳景【奥付】「明治廿六年五月卅一日内務省許可／
明治廿七年七月十二日印刷発行／明治三十六年七月四版／編輯者
東京市日本橋区長谷川町一番地 鈴木源四郎／発行者 同浅草区三
好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定
吉／印刷所 同所 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七
番地 聚栄堂 大川屋書店」

探偵 銀行の賊 一卷一冊 小説

【著編者】黒岩涙香（訳述）【序年・序者】明治二十二・読破書齋主
人【画工】不詳【奥付】「明治二十二年七月印刷出版／明治二十二
年八月三十日版權譲受／明治二十六年五月廿九日外題替御届／明治

三十六年十月八版／編輯者 東京市日本橋区通三丁目八番地 野村銀次郎／発行者 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／发行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

元和三勇士 一卷一冊

【著編者】一流斎文雅（口演）・高島夢香（速記）【序年・序者】醉柳閑人【画工】不詳【奥付】「明治卅三年十月廿三日印刷／同年十月廿六日發行／明治卅三年十二月再版／明治三十六年十月十三版／編輯者 東京市神田区新石町四番地 市川路周／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版所／发行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

宮本左門武勇伝 一卷一冊

【著編者】真龍斎貞水（講述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】吞鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治三十一年三月九日印刷／明治三十一年三月十二日發行／明治三十六年十月五版／发行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／发行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」あり。

山田真龍軒 一卷一冊

【著編者】真龍斎貞水（講述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】徳堂居士【画工】不詳【奥付】「明治三十年十二月十七日印刷／明治三十年十二月二十日發行／明治三十六年十月七版／編輯者 東京市神田区南乗物町十五番地 鈴木源四郎／发行者 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／发行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

明治三十七年（一九〇四） 甲辰

仏蘭西小説 有罪無罪 一卷一冊

【著編者】黒岩涙香（訳）【序年・序者】明治二十二・中江兆民【画工】不詳【奥付】「明治廿二年十一月一日印刷 明治廿二年十一月五日出版／明治三十七年一月三日改刻初版／編輯兼发行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／发行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

実事 桜木芳雄 一巻一冊
小説

【著編者】安岡夢郷【序年・序者】安岡夢郷【画工】不詳【奥付等】
「明治三十七年一月十二日印刷／明治三十七年一月十五日発行／編輯者 東京市浅草区栄久町六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区森田町五番地 本城松之輔／印刷所 東京市浅草区森田町五番地 本城活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

探偵 名物芸者 一巻一冊
実話

【著編者】わかば【序年・序者】薰寛【画工】不詳【奥付等】「明治三十七年二月三日印刷／明治三十七年二月六日発行／編輯者 東京市浅草区栄久町六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区森田町五番地 本城松之輔／印刷所 東京市浅草区森田町五番地 本城活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

露国 露国 ロシヤコイぶし 一巻一冊
征伐

【著編者】金龍山人【序年・序者】金龍山人【奥付】「明治卅七年三月十日印刷／明治卅七年三月十四日発行／編輯兼発行者 東京市浅草区南元町十七番地 鈴木与八／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅

草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋錠吉」

露国 日本剣舞 一巻一冊
征伐

【著編者】金龍山人【序年・序者】金龍山人【奥付】「明治卅七年三月十日印刷／明治卅七年三月十四日発行／編輯兼発行者 東京市浅草区南元町十七番地 鈴木与八／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋錠吉」

檜山麒麟一声 一巻一冊

【著編者】邑井吉瓶（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】柳煙居士【画工】不詳【奥付】「明治廿六年五月卅一日 内務省許可／同年九月廿九日 上編印刷発行／同年十一月廿九日 中編印刷発行／同年十二月廿日 下編印刷発行／同廿八年三月合巻再版／明治三十七年四月二十版／編輯者 東京市神田区乗物町十五番地 鈴木源次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

慶安太平記 一巻一冊

【著編者】大川錠吉【序年・序者】明治十九・菅の家【画工】不詳

【奥付】「明治三十四年十一月廿五日印刷／明治三十四年十二月一日発行／明治卅七年五月十版／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

明治三十八年（一九〇五） 乙巳

笹野権三郎の伝 一卷一冊

【著編者】伊東清潮（講演）・加藤由太郎（速記）・吉田欽一（速記）
【序年・序者】蚯蚓庵雲因【画工】後藤芳景【奥付】「明治卅八年三月七日再版印刷／明治卅八年三月十日再版発行／（明治廿九年五月十一日印刷発行）／講演者 伊東清潮／発行所 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

隅田川 阿部豊後守 一卷一冊 出世之駒

【著編者】放牛舎桃湖（口述）・酒井昇造（速記）【序年・序者】明治三十・赤心舎吐峰【画工】不詳【奥付】「明治卅八年三月廿八日再版印刷／明治卅八年四月一日再版発行／（明治三十年五月二十日印刷）／（明治三十年五月廿五日発行）／口

演者 東京市京橋区八丁堀一丁目七番地 放牛舎桃湖事 鈴木紋次郎／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

新東京明治玉編 一卷一冊 撰

【著編者】山口亀吉【画工】不詳【奥付】「明治二十三年十二月一日印刷／明治二十三年十二月九日出版／明治三十八年五月十一版／編輯者 山口亀吉／印刷兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂」

毛谷村六助 一卷一冊

【著編者】邑井貞吉（講演）・速記社社員（速記）【序年・序者】薰寛堂【画工】不詳【奥付】「明治卅八年六月一日印刷／明治卅八年六月五日再版発行／（明治三十五年九月五日印刷）／（明治三十五年九月十日発行）／講演者 邑井貞吉／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

人耶鬼耶 一卷一冊

【著編者】黒岩涙香（訳述）【序年・序者】黒岩涙香【画工】不詳【奥付】「明治卅八年七月十五日印刷／明治卅八年七月廿日十五版發行」
〔明治二十一年十二月一日印刷／明治二十一年十二月四日出版〕／發行者 東京市浅草区三好町七番地
大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店」

学校お伽噺 修身の巻 一卷一冊

【著編者】祐文館編輯部【画工】不詳【奥付】「明治卅八年七月卅日再版印刷／明治卅八年八月三日再版發行」
〔明治三十六年二月廿五日印刷／明治三十六年三月三日發行〕
／編輯者 祐文館編輯部／右代表者 東京市日本橋区北島町二丁目十七番地 福岡新三／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

学校お伽噺 少年演説会 一卷一冊

【著編者】祐文館編輯部【画工】不詳【奥付】「明治卅八年七月卅日再版印刷／明治卅八年八月三日再版發行」
〔明治三十六年二月廿五日印刷／明治三十六年三月三日發行〕
／編輯者 祐文館編輯部／右代表者 東京市日本橋区北島町二丁目十七番地 福岡新三／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠

吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

むすめ小三金五郎 一卷一冊
節用

【著編者】梅廼家桃谷（口演）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】吞鯨主人【画工】落合芳幾【奥付】「明治卅八年九月十五日再版印刷／明治卅八年九月廿二日再版發行」
〔明治三十一年二月廿六日印刷／明治三十一年三月一日發行〕
／編輯者 東京市神田区佐久間町三丁目卅八番地 市川路周／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

少年お伽噺 第七編 二人少年 虎吉の巻 一卷一冊

【著編者】変哲山人【画工】山本英春【奥付】「明治三十五年十一月十四日印刷／明治三十五年十一月十八日發行／明治三十八年一月三十一日版發行／明治三十八年三月一日十二版發行／明治三十八年九月十二日十三版發行／明治三十八年十二月十一日十四版發行」
／編輯者 祐文館編輯部／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋

書店／専売所 東京市神田区表神保町二番地 福岡自祐堂書店

大川屋書店

明治三十九年（一九〇六） 丙午

小栗判官実録 一卷一冊

【著編者】宝井琴凌（口述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】加藤由太郎【画工】後藤芳景【奥付】「明治三十年五月廿八日印刷／明治三十年六月一日発行／明治卅九年二月第六版／口演者 東京市深川区西森下町十九番地 大沢清太郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

徳川天一坊 一卷一冊

【著編者】神田伯山（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】不詳【画工】不詳【奥付】「明治三十年七月一日印刷／明治三十年七月四日発行／明治卅九年二月六日五版発行／口演者 東京市浅草区森下町十五番地 玉川金次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂

鎮西為朝武勇伝 一卷一冊
八郎

【著編者】伊東凌湖（口演）・速記社社員（速記）【序年・序者】呑鯨主人【画工】後藤芳景【奥付】「明治卅九年二月廿五日再版印刷／明治卅九年二月廿八日再版発行／〔明治卅二年四月三日印刷 明治卅二年四月十五日発行〕／口演者 伊東凌湖／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

松前屋五郎兵衛 一卷一冊

【著編者】足立庚吉【序年・序者】伊東橋塘【画工】不詳【奥付】「明治卅九年三月十日六版印刷／明治卅九年三月十五日六版発行／〔明治卅三年一月十五日印刷 明治卅三年一月十八日発行〕／翻刻者 東京市小石川区指ヶ谷町十七番地 足立庚吉／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

秋山要助武勇伝 一卷一冊

【著編者】伊東陵潮（講述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治三十・加藤由太郎【画工】笠井鳳齋【奥付】「明治卅九年四月十日再版印刷／明治卅九年四月十五日再版発行」〔明治卅九年十一月十二日印刷／明治卅九年十一月十七日発行〕／講演者 東京市浅草区東三筋町五十番地 伊藤凌潮事 渡辺熊次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

日本外史字典 一卷一冊

【著編者】高橋喜八郎【序年・序者】明治三十九・高橋喜八郎【奥付】「明治三十九年四月十日印刷／明治三十九年四月十五日発行」／著者 高橋喜八郎／翻刻発行兼印刷者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／發行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店／發行所 大阪市東区安土町四丁目心齋橋東へ入 石塚松雲堂／發行所 大阪市東区北久太郎町四丁目心齋橋東へ入 岡本偉業堂」

生花独まなび 一卷一冊

【著編者】渡辺良雄（新著）・蓮窓居士（刪正）【序年・序者】伊東洋二郎【画工】不詳【奥付】「明治卅八年十一月一日十一版印刷／明治卅八年十一月五日十一版発行／明治卅九年四月廿八日十二版発行

／〔明治二十六年八月十一日印刷／明治二十六年八月二十日発行〕／著者 渡辺良雄／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

天正豪傑 塙団右衛門 二卷二冊

【著編者】桃川燕林（講演）・速記競技会員（速記）【序年・序者】鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治卅九年五月十五日再版印刷／明治卅九年五月廿日再版発行」〔明治卅一年九月二十日印刷／明治卅一年十月一日発行〕／講演者 桃川燕林／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

七ふしぎ狐のお楽 二卷一冊

【著編者】仮名垣魯文【序年・序者】仮名垣魯文【画工】不詳【奥付】「明治卅九年七月廿五日五版印刷／明治卅九年七月廿八日五版発行」〔明治二十九年二月五日印刷／明治二十九年二月十日発行〕／著者 東京市京橋区新富町六丁目十一番地 仮名垣魯文／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

寛永武術之誉御前試合 前編 一卷一冊

【著編者】宝井馬琴（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】明治三十二・蚯蚓【画工】不詳【奥付】「明治三十二年六月卅日印刷／明治三十二年七月五日発行／明治三十六年五月七日再版／明治三十七年五月十日三版／明治三十九年九月廿五日四版／講演者 宝井馬琴／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

探偵 横浜小僧ころし 一卷一冊
実話

【著編者】松林伯円（講演）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治三十・天野機節【画工】不詳【奥付】「明治卅九年十一月十八日再版印刷／明治卅九年十一月廿一日再版発行／（明治卅一年十二月廿七日印刷）（明治卅二年一月二日発行）／講演者 東京市京橋区木挽町九丁目六番地 若林義行／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】表紙に「東京大川屋蔵版」とある。

塩原多助一代記 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（演述）・若林珪蔵（筆記）【序年・序者】三遊

亭円朝【画工】月岡芳年【奥付】「明治十七年十二月一日版權免許／明治卅四年五月一日印刷発行／明治卅五年九月五日二十一版発行／明治卅五年十一月十五日二十二版発行／明治卅六年四月十日二十三版発行／明治卅七年十月十七日二十四版発行／明治卅八年十二月五日二十五版発行／明治卅九年十月廿八日二十六版発行／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

柳川庄八 二卷二冊

【著編者】柴田薫（口演）・時事新報社員（速記）【序年・序者】加藤蚯蚓【画工】豊川秀静【奥付】「明治卅九年十一月十五日再版印刷／明治卅九年十一月十八日再版発行／（明治卅三年七月一日印刷）（明治卅三年七月五日発行）／口演者 柴田薫／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】表紙に「東京大川屋蔵版」とある。

徳川四天 本多平八郎忠勝 一卷一冊
王随一

【著編者】春桜亭小三（口演）・安藤肅太郎（速記）【序年・序者】安藤独陰【画工】豊川秀静【奥付】「明治卅九年十一月廿五日再版印刷

／明治卅九年十一月廿八日再版発行／〔明治三十一年四月廿五日印刷〕／
〔明治三十一年四月三十日發行〕
口演者 東京市本郷区森川町一番地 広雄次郎／發行者 東京市浅
草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番
地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草
区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN
JAPAN」あり。

有馬猫騒動 一卷一冊

【著編者】伊東陵潮（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】堆雪
【画工】不詳【奥付】「明治卅九年十二月七日再版印刷／明治卅九年
十二月十日再版發行／〔明治三十五年八月二日印刷〕
〔明治三十五年八月五日發行〕」／講演者 伊東陵潮
／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市
浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／
發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】
奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

少年お伽噺 第二十七編 近藤重蔵 一卷一冊

【著編者】楽鷹真人【画工】尾形耕一【奥付】「明治卅八年十二月一
日印刷／明治三十八年十二月七日發行／明治卅九年三月五日再版發
行／明治卅九年八月六日三版發行／明治卅九年十二月廿七日四版發
行／編輯所 祐文館編輯部／編輯兼發行者 東京浅草区三好町七番
地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷

所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京浅草区三好町七番地 聚栄
堂 大川屋書店／専売所 東京市神田区表神保町二番地 福岡自祐
堂書店」

明治四十年（一九〇七） 丁未

松平長七郎 一卷一冊

【著編者】松林伯知（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】近眼子
【画工】後藤芳景【奥付等】「明治四十年一月二日再版印刷／明治四
十年一月五日再版發行／〔明治二十九年二月二日印刷〕
〔明治二十九年二月五日發行〕」／講演者 東京市
本所区相生町三丁目十八番地 松林伯知事 柘植正一郎／發行者
東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿
四番地 小宮定吉／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店【備考】表紙に「東京大川屋蔵版」とある。

真影流 上泉伊勢守 一卷一冊
元祖

【著編者】錦城斎貞玉（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】武愛
狂生【画工】豊川秀静【奥付】「明治四十年一月廿五日再版印刷／
明治四十年一月廿八日再版發行／〔明治三十二年八月六日印刷〕
〔明治三十二年八月十日發行〕」／口演者
錦城斎貞玉／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印
刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大

川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

空屋の美人 一卷一冊

【著編者】松林伯知（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】青軒居士【画工】不詳【奥付】「明治四十年二月一日七版印刷／明治四十年二月四日七版発行／（明治廿七年五月十五日印刷）／（同年五月十八日発行）」／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 川崎清三／印刷所 東京市浅草区南元町廿四番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。明治二十七年（一八九四）六月四日発行の吾妻屋（三友舎）版を求版。

遠藤万五郎 一卷一冊

【著編者】春錦亭柳桜（口演）・今村次郎（速記）【序年・序者】呑鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治四十年四月十五日十版印刷／明治四十年四月廿日十版発行／（明治廿六年十二月八日印刷）」／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿四番地 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

仇討會我物語 一卷一冊

【著編者】東都鳴雀（講演）・鳴海正治（速記）【序年・序者】東都鳴雀【画工】不詳【奥付】「明治四十年四月十六日六版印刷／明治四十年四月廿一日六版発行／（明治三十六年四月十五日印刷）」／編輯者 東京市本所区番場町五十四番地 村瀬元代／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

水戸

尾州 三家三勇士伝 一卷一冊

紀州

【著編者】放牛舎桃林（講述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治二十六年・蕉雨逸人【画工】尾形月耕【奥付】「明治四十年五月五日五十版印刷／明治四十年五月八日五十版発行／口演者 神田区駿河台南甲賀町八番地 島左右助／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

仇討會我物語 一巻一冊

【著編者】桃川三玉（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】空〇道人【画工】重光【奥付】「明治四十年五月十一日再版印刷／明治四十年五月十五日再版発行／〔明治二十五年五月一日印刷〕／口演者 小田切辰／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿四番地 大川屋活版所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

観音
利生記 浅草寺の仇討 一巻一冊

【著編者】桃川燕林（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治四十年五月十八日再版印刷／明治四十年五月廿一日再版発行／〔明治三十二年十二月十四日印刷〕／講演者 東京市浅草公園第六区百四号 燕林事 蘆野万吉／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

黄蔷薇 一巻一冊

【著編者】三遊亭円朝（訳述）【画工】不詳【奥付】「明治四十年六

月十五日再版印刷／明治四十年六月廿三日再版発行／定価金四十五錢／編輯者 東京市京橋区南横町十三番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

元和三勇士 一巻一冊

【著編者】大原武雄【序年・序者】吞鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治廿四年三月廿九日出版／明治廿四年十二月十二日再版印刷／明治卅八年五月一日五十版発行／明治卅八年九月三十日五十一版発行／明治卅九年三月五日五十二版発行／明治卅九年九月十五日五十三版発行／明治四十年二月七日五十四版発行／明治四十年六月三十日五十五版発行／編輯者 東京市小石川区指ヶ谷町百四十番地 大原武雄／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

義士銘々伝 五巻五冊

【著編者】邑井一（講演）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治三十・高橋五郎【画工】不詳【奥付】「明治三十一年四月十五日印

刷／明治三十一年五月一日発行／明治卅六年五月十五日再版発行／
明治四十年七月一日三版発行／講演者 下口経助／発行者 東京市
浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四
番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行者 東京市浅
草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE
IN JAPAN」とある。

東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行者 東京市浅
草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE
IN JAPAN」とある。

尼子十勇士 一卷一冊

【著編者】放牛舎桃湖（講演）・石原明倫（速記）【序年・序者】明治
三十一・好英散史【画工】不詳【奥付】「明治四十年十月一日十版
印刷／明治四十年十月三日十版発行／（明治卅一年十一月十二日印刷）／
明治卅一年十一月十六日発行」

講演者 東京市京橋区南八丁堀一丁目七番地 鈴木紋次郎／発行者
東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南
元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行者
東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に
「MADE IN JAPAN」とある。

彦根三勇士 一卷一冊

【著編者】錦城斎貞玉（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨
主人【画工】不詳【奥付】「明治四十年九月六日再版印刷／明治四
十年九月九日再版発行／（明治三十六年十月五日印刷）／明治三十六年十月十日発行
神田区通新石町二番地 萩原幾喜／発行者 東京市浅草区三好町七
番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷
所 同所 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 聚
栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

忠勇 水戸十勇士 一卷一冊
美談

【著編者】神田伯山（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨主
人【画工】不詳【奥付】「明治四十年十二月十九日再版印刷／明治
四十年十二月廿二日再版発行／（明治卅一年八月十五日印刷）／明治卅一年八月二十日発行」
講演者
玉川金治郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷
者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草
区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七
番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」

復讐 岩見重太郎伝 一卷一冊
美談

【著編者】双龍斎貞鏡（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨
主人【画工】後藤芳景【奥付】「明治四十年九月廿八日十版印刷／
明治四十年十月一日十版発行／（明治二十九年四月一日印刷）／明治二十九年四月四日発行」
講演者
双龍斎貞鏡事 早川与吉／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大
川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所

とある。

明治四十一年（一九〇八） 戊申

豪傑 塚原左伝 一卷一冊
美談

【著編者】放牛舎桃湖（口演）・秋元浅次郎（速記）【序年・序者】文
廼家主人【画工】不詳【奥付】「明治四十一年三月廿五日十版印刷／
明治四十一年三月廿八日十版発行／（明治二十九年十一月五日印刷）
明治二十九年十一月九日発行」／講
演者 東京市京橋区南八丁堀一丁目七番地 放牛舎桃湖 鈴木紋次
郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京
市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋活版所
／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備
考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

栗山大膳誠忠録 一卷一冊

【著編者】桃川如燕（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】鳴雀
【画工】不詳【奥付】「明治四十一年四月廿五日十版印刷／明治四十
一年四月廿八日十版発行／（明治二十八年四月三日印刷）
明治二十八年四月六日発行」／口演者 桃川
如燕／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東
京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元
町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地

聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

二見ヶ浦日の出の仇討 一卷一冊

【著編者】一流斎文雅（口演）・高嶋夢香（速記）【序年・序者】吞鯨
主人【画工】不詳【奥付】「明治四十一年五月三日再版印刷／明治四
十一年五月六日再版発行／（明治三十年十一月二日印刷）
明治三十年十一月八日発行」／編輯者 東京
市神田区新石町四番地 市川路周／発行者 東京市浅草区三好町七
番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉
／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所
東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店【備考】奥付に「MADE
IN JAPAN」とある。

大岡 水吞村九助 一卷一冊
さばき

【著編者】桃川燕林（講演）・酒井楽三（速記）【序年・序者】吞鯨
主人【画工】不詳【奥付】「明治四十一年五月十四日再版印刷／明
治四十一年五月十七日再版発行／（明治三十三年五月一日印刷）
明治三十三年五月四日発行」／講演者
東京市浅草区公園第六区三号百四 蘆野万吉／発行者 東京市浅
草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番
地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草
区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN
JAPAN」とある。

大岡 さばき 小西屋騒動 一巻一冊

【著編者】一立斎文車（講演）・天野機節（速記）【序年・序者】天野機節【画工】不詳【奥付】「明治四十一年五月十六日再版印刷／明治四十一年五月十八日再版発行」〔明治卅一年十二月二十日印刷〕／口演者 東京市本郷区湯島天神町三丁目二番地 大橋源三郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

入身術誉小太刀 一巻一冊

【著編者】神田伯鱗（講演）・浪上義三郎（速記）【序年・序者】不詳【画工】不詳【奥付】「明治四十一年五月十七日再版印刷／明治四十一年五月廿一日再版発行」〔明治三十三年二月二日印刷〕／講演者 神田伯鱗／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

梅若丸 一巻一冊

【著編者】放牛舎桃湖（講演）・速記社社員（速記）【序年・序者】吞

鯨主人【画工】豊川秀静【奥付】「明治四十一年五月十五日再版印刷／明治四十一年五月十八日再版発行」〔明治三十二年三月一日印刷〕／口演者 東京市京橋区八丁堀一丁目七番地 鈴木紋次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

敵討 正木武勇伝 一巻一冊

【著編者】松林百燕（口演）・速記社社員（速記）【序年・序者】天籟散史【画工】豊川秀静【奥付】「明治四十一年五月廿二日再版印刷／明治四十一年五月廿四日再版発行」〔明治三十一年四月廿五日印刷〕／口演者 松林百燕／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

田沼騒動 一巻一冊

【著編者】神田伯山（口演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治四十一年五月廿四日再版印刷／明治四十一年五月廿六日再版発行」〔明治卅一年三月廿五日印刷〕／口演者 神田伯山／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者

浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所
／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

海底の重罪 一卷一冊

【著編者】黒岩涙香（訳）【序年・序者】天趣散士【画工】不詳【奥付】
「明治四十一年七月廿五日再版印刷／明治四十一年七月廿七日再版
発行／（明治廿二年九月十五日印刷）／（明治廿二年九月十六日発行）
／訳述 涙香小史／発行所 東京市
浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六
番地 川崎清三／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印
刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

探偵小説 偵探 一卷一冊

【著編者】丸亭素人【序年・序者】丸亭素人【画工】不詳【奥付】「明
治四十一年七月廿四日再版印刷／明治四十一年七月廿六日再版発行
／（明治二十四年一月七日印刷）／（明治二十四年一月九日発行）
／編輯者 東京市日本橋区葺屋町一番地
瀧川民治郎／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印
刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 東京市浅
草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町
七番地 聚栄堂 大川屋書店」

塩原多助一代記 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（演述）・若林珪蔵（筆記）【序年・序者】三遊
亭円朝【画工】月岡芳年【奥付】「明治十七年十二月一日版權免許
／明治三十四年五月一日印刷発行／明治三十五年九月五日廿一版發
行／明治三十五年十一月十五日廿二版發行／明治三十六年四月十日
廿三版發行／明治三十七年十月十七日廿四版發行／明治三十八年十
二月五日廿五版發行／明治三十九年十月廿八日廿六版發行／明治四
十年四月廿一日廿七版發行／明治四十年十一月十日廿八版發行／明
治四十一年九月二十日廿九版發行／発行所 東京市浅草区三好町七
番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三
／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番
地 聚栄堂 大川屋書店」

文政 水戸の仇討 一卷一冊
曾我

【著編者】邑井一（口演）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治
三十二・加藤蚯蚓【画工】秋香・藤月・蕉亭【奥付】「明治四十
一年九月二十日第十版印刷／明治四十一年九月廿四日第十版發行／
（明治卅二年四月十四日印刷）／口演者 東京市下谷仲徒士町二丁目五十六
番地 邑井一事 村井徳一／発行所 東京市浅草区三好町七番地
大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷
所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚
栄堂 大川屋書店」【備考】表紙に「東京大川屋蔵版」とある。

豊臣山崎合戦 一巻一冊

【著編者】双龍齋貞鏡（口演）・今村次郎（速記）【序年・序者】烟霧道人【画工】不詳【奥付】「明治四十一年十一月一日十版印刷／明治四十一年十一月五日十版発行／（明治廿六年五月卅一日内務省許可）／明治廿七年四月十四日印刷発行」／編輯者 鈴木源四郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

英一蝶浅妻船 一巻一冊

【著編者】錦城齋貞玉（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治四十一年十一月十八日五版印刷／明治四十一年十一月二十日五版発行／（明治卅三年十二月九日印刷）／明治卅三年十二月十二日発行」／講演者 錦城齋貞玉／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

探偵実話 新女房 一巻一冊

【著編者】邑井定吉（自講自記）【序年・序者】吞鯨主人【画工】豊川秀静【奥付】「明治四十一年十一月廿五日再版印刷／明治四十一年

十一月廿九日再版発行／（明治三十三年九月八日印刷）／編輯者 東京市浅草区南元町十七番地 鈴木与八／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

探偵文庫 多湖廉平 一巻一冊

【著編者】丸亭素人【画工】不詳【奥付】「明治四十一年十一月廿四日十版印刷／明治四十一年十一月廿六日十版発行／（明治廿六年四月八日内務省許可）／明治廿六年五月十三日印刷発行」／編輯者 東京市日本橋区葺町一番地 瀧川民治郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

傾城情話 在原豊松 一巻一冊

【著編者】三遊亭円生（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨主人【画工】後藤芳景【奥付】「明治四十一年十二月一日五版印刷／明治四十一年十二月五日五版発行／（明治三十三年五月三日印刷）／明治三十三年五月五日発行」／口演者 三遊亭円生／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋

書店」

明治四十二年（一九〇九） 己酉

怪猫奇談 一巻一冊

倭文範さわ理之巻 一巻一冊

【著編者】三遊亭円生（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨
主人【画工】後藤芳景【奥付】「明治四十一年十二月三日再版印刷
／明治四十一年十二月五日再版発行／（明治三十五年一月二日印刷）
明治三十五年一月五日発行」／講
演者 小林紫軒／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／
印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所
大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川
屋書店】【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

【著編者】竹本多門太夫（閲）・田波狂骨（編）【序年・序者】田波狂
骨【奥付】「明治四十一年十二月廿八日印刷／明治四十二年一月十
二日発行／編輯兼発行者 東京市浅草区北元町十二番地 鈴木源四
郎／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同
所 大川屋印刷所／専売所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店」

沖田二子の仇討 一巻一冊

阿波の十郎兵衛 一巻一冊

【著編者】双龍斎貞鏡（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】明治十
九・補綴者【画工】不詳【奥付】「明治四十一年十二月十日十五版印刷
／明治四十一年十二月十五日十五版発行／（明治三十一年六月廿五日印刷）
明治三十一年六月廿八日発行」
／口演者 双龍斎貞鏡／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川
錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所
大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大
川屋書店」

【著編者】顛転堂竹吟（口演）・速記社社員（速記）【序年・序者】風
来散人【画工】重光【奥付】「明治四十二年一月廿三日五版印刷／
明治四十二年一月廿七日五版発行／（明治三十一年三月十六日印刷）
明治三十二年三月十九日発行」／発
行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草
区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行
所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店】【備考】奥
付に「MADE IN JAPAN」とある。

笹野権三郎の伝 一巻一冊

【著編者】伊東凌潮（講演）・加藤由太郎（速記）・吉田欽一（速記）【序
年・序者】蚯蚓庵雲因【画工】不詳【奥付】「明治四十二年一月三十日十

版印刷／明治四十二年二月三十日版発行／〔明治二十九年五月十一日印刷〕
〔同年同月同日発行〕

／講演者 伊東凌潮／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠
吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同
所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店】【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

古市十人斬 一卷一冊

【著編者】桃川燕林（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】竹蔭
【画工】不詳【奥付】「明治四十二年三月廿八日十版印刷／明治四十
二年四月一日十版発行／〔明治廿七年十一月二十二日印刷〕
〔明治廿七年十一月二十九日発行〕」／講演者 東京
市浅草区公園第六区三号百四 蘆野万吉／発行者 東京市浅草区三
好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川
崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好
町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

俳諧 俳句十万題 二卷二冊

【著編者】村瀬元代【奥付】「明治四十二年四月十七日印刷／明治四
十二年五月一日発行／編輯者 東京市本所区荒井町卅三番地 村瀬
元代／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東
京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷
所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

真景累ヶ淵 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（口述）・小相英太郎（筆記）【序年・序者】明
治二十一・化作【画工】不詳【奥付】「明治四十二年五月十日十版印
刷／明治四十二年五月十五日十版発行／〔明治三十年一月二日印刷〕
〔明治三十年一月五日出版〕」／口
述者 故 三遊亭円朝／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川
錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所
同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店」

増補 訂正 東海道中膝栗毛 一卷一冊

【著編者】十返舎一九【序年・序者】享和二・十返舎一九【画工】佳
年【奥付】「明治四十二年六月一日百一版印刷／明治四十二年六月
五日百一版発行／〔明治十八年一月廿六日印刷〕
〔明治十八年同月同日発行〕」／著者 十返舎一九／発行者
東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南
元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所
東京市浅草区三好町七番地 東京大川書店」

田宮坊太郎 一卷一冊

【著編者】双龍斎貞鏡（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】大
川屋主人【画工】重光【奥付】「明治四十二年六月十一日廿五版印
刷／明治四十二年六月十五日廿五版発行／〔明治卅一年十二月廿六日印刷〕
〔明治卅二年一月二日発行〕」

／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

友千鳥 一卷一冊

【著編者】三遊亭円生（口演）・酒井昇造（速記）【序年・序者】明治二十五・松永の町人【画工】不詳【奥付】「明治四十二年七月十一日十版印刷／明治四十二年七月十五日十版発行」（明治廿五年二月九日印刷）／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

俠客国定忠次 一卷一冊

【著編者】揚名舎桃李（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】竹烟散士【画工】光方【奥付】「明治四十二年七月二十日十版印刷／明治四十二年七月廿二日十版発行」（明治廿六年五月卅一日内務省許可）／編輯者 東京市日本橋区長谷川町一番地 鈴木源四郎／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

鳴門船幽霊 一卷一冊
奇談

【著編者】松林伯円（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】春涛居士【画工】光方【奥付】「明治四十二年七月二十日十版印刷／明治四十二年七月廿三日十版発行」（明治二十四年十一月六日印刷）／編輯者 東京市京橋区南横町十二番地 鈴木金輔／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

都新聞 探偵鼠小僧 後編 一卷一冊
実話

【著編者】揚名舎桃李（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】竹烟散士【画工】光方【奥付】「明治四十二年八月九日五版印刷／明治四十二年八月十二日五版発行」（明治三十一年五月十四日印刷）／編輯者 東京市京橋区南横町十二番地 鈴木金輔／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

仇討瀬川之伝 一卷一冊

【著編者】桃川燕林（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨
主人【画工】不詳【奥付】「明治四十二年八月十日再版印刷／明治
四十二年八月十三日再版発行／〔明治三十一年三月廿五日印刷〕／〔明治三十一年四月一日発行〕」／〔明治三十一年四月一日発行〕／〔明治三十一年五月廿三日発行〕」／〔明治三十一年五月廿三日発行〕」／発行所
東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南
元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所
東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に
「MADE IN JAPAN」とある。

鳥追お松 一卷一冊

【著編者】桃川燕林（講演）・速記学会（速記）【序年・序者】明治三十
三・桃川燕林【画工】蘆原国直【奥付】「明治四十二年九月十八日再版
印刷／明治四十二年九月廿一日再版発行／〔明治三十三年五月十九日印刷〕」
／〔明治三十三年五月廿三日発行〕」／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉
／印刷者 桃川実／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉
／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所
大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大
川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

鼠小僧実記 一卷一冊

【著編者】不詳【序年・序者】秋琴亭緒依【画工】不詳【奥付】「明
治四十二年九月十八日十五版印刷／明治四十二年九月廿二日十五版
発行／〔明治二十年十月廿五日翻刻御届〕」／原編集人 広島県平民 桑原徳
勝／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京

市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所
／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備
考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

樋口十郎左衛門 一卷一冊

【著編者】田辺大龍（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】呉竹庵
【画工】重光【奥付】「明治四十二年九月十九日十五版印刷／明治四
十二年九月廿三日十五版発行／〔明治二十九年七月十二日印刷〕」
／〔明治二十九年七月十六日発行〕」／講演者
東京市日本橋区高砂町十四番地 小林久次郎／発行所 東京市浅
草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番
地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草
区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN
JAPAN」とある。

鏡ヶ池操松影 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（演述）・若林柑蔵（筆記）【序年・序者】東都
遊民【画工】不詳【奥付】「明治四十二年十一月一日十版印刷／明
治四十二年十一月三日十版発行／〔明治二十三年十一月一日印刷〕」
／〔明治二十三年十二月二日出版〕」／編輯
者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行所 東
京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町
廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京
市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

菊模様千代の亀鑑 一巻一冊

【著編者】三遊亭円朝（口演）・酒井昇造（筆記）【序年・序者】明治二十四・春涛居士【画工】不詳【奥付】「明治四十二年十一月二日十版印刷／明治四十二年十一月五日十版發行／（明治二十四年十二月三日印刷）
（明治二十四年十二月六日出版）」／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

前九年
後三年 奥州軍記 一巻一冊

【著編者】神田民衛【序年・序者】神田民衛【画工】不詳【奥付】「明治二十四年五月廿四日印刷／明治四十二年十一月十日再版印刷／明治四十二年十一月十三日再版發行／（明治十九年十二月一日版權免許）
（明治二十年七月日刻成）」／著作者 東京市神田区山本町十番地寄留 神田民衛／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

滑稽五笑楽 一巻一冊

【著編者】骨皮道人【序年・序者】骨皮道人【画工】小林清親【奥

付】「明治四十二年十一月廿五日十版印刷／明治四十二年十一月廿八日十版發行／（明治三十年八月十五日印刷）
（明治三十年八月二十日發行）」／著作者 東京市浅草区須賀町十九番地 西森武城／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

妙竹
林話 七偏人 一巻一冊

【著編者】梅亭金鷲（編次）・酔多道士（笑評）【序年・序者】松亭迂叟【画工】不詳【奥付】「明治四十二年十二月一日十版印刷／明治四十二年十二月三日十版發行／（明治二十一年九月二十日印刷）
（明治二十一年十月一日發行）」／著作者 梅亭金鷲／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

三河万歳 一巻一冊

【著編者】磯田定【画工】不詳【奥付】「明治四十二年十二月廿七日印刷／明治四十二年十二月三十日發行／正価金五銭／著述者 磯田定／發行所 東京日本橋区馬喰町四丁目廿一番地 鈴木武二郎／印刷者 東京市神田区松下町七、八番地 横田五十吉／發行所 東京日本橋区馬喰町四丁目廿一番地 文友堂／同 東京浅草区三好町七番地 大川屋」

明治四十三年（一九一〇） 庚戌

山中鹿之助 一卷一冊

【著編者】伊東潮花（講演）・安藤肅太郎（速記）【序年・序者】積雪庵【画工】不詳【奥付】「明治四十三年一月一日再版印刷／明治四十三年一月四日再版發行／（明治三十三年十月二十日印刷）（明治三十三年十月廿五日發行）」／講演者 伊東潮花／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行人 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

日本随一 高田又兵衛 一卷一冊

【著編者】放牛舎桃湖（講演）・顛々堂御雲（速記）【序年・序者】加藤由太郎【画工】不詳【奥付】「明治四十三年二月廿日十五版印刷／明治四十三年二月廿三日十五版發行／（明治三十五年三月五日印刷）（明治三十五年三月十日發行）」／講演者 放牛舎桃湖事 鈴木紋次郎／発行人 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行人 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

嵯峨の夜桜 後編 一卷一冊

【著編者】松林伯円（講演）・今村次郎（速記）【画工】不詳【奥付】「明治四十三年三月廿八日二十版印刷／明治四十三年四月一日二十版發行／（明治廿六年九月卅日印刷）（明治廿六年十月五日發行）」／編輯者 東京市神田区佐久間町一丁目九番地 菅谷与吉／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行人 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

探偵実話 不思議の斬殺 一卷一冊

【著編者】無名氏【序年・序者】浮世庵【画工】豊川秀静【奥付】「明治四十三年三月廿八日再版印刷／明治四十三年四月一日再版發行／（明治卅三年十月廿五日印刷）（明治卅三年十一月一日發行）」／編輯者 無名氏／発行人 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行人 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

増補訂正 東海道中膝栗毛 一卷一冊

【著編者】十返舎一九【序年・序者】享和二・十返舎一九【画工】佳年【奥付】「明治四十三年四月十日印刷／明治四十三年四月十五日

発行／(定価五十銭)／著作者 十返舎一九／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町二十六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 東京大川書店

玉手箱 一巻一冊

【著編者】黒岩涙香(訳)【序年・序者】黒岩涙香【画工】不詳【奥付】「明治廿四年五月十八日印刷／明治廿四年五月廿二日出版／明治四十三年五月廿八日五版発行／編輯者 東京市京橋区本材木町三丁目廿六番地 鈴木金輔／発行者 同浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

元禄美談 赤穂義士実伝 一巻一冊

【著編者】聚栄堂編輯部【序年・序者】其徳堂【画工】山本研山【奥付】「明治四十三年六月二十日印刷／明治四十三年六月廿七日発行／編輯所 聚栄堂編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

英雄ナポレオン 一巻一冊

【著編者】無名氏【画工】不詳【奥付】「明治四十二年九月七日印刷／明治四十二年九月十五日発行／明治四十三年九月十日再版発行／著者 無名氏／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店／定価金五十銭 郵税六銭」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

真影流名人塚原卜伝 前編 一巻一冊

【著編者】放牛舎桃湖(講演)・酒井昇造(速記)【序年・序者】明治三十・銀花堂主人【画工】不詳【奥付】「明治四十三年十月十四日二十版印刷／明治四十三年十月十八日二十版発行／(明治三十年一月廿五日印刷) (明治三十年一月廿九日発行)／講演者 東京市京橋区南八丁堀一丁目七番地 放牛舎桃湖 鈴木紋次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

探偵実話 四ツ谷二人斬 一巻一冊

【著編者】無名氏【序年・序者】埋木庵主人【画工】不詳【奥付】「明

治四十三年十一月十六日三版印刷／明治四十三年十一月廿日三版發行／〔明治卅五年五月廿八日印刷〕／編輯者 東京市浅草区栄久町六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行人 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

伊達大騒動 一巻一冊

【著編者】伊東凌潮（講演）・速記社社員（速記）【画工】不詳【奥付】「明治四十三年十一月廿八日再版印刷／明治四十三年十二月一日再版發行」〔明治卅二年五月十三日印刷〕／講演者 東京市浅草区東三筋町五十番地 伊東凌潮事 渡辺熊次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区新旅籠町一番地 本城松之助／印刷所 同所 良文堂／発行人 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

大力戸田五郎 一巻一冊

【著編者】錦城斎貞玉（講演）・吉田欽一（速記）・工藤三郎（速記）【序年・序者】明治三十・南仁賀士【画工】不詳【奥付】「明治四十三年十一月廿八日再版印刷／明治四十三年十二月一日再版發行」

〔明治三十年四月廿三日印刷〕／口演者 東京市浅草区福富町廿九番地 柴田貢／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行人 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

一刀斎伊東弥五郎 一巻一冊

【著編者】放牛舎桃湖（講演）・酒井昇造（速記）・工藤三郎（速記）【序年・序者】呑鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治四十三年十二月九日五版印刷／明治四十三年十二月十三日五版發行」〔明治三十年四月十日印刷〕／講演者 東京市京橋区八丁堀一丁目七番地 鈴木紋次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行人 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

明治四十四年（一九一） 辛亥

怪又怪 一巻一冊

【著編者】丸亭素人（訳）【序年・序者】柳煙散士【画工】不詳【奥付】「明治四十四年一月十八日印刷／明治四十四年一月廿一日發行」

／編輯者 筒井民次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川
錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所
同所 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

探偵 実話 決死の少年 前編 一巻一冊

【著編者】しのぶ【序年・序者】埋木庵主人【画工】不詳【奥付】「明
治四十四年一月二十一日五版印刷／明治四十四年一月二十五日五版
発行／〔明治三十四年二月七日印刷
明治三十四年二月十日発行〕／編輯者 東京市浅草区栄久町六番
地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印
刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大
川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋
書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

探偵 実話 決死の少年 後編 一巻一冊

【著編者】無名氏【序年・序者】しのぶ【画工】不詳【奥付】「明治
四十四年一月二十一日五版印刷／明治四十四年一月二十五日五版発
行／〔明治三十四年二月十八日印刷
明治三十四年二月廿三日発行〕／編輯者 東京市浅草区栄久町六番
地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印
刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大
川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋
書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

絵本 南総 里見八犬伝 八巻八冊

【著編者】曲亭馬琴【画工】不詳【奥付】「明治四十四年二月一日廿二版
印刷／明治四十四年二月五日廿二版発行／〔明治十九年九月二日出版御届
明治十九年十月日出版
／著者 曲亭馬琴／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠
吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 東
京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区
三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN
JAPAN」とある。

柳生又十郎 一巻一冊

【著編者】邑井一（講述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】加藤
みづづ【画工】不詳【奥付】「明治四十四年二月十日十八版印刷／
明治四十四年二月十四日十八版発行／〔明治二十二年四月七日印刷
明治二十二年四月十日発行〕／口
演者 東京市下谷区仲徒士町二丁目五十六番地 邑井一事 邑井徳
一／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京
市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所
／発行者 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備
考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

少年 教育 修身はなし 一巻一冊

【著編者】文廼家主人【画工】不詳【奥付】「明治四十四年二月十日印刷／明治四十四年二月十九日発行／編輯者 東京市浅草区北元町十二番地 鈴木源四郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

少年修身はなし 動物の巻 一卷一冊

【著編者】文廼家主人【画工】不詳【奥付】「明治四十四年三月七日印刷／明治四十四年三月十三日発行／編輯者 東京市浅草区北元町十二番地 鈴木源四郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

滑稽類纂 一卷一冊

【著編者】京の藁兵衛【序年・序者】①明治三十二・尾崎紅葉②京の藁兵衛【画工】不詳【奥付】「明治三十二年四月三日印刷発行／明治三十九年七月十日訂正増補再版発行／明治四十四年二月二十日譲受印刷／明治四十四年三月廿三日印刷／定価四十銭／編輯者 堀野与七／発行者 東京市浅草区下平右衛門町九番地 岡村庄兵衛／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市神田

区錦町三丁目二十三番地 今井万之助／発行元 東京市浅草区下平右衛門町九番地 岡村書店／東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店」

寛永名士馬術誉 一卷一冊

【著編者】桃川如燕（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】柳烟散史【画工】後藤芳景【奥付】「明治四十四年三月廿五日十版印刷／明治四十四年三月廿九日十版発行／（明治廿六年五月卅一日内務省許可）／編輯者 東京市日本橋区長谷川町一番地 鈴木源四郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

俠客釣鐘弥左衛門 一卷一冊

【著編者】田辺南麟（講演）・高崑政之助（速記）【序年・序者】明治三十二年・天野機節【画工】不詳【奥付】「明治四十四年五月十一日再版印刷／明治四十四年五月十四日再版発行／（明治三十四年七月十日印刷）／編輯者 東京市浅草区采久町六番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE

IN JAPAN』とある。

新撰
實用 青年演説討論五千題 一卷一冊

【著編者】大畑重齋【序年・序者】明治三十二・大畑重齋【奥付】「明治四十四年六月三日十九版印刷／明治四十四年六月七日十九版發行／（明治三十二年九月廿三日印刷）／編纂者 大畑裕／發行者 東京市淺草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市淺草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市淺草区三好町七番地 聚榮堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」がある。

実
説 白井権八 一卷一冊

【著編者】錦城齋貞玉（口演）・今村次郎（速記）【序年・序者】転々堂竹吟【画工】不詳【奥付】「明治四十四年六月廿六日廿五版印刷／明治四十四年六月廿九日廿五版發行／（明治三十年十二月廿七日印刷）／編輯者 東京市淺草区南元町十七番地 森仙吉／發行者 東京市淺草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市淺草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市淺草区三好町七番地 聚榮堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」がある。

俠客
実伝 夢の市郎兵衛 一卷一冊

【著編者】鳥有山人【序年・序者】吞鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治四十四年七月二日三版印刷／明治四十四年七月五日三版發行／（明治三十四年十月五日印刷）／編輯者 東京市京橋区南槇町十二番地 鈴木輔／發行者 東京市淺草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市淺草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市淺草区三好町七番地 聚榮堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

都新聞 月の輪草紙 一卷一冊

【著編者】黙禪【序年・序者】紅夢楼主人【画工】不詳【奥付】「明治四十四年七月二日三版印刷／明治四十四年七月五日三版發行／（明治三十二年八月九日印刷）／編輯者 東京市京橋区南槇町十二番地 鈴木輔／發行者 東京市淺草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市淺草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市淺草区三好町七番地 聚榮堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

十銭文庫 8 東海中膝栗毛 前編 一卷一冊

【著編者】十返舎一九【奥付】「明治四十四年八月十日印刷／明治四十四年八月十五日發行／（定価金十銭）／編輯者 東京市京橋区新富

町三丁目二番地 朝野房／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店／大売捌所 東京市京橋区新富町 百華書房／東京市神田区橋本町 朝野書店／売捌所 東京 神田 東京堂／銀座 北隆館／神田 上田屋／神田 勉強堂／尾張町 東海堂／本石町 至誠堂／大伝馬町 文林堂／日本橋 林平／全国 大坂 杉本書店／同 盛文館／同 田村書店／京都 東枝律書房／名古屋 星野書店／同 百架堂／久留米 菊竹書店／函館 大盛堂／札幌 富貴堂／小樽 川南書店／旭川 村上書店／弘前 今泉書店／秋田 石川書店／新潟 万松堂／長岡 目黒書店／同 覚張書店／松本 高美書店／上諏訪 日新堂／甲府 柳正堂／同 朗月堂／甲府 徴古堂／前橋 煥乎堂／金沢 宇都宮書店／高岡 学海堂／広島 友田書店／同 積善館／同 田中文友堂／熊本 金書堂／鹿児島 久永書店／磐城平 清水屋書店／印刷所 大川屋印刷所」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

敵三十三間堂 一卷一冊

【著編者】錦城斎貞玉（講演）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】香鯨主人【画工】不詳【奥付】「明治四十四年十一月十七日廿五版印刷／明治四十四年十一月廿一日廿五版發行／（明治卅二年十月廿八日印刷）明治卅二年十一月三日發行」
／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／

発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

塚原卜伝 一卷一冊

【著編者】神田小伯山（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】千万夢堂主人【画工】不詳【奥付】「明治四十四年十一月十八日廿五版印刷／明治四十四年十一月廿二日廿五版發行／（明治廿九年七月五日内務省許可）明治廿九年八月三日逓信省認可」
／編輯者 東京市神田区田代町九番地 岡田常三郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

遠山左衛門尉 一卷一冊

【著編者】松林伯知（講演）・三橋凶南女（速記）【序年・序者】明治二十六年・日吉堂主人【画工】不詳【奥付】「明治四十四年十一月廿七日十版印刷／明治四十四年十一月三十日十版發行／（明治二十九年四月五日印刷）明治二十九年四月十二日發行」
／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

俳句自在 一巻一冊

【著編者】桃支庵指直（校閲）・白日庵守朴（編纂）【序年・序者】明治二十七・白日庵守朴【奥付】「明治四十四年十二月十日廿六版印刷／明治四十四年十二月十四日廿六發行／〔明治二十七年二月五日印刷〕」／著者 東京市本郷区元富坂町十二番地 長瀬市太郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

上州 狭客 大前田英五郎 一巻一冊

【著編者】宝井琴陵（講述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】明治二十九・秋月桂水【画工】不詳【奥付】「明治四十四年十二月十日印刷／明治四十四年十二月十五日發行／〔明治四十年十月卅日六版印刷〕」／講演者 宝井琴陵／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。明治二十九年（一八九六）七月一日発行の朗月堂版を求版。

明治四十五年（一九一三） 壬子

塩原多助一代記 一巻一冊

【著編者】三遊亭円朝（演述）・若林珪蔵（筆記）【序年・序者】三遊亭円朝【画工】月岡芳年【奥付】「明治十七年十二月一日版權免許／明治三十四年五月一日印刷発行／明治三十五年九月五日廿一版発行／明治三十五年十一月十五日廿二版発行／明治三十六年四月十日廿三版発行／明治三十七年十月十七日廿四版発行／明治三十八年十二月五日廿五版発行／明治三十九年十月廿八日廿六版発行／明治四十年四月廿一日廿七版発行／明治四十年十一月十日廿八版発行／明治四十一年九月十五日廿九版発行／明治四十二年三月一日三十版発行／明治四十二年十月十日卅一版発行／明治四十三年三月十五日卅二版発行／明治四十三年十一月廿八日卅三版発行／明治四十四年三月一日卅四版発行／明治四十五年一月十九日卅五版発行／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

少年 教育 修身はなし 歴史の巻 一巻一冊

【著編者】文廼家主人【画工】不詳【奥付】「明治四十五年二月一日印刷／明治四十五年二月五日発行／編輯者 東京市浅草区北元町十

二番地 鈴木源四郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

十銭文庫 14 東海中膝栗毛 後編 一卷一冊

【著編者】十返舎一九【奥付】「明治四十五年二月十五日印刷／明治四十五年二月二十日発行／(定価金十銭 郵税金四銭)」／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 同市京橋区山下町二十二番地 牛坂三郎／印刷所 同市芝区愛宕下町二丁目五番地 邦文社／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店／大売捌所 東京市神田区橋本町 朝野書店／売捌所 東京 神田 東京堂／銀座 北隆館／神田 上田屋／浅草 岡村／尾張町 東海堂／日本橋 至誠堂／日本橋 文林堂／日本橋 林平／全国 大坂 杉本書店／同 盛文館／同 田村書店／京都 東枝律書房／同 山中書店／名古屋 星野書店／同 百架堂／久留米 菊竹書店／函館 大盛堂／札幌 富貴堂／小樽 川南書店／同 左文字書店／旭川 村上書店／弘前 今泉書店／青森 成田書店／仙台 金港堂書店／秋田 石川書店／新潟 万松堂／長岡 目黒書店／同 覚張書店／松本 高美書店／上諏訪 日新堂／甲府 柳正堂／同 朗月堂／甲府 徴古堂／高崎 小林書店／前橋 煥乎堂／水戸 川又書店／金沢 宇都宮書店／高岡 学海堂／広島 友田書店／同 積善館／同 田中文友

堂／熊本 金書堂／鹿児島 久永書店／磐城平 清水屋書店」
天下 豪傑 後藤又兵衛 一卷一冊

【著編者】春桜亭小三(講演)・広雄次郎(速記)【序年・序者】春桜亭小三【画工】後藤芳景【奥付】「明治四十五年二月二十日三十版印刷／明治四十五年二月廿四日三十版発行／(明治三十年七月十九日印刷 明治三十年七月廿四日発行)」／講演者 広雄次郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

十銭文庫 15 訓蒙日本外史 自卷壹至卷五 一卷一冊

【著編者】大槻誠之(解)・長田徳鄰(校)【序年・序者】百華書房主人【奥付】「明治四十五年三月廿三日印刷／明治四十五年三月廿八日発行／(定価金十銭 郵税金四銭)」／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店／大売捌所 東京市神田区橋本町 朝野書店／売捌所 東京 神田 東京堂／銀座 北隆館／神田 上田屋／浅草 岡村／尾張町 東海堂／日本橋 至誠堂／日本橋 文林堂／日本橋 林平／全国 大坂 杉本書店／同 盛文館／同 田村書店／京都 東枝律書房／同 山中書店／名古屋 星野書店／同 百架堂／久留米

菊竹書店／函館 大盛堂／札幌 富貴堂／小樽 川南書店／同 左
文字書店／旭川 村上書店／弘前 今泉書店／青森 成田書店／仙
台 金港堂書店／秋田 石川書店／新潟 万松堂／長岡 目黒書店
／同 覚張書店／松本 高美書店／上諏訪 日新堂／甲府 柳正堂
／同 朗月堂／甲府 徴古堂／高崎 小林書店／前橋 煥乎堂／水
戸 川又書店／金沢 宇都宮書店／高岡 学海堂／広島 友田書店
／同 積善館／同 田中文友堂／熊本 金書堂／鹿児島 久永書店
／磐城平 清水屋書店】【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とあ
る。

十銭文庫 16 訓蒙日本外史 自卷之六至卷之十四 一卷一冊

【著編者】大槻誠之（解）・長田徳鄰（校）【序年・序者】百華書房主
人【奥付】「明治四十五年四月三十日印刷／明治四十五年五月五日
発行／（定価金十銭）
（郵税金四銭）／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地
大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷
所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大
川屋書店／大売捌所 東京市神田区橋本町 朝野書店／売捌所 東
京 神田 東京堂／銀座 北隆館／神田 上田屋／浅草 岡村／尾
張町 東海堂／日本橋 至誠堂／日本橋 文林堂／日本橋 林平／
全国 大坂 杉本書店／同 盛文館／同 田村書店／京都 東枝律
書房／同 山中書店／名古屋 星野書店／同 百架堂／久留米 菊
竹書店／函館 大盛堂／札幌 富貴堂／小樽 川南書店／同 左文

字書店／旭川 村上書店／弘前 今泉書店／青森 成田書店／仙台
金港堂書店／秋田 石川書店／新潟 万松堂／長岡 目黒書店／
同 覚張書店／松本 高美書店／上諏訪 日新堂／甲府 柳正堂／
同 朗月堂／甲府 徴古堂／高崎 小林書店／前橋 煥乎堂／水戸
川又書店／金沢 宇都宮書店／高岡 学海堂／広島 友田書店／
同 積善館／同 田中文友堂／熊本 金書堂／鹿児島 久永書店／
磐城平 清水屋書店】【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

岩見武勇伝 二卷二冊

【著編者】不詳【序年・序者】其徳堂雪村【画工】尾形月耕【奥付】
「明治四十五年六月十五日印刷／明治四十五年六月二十日発行／
（明治二十年二月五日印刷）
（明治二十年二月八日発行）／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川
錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所
同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店】【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

大正元年（一九一二） 壬子

元和三勇士伝 一卷一冊

【著編者】大原武雄【序年・序者】酔柳閑人【画工】後藤芳景・尾形
月耕【奥付】「大正元年八月十五日七十八版印刷／大正元年八月十八

日七十八版発行／〔明治廿四年三月廿九日印刷
明治廿四年十二月十二日再版印刷〕／編輯者 東京市小

石川区指ヶ谷町百四十番地 大原武雄／発行者 東京市浅草区三好
町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎
清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町
七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」
とある。

十銭文庫 20 句殿実々記 一卷一冊

【著編者】曲亭馬琴【序年・序者】文化五・杏林百痴【奥付】「大正
元年九月十八日印刷／大正元年九月廿五日発行／〔定価金十銭
郵税金四銭〕／編
輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京
市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所
／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店／大売捌所 東
京市神田区橋本町 朝野書店／売捌店 東京 神田 東京堂／銀座
北隆館／神田 上田屋／浅草 岡村／尾張町 東海堂／本石町
至誠堂／大伝馬町 文林堂／日本橋 林平／全国 大坂 杉本書店
／同 盛文館／同 田村書店／京都 東枝律書房／同 山中書店／
名古屋 星野書店／同 百架堂／久留米 菊竹書店／函館 大盛堂
／札幌 富貴堂／小樽 川南書店／同 左文字書店／旭川 村上書
店／弘前 今泉書店／青森 成田書店／仙台 金港堂書店／秋田
石川書店／新潟 万松堂／長岡 目黒書店／同 覚張書店／松本
高美書店／上諏訪 日新堂／甲府 柳正堂／同 朗月堂／甲府 微

古堂／高崎 小林書店／前橋 煥乎堂／水戸 川又書店／金沢 宇
都宮書店／高岡 学海堂／広島 友田書店／同 積善館／同 田中
文友堂／熊本 金書堂／鹿児島 久永書店／磐城平 清水屋書店
【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

十銭文庫 21 訓蒙日本外史 自卷之十五至卷之二十一 一卷一冊

【著編者】大槻誠之（解）・長田徳鄰（校）【序年・序者】百華書房
主人【奥付】「大正元年九月廿八日印刷／大正元年十月五日発行／
〔定価金十銭
郵税金四銭〕／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉
／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所
大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店
／大売捌所 東京市神田区橋本町 朝野書店／売捌所 東京 神田
東京堂／銀座 北隆館／神田 上田屋／浅草 岡村／尾張町 東
海堂／日本橋 至誠堂／日本橋 文林堂／日本橋 林平／全国 大
坂 杉本書店／同 盛文館／同 田村書店／京都 東枝律書房／同
山中書店／名古屋 星野書店／同 百架堂／久留米 菊竹書店／
函館 大盛堂／札幌 富貴堂／小樽 川南書店／同 左文字書店／
旭川 村上書店／弘前 今泉書店／青森 成田書店／仙台 金港堂
書店／秋田 石川書店／新潟 万松堂／長岡 目黒書店／同 覚張
書店／松本 高美書店／上諏訪 日新堂／甲府 柳正堂／同 朗月
堂／甲府 微古堂／高崎 小林書店／前橋 煥乎堂／水戸 川又書
店／金沢 宇都宮書店／高岡 学海堂／広島 友田書店／同 積善

館／同 田中文友堂／熊本 金書堂／鹿児島 久永書店／磐城平
清水屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

宮本左門武勇伝 一卷一冊

【著編者】真龍齋貞水（講述）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】吞
鯨主人【画工】不詳【奥付】「大正元年十月十三日廿五版印刷／大
正元年十月十七日廿五版発行／（明治三十年三月九日印刷）
（明治三十年三月十二日発行）／編輯兼発
行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草
区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行
所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥
付に「MADE IN JAPAN」とある。

檜山相馬大作忠勇伝 一卷一冊

【著編者】竹のや鳴雀（講述）・速記会会員（速記）【序年・序者】明
治二十・夢香仙史【画工】不詳【奥付】「大正元年十月廿一日三十版
印刷／大正元年十月廿四日三十版発行／（明治二十三年二月五日印刷）
（明治二十三年二月八日出版）／
講演者 竹のや鳴雀／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠
吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同
所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

十銭文庫22 訓蒙日本外史 自卷之二十二至卷之二十八 一卷一冊

【著編者】大槻誠之（解）・長田徳鄰（校）【序年・序者】百華書房
主人【奥付】「大正元年十二月一日印刷／大正元年十二月六日発行
／（定価金十銭）
（郵税金四銭）／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川
錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所
同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋
書店／大売捌所 東京市神田区橋本町 朝野書店／売捌所 東京
神田 東京堂／銀座 北隆館／神田 上田屋／浅草 岡村／尾張町
東海堂／日本橋 至誠堂／日本橋 文林堂／日本橋 林平／全国
大坂 杉本書店／同 盛文館／同 田村書店／京都 東枝律書房
／同 山中書店／名古屋 星野書店／同 百架堂／久留米 菊竹書
店／函館 大盛堂／札幌 富貴堂／小樽 川南書店／同 左文字書
店／旭川 村上書店／弘前 今泉書店／青森 成田書店／仙台 金
港堂書店／秋田 石川書店／新潟 万松堂／長岡 目黒書店／同
覚張書店／松本 高美書店／上諏訪 日新堂／甲府 柳正堂／同
朗月堂／甲府 徴古堂／高崎 小林書店／前橋 煥乎堂／水戸 川
又書店／金沢 宇都宮書店／高岡 学海堂／広島 友田書店／同
積善館／同 田中文友堂／熊本 金書堂／鹿児島 久永書店／磐城
平 清水屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

大岡 豊川利生記 一卷一冊
政談

【著編者】末広亭辰丸（講演）・速記会会員（速記）【序年・序者】明治三
十二・江東の隠士【画工】不詳【奥付】「大正元年十二月二十日廿五版

印刷／大正元年十二月廿四日廿五版發行／〔明治三十二年三月十三日印刷〕
／口演者 東京市神田区神保町二番地 秦弥三松／發行者 東京市
浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四
番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅
草区三好町七番地 聚榮堂 大川屋書店】【備考】奥付に「MADE
IN JAPAN」とある。

大正二年（一九一三） 癸丑

十銭文庫 25 訓蒙日本外史 自卷之二十九至卷之三十五 一卷一冊

【著編者】大槻誠之（解）・長田德鄰（校）【序年・序者】百華書房
主人【奥付】「大正二年二月十八日印刷／大正二年二月廿五日發行
／〔定価金十銭〕／郵税金四銭」／編輯兼發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川
錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所
同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋
書店／大売捌所 東京市神田区橋本町 朝野書店／売捌所 東京
神田 東京堂／銀座 北隆館／神田 上田屋／浅草 岡村／尾張町
東海堂／日本橋 至誠堂／日本橋 文林堂／日本橋 林平／全国
大坂 杉本書店／同 盛文館／同 田村書店／京都 東枝律書房
／同 山中書店／名古屋 星野書店／同 百架堂／久留米 菊竹書
店／函館 大盛堂／札幌 富貴堂／小樽 川南書店／同 左文字書

店／旭川 村上書店／弘前 今泉書店／青森 成田書店／仙台 金
港堂書店／秋田 石川書店／新潟 万松堂／長岡 目黒書店／同
覚張書店／松本 高美書店／上諏訪 日新堂／甲府 柳正堂／同
朗月堂／甲府 徴古堂／高崎 小林書店／前橋 煥乎堂／水戸 川
又書店／金沢 宇都宮書店／高岡 学海堂／広島 友田書店／同
積善館／同 田中文友堂／熊本 金書堂／鹿児島 久永書店／磐城
平 清水屋書店】【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

敵葛の葉 一卷一冊

【著編者】邑井一（口演）・加藤由太郎（速記）【序年・序者】吞鯨
主人【画工】豊川秀静【奥付】「大正二年三月廿七日廿五版印刷／
大正二年三月卅一日廿五版發行／〔明治三十二年四月廿五日印刷〕
／〔明治三十二年四月廿八日發行〕／編輯
者 東京市浅草区南元町十七番地 鈴木与八／發行者 東京市浅草
区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町二十四番
地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草
区三好町七番地 聚榮堂 大川屋書店】【備考】奥付に「MADE IN
JAPAN」とある。

木曾道中膝栗毛 一卷一冊

【著編者】十返舎一九【画工】不詳【奥付】「大正二年四月一日印刷
／大正二年四月八日發行／〔定価金五十銭〕／編輯兼發行者 東京
市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町二

十六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 東京大川書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

客 清水の次郎長 一巻一冊

【著編者】内藤加我【序年・序者】兎薄居士【画工】落合芳幾【奥付】「大正二年五月七日再版印刷／大正二年五月十日再版発行／〔明治廿七年五月十八日印刷〕」／編輯者 東京市日本橋区通三丁目十三番地 内藤加我／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

三国九尾伝 一巻一冊

【著編者】双龍斎貞鏡（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】柳煙散史【画工】不詳【奥付】「明治三十一年七月二日印刷／明治三十一年七月七日発行／大正二年五月十五日再版印刷／大正二年五月十八日再版発行／講演者 東京市日本橋区久松町三十五番地 早川吉郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

仇討関口弥太郎武勇伝 一巻一冊

【著編者】香風園【序年・序者】香風園【画工】不詳【奥付】「大正二年五月廿八日印刷／大正二年六月一日発行／〔明治四十五年四月五日印刷〕」／編輯者 講談文庫編輯部／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

客 国定忠次 一巻一冊

【著編者】宝井馬琴（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】竹蔭居士【画工】不詳【奥付】「大正二年七月一日拾五版印刷／大正二年七月五日拾五版発行／〔明治卅二年三月十日印刷〕」／編輯者 東京市京橋区南横町十二番地 鈴木金輔／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

小 弘法大治郎 前編 一巻一冊

【著編者】竹の島人【序年・序者】①大正二・佐藤独嘯②大正二・松

田竹嶼【画工】不詳【奥付】「大正二年七月十日印刷／大正二年七月十八日発行／著者 竹の島人／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町 大川屋書店／鈴木金真堂」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

御曹子牛若丸 一卷一冊

【著編者】放牛舎桃林（講演）・石原明倫（速記）【序年・序者】吞鯨主人【画工】尾形月耕【奥付】「大正二年八月三日再版印刷／大正二年八月六日再版発行／〔明治三十五年八月五日印刷〕／講演者 東京市下谷区竹町十二番地 放牛舎桃林／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

説小高遠城 前編 一卷一冊

【著編者】竹の島人【序年・序者】大正二・松田竹嶼【画工】不詳【奥付】「大正式年九月十九日印刷／大正式年九月二十日発行／著者 竹の島人／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿番地 川崎清三／印刷所 全所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店」

新祝賀弔祭文集 一卷一冊

【著編者】宮本宗太郎【序年・序者】①榎堂逸史②宮本宗太郎【奥付】「大正二年十月一日印刷／大正二年十月五日発行／定価金四十五銭／編者 宮本宗太郎／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市芝区愛宕下町二丁目五番地 牛坂三郎／印刷所 東京市芝区愛宕下町二丁目五番地 邦文社／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

説小弘法大治郎 後編 一卷一冊

【著編者】竹の島人【序年・序者】大正二・竹の島人【画工】不詳【奥付】「大正二年十月五日印刷／大正二年十月十日発行／著者 竹の島人／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店／鈴木金真堂」

復讐美談 岩見重太郎伝 一卷一冊

【著編者】双龍齋貞鏡（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨主人【画工】不詳【奥付】「大正二年十一月廿七日廿七版印刷／大正二年十二月一日廿七版発行／〔明治二十九年四月一日印刷〕／講演者

双龍齋貞鏡事 早川与吉／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

小高遠城 後編 一卷一冊

【著編者】竹の島人【序年・序者】大正二・竹の島人【画工】不詳【奥付】「大正二年十二月十五日印刷／大正二年十二月十八日発行／著者 竹の島人／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 全所 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店」

十銭文庫 32 訂正太平記（一） 一卷一冊

【著編者】大槻誠之（解）・長田徳鄰（校）【序年・序者】馬淵安定【奥付】「大正二年十二月二十日印刷／大正二年十二月廿五日発行／（定価金十銭）／郵税金四銭）／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店／売捌所 東京 神田 東京堂／銀座 北隆館／神田 上田屋／浅草 岡村／尾張町 東海堂／日本橋 至誠堂／日本橋 文林堂／今川橋 大洋堂／全国 大坂 岡本偉業堂／同 盛文館／同 田村

書店／京都 東枝律書房／同 山中書店／名古屋 星野書店／同 百架堂／長浜 文泉堂／久留米 菊竹書店／函館 大盛堂／札幌 富貴堂／小樽 川南書店／小樽 左文字書店／旭川 村上書店／弘前 今泉書店／青森 成田書店／秋田 石川書店／新潟 万松堂／長岡 目黒書店／同 覚張書店／松本 高美書店／甲府 柳正堂／同 朗月堂／同 徴古堂／高崎 小林書店／前橋 煥平堂／水戸 川又書店／金沢 宇都宮書店／高岡 学海堂／広島 友田書店／同 積善館／同 田中文友堂／熊本 金書堂／鹿児島 久永書店／磐城平 清水屋書店／横須賀 軍港堂【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

大正三年（一九一四） 甲寅

正直屑屋 一卷一冊

【著編者】富増正蔵（作）・伊原青々園（補）【画工】光厓【奥付】「大正三年一月一日印刷／大正三年一月五日発行／著者 伊原青々園／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行者 東京市浅草区三好町七番地 東京大川書店」

宇都宮騒動 一卷一冊

【著編者】足立庚吉【序年・序者】伊東橋塘【画工】石齋国保【奥付】「大正三年二月十三日廿五版印刷／大正三年二月十七日廿五版發行／（明治二十三年一月十五日印刷）／（明治二十三年一月十八日發行）」／飛刻者 東京市小石川区指ヶ谷町十七番地 足立庚吉／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

小説 小醫八万石 前編 一卷一冊

【著編者】渡辺黙禪【序年・序者】渡辺黙禪【画工】不詳【奥付】「大正三年二月廿五日印刷／大正三年三月一日發行／著者 渡辺黙禪／發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店」

浪花 義士雪の曙 一卷一冊

【著編者】桃中軒雲右衛門【画工】不詳【奥付】「大正三年五月一日印刷／大正三年五月五日發行／編輯兼發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 東京大川書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

桃中軒 雲右衛門 一節集 一卷一冊

【著編者】桃中軒雲右衛門【画工】不詳【奥付】「大正三年五月一日印刷／大正三年五月五日發行／編輯兼發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 東京大川書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

吉田 奈良丸 一節集 一卷一冊

【著編者】吉田奈良丸【画工】不詳【奥付】「大正三年五月一日印刷／大正三年五月五日發行／編輯兼發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 東京大川書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

東家 樂遊 一節集 一卷一冊

【著編者】東家樂遊【画工】不詳【奥付】「大正三年五月一日印刷／大正三年五月五日發行／編輯兼發行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／發行所 東京市浅草区三好町七番地 東京大川書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

袖珍大川文庫 塙団右衛門 一卷一冊

【著編者】桃川燕林（口演）【序年・序者】大正三・好生逸人【画工】

不詳【奥付】「大正三年六月五日再版印刷／大正三年六月八日再版

発行／明治卅一年九月廿日印刷
全年十月一日發行講演者 桃川燕林／発行者 東京市浅草

区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市芝区愛宕下町二丁目五

番地 牛坂三郎／印刷所 全所 邦文社／発行所 東京市浅草区三

好町七番地 大川屋書店」

源平盛衰記 四卷四冊

【著編者】松林伯円（講演）・今村次郎（速記）【序年・序者】吞鯨主

人【画工】不詳【奥付】「大正三年六月十三日三版印刷／大正三年

六月十七日三版発行／（明治三十年六月四日印刷
明治三十年六月七日發行）講演者 東京市京橋

区木挽町五丁目四番地 伯円事 若林義行／発行者 東京市浅草区

三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地

川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三

好町七番地 東京大川書店【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」

とある。

小説 小醫八万石 後編 一卷一冊

【著編者】渡辺黙禪【序年・序者】渡辺黙禪【画工】不詳【奥付】「大

正三年七月八日印刷／大正三年七月十二日発行／著者 渡辺黙禪／
発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅
草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発
行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店」

十銭文庫 35 訂正太平記（二） 一卷一冊

【著編者】大槻誠之（解）・長田徳鄰（校）【序年・序者】百華書房
主人【奥付】「大正三年七月十七日印刷／大正三年七月廿二日発行

／（定価金十銭
郵税金四銭）編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川

錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所

同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋

書店／売捌所 東京 神田 東京堂／銀座 北隆館／神田 上田屋

／浅草 岡村／尾張町 東海堂／日本橋 至誠堂／日本橋 文林堂

／今川橋 大洋堂／全国 大坂 岡本偉業堂／同 盛文館／同 田

村書店／京都 東枝律書房／同 山中書店／名古屋 星野書店／同

百架堂／長浜 文泉堂／久留米 菊竹書店／函館 大盛堂／札幌

富貴堂／小樽 川南書店／小樽 左文字書店／旭川 村上書店／

弘前 今泉書店／青森 成田書店／秋田 石川書店／新潟 万松堂

／長岡 目黒書店／同 覚張書店／松本 高美書店／甲府 柳正堂

／同 朗月堂／同 徴古堂／高崎 小林書店／前橋 煥乎堂／水戸

川又書店／金沢 宇都宮書店／高岡 学海堂／広島 友田書店／

同 積善館／同 田中文友堂／熊本 金書堂／鹿児島 久永書店／

磐城平 清水屋書店／横須賀 軍港堂】【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

頭書
季寄 発句古人五百題 一卷一冊

【著編者】夜雪庵金羅（校訂）・竹林舎狐狗狸（編述）【序年・序者】
曠旭庵龜足【奥付】「大正三年八月三日二十版印刷／大正三年八月七日二十版発行／〔明治三十一年六月七日印刷 明治三十一年六月十二日発行〕」／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店】【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

大正四年（一九一五） 乙卯

塩原多助一代記 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（演述）・若林珪蔵（筆記）【序年・序者】三遊亭円朝【画工】月岡芳年【奥付】「明治十七年十二月一日版權免許／明治三十四年五月一日印刷発行／明治三十五年九月五日廿一版発行／明治三十五年十一月十五日廿二版発行／明治三十六年四月十日廿三版発行／明治三十七年十月十七日廿四版発行／明治三十八年十二月五日廿五版発行／明治三十九年十月廿八日廿六版発行／明治四十

年四月廿一日廿七版発行／明治四十年十一月十日廿八版発行／明治四十一年九月十五日廿九版発行／明治四十二年三月一日三十版発行／明治四十二年十月十日卅一版発行／明治四十三年三月十五日卅二版発行／明治四十三年十一月廿八日卅三版発行／明治四十四年三月一日卅四版発行／明治四十五年一月十九日卅五版発行／大正元年八月十五日卅六版発行／大正二年五月五日卅七版発行／大正三年一月十三日卅八版発行／大正四年五月十日卅九版発行／発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店】【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

大正五年（一九一六） 丙辰

八千代文庫 第十四編 糸平内 一卷一冊

【著編者】怒涛庵（述）・吉住正明（速記）【画工】不詳【奥付】「大正五年六月廿一日印刷／大正五年七月一日発行／〔定価金十七銭 郵税金四銭〕」／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第十六編 東台武蔵屋初五郎 一卷一冊

【著編者】小金井芦洲（講演）【画工】不詳【奥付】「大正五年八月

一日印刷／大正五年八月五日発行／〔定価金十七錢 郵税金四錢〕／編輯所 八千

代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠

吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同

所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂

大川屋書店」

大正喜楽文庫 剣舞術指南 一卷一冊

【著編者】衝冠居士【画工】不詳【奥付】「大正五年九月一日印刷／

大正五年九月五日発行／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地

大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印

刷所 東京市浅草区南元町廿六番地 大川屋印刷所／発行所 東京

市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店／定価金二十錢／郵税

金四錢」

八千代文庫 第二十一編 大岡政談 おとわ丹七 一卷一冊

【著編者】清草舎英翁（講演）【画工】不詳【奥付】「大正五年十月

十五日印刷／大正五年十月二十日発行／〔定価金十七錢 郵税金四錢〕／編輯所

八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大

川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所
同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄
堂 大川屋書店」

八千代文庫 第二十二編 檜山騷動 相馬大作 一卷一冊

【著編者】邑井吉瓶（講演）・今村次郎（速記）【画工】不詳【奥付】

「大正五年十一月一日印刷／大正五年十一月五日発行／〔定価金十七錢 郵税金四錢〕

／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町

七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清

三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七

番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「製本 梅沢 組版

カワサキ」とある。

八千代文庫 第二十三編 俠天保水滸伝 一卷一冊

【著編者】秦々斎桃葉（講演）・今村次郎（速記）【画工】不詳【奥付】「大

正五年十一月十五日印刷／大正五年十一月二十日発行／〔定価金十七錢 郵税金四錢〕

／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町

七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清

三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七

番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第二十四編 梅川忠兵衛 一卷一冊

【著編者】桃川燕林（講演）・今村次郎（速記）【画工】不詳【奥付】
「大正五年十二月一日印刷／大正五年十二月五日発行／（定価金十七銭）
／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町
七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清
三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七
番地 聚栄堂 大川屋書店」

大正六年（一九一七） 丁巳

八千代文庫 第二十六編 寛政力士出世揃 一卷一冊

【著編者】伊東陵潮（講演）【画工】不詳【奥付】「大正五年十二月
廿五日印刷／大正六年一月一日発行／（定価金十七銭）
／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川
錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所
同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店」

八千代文庫 第二十八編 寛政有馬の怪猫 一卷一冊

【著編者】伊東陵潮（講演）・今村次郎（速記）【画工】不詳【奥付】
「大正六年一月十五日印刷／大正六年一月二十日発行／（定価金十七銭）
／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町

七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清
三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七
番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第二十九編 大岡豊川利生記 一卷一冊

【著編者】末広亭辰丸（講演）・速記社社員（速記）【画工】不詳【奥
付】「大正六年二月一日印刷／大正六年二月五日発行／（定価金十七銭）
／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町
七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清
三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七
番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第三十編 柳生旅日記 一卷一冊

【著編者】桃川燕林（講演）・中村卓三（速記）【画工】不詳【奥付】
「大正六年二月十五日印刷／大正六年二月二十日発行／（定価金十七銭）
／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町
七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清
三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七
番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第三十一編 柳沢騒動 一卷一冊

【著編者】 邑井一（講演）・加藤由太郎（速記）【画工】 不詳【奥付】
「大正六年三月一日印刷／大正六年三月五日発行／（定価金十七銭）／
郵税金四銭」
編輯所 八千代文庫編集部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七
番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三
／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番
地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第五編 妖術鼠小僧 一卷一冊

【著編者】 松林伯円（講演）・酒井昇造（速記）【画工】 不詳【奥付】
「大正五年一月廿一日印刷／大正五年一月廿七日発行／大正五年三
月廿五日再版発行／大正五年九月二十日三版発行／大正六年一月四
日四版発行／大正六年三月二十日五版発行／（定価金十七銭）／編輯
所 八千代文庫編集部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地
大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印
刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地
聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第三十三編 寛永勇士馬術書 一卷一冊

【著編者】 宝井馬琴（講演）・今村次郎（速記）【画工】 不詳【奥付】
「大正六年三月三十日印刷／大正六年四月五日発行／（定価金十七銭）
／編輯所 八千代文庫編集部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町
七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清

三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七
番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第三十四編 黒田栗山大膳 一卷一冊

【著編者】 桃川如燕（講演）・今村次郎（速記）【画工】 不詳【奥付】
「大正六年四月十五日印刷／大正六年四月二十日発行／（定価金十七銭）
／編輯所 八千代文庫編集部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町
七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清
三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七
番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第三十八編 大槻内蔵之助 一卷一冊

【著編者】 桃川如燕（講演）【画工】 不詳【奥付】「大正六年六月十
五日印刷／大正六年六月二十日発行／（定価金十七銭）／編輯所 八
千代文庫編集部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川
錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所
同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂
大川屋書店」

八千代文庫 第三十九編 狭野狐三次 一卷一冊

【著編者】 真龍齋貞水（講演）【画工】 不詳【奥付】「大正六年七月

一日印刷／大正六年七月七日発行／〔定価金十九銭 郵税金四銭〕／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第四十編 怪談乳房榎 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（講演）【画工】不詳【奥付】「大正六年七月十五日印刷／大正六年七月二十日発行／〔定価金十九銭 郵税金四銭〕／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第四十一編 金比羅 田宮坊太郎 一卷一冊

【著編者】双龍斎貞鏡（講演）・今村次郎（速記）【画工】不詳【奥付】「大正六年八月一日印刷／大正六年八月五日発行／〔定価金十九銭 郵税金四銭〕／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第四十二編 紀伊国屋文左衛門 一卷一冊

【著編者】邑井一（講演）【画工】不詳【奥付】「大正六年八月十五日印刷／大正六年八月二十日発行／〔定価金十九銭 郵税金四銭〕／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第四十三編 元和三勇士 一卷一冊

【著編者】青龍斎貞峰（講演）【画工】不詳【奥付】「大正六年九月一日印刷／大正六年九月五日発行／〔定価金十九銭 郵税金四銭〕／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第四十四編 後開様名 元和三勇士 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（講演）【画工】不詳【奥付】「大正六年九月十五日印刷／大正六年九月二十日発行／〔定価金廿三銭 郵税金四銭〕／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所

同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第四十五編

後開襟名
の梅が香

恒川半三郎 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（講演）【画工】不詳【奥付】「大正六年十月一日印刷／大正六年十月五日発行／（定価金廿三銭）／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第四十六編 河内山 一卷一冊

【著編者】松林伯円（講演）【画工】不詳【奥付】「大正六年十月十五日印刷／大正六年十月二十日発行／（定価金廿三銭）／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第四十七編

大岡政談

畦倉重四郎 一卷一冊

【著編者】桃川如燕（講演）【画工】不詳【奥付】「大正六年十一月

一日印刷／大正六年十一月五日発行／（定価金廿三銭）／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第四十八編 寛永日本三馬術 一卷一冊

【著編者】桃川如燕（講演）・今村次郎（速記）【画工】不詳【奥付】「大正六年十一月十五日印刷／大正六年十一月二十日発行／（定価金廿三銭）／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

大正七年（一九一八） 戊午

みやこ文庫 第二編

骨

馬丁丹次 一卷一冊

【著編者】安岡夢郷【画工】不詳【奥付】「大正七年一月一日印刷／大正七年一月一日発行／（定価金三十五銭）／編輯所 みやこ文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／発行所 東京市浅草区

三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店／印刷所 大川屋印刷所

八千代文庫 第五十一編 客 狭十文字秀五郎 一卷一冊

【著編者】青龍齋貞峰（講演）【画工】不詳【奥付】「大正七年一月一日印刷／大正七年一月五日発行／〔定価金廿三銭〕／〔郵税金四銭〕」／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

八千代文庫 第五十二編 婦 侠巴の小方 一卷一冊

【著編者】青龍齋貞峰（講演）【画工】不詳【奥付】「大正七年一月十五日印刷／大正七年一月廿日発行／〔定価金廿三銭〕／〔郵税金四銭〕」／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

八千代文庫 第五十三編 熊野 霊験 つづら権兵衛 一卷一冊

【著編者】桃川燕林（講演）【画工】不詳【奥付】「大正七年二月一日印刷／大正七年二月五日発行／〔定価金廿三銭〕／〔郵税金四銭〕」／編輯所 八千代

文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

八千代文庫 第二十編 堀部安兵衛 一卷一冊

【著編者】伊東潮花（口演）・一ツ穴の貉（速記）【画工】不詳【奥付】「大正五年十月一日印刷／大正五年十月五日発行／大正六年一月七日再版発行／大正六年四月廿三日三版発行／大正六年九月十七日四版発行／大正七年二月二十日五版発行／〔定価金廿三銭〕／〔郵税金四銭〕」／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

八千代文庫 第五十五編 鏡ヶ池 操松影 江島屋騒動 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（講演）・若林珪蔵（速記）【画工】不詳【奥付】「大正七年三月一日印刷／大正七年三月五日発行／〔定価金廿三銭〕／〔郵税金四銭〕」／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「製版所 深見」とある。

八千代文庫 第十五編 東台新蔵兄弟 一卷一冊
俠客

【著編者】小金井廬州（講演）・天沼雄吉（速記）【画工】不詳【奥付】「大正五年七月七日印刷／大正五年七月十二日発行／大正五年十一月十日再版発行／大正六年三月六日三版発行／大正六年八月廿八日四版発行／大正七年三月五日五版発行／（定価金廿三銭）／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第三十五編 塩原多助 一卷一冊

【著編者】三遊亭円朝（遺稿）【画工】不詳【奥付】「大正六年五月一日印刷／大正六年五月五日発行／大正六年十月廿五日再版発行／大正七年三月五三版発行／（定価金廿三銭）／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿四番地 小宮定吉／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第五十六編 元和三勇士後日譚 一卷一冊

【著編者】邑井貞吉（講演）【画工】不詳【奥付】「大正七年三月十

五日印刷／大正七年三月二十日発行／（定価金廿三銭）／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第五十七編 東海日本左衛門 一卷一冊
白浪

【著編者】田辺大龍（講演）【画工】不詳【奥付】「大正七年五月一日印刷／大正七年五月五日発行／（定価金廿三銭）／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第五十八編 宇和島騒動 一卷一冊

【著編者】放牛舎桃湖（講演）・今村次郎（速記）【画工】不詳【奥付】「大正七年六月一日印刷／大正七年六月五日発行／（定価金廿三銭）／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」【備考】奥付に「製版所 深見」とある。

八千代文庫 第五十九編 討 仇刺客観音丹次 一卷一冊

【著編者】末広亭辰丸（講演）【画工】不詳【奥付】「大正七年七月一日印刷／大正七年七月五日発行／〔定価金廿三銭〕／郵税金四銭」／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「製版所 深見」とある。

八千代文庫 第六十編 おこん貢 一卷一冊

【著編者】桃川燕林（講演）・今村次郎（速記）【画工】不詳【奥付】「大正七年八月一日印刷／大正七年八月五日発行／〔定価金廿五銭〕／郵税金四銭」／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店【備考】奥付に「製版 牛坂」とある。

八千代文庫 第六十一編 安部晴明 一卷一冊

【著編者】秦々斎桃葉（講演）【画工】不詳【奥付】「大正七年九月一日印刷／大正七年九月五日発行／〔定価金廿五銭〕／郵税金四銭」／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同

所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

八千代文庫 第六十四編 赤義士銘々伝 一卷一冊

【著編者】邑井一（講演）【画工】不詳【奥付】「大正七年十二月一日印刷／大正七年十二月五日発行／〔定価金廿五銭〕／郵税金四銭」／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

大正八年（一九一九） 己未

八千代文庫 第六十七編 阿部孝子之仇討 一卷一冊

【著編者】春錦亭柳桜（講演）【画工】不詳【奥付】「大正八年三月一日印刷／大正八年三月五日発行／〔定価金廿五銭〕／郵税金四銭」／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店

みやこ文庫 第七編 後の女警部 一巻一冊

【著編者】無名氏【画工】不詳【奥付】「大正七年八月十五日印刷／大正七年八月二十日発行／大正八年五月三日再版発行／〔定価金四十銭〕
／編輯所 みやこ文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店／印刷所 大川屋印刷所」【備考】架蔵本には定価の横に「改正定価金五十銭」という印がみられる。

八千代文庫 第六十九編 柳川芸州広島大仇討 一巻一冊

【著編者】柴田薫（講演）・時事新報社員（速記）【画工】不詳【奥付】「大正八年五月一日印刷／大正八年五月五日発行／〔定価金廿五銭〕／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第七十一編 成田利生記 桂川力蔵 一巻一冊

【著編者】桃川如燕（講演）・時事新報社員（速記）【画工】不詳【奥付】「大正八年七月一日印刷／大正八年七月五日発行／〔定価金廿五銭〕／編輯所 八千代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町

七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

大正九年（一九二〇） 庚申

さくら文庫 忍術獅子丸虎丸 一巻一冊

【著編者】高山義山【画工】不詳【奥付】「大正八年十二月卅一日印刷／大正九年一月五日発行／編輯者 桜文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川屋書店」

浪界大家競演集 一巻一冊

【著編者】雲井北斗（編）【奥付】「大正九年六月廿一日印刷／大正九年六月廿五日発行／編輯者 雲井北斗／発行者 東京市下谷区仲徒町一丁目六番地 関由蔵／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋印刷所／専売所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店／定価金四十五銭」

みやこ文庫 第十八編 海賊房次郎 一巻一冊

【著編者】みやこ文庫編輯所【画工】不詳【奥付】「大正九年七月十日印刷／大正九年七月十五日発行／〔定価金五十五銭〕／編輯所 みやこ文庫編輯所／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店／印刷所 大川屋印刷所」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

大正十年（一九二一） 壬戌

さくら文庫 長編真田 忍術名人揃 一巻一冊 講談閣著

【著編者】高山義山【画工】不詳【奥付】「大正十年七月五日印刷／大正十年七月十一日発行／（定価金二十銭）／編輯所 さくら文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 大川屋第一印刷部／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

八千代文庫 第三十五編 塩原多助 一巻一冊

【著編者】三遊亭円朝（遺稿）【画工】不詳【奥付】「大正六年五月一日印刷／大正六年五月五日発行／〔定価金卅五銭〕／編輯所 八千

代文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同所 大川屋第一印刷部／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店」

大正十一年（一九二二） 壬戌

みやこ文庫 第十五編 福村中佐 一巻一冊

【著編者】安岡夢郷【画工】不詳【奥付】「大正八年六月十五日印刷／大正八年六月二十日発行／大正十一年六月十五日三版発行／〔定価金五十五銭〕／編輯所 みやこ文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書店／印刷所 大川屋第一印刷部」【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

柳文庫 第廿五編 尊き嗚呼小野さつき子 一巻一冊 犠牲

【著編者】流月【序年・序者】大正十一・流月【画工】不詳【奥付】「大正十一年八月七日印刷／大正十一年八月十三日発行／編輯所 柳文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 川崎清三／印刷所 同

所 大川屋第一印刷部／発行所 東京市浅草区三好町七番地 大川
屋書店】【備考】奥付に「MADE IN JAPAN」とある。

大正十四年（一九二五） 乙丑

さくら文庫

長編忍術
講談大活動

猿飛佐助

一卷一冊

【著編者】高山義山【画工】不詳【奥付】「大正十四年六月七日印刷
／大正十四年六月十四日発行／（定価金二十銭）／編輯所 さくら
文庫編輯部／編輯兼発行者 東京市浅草区三好町七番地 大川錠吉
／印刷者 東京市浅草区南元町廿六番地 小宮定吉／印刷所 大川
屋印刷部／発行所 東京市浅草区三好町七番地 聚栄堂 大川屋書
店」

(参考) 第二十三回大川屋出版小説総目録 (明治三十二年八月改正増訂)

架蔵する『第二十三回 大川屋出版小説総目録』は、明治三十二年

(二八九九) 八月に改正・増訂され発行された大川屋錠吉の目録である(図25)。寸法は縦二十二・一糎×横十四・九糎。全二十四頁。後ろ

表紙に「毎年一回改正ヲ行ヒ時々之ヲ増補スベシ」とあることから、改正・増補版を含めて年に複数冊発行されたようである。

内容は、「菊判小説ノ部」「講談百種」「金字入洋綴之部」「洋綴稗史小説之部」に分類された書籍の書名・著編者・価格を記したものである。なお、後ろ表紙に「大川屋出版目録ノ実価ハ郵税共ニ有之候」とあるように、記載されているのは送料込みの価格となっている。

(表紙)

第二十三回

明治三十二年八月改正増訂

大川屋出版小説総目録

聚栄堂 東京市浅草区三好町 大川屋錠吉

(見返し)

繪本
南総 里見八犬伝 帙入全八冊 曲亭馬琴著 金貳円五十錢

繪入平仮名 通俗日本外史 全三冊 金八拾五錢

訓蒙日本外史 帙入全七冊 東陽大槻誠之解 簡齋長田徳鄰校 全九

拾五錢

訂正 繪入太平記 全三冊 金九拾五錢

(本文)

●大川屋出版書目録 菊判小説ノ部

都新聞探偵実話

● 俠芸者

● 笠森団子

● 蒲鉾屋殺シ

全二冊 七十錢

全二冊 七十錢

全二冊 七十錢

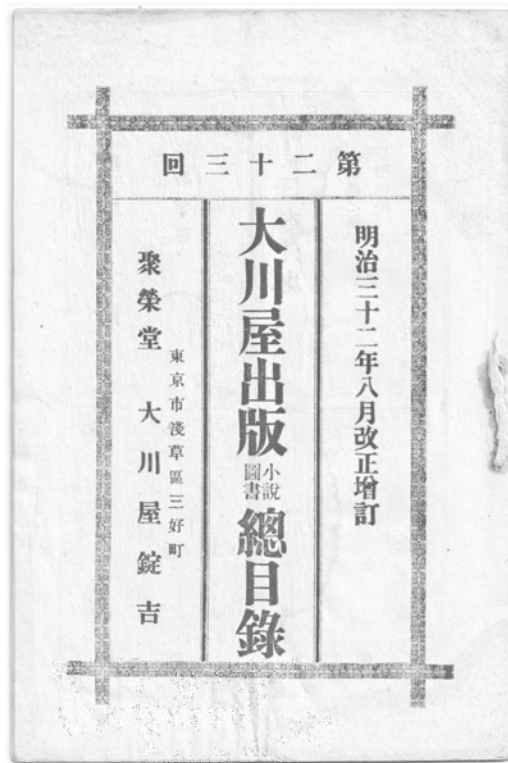


図 25 架蔵本の表紙

● 大悪僧	全一冊	卅五錢
● 鼠小僧	全二冊	六十錢
● 南京松	全一冊	卅五錢
● 海賊房次郎	全二冊	五十八錢
● 蝮のお政	全三冊	八十錢
● 五寸釘寅吉	全三冊	八十錢
榎本破笠著 ● 探偵小説黒眼鏡		廿八錢
二葉著 ● 探偵小説夜刃婦人		廿八錢
● 探偵小説人之妻		廿二錢
省軒外史著 ● 探偵小説月夜犯罪		廿錢
英人ブラツク演 ● 探偵車中ノ毒針		廿錢
春桜亭小三口演 ● 探偵小説小野清司		廿八錢
● 探偵小説お茶水婦人殺		十五錢
松林伯知口演 ● 探偵小説空屋美人		廿二錢
笠園主人訳 ● 探偵小説記留物		廿五錢
● 探偵小説小岩村夫殺し		十一錢
● 大詐欺師千坂光子		卅八錢
涙香小史著 ● 有罪無罪		廿八錢
同著 ● 玉手箱		廿八錢
同著 ● 妾之罪		廿八錢
同著 ● 決闘ノ果		廿五錢
同著 ● 銀行ノ賊		廿一錢

同著●片手美人	廿七錢	同●大岡村井長庵 全二編	四十五錢
同著●梅花郎	廿一錢	同●大岡畔倉重四郎 裁判	三十二錢
同著●人耶鬼耶	廿五錢	同●大岡柳生旅日記	廿二錢
三遊亭円朝口演●操鏡女学校	廿二錢	同●両面藤三郎	廿二錢
三遊亭円朝口演●業平文治漂流奇談	卅五錢	同●毛剃九右衛門 全二冊	四十五錢
同●栗田口霑笛竹 (下)	廿八錢	同●真柄十郎左衛門	十八錢
同●鏡ヶ池操松影	卅三錢	同●大岡後藤半四郎 裁判	廿錢
同●菊模様千代亀鑑	卅三錢	同●大岡栗山大膳忠誠録	廿五錢
同●敵討霞初しま	廿三錢	同●怪談小はだ小平次	十六錢
同●松之操美人生埋	十八錢	同●徳川外伝流ノ遺浪 (下)	廿二錢
同●萩江一節	十八錢	同●加賀騷動大槻内蔵之助 全二冊	卅五錢
同●松と藤芸者替紋	十九錢	同●大岡越後伝吉 裁判	廿五錢
同●雨夜之引窓	十八錢	同●大岡嵯峨之夜桜 全二冊	卅五錢
同●蝦夷錦	廿一錢	同●鳴門奇談舟幽壺	廿八錢
三遊亭円朝口演●鶴殺疾刃庖刀	十八錢	同●徳川源氏梅ノ香	廿五錢
同●熱海土産温泉利書	廿二錢	同●浮沈梅柳新話	廿五錢
同●敵討札所靈験	廿二錢	同●怪談小町娘	廿五錢
同●欧州小説黄蔷薇	十五錢	同●河内山	廿五錢
同●雪月花一題噺	廿二錢	同●天保怪鼠伝 全冊	四十五錢
同●円朝子ノ伝	廿錢	同●松林伯知口演●真土村焼討騷動	廿五錢
同●大岡煙草屋喜八 裁判	廿五錢	同●松林伯知口演●遠山左衛門尉	廿五錢
同●大岡富田屋政談 裁判	廿五錢	同●山田長政遠征記	廿五錢
同●大岡富田屋政談 裁判	廿五錢		

邑井吉瓶口演●檜山麒麟一声	卅錢	同●天保水滸伝	卅五錢
邑井一口演● <small>本町五福屋政談</small> 全三冊	四十錢	柴田薰口演●日蓮記	卅五錢
同●玉菊灯籠	廿錢	柴田南玉口演●暮鐘森之騷動	廿五錢
同●紀伊国屋文左衛門	廿五錢	神田伯山口演● <small>大岡天一坊</small> 裁判	四十二錢
放牛舎桃湖口演●真影流名人 塚原卜伝 全三冊	四十五錢	同● <small>宮本</small> 両雄伝	三十五錢
同●塚原左伝	廿七錢	清草舎英翁口演●明石の斬捨	二十五錢
同●一刀齋伊東弥五郎	廿五錢	同● <small>大岡おとわ丹七</small> 裁判	二十五錢
同●柳生但馬守	廿六錢	宝井馬琴口演●俠客国定忠次	二十六錢
真龍齋貞水口演●山田真龍軒	廿五錢	双龍齋貞鏡講演●田宮坊太郎	廿五錢
同●野狐三次	廿六錢	松林円玉口演●木鼠吉五郎	廿三錢
放牛舎桃林●水戸紀州尾州 三家三勇士	廿錢	伊東湖花口演●楠千早籠城	十七錢
同●復讐裏見佳吉	廿錢	錦城齋貞玉口演●平井権八一代記	十七錢
同●山本貞婦伝	廿五錢	双龍齋貞鏡口演●沖田二子仇討	十七錢
一立齋文車口演●日本三馬術	廿六錢	南新二著●釣葱	二十錢
同●元和三勇婦	廿五錢	幸堂得知著●剛胆義婦	二十錢
同●小間物屋彦兵衛	廿二錢	太華山人著●雪おとし	十八錢
春風亭柳桜口演●江戸美人	廿二錢	春の屋著 ^(マ) おぼろ著●当世書生氣質	四十五錢
同●遠藤万五郎	廿五錢	古川新水著●実録泉島吉	廿二錢
三遊亭円生口演●友千鳥	廿二錢	採菊山人著●残花恨ノ葉桜	四十錢
揚名舎桃李口演●森家三勇士	廿二錢	同●三人令嬢	廿二錢
葵齋桃葉口演●安倍晴明	廿五錢	同●都佳人	廿二錢
同● <small>大岡</small> 数原檢校 裁判	廿二錢	春風亭柳枝口演●小夜嵐吉原奇談	廿三錢

曲亭馬琴著●夢物兵衛胡蝶物語	廿六錢	清艸舎英昌講演●藤堂評定録	同
同●南総里見八大伝 一冊物	卅六錢	前田貞利口演●石川五右門奇賊伝	同
同●皿々郷談	十九錢	錦城斎貞朝口演●政談鶴ノ一節	同
同●伊勢松坂扇屋怪談	十七錢	揚名舎桃李口演●俠客国定忠次伝	同
花廼家蘭厓著●肥後駒下駄	廿錢	此外新版続々出版仕り候	
伊東橋塘編輯●女天一花園お蝶	二十錢		
●講談百種			
伊東湖花口演●南北兩朝大合戦	十五錢	骨川道人著●滑稽五笑楽	二十錢
桃川如燕口演●小野川真実伝	同	同●滑稽席上演説	二十錢
放牛舎桃林口演●堀部安兵衛伝	同	同●滑稽独演説	卅錢
藜々斎桃葉口演●大久保川勝政談	同	●滑稽和合人	廿二錢
桃川如燕口演●寛永名士馬術誉	同	●七編人 <small>(マ)</small>	十八錢
邑井吉瓶口演●忠孝常世物語	同	●明治浮世風 <small>(マ)</small>	二十錢
揚名舎桃玉口演●桃川庄八義侠伝	同	桃水著●電三吉	二十錢
邑井吉瓶口演●檜山麒麟一声 全三冊	同	同●伊達模様 小助実伝	十八錢
桃川燕林口演●浪花五人切	同	●元和三勇士	廿五錢
伊東湖瓊口演●仙石家騒動記	十五錢	●洪川流名誉柔術	廿五錢
松林伯円口演●烈女お照ノ伝	同	● <small>浅尾</small> 真実競 <small>岩切</small>	二十錢
伊東燕雀口演●信藩小堀騒動	同	●徳川十五代記	卅錢
双龍斎貞鏡口演●菅公御実伝記	同	●絵本関ヶ原軍記	卅錢
邑井一口演●豊臣明智山崎合戦	同	●通俗呉越軍談	卅五錢

● 通俗漢楚軍談	卅五錢
● 通俗武王軍談	卅五錢
● 參考義士銘々伝 全二冊	卅五錢
● 繪本楠公記	卅五錢
● 真田三代記 全二冊	四十五錢
● 石山軍記	卅錢
● 繪本源平盛衰記	卅錢
● 敵討鶯塚美談	十二錢
● 暁天星五郎	二十二錢
● 荒木又右衛門	二十四錢
● 怪化百物語	二十錢
● 政治小説 芳園の嗽芽	二十錢
● 対の雪笹	二十錢
● 雨後の明月	二十錢
● 十人婦人氣質 十色	十七錢
● 人情美談思の種	十七錢
● 明治義戦 征清軍記	二十二錢
● 近世桜田記聞	二十錢
● 尼子十勇士伝	二十五錢
● 名譽の花	二十錢
● 大日本八雄伝 全三冊	四十錢
● 鼠小僧実記	十五錢

● 金字入洋綴之部

● 大久保武蔵鑑	卅五錢
● 繪本岩見武勇伝	卅二錢
● 一休諸国物語	二十五錢
● 水戸黄門仁徳録	二十二錢
● 佐倉義民伝	二十二錢
● 繪本大阪軍記	三十錢
● 繪本大岡政談 全四冊	九十錢
● 人情虎ノ巻	二十五錢
● 繪本徳川十五代記 本	二十五錢
● 七ふしぎ狐ノお楽	二十五錢
● 釈迦御実伝記	三十三錢
● 岡山奇聞	十二錢
● 松本智恵伊豆	二十錢
● 伊達騒動記	二十二錢
● 南総里見八犬伝 全四冊	壹円廿錢
● 同 二冊揃	九十錢
● 増大岡政談 補	六十錢
● 重修真書太閤記	壹円也
● 繪本真田三代記	四十錢
● 新選近世外史	卅五錢

●洋綴稗史小説之部

●訓蒙日本外史	九十銭	金字入上	●参考義士銘々伝	廿五銭
●訂正絵本太平記	九十銭	同中	●参考義士銘々伝	二十銭
●通俗日本外史	八十銭		●貞操婦女八賢誌	二十銭
●赤穂義士銘々伝	二十五銭	松林伯田口演	●天保六歌撰	廿五銭
			●五人小僧噂の白浪	廿五銭
●元和三勇士	廿五銭		●大岡二十八件合本	十八銭
●水戸 尾州 紀州 三家三勇士伝	十八銭		●大岡五件合本	十五銭
●石川五右衛門	十五銭		●大岡天一坊之件 政談	十五銭
●近世桜田奇聞	十五銭		●全越後伝吉	十二銭
●絵本柳荒美談	十八銭		●全畔倉重四郎之伝	十五銭
●鎌倉星月夜頭晦録	廿七銭		●全小間彦兵衛之伝 物屋	十二銭
●絵本石山軍記	廿三銭		●全村井長庵の件	十五銭
●絵本楠公記	廿三銭		●全煙草屋喜八	十四銭
●水戸黄門仁徳録	十五銭		●全安間小金次	十三銭
●积迦御実伝記	十五銭		●宗泉寺馬場仇討	十二銭
●絵本源平盛衰記	廿三銭		●佐野常世物語	十三銭
●黒田騒動箱崎文庫	十八銭		●常夏双紙	十三銭
●伊達頭秘録	二十銭		●稻妻双紙	十三銭
●絵本増補大坂軍記	廿五銭		●桜姫曙双紙	十三銭
●暁天星五郎賊侠传	五十銭		●敵討高田馬場 小夜波之音信 千鳥	十五銭
			●貞婦之鑑神日本	十五銭

● 新編天保水滸伝	十三銭	● 平井権八一代記	七銭五厘
● 島田梅雨日記 一郎	十五銭	● 浅尾岩切真実競	十銭
● 鼠小僧実記	十五銭	● 佐倉義民伝	十二銭
● 岡山奇聞	十三銭	● 大久保彦左衛門	十二銭
● 絵本中山実記	九銭	● 宇都宮騒動記	十二銭
● 明治噂の高松 小僧	十三銭	● 松前屋五郎衛門	九銭
● 敵討鶯墳美談	十五銭	● 大久保彦左衛門	三十銭
● 愛宕山馬術勲	十三銭	● 筑波水滸伝	十三銭
● 絵本甲越軍記	十三銭	● 殺生石後日怪談	十六銭
● 滑稽和合人	廿二銭	● 赤徳参考内侍所 精義	廿四銭
● 同七編人 (マ)	十三銭	● 絵本川中島軍記	十三銭
● 国貞忠治実伝	十五銭	● 絵本鎌倉三代記	廿八銭
● 月謡荻江の一節	十二銭	● 絵本徳川十五代記	十八銭
● 絵本通俗漢楚軍談	卅六銭	● 同灘波戦記 (マ)	十一銭
● 絵本通俗武王軍談	卅三銭	● 実説名画血達磨	十五銭
● 造化懐妊論	十銭	● 武蔵坊弁慶物語	十五銭
● 谷中延命院実記 騒動	十銭	● 忠孝朝顔日記 美談	十五銭
● 曾我物語	十三銭	● 敵討白石噺	十三銭
● 笹野権三名鎗伝	十三銭	● 繪山相忠勇伝 馬大作	十三銭
● 弁天小僧	十三銭	● 忠孝名刀正宗伝 美談	十三銭
● 児雷也豪傑物語	十五銭	● 田村三代記	十三銭
● 沖田二子仇討 (マ)	九銭	● 尼子十勇士伝	十五銭

● 一休諸国物語	二十銭
● 絵本岩見武勇伝	二十銭
● 絵本高木武勇伝	十二銭
● 絵本荒川武勇伝	拾二銭
● 春の家先生 ● 当世書生氣質	三十銭
● 通俗経国美談	二十銭
● 涙香小史訳 ● 片手美人	三十銭
● 同 ● 梅花郎	三十五銭
● 桃水痴史 ● 電三吉	廿五銭
● 童謡妙々車	卅九銭
● 骨皮道人著 ● 上等 佳言 娯目数誌	十六銭
● 春風亭柳枝口演 ● 小夜嵐吉原奇談	廿二銭
● 滑稽自慢演説	十一銭
● 谷間の鶯	十六銭
● 骨皮道人 ● 滑稽独演説正統	十八銭
● 滑稽哲学雷笑演説	十三銭
● 美人のわな	十六銭
● 新杜鵑	全
● 美人の魂	全
● 雪裏の佳人	全
● 女権之反対	全
● 明治貴女鑑	全

● 佳人	全
● 孤島の明月	十六銭
● 八変子	全
● 情の淵	全
● みさを	全
● 蓮華草	全
● 珍事のはきよせ	全
● 百花魁	全
● 絵本流球軍談	廿二銭

● 近日元和三勇士後日譚 出版

● 勝安房君題字

● 海江田君題字

● 三好中将君題字

● 嘉納治五郎君序

● 天神真揚流

● 柔術極意教授図解 全壹冊

● 吉田千春先生 合著
磯又右衛門先生

● 榊原鍵吉君跋文

● 正価四拾銭

● 東陽大槻誠之解 ● 啓蒙国史略 全三冊	卅五銭
-----------------------	-----

保田安政著 ● 家庭商人百夜草 全二冊

卅五錢

● 金傑叢談 全一冊

廿錢

● 日本婚禮式大全 全二冊

二十錢

● 實地日用百科要法 全一冊

廿一錢

● 評論徳川世記 全一冊

廿三錢

● 新發明 染色法 半紙本一冊物
實地經驗

廿五錢

● 奧好義編 儀式唱歌

七錢

● 東京百事流行案内

二十錢

西村天外道人著 ● 日本立志編

貳拾錢

● 曲亭馬琴纂輯 ● 俳借歲時記

卅六錢

● 俳諧発句自在

廿錢

● 明治 大家万吟集

廿錢

● 繪入 寄季手引草 全二冊

廿二錢

● 芭蕉発句集 全二冊

拾五錢

● 俳諧 掌中ノ手提灯

拾貳錢

● 和歌八重垣

廿二錢

新撰裁縫教科書 全三冊 四拾錢

高等女学校長野恰君校閱

高等女学校 裁縫科教師長谷川弁子編述

● 改正日本民法 附戸籍法

廿錢

● 民事訴訟法正文

十二錢

● 刑事訴訟法正文

十二錢

● 大日刑法定文

六錢

● 大日本六法全書

廿五錢

● 刑法訴訟法注釈

廿五錢

● 民事訴訟法注釈

廿五錢

● 民刑訴訟必携

廿二錢

● 市町村制注解

十九錢

● 囲碁精要 全二冊

十九錢

● 囲碁捷徑 全二冊

十九錢

● 囲碁秘伝集

十五錢

天野大人伝授 ● 新版 高等将棋秘訣

十五錢

濱島流水大人著 ● 三十日將棋独習新法

十五錢

● 活花字飛学 全三冊

廿錢

● 活花手引草 全二冊

十五錢

久永先生書 ● 楷書千字文

卅五錢

● 行書千字文

三錢

● 隸書千字文

卅五錢

佐瀬得所先生 ● 真草千字文

廿錢

菱潭卷先生書 ● 頭書消息往来

廿五錢

久永先生書 ● 習字いろは帖

十二錢

● 文明商売往来

八錢

● 文明消息往来	八錢	● 小学女用文	十三錢
● 首訓 両仮名千字文	廿七錢	● 明治算術新書	一冊合本四十錢 五冊全五十錢 三冊全卅五錢 二 全廿五錢
七体伊呂波			
● 名頭尽 習字本	七錢		
日本国尽			
● 農家文証大成 全三冊	七十五錢	● 開化塵効記早割	上二十錢 中十五錢 並拾錢
● 英語入十五伊呂波	十錢		
● 大工番匠往来	八錢		
● 仮名実語教童子教	八錢		
● 仮名当流小うたい	八錢		
● 両点商売往来	八錢		
● 両点消息往来	八錢		
● 改正消息往来	十錢		
● 増字			
小田切東沢書 ● 開化用文大成	十五錢	● 算盤早伝授	廿錢
● 男女改良用文	廿錢	● 和算法通便	拾錢
		● 洋算独稽古	十二錢
西森武城著 ● 新撰用文独稽古	十二錢	● 開化大全早引節用	九十錢
● 日用作文独学	十二錢	● 新刻 眞草早引節用	廿二錢
● 書読		● 伊呂波早引節用集	十二錢
● 活益新選大成	十二錢	● 明治万通節用集	十三錢
● 実地作文指南	十二錢	● 明治 眞草早引節用	廿二錢
● 活用作文独稽古	十二錢	● 新刻 万通節用集	十三錢
● 日用往復新選	十二錢	● 東京明治玉編	十五錢
● 祝辞作文大全	十八錢	● 新撰東京玉編	十五錢
● 論説		● 新撰東京字林玉編	十五錢
西森武城著 ● 作文いろは字引	十七錢	● 春山画譜 全三冊	廿錢
● 当世女用文章	十二錢		

● 狂歌富士百景画譜	十五銭	● 八門遁甲或問鈔	十銭
● 浮世漫画	十五銭	● 方角即考	十二銭
● 暁斎百鬼画譜	廿五銭	● 家相方位早和かり	十二銭
● 万物雛形画譜 全二冊	廿五銭	● 南北秘伝人相早引	十五銭
● 花鳥画譜	十五銭	● 明治改刻 阿弥陀經 和訓図会 全三冊	卅銭
● 漢画図式	十二銭	● 明治改刻 般若心經和訓図会	廿銭
● 万物工業画譜	十五銭	● 後藤先生学正 五経 片仮名付全六冊	四十銭
● 新刻万物画譜	十五銭	● 四書 片仮名付全二冊	十七銭
● 日本歴史画譜	十五銭	● 四書 片仮名付全四冊	十五銭
● 新選万職雛形 全二冊	十五銭	● 四書 片仮名付切付	十銭
● 百工美術画譜	十銭	● 小倉百人一首	十銭
● 古今模様鑑	十銭	● 寿玉百人一首 大本	廿銭
● 集古図譜	十銭	● 永代大雑書三世相	上廿五銭 中十五銭 並十銭
● 吾妻がた	廿銭		
● 明治詩語粹 ^(マ) 全四冊	五十銭		
● 詩文詳解 山陽詠史選	十銭	● 新撰二二天作 早割	八銭
● 袖珍唐詩選	八銭	● 尺八 八雲琴 曲譜独稽古	十三銭
● 当世初心雛形	十二銭	● 帝国劍舞	十銭
● 当世番匠雛形	十銭	● 勇壯劍舞	十銭
● 番匠秘事雛形	十三銭	● 人相指南 全二冊	十三銭
● 明治大工土蔵雛形 新選	十三銭	● 独占易学指南 判断	十五銭
● 八門九星初学入門	十二銭		

岡本半溪先生著

草花盆栽培養法 全一冊
木竹 正価三十銭

同
後 草花木竹栽培秘録 全一冊
編 正価卅五銭

世に接木花卉の栽培書少なからずと雖とも皆な学者の空論にあらざれば旧式の古書なり西説に拘泥するものは翻訳書にして日本皆無の草花の栽培を述べ旧式のものには迂遠の法を説く能く両者を斟酌して実用に供するものは本書を措て他にあらざらむ幸に一本を座右に備へて四季の友とせられよ

保田安政著

家庭教育 商人百夜草 全二冊 上下揃
教育 正価金四拾銭

本書を説く所の科目は大凡そ左の如し

商業地理 商業算術 商業法規 商業要訣

商業歴史 商業通信 商業慣習 商業簿記

経済学 商品学 豪商伝

其他一般商業上の事項なりとす

本書は極めて平易通俗の口調を以て続き物語の結構と為し一回一回益々佳境に入り夜一夜愈々興味を添ふるの間に商家の子弟其他一般の幼年者に向ひ商業上一通りの智識を授くるの目的を以て著述せるものなり

(後ろ見返し)

天城安政著 金傑叢談 全壹冊 正価金廿銭

緒言

人に勝れて金を儲くる者は、其東西、古今、男女、老少の別なく、商、工、農、官、儒、医、王、侯、将、相に論なく、必らず人に勝れたる行為のあるに相違なし、本書は即ち是等の人物百五十余名の行為を德行、勤儉、胆略、機慧、雑門の五類に分ちて集録し、以て青
つゞき

年貨殖家の心得となさんと欲するの目的を以て編撰せるものなり。

読者乞ふ、本書を以て彼の商人伝、実業家列伝の如く過去帳、碑文、系図、戸籍帳、公用履歴書を読むと一般の感あるものと、同一視する勿れ。

明治廿五年九月 著者識

注意

讀みて徳行と益あるは勤儉

讀みて胆略と面白きは機慧

而して

一粒千金の価あるは即ち雑門と嘉言

(後ろ表紙)

大川屋出版目録ノ実価ハ郵税共ニ有之候間右御承知ノ上御注文ヲセフ
但シ金高壹円以下ハ郵券代用ニテモヨロシ

大川屋出版目録ハ毎年一回改正ヲ行ヒ時々之ヲ増補スベシ
大川屋出版目録ハ二銭郵券封入申込アラバ無代価ニテ進呈スベシ

第三章

貸本文化の変容とその諸相

第一節 貸本屋の諸相

はじめに

近世前期の誕生から、貸本屋は教養と娯楽のための書籍を人々に提供し続けた。明治・大正と時代が変わっても、見料と引き替えに書籍を貸し出す従来の方法は踏襲されたが、その営業形態や蔵書内容は時代とともに、緩やかながらも確実に変容していった。

近世期貸本屋については、長友千代治氏によって明らかにされた部分¹が大きい。長友氏のおこなった貸本屋の歴史やその実態、また蔵書や出版活動に着目した研究は、次第にほかの事例も報告されるようになっており、近世貸本文化研究は着実に前進しているといえる。²だが、長友氏以降それほど前進せず、停滞している分野もある。それは個々の貸本屋の具体的な営業に関する研究である。

そもそも貸本屋の日々の営業を明らかにするのは、史料の残存状況からして困難を極める。それはたいいていの貸本屋が零細な組織であるため、自分たちの記録を長期保存する概念を持ち合わせていなかったことに起因する。よって記録類は役目を終えればすぐに処分されてし

まい、各家には残され難い。運良く現在まで残った記録の大半は、貸本に供された本を補強・補修する際に反古として用いられたものである。反古にされた記録類は、その多くが裁断されバラバラになっているため、非常に扱い難い。しかしながら、断片的であっても貸本屋の日常を写し出す貴重な史料であることには変わりない。

近年、鈴木俊幸氏によって、反古として残された記録類の報告がなされ、貸本屋の日々の営業は明らかになりつつある。³今後も同様に記録類をもとに、一つでも多くの事例を積み重ねていく必要がある。

本稿では、反古として残された記録類をとおして、幕末に営業していた二軒の貸本屋の蔵書内容や営業の実態をみていく。

一、小林某

架蔵の吾妻雄兔子作『真情春雨衣』初編下巻は、貸本屋の当座帳の紙片で全丁裏打ちされている。本書には「小林」という楕円形の墨印⁴以外に旧蔵者の痕跡がみられない。したがって裏打ちされた当座帳は、この小林某のものともみてもまず間違いまいであろう。

貸本屋小林某がどこで営業していたかは不明だが、当座帳は万延二年（一八六二）前後に作成されたものである。裏打ちされた紙片は全部で十八葉。それぞれ少し余白のある部分に二つの綴じ穴がみられる。紙片はいずれも『真情春雨衣』にあわせて裁断された後に貼付されている。

記載された日付をもとに紙片を並び替え、翻字したものを次に示す。なお、翻字に際しては判読できない部分を「□」とし、そのうち文字を推定し得る場合はルビで示した。また、記載された書名や員数から書籍が特定できた場合は、括弧内に日本古籍総合目録データベースに準拠した分類とその書名を追記している。

図 26 上

万延二正月二日	
・奇賊撰	一五
・名残広記	一八
・房綸	一五
・英	一五六十五

（実録『中興奇賊撰』カ）
（実録『敵討名残広記』カ）

・崇禪寺	一ノ五
・仙石	一六
・安明	一五
・見聞志	一五
・箱崎	一五
・金花	一ノ十

図 26 下

□ □ □ □ □	
・天保三編	一ノ十五
・三国志	十一ノ廿
・小田原	二ノ十
・太公 <small>（削除）</small>	一ノ十五
・逃水記	一ノ十五
二日	
・小悦	一五
・天真	六 □
・野藪	一五
・小半	□ 五
・箱崎	六ノ十五
七日	

（読本『繪本金花夕映』）

図 27 上

- ・鎌倉三編 一ノ十
- ・奇賊撰 一五
- ・天下茶屋 十三ノ廿
- ・佐賀三編 一ノ十
- ・鎌倉 三ノ十二 三四五

(実録『中興奇賊撰』カ)

(実録『天下茶屋敵討』カ)

- ・続々史記三編 一ノ十五

- ・天明 一ノ十
- ・栄枯録 十一ノ廿

(実録『鈴木主水栄枯録』カ)

- ・九日 安明 十一ノ廿
- ・越後記 六ノ十五
- ・仙石 七ノ十六

図 27 下

- ・十三日
- ・関ヶ原 一ノ十
- ・浮世情談 一五
- ・太二編 一ノ十
- ・栄枯録 一五
- ・天艸 一ノ十

(実録『鈴木主水栄枯録』カ)

- ・野藪 一ノ五

十四日

- ・崇禪寺 一五
- ・太五編 十二ノ廿四 一ノ三十
- ・同六編 一ノ十
- ・赤穂記 十ノ廿 三十三
- ・栄枯録 一ノ廿

(実録『鈴木主水栄枯録』カ)

図 28 上

- ・小説 三ノ十 一ノ七
- ・真田四編 十五ノ三十
- ・太初 一ノ三十

十七日

- ・天保三編 二ノ五 廿六ノ十五
- ・浮世情談 三ノ十五
- ・水滸伝 十六ノ二十
- ・同三編 一ノ十五 十二ノ廿三 廿四ノ三十
- ・嶋津 十三ノ廿
- ・奇賊撰 一五 六ノ十 廿
- ・難波戦記 三ノ十

(実録『中興奇賊撰』カ)

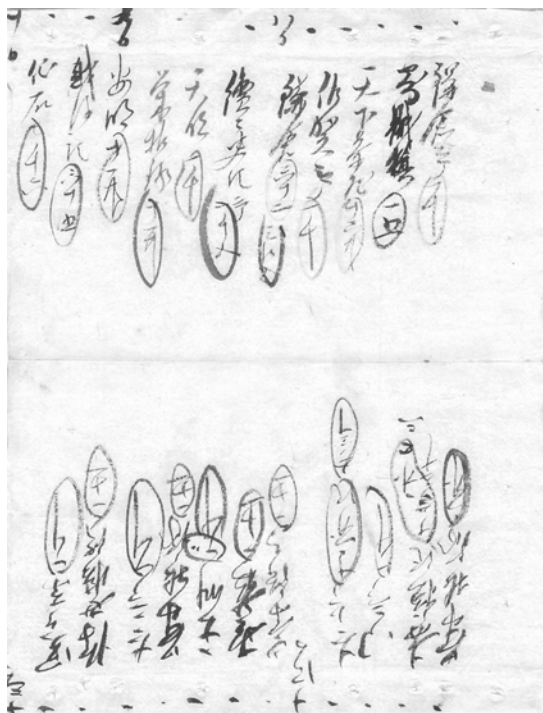


图 27

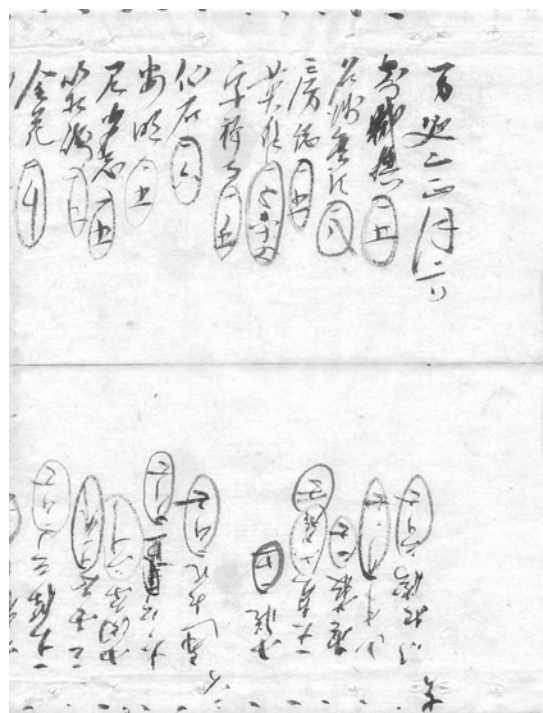


图 26

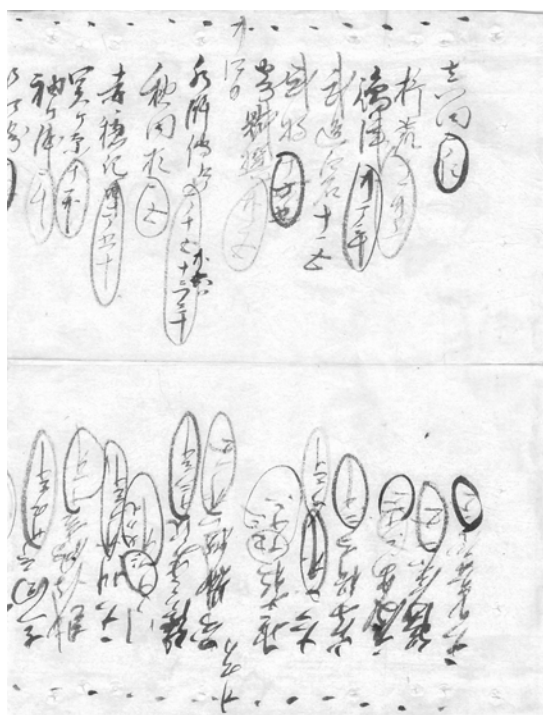


图 29

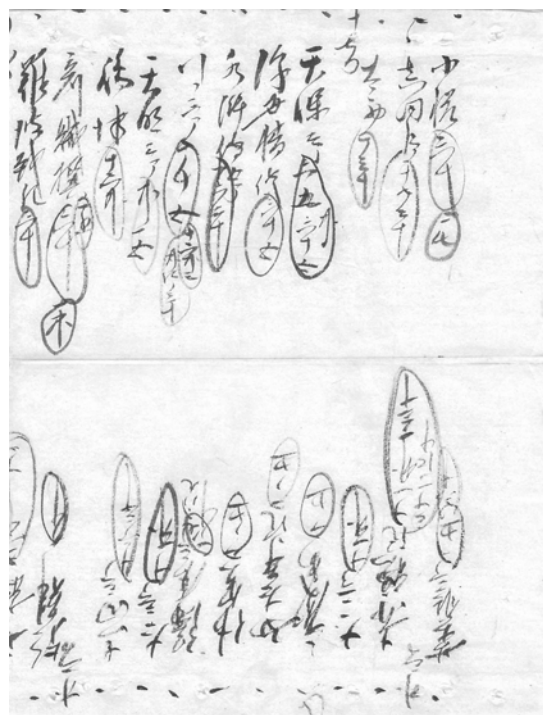


图 28

図28下

野藪 三ノ十〇〇

・頼朝 一ノ十

廿二日

・真田三編 十二ノ三十

・太三ノ編 十一ノ廿

・鎌倉三編 一ノ十 七八九

・佐賀 一ノ五

・女太平記 一ノ五

・慶安 一ノ五

・太二編 十一ノ廿

・赤穂記 十一廿一ノ三十三十一ノ四十

廿三日

・英〇三編 一五 六十

図29上

・真田 一ノ四

・柳荒 十一ノ廿五

・鳴津 廿一ノ三十

・武道白石 十ノ五

・武持 十〇五

(実録『柳荒美談』カ)

(実録『護国女太平記』カ)

図29下

・奇賊撰 廿五

廿四日

・水滸伝四編 一ノ十五廿六〇十三ノ三十

・秋田夜 一五

・赤穂記 四十一ノ五十

・関ヶ原 十一ノ廿

・神ヶ津 一ノ十

・箱崎 〇〇

(実録『中興奇賊撰』カ)

図29下

・真田三編 廿九ノ三十

・越後伝吉 十一ノ廿

・天艸 廿一ノ三十

・同 十一ノ廿 六〇〇

・続々史記 十三ノ三十

・奇賊撰 廿一ノ五

廿九日

・野藪 十ノ十六 五三

・太 一ノ廿 一ノ三十

・崇禅寺 二十

・慶安 六ノ十五

・鎌倉 一五

(実録『中興奇賊撰』カ)

・天下茶屋 一五

(実録『天下茶屋敵討』カ)

図30上

・柳荒二編 一ノ十二

(実録『柳荒美談』カ)

・栄枯録 三ノ十 十一六ノ廿

(実録『鈴木主水栄枯録』カ)

・松井 三ノ十五

・大岡仁 一ノ五

・佐賀 六ノ十

・天保 一五

・逃水記 一五

二月朔日

・真田 一ノ四

・同四編 一ノ十

・太七編 廿 十七ノ三十

・同十編 一ノ十

図30下

□□ 十一ノ廿五

・赤穂記 三ノ五 廿五

・箱崎 一五

・逃水記 三ノ十五

・太二編 十二 一ノ廿

七日

・松井 十六ノ廿

・栄枯録二編 一ノ十

・天艸 廿一ノ三十

・佐賀 十一五

・三国志三編 一ノ十 五

・奥州 十一ノ廿

・柳荒二編 十三ノ廿五

・赤穂記 四十一ノ五十

(実録『鈴木主水栄枯録』カ)

(実録『柳荒美談』カ)

図31上

・続々史記二編 十六ノ三十

・太弐編 廿一ノ三十

・同三編 一ノ十五

・関ヶ原 廿一ノ三十二

八日

・天下茶屋 十一八

・逃水記 一五

・真田四編 十一八

・太初 十一廿一ノ 一ノ三十

(実録『天下茶屋敵討』カ)

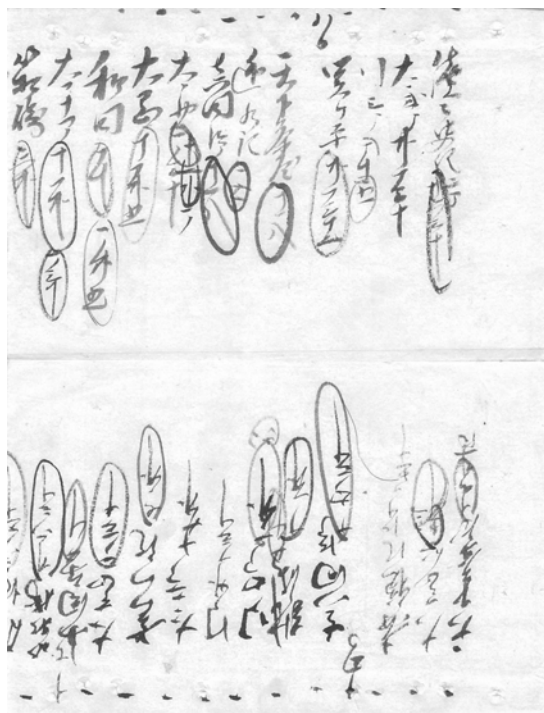


图 31

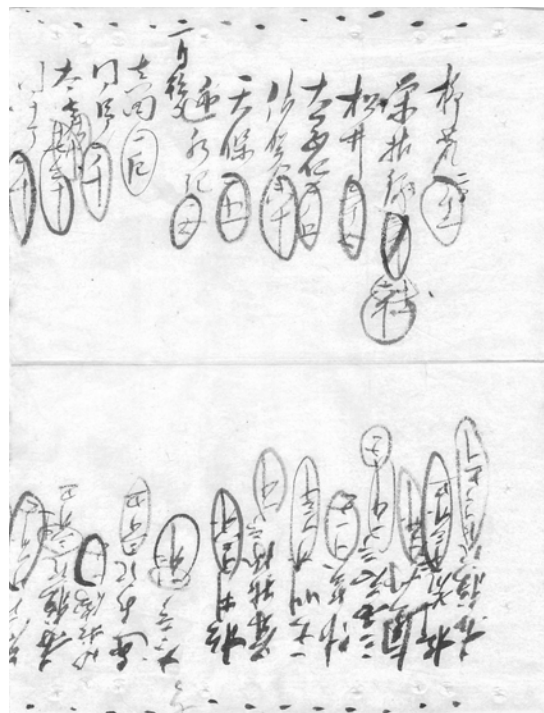


图 30



图 33

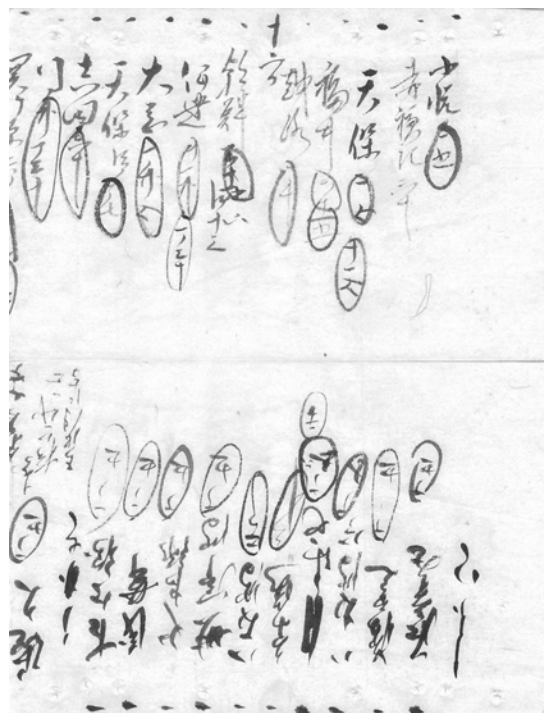


图 32

- ・大岡 十一ノ廿五
- ・和田 一ノ十 一ノ廿五
- ・太十編 十一ノ廿 一ノ三十
- 箱崎 三ノ廿

図31下

- 六ノ三十
- ・箱崎 廿六ノ三十
- 十七日 小田原 一ノ十
- ・大岡 一ノ三十
- ・黄門記 七ノ廿
- ・太二編 十一ノ廿
- ・同廿一ノ三十
- ・同五編 一ノ廿 六
- ・越後 一ノ十 十一ノ廿
- ・真田四編 十五ノ二十
- 十五日
- ・赤穂記 四十一ノ五十
- ・大岡仁 一五 二
- ・天下茶屋 十一ノ廿

図32上

(実録『天下茶屋敵討』カ)

- ・小悦 一五
- ・赤穂記 三ノ十
- ・天保 一五 十二五
- ・福井 六ノ十五
- ・越後 一ノ十
- 十二日
- ・朝鮮 六ノ十五 六四十三
- ・征□ 十一ノ廿 一ノ三十
- ・大岡 一ノ廿五
- ・天保四編 一ノ七
- ・真田四編 六ノ十
- ・同 廿一ノ三十
- ・関ヶ原二編 □□

図32下

- ・腕久 一ノ五
- 十九日
- 腕久一代 一五
- 弓張月 四五編
- 月七日
- ・古今録 一ノ五
- ・浅草 一ノ五

(読本『柳巷話説』)

(読本『柳巷話説』)

(読本『椿説弓張月』)

(読本『絵本浅草靈験記』)

- ・双忠録 一ノ五 (読本『絵本双忠録』)
 - ・妖婦伝 一ノ五 (読本『絵本三国妖婦伝』)
 - ・八犬伝 二編 (読本『南総里見八犬伝』)
 - ・糸桜 六ノ十 (読本『糸桜春蝶奇縁』)
 - ・自来也 一ノ五六 一十〇 (読本『自来也説話』)
 - ・八犬伝八編 一ノ五 (読本『南総里見八犬伝』)
 - ・俊寛 一ノ五 (読本『俊寛僧都鳴物語』)
 - ・石童丸 一ノ五 (読本『石堂丸苜蓿物語』)
- 月八日

図33上

- 八犬伝 初 (読本『南総里見八犬伝』)
 - 神稻 七ノ八 (読本『俊傑神稻水滸伝』)
 - 妖婦伝 初 二編 (読本『絵本三国妖婦伝』)
 - 西遊記 一ノ十 (読本『絵本西遊全伝』)
 - 菊水 三編 (読本『星月夜頭晦録』)
 - 星月夜 二編 (読本『星月夜頭晦録』)
 - 青砥 初 二編 (読本『青砥藤綱摸稜案』)
 - 妖婦伝 十 (読本『絵本三国妖婦伝』)
 - 阿佐倉 初 (読本『忠勇阿佐倉日記』)
- 八月朔日

- ・□□初 五 三編 (以下、下部に記載されている分)
- 七月廿一日
- 八犬伝八編六ノ十 (読本『南総里見八犬伝』)
- 廿〇
- 雪鏡譚 一ノ六 (読本『絵本雪鏡譚』)
- 廿四日
- 和田二十
- 廿九日
- 青砥初
- 糸桜 一五 (読本『糸桜春蝶奇縁』)
- 八犬伝 □□□□ (読本『南総里見八犬伝』)
-

図33下

- ・西遊記 六ノ十 (読本『絵本西遊全伝』)
- ・松浦 五ノ八 (読本『南総里見八犬伝』)
- ・里見 三編 (読本『南総里見八犬伝』)
- ・西遊記三編 一ノ五 六ノ十 (読本『絵本西遊全伝』)
- 九日
- ・妖婦伝 初編 (読本『絵本三国妖婦伝』)
- ・いろは艸紙 一五 (読本『以呂波草紙』)

- ・更科 初 二三編
- ・八丈奇談 四五六
- ・双忠録 三ノ十
- ・青砥石文 五ノ八
- ・双玉伝 □□ □□

図 34 上

- ・星月夜 初
- ・浅艸 一ノ十
- ・西遊記四編 一ノ十
- ・八犬伝四編 一ノ四
- 十一日

- ・同五編 一ノ六
- ・松浦二編 十一六七
- ・伊賀越 一ノ七
- ・更科 一ノ五
- ・松王 一ノ六
- ・南 □□ □□

- 図 34 上
- □□
 - 一ノ五

(読本『繪本更科草紙』)
 (読本『美濃旧衣八丈綺談』)
 (読本『繪本双忠録』)
 (読本『刀筆青砥石文』)
 (読本『雲晴間双玉伝』)

(読本『星月夜頭晦録』)
 (読本『繪本浅草靈験記』)
 (読本『繪本西遊全伝』)
 (読本『南総里見八犬伝』)

(読本『南総里見八犬伝』)
 (読本『南総里見八犬伝』)
 (読本『繪本伊賀越孝勇伝』)
 (読本『繪本更科草紙』)
 (読本『松王物語』)

- ・八犬伝三編 一五
- ・神稻 十四編 一五 十一編一ノ四 十二編一五
- ・本朝外史二編 一五
- ・八犬伝九編 七ノ十二下
- ・藤 □□ □□ 一ノ五
- 十四日

- ・道成寺 一ノ六
- ・新田 一ノ五 六ノ十
- ・小栗 一二 三四 五ノ七
- ・八犬伝四編 六ノ十
- 十五日

- ・更科 初
- □□ □□ 録 一ノ五
- ・金石譚 三ノ十
- 廿一日

- ・金毘羅 三ノ十
- ・八犬伝六編 一ノ六

(読本『南総里見八犬伝』)
 (読本『俊傑神稻水滸伝』)
 (歴史『本朝外史』)
 (読本『南総里見八犬伝』)

(読本『道成寺鐘魔記』)
 (読本『新田功臣録』)
 (読本『小栗外伝』)
 (読本『南総里見八犬伝』)

(読本『繪本更科草紙』)
 (読本『繪本金石譚』)

(読本『南総里見八犬伝』)

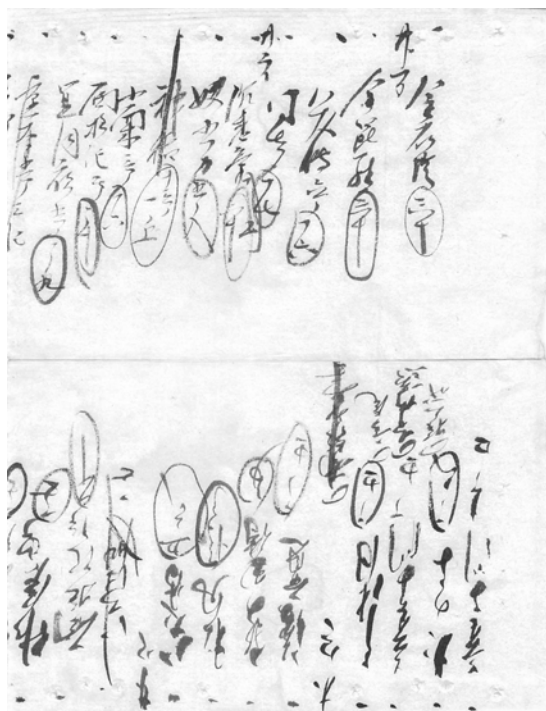


图 35

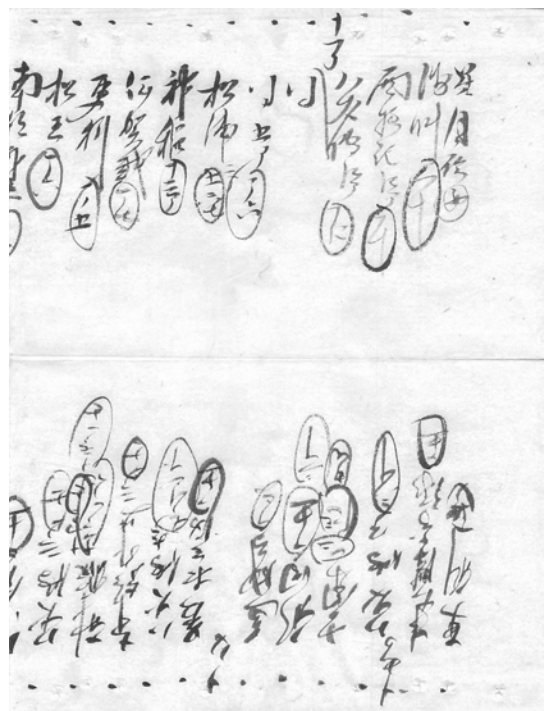


图 34

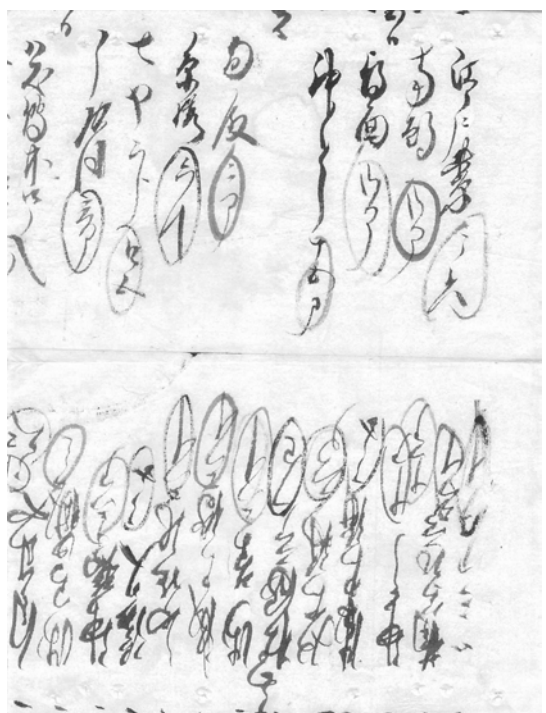


图 37

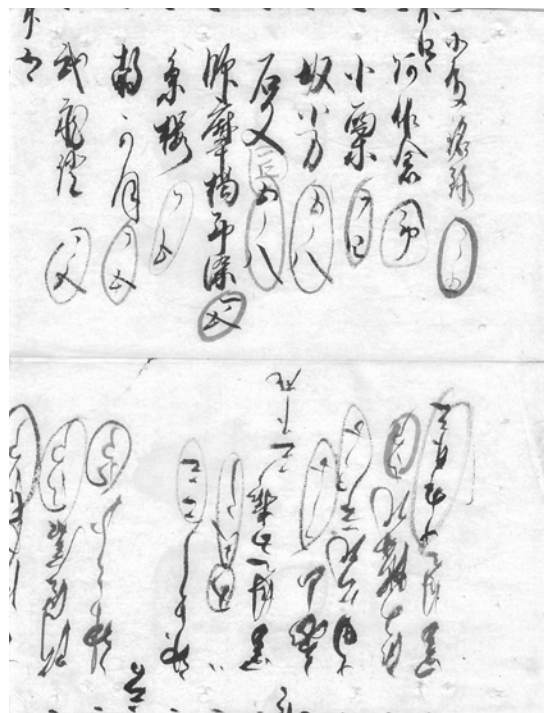


图 36

- ・同七編 一ノ五
- 廿二日
- ・沈香亭 二ノ十
- ・奴小万 五ノ八
- ・神稻 十三ノ一ノ上
- ・小栗三編 一ノ六
- ・西遊記二編 一ノ十
- ・星月夜五編 一ノ九
- ・宮本五編 三四

図 35 下

- 七
- ・佐倉初編 一ノ五
- ・西遊記四編 一ノ十
- ・いろは艸紙 一五
- 廿八日
- ・八犬伝 五六
- ・松風 後編
- ・双玉伝 初
- ・俊寛 一ノ五
- 廿九日
- ・弓張月 一ノ五

- (読本『南総里見八犬伝』)
- (読本『繪本沈香亭』)
- (読本『奴の小万』)
- (読本『俊傑神稻水滸伝』)
- (読本『小栗外伝』)
- (読本『繪本西遊全伝』)
- (読本『星月夜頭晦録』)

- (読本『忠勇阿佐倉日記』)
- (読本『繪本西遊全伝』)
- (読本『以呂波草紙』)
- (読本『南総里見八犬伝』)
- (読本『松風村雨物語』)
- (読本『雲晴間双玉伝』)
- (読本『俊寛僧都鳴物語』)
- (読本『椿説弓張月』)

- ・童子訓 一ノ五
- ・犬の子 一ノ六
- ・童子訓 □ノ□
- (以下、下部に記載されている分)
- 南朝外史 一ノ五
- 高尾
- 一ノ六
- 梔久一代

図 36 上

- 廿四日
- ・小□銘録 一ノ五
- ・阿佐倉 初
- ・小栗 一ノ四
- ・奴小万 五ノ八
- ・石文 一ノ五 五ノ八
- ・しまばら染 一ノ五
- ・糸桜 一ノ五
- ・朝かほ 一ノ五
- ・武蔵燈 一ノ五
- 廿五日

- (読本『玉石童子訓』)
- (読本『玉石童子訓』)
- (読本『南朝外史武勇伝』)
- (読本『柳巷話説』)

- (読本『忠勇阿佐倉日記』)
- (読本『奴の小万』)
- (読本『刀筆青砥石文』)
- (読本『糸桜春蝶奇縁』)
- (読本『復仇武蔵燈』)

図 36 下

- 後編
- ・阿佐倉 後編
- ・神とふ 八編

三日

- ・神とう 二三
- ・〃 五 六編

- ・里見五〇ノ三下□

- ・亀山 一ノ五

- ・南公記二編 一ノ五

- ・双蝶記 後編

- ・里見 十九ノ廿三

図 37 上

- ・江戸紫 一ノ六

- ・南朝 後編

五日

- ・得面 後編

- ・神とう 十五編

六日

- ・旬殿 二編

(読本『忠勇阿佐倉日記』)

(読本『俊傑神稲水滸伝』)

(読本『俊傑神稲水滸伝』)

(読本『俊傑神稲水滸伝』)

(読本『南総里見八犬伝』)

(読本『繪本亀山話』)

(読本『繪本楠公記』)

(読本『南総里見八犬伝』)

(人情本『江戸紫』)

(読本『俊傑神稲水滸伝』)

(読本『旬殿実々記』)

- 糸桜 六ノ十

- 七〇二郎 四五

- 弓張月 三編

□日

- 八犬伝 廿四ノ八

(読本『糸桜春蝶奇縁』)

(読本『椿説弓張月』)

(読本『南総里見八犬伝』)

図 37 下

- ・自来也 一ノ五

- ・浅間嶽 一ノ三

- ・神稲 十六編

- ・椀久 一ノ五

- ・西遊記 六ノ十

- ・誠忠伝 六ノ十

- ・浅草 六ノ十

十五日

- ・松浦二編 一ノ四

- ・双忠録 二ノ四

- ・双忠録 一ノ五

- ・神とう 十編 十一編

- ・楠公記二編 六ノ十

- ・〃三編 一ノ十

(読本『自来也説話』)

(読本『浅間嶽面影草紙』)

(読本『俊傑神稲水滸伝』)

(読本『柳巷話説』)

(読本『繪本西遊全伝』)

(読本『繪本誠忠伝』)

(読本『繪本浅草靈験記』)

(読本『繪本双忠録』)

(読本『繪本双忠録』)

(読本『俊傑神稲水滸伝』)

(読本『繪本楠公記』)

(読本『繪本楠公記』)

図 38 上

奴小万 一ノ四

(読本『奴の小万』)

十六日

・ □ 銘録 三ノ六

・ 楠公記二編 一ノ五

(読本『絵本楠公記』)

・ 阿佐くら 一六ノ十

(読本『忠勇阿佐倉日記』)

十七日

神とう 八編

(読本『俊傑神稻水滸伝』)

金花夕 一ノ五

(読本『絵本金花夕映』)

俊寛 一ノ五

(読本『俊寛僧都嶋物語』)

十九日

八犬伝 三十三ノ五下

(読本『南総里見八犬伝』)

廿日

潮来 一ノ五

(読本『忠孝潮来府志』)

図 38 下

・ □ □ □ 四編

・ 皿山 一ノ五

(読本『盆石皿山記』)

・ 双蝶記 初

廿六日

・ 雪砂寺 一ノ五

・ 浅間嶽 一ノ三

(読本『浅間嶽面影草紙』)

・ しまばら 一ノ五

・ 双てふ記 六ノ十

廿七日

・ 楠公記三編 五ノ十

(読本『絵本楠公記』)

・ 俊寛 一ノ五

(読本『俊寛僧都嶋物語』)

廿八日

・ 神とう 十編

(読本『俊傑神稻水滸伝』)

図 39 上

□ 日

・ 狂蝶新語

(艶本『狂蝶新語』)

・ 潮来節 一五

(読本『忠孝潮来府志』)

十日

・ 八犬伝 五六編

(読本『南総里見八犬伝』)

・ 金花夕映 一五

(読本『絵本金花夕映』)

・ 浅艸 一五

(読本『絵本浅草霊験記』)

十一日

・ 青砥石文 上八

(読本『刀筆青砥石文』)

・ 八丈奇談 一ノ六

(読本『美濃旧衣八丈綺談』)

・ 旬殿 七ノ十二

(読本『旬殿実々記』)

・ 雪鏡譚 一ノ五

(読本『絵本雪鏡譚』)

□ □ □ □

図 39 下

- ・新田 一五
- ・双蝶記 一ノ五
- ・星月夜 二三編

廿一日

- ・西遊記三編 六ノ十
- ・誠忠伝 一ノ五

廿二日

- ・腕久 一ノ五
- ・浅艸 一ノ五
- ・廿三日 俊寛 一ノ五
- ・犬猫 一ノ六
- ・根笹雪 一ノ六
- ・武蔵鏡 一五

(読本『新田功臣録』)

(読本『星月夜頭晦録』)

(読本『繪本西遊全伝』)

(読本『繪本誠忠伝』)

(読本『柳巷話説』)

(読本『繪本浅草靈験記』)

(読本『俊寛僧都鳴物語』)

(読本『竹篋太郎』)

(実録『白川根笹雪』カ)

(読本『復仇武蔵鏡』)

(読本『俊傑神稲水滸伝』)

(読本『繪本誠忠伝』)

(読本『繪本楠公記』)

(読本『繪本双忠録』)

図 40 上

- ・神稲 十一編 十二編
- ・誠忠伝
- ・楠公二編 一五
- 廿四日
- ・双忠録 一五

- ・小栗 一四

- ・童子訓 廿六ノ三十

- ・江戸砂子 一二

- ・稻妻 一四

- ・八犬伝 廿四ノ八

廿六日

- ・妖婦伝 三編
-

(読本『繪本三国妖婦伝』)

(読本『南総里見八犬伝』)

(読本『玉石童子訓』)
(地誌『江戸砂子』)

図 40 下

- ・頼朝 三ノ十
- ・星月夜初
- ・浅艸 六ノ十
- 二月三日
- ・妖婦伝 初編
- 四日
- ・八犬伝 十七ノ廿三
- ・松浦 一ノ四
- ・西遊記四編 一ノ五
- ・小栗 五ノ七

(読本『星月夜頭晦録』)

(読本『繪本浅草靈験記』)

(読本『繪本三国妖婦伝』)

(読本『南総里見八犬伝』)

(読本『繪本西遊全伝』)



图 39

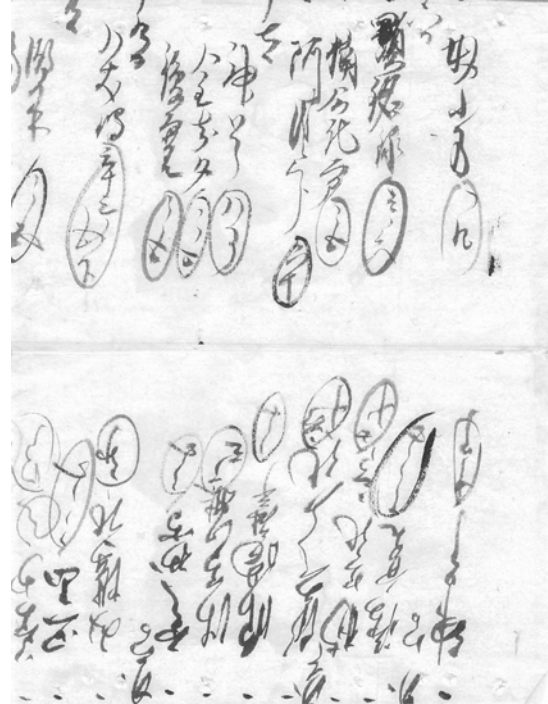


图 38

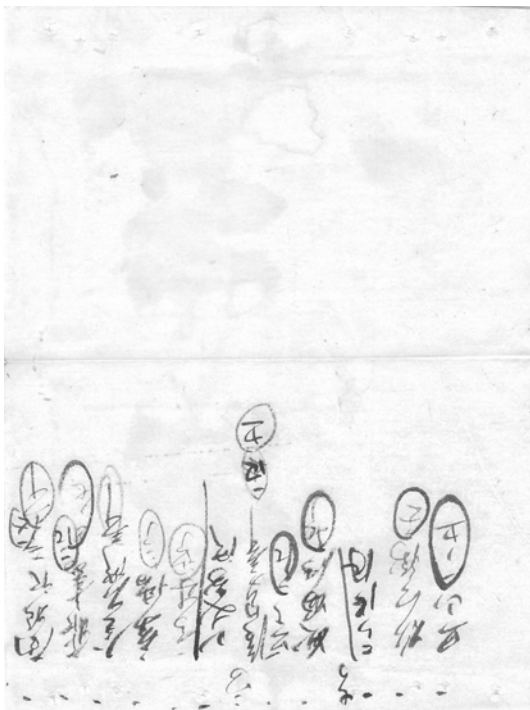


图 41

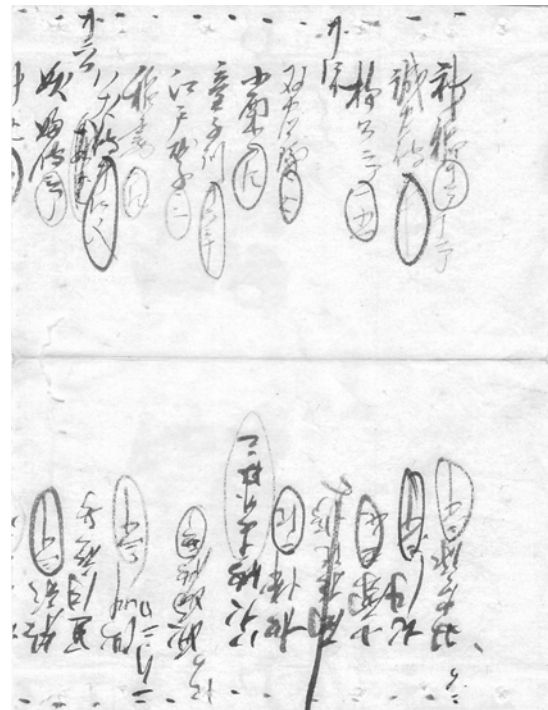


图 40

・花月 六ノ十
・双忠録 六ノ十
六日

(読本『嵐峡花月奇譚』)
(読本『絵本双忠録』)

図41上
(白紙)

図41下

・南朝記二編 一五 六ノ十
・稻妻 一ノ四 五ノ七
・金石譚 三ノ十
□□ 二編
・高木 初編
・八丈奇談
六日

(読本『絵本金石譚』)

(読本『高木廻実伝』)

(読本『美濃旧衣八丈綺談』)

(読本『後日の文章』)

後日文章 一四 五
□□ 一ノ四
・妖婦伝 初編
七日

(読本『絵本三国妖婦伝』)

弓張月

・古郷錦 一ノ五
・皿山 一ノ五

(読本『椿説弓張月』)

(読本『嵐山古郷錦』)

(読本『盆石皿山記』)

図42上

月□ 四 五
廿九日

・旬殿 四編
・小栗 三編

(読本『旬殿実々記』)
(読本『小栗外伝』)

・朝かほ 四編
・浅草 一ノ五

(読本『絵本浅草霊験記』)

三月朔日

・犬の子 一ノ五
・俊寛 六ノ十

(読本『俊寛僧都嶋物語』)

□□□□
・犬猫 一ノ五

(読本『竹篋太郎』)

・自来也 一ノ六
□□□□

(読本『自来也説話』)

図42下

・金石譚 初
廿二日

(読本『絵本金石譚』)

・自来也 一ノ四 二編
・双忠録 一ノ五

(読本『絵本双忠録』)

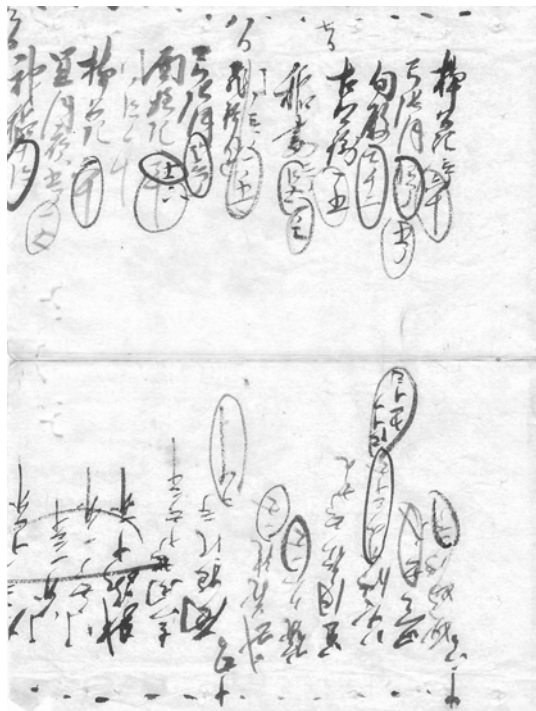


図 43

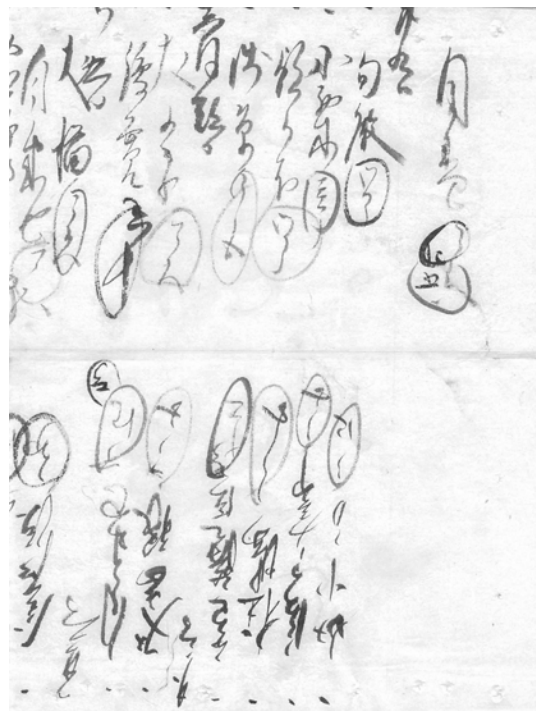


図 42

- 廿三日
- ・ □□□ 七編十二
 - ・ 狂蝶 一ノ五
 - ・ 後日文章 一ノ五
 - ・ 奴小万 一ノ四
- 図 43 上
- ・ 楠公記三編 六ノ十
 - ・ 弓張月 四編 五編
 - ・ 旬殿 七ノ十二
- 七日
- ・ 稻妻二編 四五ノ七
 - ・ 同三編 一ノ五
- 八日 □□□
- ・ 弓張月 □三編
 - ・ 南朝記 一ノ十 十一ノ六
 - ・ 同四 一ノ十
 - ・ 楠公記 六ノ十
 - ・ 星月夜五編 一五
 - ・ 神稻 十四
- 九日

(艶本『狂蝶新語』)

(読本『後日の文章』)

(読本『奴の小万』)

(読本『繪本楠公記』)

(読本『椿説弓張月』)

(読本『旬殿実々記』)

(読本『椿説弓張月』)

(読本『繪本楠公記』)

(読本『星月夜頭晦録』)

(読本『俊傑神稻水滸伝』)

図 43 下

- 十一ノ廿
 - ・同廿一ノ三十
 - ・同五編一ノ廿
 - ・戦跡 十一廿
 - ・真田廿編 十六ノ二十
 - ・西遊記二編 一ノ十
 - 十五日
 - ・武蔵鑑 一五
 - ・腕久 一五
 - ・星月夜五編 十九
 - ・八犬伝 廿五ノ三十五
 - ・皿々 五ノ八
 - ・妖婦伝 二編
 - 十六日
- (読本『繪本西遊全伝』)
- (読本『復仇武蔵鑑』)
- (読本『柳巷話説』)
- (読本『星月夜頭晦録』)
- (読本『南総里見八犬伝』)
- (読本『皿皿郷談』)
- (読本『繪本三国妖婦伝』)

記載事項は日付・書名・編数・員数のみで、利用者の居住地や姓名、見料などの情報はない。編数や員数を囲む線は、書籍の返却時になされた確認作業の痕跡だと考えられる。書籍を貸し出す際に書名・編数・員数を書き込み、返却時に冊数や状態を確認した上で線が書き足されたのであろう。線のないものは、書き込み忘れたのではなからうか。

日付の間隔と一日に貸し出されている書籍の数から、この当座帳が特定の利用者ごとに作成されたものではなく、複数の家々を廻った際の記録であることは明らかである。

書籍を特定できていないものが多くあるが、蔵書の大半は実録と読本である。実録には「箱崎」(黒田騒動)や「天下茶屋」(天下茶屋の仇討ち)、「天艸」(島原の乱)、「延命院」(延命院事件)など題材を類推できても特定の難しいものや、「三国志」「水滸伝」、太閤記あるいは太平記の略称と思しい「太」など可能性のある書籍が多く一つに絞ることのできないものが多数みられる。仮にいくつか書名をあげたが、それらが正しいかどうかは残念ながら確認がない。一方で、読本類は書名と員数から大部分を特定することができた。改めて特定できた読本を拾い上げ、刊年順に並び替えると次のようになる。

- 山田案山子作『繪本楠公記』
- (享和元年)文化六年(一八〇一)一八〇九)刊
- 速水春暁齋作『繪本伊賀越孝勇伝』(享和二年(一八〇二)刊)
- 速水春暁齋作『繪本龜山話』(享和三年(一八〇三)刊)
- 高井蘭山作『繪本三国妖婦伝』(文化元年(一八〇四)刊)
- 速水春暁齋作『繪本雪鏡譚』(文化二年(一八〇五)刊)
- 感和亭鬼武作『自来也説話』(文化三年(一八〇六)刊)
- 曲亭馬琴作『石堂丸苜蓿物語』(同年刊)
- 速水春暁齋作『繪本浅草靈驗記』(同年刊)

曲亭馬琴作『盆石皿山記』

(文化三〇四年(一八〇六)〜一八〇七)刊

小枝繁作『新田功臣録』(同年刊)

口木山人ほか訳『繪本西遊全伝』

(文化三年)天保六年(一八〇六)〜一八三五)刊

速水春暁齋作『繪本誠忠伝』(文化四年(一八〇七)刊)

柳亭種彦作『奴の小万』(同年刊)

曲亭馬琴作『椿説弓張月』

(文化四〇九年(一八〇七)〜一八二二)刊

曲亭馬琴作『柳巷話説』(文化五年(一八〇八)刊)

曲亭馬琴作『旬殿実々記』(同年刊)

曲亭馬琴作『俊寛僧都嶋物語』

(文化五〇六年(一八〇八)〜一八〇九)刊

梅暮里谷峨作『繪本金花夕映』(文化六年(一八〇九)刊)

談洲楼焉馬作『後日の文章』(同年刊) 談洲楼焉馬作『忠孝潮来

府志』(同年刊)

栗杖亭鬼卯作『竹篋太郎』(同年刊)

柳亭種彦作『浅間嶽面影草紙』(同年刊)

高井蘭山作『星月夜頭晦録』

(文化六〇九年(一八〇九)〜一八二二)刊

栗杖亭鬼卯作『繪本更科草紙』

(文化八年)文政四年(一八一)〜一八二二)刊

曲亭馬琴作『青砥藤綱摸稜案』(文化九年(一八一)〜二二)刊)

曲亭馬琴作『糸桜春蝶奇縁』(同年刊)

小枝繁作『松王物語』(同年刊)

曲亭馬琴作『皿皿郷談』(文化十年(一八一三)〜一八一五)刊)

小枝繁作『小栗外伝』(文化十)十二年(一八一三)〜一八一五)刊)

曲亭馬琴作『美濃旧衣八丈綺談』(文化十二年(一八一四)刊)

曲亭馬琴作『南総里見八犬伝』

(文化十一年)天保十三年(一八一四)〜一八四二)刊)

文東陳人作『松風村雨物語』

(文化十二年)文政八年(一八一五)〜一八二五)刊)

樺亭琴魚作『刀筆青砥石文』(文政三年(一八一〇)刊)

小枝繁作『道成寺鐘魔記』(文政四年(一八一)〜二二)刊)

暁鐘成作『以呂波草紙』(文政六年(一八一三)〜二二)刊)

畠山照月作『嵐山古郷錦』(同年刊)

池田東籬作『繪本双忠録』(文政七年(一八一四)〜二四)刊)

宮田南北作『雲晴間双玉伝』(文政八年(一八一五)〜二五)刊)

山田案山子作『繪本金石譚』(文政十一年(一八一八)〜二八)刊)

岳亭定岡ほか作『俊傑神稻水滸伝』

(文政十一年)元治元年(一八二八)〜一八六四)刊)

瀬川恒成作・関亭京鶴校『嵐峽花月奇譚』

(天保五年(一八一三)〜一八三四)刊)

石倉堂作『復仇武蔵鑑』(天保八年(一八三七)〜一八三七)刊)

曲亭馬琴作『玉石童子訓』

(弘化二〜四年(一八四五〜一八四七)刊)

松亭金水作『忠勇阿佐倉日記』

(嘉永五年〜安政二年(一八五二〜一八五五)刊)

松亭金水作『高木廼実伝』

(嘉永六年〜安政四年(一八五三〜一八五七)刊)

榎亭主人編『南朝外史武勇伝』

(安政三年(一八五六)序〜文久二年(一八六二)序)

十二作品もある馬琴の著作の存在が際立つが、享和以降の読本が幅広く蔵書されているとともに、『忠勇阿佐倉日記』『高木廼実伝』『南朝外史武勇伝』など近年刊行されたものも仕入れられている様子を取できよう。もちろん、今回明らかになったのは蔵書のごく一部であり、少なくともこの数倍の量があったことは想像に難くない。現に国文学研究資料館の蔵書印データベースによって、同じ「小林」印が捺された大阪大学図書館忍頂寺文庫蔵の葎窓貞雅作『滑稽浮世質屋雀』初・二編(請求記号:B二四―一・二)の存在を確認できる。だが、いずれにしても実録と読本が小林某の蔵書の中心であったとみてよいだろう。こうした蔵書内容は小林某特有ではなく、近世期貸本屋の一般的なものである。

近世期貸本屋の蔵書内容については、自らの手控え、あるいは利用者

のためのカタログと思しき目録が最も参考になる。こうした目録は、これまで駿河国府中の鳴鷹堂⁵、播磨国姫路の樊圃堂灰屋輔二⁶、信濃国諏訪の升屋文五郎⁷などの事例が知られている。これらの目録をみると、戯作を中心とする娯楽的な読み物と随筆類が蔵書のほとんどであることがわかるが、そのなかでも読本・実録はかなりの割合を占めている。

また、貸本屋で人気のある作品を取り上げた見立番付が三種ある。明治四年(一八七二)の高田庵梅輝輯書『和漢軍書小説貸本競』(図44)、同十二年(一八七九)一月の『和漢西洋之群籍 貸本競』(図45)、刊年不詳の『和漢西洋之群籍』(図46)である。貸本番付と俗称されるこれらは、貸本屋の蔵書内容と利用者に人気のあった作品を知る上で貴重である。番付は全て向かって右側に軍書や実録、左側に通俗物・読本・滑稽本などが並ぶ。行司・頭取・世話役・勧進元・差添には、些か性質を異にする、あるいは特に人気のあった書籍がそれぞれ置かれている。これら三種の番付は、いずれも明治期に発行されたものだが、掲載された書籍のほとんどが読本と実録である。したがって、近世から近代初頭にかけて、貸本屋の蔵書の大部分を占めており、当然利用者も多かったのは読本と実録であったといつてよい。なお、『和漢西洋之群籍』(図46)の発行者となつている誠光堂池田屋清吉については次節で取り上げる。

競 本 貸 說 小 書 軍 漢 和

西										東									
前頭		前頭		前頭		前頭		前頭		前頭		前頭		前頭		前頭		前頭	
椿	同	通	西	同	同	同	同	同	同	平	三	石	朝	難	豐	真	真	真	真
說	唐	俗	遊	武	吳	水	漢	楚	三	後	山	鮮	波	波	臣	田	原	書	大
弓	太宗	兩國	記	軍	越	濟	軍	軍	國	風	軍	軍	戰	戰	鎮	三	軍	太	閣
張	軍	志	談	談	談	傳	談	談	志	土	鑑	鑑	記	記	記	代	代	閣	閣
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代
月	談	志	談	談	傳	談	談	談	志	記	記	記	記	記	代	代	代	代	代

圖 44 『和漢軍書小說貸本競』（架蔵）

味 漢 西 洋 心 章 籍

貸本競

大関

開原軍記

真田三代記

豊原爲重記

三河風土記

難波戰記

源平盛衰記

山陽大戰記

石山軍記

朝鮮軍記

楠延尉秘鑑

慶應全樂記

清正實記

東山紀談

日本道徳考

日本官制傳

近世記問答

赤穂一夕話

義仲勳功記

楠正行勳功記

里見八犬傳

梅村物語

田村物語

櫻花物語

松川全傳

高木全傳

千代全傳

小堀全傳

物草代語

俊徳代語

大徳代語

高木代語

松川代語

高木代語

松川代語

高木代語

大関

開原軍記

真田三代記

豊原爲重記

三河風土記

難波戰記

源平盛衰記

山陽大戰記

石山軍記

朝鮮軍記

楠延尉秘鑑

慶應全樂記

清正實記

東山紀談

日本道徳考

日本官制傳

近世記問答

赤穂一夕話

義仲勳功記

楠正行勳功記

里見八犬傳

梅村物語

田村物語

櫻花物語

松川全傳

高木全傳

千代全傳

小堀全傳

物草代語

俊徳代語

大徳代語

高木代語

松川代語

高木代語

松川代語

高木代語

図 45 『和漢軍書小説貸本競』(架蔵)

二、春日堂播磨屋伊三郎

架蔵の『吾妻みやげ』は、市川三升作『爰こゝに佃つくたてん天網島』後編（文政十一年（一八二八）刊）と笠亭仙果作『枕琴夢通路』上卷（天保六年（一八三五）刊）が合冊された改装本である。柿渋色地の表紙には、子持ち杵に「吾妻みやげ □□上下」と墨書された題簽が貼付されている。半紙本型に仕立てた黄表紙を合冊した『絵本東土産』初編（享和元〜文化元年（一八〇一〜〇四）刊）や『絵本東大全』（享和三年（一八〇三）刊）を思わせる改装と書名である。¹⁰ なお、押捺された「天満津国町春日堂」という貸本印（図47）から、改装はこの春日堂の手によるものと思われる。

吉田瑛二著『浮世絵事典』下巻（画文堂、一九七一年）「版元」の項には、「主なる上方版元」として「春日堂井三（天満津国町）」があげられている。この春日堂井三こそが先の貸本印の主だと思われるが、次に

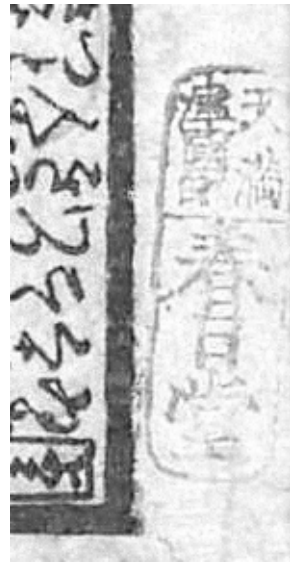


図 47 架蔵『吾妻みやげ』
に押捺された貸本印

みていくように春日堂はまた播磨屋伊三郎とも名乗ったようである。文久三（一八六三）年十一月二十一日夜、大坂西横堀新町橋東詰五幸町より出た火は西風にあおられ、二十三日まで町々を焼いた。¹¹ この火事に取材した出版物について、大坂本屋仲間の『出勤帳』六十五番には次のようにある。

（筆者注 文久三年十二月）十九日

一同はり長より、大火焼之事不残書記、板行ニして大半紙二つ切三十式枚斗横閉本、仲間ニ売出し候ヲ見当り、早東役中へ談示候処何分不宜評定ニ付、明廿日寄合候故、其節呼寄聞調度相成候也、

藤野

廿日、定日

一同播弥三郎差紙ニ而呼遣し、代人罷出ニ付、大火焼之事板行ニ而、横本仲間へ売出しニ付聞調候処、天満ニ別家共在之、其方々すゝめによつて致候与申居ニ付、役前御申ハ、例年仲間申合掟書板木之義申聞せ置、印形も取り候事也、御利解被申ニ付相詫、無調法相断早東罷帰り、板木与製本ト持參可致ト申、引取候也、役中初更過迄見合候所参り不申、無扱皆と引取候事

廿二日

一播弥三郎方、定日廿日二代人罷出候故、作法通申論ニ付承知致、

其夜無程板木ト製本共持参候様ニ申帰り候故、初更過迄相待候得共不参故、翌日又々催促申遣シニ、其節後家敷申ハ、今日者何レ持参候様申答候処、漸々今朝天満ノ春日堂ト申者、右之事柄相尋旁々会所へ参り候由、段々被申諭候義納得故、左候ハ、手元之分製本取揃、板木共無程差出候様申帰り候処、夕方ニ板木拾七枚ニ製本六部敷持参ニ付請取候也、尚取集中度、製本与右書付ニ調印之義、跡より持参可仕与申、引取也

一世話懸り御用ニ付罷出、幸便故右之焼製本老部持参、入御覽ニ一覽被成候所、何分自俣ニ板行不相成、其旨願出候様被仰聞、引取候事、此時二名前書、左之通書上候、藤野子・伊兵衛

道修町老丁目小西吉右衛門代判茂兵衛借家

播磨屋弥三郎

代判 忠兵衛

天満津之国町中嶋屋与兵衛かし家

播磨屋伊三郎¹²

「はり長」こと播磨屋弥三郎は、天満の別家の勧めにより、「大火焼之事不残書記」した「大半紙二つ切三十式枚斗横閉本」を仲間向けに売り出していたが、ほどなくして本屋仲間の知るところとなり問題となった。評議の末、件の書は板木とすでに製本された分を仲間に受け渡され、播磨屋弥三郎ならびに播磨屋伊三郎は名前書をしたためることとなったのである。

天満の別家と二十二日に会所を訪れた「天満ノ春日堂ト申者」と「天満津之国町」の所書きがある播磨屋伊三郎は、いずれも同一人物であろう。そして、この所在地と堂号の一致から、春日堂井三と播磨屋伊三郎も同一人物なのだと考えられる。「伊三郎」ゆえに「井三」と称したのである。なお、播磨屋は明治初年の大坂草紙屋仲間に加わっている。¹³

さて、『吾妻みやげ』は全丁にわたって記録類の紙片で裏打ちされている。紙片は全部で二十七葉。先の小林某の例と同様、いずれも裁断されて貼付されている。巻首にある貸本印以外に旧蔵者の痕跡を見出せないため、記録類はこの播磨屋のものであると考えられる。

紙片には日付がみられるものの、裁断されていて判読できない部分が多い。そのため個々の前後関係が不明なことから、貼付された順のまま翻字した。なお翻字に際しては判読できない部分を「□」とし、そのうち文字を推定し得る場合はルビで示した。また先の小林某同様、書名から書籍を特定できた場合は、日本古典籍総合目録データベースに準拠した分類と書名を追記している。

図 48 上

廿一日

式百文 ふで六本

□八日

式百五十文 同五本

貳百五十文 すみ二丁

〆九百文

九月まで

初

九日

二百五十文 すみ二丁

百文 ふで二本

□二日

百文 すみ一丁

百文 ふで三本

十一日

百五十文 すみ二丁

廿九日

百文 ふで一本

卅日

百文 同三本

〆老貫文

図48下

百文 ふで四本

□十五日

三十八文 すりはな火代ならず

□十七日

百五十文 ふで五本

□十九日

五百五十文 のし百

□二日

三百五十文 小刀壺

五十文 やたてふでなをし一本

百五十文 長書本

かし五

□十七日

貳百文 はけ壺

□廿日

百五十文 たじま

かし五

〆老貫七百三十八文

十二月まで

初

□二日

三百五十文 双六壺

三百文 すみ二丁



图 49

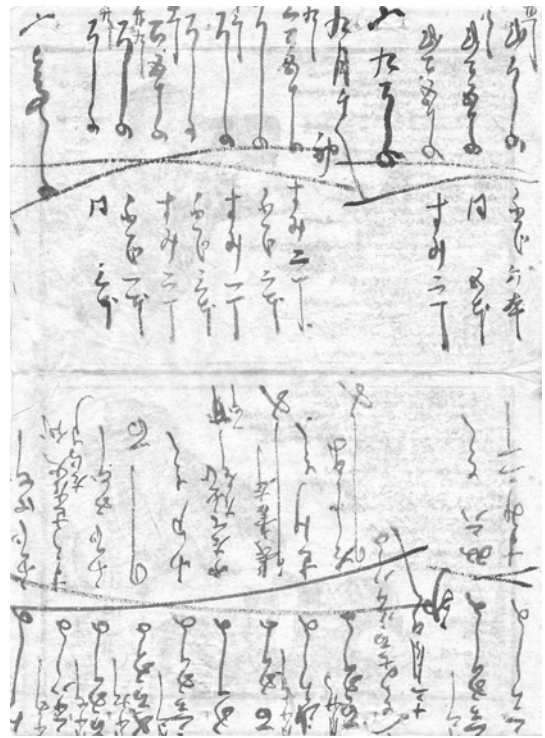


图 48



图 53

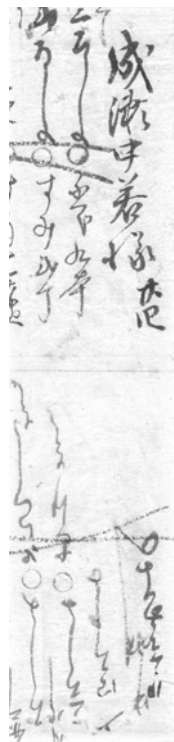


图 52

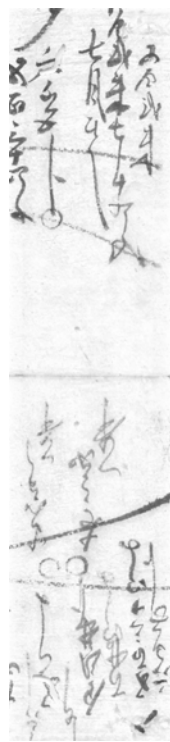


图 51



图 50

図 49 上

貳百文 ならいふで八本

貳百文 御てん四本

廿五日

貳百五十文 しわい壺

三百文 てほん一冊

十九日

五百文 すみ二丁

貳百六十四文 ふで八本

金壺朱ト貳百文 小はし一ぜん

貳百五十文 水入壺

六百文 硯一めん

貳百卅二文 のし三十七

廿一日

金壺朱 小刀壺

金貳朱 硯一めん

廿六日

金三步三朱 永代せつ用一冊

図 49 下

初

□九日

金壺歩 すみ一丁

八百文 ふで八本

□十三日

貳百文 水戸

かし卅

□一日

金貳朱 一朱ト百文 をうぎ二本

〆金壺歩貳朱ト

壺貫文

五月まで

内金壺歩入

〆金貳朱ト

壺貫文

□七日

三百文 すみ二丁

□十日

金三朱 をうぎ一本

□五日

百文 ふで四本

図 50 上

なるせ御しん家様

廿一日

一匁五分 川中しまこうたん

かし冊

廿八日

三〇〇 すみ二丁

図50下

〆貳貫四百七十文

五月まで

□□〇〇 壱歩貳朱入

〆七十文まけ

図51上

又金貳朱

金貳朱七十九文入

七月まで

〆六匁五分

五百三十四文

図51下

□

□六日

五百文 はんなう一本

□七日

金貳朱ト百廿四文 をうぎ一本

〆五百三十四文

六匁五分

図52上

成瀬中若様 廿四

三日

三百文 ふで九本

貳百文 すみ貳丁

図52下

□廿二日

百文 □□〇〇 壱

□八日

三百文 はけ壱

〆四百文

中様

内三百五十文入

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns. The text includes various characters and symbols, possibly representing a list or account. Some legible characters include "倉", "月", "日", "年", "入", "出", "金", "銀", "石", "斗", "升", "石", "斗", "升", "石", "斗", "升".

図 55

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns. The text includes various characters and symbols, possibly representing a list or account. Some legible characters include "倉", "月", "日", "年", "入", "出", "金", "銀", "石", "斗", "升", "石", "斗", "升".

図 54

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns. The text includes various characters and symbols, possibly representing a list or account. Some legible characters include "倉", "月", "日", "年", "入", "出", "金", "銀", "石", "斗", "升", "石", "斗", "升".

図 57

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns. The text includes various characters and symbols, possibly representing a list or account. Some legible characters include "倉", "月", "日", "年", "入", "出", "金", "銀", "石", "斗", "升", "石", "斗", "升".

図 56

図 53 上

一 匁 □□□□

かし三

二月六日

一 匁 同

かし三

図 53 下

□九日

百廿六匁 ふで三本

三十二文

図 54 上

金三朱ト 代廿五匁一分

貳貫六百六十四文 代四十二匁三分

十二月まで

右ハ正月十一日ろうむ

金百三十三匁八分五厘

四十五匁六分五厘

右江三十五匁てかた入

三十貳匁四分

代貳貫百文

廿八日

四百文 ふで六本

金一朱 くわい中べんらん一冊

百文 御しんそう ふで貳本

四百文 同 玉川はんこ六まい

金一歩 三〇すみ十丁

廿七日

貳貫八百五十文 御しんそう こつけいはんこ三十八まい

図 54 下

三十二文 ふで一本

□四日

貳百文 すみ二丁

三十二文 ふで一本

□十二日

五十文 同二本

□十四日

五十文 同一本

□十六日

六十四文 同二本

百文 ふえ壺

□十九日

貳百五十文 □□いし巻

六十四文 ふで二本

□廿日

百文 すみ一丁

五十文 かふら五本

□廿四日

百文 ふえ巻

七十二文 ふで三本

□廿九日

八十文 ふで三本

□七日

七十二文 同三本

図55上

□八日

百文 ふで一本

□七日

四百五十文 すみ三丁

□六日

金貳朱ト百文 若をうぎ一本

金壹朱ト六十四文 若同一本

金貳朱 若同女もの一本

廿七日

金貳朱 同一本

↗金三歩ト

貳貫百十六文

七月まで

内金一歩一朱八月九日入

又金一歩八月十六日入

↗金三朱ト

貳貫百十六文

十九日

五百五十文 はけ巻

□日

□□□□ かめ巻

図55下

貳本

三日

百五十文 はんこ三

九日

百五十文 同一まい

百五十文 同一まい

↗金三朱ト

三貫五百十六文

九月まで

内一貫五百文入

〆金三朱ト

貳貫十六文

□八日

百五十文 はんこ一まい

□四日

百文 ふで二本

貳百五十文 てほん一冊

□十三日

百五十文 ふで二本

図56上

十二文 はげ壺

月八日

廿四文 同貳

五十文 ふで一本

月十日

五十文 同一本

月十一日

貳百文 すみ一丁

三十二文 ふで一本

月十三日

廿四文 同一本

〆老貫七百廿八文

十二月まで

大森様

□一日

三百八十文 町かゝみ一冊

〆

九月まで

山本様

廿四日

□□文 はんこ貳まい

図56下

貳百五十文 すみ一丁

百廿四文 ふで五本

三日

金貳朱ト三百五十文 硯一めん

九日

三百文 ふで四本

〆金貳朱ト

壹貫廿四文

五月まで

内金壹歩入

〆七十二文まけ

初

□九日

五百五十文 はけ壹

□十三日

金一步貳朱ト三百文 □人書一冊

十四日

金壹朱 女をうぎ一本

十八日

金一步一朱ト貳百文 用□二冊

図57上

□三日

金一兩貳歩 本八冊

□十九日

八十四文 ふで五本

六十文 かふら五本

百文 すみ一丁

〆金貳兩一步ト

壹貫三百文

七月まで

内金一兩一步入

〆金一兩ト

一貫三百文

内金壹朱 女をうぎ代入

〆金三步三朱ト

一貫三百文

内金一兩一朱七月廿七日入

〆貳百文

三日

四百文 はけ壹

図57下

三百六十四文 をうぎ一本

□五日

貳百文 五しき壹

廿日

貳百文 二ツつき硯壹

〆一貫八百貳十文

九月まで

初

十八日

金一朱 くわい中べんらん一冊

五日

金一両式朱 てほん四冊

金一歩一朱 同一冊

□一日

金式歩式朱 同二冊

三百文 中□一本

□七日

式百文 二ツつき硯壺

百五十文 硯三

式百文 五しき壺

図58上

金式両式朱ト

八百五十文

三月まで

内金一両式朱ト

八百五十文入

金一両かし

内金式歩四月十二日入

金式歩かし

五月まで

初

□一日

金一朱 ふですみ共

□四日

金一朱 岩印をうぎ一本

金式朱

七月まで

図58下

百文 □□□

五日

六十四文 取つき壺本

金一朱ト

百六十四文

九月まで

エト様

金三歩式朱 をうぎ一本

内金式朱ひく

金三歩

五日

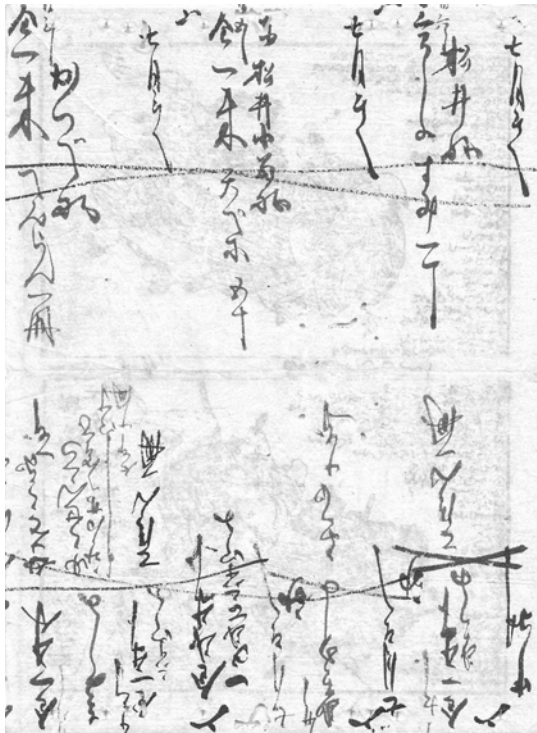


图 59



图 58

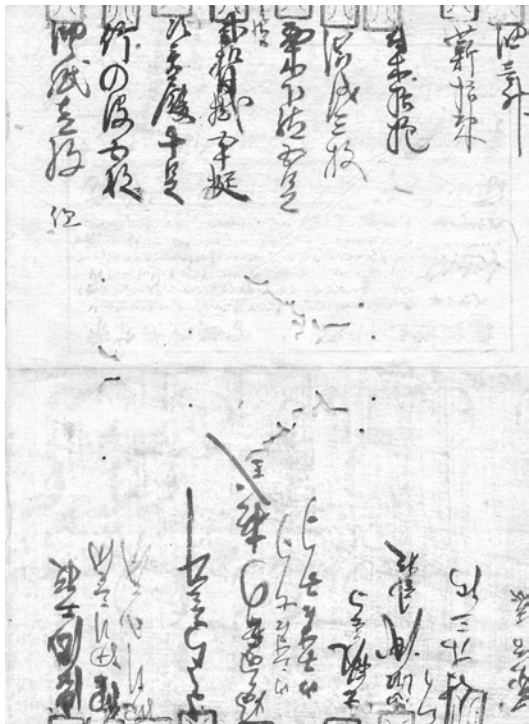


图 61

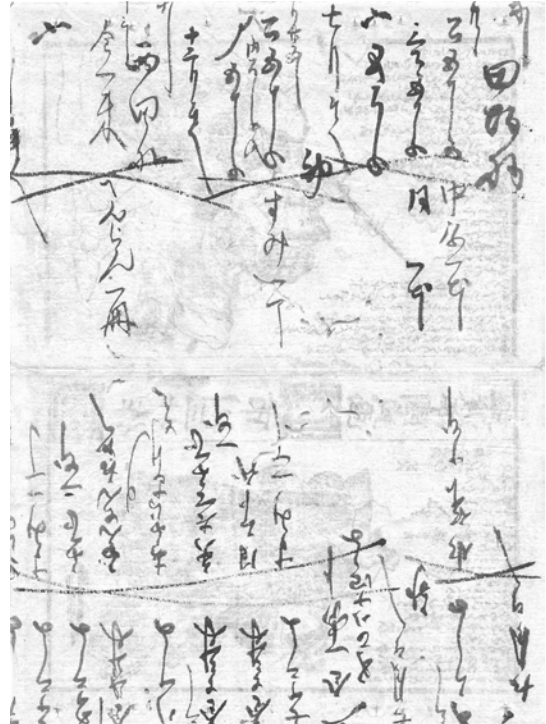


图 60

七十二文 矢たてふでなをし一本

七月まで

〇日

よし田様

〇八日

三十三文 かふら二本

七月まで

中寺西様

月廿日

四百六十四文 状ふくろ七十

図59上

七月まで

松井様

〇六日

三百文 すみ一丁

七月まで

〇松井小若様

〇五日

金一朱 天べに五十

七月まで

かつべ様

〇三日

金一朱 へんらん一冊

図59下

金一朱 女をうぎ一本

一貫文 ゆうせんくつ

初方廿へんまで

かし四十合本十冊

〇十三日

金一朱ト六十四文 てほん一冊

〇金式朱ト

一貫式百六十四文

七月まで

初

〇廿日

(合巻『遊仙杳春雨草紙』)

二百五十文 ふで十本

七月まで

初

□九日

金一朱ト式百文 てほん一冊

中様

図 60 上

□□

田坂様

九日

百五十文 中□一本

三百五十文 同一本

二百五十文

七月まで

初

□廿五日

百五十文 すみ一丁

二百百文入

五十文

十二月まで

□□

西田様

□三日

金一朱 へんらん一冊

中様

□□まで

図 60 下

□□文 □□

七十二文 すみ一丁

五十二文 ふで二本

□日

金式朱 ぶんちん取かへ

八十文 あふらはけ壺

□二日

金壹朱 矢たてふで一本

金壹朱 同印代

七十二文 すみ一丁

二百金一步ト

五百八十四文

七月まで

初

三日

五百文 水筆十本

ノ

九月まで

図 61 上

□油三升

□薪拾束

□付木拾把

□渋紙三枚

□栗下駄五足

十四日

□式□□掛五十挺

□□履十足

□竹の皮七枚

□油紙壹枚

図 61 下

□渋紙二枚

□細引三房

□細引貳房

□さくら壹本

□ふたもの拾式

内三寸口七勺

内五寸口五勺

□土瓶六勺

□渋紙貳枚

三日

□付木三把

□墨拾俵

図 62 上

ノ

□四日ヨリ

九百文 たいこうき八九十

かし九十

一ヶ月百八十四匁(ツ)

をちもつ利きん

正二三

□四日

九百文 たいこうき八九十

かし九十

(実録『太閤真蹟記』)

(実録『太閤真蹟記』)

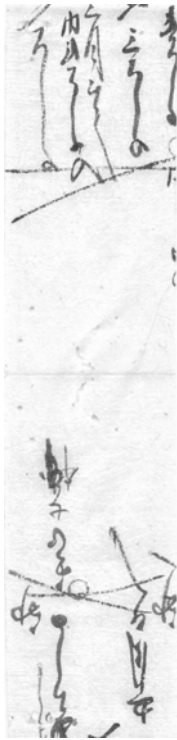


図 64



図 63



図 62



図 68



図 67



図 66

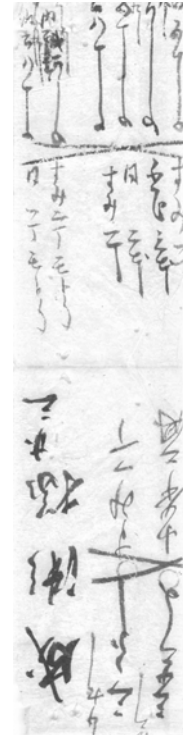


図 65

□四日

九百文 同

かし九十

二保様

□十九日

金一朱 すみ三丁

〆

五日

井上様

図 62 下

□四日ヨリ

九百文 たいこうき八九十

かし九十

金三歩 香川たのもし七八九取かへ

かし

内金一歩十月廿三日入

金貳歩かし

□四日ヨリ

九百文 たいこう記八九十

かし九十

(実録『太閤真蹟記』)

(実録『太閤真蹟記』)

□四日ヨリ

九百文 同

かし九十

金貳朱 十一月ぐんたのもし金

ふそく

金一歩 十二月ぶんかし

〆金一両一歩三朱ト

十四貫百十文

十二月まで

卯十二月卅日

内 はをり一まいしたて代右へ

図 63 上

五匁七分

三月まで

図 63 下

初

卅日

三匁 きんふろく

かし十

□三日

金巻朱ト百五十文 十ヶ国づ巻

図 64 上

弍百文

ノ三百文

三月まで

内弍百文入

ノ百文

図 64 下

初

□八日

弍百文 ふで七本

ノ

五月まで

初

図 65 上

□五十文 すみ□

□日

百文 ふで三本

九日

五十文 同二本

六十文 すみ一丁

□五日

内弍百文 すみ二丁モトリ

十日

内百八十文 同一丁モトリ

図 65 下

成瀬様 廿三

□十九日

三匁 すみ一丁

□二日

三十二文 小本二冊

図 66 上

百文 しん部一冊

十八日

廿四文 ふで一本

図 66 下

六匁 大坂えづ一冊

図 67 上

□ □

図 67 下

長田 □ 様 十三

図 68 上

小川 様

□ 十九日

七十二文 矢たてふでなをし一本

□ 廿日

金貳朱 梅のしをり五冊

廿三日

金三朱 三朱ト貳百文入 百人一首式冊

□ 日

五十文 金入十

百五十文 すみ二丁

五十文 かふら五本

五十文 ふで二本

ズ 金一歩一朱ト

三百七十二文

(歌謡『梅之葉』)

図 68 下

七月まで

初

□ 六日

百文 はみかき壺

ズ

九月まで

九日

貳百五十文 すみ一丁

十三日

五十文 しろすみ一丁

廿四文 取けし壺

ズ 四百廿四文

中様

初

八日

五十文 しろすみ一丁

ズ

十二月まで

図 69 上

初

四日

三百文 大くわいちう巻

百三十二文 同はい巻

六日

百三十二文 同巻

〳五百六十四文

三月まで

初

〳三日

百文 いんえつでん

かし巻

〳

五月まで

初

〳十二日

金一朱ト百文 をうぎ一本

〳

七月まで

初

図 69 下

金一両一步式朱 てほん五冊

右江本ハくみ〳

代百五十〳

〳三十目金にて代一步式朱ト式百五十文

〳金三朱ト

〳式百八十文

〳三百廿四文かし

〳

中様

初

月十日

金三朱 天文指南内三冊

〳

十二月まで

〳田坂様

〳二日

百三十二文 すみ一丁

百文 かふら六本

〳式百三十二文

図 70 上

内モ様

(天文『初学天文指南』)

金三歩下一貫六百八十文 丑中濟ぶんのこり

□十六日

貳百文 はし一ぜん

百五十文 石筆一本

金老朱 くわい中ひはし一ぜん

五十文 ぶんまわし老

金老歩 二千年三冊

〔日本二千年袖鑑〕
唐土

金老兩老歩 日本のづはこ入にて二冊

月十九日

三十二文 やたてふでなをし一本

三百五十文 やたてふで一本

百文 ふで二本

図70下

大すか様

御家らい様

□二日

貳百五十文 岩見初

かし廿五

(実録『岩見武勇伝』カ)

□廿二日

貳百五十文 同二へん

かし廿五

(実録『岩見武勇伝』カ)

□三日

三百文 せいすいき五へん

かし卅

□十八日

三百文 同初

かし卅

□廿七日

三百文 同二へん

かし卅

□四日

三百文 同三へん

かし卅

一貫七百文

内一貫文七月九日入

七月まで

七百文 又四百文九月十日入

三百文かし

ユリ様

□十日

金一朱 べんらん一冊

七月まで

図71上

□十八日

五十文 矢たてふでなをし代

金貳朱 矢たてふで二本

□廿四日

金壹朱 硯一めん

金貳朱ト百五十文 同一めん

金三朱 なさけのふたみち一冊

三百文 朱一丁

貳百五十文 水入壺

四百文 すいのふところ二冊

金三朱 すみ一丁

□廿五日

五百文 ふで十本

五百文 同十本

□廿八日

金壹朱ト貳百文 小刀壺

図71下

□廿九日

三百文 あんせい

(歌謡『粹のふところ』)

かし十

三百文 せいすいき初

かし卅

三百文 同二へん

かし卅

百八十文 はなのありか

かし六

〆金三兩壹朱ト

六貫五百文

三月まで

内金壹兩貳歩三月十五日入

〆金壹兩貳歩壹朱

六貫五百文

□九日

三百文 あんせい

かし十

三百文 せいすいき初

かし卅

図72上

百五十文 すりはな火壺

(艶本『男女花のあり香』
狂訓)



図 70

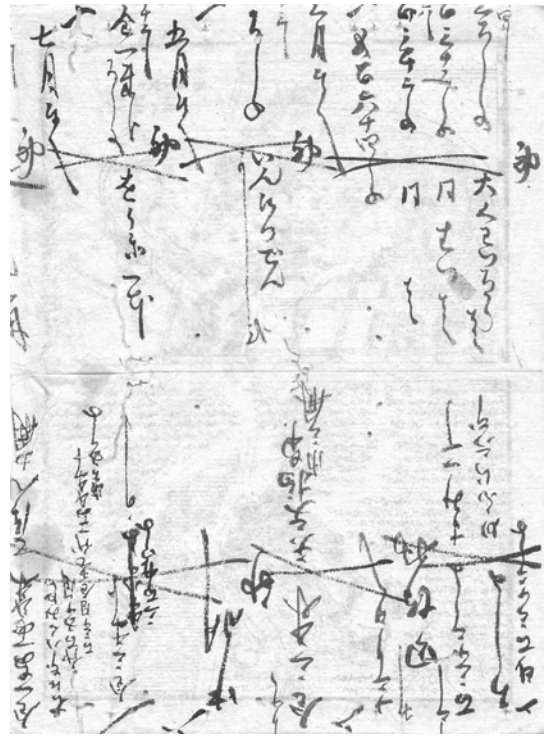


図 69

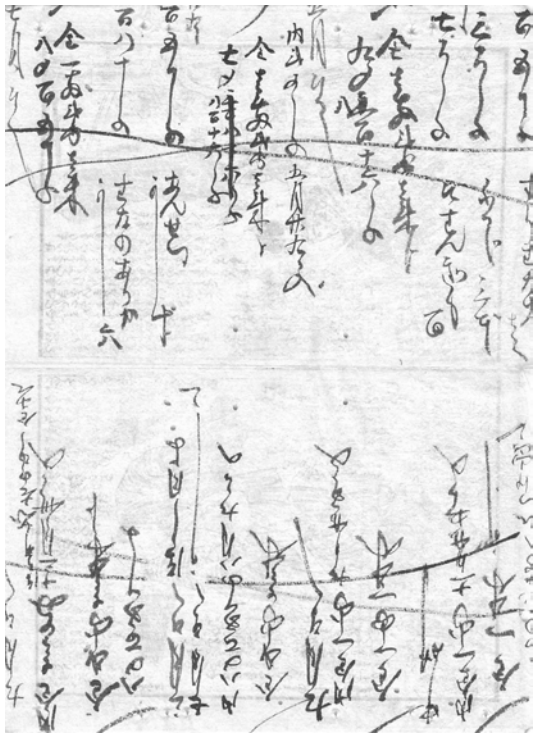


図 72



図 71

三百文 ふで三本

□日

七百文 えはんぎり一まい

ズ金壹兩貳歩壹朱ト

九貫八百十六文

五月まで

内貳貫文五月廿九日入

ズ金一兩貳歩壹朱ト

七貫三百八十八兩八百十六文

□九日

百五十文 あんせい

かし十

百八十 はなのありか

かし六

ズ金一兩貳歩壹朱

八貫百五十文

七月まで

図72下

九月まで

□□ふんたのもし金にて

内金壹兩十二月卅日入

(艶本『男女花のあり香』
狂訓)

ズ金貳歩壹朱ト

八貫百五十文

三月まで ほし月よ

七月まで かし三

ズ内八貫百五十文八月九日入

金貳歩壹朱

九月まで

ズ内金一步九月廿五日入

金一兩一朱

中様

ズ内金一步十一月廿五日入

金一朱かし

□□□をくえつけ出し

図73上

吉田様

□九日

金三歩壹朱 日本えづ一冊

□十三日

百五十文 すりはな火壹

三十二文 ふで一本

廿五日

(読本『星月夜頭晦録』)

金壹朱 矢たてふで一本

〆金三〇三〇〇〆壹朱ト

百八十文

九月まで

初

廿六日

金一朱 くわい中べんらん一冊

〆

三月まで

図73下

〇〇〇 行在三 〆三冊

廿四文 取けし壹

三百文 こかわきく

かし十二

貳百廿四文 ゆかりの梅

かし九

貳百五十文 風ぶんろく

かし五

四月十日

貳百廿四文 えかほの梅

かし九

四百七十二文 二くま伝初二三

かし十九

〇廿九日

六百文 行在五廿七四へん

大政官十一 〆三冊

四月十日

六百文 行在五六七 〆三冊

四月十二日

金一朱 をうぎ一本

〇日

百八十文 大政官十二 一冊

三百文 内外初 一冊

〇日

三百文 同二へん 一冊

図74上

八田様

月二日

貳百文 ふで四本

月三日

三百文 すみ一丁

〇七日

(読本『新説二熊伝』)

(御親征行在所日誌 行幸中)

(太政官日誌)

(御親征行在所日誌 行幸中)

(太政官日誌)

(内外新聞)

(内外新聞)

貳百廿四文 にく入巻

廿九日

金一朱 をうぎ一本

□十七日

百文 ふで二本

ズ金一朱ト

八百廿四文

七月まで

松田様

□九日

五百八十文 ま□はけ巻

□八日

三百文 かまくら

かし十二

ズ八百八十文

図74下

ズ

七月まで

松田様

□日

貳百文 すみ一丁

百文 ふで三本

ズ三百文

七月まで

もり山様

□四日

六十四文 状ふくろ一わ

百五十文 ふで二本

百七十二文 松のゆき

かし七

□七日

金貳朱 をうぎ一本

貳百五十文 ひも貳六

□十四日

七十二文 ふで一本

□十日

百五十文 かまくらひじ

かし十五

ズ内金貳朱入

八百六十四文

図75上

(読本『会稽松の雪』)

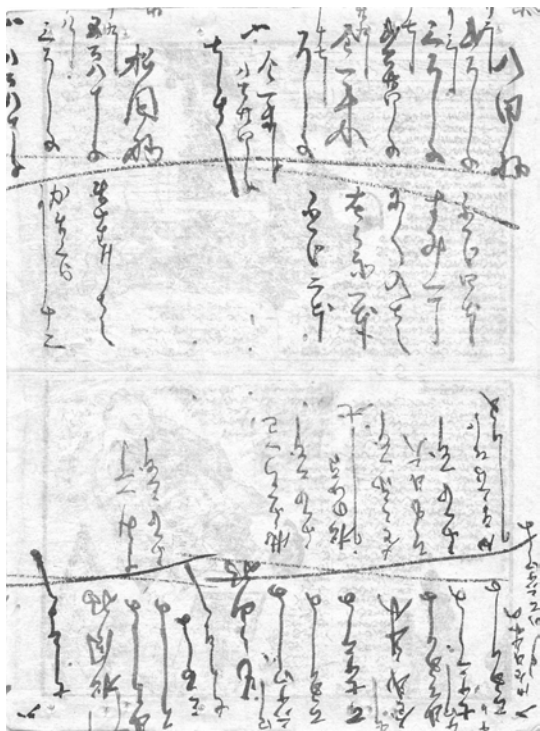


图 74



图 73

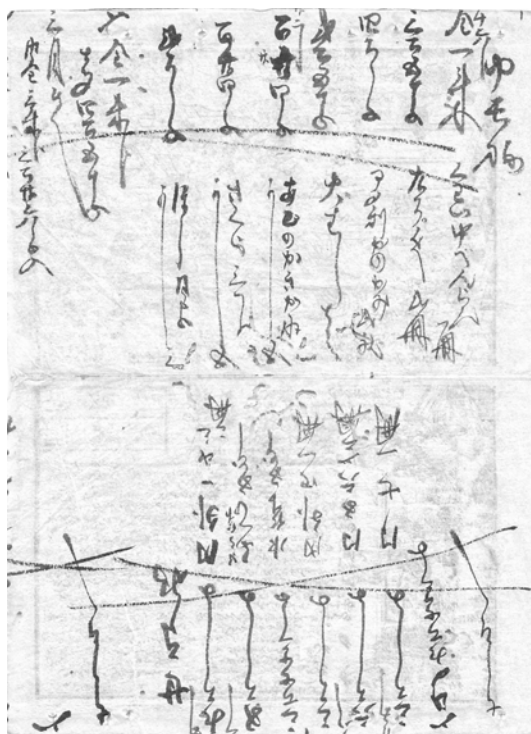


图 75

内七様

□十六日

金一朱 くわい中べんらん一冊

三百五十文 な□くへ式冊

四百文 アメリカのかみ式枚

式百五十文 火はし耆

□二日

百廿四文 あごのかきかね

かし五

百廿四文 さくら三へん

かし五

式百文 ほし月よ

かし三

ズ金一朱ト

耆貫四百五十文

三月まで

内金三朱ト三百廿六文入

図75下

ズ

七月まで

せき様

□五日

九百文 内外一式三 三冊

□一日

五百文 □□□下ふで五本

三百七十二文 水筆五本

□日

三百文 内外四 一冊

十八日

六百文 同五六 ズ二冊

廿五日

三百文 同七 一冊

ズ式貫九百七十二文

七月まで

『内外新聞』

『内外新聞』

『内外新聞』

『内外新聞』

図73下の「行在三」「行在四へん」「行在五六七」は『御親征行在所日誌』第三〇七、同じく図73下の「太政官十一」「太政官十二」は『太政官日誌』第十〇十二、図73下の「内外初」「同二へん」は『内外新聞』初編二編で、いずれも慶応四年（一八六八）閏四月の刊行である。これらの記録が記されたもの「四月」であるため、おそらく全て刊行後すぐに販売されたものと思われる。したがって、文書が作成されたのも慶応四年前後ということになる。



図 76 架蔵の『吾妻みやげ』に貼付された摺物

文書のほとんどは当座帳だが、図 61 だけは出入帳のようである。「さくら」が何を指すか不明だが、洪紙・細引・蓋つきの容器・土瓶・付け木・墨・油・薪・栗下駄・竹の皮・油紙などの消耗品が購入されている。

さて、当座帳には断片的ながらも三月・五月・七月・九月・十二月の節季の支払いの様子が記されている。各顧客との取引内容を見ると、播磨屋は貸本業のみならず、文房具・小間物類・浮世絵・書籍・地図・新聞・官報の販売をおこなっていることがわかる。以下、それぞれの営業ごとに取り上げてみていく。

貸本業

省略された書名・編数とともに、「かし五」のように貸し出された冊数を記しているのが貸本の記録である。「長書本」(図 48 下) は五冊本のようながどのような書籍なのかは不明。見料は一五〇文。「たじま」(図 48 下) は仙石騒動を題材とした五冊本の実録だろうか。こちらも見料は一五〇文。「水戸」(図 49 下) も実録だと思われるが不明。見料は二〇〇文。「川中しまこうたん」(図 50 上) も特定できなかった。見料は一匁五分。三冊本の「□」「同」(図 53 上) も不明。見料は一匁。「ゆうせんくつ」(図 59 下) は合巻の緑亭川柳作『遊仙春春雨草紙』全二十編である。「かし四十」は各編上下の二巻を合計した冊数と等しい。「合本十冊」とあることから、二編分の計四冊を合冊し十

冊としていたのであろう。全編を一度に貸し出しているためか見料は高く一貫文となっている。図62上下にある「たいこうき(記)八九十」は実録『太閤真蹟記』八ノ十編。三編で九十冊と大部なためか見料は九〇〇文。一編あたり三〇〇文の計算である。「いんえつでん」(図69上)は「隠逸伝」かと思われるが不明。見料は二冊で一〇〇文。「岩見初」「同一へん」(図70下)は実録『岩見武勇伝』初ノ二編であろうか。それぞれ見料は二五〇文。図70下・図71下の「せいすいき」初ノ三および五編と「あんせい」(図71下および図72上)も特定できなかったが、いずれも一編あたりの見料は先の『太閤真蹟記』と同じ三〇〇文。「はなのありか」(図71下および図72上)は艶本の飯尾東川作・恋々山人校の『男女花のあり香』で見料は一八〇文。図73下の「こかわきく」は不明。見料は三〇〇文。「ゆかりの梅」は人情本の鼻山人作『由佳里の梅』初ノ三編、「えかほの梅」も人情本の『貞操笑顔の梅』初ノ三編¹⁴で見料は二二四文。五冊本の「風ぶんろく」は不明。見料は二五六文。「にくま伝初二三」は読本の松園主人作『新説二熊伝』初ノ三編で見料は四七二文。図74上の「かまくら」と図74下の「かまくらひじ」はいずれも不明。見料はそれぞれ三〇〇文と一五〇文。「松のゆき」(図74下)は読本の峨洋堂主人作『会稽松の雪』で見料は一七二文。図75の「あごのかきかね」は咄本の和来山人作『腮の懸鎖』で見料は二二四文。「さくら三へん」は読本の『忠勇阿佐倉日記』三編で見料はこちらも二二四文。「ほし月よ」は読本の高井蘭山作『星月夜頭晦録』だろうが何編かは不明。見料は二〇〇文。

以上のように、播磨屋の蔵書には判明する限りでは実録・読本・人情本・咄本・艶本などの書籍がみられる。

『吾妻みやげ』の後ろ見返しには、摺物(図76)が貼付されており、新版以外は貸し出し期間が一ヶ月であること、また各書籍の一冊あたりの見料がわかり興味深い。幕末の大坂では「貸本屋仲間」によって見料が設定されており、その「貸本屋仲間」は本屋仲間の管轄にあつたのである。しかしながら、播磨屋はこの摺物記載の見料をそのまま用いてはいなかったようである。文書をみる限り、人情本の三編九冊ものは二二四文、合巻は一編あたり一〇〇文。そのほかは分類と冊数に応じて見料を設定している。摺物記載の見料はあくまで目安でしかなく、実際には個々の貸本屋の裁量でそれぞれ設定されていたのだと考えられる。

文房具

文房具の販売に関する記録は随所にみられ、筆類(「ふで」「矢たてふで」「かふら」「御しんそうふで」「五しき」「水筆」など)・墨(「すみ」「しろすみ)・硯類(「硯」「二ツつき硯)・文鎮・水入・刷毛・石筆・ぶんまわし(コンパス)・肉入などがみられる。また紙類も扱っており、絵半切・天紅のほか「アメリカのかみ」(図75上)なるものまで商っている。これら以外にも小刀・熨斗・状袋を確認できる。そのほか、販売だけでなく「やたてふでなをし」(図48下など)のよう

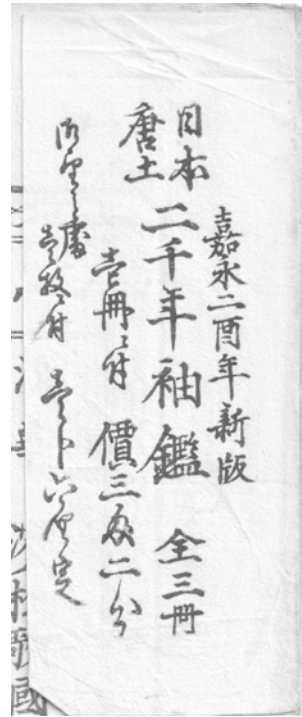


図 77 架蔵『日本唐土／二千年袖鑑』
に貼付された紙片

に筆の修繕もおこなっている。

小間物類

小間物類の販売に関する記録も随所にみられ、品目は扇類・箸・歯磨き・火箸など。とりわけ扇類は総じて売価が高く、利幅の大きい商品だったのだと思われる。

浮世絵

「はんこ」は浮世絵を指す。「玉川はんこ」(図54上)や「こつけいはんこ」(図54上)など少なくない枚数を一度に購入しているのは、これらが組み物だからであろうか。売価は一枚あるいは三枚で一五〇文、「玉川はんこ」は四〇〇文、「こつけいはんこ」は二貫八五〇文と

なっている。実際に播磨屋が浮世絵を販売していた様子は、ボストン美術館¹⁵や大阪府立中之島図書館蔵(請求記号:大和銀一三二)の初代長谷川貞信画「浪花風俗浮礼歌美人合の内 高らいばし屋ぐらやしき」「浪花風俗浮礼歌美人合の内 道とん堀の春景」「浪花風俗浮礼歌美人合の内 東御堂の暁雪」「浪花風俗浮礼歌美人合の内 中之島鮎の松」からも窺い知ることができる。これらには版元印の代わりに、図47の印と河内屋輔七の印(「河輔」)が捺されている。播磨屋と河内屋輔七が版元であったかは判断できないものの、少なくとも浮世絵の売捌には関与していたとみてよいだろう。

書籍・地図・新聞・官報

まず書籍をみていく。「永代せつ用」(図49上)で売価は三歩三朱。これはおそらく嘉永三年(二八五〇)再刻の山崎美成著『早引永代節用』(丁子屋平兵衛版)であろう。「くわい中べんらん」(図54上・図57下・図73上・図75上)「へんらん」(図59上・図60上)「べんらん」(図70下)はいずれも売価が一朱であることから、全て同じ書籍だと思われるが特定することはできなかった。三八〇文の「町かゝみ」(図56上)は天保十三年(一八四二)刊の『増大坂町鑑』であろうか。手習の正本と思しい「てほん」はたびたび購入されている(図49上・図55下・図57下・図59下・図69下)。一冊二五〇文から一歩一朱まで売価が様々あるのは書型や紙数によって変わってくるためであろう。

図56下にある売価が一步二朱三百文の「□人書」と一步一朱二百文の「用□」、図57上にある一両二歩の「本八冊」、図65下にある三十二文の「小本二冊」はいずれも不明。「梅のしをり」(図68上)は慶応二年(二八六六)刊の一荷堂半水編『梅之葉』五卷五冊(塩屋彦三郎・河内屋佐助版)。図68上の三朱の「百人一首」も不明。三朱の「天文指南」(図69下)は馬場信武著『初学天文指南』五卷五冊(宝永三年刊)であろうか。「内三冊」とあることから、五冊の内三冊が購入されているようだが新本ではなく古本なのかもしれない。一步の「二千年」(図70上)は嘉永二年(一八四九)刊の『日本二千年袖鑑』三卷三冊で売価は一朱。架蔵の『日本二千年袖鑑』唐土に貼付された紙片(図77)には、刊行時における三冊の値段とバラ売りの際の値段とが記されているが、それと比べるとはるかに安価で購入されている。刊行からそれほど時を経っていないことを踏まえるならば、新本ではなく古本で購入されたものであった可能性が高い。図71上にある三朱の「なさけのふたみち」も不明。

地図には一朱百五十文の「十ヶ国づ」(図63下)、六匁の「大坂えづ」(図66下)、一両一步の「日本のづはこ入」(図70上)、三歩二朱の「日本えづ」(図73上)とがある。

新聞には「しん部」(図66上)と特定できないものもあるが、図73下の「内外初」「同二へん」は『内外新聞』初〜二編である。一冊あたりの売価は三〇〇文。大坂の知新館が発行したこの『内外新聞』は、同地における新聞の最初とされるものである。

官報には前述のとおり『御親征行在所日誌』第三〜七、『太政官日誌』十〜十二号がある。『御親征行在所日誌』は一冊あたり二〇〇文、『太政官日誌』は一八〇文で購入されている。

おわりに

以上、断片的な記録類から二軒の貸本屋の蔵書内容と営業の実態を垣間見てみた。小林某の蔵書を『和漢軍書小説貸本競』と比較してみると、共通するものが非常に多いことがわかる。しかしながら、それらは必ずしも現在の文学史を彩る作品ではない。幕末の貸本屋が実際にどのような書籍を貸し出していたのか、あるいは幕末の人々が実際にどのような書籍を受容していたかは、こうした記録類から浮かび上がってくるのである。

また、鈴木俊幸氏は幕末・明治ごろの大坂で営業していた綿屋喜兵衛・本屋安兵衛・石川屋和助・塩屋喜兵衛・富士屋政七・本屋為助らの引札や広告を紹介しているが、¹⁶そこに記される品目は播磨屋伊三郎が商う品々とほとんど全てが重なっている。前述のとおり、播磨屋は明治初年の大坂草紙屋仲間に加わっている。記録類からも明らかのように、播磨屋の主たる生業は絵草紙屋であり、貸本業はいわば副業の一つであったのである。貸本文化が専業でおこなう者たちだけでなく、絵草紙屋をはじめとするほかの業種の者たちによっても支えられていた一面を窺い知ることができよう。

注

- 1 長友千代治著『近世貸本屋の研究』（東京堂出版、一九八二年）、同『近世の読書』（青裳堂書店、一九八七年）に収められた諸研究で、その業態や仕組みが明らかにされた。
- 2 貸本屋の蔵書については注5～7を参照。出版については高木元「江戸読本の板元——貸本屋の出版をめぐる——」（『江戸読本の研究 十九世紀小説様式攷』ペリカン社、一九九五年所収。初出は一九八八年）、二又淳「貸本屋伊勢屋忠右衛門の出版活動」（『読本研究新集』第三集、翰林書房、二〇〇一年十月）などがある。
- 3 鈴木俊幸「貸本屋の営業文書」（『書籍流通史料論序説』勉誠出版、二〇一二年所収。初出は二〇〇四年）、同「幕末期娯楽的読書の一相——貸本屋沼田屋徳兵衛の営業文書」（『書籍流通史料論序説』勉誠出版、二〇一二年所収。初出は二〇〇六年）、同「普通の人々の普通の読書——貸本屋の営業文書片々」（『書籍文化史料論』勉誠出版、二〇一九年所収。初出は二〇一六年）など。
- 4 国文学研究資料館の蔵書印データベースで画像が公開されている（http://dbrec.nijl.ac.jp/CSDB_74681）。
- 5 繁原央「翻刻「鳴鶴堂蔵書目録」（静岡県立中央図書館蔵）」（『常葉国文』十八号、常葉学園短期大学国文学会、一九九二年六月）。
- 6 山本卓「幕末期姫路の貸本屋目録——樊圃堂灰屋輔二『貸本目録』——」（『国文学』七十三号、関西大学国文学会、一九九五年十二月）。
- 7 鈴木俊幸「信州諏訪升屋文五郎の貸本書目」（『書籍流通史料論序説』勉誠出版、二〇一二年所収。初出は二〇〇八年）。
- 8 名古屋の大惣こと大野屋惣八は、その規模からして一般的な貸本屋と比較すべきではないため除外した。
- 9 長友千代治著『江戸時代の図書流通』（思文閣出版、二〇〇二年）などですでに紹介されている。
- 10 両作については棚橋正博「黄表紙集『絵本東土産』について」（『黄表紙の研究』若草書房、一九九七年所収。初出は一九八二年）に詳しい。
- 11 『新修大阪市史』第四卷（大阪市、一九九〇年）三七〇頁。
- 12 『大坂本屋仲間記録』第六卷（清文堂出版、一九八四年）一五五～一五六頁。
- 13 多治比郁夫「明治初年の草紙屋仲間資料」（『京阪文芸史料』第五卷、青裳堂書店、二〇〇七年所収。初出は一九八七年）。
- 14 本書は南仙笑楚満人作『萩の枝折』を改変解題したもの。鈴木圭一『萩の枝折』と『眉美の花』（『中本研究 滑稽本と人情本を捉える』笠間書院、二〇一七年所収。初出は二〇〇三年）に詳

しい。

15 ポストン美術館のホームページ上で公開されている画像で確認。それぞれの Accession Number は 11.20715、11.20716、11.20718、11.20719。北川博子「ポストン美術館所蔵上方絵目録」『なにわ・大阪文化遺産学研究センター二〇〇六』関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、二〇〇七年三月）によれば、安政ごろの成立という。

16 鈴木俊幸著『絵草紙屋 江戸の浮世絵ショップ』（平凡社、二〇一〇年）一七八〜二〇一頁。

第二節 誠光堂池田屋清吉の片影

はじめに

明治・大正の貸本屋を通史的にまとめたものに、沓掛伊左吉氏の「貸本屋の歴史」¹、『東京古書組合五十年史』所収の「貸本屋の変遷」²などがある。だが、いずれも近世からの過渡期にあたる明治初年から十年代については、それほど詳しく触れられていない。本稿では、この時期の貸本屋の蔵書内容や営業の様子を垣間見ていく。

一、池田屋清吉について

架蔵する元岡徹太郎編『大岡村井長庵調合机』初〜六編（明治十四〜十六年（一八八一〜一八八三）刊）の見返し裏には、貸本屋の記録類と思われる紙片群が貼り込まれていた。本書には「池清」をはじめとする五顆の印と蔵書票を確認でき、貸本屋池田屋清吉の旧蔵であることがわかる。ほかの旧蔵者の痕跡を見出せないことから、貼り込ま

れていた記録類もこの池田屋清吉のものと考えてよからう。池田屋清吉、通称「池清」は堂号を誠光堂と称し、江戸時代後期から大正時代にかけて営業した貸本屋である。在りし日の池清を偲ぶ坪内逍遙、岡野知十らの言を引いてみよう。

池清は、代々池田屋清吉と名宜つて、慶応三年までは、牛込の横寺町で営業をしてゐたのださうな。（中略）其頃、父と倅と小僧と都合三人で、今も稀に見る如く、例の山伏の笈のやうな長方形の風呂敷を背負つて、毎日各区を巡巡つて、貸出しに力めてゐた。池清の営業区域は、神田は連雀町界隈まで、本郷は赤門附近まで、次は麹町や四谷といふところであつた。（中略）余儀なく牛込細工町へ転宅して、傍ら近所の捨売の空地を買つて、それへ野菜を作つたりなんかして、辛うじて細い営業を続けてゐたのは其頃であつた。三條公の邸内へ出入りしたり、薩州藩の士族連へ貸出しをしたりしたのは其頃であつた。これが江戸から東京への過渡時代の営業模様で、他の同業の景況も似たり寄つたりのもの

であつたさうな。

明治七八年頃からは、また段々持直して来た。それはどうしたわけかといふに、維新の事業が漸く緒に就いたからであつた。(中略)池清の如きも、顧客の激増したので、迎も在来の部数だけでは間に合はず、最も需要の多かつた写本物——其頃は所謂実録物の写本が最も広く飲ばれた——の複製を作るために、写字生を五人ぐらゐも備つておいて、同じ書を七八部通りも謄写させて、貸出したさうな。(中略)複製写本の用紙は、すべて所謂石州の茶半紙で、其頃は一しめ壺田五十銭、一帖は壺銭五厘であつたから、謄写本十冊の貸料を二もんめといふ割合で貸すと、其利潤は中々のものであつた。絵の入つた刊行本は、其時分、五冊で二もんめであつた。³

わたしがまだ本所にゐた頃だから左様、明治七八年頃だつたらう、本所の上総屋、浅草の大川屋、牛込の池田屋これなんかが先づ貸本屋として大きくやつてゐた店だらう。この他にもまだ沢山あつたらうがハッキリ覚えなない。池田屋は池清(池田屋清吉)といつてその頃牛込の納戸町にゐた。紅葉(尾崎)が同じく横寺町にゐた頃だつたので、その門下生などは大概ここの御厄介になつてゐた。死んだ夏目(漱石)、鳩山、それに何時だつた、文部大臣をした高田早苗や坪内逍遙達も、こゝの貸本で盛んに勉強したものでらしい。とにかく牛込界限でこの店を知らないものは余りな

かつた。

(中略)

こゝのおやぢはケチン坊な男だつたが、地面や家作なども有り一寸した小銭をもつてゐたので他の貸本屋がつぶれてからも、大してあくせくせずが一番永続きしたのだつた。何でもおやぢが死んでやめたときは、蔵書を全部二束三文でタ、キ売つたとかだつた。⁴

このように、維新の動乱後も池清は江戸時代から変わらぬ姿で営業を続けていた。利用者のなかには逍遙のほか、江見水蔭も利用していた。⁵池清の蔵書が彼らの文学的素養の基盤になつたであろうことが容易に想像できる。それはこうした回想以外にも、『早稲田文学』第一次第一号で、「共同文庫」の一つとして東京図書館や帝国大学図書館、教育図書館等と肩を並べ、池清が紹介されている点からも窺える。⁶しかし、「おやぢが死んでやめたときは、蔵書を全部二束三文でタ、キ売つたとかだつた」とあるように、現在その蔵書は散在してしまつており、残念ながら我々はその恩恵に与ることはできない。

回想類以外では、池清自身が発行した摺物が当時の様子を知る手掛かりとなる。例えば、架蔵の松村春輔作『三府膝栗毛』初編(明治十四年(一八八一)刊)には、池清による口上が備わる(図78)。

老実伏稟

御花主様方ますく御きけん能恐悦至極にぞんじ奉候随ツて私



図 78 池清の口上 (架蔵『三府膝栗毛』初～三編)

店年来かし本渡世仕候処御かけを以て日にまし繁昌仕り有がた
 き仕合に存奉候扱開化の御世に相成西洋各国の書物翻訳書絵入読
 本滑稽もの都而貸本類品々沢山に所持仕格別ねだん下直二相働
 差上候間御高覧のほど相替らず御注文下され度替御懇意の御方様
 江御風聴偏二奉願上候也
 誠光堂謹白

出し箱には「池田／清吉」「書物 東京牛込／貸本誠光堂／細工町」とある。「開化の御世」すなわち明治期に発行されたものようだが、描かれている池清は江戸時代を思わせる昔ながらの姿である。

また、架蔵の『大岡村井長庵調合机』四編中巻の後ろ見返しには、池清の蔵書内容を示す摺物が貼付されている(図79)。一見すると近世期貸本屋の一般的な蔵書内容であるが、「翻訳書」と「近世戦争書類」が含まれている点に明治期貸本屋の蔵書としての特色が出ている。同じような摺物は、架蔵の為永春江作『春色初和歌名』五編にも確認できる(図80)。先ほどの摺物を簡略にした内容であるが、こちらでは「東京牛込細工町拾二番地」という細工町時代の番地を確認できる。第二章でみた番地とは異なるが、おそらく何度か転居しているのだろう。従来、池清を知るためには、こうした種々の回想や摺物に頼らざるを得なかったが、今回取り上げる文書によっていくらかその実態を把握することができよう。

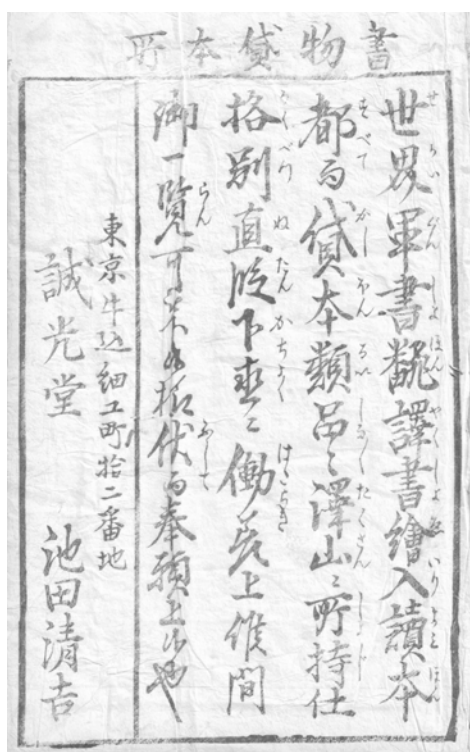


図 80 架蔵の『春色初和歌名』五編卷三にある摺物



図 79 架蔵の『大岡政談／村井長庵調合机』

卷四にある摺物

二、当座帳と出入帳

記録類には当座帳と出入帳の二種類があった。当座帳は六葉(図 81) (図 87)。そのうち図 86・図 87のみ横帳の表裏が現存する。出入帳は十七葉(図 89) (図 105)。こちらには表裏が現存するものはないが、ツレと思われるものが多くあり、かなりの部分を復元できる。翻字に際しては判読できない部分を「□」とし、そのうち文字を推定し得る場合はルビで示した。

当座帳

まずは当座帳の六葉である。

図 81

- ・ 鎌倉□樹五 (合) 同 (読本『鎌倉大樹家譜』)
- ・ 明治太平楽府二 (合) 同 (『明治太平楽府』)
- ・ 七編人三篇五迄 (合) 赤城 佐川 (滑稽本『七偏人』)
- ・ 初かすみ 和印三 (合) 佐□様 (艶本『波都賀寿美』)
- ・ 神明角力五 (合) 同 (実録『神明角力』)
- ・ 絵本佐野 三篇一五 (合) 赤城下 三好様 (読本『絵本佐野報義録』)
- ・ 同四編一五 (合) 同 (読本『絵本佐野報義録』)
- ・ 大伴金道 初篇一五 (合) 同 (読本『大伴金道忠孝図会』)
- ・ 後風土記 十 (合) 小泉屋様 (雑史『三河後風土記』)

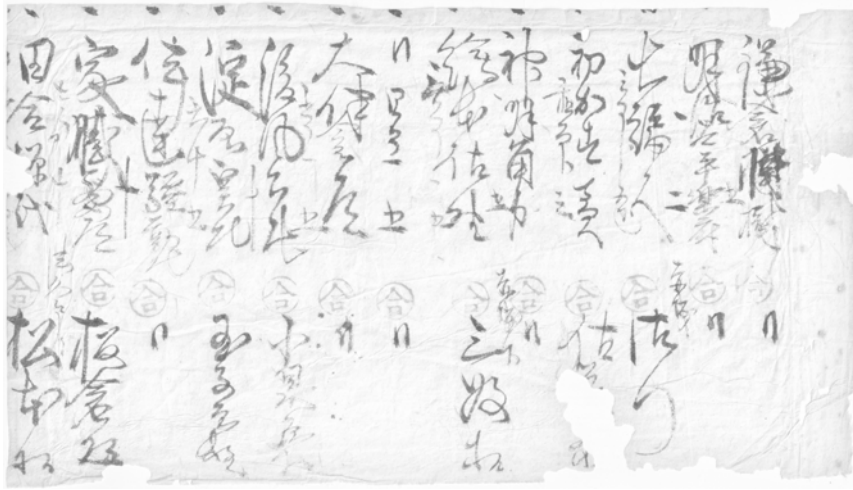


图 81



图 82

- ・淀殿実記書十五合 玉子屋様
- ・伊達騒動記十合 同 (実録『伊達騒動記』)
- ・家職要道 七方十合 板倉様 (経済『家職要道』)
- ・田舎源氏 □□□□合 津久戸松本様 (合巻『修紫田舎源氏』)

図82

- ・□□□□初一 四迄合 越□屋様後
- ・玉の盃 和印二合 同 (艶本『玉の盃』)
- ・新□編水滸伝 初篇一十合 同 (読本『新編水滸画伝』)
- ・同□二篇一十合 同 (読本『新編水滸画伝』)
- ・□□袋 □篇方五迄合 酒屋様
- ・絵本かんそ軍談 初篇一十合 三十人丁若田様 (読本『絵本漢楚軍談』)
- ・三国一夜物語 五合 中野様 (読本『三国一夜物語』)
- ・八犬伝 三篇一五合 伊下多様 (読本『南総里見八犬伝』)
- ・延命院書十六合 伊勢六様 (実録『延命院実記』カ)
- ・源平盛衰記 四篇十一ノ三十合 五軒丁村山様
- ・後太平記十合 四ッ谷鈴木様
- ・ゾ□六拾四匁式分
- 十六日

図81と図82には書名の略称・編数・冊数・地域・顧客の名が記載さ

れる。「淀殿実記」(図81)や「延命院」(図82)に「書」とあるのは、それぞれ書本という意であろう。図82には見料の総計も確認できる。

図83

- ・椿説弓□□□張月 □□□五合 黒崎様 (読本『椿説弓張月』)
- ・平家物語 二篇一六合 仲丁五匁分高橋様

- ・糸桜春 一五合 式匁式分羽田様 (読本『平家物語図会』)
- ・□□利生 □□四合 老匁八分 (読本『糸桜春蝶奇縁』)
- ・八丈奇談 □□六合 三匁粕川様 (読本『美濃旧衣八丈綺談』)
- ・青□石力 □□五合 式匁式分 同
- ・し□□□ひめ合 □□七 三匁□分 同
- ・嶋田一郎 三篇五迄合 式匁七分万長□様 (合巻『嶋田一郎梅雨日記』)
- ・金□□□五合 六分丁子屋□様
- ・鹿児嶋□□□六篇二合 式匁五分伊川□様 (実録『参考鹿児島新誌』)
- ・孫子□□□□八□□□合 式匁式分 完戸様
- ・さか□□□□□□合 老匁八分金物屋様
- ・□□□一代記合 式匁五分□□□□

図84

- ・秋七種 六合 老匁八分 同 (合巻『染模様秋廻七種』)

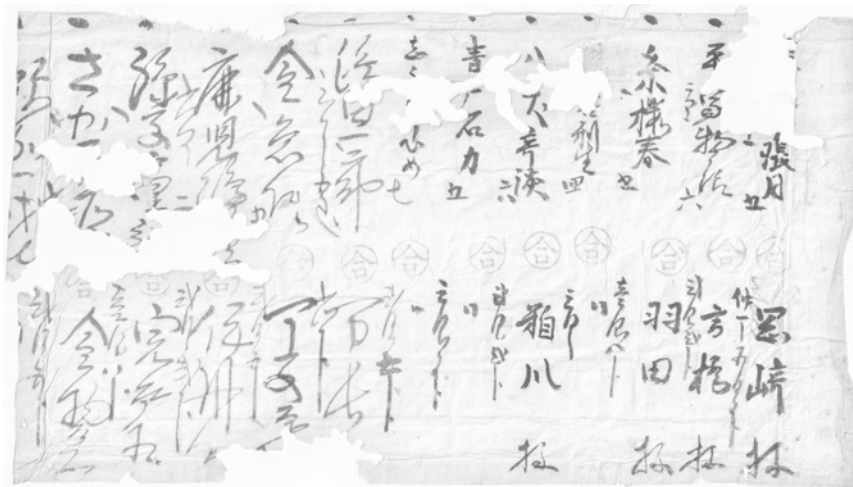


图 83

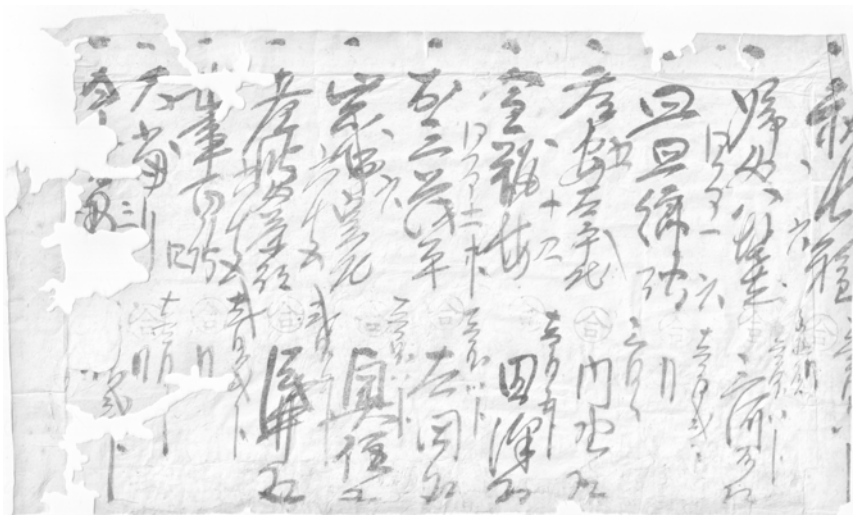


图 84

・同三篇五[㊦] 式分[㊦] 同 (読本『南朝外史武勇伝』)

・菊の井紙 初篇二篇六[㊦] 老分[㊦] 伊勢若様

(人情本『菊廼井草紙』)

・絵本朝せん 十六二十[㊦] 式分[㊦] 山城屋様

(読本『絵本朝鮮征伐記』)

・[㊦] [㊦] 実記 [㊦] [㊦] 末寺丁 式分[㊦] 東儀様

・梅花後栄記 五[㊦] 若宮丁 老分[㊦] 高野様 (実録『梅花後栄記』)

ノ五拾[㊦] [㊦] [㊦] 勿四分

[㊦] 勿式分

十八日

図83から図85も記載された項目は図81、図82とほとんど同様であるが、こちらはさらに貸本ごとの見料が示される。また、図85では図81で確認した「松本」「小泉屋」「三好」らが同じ作品の続編を借りており、二つの前後関係が窺える。

図86上

[㊦] 日

秋雨夜話 初篇 大谷

(人情本『秋雨夜話』)

[㊦] 日

北魏南梁 廿一ノ三 同人

(読本『通俗北魏南梁軍談』)

[㊦] 日

鎌倉見聞志 二ノ廿一―卅 中元

朝鮮 初篇ノ十 同人

(読本『絵本朝鮮征伐記』)

[㊦] 日

国性爺 二ノ[㊦] 十大定

[㊦] 日

[㊦] 太平記 式ノ三ノ橋本

図86下

楠公記 二ノ五 吉川

(読本『絵本楠公記』)

[㊦] 日

室の八島 書七 菊地

(読本『画本室之八島』)

[㊦] 日

楠正行 三ノ五 同人

[㊦] 日

豪傑 五 同人

[㊦] 日

廓の花笠 初篇 同人

(人情本『兩個女兒郭花笠』)

[㊦] 日

雪の梅 初篇 同人

(人情本『春色雪の梅』)

図87上

・楊の小櫛 初編 本きん屋

(人情本『操形黄楊小櫛』)



図 87



図 86

図 86・図 87 は前述したように横帳の表裏が現存しているが、様式がこれまでのものと若干異なる。記載された項目は図 81・図 82 と同様である。

当座帳を通観してみると。読本・滑稽本・人情本・艶本・実録・随筆といった貸本屋の一般的な蔵書を確認できる。また、これらは先ほどの摺物の内容とも概ね合致する。

当座帳の作成時期は不明だが、明治十三年（一八八〇）刊の榊原英吉編『明治太平楽府』があるため、少なくとも図 81 はそれ以降に作成されたものと考えられる。様式の異なる図 86・図 87 を除いたほかの当座帳も、おそらく同時期のものであろう。

さて、特定できた作品のうち、『神明角力』、『梅花後栄記』は、朝倉無声著『日本小説年表』（金尾文淵堂、明治三十九年（一九〇六）刊）及び同書を改訂増補した諸書に収められた「写本軍記実録目録」でしかその存在を確認できない。この目録は、池清を含む東京市中の二つの貸本屋が所持していた本をもとに作成されたもので、不完全ながらも貸本屋の蔵書目録としての機能を有している。つまり、当座帳と目録の双方に書名を見出せるということは、これらの作品が池清の蔵書であり、かつ朝倉無声の指す書であることを示している。

地域には「赤城」「赤城下」「津久戸」「三十人丁」「五軒丁」「仲丁」「四ツ谷」「末寺丁」「若宮丁」といった池清の居住していた細工町の周辺が多く、営業区域としては妥当といえる。

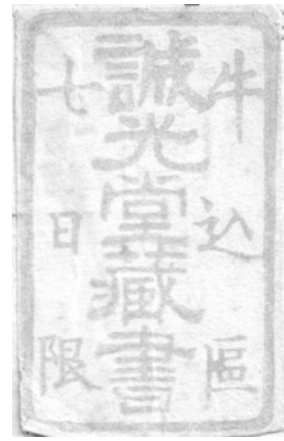


図 88 池清の蔵書票
(架蔵『春風日記』五編上巻)

見料は冊数や貸し出された期間で変わるであろうが、そのおおよその規定を推測することはできそうである。逍遙は「絵の入った刊行本は、其時分、五冊で二もんであつた」と述べていたが、絵入り本の中でも、人情本や合巻の見料は「老奴五分」(『菊廼井草紙』、『新編金瓶梅』)、「老奴八分」(『貞操婦女八賢誌』、『花名所懐中曆』)、「読本は「老奴式分」(『皿皿郷談』)、「式分式分」(『系桜春蝶奇縁』)、『南朝外史武勇伝』)、「三奴」(『絵本佐野報義録』)となっている。ほかの読本に比べて安い『皿皿郷談』という例外こそあるものの、両者は異なる見料が設定されていたようである。合巻は見料の示されたものが少ないため判断しかねるが、人情本は六冊で一奴八分前後、読本は五冊で二奴二分前後となろう。対して実録類は作品によって見料が大きく異なっており、一概に括することはできない。「老奴」(『梅花後栄記』)や「老奴八分」(『岩城実記』)のように人情本等と同程度か、それ以下の見料で借りられるものから、「三奴」(『慶安太平記』)のように倍

近くするものまである。一編あたりの巻数がある程度定まっていた戯作類に比べ、実録は作品によって冊数にばらつきがあるため、画一的な見料を設定できなかったのであろう。いずれも貸し出された期間は不明であるが、池清の蔵書票には「七日限」とあることから、期間は一律で七日間であつたかもしれない(図88)。

最後に筆跡に注目して図81から図86・図87を眺めてみると、複数の人物によって記入されていることがわかる。具体的に示せば、A(図81、図82、図83の「嶋田一郎」以降、図84)、B(図83の「し□□□ひめ」まで、図85)、C(図86・図87)の三人である。この三人が逍遙のいう「父と伴と小僧」である可能性は高いが、現段階では推測の域を出ない。いずれにしても、同一の当座帳を用いながら、同じ営業区域を一人ではなく複数人で廻っていたことは確かである。

出入帳

次は出入帳である。

図 89

- ・ 四銭 おかし
- ・ 三銭 小遣い
- メ 式拾壹銭
- メ 七百式拾四銭九厘
- 此金七円ト式拾四銭九厘

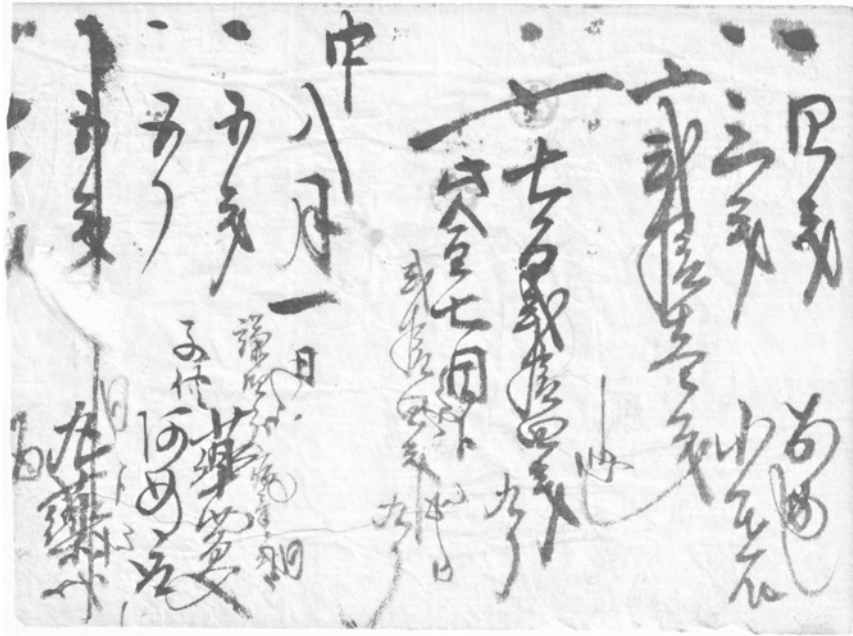


图 89

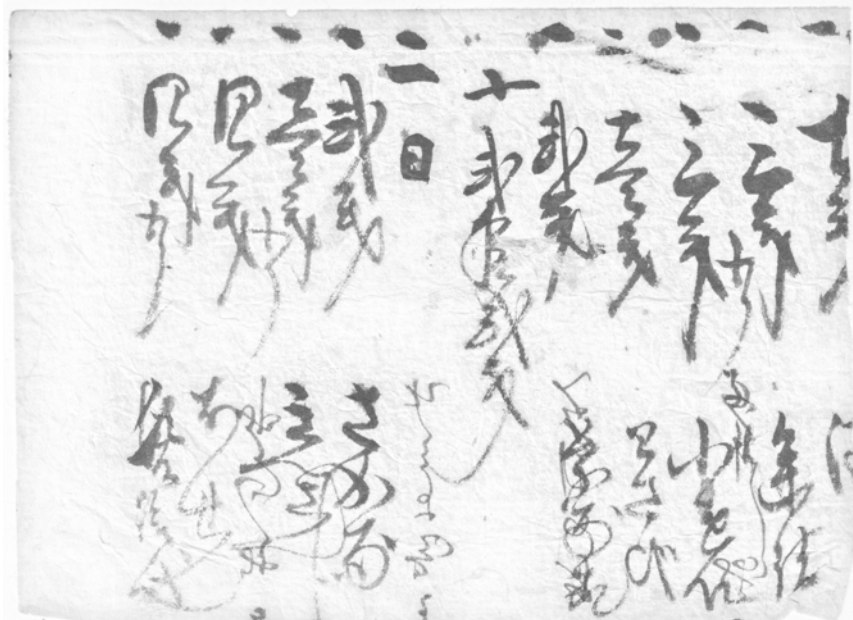


图 90

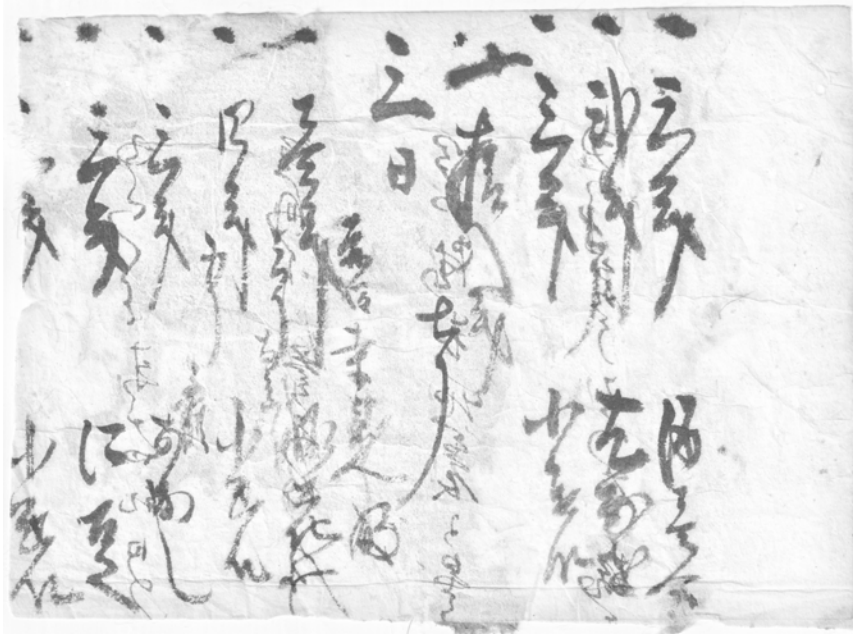


图 91

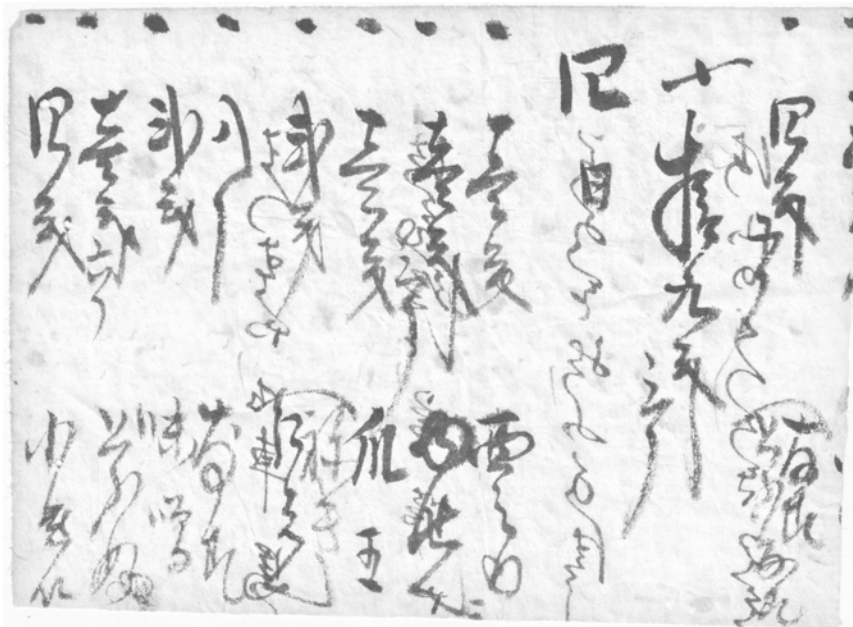


图 92

中八月一日

- ・五銭 謙次郎病氣ニ付薬買入
- ・五厘 子供あめ取
- ・五銭 丸薬代

図90

- ・七銭 酒
- ・三銭五厘 参詣
- ・三銭 子供小遣い
- ・老銭 わさび
- ・弍銭 とふなす

二日

- ・弍銭 さかな
- ・老銭五厘 きんさんじ
- ・四銭 はせ
- ・四銭五厘 髪結代

図91

- ・三銭 酒老合
- ・弍銭七厘 はなを
- ・三銭 小遣い

拾銭七厘

三日

- ・老銭三厘 花代
- ・四銭五厘 小遣い
- ・三銭 おかし
- ・三銭 に豆
- ・三銭 小遣い

図92

- ・四銭五厘 なす

四日

- ・拾九銭三厘 とふなす
- ・老銭 西之内
- ・老銭三厘 ゆせん
- ・老銭 瓜五
- ねき
- ・弍銭 に豆
- ・八厘 なす
- ・弍銭 味噌
- ・老銭六厘 とふふ
- ・四銭 小遣い

図 93

八日

- ・ 四銭五厘 髪結代
- ・ 弍銭六厘 湯せん
- ・ 老銭三厘 同
- ・ 三銭に豆
- ・ 五銭 桶屋払
- ・ 五銭 人力車
- ・ 弍拾銭 小遣い
- ノ 拾老銭

図 94

四厘

九日

- ・ 弍銭五厘 髪結代
- ・ 老銭五厘 たくわん
- ・ 弍銭 つまみな
- ・ 弍銭五厘 小遣い
- ・ 六銭五厘 小豆
- ・ 拾四銭 いけん豆
- ・ 三銭 さかな

- ・ 三銭 小遣い
- ノ 三拾四銭

十日

図 95

- ・ 弍銭五厘 下駄は入
- ・ 弍銭 しお
- ・ 三銭に豆
- ・ 三銭 小遣い
- ノ 拾六銭三厘

十三日

- ・ 老銭二厘 とふからし
- ・ 三銭 酒壺合
- ・ 三銭 きんさんじ

図 96

- ・ 老銭 て口味噲
- ・ 三銭 小遣い
- ノ 拾老銭弍厘

十四日

- ・ 三銭 酒壺合
- ・ 老銭 わらび粉

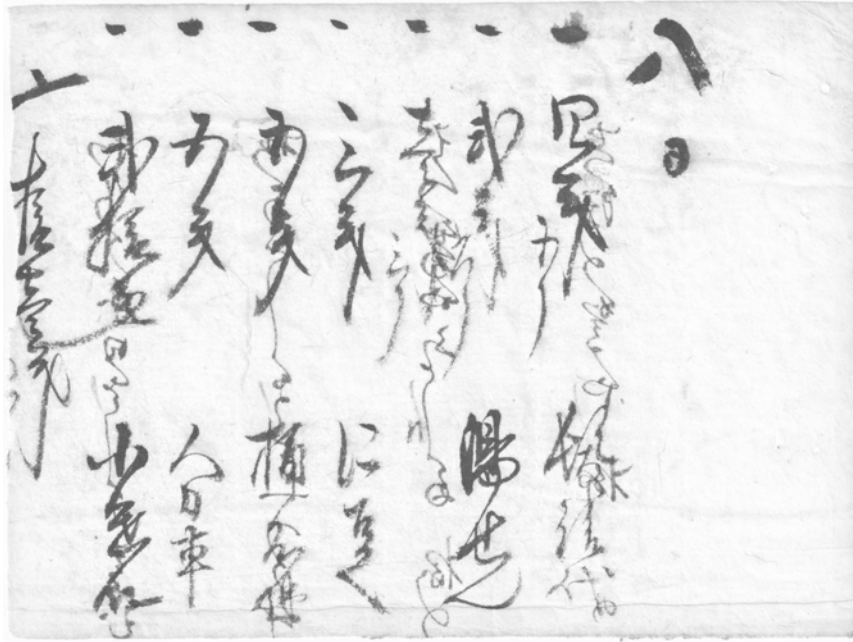


图 93

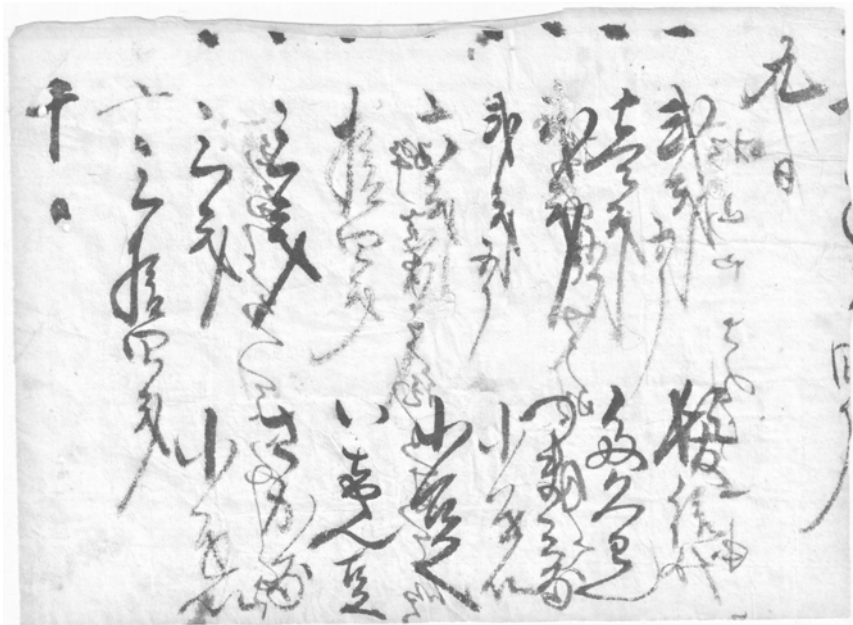


图 94

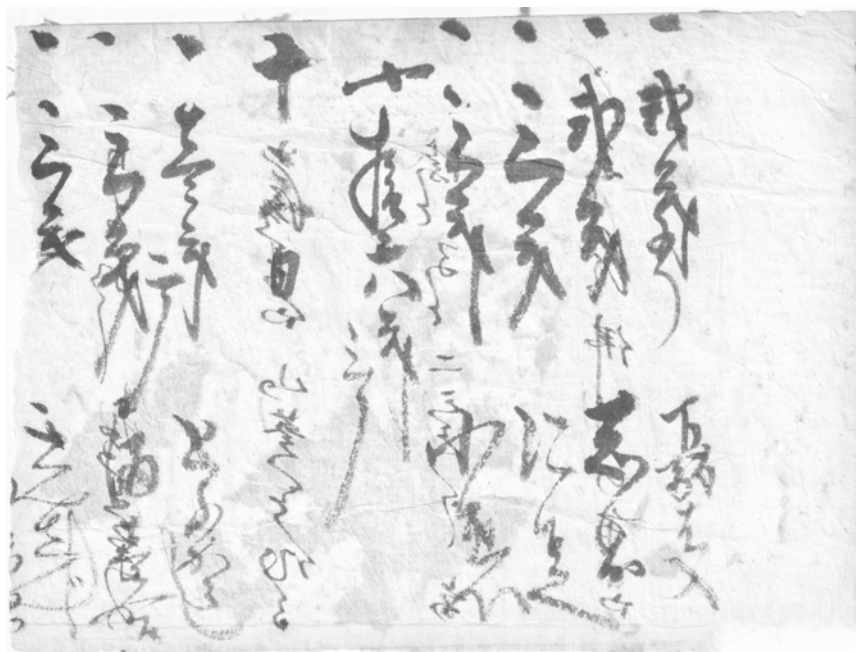


图 95

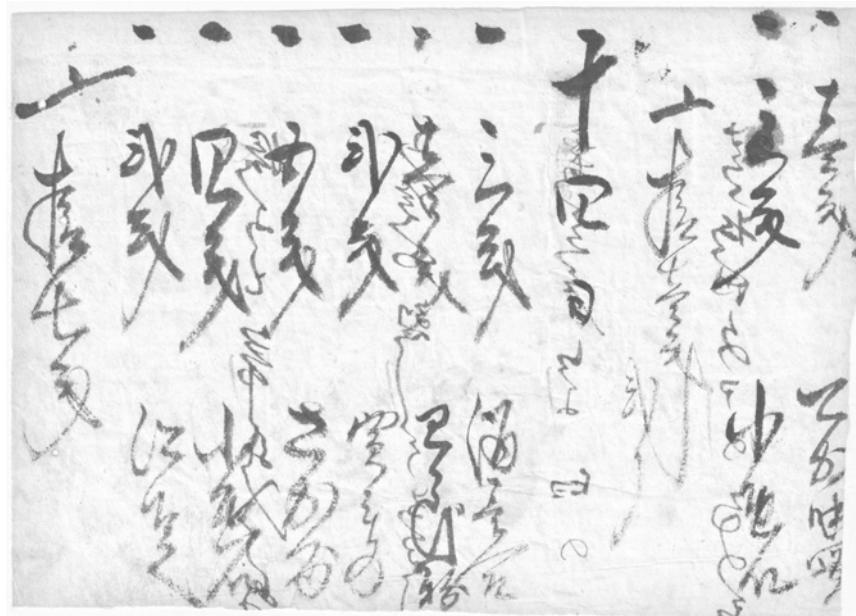


图 96

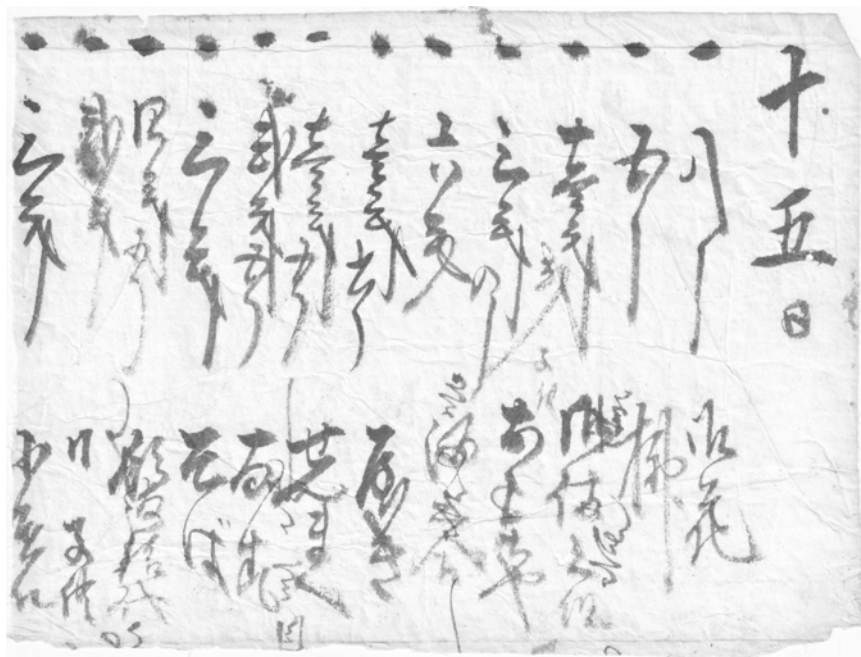


图 97

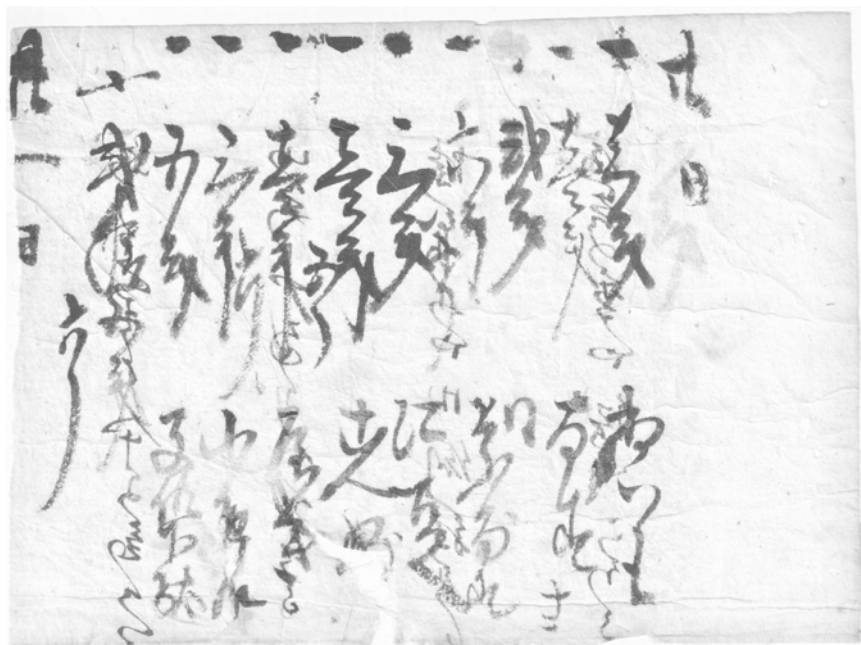


图 98

- ・ 貳銭 買もの
 - ・ 五銭 さかな
 - ・ 四銭 小遣い
 - ・ 貳銭 に豆
- △ 拾七銭

図 97

- 十五日
- ・ 八厘 御花
 - ・ 五厘 榊
 - ・ 壹銭貳厘 御供二組
 - ・ 三銭八厘 子供 おもちや
 - ・ 六銭 酒貳合
 - ・ 壹銭六厘 へき
 - ・ 壹銭五厘 せんまへ
 - ・ 貳銭五厘 なす
 - ・ 三銭 そば
 - ・ 四銭五厘 髪結代
 - ・ 貳銭 同子共
 - ・ 三銭 小遣い

図 98

廿日

- ・ 三銭 ねいも
 - ・ 壹銭 なす
 - ・ 貳銭 同
 - ・ 六銭 とふなす
 - ・ 三銭 に豆
 - ・ 壹銭五厘 こんぶ
 - ・ 壹銭六厘 へき
 - ・ 三銭 小遣い
 - ・ 五銭 子供下駄
- △ 貳拾五銭六厘
- 廿一日

図 99

- ・ 貳銭五厘 に豆
 - ・ 三銭 小遣い
- △ 貳拾壹銭
- 廿三日
- ・ 三銭 麻裏直シ代
 - ・ 三銭 茶かし
 - ・ 貳銭五厘 成田山 参詣
 - ・ 貳銭六厘 そば

- ・三銭 小遣い
 - ・老銭 なす
- ノ 拾五銭老厘

図 100

廿四日

- ・老銭 なす
 - ・老銭五厘 しお
 - ・貳銭 に豆
 - ・五銭 茶かし
 - ・貳銭老厘 湯せん
 - ・三銭 小遣い
- ノ 拾五銭老厘
- 廿五日

図 101

- ・老銭六厘 とふふ
- ・五銭 そば
- ・貳銭 髪結代
- ・五厘 御花
- ・三銭五厘 に豆
- ・老銭五厘 たくわん

- ・貳銭 なす
 - ・三銭 小遣い
 - ・八銭 小遣い
- ノ 廿八銭

図 102

- ノ 三拾三銭三厘
- 廿七日

- ・拾貳銭 さかな
 - ・三銭 堀之内 参詣
 - ・拾銭 小遣い
- ノ 貳拾五銭
- 廿八日

図 103

- ・貳銭 おかし
- ・老銭 もち
- ・老銭三厘 火打石
- ・貳銭 味噌
- ・三銭 酒老合
- ・貳銭 に豆
- ・貳銭 大□野 参詣

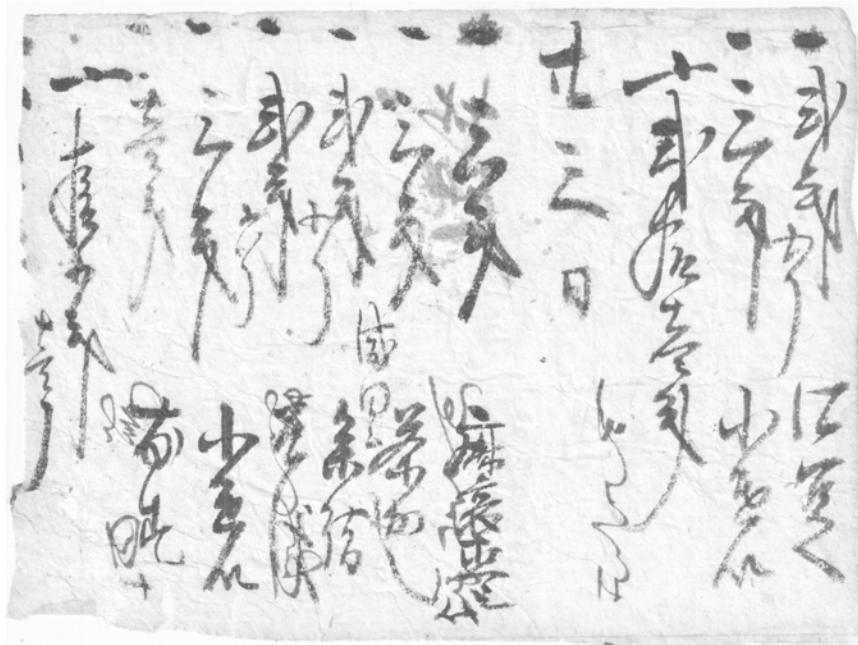


图 99

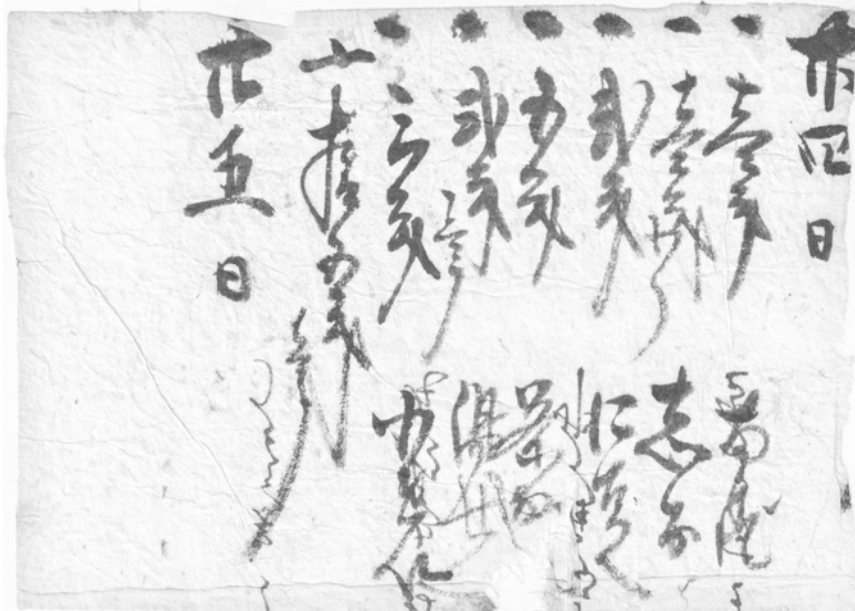


图 100



图 101

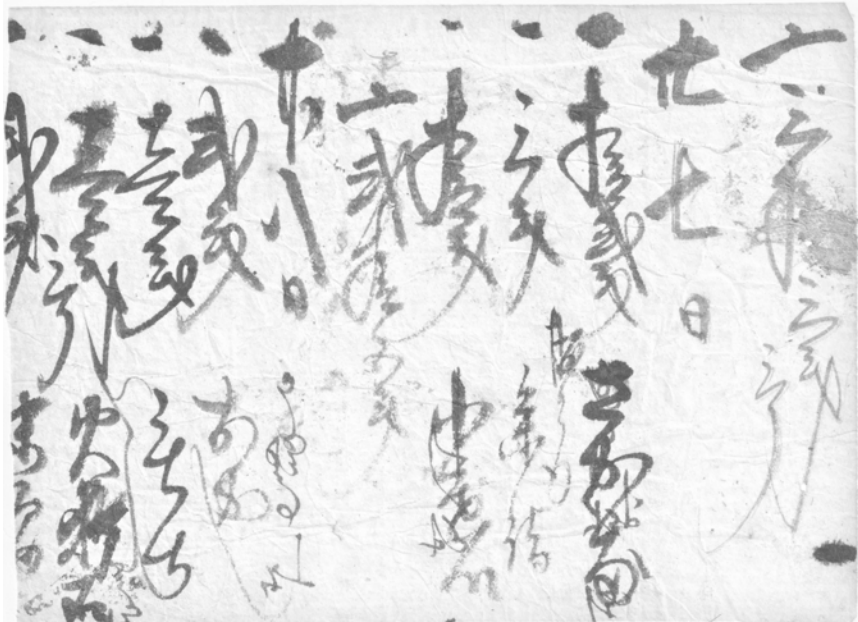


图 102

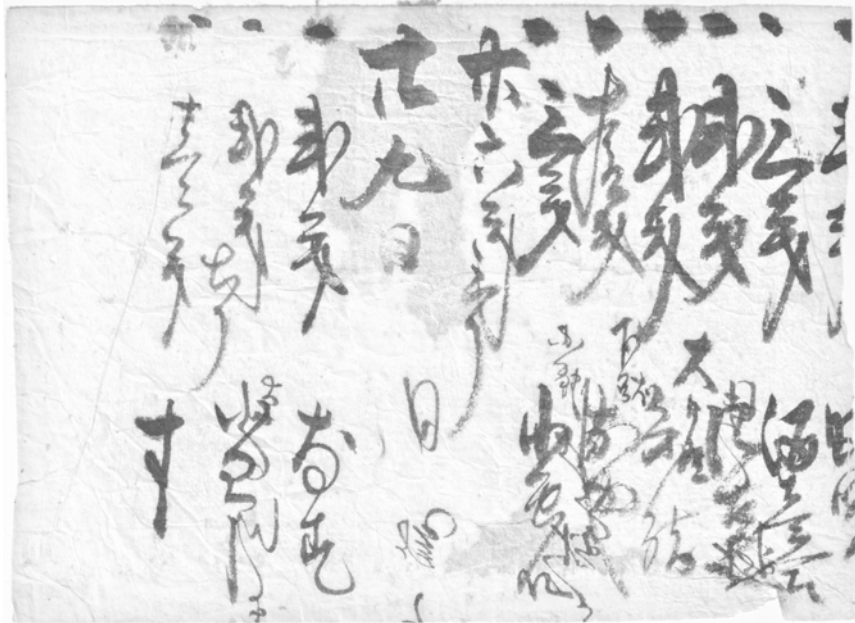


图 103

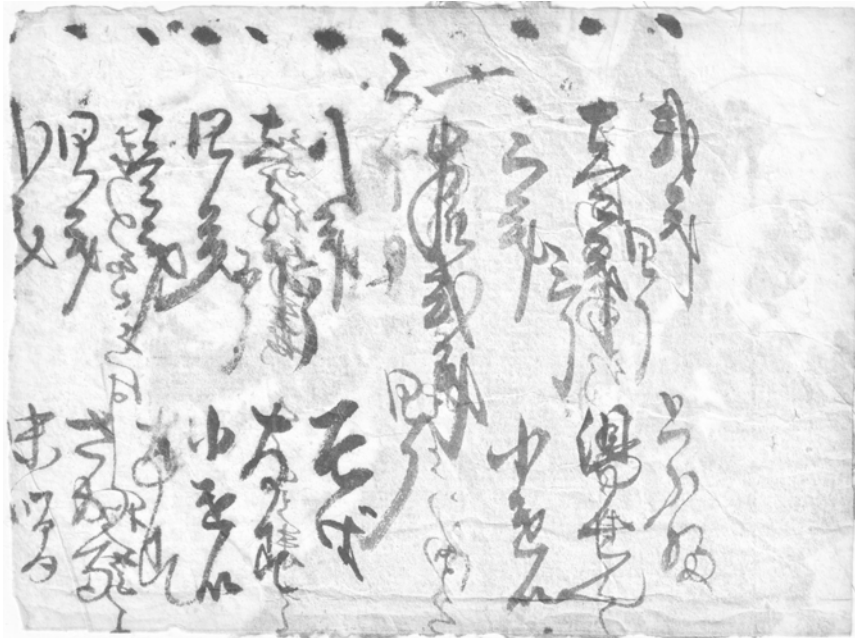


图 104

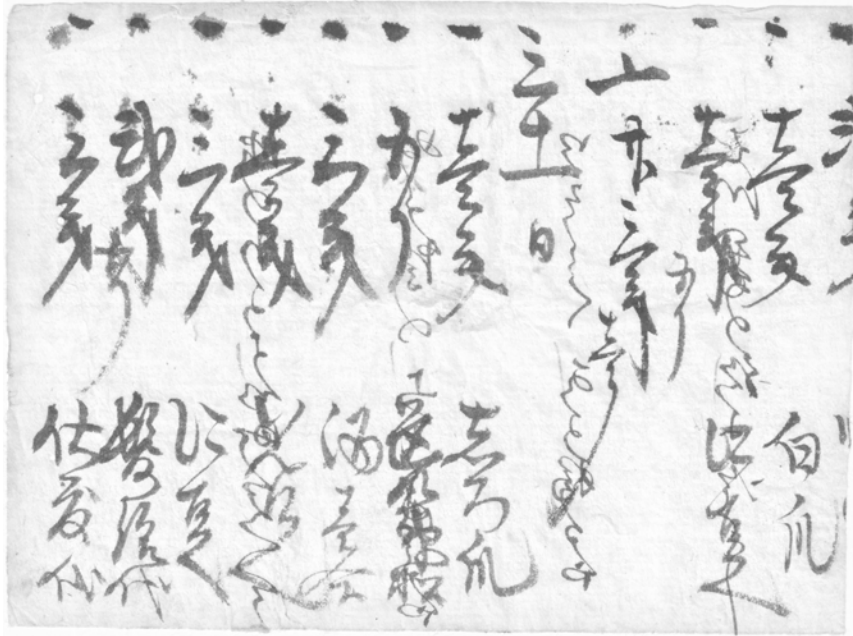


図 105

図
105

- ・ 貳銭 味噌
- ・ 四銭 さかな
- ・ 老銭 なす
- ・ 四銭 小遣い
- ・ 老銭 五厘 なす
- ・ 八銭 六厘 そば
- 三十日
- △ 拾貳銭 四厘

図
104

- ・ 貳銭 四厘 とふふ
- ・ 老銭 三厘 湯せん
- ・ 三銭 小遣い
- 廿九日
- 廿六銭 三厘
- ・ 拾銭 下駄 なほし
- ・ 三銭 小遣い
- ・ 貳銭 なす
- ・ 貳銭 七厘 いわし
- ・ 老銭 す

- ・ 壹銭 白瓜
- ・ 壹銭五厘 に豆

× 廿三銭 壹厘

三十一日

- ・ 壹銭 しろ瓜
- ・ 五厘 □□
- ・ 三銭 酒壺合
- ・ 壹銭 いんけん
- ・ 三銭 に豆
- ・ 式銭 五厘 髮結代
- ・ 三銭 仕度代

十七葉のうち、図 89 から図 92、図 93 と図 94、図 95 から図 97、図 99 から図 101、図 102 から図 105 はそれぞれ一続きのものである。日付をもとに整理すれば、出入帳には八月五日から七日、十日から十二日、十六日から十九日、二十一日、二十二日、二十六日を除いた八月一日から三十一日までの記録を確認できる。料紙の裏には点印と発句らしきものを確認できることから、句帳として使用されていた紙を再利用したものと思われる。

八月十五日（図 97）には盆で供えるためか「御花」と「榊」を購入している。新暦で盆を迎えているということは、出入帳が作成されたのは明治六年（一八七三）の改暦後ということになるのか。

ところどころ合計の合わない日もあるが、一日の支出は平均すればおおよそ二十銭。品目は蕎麦・煮豆・豆腐・魚・茄子・白瓜・金山寺味噌といった食品が多数を占め、酒等の嗜好品は僅かである。そのほかには髪結いや銭湯の利用、鼻緒や火打ち石等の日用品の購入、寺社への参詣による支出がある。こうした慎ましい生活の中でも度々「小遣い」が子供に与えられており、微笑ましい暮らしぶりを想像させる。出入帳をみる限り、決して裕福とはいえないものの、生活に困窮している様子は見受けられない。

おわりに

当座帳から池清の蔵書や顧客、牛込区界隈の営業区域をいくらか確認でき、また出入帳からは当時の生活の様子を曲がりなりにも窺い知ることができた。時代の変化に伴い、旧来の貸本屋が廃業や転業を余儀なくされた明治期においても、池清が長らく昔ながらの営業を続けられた背景には、変わることなく近世期の作品を愛読する人々の存在と、池清自身の慎ましい生活があったのである。

大正八（一九一九）年二月六日の『読売新聞』一五〇三二号には「貸本屋の婦人客 『女の生命』が全盛を極む」と題された記事がある。昨今増加した女性読者の読書傾向を探るべく、東京市内の貸本屋に聞き取りがなされているのだが、池清もその対象となっている。池清（所

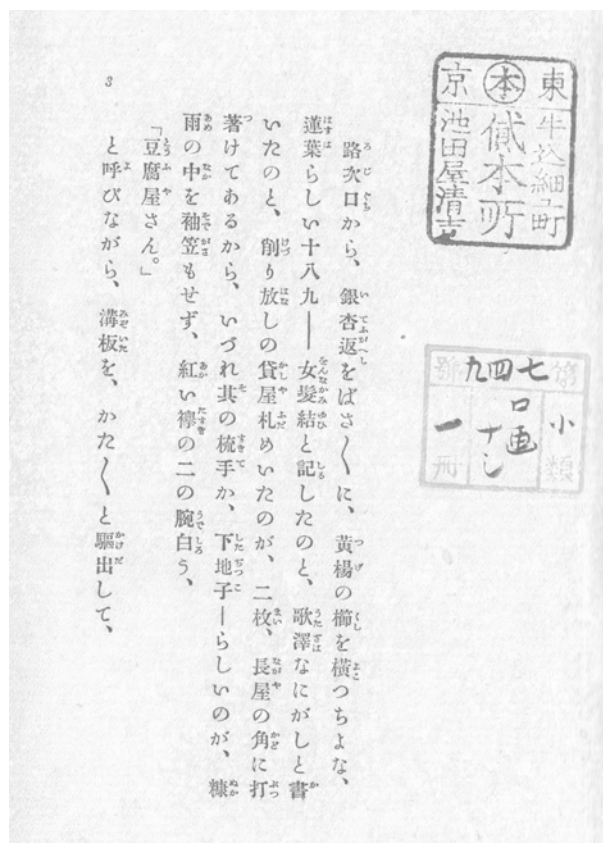


図 106 架蔵の泉鏡花作『三味線堀』

在地は牛込笹筒町)は「此家は又主として女生徒上りの若い奥さんをお得意とするだけに、月刊雑誌が割合に多く、文学的の単行本や翻訳物も相当に出る」と述べている。実際に池清旧蔵の泉鏡花作『三味線堀』(明治四十四年(一九一七)一月一日発行、靱山書店版)が手元にある(図106)。いつまでも旧来の営業を続けていたのではなく、池清は時代に合わせて蔵書内容を変えていっていたのである。

注

- 1 『沓掛伊左吉著作集 書物文化史考』(八潮書店、一九八二年)所収。初出は一九七一年。
- 2 『東京古書組合五十年史』(東京都古書籍商業協同組合、一九七四年)六一四〜六三一頁。
- 3 坪内逍遙「維新後の東京の貸本屋」『少年時に観た歌舞伎の追憶』日本演芸合資会社出版部、一九二〇年)所収。
- 4 岡野知十翁談「紙魚の跡貸本屋の巻(二)」『読売新聞』一八四九〇号、一九二八年八月二十一日。
- 5 『自己中心的明治文壇史』(博文館、一九二七年)一七四頁に「宅へは牛込笹筒町の貸本屋池田屋清吉といふのが能く来た。これから大分古い本を借りて見た。(これが江戸時代の貸本屋の最後まで遣つてゐたものであつた。)」とある。

6 『早稲田文学』第一次第一号（東京専門学校、一八九一年十月）所収の「時事評論」で「時文に多少因縁深きもの」として紹介されている。池清以外にも、貸本屋としては共益館、大川屋、本鉄、加藤、よしのや、長門屋、丸惣、本惣、桜井吉兵衛、いろはや、伊勢新等があげられる。

7 国文学研究資料館に「貸本所誠光堂池田屋清吉広告」（請求記号 ユ九・九五・一一二）として同一の摺物が収蔵されている。

8 「これ等の軍記、実録類は徳川時代の末葉、所謂貸本屋物として、我等の祖先に愛読せられしものにして、悉く写本なり、維新以来活版本出でてより、これ等の写本は世に顧みられず、現今これを有する貸本屋は東京市中僅に二軒をとゞむるのみ、しかも日々紙魚をこやし漸次湮滅に帰しつゝあり、この目録は右二店の維新の際調査せし貸本目録により後日の参考にもとて写し置けるを、こゝに附録とせるなり」（『日本小説年表』）、「貧弱な蔵書と、池清貸本店から貸借した読本や人情本を基礎として、更に図書館で閲覧した仮名草子や浮世草子を初め、『好色本目録』や『青本年表』、さては『合巻外題集』などの書目を写して、それを分類の上年代順に排列したのが、即ち旧版『日本小説年表』の稿本である」（『新修日本小説年表』）という記述による。

〔附記〕書籍の特定に際して、ご教示くださった高橋明彦・長田和也両氏にお礼申し上げます。

第三節 近代金沢における書籍受容と春田書店

はじめに

石井研堂著『独立営業開始案内』第二編¹は、「新古書籍業」「新聞雑誌取次業」「自營絵葉書絵紙業」「貸本業」の開業手引き書である。本書で貸本業は甲乙丙の三種に分けられている。「甲種持込貸本法」は店を持たずに家々や病院、温泉宿などを貸し歩いて営業するもの、「乙種通俗貸本法」は専用の店を持つ専業に加え、書籍商・煙草商・文房具商・小間物商などが兼業するものである。これら甲乙は講談本や小説類を主に貸し出すとされ、その割合は甲が講談本八割・小説類二割、乙は講談本七〜八割・小説類二〜三割程としている。「丙種高等貸本法」は専業で営業しながら、講談本や小説類ではなく、学術書や雑誌を貸し出すとしている。三種のうち「丙種高等貸本法」は今日「新式貸本屋」の名称で知られている。

明治以降の貸本文化にとって、一つの画期となったのがこの新式貸本屋の出現である。浅岡邦雄氏によれば、新式貸本屋とは次のような

特徴を有する、文字通り新しい形態の貸本屋であった。

①貸本書目として、従来の稗史小説や軍記ものなどに代わって学術書・翻訳書などの高度な内容の書物を中心としたこと、②従来の得意先廻り（御用聞き方式）とは異なり、顧客からの注文に応じて配達（出前方式）する貸出方式をとる店が多くあったこと、③多くの店が利用顧客にたいして貸本目録を作成・配布したこと、④利用読者の対象を学生層に設定し、実際学生層の利用が多かったこと、⑤前項④とも関連するが、従来の「顔のみえる」顧客から「顔のみえない」顧客が増加したこと、などが指摘できる。さらに付け加えれば、共益館、便益館、東京貸本社、博覧堂、後述の共益貸本社などにみられるように、貸本業とともに縦覧所（室）を併設する店があったことも留意しておかなければならない。

（中略）

下宿する学生達はしばしば住居を転々とし、貸本の回収に支障

をきたすことも少なくなかった。そのための予防措置として保証金前払いの方法を講じ、配達により顧客の居住を確認する必要もあつたと考えられる。²

下宿生の多い東京に特化した営業形態であるため、同様の貸本屋が全国各地に存在したわけではない。しかし、保証金をとって貸し出す方式がほかの貸本屋へも伝播しているように、その影響は少なからずあつたようである。

この新式貸本屋については、浅岡邦雄・鈴木貞美両氏による編著『明治期「新式貸本屋」目録の研究』³で詳述されているほか、図書館的側面を持ち合わせていたことから、図書館史においても注目されている。⁴一方で、新式貸本屋の影響を受けながらも、娯楽読み物を提供し続けた甲乙にあたる貸本屋については、これまでほとんど研究がなされてこなかった。しかしながら、そうした貸本屋の蔵書内容や実態の解明なくして、近代における娯楽読み物の受容を明らかにするのは難しいであろう。

そこで本稿では、貸本に供された娯楽読み物が数多く現存している金沢の春田書店を取り上げる。金沢における出版の研究は、近世期を中心にすでに蓄積がなされているものの、近代は未だ発展途上の感がある。⁵春田書店を取り上げることで、近代金沢における貸本文化のみならず、同地における出版ひいては書籍受容の一端をも浮かび上がらせることができよう。

一、春田篤次・徳太郎から春田書店へ

現段階で「春田書店」の名を史料や書籍に見出せてはいない。この名は後述する石川県立図書館辻家貸本文庫の書籍に貼付された票によるものである。しかしながら、その淵源を辿れば、近代金沢における教育にも影響を与えた、卯辰山集学所とも関係の深い春田篤次へと行き着くと思われる。⁶

加賀藩には藩校明倫堂のほか、庶民をも対象とした教育機関である集義堂・小松修道館などの郷校があつた。卯辰山集学所はこの郷校の流れを汲む庶民教育機関として、慶応三年（一八六七）卯辰山に設立された。漢学のほか習字（筆学）と算術が教えられており、増減はみられたものの常に一五〇名程度の生徒がいたという。東修や謝儀は徴しておらず、有志者からの出資金をもとに経営されていたが、明治三年（一八七〇）には改組され、卯辰山小学所となった。この卯辰山集学所の設立に尽力したのが、当時町年寄であつた成瀬長太郎と米沢喜六、そして春田篤次であつた。

金沢で営業していた書肆のリストである柳川昇爾「江戸中頃以降／金沢に於ける書林展開表 稿」⁷には、「春田徳太郎 篤次 明治12—昭和17」と記されている。後述するように、確かに書籍から窺える活動開始時期は徳太郎の方が早い。だが、卯辰山集学所の設立に関与し

ている点や徳太郎よりも短い活動期間などから、先んじるのは篤次であつたと考えられる。

編輯并出版人として、明治十二年（一八七九）十月出版御届『大日本地図明治道中記』⁸に関わっているのが篤次の最初の仕事である。本書はほかに金沢の書肆鍵崎半蔵と池田源太郎の二人を出版人とする。この時点では「石川県金沢区観音町壱丁目八番屋舗」に居住しているが、明治十四年（一八八一）刊の春田徳太郎版『百人一首大和錦女教訓草』⁹を著述した際には、所書きが「加賀国金沢区御歩町三番丁九番地」となっている。翌明治十五年（一八八二）八月には、単独で琢蒼梵阿訓点『三部妙典』を出しているが、こちらは京都の丁子屋北川宇兵衛版『正三部妙典』（明治十四年（一八八一）八月刊）の求版本であり、自身で開版したものではない。出版物をみる限りでは、春田篤次は明治十年前後から出版業に携わっている。しかし、出版物の少なさから本業はほかにあつたと思われる。

和田文次郎著『郷史談叢』¹⁰には「江戸三度京都三度の両者を合併して更に荷物運送業を始めたのが春田篤次等が十間町の中程に設置した店であつて其建物全部は後年に至つて内国通運会社の金沢支店となつた」とある。内国通運会社金沢支店は、北陸地方における貨物輸送を目的として設立された北陸道陸運元会社を、明治七年（一八七二）に後の内国通運会社である東京陸運元会社が合併して生まれた支店である。この合併の際、北陸道陸運元会社の株主四十七人に対して、東京陸運元会社の株式が割り当てられた。総株数一三〇株のうち、二番目

に多い九株を有するのは春田篤次である。¹¹ 詳細はまだ不明ながらも、おそらく春田篤次の本業は運送関係であり、その片手間として出版業へと参入していったのであろう。

春田篤次は、ほかに「臥龍房」あるいは「臥龍書房」名義で出版された書籍へも関与しているようである。臥龍房としては関口開著述『点竄問題集』初編（明治五年（一八七二）三月刊）、臥龍書房としては大橋若水著『本朝三字経』（嘉永六年（一八五三）序）、梅岳山人輯『漢語便覧』（明治三年（一八七〇）序）、大屋愷鼓著『万国名数記』（同四年（一八七一）序）、三国準輯・児玉徳校『詩礎階梯』（刊年不詳）などの書籍がある。これらは全て奥付を有しておらず、見返しに「臥龍房蔵」「点竄問題集」初編、「臥龍書房」「本朝三字経」、「臥龍書房梓」「漢語便覧」、「臥龍書房蔵板」「万国名数記」、「臥龍書房蔵」「詩礎階梯」とそれぞれあるだけである。『本朝三字経』は求版本である。そのため、ほかも同じく求版本であつた可能性が考えられる。園部昌良氏は、卯辰山の別称「臥龍山」に因む「臥龍房」「臥龍書房」が、卯辰山集字所あるいは同地にあつた錦絵所であつた可能性を指摘している。¹² しかし、当時すでに卯辰山集字所は改組されていて存在しない。また、氏の引用している「卯辰山開拓図新版の錦絵歌かるた書籍類を造出す」という『卯辰山開拓録』（明治二年（一八六九）刊）の記述から、錦絵所で書籍が取り扱われていたのは確かだが、「造出」という言葉からは出版業を些か連想し難い。そこでここでは、『点竄問題集』初編の改正版にあたる『改正点竄問題集』初編（明治十年（一

八七七）一月再刻）に注目してみたい。

『改正点竄問題集』初編の見返しにも「臥龍房蔵版」と記されているが、奥付には「明治五壬申年三月新刻／同十丁丑一月再刻／著述

石川県第十大区小七区金沢堅町 関口開／出版主 同県同区小区観音

町 春田徳太郎／同 同県小二区森下町 米沢喜六¹³とある。春田徳

太郎は篤次の後継と目される人物、米沢喜六は卯辰山集字所の設立に

尽力した人物の一人である。この奥付からわかるように、『改正点竄

問題集』初編は卯辰山集字所に関係した人物とその関係者によって出

版されているのである。ここから「臥龍房」「臥龍書房」は、春田篤

次と米沢喜六に春田徳太郎を加えた三者による共有名義であったと考

えたい。同名義で蔵版されている書籍が、いずれも卯辰山集字所で教

えられていた漢学や算術に関する内容であるのはその証左である。彼

らは卯辰山集字所なき後も、関連する書籍を蔵版・発行しながら教育

と関わり続けたのである。

篤次の後継と目される春田徳太郎の最初の出版物は、金沢の静遠堂

から求版した菊溪道人輯『詩語爛錦』である。本書の奥付に「明治九

年十二月版權免許／出版人 加賀国金沢観音町 春田徳太郎¹⁴とある

ことから、春田篤次と同時期に同じ観音町で営業していたようである。

その後、前述の『百人一首大和錦女教訓草』や『改正点竄問題集』初編

のほか、『新編広集字書』（明治十年（一八七七）五月再刻）、『新撰正文

章軌範』正統編（同十九（一八八六）一八八七）刊）、『新選統

文章軌範』（同二十年刊）などにも徳太郎は携わっている。架蔵する

『新編広集字書』の奥付には「明治六年十一月刻成／同九年二月版權免

許／同十年五月再刻／加賀金沢安江町 近田太平／同上堤町 山田耕

吉／同町 中村喜平／同森下町 米沢喜六／同観音町 春田徳太郎¹⁵

とある。末尾で米沢喜六と春田徳太郎が名を連ねている点は、両者の

「臥龍房」「臥龍書房」としての結びつきが窺える。携わっている出版

物の点数は篤次より多いものの、自ら開版したと思しいのは『百人

和錦女教訓草』だけである。おそらく、春田徳太郎は出版業が主たる

業務だったのではなく、書籍の取次・販売や貸本業、そして古本業な

どを経営の柱としていたのであろう。

『新編広集字書』には三刻にあたる『新編広集字書大全』がある。

その奥付に「明治六年十一月刻成／同九年二月版權免許／同十年五月

再刻／同十五年四月三刻／出版人 加賀国金沢区御徒町三番丁九番地

／石川県平民 春田徳太郎／売捌所 同書林出塵／同区尾張町十五番

地¹⁵とあるように、春田徳太郎は明治十五年（一八八二）四月には尾

張町に書店を持っていた。次節で取り上げる辻家貸本文庫の書籍にみ

られる票と蔵書印から、この出店がやがて春田書店と改称して存続し

たのだと考えられる。大正十二年（一九二三）一月現在『全国書籍商

組合員名簿』¹⁶には「同（筆者注 金沢市）尾張町 無尽堂 春田徳太

郎」とあるのを確認できるが、大正十五年（一九二六）四月現在『全

国書籍商組合員名簿』¹⁷には、石川県書籍雑誌商組合員として「同（筆

者注、金沢市）尾張町八七（振沢三一五三） 無尽堂 春田治正△」

とある。大正十五年までの間に尾張町の店は、春田治正なる人物が店

主となっていたようである。

二、貸本屋としての春田書店

石川県立図書館の特殊文庫には、辻家貸本文庫と名付けられたコレクションがある。『石川県立図書館報いしかわ』二九六号によれば、明治から大正にかけて出版された講談本や小説を中心とする文庫で、その整理は二〇〇九年ごろに完了したとある。同文庫の書籍には「春徳」(円形朱印、一・一糶×一・一糶)のほか、「春田」(楕円形朱印、一・一糶×〇・九糶)、「春」(枠なし朱印、〇・六糶×〇・六糶)などの蔵書印が押捺され、巻末には「春田書店／金沢市尾張町／第 号／売価 円」と印字された票が貼付されている。票の余白には「消毒省署承認／證／玉川警察署」印が押捺され、承認を受けたと思しい日付とその際の整理番号が墨書されている。貼付された票や「春徳」印によって明らかのように、辻家貸本文庫は春田徳太郎の出店であった春田書店の旧蔵書である。しかも、書籍のほとんどは貸本に供されており、その痕跡を多く残している。近代における娯楽読み物主体の貸本屋を知る上で、本文庫の存在は大きいといえよう。

「春田書店旧蔵書一覽」を本稿に附録した。請求記号順に配列し、書誌事項に加えて書籍に残された痕跡をもとに保証金・見料などをまとめている。総数は四五〇点四七六タイトルに及ぶ。次節で取り上げ

るとおり、貸本業だけでなく古本業も兼ねていた春田書店は、『独立営業開始案内』第二編の分類に従えば「乙種通俗貸本法」となる。貼付された票の番号が一二九九までであることから、現存している旧蔵書は少なくとも実際の三分の一程度でしかない。だが一覽をみる限り、蔵書は講談本と小説類とを中心に構成されている。割合はともかくとして、その内容は乙種の特徴どおりである。それぞれの書籍には、次にみるような貸本に供されていた痕跡が残されている。

まず表紙と装訂である。なかには原装のものもあるが、厚手の紙を用いた改装表紙を拵え、四つ目綴じに綴じ直している場合がよくみられる。これは度重なる利用に耐えうるよう、書籍を保護・補強する目的で貸本屋がよくおこなう方法である。静岡大学附属図書館の貸本屋旧蔵コレクションにも、同様の装訂に改装されているものが多くある。¹⁹ただ洋装本はこの限りでない。

次は摺物と墨書である。表紙には保証金と見料、利用上の注意に関する四項目が印刷された摺物が貼付されている。矩形の子持枠に「記／一保証金／一一日見料 銭 厘／一已上五日ヲ増ス毎ニ金 銭 厘宛ヲ申受ケ候事／一落書毀損等ハ其多少ニ依リ損料申受ケ候事」とあり、「二保証金」の下にはそれぞれ定められた金額が記載されている。延滞料金にあたる三つ目の項目は、実際には適用されていなかったらしく、料金部分には「〇」が記されている。摺物が貼付されていない場合は、同内容の文言が表紙や見返し、あるいは扉などに墨書されている。

最後は蔵書印である。押捺されている印の種類は前述のとおり。これらの印は本文部分のみならず、口絵・挿絵にも押捺されている。これは所蔵者を示すだけでなく、利用者による口絵・挿絵部分の切り取りを防止するためもある。同一箇所にくくつもの異なる印が押捺してあるが、それは何回かに分けて蔵書の点検がなされていたためであろう。なお、摺物や墨書がなく、票と蔵書印しかみられない書籍が半数近くある。これらも貸本に供されていたと思われるが、なぜ票と印しかないのかは不明である。

摺物や墨書の内容によれば、春田書店の貸し出し期間は一律五日間で、書籍によって異なる保証金と見料を設けている。たとえば、保証金五十銭、見料七銭で貸し出されている14は、奥付に「定価金卅五銭」とあり、同じ料金設定の32は奥付に「定価金四拾銭」とある。奥付に記載された定価にいくらか上乗せした金額が保証金とされているようである。だが、ここで注意をしておかなければならないのが、春田書店の保証金・見料の多くは一度改正されているという点である。摺物や墨書の料金部分は、その多くが紙を貼り付けたり、もしくは線を引いたりするなどした後、新たな料金を書き加えて割印（「春田」印を使用）を施されている。改正前の料金と定価がわかるものうち、37・74・146・147・148は二つの金額が合致する。本来は定価にあわせて保証金を設定していたのであろう。なお、なかには価格の訂正がおこなわれていないものもある。それらは大抵定価そのままの金額を保証金としている。

保証金に対し、見料は何を基準に設定されているのか判然としない。同じ見料でも異なる保証金となっている場合が間々みられるのである。ある程度の基準はあったのだろうが、ことによると人気の多少によっていくらか色がつけられているのかもしれない。

さて、改めて蔵書内容に注目してみると、その全てが活版本であり、整版本と思しき書籍は一つとしてみられないことに気付く。春田書店が営業していたと思われる明治末年から大正において、整版本は貸本屋の蔵書から姿を消してしまっているのである。蔵書の柱である講談本は、玉田玉秀齋・神田伯龍・石川一口・錦城齋貞玉・旭堂小南陵・揚名舎桃李などの名が目立つ。対して小説類は黒岩涙香・村上浪六・田口菊汀・小杉天外・江見水蔭・丸亭素人・徳田秋声・菊池幽芳・半井桃水らの著作が多い。金沢という地域性は特に感じられず、当時人氣のあつた書籍が多く所蔵されている印象を受ける。明治三十年代に栃木県烏山町で貸本業を営んでいた越雲商店では、『文芸倶楽部』や『新小説』なども貸し出されていたが、²⁰現存する蔵書をみる限り、春田書店は雑誌を取り扱っていないようである。

近代に限らず、貸本屋の旧蔵本がこれほどまとまって現存している例は珍しい。『独立
自営営業開始案内』第二編や同時代の回想類から、娯楽読み物を主体とする貸本屋の蔵書傾向は漠然とだが知られてはいた。今回判明した春田書店の具体的な蔵書内容と保証金・見料により、そうした漠然とした認識を歴然たる形で示すことができたのではなからうか。当時人々が実際に何を手に取り読んでいたかは、こうした貸本

屋の実態から浮かび上がってくるのである。

三、春田書店の仕入れと古本業

さて、春田書店は貸本に供する書籍をいつ、どこから仕入れていたのだろうか。それを知るための痕跡が書籍には残されている。

まず仕入れた時期は、奥付に墨書あるいは鉛筆書きで書き入れられた符牒が参考になる。仕入れた年と書籍に附された通し番号と思われる数が符牒で記されているのだが、その多くは残念ながら解説できていない。だが、なかには「メ」「大」などわかりやすく年号が記されている場合がある。

明治年間の仕入れを示す符牒には、「メ卅二、二十五号」(96)、「メ三十五、十七号」(190)、「メ三十六、三十号」(47)、「二冊メ三十六三十一号」(77)、「メ三十七、十三号」(190)、「二冊メ三十八、三十号」(9)、「メ三十九、三冊六十九号」(420)、「メ四十一、三十号」(44)、「メ四十二、十四号」(247)、「メ四十二、十二号」(284)、「メ四二、五十六号」(95)、「メ四十四、八号」(434)、「メ四十五へ二十二号二冊」(251)、大正年間の符牒には「大老「モ上下」」(220)、「大正二年へ十三号」(234)、「大正二年二冊へ二十六号」(387)、「大正二へ三十号二冊」(431)、「大正三、十一号」(110・158)、「大正三、五十号」(433)、「大正四年十月六号」(154)、「上下大五、二十四号」(357)、「大七、五号」(97

、「大七、十号二冊」(120・121)、「大七、十一号」(34)、「上下大八、十五号」(161)、「三冊ニテ大八、三十七号」(204)、「二冊大九、三十号」(75)、「二冊大九、九十号」(56)、「大十、二十五号」(403)がある。「メ卅二、二十五号」は明治三十二年(一八九九)に二十五番目に、「大老「モ上下」」は大正元年(一九一〇)に上下巻を仕入れたという意であろう。これらの符牒により、明治三十二年から大正十年までの仕入れを確認できる。

仕入れ先については、書籍に押捺された仕入印が参考になる。仕入印には「もり井堂」(27)、「金沢 池善」(94)、「近八書房」(128・435)、「雲根堂」(365)、などがある。それぞれ「もり井堂」は金沢尾張町の紀陽館森井愛之助、「金沢 池善」は南町の観文堂池善平、「近八書房」は横安江町の近八郎右衛門、「雲根堂」は尾張町の雲根堂書店の仕入印である。また、貸本屋からの仕入れもあったようである。たとえば、73には「書籍 加賀国金沢／□□与兵衛／横堤町」、52には「金沢市／田中書店／中町」、165・427には「石川県金沢市／橋場町十三番地／書林湊文堂」といった貸本屋の蔵書印が押捺されている。おそらく、廃業に伴い書籍を手放すこととなった貸本屋から手に入れたのであろう。

以上のように、春田書店は貸本屋を含めた同じく金沢の書肆から書籍を仕入れている。しかし、当時は流通網が発達しており、版元によつては郵便を利用して貸本屋と直接取引をするものもいた。²¹当然ながら、春田書店もそうしたルートからも書籍を入手していたと思われる

るが、旧蔵書からその痕跡を見出すことはできない。関連する史料の発見を俟ちたい。

最後に春田書店の古本業についてみていきたい。

辻家貸本文庫には、貸本に供されていくうちに破損した部分を書袋や帳簿の紙片で補強している書籍がある。この帳簿は、無造作に裁断されているため、判読の難しいところが間々あるものの、「年月日」「品目 代価」「冊数」「買受譲受人住所氏名」「年月日」「売渡代価」「売譲事故」が印字された用紙を用いている。『自立営業開始案内』第二編の「古本商開業案内」には、「古本商営業の許可を得ますと、先づ三種の帳簿を調製し、それに、警察官の検印を受けなければなりません。東京市内ならば三種とも紙屋に行けば出来合があります」として「物品買受譲受明細帳」「物品売渡譲渡明細帳」「物品預り帳」の図が示されている。辻家貸本文庫の書籍にみられる帳簿は、いつ、何を、いくらで、誰から手に入れ、いつ、いくらで売ったかが、一枚でわかるよう「物品買受譲受明細帳」と「物品売渡譲渡明細帳」を合わせた書式となっている。おそらくこの帳簿も地元の紙屋で出来合を入手することができたのであろう。こうした帳簿の存在により、春田書店が古本業を兼業していたことが判明する。

「品目 代価」と「買受譲受人住所氏名」が記されていると思われる帳簿の紙片に注目し、具体的に春田書店が取り扱っていた書目と利用者を浮かび上がらせてみよう。

まず、記された書名を拾ってみると、「伊豆屋騒動」「英語会話へん」

「幾何教科書」「訓蒙代数学」「皇国史要」「高等小学歴史」「高等読本字解」「古今和歌集」「国家生理学」「三角法」「算数早学」「斯氏農書」「四声字林」「斯丹礼伝」「実業用文」「十体千字文」「習文軌範」「小動物学」「少年文集」「初等英文典」「初等代数学」「字林玉篇」「真景累ヶ淵」「新撰日本地理」「新約聖書」「スインソンリーダ 元板」「スインソンリーダ四」「朝鮮革新策」「兵要地誌」「代数教科書」「帝国新地図」「中等国文」「東京府分図」「動物通解」「内閣字府」「ナシヨナルリーダ四直訳コギ」「七人の惨殺」「涙のふち」「日新用文」「日本外史」「日本略史」「万国地理」「文章キハン講義」「文章軌範輯釈」「文章梯航」「平面幾何」「明治いろは字典」「明治太平記」「立体キカ学」「聯珠詩格」「和算階梯」(以上、五十音順)などがある。また、雑誌と思われるものには、「太陽」(二ノ十三)「二卷ノ十五」筆戦場「早稲田文学」がある。博文館の『太陽』は第二卷十三号と同卷十五号である。いずれも明治二十九年(一八九六)の刊行である。また、先の書籍のうちで最も後年に刊行されているのは明治三十五年(一九〇二)刊の有馬驍・陶山織家著『言文一致少年文集』(修文館)である。これら『太陽』と『言文一致少年文集』の存在から、帳簿は明治末年ごろに用いられていたものであると思われる。

さて、取り扱われているのは「真景累ヶ淵」「七人の惨殺」(孤舟漁隠編『七人の惨殺』カ)、「涙のふち」(欠伸居士著『涙の淵』カ)、「明治太平記」など娯楽的な読み物もあるが、学習に供される書籍の方が圧倒的に多い。教科書類もみられることから、その多くは学校用書籍

であろう。どの書籍かはわからないものの、帳簿の紙片には「売渡代価」に記されたと思しい代価も記されている。こうした学校用書籍を古本で買い求める者もいたのである。なお、帳簿にみられた書籍のうち、『^{商家}要算商用算法早学』（池善平、明治十九年（一八八六）刊）、越田善七著『和算階梯』（中村喜平ほか、明治十一年（一八七八）刊）は金沢の書肆による刊行である。金沢で生まれた書籍が、同地域内で循環している様子を看取できよう。

次に「買受譲受人住所氏名」へ記載されたと思しい住所から地名を拾ってみる。最も多いのは「本市」つまり金沢市の町々で、西町・南町・母衣町・材木町・七宝町・英町・常磐町・中堀川町・裏伝馬町・上胡桃町・彦三町・池田町がみられる。そのほか、石川郡松住町・御手洗村、越中礪波郡・能州珠洲郡飯田町・見付村などがあり、金沢だけでなく近隣の地域からの「買受譲受」も受け付けていたようである。

同じく「買受譲受人住所氏名」へ記載されたと思しい名前には、石井文太郎・石川敬義・池善平・市井祐治・稲坂秀松・関金太郎・高嶋一郎・多田国蔵・田中貞吉・南一栄・松本弥一郎・元谷六松・森井愛之助・八田栄吉・横川勇太郎・吉田嘉助・吉野与太郎がある。このうち、石川敬義と池善平、森井愛之助は金沢の書肆である。ほかの者は何者かわからないものの、不要となった書籍を春田書店へと「買受譲受」した普通の人々であろう。取り扱い書目に学校用書籍が多かったことから、あるいは学校を卒業した者たちであったかもしれない。いずれにせよ、春田書店は同業者のみならず広く一般に向けた営業もし

ていたのである。

帳簿によって明治末年ごろにおける春田書店の古本業のみならず、当時実際に金沢で受容されていた書籍を窺い知れた。貸本で娯楽的な読み物を人々に提供する一方で、学校用書籍を古本として売買していた春田書店は、金沢における娯楽と教育を根底で支えていたといっても過言ではあるまい。

おわりに

春田徳太郎の本店が、その後どうなったかはわかっていない。だが、その出店であった春田書店は、少なくとも大正ごろまで営業しながら、貸本・古本をとおして人々に書籍を供給していた。今や名前すら伝わっていない微々たる存在だが、少なくとも近代金沢においては、人々に必要とされていた書肆だったのである。

春田書店のように、流通の末端に位置しながらも、地域の書籍受容を支えていた書肆は確かに存在した。彼らをとおして書籍を受容していた者がいる以上、その存在を無視することはできない。しかしながら、彼らの軌跡を辿るのは容易でない。辻家貸本文庫という手掛かりがなければ、春田書店の名前すら知ることができなっただけに違いない。書籍のみならず、あらゆる史資料を駆使して歴史に埋もれた書肆を掘り上げていく必要がある。彼らの存在に光をあて、その果たした役

割を明らかにしたとき、はじめて地域における書籍受容の様相が明らかになるのである。

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
1900.3.29(7版)				13.8.30	846		
1899.11.29(6版)			タ十七号	13.8.30	848		
			メ三十九、三冊六十九号	13.8.30	882		
				13.8.27	694		
				13.8.27	681		
	50 銭	10 銭		13.8.30	889		
	40 銭	8 銭		13.8.30	852		
1893.1.28(再版)	70 銭	15 銭	ニノヲモ	13.8.27	667		帳簿紙片あり
1893.3.25(3版)	70 銭	15 銭	ソ十号	13.9.1	1012		
1894.5.13	50 銭	4 銭	ロ十号	14.10.3	227		
1901.10.10(再版)				13.8.27	678		
1902.11.25(3版)	70 銭	15 銭		13.8.27	705		
1901.9.15				13.8.27	719		
1908.10.26(10版)	70 銭	15 銭	大正二へ三十号二冊	15.10.3			
1909.4.28(7版)	70 銭	15 銭	二冊大正二、三十号	15.9.30			
	1 円 20 銭	20 銭	大三、五十号	15.9.27			
	60 銭		メ四十四、八号				帳簿紙片あり
1894.1.2	50 銭	10 銭	二冊レ廿五号	13.8.30	883		
	50 銭	10 銭		13.8.27	733		
1901.9.25(3版)	50 銭	7 銭	タ廿三号	13.8.27	688		
1896.12.25(3版)				13.8.27	664		
1898.3(6版)			二冊カ三十五号	13.8.30	890		帳簿紙片あり
1899.9.11(8版)			二冊カ三十五号				帳簿紙片あり
1903.12.28	2 円 50 銭	25(20)銭	ヲ四十号	15.3.5	518		
1893.3.6			二冊ヨ二十五号	13.8.27	676		帳簿紙片あり
1893.3.6				13.8.27	668		
			メ四十一、三十号				
1897.2.22							
1897.5.18	70 銭	15 銭		13.8.30	899		
1897.7.25	70 銭	15 銭	三冊レ三十号	13.8.30	847		
1897.12.15	70 銭	15 銭	二冊ラ廿号	13.8.27	746		
1898.4.1	50 銭	15 銭		13.8.27	769		
	60 銭	10 銭	ヲ十七号	13.8.27	670		

	請求記号	書名	著編者	発行元
418	933.6/サン-1/辻家貸本	探偵文庫／三人探偵	丸亭素人	今古堂書店
419	933.6/サン-2/辻家貸本	探偵文庫／三人探偵 後編	丸亭素人	今古堂書店
420	933.6/ステ-1/辻家貸本	捨子舟 上編	黒岩涙香	扶桑堂
421	933.6/ステ-2/辻家貸本	捨子舟 中編	黒岩涙香	扶桑堂
422	933.6/ステ-3/辻家貸本	捨子舟 下編	黒岩涙香	扶桑堂
423	933.6/セイ/辻家貸本	探偵文庫／生殺自在	丸亭素人	
424	933.6/ソノ/辻家貸本	探偵文庫／素囚人	丸亭素人	
425	933.6/ヒシ/辻家貸本	非小説	黒岩涙香	扶桑堂
426	933.6/ピシ/辻家貸本	美少年	黒岩涙香	扶桑堂
427	933.6/フシ/辻家貸本	不思議	南陽外史	扶桑堂
428	933.6/ユウ-1/辻家貸本	幽霊塔 前編	野田良吉(訳)・黒岩涙香(閲)	扶桑堂
429	933.6/ユウ-2/辻家貸本	幽霊塔 後編	野田良吉(訳)・黒岩涙香(閲)	扶桑堂
430	933.6/ユウ-3/辻家貸本	幽霊塔 続編	野田良吉(訳)・黒岩涙香(閲)	扶桑堂
431	953.6/アア-1/辻家貸本	噫無常 前編	黒岩涙香(訳)	扶桑堂
432	953.6/アア-2/辻家貸本	噫無常 後編	黒岩涙香(訳)	扶桑堂
433	953.6/イエ/辻家貸本	家なき児 前編	菊池幽芳	
434	953.6/キヨ/辻家貸本	巨魁来	黒岩涙香	
435	953.6/ケツ-1/辻家貸本	革命史譚／血痕録 前編	丸亭素人	今古堂書店
436	953.6/ケツ-2/辻家貸本	革命史譚／血痕録 後編	丸亭素人	今古堂書店
437	953.6/ココ/辻家貸本	心と心	黒岩涙香	扶桑堂
438	953.6/ザン/辻家貸本	惨毒	丸亭素人	今古堂書店
439	953.6/シビ-1/辻家貸本	死美人 初編	黒岩涙香(訳)	扶桑堂
440	953.6/シビ-2/辻家貸本	死美人 後編	黒岩涙香(訳)	扶桑堂
441	953.6/シヨ/辻家貸本	鐘樓守	尾崎紅葉(訳)	早稲田大学出版部
442	953.6/ダイ-1/辻家貸本	大疑獄 前編	丸亭素人(訳)	今古堂書店
443	953.6/ダイ-2/辻家貸本	大疑獄 後編	丸亭素人(訳)	今古堂書店
444	953.6/ツバ/辻家貸本	椿姫	秋濤居士(訳)	
445	953.6/ニン-1/辻家貸本	人外鏡	黒岩涙香(訳)	扶桑堂
446	953.6/ニン-2/辻家貸本	人外鏡 中編	黒岩涙香(訳)	扶桑堂
447	953.6/ニン-3/辻家貸本	人外鏡 下編	黒岩涙香(訳)	扶桑堂
448	953.6/ブシ-1/辻家貸本	武士道 上編	黒岩涙香(訳)	扶桑堂
449	953.6/ブシ-2/辻家貸本	武士道 後編	黒岩涙香(訳)	扶桑堂
450	953.6/ユウ/辻家貸本	有罪無罪	黒岩涙香(訳)	大川屋書店

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
1909.7.5			ロ十三号	13.8.30	861		帳簿紙片あり
1903.6.20			ニノ十一号	15.5.5			
1900.3.4			タ十三号	13.8.26	629		帳簿紙片あり
1901.12.5			ツ三五号				帳簿紙片あり
1901.5.1			タ十一号	13.8.30	919		帳簿紙片あり
1901.8.18	50 銭	7 銭		15.9.27			
1903.2.10				15.8.20			
1901.12.1			タ十三号	15.8.20			
1902.6.5			タ十三号	15.8.20			帳簿紙片あり
1902.4.6			レ十三号	13.8.31	988		
1908.7.25			ラ十二号	13.8.26	608		帳簿紙片あり
1908.3.5			ハノ四号	13.8.25	487		
1911.3.5				15.5.5			
1908.7.20(41 版)			大正二年二冊へ二十六号	13.8.26	635		
1903.1.1				13.8.30	837		
1898.1.1			ヨ十二号	15.9.2		10 銭	
1902.1.26				13.8.26	567		
1910.5.25			第二ノへ五号	15.5.5			
				15.9.27			帳簿紙片あり
1898.12.12							帳簿紙片あり
1898.7.14			ワ十二号	13.8.30	855		
1899.2.10(再版)	50 銭	8 銭	ワ十三号	15.9.23		10 銭	
1910.9.30			ニノ十九号	15.6.3			
	50 銭	7 銭		15.9.25			
1902.8.10	50 銭	7 銭		13.8.26	615		
1899.1.7			カタヤ	13.8.26	596		
1909.10.20				13.9.4	1297		
1902.9.18	50 銭	8 銭		13.9.2	1056		
1902.7.15			レ十二号	13.9.4	1218		
1920.6.10(10 版)	50 銭	8 銭	大十、二十五号	15.10.9			
1903.10(7 版)			ロ十二号	13.8.26	654		
1897.3.3			ル十五号	13.9.4	1293		
1906.12.25			ネ十二号	13.9.4	1213		
1900.12(再版)			ホ二五号	13.8.30	857		
1911.7.10				15.6.3			
1899.5.5			ヨタラ	15.9.23		10 銭	
1913.2.1(4 版)			第二ノへ十五号	15.5.5			
1903.11.10			十六号	13.9.4	1211		帳簿紙片あり
1906.6.15			ネ十一号	13.9.4	1214		
1909.5.15			ロ十二号	13.8.27	732		
1907.10.15(48 版)	1 円	20 銭	ロ七五号	15.9.20			
1898.10.9(再版)	70 銭		ワ三十五号	13.8.27	714		
1891.5.12	50 銭	7 銭	ヲ十五号				
1908.6.5	50 銭	8 銭	ホノラ三号	13.8.30	877		

	請求記号	書名	著編者	発行元
374	913.7/バン/辻家貸本	塙の太郎/妖怪退治	玉田玉秀齋(講演)	中川玉成堂
375	913.7/バン/辻家貸本	元和豪傑/塙田右衛門	春風亭露玉(講演)	岡本増進堂
376	913.7/ヒサ/辻家貸本	加賀騒動/久松桃太郎	4代目石川一口(講演)	博多成象堂
377	913.7/ヒサ/辻家貸本	加賀騒動/久松桃太郎後日談	4代目石川一口(講演)	博多成象堂
378	913.7/ヒサ/辻家貸本	久松桃太郎旅日記	4代目石川一口(講演)	博多成象堂
379	913.7/ビジ/辻家貸本	怪談/美人の油絵	松林伯知(講演)	瀧川書店
380	913.7/ヒノ/辻家貸本	檜山実記/関良助	神田伯龍(講演)	中川玉成堂
381	913.7/ヒノ/辻家貸本	檜山実記/相馬大作	神田伯龍(講演)	中川玉成堂
382	913.7/ヒノ/辻家貸本	檜山実記/伊達三次	神田伯龍(講演)	中川玉成堂
383	913.7/フカ/辻家貸本	深見十左衛門	松林伯知(講演)	名倉昭文館
384	913.7/ブキ/辻家貸本	武俠/根来三十六番斬	廣澤當昇(講演)	岡本偉業館
385	913.7/フク/辻家貸本	福島三浪士	神田伯龍(講演)	中川玉成堂
386	913.7/ブジ/辻家貸本	武術の誉/佐久間三郎	月の舎美華(演)	岡本偉業館
387	913.7/ブゼ/辻家貸本	豊前島大仇討	4代目石川一口(講演)	岡本偉業館
388	913.7/ホウ/辻家貸本	豊公上覧/入鹿ヶ原大仇討	神田伯龍(講演)	田中文泉堂
389	913.7/マガ/辻家貸本	馬術の誉/曲坂平九郎	放牛舎桃湖(講演)	一二三館
390	913.7/マツ/辻家貸本	三光誉の侠客/松王峰五郎	玉田玉秀齋(講演)	名倉昭文館
391	913.7/マル/辻家貸本	明智の残党三羽からず/丸山太郎秀国	月の舎美華(口演)	此村欽英堂
392	913.7/ミト/辻家貸本	水戸黄門漫遊記	旭堂小南陵(講演)	
393	913.7/ミト-3/辻家貸本	西国巡覧/水戸黄門実記	神田伯龍(講演)	柏原圭文堂
394	913.7/ミノ/辻家貸本	身延山貞婦の仇討	錦城斎貞玉(講演)	中村惣次郎
395	913.7/ムコ/辻家貸本	向疵与三郎	松林伯田(講演)	岡本偉業館
396	913.7/ムテ/辻家貸本	無敵流剣士/後藤半四郎	一龍斎貞山(講演)	松本金華堂
397	913.7/メイ/辻家貸本	大岡政談大全/村井長庵善悪	神田伯山(講演)	
398	913.7/メイ/辻家貸本	明治仇討/信州小僧	松林伯海(口演)	至誠堂
399	913.7/メイ/辻家貸本	名譽政談/敵討荒馬吉五郎	双龍斎貞鏡(講演)	文明林書店
400	913.7/メイ/辻家貸本	名譽拳骨/物外和尚	玉田玉秀齋(講演)	此村欽英堂
401	913.7/モリ/辻家貸本	分福茶釜/茂林寺奇談	揚名舎桃李(口演)	三新堂
402	913.7/ヤエ/辻家貸本	八重垣流元祖/吉岡一味齋	神田伯龍(講演)	田中文泉堂
403	913.7/ヤギ/辻家貸本	柳生十兵衛旅日記	桃川燕林(講演)	大川屋書店
404	913.7/ヤマ/辻家貸本	山田真龍軒	真龍斎貞水(講演)	大川屋書店
405	913.7/ヤマ/辻家貸本	やまと姫	柳風亭円橋(講演)	愛智堂
406	913.7/ユイ/辻家貸本	由比ヶ浜大仇討	玉田玉秀齋(講演)	中川玉成堂
407	913.7/ユウ/辻家貸本	勇士仇討/吉岡浅之助	揚名舎桃玉(講演)	大川屋書店
408	913.7/ユウ/辻家貸本	勇婦/結城萩野	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館
409	913.7/ヨツ/辻家貸本	四ツ車大八	松月堂呑龍(講演)	駈々堂
410	913.7/ワカ/辻家貸本	和歌の浦/二十六人斬	玉田玉秀齋(口演)	誠進堂書店
411	913.7/ワシ/辻家貸本	由比ヶ浜十八番切/鷲尾小太郎	玉田玉秀齋(講演)	中川玉成堂
412	913.7/ワシ/辻家貸本	鷲尾武勇伝	玉田玉秀齋(講演)	中川玉成堂
413	913.7/ワタ/辻家貸本	渡辺水庵武勇伝		井上一書堂
414	916/ニク/辻家貸本	肉弾 旅順巡覧記	桜井忠温	丁未出版社
415	933.6/アヤ/辻家貸本	怪の物	黒岩涙香	扶桑堂
416	933.6/ケツ/辻家貸本	決闘の果	黒岩涙香	大川屋書店
417	933.6/ゴウ/辻家貸本	郷土柳子の話	黒岩涙香	扶桑堂

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
1906.9.20			ネ十二号	13.8.26	594		
1896.7.19	30 銭	6 銭	ロ十六号	13.8.30	840		
1909.10.5				13.8.30	813		
1899.5.13			ヨタヌ				
1906.6.5(改版)				15.8.20			
1906.6.5(改版)				15.8.20			
1908.9.1				13.8.30	803		
1903.5.20(再版)	25 銭	3 銭 5 厘	ラ十号	13.8.31	987		
1899.2.20(再版)			ワモタラ	13.8.27	740		
1907.2.5			ハノ十九号	13.8.26	645		
1905.10.10				13.8.26	633		
1908.7.25(再版)				13.9.4	1200		
1902.2.1(3 版)			タ十三号	15.9.23		10 銭	
1902.1.1	50 銭	8 銭	タ四号	13.9.3	1195		
	30 銭	6 銭		13.9.3	1189		
1903.1.2				13.8.25	513		
1903.2.19				13.8.25	511		
1903.3.29				13.8.25	499		
1903.10.18			ソ十一号	13.8.25	490	10 銭	
1899.8.31			ワ十二号				
1893.11.6	50 銭	7 銭	タカ	13.8.31	991		
1907.12.5			ロノ二五号	13.8.30 15.10.9	819		
1903.11.15				13.9.4	1299		
1897.12.27				15.9.23			
	50 銭	7 銭		13.8.26	577		
1910.12.15			上下大五、二十四号	15.9.19			
1900.10.12(再版)			ヨ十二号	15.9.27			
1898.4.30				13.8.25	547		
	50 銭	7 銭	ヨ十五号	15.9.24			帳簿紙片あり
1906.6.5(改版)			ナ十一号				
1902.1.16				15.9.28			
1899.2.23(再版)			ワ十号	15.4.7			
1895.4(再版)			カ二十二号	13.9.3	1198		
1897.10.19	60 銭	10 銭	タ三号	13.8.31	960		
1912.2.10(4 版)				13.8.26	647		
1899.2.23(再版)	50 銭	6 銭	ワ七号	13.9.2			
1899.11.5	50 銭	7 銭		15.9.24			
1910.6.20(再版)			へ二五号	15.5.5			
1902.5.1	50 銭	8 銭	第二ノホトモ上下	13.8.27	672		帳簿紙片あり
1907.5.17(再版)			ナ十三号				
1899.3.20(3 版)			ワ十一号				
1902.1.7	50 銭	8 銭	タ十五号	13.8.26	565		帳簿紙片あり

	請求記号	書名	著編者	発行元
332	913.7/セイ/辻家貸本	勢州／桑名の大仇討	石川一口(講演)	中川玉成堂
333	913.7/セキ/辻家貸本	復讐奇談／関取二代鑑	桃川燕林(講述)	文錦堂
334	913.7/セン/辻家貸本	仙台豪傑／熊田甚五兵衛	玉田玉秀齋(講演)	中川玉成堂
335	913.7/セン/辻家貸本	仙台三勇士	揚名舎桃李(講演)	国華堂書房
336	913.7/セン/辻家貸本	先代萩	増井南山(講演)	井上一書堂
337	913.7/セン/辻家貸本	仙台誉対決	増井南山(講演)	井上一書堂
338	913.7/セン/辻家貸本	澁川堤之後編／善光寺娘の仇討	桃井桃玉(口演)	井上一書堂
339	913.7/ダイ/辻家貸本	大道寺源左衛門	神田伯龍(講演)	駿々堂
340	913.7/タカ/辻家貸本	加賀騒動／高田善藏	古名弁山(口演)	駿々堂
341	913.7/タケ/辻家貸本	武田八剣士／武勇の旗場	竹川糸八(口演)	名倉昭文館
342	913.7/タケ/辻家貸本	武田八剣士／柳生仙吉	竹川糸八(講演)	名倉昭文館
343	913.7/タケ/辻家貸本	復讐美談／武内熊之助	4代目石川一口(講演)	積善館本店
344	913.7/ダツ/辻家貸本	姐己於百	東光齋梅林(講演)	大阪島之内同盟館
345	913.7/タマ/辻家貸本	三国九尾／玉藻前	神田伯龍(講演)	中川玉成堂
346	913.7/チュ/辻家貸本	忠孝常世物語	邑井吉瓶(講演)	
347	913.7/チン-1/辻家貸本	鎮西八郎為朝／椿説弓月 卷之一	真龍齋貞水(講演)	三新堂
348	913.7/チン-2/辻家貸本	鎮西八郎為朝／椿説弓月 鬼夜叉之卷	真龍齋貞水(講演)	三新堂
349	913.7/チン-3/辻家貸本	鎮西八郎為朝／椿説弓月 白縫之卷	真龍齋貞水(講演)	三新堂
350	913.7/テン/辻家貸本	天下三浪士	浅川富士丸(口演)	至誠堂
351	913.7/テン/辻家貸本	天狗小僧	松林岩田(講演)	駿々堂
352	913.7/テン/辻家貸本	天明義民伝	井上笠園	駿々堂
353	913.7/テン/辻家貸本	天明俠客／飛倉峠大仇討	玉田玉秀齋(口演)	岡本増進堂
354	913.7/テン/辻家貸本	天明豪傑／浜松松兵衛	玉田玉秀齋(講演)	岡本増進堂
355	913.7/テン/辻家貸本	天明八人白浪	西尾東林(講演)	博多成象堂
356	913.7/トウ/辻家貸本	東台俠客／新蔵兄弟	放牛舎桃林(講演)	
357	913.7/トウ/辻家貸本	東叡山大仇討／結城武勇伝	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館
358	913.7/トウ/辻家貸本	東金奇聞／猫塚の由来	西尾魯山(講演)	駿々堂
359	913.7/トク/辻家貸本	徳川四天王随一／本多平八郎忠勝	春桜亭小三(口演)	上田屋書店
360	913.7/ドク/辻家貸本	毒婦／霞のお千代	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館
361	913.7/トノ/辻家貸本	安政名物男／殿様小僧萬吉	芳若舎桃玉(口演)	井上一書堂
362	913.7/ドモ/辻家貸本	土佐名画／吃又平の伝	宝井琴柳(口演)	銀花堂
363	913.7/トヨ/辻家貸本	豊臣太閤記		中村鍾美堂
364	913.7/ナリ/辻家貸本	業平文治漂流奇談	三遊亭円朝(演述)	大川屋書店
365	913.7/ニシ/辻家貸本	錦の袖	桃川燕林(口演)	上田屋書店
366	913.7/ニツ/辻家貸本	日光山大仇討／明星金吾	玉田玉秀齋(講演)	矢島誠進堂書店
367	913.7/ヌレ/辻家貸本	北海奇談／濡衣娘清玄	松林伯円(講演)	中村鍾美堂
368	913.7/ネギ/辻家貸本	根岸備前守	松月堂吞玉(口演)	駿々堂
369	913.7/ネゴ/辻家貸本	石山軍記／根来小密茶	旭堂南陵(講演)	中川玉成堂
370	913.7/ノチ/辻家貸本	後の海坊主お瀧	夢郷庵	岡本偉業館
371	913.7/ノチ/辻家貸本	豪傑／後の金森源太郎	2代目吉田奈良丸(口演)	此村欽英堂
372	913.7/ハコ/辻家貸本	箱根権現／甕仇討	正流齋南麟(講述)	中村鍾美堂
373	913.7/ハン/辻家貸本	板額お藤	錦城齋貞玉(口演)	いろは書房

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
1910.1.1				13.8.27	753		
1910.4.10			ニノ十六号	15.9.19			
1905.2.10				13.9.4	1242		
1910.3.28			ニノ十四号	13.8.27	754		
1910.10.1(2版)	50 銭	8 銭	ニノ十六号	15.6.3			
1903.2.14			タ十三号	13.8.27	759		
1910.11.10(再版)			ニノ十六号	13.8.27	663		
1903.12.5				13.9.1	1005	10 銭	
				13.9.4	1280	10 銭	
1906.10.10(再版)				13.8.26	603		
1910.4.25(再版)			ニノ十六号	15.6.3			
1904.9.5				13.9.4	1212		
1910.2.20			ニノ十四号	13.8.27	712		
1903.9.15				13.9.2	1096	10 銭	帳簿紙片あり
1911.11.25(再版)			第二ノへ十五号	13.8.27	880		
1910.12.15			ハノ十七号	15.9.19			
1910.2.5				13.9.4	1245		
1903.8.15			レ十三号				
1909.12.10			ハノ十六号				
1910.10.15			ニノ十九号	13.8.27	671		
1908.9.30			ニノ十六号	15.9.19			
1903.8.20			ソ十一号	13.8.27	701		
1904.8.18			ネ十二号				
1896.7.25			ワモタヌ	13.8.31	952		帳簿紙片あり
1899.6.27			ソ九号				
1898.4.5	50 銭	7 銭	カ七号	15.9.24			
1912.10.1				15.5.5			
1912.10.1				15.5.5			
1912.1.15			へノ七号	15.9.19			
1901.2.25			ヨ十四号	13.8.27	757		帳簿紙片
1910.4.10(再版)			ハノ十四号	13.8.27	726		
1899.2.10(再版)			カ十五号	13.8.27	690		
1907.10.15(再版)				13.7.4	1298		
1902.10.16				13.9.4	1215		
1900.9.5	50 銭	8 銭	カ二十号	13.8.27	731		合冊
1904.4.8			ソ十二号	13.9.3	1128		
1902.10.15				13.9.3	1188		
1899.8.14			レ八号	15.8.20			
1907.6.5(2版)			ラ十七号	13.8.27	718		
1898.11.22			ワ十五号	13.8.25	480		
1909.5.20(再版)			ロ十六号	13.8.27	683		帳簿紙片あり
1900.5.25				13.9.4	1294	10 銭	
1899.12.5(再版)	50 銭	7 銭	カタカ	13.8.31	979		

	請求記号	書名	著編者	発行元
289	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／桑の平内	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館
290	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／後藤武勇伝	石川一口(講演)	立川文明堂
291	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／最後の蟹江才藏	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館
292	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／最後の桑の平内	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館
293	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／最後の蒲田隼人	石川一口(講演)	立川文明堂
294	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／坂田信行巡国記	玉田玉秀齋(講演)	柏原圭文堂
295	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／関口頼母	玉田玉秀齋(講演)	立川文明堂
296	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／其後の高浪八郎	廣澤虎吉(口演)	岡本偉業館
297	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／高浪八郎	廣澤虎吉(口演)	岡本偉業館
298	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／武田八剣士	竹川衆八(講演)	名倉昭文館
299	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／竹之内大藏	玉田玉秀齋(講演)	立川文明堂
300	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／後の蟹江才藏	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館
301	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／後の桑の平内	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館
302	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／後の高浪八郎	廣澤虎吉(口演)	岡本偉業館
303	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／真柄十郎三郎	松月堂魯山(口演)	矢島誠進堂書店
304	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／楽巖寺十郎	玉田玉秀齋(講演)	立川文明堂
305	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／後の物外和尚	玉田玉秀齋(講演)	此村欽英堂
306	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪勇／瀧夜叉姫	2代目浅川富士丸(口演)	至誠堂
307	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪勇無双／鬼丸花太郎	玉田玉秀齋(講演)	積善館本店
308	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪勇無双／郷の虎丸	玉田玉秀齋(講演)	松本金華堂
309	913.7/ゴト/辻家貸本	豪傑／後藤又兵衛	石川一口(講演)	立川文明堂
310	913.7/サカ/辻家貸本	天下豪傑／坂田信行東下り	玉田玉秀齋(講演)	柏原圭文堂
311	913.7/サク/辻家貸本	桜川五良藏	神田伯龍(講演)	中川玉成堂
312	913.7/サク/辻家貸本	佐倉義民伝	邑井一(講演)	上田屋書店
313	913.7/サク/辻家貸本	復讐美談／佐倉騒動	錦城斎貞玉(講演)	銀花堂
314	913.7/ザロ/辻家貸本	座光寺源三郎	松林伯円(講演)	青木嵩山堂
315	913.7/サナ/辻家貸本	真田三傑／大力重太	福亭羽衣(口演)	矢島誠進堂書店
316	913.7/サナ/辻家貸本	真田三傑／忍術佐助	福亭羽衣(口演)	矢島誠進堂書店
317	913.7/サナ/辻家貸本	真田三代記／真田大助	西尾魯山(講演)	岡本偉業館
318	913.7/サナ/辻家貸本	難波戦記後日譚／真田大助	神田伯龍(講演)	博多成象堂
319	913.7/サナ/辻家貸本	真田幸村／九州漫遊記	玉田玉秀齋(講演)	中川玉成堂
320	913.7/サハ/辻家貸本	佐原喜三郎	春風亭柳枝(口演)	岡本偉業館
321	913.7/サラ/辻家貸本	天明女俠客／更科お玉	玉田玉秀齋(講演)	岡本増進堂
322	913.7/サン/辻家貸本	三十六番／豊公御前角力	神田伯龍(講演)	田中宋泉堂
323	913.7/サン/辻家貸本	山賊芸者 山賊芸者 下編	無名氏	上田屋書店
324	913.7/シノ/辻家貸本	安政三勇士／篠塚力之助	旭堂小南陵(講演)	柏原圭文堂
325	913.7/シャ/辻家貸本	講談西遊記／沙悟淨	松林円照(口演)	至誠堂
326	913.7/シヨ/辻家貸本	将軍家陰謀／毒殺騒動	錦城斎貞玉(口演)	いろは書房
327	913.7/ジヨ/辻家貸本	女傑／金森芳枝	吉田奈良丸(講演)	此村欽英堂
328	913.7/シン/辻家貸本	新撰組／十勇士伝	松林伯知(講演)	いろは書房
329	913.7/スイ/辻家貸本	水府豪傑／大島平八郎	神田伯龍(講演)	積善館本店
330	913.7/スイ/辻家貸本	水府勇士／田宮新十郎	4代目石川一口(講演)	岡本偉業館
331	913.7/スザ/辻家貸本	探偵文庫／数罪の探偵	松林若円(講演)	駈々堂

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
	50 銭	7 銭	ツ二五号	13.8.30	825		
1910.10.20(再版)			メ四十二、十四号	15.5.5			
1896.10.28 1902.3.10	80 銭	15 銭	ツ三号				合冊
1903.5.1			レ十三号	13.8.30	831		
1902.12.20(5 版)			二冊レ二十七号	15.4.1			帳簿紙片あり
1910.10.5			メ四十五へ二十二号二冊	13.8.27	675		
1901.11(再版)			タ十一号	15.9.25			
1895.7(再版)	70 銭	15 銭	ヨカヌ	15.8.20			
1900.10.8				15.9.27	1121	15 銭	
1901.3.5				13.8.26	571		帳簿紙片あり
1906.3.5(再版)			ネ十一号	13.8.25	479		
1903.7.10			レ十三号	13.8.30	610		
1901.10.6				13.8.26	585		帳簿紙片あり
1902.10.25							
1911.4.5			ニノ十五号	13.8.26	614		
	50 銭	7 銭		13.8.26	649		
1898.3.20	60 銭	10 銭	ヲ十五号	13.8.31	956		
				13.8.31	990		
1901.6.5			ナ十二号	15.9.2		10 銭	
1904.7.1			上下ロ五号	13.9.4	1216		
1907.12.5				13.9.4	1224		
1912.2.5			ニノ十五号	13.8.30	920		
1912.3.1				13.8.30	916		
1903.7.10(5 版)				15.8.1			
1901.8.1				15.9.21			
1911.2.10			ヘノ七号	15.6.3			
1911.4.20			ヘノ七号	15.6.3			
1910.6.30			ニノ十四号	15.6.3			
1911.7.1				15.5.5			
1902.4.8				13.8.26	617		帳簿紙片あり
1911.4.5				15.5.5			
1910.2.25				15.5.5			
1910.6.20				15.5.5			
1903.2.7				13.8.25	497		
1909.5.20(25 版)				13.8.25	496		
1909.7.15			ロ十六号	13.8.27	723		帳簿紙片あり
1908.1.15(再版)			ヲ十九号	13.9.4	1283		帳簿紙片あり
1909.4.30			ニノ十六号	15.6.3			
1910.8.5(再版)			メ四十二、十二号	15.5.5			
				13.8.27	751		
1904.2.5				13.9.4	1243		帳簿紙片あり
1909.2.20			ニノ十六号	13.8.27	669		
1910.5.10			ニノ十四号	13.8.27	735		

	請求記号	書名	著編者	発行元
246	913.7/カナ/辻家貸本	復讐美談／金井主水	神田伯龍(講演)	駸々堂
247	913.7/カナ/辻家貸本	豪傑／金沢義政	神田伯龍(講演)	此村欽英堂
248	913.7/カマ/辻家貸本	かまわぬ坊 新かまわぬ坊	江見水蔭	春陽堂 駸々堂
249	913.7/ガモ/辻家貸本	蒲生三勇士／筒井小源太	旭堂小南陵(講演)	名倉昭文館
250	913.7/カワ/辻家貸本	川中島大合戦	4代目石川一口(講演)	大阪島之内同盟館
251	913.7/カン/辻家貸本	寛永豪傑／鷲津新六郎	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館
252	913.7/カン/辻家貸本	観音靈験／敵討雷太郎	神田伯林(口演)	大川屋書店
253	913.7/キク/辻家貸本	菊模様千代亀鑑	三遊亭円朝(口演)	大川屋書店
254	913.7/キプ-2/辻家貸本	紀文大尽 後編	伊東陵潮(講演)	三芳屋書店
255	913.7/キヨ/辻家貸本	侠客／金子春太郎後日譚	立川燕入(講演)	名倉昭文館
256	913.7/キヨ/辻家貸本	侠客／くりから太吉	神田伯龍(講演)	中川玉成堂
257	913.7/キヨ/辻家貸本	侠客／黒駒勝蔵	旭堂南陵(講演)	中川玉成堂
258	913.7/キヨ/辻家貸本	侠客／小桜千太郎	玉田玉麟(講演)	名倉昭文館
259	913.7/キヨ/辻家貸本	侠客／唐犬権兵衛	岡本鶴治(口演)	岡本偉業館
260	913.7/キヨ/辻家貸本	侠客／鳴神重三	玉田玉秀齋(講演)	誠進堂書店
261	913.7/キヨ/辻家貸本	侠客春雨傘	松林伯知(講演)	
262	913.7/クリ/辻家貸本	栗原百助	招林百燕(講演)	萩原朗月堂
263	913.7/グン/辻家貸本	軍学／山鹿甚五左衛門	瓢々亭玉山(講演)	
264	913.7/ケヤ/辻家貸本	講談／毛谷村六助	尾崎東海(講演)	岡本偉業館
265	913.7/ゲン/辻家貸本	元和豪傑／花房志摩	春風亭露玉(講演)	岡本偉業館
266	913.7/ゲン/辻家貸本	元和豪傑／妙見峠大仇討	春風亭露玉(講演)	岡本増進堂
267	913.7/コイ-2/辻家貸本	探偵実話／恋と情 後編	2代目太洋社燕楽(講演)	誠進堂書店
268	913.7/コイ-3/辻家貸本	探偵実話／恋と情 続編	2代目太洋社燕楽(講演)	誠進堂書店
269	913.7/コウ/辻家貸本	甲越軍記 三十六段車懸	4台目石川一口(講演)	大阪島之内同盟館
270	913.7/コウ/辻家貸本	講談／有馬猫退治	玉田玉麟(講演)	岡本偉業館
271	913.7/コウ/辻家貸本	講談／真田昌幸	西尾魯山(講演)	岡本偉業館
272	913.7/コウ/辻家貸本	講談／真田幸村	西尾魯山(講演)	岡本偉業館
273	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／穴澤静馬	玉田玉秀齋(講演)	立川文明堂
274	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／荒尾龍之助	玉田玉秀齋(講演)	誠進堂書店
275	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／斑鳩平次	廣澤廣吉(口演)	岡本偉業館
276	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／犬若奥羽漫遊記	玉田玉秀齋(講演)	此村欽英堂
277	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／犬若五郎左衛門	玉田玉秀齋(講演)	此村欽英堂
278	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／犬若武勇伝	玉田玉秀齋(講演)	此村欽英堂
279	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／井上大九郎	2代目浅川富士丸(口演)	至誠堂
280	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／井上大九郎 後編	2代目浅川富士丸(口演)	大阪島之内同盟館
281	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／鬼勝丸	神田伯龍(講演)	積善館本店
282	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／鬼小島弥太郎	玉田玉秀齋(口演)	此村欽英堂
283	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／桂市兵衛	玉田玉秀齋(講演)	立川文明堂
284	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／金澤八郎	神田伯龍(講演)	此村欽英堂
285	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／金森源太郎	吉田奈良丸(口演)	此村欽英堂
286	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／蟹江才藏	玉田玉秀齋(口演)	岡本偉業館
287	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／木曾川三郎	石川一口(講演)	立川文明堂
288	913.7/ゴウ/辻家貸本	豪傑／桑の鉄扇斎	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
1898.11.18(再版)			カ十四号	15.9.25			
1896.5.25			ワモタラ	13.8.30	843		
			三冊ニテ大八、三十七号				
1915.11.13			大八三十五号	15.9.26			
1897.3.8			ヨ十四号				
1899.4.23			カタヤ	13.8.30	817		
1910.10.20							
1906.11.3			ネ十六号	13.8.31	993		
1897.5.10			タ十四号	15.8.20			
1912.5.10(2版)			ホ十五号	15.5.5			帳簿紙片あり
1903.10.10(4版)				13.8.25	471		
1901.1.4			ヨタカマ	15.9.25			
1906.10.5				13.9.4	1291	10 銭	
1901.11.10	50 銭	7 銭	タ十二号	13.9.4	1221		
			ネ三五号	13.9.4	1210		
1912.5.15				15.9.19			
1898.12.23			カタラ	13.8.26	566		
1907.6.10				13.8.25	463		
1906.1.10	50 銭	8 銭	大巻ヲモ上下	13.8.27	697		
1900.12.20(再版)	50 銭	10 銭	ヨ十二号	15.9.27			
1898.10.16	50 銭	7 銭		13.9.4	1285	10 銭	
1888.11.20	50 銭	7 銭	ヲ十号	13.9.3	1194		
1902.9.1			モタ				
1889.12.20	25 銭	3 銭 5 厘	ヲ十二号	15.9.26			
1907.5.1			ナ十二号	13.8.30	841		
1906.6.1			ナ十一号	13.8.26	642		
1897.1.3	60 銭	8 銭	ワ十四号	15.9.25			
1900.8.25			ヨタ	15.7.1		10 銭	
1897.3.6			レ十二号	15.9.21			
1902.4.8				15.8.20			
1901.1.8(10版)			ヨ十一号	13.8.31	965		
1902.1.25(3版)			ハノ三五号	13.8.30	828		
1910.3.5			大正二年へ十三号	15.5.5			
1908.7.20(再版)				13.9.4	1209		
1909.9.20				13.9.4	1223		
1908.1.1			ニノ十四号	13.8.27	727		
1899.11.3			ヨタカ	13.8.26	599		
1899.6.15			カ十二号	13.8.30	818		
1896.9.21			ヲ十三号	13.8.25	467		
1910.11.5(再版)			ニノ十六号	13.8.30	826		
1900.6(3版)			タ十四号				
1906.6.5				13.8.30	809		
1902.3.4			ツ三五号				
1900.10.21				13.8.25	517	10 銭	

	請求記号	書名	著編者	発行元
202	913.7/アカ/辻家貸本	明石志賀之助	増田南北(講演)	大阪島之内同盟館
203	913.7/アカ/辻家貸本	天和奇語/明石の斬捨	田辺大龍(講演)	大川屋書店
204	913.7/アコ-1/辻家貸本	赤穂義士/四十七士伝 上編	一心亭辰雄(講演)	
205	913.7/アコ-3/辻家貸本	赤穂義士/四十七士伝 下編	一心亭辰雄(講演)	三芳屋書店
206	913.7/アサ/辻家貸本	朝顔日記	神田伯山(講演)	中村惣次郎
207	913.7/アサ/辻家貸本	浅山一伝斎/武術の誉	揚名舎桃李(講述)	中村惣次郎
208	913.7/アダ/辻家貸本	仇討/青柳お梅	神田伯龍(講演)	此村欽英堂
209	913.7/アダ/辻家貸本	仇討/苜萱石童丸	石川一口(講演)	駁々堂
210	913.7/アマ/辻家貸本	天草騒動	双龍齋貞鏡(講演)	求光閣
211	913.7/アラ/辻家貸本	安宅の関大仇討/荒尾義勇伝	玉田玉秀齋(口演)	誠進堂書店
212	913.7/イイ/辻家貸本	飯田武勇伝	旭堂小南陵(講演)	大阪島之内同盟館
213	913.7/イカ/辻家貸本	鑄掛屋松五郎	錦城齋貞玉(口演)	中村惣次郎
214	913.7/イツ/辻家貸本	一刀流武勇誉	西尾麟慶(口演)	此村欽英堂
215	913.7/イバ/辻家貸本	伊庭流元祖/伊庭如水伝	西尾麟慶(口演)	求光閣書店
216	913.7/イワ/辻家貸本	岩見後の武勇伝	神田伯林(口演)	日吉堂
217	913.7/ウエ/辻家貸本	上田豪傑/夏目舎人	松月堂魯山(口演)	矢島誠進堂書店
218	913.7/ウシ/辻家貸本	牛若長次	三遊亭花遊(口演)	博多成象堂
219	913.7/ウス/辻家貸本	碓井峠大仇討	玉田玉秀齋(口演)	中川玉成堂
220	913.7/ウミ/辻家貸本	海坊主お龍	夢郷庵	岡本偉業館
221	913.7/ウワ/辻家貸本	宇和島神霊記	4代目石川一口(口演)	駁々堂
222	913.7/エイ/辻家貸本	英雄/清水冠者義高	揚名舎桃李(講説)	中村惣次郎
223	913.7/エゾ/辻家貸本	蝦夷錦古郷の家土産	三遊亭円朝(口述)	大川屋書店
224	913.7/エド/辻家貸本	江戸神田/御陣原仇討美談	放生舎桃林(講演)	求光閣書店
225	913.7/エド/辻家貸本	江戸美人	春錦亭柳桜(口演)	大川屋
226	913.7/オウ/辻家貸本	奥州二本松/力士の仇討	神田伯龍(講演)	中川玉成堂
227	913.7/オウ/辻家貸本	近江屋お花	芳若舎桃玉(口演)	井上一書堂
228	913.7/オオ/辻家貸本	大岡政談/鯛屋騒動	双龍齋貞鏡(講演)	萩原新陽館
229	913.7/オオ/辻家貸本	大岡政談名古屋土産/鍵屋政談	揚名舎桃李(講演)	上田屋書店
230	913.7/オオ/辻家貸本	大久保政談/松前屋五郎兵衛	桃川燕林(講述)	文事堂
231	913.7/オガ/辻家貸本	小笠原実記	真新齋貞水(講演)	井上一書堂
232	913.7/オグ/辻家貸本	小栗判官	松林東慶(口演)	鍾美堂本店
233	913.7/オジ/辻家貸本	お女郎忠次	桂文楽(口演)	修文館
234	913.7/カイ/辻家貸本	快傑/長阪孫九郎	石川一口(講演)	中川玉成堂
235	913.7/カイ/辻家貸本	怪力無双/石原平四郎	4代目石川一口(講演)	積善館本店
236	913.7/カイ/辻家貸本	怪力無双/拳骨和尚	玉田玉秀齋(講演)	此村欽英堂
237	913.7/カケ/辻家貸本	掛川大評定/北條太郎	岡本鶴治(講演)	岡本偉業館
238	913.7/カタ/辻家貸本	敵討/三十三間堂	錦城齋貞玉(講演)	日吉堂
239	913.7/カタ/辻家貸本	敵討/三莊太夫	田辺南麟(講演)	博盛堂
240	913.7/カタ/辻家貸本	敵討/玉川宇源太	真新齋貞水(講演)	朗月堂
241	913.7/カタ/辻家貸本	敵討/富士太郎	松月堂桃林(講演)	此村欽英堂
242	913.7/カタ/辻家貸本	敵討札所の霊験	三遊亭円朝(口述)	大川屋書店
243	913.7/カタ/辻家貸本	敵討瀬川堤/速見秀夫	桃井桃玉(口演)	井上一書堂
244	913.7/カタ/辻家貸本	加太義勇伝	旭堂小南陵(講演)	博多成象堂
245	913.7/カダ/辻家貸本	加太弥太郎	藤井南龍(講演)	博多成象堂

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
	75 銭	13 銭	大八、十五号二冊				
1904.12.15	80 銭	15 銭	ツ三十五号	14.10.3	235		
1901.4.15(再版)	50 銭	7 銭	ハノ三五号	13.9.3	1131		
1895.9.4	50 銭	7 銭	ロ十二号	13.9.2	1026		
1905.11.20(5 版)	70 銭	13 銭	二冊ネタ〇二				
	50 銭	10 銭		13.8.31	959		
1896.12.28	50 銭	10 銭		13.8.31	951		
1902.1.4	50 銭	7 銭		13.9.3	1126		
1907.9.17	80 銭	13 銭		15.9.19			
	50 銭	7 銭		13.9.3	1138		
1901.2.25			タ十三号	13.8.30	932		
1902.1.2 1902.5.20	60 銭	15 銭	タ十九号	13.9.1	1013		
1901.4.10	50 銭	8 銭	ヨサ号	13.9.3	1117		
1903.11.15	60 銭	13 銭		14.10.28	274		
1906.7.18	60 銭	10 銭	ラ廿五号	14.10.3	237		
1905.3.3(3 版)	65 銭	13(10)銭	ナ二十号	15.9.20			
1900.6.16 1903.7.7			タ五号 ソ十五号	13.9.3	1108		合冊
1901.4.1(再版)	50 銭	7 銭	ヨ十八号	13.9.3	1139		
1902.5.6	50 銭	8 銭		14.10.3	223		
1897.12.12(再版) 1899.3.20(7 版)	80 銭	15 銭		15.6.1			合冊
1907.10.5	50 銭	8 銭	ラ廿三号	13.9.3	1124		
1903.3.20 1903.6.5	80 銭	15 銭		13.9.2	1058		合冊
1901.1.26	50 銭	7 銭		15.9.27			帳簿紙片あり
1900.10.13	(50 銭)	15 銭		13.9.3	1114		
1904.12.1(6 版)	70 銭	13 銭		15.3.5	514		
1904.10.28(4 版)	70 銭	13 銭	二冊ネ六十五号	15.3.5	513		
1902.5.15	50 銭	9 銭	ソ廿三号	13.9.3	1173		
1909.6.10	1 円 20 銭	20 銭	ハノ七十二号	15.6.1			
1902.8.11 1900.9.19	80 銭	15 銭	メ三十七、十三号 メ三十五、十七号	13.9.3	1134		合冊
1895.7.13	50 銭	7 銭	モタカマ	14.10.3	251		
1900.4.25			カ十三号	13.8.31	999		
1894.1.2	50 銭	3 銭 5 厘	タ十号	13.9.3	1167		
1902.3.1	50 銭	8 銭		13.8.31	945		
1902.8.15	50 銭	8 銭		13.8.30	740		
	50 銭	7 銭	タ十号	14.10.3	233		
1901.1.17	80 銭	15 銭	ヨ四十号	14.11.11	304		
1900.1.1	50 銭	8 銭		14.11.11	306		
1901.9.30	50 銭	7 銭	タ十九号	13.9.3	1123		
1911.3.10				13.8.27	687		
1906.6.5(改版)							

	請求記号	書名	著編者	発行元
162	9136/ヒメ-2/辻家貸本	姫様お辰 後編	広津柳浪	
163	9136/フウ/辻家貸本	風流線	泉鏡花	春陽堂
164	9136/ブキ/辻家貸本	小説/武兄弟	小栗風葉	青木嵩山堂
165	9136/フク/辻家貸本	伏魔殿	福地桜痴	春陽堂
166	9136/フタ-1/辻家貸本	二筋道	広津柳浪	今古堂書店
167	9136/フタ-1/辻家貸本	二人妻 上	醉多道士	
168	9136/フタ-2/辻家貸本	二人妻 下	醉多道士	求光閣
169	9136/フド/辻家貸本	小説/不動剣	稲岡奴之助	青木嵩山堂
170	9136/フヒ/辻家貸本	不必要	矢野龍溪	春陽堂
171	9136/フユ/辻家貸本	冬牡丹	三品蘭溪	
172	9136/フル/辻家貸本	探偵文庫/古茶箱	喜美六	駈々堂
173	9136/ブン/辻家貸本	小説/文金島田 小説/文金島田 後編	小栗風葉	駈々堂
174	9136/ホタ/辻家貸本	螢火	雀浦	駈々堂
175	9136/マカ-1/辻家貸本	魔風恋風 前篇	小杉天外	春陽堂
176	9136/マチ/辻家貸本	町女房	永井荷風	春陽堂
177	9136/マチ/辻家貸本	町の仙女	伊藤銀月	金色社
178	9136/マツ/辻家貸本	松が浦島 うつし絵	村井弦齋 半井桃水	春陽堂
179	9136/ミオ/辻家貸本	濡標	菊池幽芳	駈々堂
180	9136/ムゴ/辻家貸本	小説/無言の誓	菊池幽芳	駈々堂
181	9136/ムシ/辻家貸本	小説/武者気質 小説/大坂城	村上浪六	青木嵩山堂
182	9136/ムラ/辻家貸本	紫帽子	佐野天声	矢島誠進堂書店
183	9136/ムラ/辻家貸本	むら時雨 続むら時雨	村上浪六	駈々堂
184	9136/ムラ-1/辻家貸本	探偵小説/紫美人	松居松葉	金楨堂
185	9136/メオ/辻家貸本	女夫星	小杉天外	春陽堂
186	9136/メオ-1/辻家貸本	女夫波 前編	田口菊汀	金色社
187	9136/メオ-2/辻家貸本	女夫波 後編	田口菊汀	金色社
188	9136/メグ/辻家貸本	めぐる泡	後藤宙外	春陽堂
189	9136/モウ/辻家貸本	猛火	田口菊汀	日高有倫堂
190	9136/モモ/辻家貸本	政治小説/桃色絹 探偵叢話	山田美妙 おきしく	青木嵩山堂 駈々堂
191	9136/ヤケ/辻家貸本	焼火箸	漣山人	春陽堂
192	9136/ヤシ/辻家貸本	探偵文庫/夜叉娘	喜多八	駈々堂
193	9136/ヤマ/辻家貸本	山中源左衛門	塚原洪柿園	春陽堂
194	9136/ヤミ-1/辻家貸本	探偵奇談/暗夜の血漿 前編	多田省軒	岡本偉業館
195	9136/ヤミ-2/辻家貸本	探偵奇談/暗夜の血漿 後編	多田省軒	岡本偉業館
196	9136/ユキ/辻家貸本	小説/雪の花園	末広鉄腸(関)・村松柳江(作)	
197	9136/ユキ/辻家貸本	雪粉々	幸田露伴・堀内新泉	春陽堂
198	9136/ユミ/辻家貸本	小説/弓矢八幡	仰天子	青木嵩山堂
199	9136/ユメ/辻家貸本	夢硯	黒田天外	正英堂書店
200	9137/アオ/辻家貸本	青藤峠大仇討/鷲津武勇伝	玉田玉秀齋(講演)	岡本偉業館
201	9137/アカ/辻家貸本	赤坂両父仇討	吾妻竹造(講演)	井上一書堂

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
1907.5.15	80 銭	15 銭	ロ二十五号	14.11.11	299		
1908.8.24(4 版)	40 銭	4 銭	大七、十号二冊	15.6.1			
1902.6.3(再版)	50 銭	8 銭	ㄱモホ号	15.9.20			
1902.7.7	50 銭	8 銭		15.9.20			
1902.11.14	50 銭	8 銭		15.9.20			
1902.1.4							
1895.10.10	50 銭	7 銭	ロ十二号	13.9.3	1100		
1897.10.4	50 銭	7 銭	サ十九五号	13.8.31	947		
1907.3.12(改訂 3 版)	75 銭	15 銭		14.10.3	230		
1902.1.5(3 版)	50 銭	8 銭	タ廿三号	15.9.30			
1901.6.16(再版)	50 銭	8 銭	タ廿三号	15.9.30			
1902.2.13	50 銭	8 銭		15.10.3			
1896.2.3	70 銭	15 銭		13.9.3	1159		合冊
1902.4.6	50 銭	7 銭	タ五号	13.9.3	1140		
1912.4.19			ホ二十号	14.11.10	289	30 銭	
1900.10.25	50 銭	7 銭	ヨ十一号	13.8.31	950		
1903.10.25	50 銭	8 銭	レ十九号	13.9.1	1025		
1908.9.18	60 銭	10 銭	ロ二十四号	15.9.1		15 銭	
1900.9.20	50 銭	8 銭	カ二十五号				
1900.10.20 1902.7.9		15 銭	ヨタト ツ五号	13.9.3	1175		合冊
1906.11.20	65 銭	13 銭		14.11.11	301		
1903.1.1	50 銭	7 銭	レ十八号	14.10.3	236		
1908.12.10	80 銭	15 銭	ロ四十号	15.9.20			
1908.10.5			ロ二十五号	14.10.3	225		
1902.4.4			レ十五号	13.9.3	1141		
1905.11.10(再版)	1(80 銭)円	15 銭		15.6.1			
1905.11.10(再版)	1 円(80 銭)	15 銭	ネ七十号	15.9.20			
1906.1.15	1 円(80 銭)	15 銭	ネ七十号	15.10.31			
1910.8.10(再版)	1 円	25 銭	ハノ六十七号	15.10.31			
1907.6.4	1 円	20 銭	ニノロ七十号二冊				
1908.3.15	1 円	20 銭	ニノロ七十号二冊	13.12.15	31		
1900.9.22	50 銭			13.9.3	1177		
1905.4.7(8 版)	70 銭	13 銭	ツ二十五号	14.10.3	239		
	70(60)銭	15(9)銭	大正四年十月六号	13.9.3	1163		
1900.3.10(5 版)			四二、三十号	15.9.23			
1900.1.15(3 版)				14.11.13	308		
1911.2.1(3 版)				15.9.30			
1911.7.22(再版)			大三、十一号	13.8.31	977		
1902.4.6	50 銭	8 銭	タ十九号	14.11.13	323		
1893.7.4	50 銭	10 銭	レ十号	13.8.27	717		
1907.11.17	75 銭	13 銭	上下大八、十五号	14.11.10	287		

	請求記号	書名	著編者	発行元
120	9136/トゥ/辻家貸本	濤声	国木田独歩	彩雲閣
121	9136/トゥ/辻家貸本	当世五人／男のうち 吉田雄蔵	村上浪六	青木嵩山堂
122	9136/トゥ-1/辻家貸本	当世五人／男のうち 倉橋幸蔵	村上浪六	青木嵩山堂
123	9136/トゥ-2/辻家貸本	当世五人／男のうち 倉橋幸蔵 後編	村上浪六	青木嵩山堂
124	9136/トゥ-3/辻家貸本	当世五人／男のうち 倉橋幸蔵 続編	村上浪六	青木嵩山堂
125	9136/ドク-1/辻家貸本	毒婦	村上浪六	青木嵩山堂
126	9136/ドク-2/辻家貸本	毒婦 後篇	村上浪六	
127	9136/トシ/辻家貸本	豊嶋嵐	福地桜痴	春陽堂
128	9136/トリ/辻家貸本	探偵小説／鳥尾進	無名氏	一二三館
129	9136/トワ/辻家貸本	不問語	饗庭篁村	日高有倫堂
130	9136/ナニ-1/辻家貸本	浪華名物男	村上浪六	青木嵩山堂
131	9136/ナニ-2/辻家貸本	浪華名物男 中編	村上浪六	青木嵩山堂
132	9136/ナニ-3/辻家貸本	浪華名物男 下編	村上浪六	青木嵩山堂
133	9136/ニオ/辻家貸本	鳩の浮巢 金売吉次	三昧道人 松居松葉	春陽堂 青木嵩山堂
134	9136/ニガ/辻家貸本	苦笑	水谷不倒	駈々堂
135	9136/ニク/辻家貸本	肉山血海／最後之決戦	吉澤晴男	武田博盛堂
136	9136/ニセ/辻家貸本	探偵実話／偽惣兵衛		三輪逸次郎
137	9136/ニホ/辻家貸本	小説／日本刀	井原青々園	駈々堂
138	9136/ヌレ/辻家貸本	濡衣	半井桃水	日高有倫堂
139	9136/ネア/辻家貸本	小説／根あがり松	半井桃水	駈々堂
140	9136/ネコ/辻家貸本	猫の巻 霜くづれ	山下雨花 内田魯庵	駈々堂 春陽堂
141	9136/ノロ/辻家貸本	残る光	斎藤弔花	今古堂書店
142	9136/ノチ/辻家貸本	後の恋	徳田秋声	春陽堂
143	9136/ノチ/辻家貸本	後の後藤又兵衛	緑園	隆文館
144	9136/ハギ/辻家貸本	萩の下露	半井桃水	日高有倫堂
145	9136/ハク/辻家貸本	薄命の花	福地桜痴	春陽堂
146	9136/ハク-1/辻家貸本	伯爵夫人 前編	田口菊汀	東京堂・上田屋
147	9136/ハク-1/辻家貸本	伯爵夫人 前編	田口菊汀	東京堂・上田屋
148	9136/ハク-2/辻家貸本	伯爵夫人 後編	田口菊汀	東京堂・上田屋
149	9136/ハク-3/辻家貸本	伯爵夫人 終編	田口菊汀	日高有倫堂
150	9136/ハチ-1/辻家貸本	八軒長屋	村上浪六	民友社
151	9136/ハチ-2/辻家貸本	八軒長屋 後編	村上浪六	民友社
152	9136/ハツ/辻家貸本	初すがた	小杉天外	春陽堂
153	9136/ハマ/辻家貸本	浜子	草村北星	金港堂書籍株式会社
154	9136/ハヤ/辻家貸本	はやり唄	小杉天外	
155	9136/ハラ-1/辻家貸本	原田甲斐	村上浪六	青木嵩山堂
156	9136/ハラ-2/辻家貸本	原田甲斐 後編	村上浪六	青木嵩山堂
157	9136/ヒオ/辻家貸本	微温	水野葉舟	易風社
158	9136/ビス/辻家貸本	探偵実話／ピストルお袖	わかば	大川屋書店
159	9136/ヒト/辻家貸本	小説／人殺し	渡辺霞亭	駈々堂
160	9136/ヒミ/辻家貸本	秘密党	南陽外史	扶桑堂
161	9136/ヒメ-1/辻家貸本	姫様お辰 前編	広津柳浪	春陽堂

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
1903.12.9(校訂4版)			ソ四十三号	14.11.13			
1902.3.10			タ廿号				
1902.7.15 1902.9.10	75 銭	15 銭	タ十九号	13.9.2	1046		合冊
1907.6.15	40 銭	7 銭	ナ十号	15.10.31			
	70 銭	15 銭	タ十号	13.9.2	1028		合冊
1907.5.20(再版)	70 銭	13 銭	ヲ四十五号	15.10.31			
1906.3.7(再版)	70 銭	13 銭	ヲ四十五号	15.10.31			
1896.2.16	50 銭	7 銭	ヲ十五号	15.10.3			
1905.4.10(3版)	70 銭	15 銭	ネ二十五号				
	50 銭	10 銭	第一イ十号	13.9.3	1110		
1908.4.1	60(85)銭	13(15)銭	ロ五十号	15.10.31			
	50 銭	7 銭		15.9.20			
1904.6.26	70 銭	15 銭	ソ五十一号				
1900.9.8 1901.1.20(再版)	70 銭	15 銭	カ二十五号 ヨ二十号	14.10.3	226		合冊
1907.7.25	50 銭	10 銭	ハノ十八号	14.10.28	271		
	1 円	20 銭	メ四二、五十六号	15.9.27			
		15 銭	メ卅二、二十五号	14.10.3	248		
			大七、五号				
1896.10.7	50 銭	8 銭		13.8.31	997		
1909.3.25(14版)	50 銭	10 銭	ハノ廿八号	15.6.1			帳簿紙片あり
1903.10.10	50 銭	8 銭	ニノ九号	13.8.30	931		
1900.5.10(5版)							
1897.4.1			モタカ	15.9.25			
1899.6.1(3版)	30 銭	6 銭	カ十七号	13.8.27	711		
1899.6.18(3版)	50 銭	8 銭		13.9.3	1122		
1909.5.1	85 銭	15 銭	ロ七十三号	15.3.5	510		
1902.4.15 1902.5.20	80 銭	15 銭	タ三十八号	14.11.13	318		合冊
1902.3.5 1902.4.17	80 銭	15 銭	タ十九号 タ十九号	13.9.3	1166		合冊
1904.1.1	70 銭	15 銭	ナ三十三号	13.9.1	1010		帳簿紙片あり
1904.5.25(再版)	70 銭	15 銭	ソ五十二号	13.9.1	1009		帳簿紙片あり
1912.1.5(再版)			大正三、十一号	13.8.31	969		
1903.1.1 1905.4.17	80 銭	15 銭	ハノ十八号 ハノ十八号				
1905.4.12	80 銭	15 銭	ツ四十号	15.3.5	502		
1902.4.5	50 銭	8 銭	タ十九号	13.9.3	1156		
1895.9.23			レ四号	13.9.3	1162		
1902.5.17	50 銭	10 銭	レ二十八号	13.9.2	1054		
1902.6.4	50 銭	10 銭	レ二十八号	13.9.2	1057		
1908.1.15	60 銭	10 銭		14.10.3	250		
1911.7.25	55 銭	8 銭	ニノ十五号	13.9.3	1099		
1899.5.5(再版)	50 銭	7 銭	カタラ	13.8.31	948		

	請求記号	書名	著編者	発行元
80	9136/サン/辻家貸本	校訂／三人妻	尾崎紅葉	春陽堂
81	9136/シグ/辻家貸本	小説／時雨月	堀江松華庵	駁々堂
82	9136/ジュ/辻家貸本	自由結婚 自由結婚 後編	徳田秋声・三島霜川	駁々堂
83	9136/シヨ/辻家貸本	小英勇	稲岡奴之助	青木嵩山堂
84	9136/シヨ/辻家貸本	小説家 上の巻 小説家 下の巻	村井弦斎	春陽堂
85	9136/シヨ-1/辻家貸本	少華族 上編	徳田秋声	春陽堂
86	9136/シヨ-2/辻家貸本	少華族 下編	徳田秋声	春陽堂
87	9136/シロ/辻家貸本	白酒売	黒田天外	田中宋栄堂
88	9136/シン/辻家貸本	新学士	小杉天外	春陽堂
89	9136/シン/辻家貸本	新華族	漣山人	
90	9136/シン/辻家貸本	新生涯	田口菊汀	美也古書房
91	9136/シン/辻家貸本	新羽衣物語	幸田露伴	
92	9136/シン/辻家貸本	新夫人	小杉天外	春陽堂
93	9136/シン/辻家貸本	新聞売子 前編 新聞売子 後編	菊池幽芳	駁々堂
94	9136/スミ/辻家貸本	隅田川五人わかしゆ	広津柳浪・蒼々園	求光閣書店
95	9136/セイ/辻家貸本	生	田山花袋	
96	9136/セイ/辻家貸本	青春怨	川上眉山	春陽堂
97	9136/セケ-1/辻家貸本	世間 前編	広津柳浪	祐文社
98	9136/ゼツ/辻家貸本	絶世の美人	柳圃小史	求光閣
99	9136/ソウ/辻家貸本	想夫憐	黒法師	今古堂書店
100	9136/ダイ/辻家貸本	秘密探偵／大悪魔	曲水漁郎	日吉堂
101	9136/ダイ/辻家貸本	軍事小説／大軍艦	江見水蔭	青木嵩山堂
102	9136/ダイ/辻家貸本	大詐欺師千坂光子		井上藤吉
103	9136/ダイ/辻家貸本	大探検	菊池幽芳	駁々堂
104	9136/タゴ/辻家貸本	小説／田毎源氏	江見水蔭	青木嵩山堂
105	9136/タツ/辻家貸本	黄昏	白柳秀湖	如山堂書店
106	9136/ダテ/辻家貸本	小説／伊達振子 前編 小説／伊達振子 後編	村上浪六	駁々堂
107	9136/タメ/辻家貸本	為朝重太郎 前編 為朝重太郎 後編	井原青々園	駁々堂
108	9136/チキ-1/辻家貸本	家庭小説／乳姉妹 前編	菊池幽芳	春陽堂
109	9136/チキ-2/辻家貸本	家庭小説／乳姉妹 後編	菊池幽芳	春陽堂
110	9136/チロ/辻家貸本	剛賊紳士／智光坊	わかば	大川屋書店
111	9136/チャ/辻家貸本	茶碗酒 いさゝ川	前田曙山 柳川春葉	春陽堂
112	9136/チヨ/辻家貸本	長恨	大江素天	駁々堂
113	9136/ツジ/辻家貸本	辻占売	前田曙山	駁々堂
114	9136/ツユ/辻家貸本	露子姫	忍月居士	駁々堂
115	9136/ツリ-1/辻家貸本	釣道楽 前編	村井弦斎	春陽堂
116	9136/ツリ-2/辻家貸本	釣道楽 後編	村井弦斎	春陽堂
117	9136/デン/辻家貸本	出潮	伊藤銀月	日高有倫堂
118	9136/テン/辻家貸本	小説／天狗武士	渡辺黙禪	矢島誠進堂書店
119	9136/デン/辻家貸本	高等探偵／電話の詐偽	仙橋散史晰	駁々堂

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
1908.9.15	85 銭	15 銭		15.9.5	516		
1905.4.10(再版)	70(60)銭	15 銭	ツ二十号	13.12.15	33		
1901.9.5			ヨ十九号	13.9.2	1053		
1911.10.5	80 銭	15 銭	二ノ四十二号	15.6.1			
1901.4.7(再版)	50 銭	8 銭	ヨ十八号	13.9.3	1171		
1905.7.15	50 銭	5 銭	ハノ十八号				
	50 銭	7 銭		13.8.26	637		
	1 円	20 銭	メ三十六、三十号	13.8.1	1019		
1906.4.5	80 銭	15 銭	ネ六十号	14.10.3	231		
1892.1.14(再版)	50 銭		サ十二号	15.6.1			
1899.7.7			タ十一号	13.8.30	904		帳簿紙片あり
1904.12.5 1906.2.20			上下五十五号	13.9.2	1048		合冊
1902.2.8 1902.3.25	80 銭	15 銭	ツ十八号 ツ十号	13.9.3	1182		合冊
1897.4.25(6 版) 1897.3.31(3 版)	50 銭	7 銭	ワモカー、二冊	15.6.1			合冊
1899.10.20(4 版)	50 銭	7 銭		15.9.30			
1913.12.28	1 円 20 銭	20 銭		15.9.20			
1914.5.10	1 円 20 銭	20 銭	二冊大九、九十号				
1903.9.17	50 銭	8 銭	ソ十五号	13.9.3	1129		
1909.6.25	65 銭	15 銭	ハノ五十二号	14.11.13	320		
1903.2.2	50 銭	8 銭	ツ六号	13.9.1	1024		
1897.11.22(再版)				13.9.3	1151		帳簿紙片あり
1898.9.19	60 銭	15 銭	タ十五号	13.9.2	1059		合冊
1905.10.13(3 版)	50 銭	8 銭	ネ十五号	15.9.30			
1901.4.25 1901.9.28	70 銭	15 銭	ヨ二十号 タ五号	13.9.3	1120		合冊
1901.6.20	50 銭	9 銭	ヨ十号	14.10.28	273		
1902.7.13			ナ十三号	13.9.3	1142		
1902.2.23	50(40)銭	8 銭		13.9.3	1170		
1894.5.1			ソ五号	14.11.5			
1895.10.7	30 銭	6 銭	ル八号	13.8.30	850		
1908.4.5	70 銭	15 銭	ロ五十二号	14.10.3	224		
1906.10.30	1 円	20 銭		14.10.28	276		
1907.5.15	1 円	20 銭		14.10.28	277		
1908.7.15	1 円	20 銭		14.10.28	275		
1892.4.15	70 銭	15 銭	レ十号	13.9.1	1025		
1909.10.18	80(75)銭	15 銭	ハノ三十号	13.12.15	29	15 銭	
1902.12.18	60 銭	13 銭	二冊大九、三十号	13.8.30	900		
1903.1.1	60 銭	13 銭		13.8.30	802		
			二冊メ三十六三十一号	15.9.20			合冊
1895.12.18	50 銭	7 銭		13.9.3	1165		
1899.5.15	50 銭	8 銭	ヨ十四号	13.8.30	905		

	請求記号	書名	著編者	発行元
40	9136/カイ-2/辻家貸本	怪光 後編	田口菊汀	不振会
41	9136/カコ/辻家貸本	小説/かこひもの	徳田秋声	隆文館
42	9136/カス/辻家貸本	春日局	村上浪六	駈々堂
43	9136/カチ/辻家貸本	火中の女	江見水蔭	日高有倫堂
44	9136/カミ/辻家貸本	小説/紙子蒲団	渡辺霞亭	矢島誠進堂書店
45	9136/カラ/辻家貸本	烏丸光広卿	福地桜痴	春陽堂
46	9136/カン/辻家貸本	関東俠客伝	市川新水(稿)・乾坤亭(補綴)	
47	9136/カン/辻家貸本	寒牡丹	長田秋濤・紅葉山人	
48	9136/カン-1/辻家貸本	観音岩 前編	川上眉山	日高有倫堂
49	9136/キヤ/辻家貸本	伽羅枕	尾崎紅葉	春陽堂
50	9136/キヨ/辻家貸本	探偵実話/俠客馬頭又五郎	無名氏	文明林
51	9136/キヨ/辻家貸本	虚無党 続虚無党	塚原涉柿園	国民書院
52	9136/クウ/辻家貸本	空中飛行器 空中飛行器 後編	江見水蔭	青木嵩山堂
53	9136/クサ/辻家貸本	草枕 草枕 後編	村上浪六(執筆)・島田澄三(遺稿)	青木嵩山堂
54	9136/クモ/辻家貸本	小説/雲の袖	幸田露伴	青木嵩山堂
55	9136/クリ-1/辻家貸本	栗山大膳 上編	碧瑠璃園	隆文館
56	9136/クリ-2/辻家貸本	栗山大膳 下編	碧瑠璃園	隆文館
57	9136/クル/辻家貸本	狂ひ咲	半井桃水	春陽堂
58	9136/クロ/辻家貸本	黒牡丹	上田君子	梁江堂書店
59	9136/クロ/辻家貸本	黒牡丹	根本吐芳	青木嵩山堂
60	9136/クロ-2/辻家貸本	黒田健次 続篇	村上浪六	青木嵩山堂
61	9136/クワ/辻家貸本	桑の弓 両美人	村井弦齋	春陽堂 春陽堂
62	9136/ケツ/辻家貸本	結婚難	徳田秋声	今古堂書店
63	9136/ゲン/辻家貸本	現世相 現世相 後編	水谷不倒	駈々堂
64	9136/コイ/辻家貸本	恋と恋	小杉天外	春陽堂
65	9136/コイ/辻家貸本	恋女房	小栗風葉・谷活東	青木嵩山堂
66	9136/コイ-1/辻家貸本	恋無常 前編	小栗風葉	青木嵩山堂
67	9136/ココ/辻家貸本	心の闇	尾崎紅葉	春陽堂
68	9136/ゴジ/辻家貸本	探偵小説/五十万両の大賊	一葉庵主人	中村鍾美堂
69	9136/コダ/辻家貸本	子宝	半井桃水	日高有倫堂
70	9136/コブ-1/辻家貸本	コブシ 前編	小杉天外	章光閣
71	9136/コブ-2/辻家貸本	コブシ 中編	小杉天外	章光閣
72	9136/コブ-3/辻家貸本	コブシ 後編	小杉天外	章光閣
73	9136/ゴマ/辻家貸本	五枚姿絵	広津柳浪	春陽堂
74	9136/コン/辻家貸本	金色蛇	渡辺霞亭	春陽堂
75	9136/コン-1/辻家貸本	探偵実話/紺帷子 前編	小林蹴月	金楨堂
76	9136/コン-2/辻家貸本	探偵実話/紺帷子 後編	小林蹴月	金楨堂
77	9136/サク/辻家貸本	桜の御所 上之巻 桜の御所 下之巻	村井弦齋	
78	9136/ササ/辻家貸本	さゝ舟	幸田露伴	青木嵩山堂
79	9136/サラ/辻家貸本	探偵文庫/晒し首	島田柳川	駈々堂

刊年	保証金	見料	符牒	消毒承認日	番号	売価	備考
1897.10.29				15.9.30			
1894.10 1894.12				15.10.9			合冊
1895.2 1895.5				15.10.9			合冊
1898.11.27	50 銭	10 銭		13.8.30	923		
1900.10.1(再版)			カ十一五号	13.8.30	934		
1899.10.2			カラ	13.8.30	925		
1899.11.27			カラ	13.8.30	928		帳簿紙片あり
1900.7.18			カ二十五号				
	70 銭	15 銭	二冊メ三十八、三十号	13.9.3	1116		合冊
1896.10.23	55 銭	10(7)銭	タ十五号	15.9.20			
	80 銭	15 銭	タ三十八号	13.9.3	1157		合冊
1902.12.1	50 銭	10 銭	二冊レ三十二号	13.8.30	893		
1902.12.1	50 銭	10 銭		13.8.30	891		
1901.10.15	50 銭	7 銭	タ十九号	13.9.3	1197		
1896.6.6	50 銭	8 銭	ヨ廿号	13.9.1	1018		
	80(70)銭	13 銭		15.8.20		17 銭	
1911.6.28	80 銭	20 銭	ホ五十六号	15.10.91			
1901.6.27	50 銭	8 銭	ヨ十四号	13.8.31	946		
1907.2.10(改訂 10 版)	70 銭	13 銭	ラ二十五号	14.11.11	298		
1906.5.21	75 銭	15 銭	ネ五十号	14.11.11	307		
1907.1.1	2 円	25 銭	三冊ラ、八十号	14.11.11	297		
1901.8.28 1899.10.15(4 版)	70 銭	15 銭	ヨ十八号	13.9.3	1143		合冊
	70 銭	15 銭	メソ二十号 メヨ十六号	13.9.3	1172		合冊
1900.10.15(14 版)	55 銭	15 銭	ソ廿五号	15.10.31			
1900.6.5		5 銭	カ二十五号	14.10.3	234		
1899.8.25(10 版)	40 銭	4 銭	ソ十号	13.9.1	1016		
1896.8.19	70 銭	15 銭	ネヲモ	15.10.31			帳簿紙片あり 合冊
1903.7.15	50 銭	7 銭	ネ五号	13.9.1	1020		
1899.7.5(再版)				15.9.1		10 銭	帳簿紙片あり
1908.9.1	70 銭	10 銭	四三、二十号	13.9.3	1186		
1909.3.20			ニノ廿号				
1899.10.15(5 版)	50 銭	7 銭		14.10.3	246		
1907.11.12	65 銭	10 銭	ナ五十五号				
	60 銭	13 銭	大七、十一号	15.9.19			
1908.6.18	80 銭	15 銭	イ六十八号	14.10.3	243		
1903.4.1(再版)	50 銭	8 銭	ソ十四号	13.8.30	903		
1905.10.25	80(75)銭	15(10)銭	ラ六十五号	15.5.5	517		
1900.3.10(6 版)				13.9.3	1164		
1908.6.15	85 銭	15 銭	上下一〇三号	15.9.5	519		

	請求記号	書名	著編者	発行元
1	21052/アロ/辻家貸本	赤穂義士談	信夫恕軒	談叢社
2	9135/シュ-10/辻家貸本	俊傑神稲水滸伝 第10巻 俊傑神稲水滸伝 第11巻	岳亭定岡	扶桑堂
3	9135/シュ-12/辻家貸本	俊傑神稲水滸伝 第12巻 俊傑神稲水滸伝 第13巻	岳亭定岡	扶桑堂
4	91356/イワ/辻家貸本	探偵実話/岩井松三郎	埋木庵	今古堂分店
5	91356/オノ/辻家貸本	探偵実話/おのぶ源次郎		文錦堂
6	91356/ムラ-1/辻家貸本	探偵実話/村正勘次 前編	有髯無髯	金楨堂
7	91356/ムラ-2/辻家貸本	探偵実話/村正勘次 後編	有髯無髯	金楨堂
8	9136/アオ/辻家貸本	青鬼赤鬼	山下雨花	駸々堂
9	9136/アオ/辻家貸本	教育小説/青葉若葉 上之巻 教育小説/青葉若葉 下之巻	繁野天来	春陽堂
10	9136/アオ/辻家貸本	青葡萄	尾崎紅葉	春陽堂
11	9136/アサ/辻家貸本	朝日桜 上の巻 朝日桜 下の巻	村井弦斎	春陽堂
12	9136/アダ-1/辻家貸本	探偵実話/あだ夢 上編	しのぶ	嶋鮮堂・金楨堂
13	9136/アダ-2/辻家貸本	探偵実話/あだ夢 下編	しのぶ	嶋鮮堂・金楨堂
14	9136/アラ/辻家貸本	小説/洗ひ髪	渡辺霞亭	駸々堂
15	9136/アワ/辻家貸本	小説/あはせ鏡	ふたば	大倉書店
16	9136/イイ/辻家貸本	伊井蓉峰脚本集	伊井蓉峰	金港堂書籍株式会社
17	9136/イエ/辻家貸本	家の柱	田口菊汀	日高有倫堂
18	9136/イガ/辻家貸本	探偵実話/意外の犯罪	多田喜太郎	名倉昭文館
19	9136/イチ/辻家貸本	無花果	中村春雨	金尾文淵堂
20	9136/イモ/辻家貸本	慰問袋	半井桃水	日高有倫堂
21	9136/ウズ/辻家貸本	鶴籠	夏目漱石	春陽堂
22	9136/ウデ/辻家貸本	腕の疵 小説/木津の篝火	欠伸居士 江見水蔭	駸々堂 青木嵩山堂
23	9136/オキ/辻家貸本	沖の小嶋 小説/星月夜	村井弦斎 中山白峰	春陽堂 駸々堂
24	9136/オン/辻家貸本	小説/啞之旅行	末広鉄腸	青木嵩山堂
25	9136/オチ/辻家貸本	小説/雄蝶雌蝶	稲岡奴之助	駸々堂
26	9136/オニ/辻家貸本	鬼あざみ	村上浪六	青木嵩山堂
27	9136/オニ/辻家貸本	鬼百合 寿王冠者	欠伸居士 松居松葉	春陽堂
28	9136/オモ/辻家貸本	おもかげ	武田仰天子	青木嵩山堂
29	9136/オヤ/辻家貸本	親不知子不知/命不知	江見水蔭	駸々堂
30	9136/オン/辻家貸本	女	小栗風葉・小川黙水	日高有倫堂
31	9136/オン/辻家貸本	女ざむらひ	渡辺黙禪	福岡書店
32	9136/オン/辻家貸本	新作小説/女の顔切	江見水蔭・関戸浩園	青木嵩山堂
33	9136/オン/辻家貸本	女の秘密	徳田秋声	今古堂書店
34	9136/オン/辻家貸本	女浪人	福地桜痴	春陽堂
35	9136/オン-2/辻家貸本	婦系図 後編	泉鏡花	春陽堂
36	9136/カイ/辻家貸本	探偵実話/会社の犯罪		日吉堂
37	9136/カイ/辻家貸本	海賊の子	江見水蔭	隆文館
38	9136/カイ/辻家貸本	小説/海底の錨	江見水蔭	青木嵩山堂
39	9136/カイ-1/辻家貸本	怪光 前編	田口菊汀	不振会

注

- 1 博文館、一九一三年。
- 2 浅岡邦雄「明治期「新式貸本屋」と読者たち——共益貸本社を中心に——」(浅岡邦雄・鈴木貞美編『明治期「新式貸本屋」目録の研究』作品社、二〇一〇年所収。初出は二〇〇一年)。
- 3 作品社、二〇一〇年。
- 4 たとえば、小林昌樹「図書館ではどんな本が読めて、そして読めなかったのか」(『公共図書館の冒険』みすず書房、二〇一八年所収)では、「今日から見ても、公共図書館の代わりを果たしていたといってもよいだろう」と新式貸本屋を評価している。
- 5 近代金沢における出版に関する研究には、体系的にまとめられた『石川県印刷史』(石川県印刷工業組合、一九六八年)のほか、活字や新聞・雑誌を対象とした諸論考がみられる。こと書肆に限れば、『石川県印刷史』以外では宮川成一「郷土の書肆と主な刊行物」(『石川郷土史学会々誌』創刊号、石川郷土史学会、一九六八年十月)や高橋明彦「古書肆南陽堂主人柳川昇爾の近代金沢書肆研究」(『金沢美術工芸大学紀要』第五十八号、二〇一四年)などがあるばかりで、特定の書肆を個別に論じたものはほとんどみられない。
- 6 以下、卯辰山集学所に関する記述は、石川県教育会金沢支会編

- 『金沢市教育史』(石川県教育会金沢支会、一九一九年)および石川県教育史編さん委員会編『石川県教育史』第一卷(石川県教育委員会、一九七四年)による。
- 7 高橋明彦「古書肆南陽堂主人柳川昇爾の近代金沢書肆研究」(『金沢美術工芸大学紀要』第五十八号、二〇一四年)所収。
- 8 石川県立図書館饒石文庫蔵本(請求記号：K〇九—一六)を参照。本書には明治十年版のほか、刊記に「同年十五年八月刻成」とだけ補筆した明治十五年版がある(国立国会図書館蔵『大日本道中細見図』(請求記号：YG九二—三七六)など)。
- 9 国立国会図書館蔵本(請求記号：特三八—六五〇)による。本書には出版人の部分を「同国同区上堤町五十番地／知新堂」と改めた金沢市立玉川図書館近世史料館蔵本(請求記号：〇九〇—三—一—一四〇)のほか、奥付そのものを「加賀 探花居士編輯／東京 英泉堂画図／明治十四年八月出版御届全年十月発兌／編輯人 加賀国金沢区御歩町三番町九番地 春田篤次／出版人 同国同区上堤町五十番地 知新堂／発行元 同国同区横安江町百九番地 近八書房」と改め、書名を『日用至宝婦女一代鑑 探花百人一首小倉文匣』とした跡見学園女子大学図書館本(請求記号：九一—一—一四七／H三四／A四—一八八—四五三三七)などいくつかのバリエーションがみられる。
- 10 観文堂書店、一九二一年。

- 11 北陸道陸運元会社および内国通運会社金沢支店、東京陸運元会社に関する記述は、土屋喬雄監修『社史日本通運株式会社』（日本通運株式会社、一九六二年）による。
- 12 園部昌良「明治初期・金沢の活字印刷 4 鑄造活字本（続）」『印刷界』一八一号、日本印刷新聞社、一九六八年十二月。
- 13 管見に入った中央大学中央図書館蔵本（請求記号：M四一九・一／S二七）、石川県立図書館関口文庫蔵本（請求記号：K〇九四・一／八―二／関口文庫）、金沢市立玉川図書館近世史料館松村文庫蔵本（請求記号：特二一・四―七（一）―（二））は全て同様の奥付を持つ。
- 14 架蔵する『詩語爛錦』巻七―十による。
- 15 国立国会図書館蔵本（請求記号：特五七―六五）による。
- 16 架蔵。
- 17 戸家誠編『出版流通メディア資料集成（四） 内地外地書店名鑑——明治大正昭和戦時期の本屋ダイレクトリー』第二卷（金沢文圃閣、二〇一五年）所収。なお、△印は図書館販売専門を主な業態とする者を表す。
- 18 石川県立図書館、二〇〇九年。
- 19 このコレクションは、国文学研究資料館の近代書誌・画像データベース (<https://base1.nijl.ac.jp/kindai/>) において書誌情報とともに画像が公開されている。
- 20 浅岡邦雄「明治期貸本貸出帳のなかの読者たち——烏山町越雲巳之次『貸本人名帳』をめぐる——」（『日本出版史料』四、日本エディタースクール出版部、一九九九年三月）。
- 21 明治中ごろ以降の書籍には、巻末附載の蔵版目録や出版広告で「郵税金〇〇銭」と謳っている例が多くみられる。

終章 本論文の到達点と今後の課題

本論文を構成する各論の初出は次のとおりである。

序章 貸本問屋の研究とその意義

書き下ろし

第一章 貸本問屋の史的展開

第一節 丁子屋平兵衛の躍進

——貸本屋世話役から貸本問屋へ——
書き下ろし

第二節 「中本」受容と大島屋伝右衛門

『近世文芸』一〇九号
(日本近世文学会、二〇一九年一月)

第三節 大島屋伝右衛門と池田屋一統

——売薬「処女香」を端緒として——

第四節 黎明期の大川屋錠吉

『出版研究』五十号
(日本出版学会、二〇二〇年三月)

『文学・語学』二三〇号

(全国大学国語国文学会、二〇二〇年十二月)

第二章 貸本問屋の出版書目

第一節 丁子屋平兵衛出版書目年表稿

書き下ろし

第二節 大島屋伝右衛門出版書目年表稿

『書物・出版と社会変容』二十一号
(「書物・出版と社会変容」研究会、二〇一八年十月)

第三節 初代大川屋錠吉出版書目年表稿 書き下ろし

第三章 貸本文化の変容とその諸相

第一節 貸本屋の諸相 書き下ろし

第二節 誠光堂池田屋清吉の片影 『中央大学国文』六十号

(中央大学国文学会、二〇一七年三月)

第三節 近代金沢における書籍受容と春田書店 『中央大学国文』六十三号

(中央大学国文学会、二〇二〇年三月)

最後に本論文の到達点と今後の課題を述べたい。

第一章および第二章により、丁子屋平兵衛・大島屋伝右衛門・大川屋錠吉ら個々の活動や書籍流通の様相などに加えて、彼らが出版した具体的な書目を知り得ることができた。これにより、貸本問屋がどのような書籍を、どのように流通させていたのか、その一端が明らかとなったといえる。これまで実態のわからなかった貸本問屋という存在に迫ることができたのは、本論文の一つの到達点である。また、加えて第三章では幕末から明治・大正期までの貸本屋の具体

的な蔵書内容や営業の様子を浮かび上がらせた。読本や人情本をはじめとする戯作や実録は、明治十年代ごろまで普通に貸し出されていたが、大正期には全くみられなくなってしまう。だが、その変容が非常に緩やかに起こっていることは注目できよう。以上の三章をとおして、「貸本問屋↓貸本屋↓読者」という貸本問屋を起点する娯楽読み物の出版・流通・受容の流れを捉えることができた。

今後の課題としては、以下の三つがある。

まず上方の貸本問屋の実態解明があげられる。本論文で取り上げた丁子屋平兵衛・大島屋伝右衛門・大川屋錠吉はいずれも江戸（東京）の貸本問屋であり、河内屋茂兵衛や河内屋源七郎など大坂をはじめとする上方の貸本問屋については、深く言及することができなかった。特に河内屋茂兵衛は第一章第一節および第二節で述べたように、丁子屋・大島屋の両書肆との結びつきが強い存在である。河内屋茂兵衛らの実態解明は、貸本問屋研究の深化のみならず、全国的な書籍流通の実情をも浮かび上がらせることが期待できるため、今後進めていく必要がある。

今一つの課題は、大正以降の貸本問屋についてである。本論文では大正まで営業を続けていた大川屋を取り上げたものの、その考察は主として明治期に重点を置いたものであった。そのため、大正期の大川屋はもちろん、ほかの貸本問屋の実態についてはまだ不明瞭な部分がある。

最後の課題は、近代貸本文化研究の基盤整備である。明治・大正

期の貸本屋については、書生を対象に學術書を貸し出した新式貸本屋¹や娯楽的な小説類を扱う貸本屋を取り上げた浅岡邦雄²や藤島隆³、高野肇⁴による成果があるものの、事例の蓄積がまだ足りておらず、近世の長友千代治氏による『近世貸本屋の研究』（東京堂出版、一九八二年）や『近世の読書』（青裳堂書店、一九八七年）の如く体系的な成果が未だみられない。沓掛伊左吉⁵をはじめとする近代貸本屋の沿革を描こうとした試みはあるが、いずれも粗削りの感は否めず再検討すべき点は少なくない。貸本屋がいつ、どこで、だれに、どのような書籍を貸し出していたか、という基本的な事柄から近代貸本文化研究に手を付けていく必要がある。

以上のように課題をいくつか残すものの、貸本問屋の実態解明をおこない、彼らを起点とする娯楽読み物の出版・流通・受容の流れを捉えられた点は、文学・出版などの諸分野へ寄与する部分が少なくないと思われる。

注

1 浅岡邦雄・鈴木貞美編『明治期「新式貸本屋」目録の研究』（作品社、二〇一〇年）など。

2 浅岡邦雄「明治期貸本貸出帳のなかの読者たち——烏山町越雲巳之次『貸本人名帳』をめぐる——」（『日本出版史料』四、日本エディタースクール出版部、一九九九年三月）。

3 藤島隆著『貸本屋独立社とその系譜』（北海道出版企画センター、二〇一〇年）。

4 高野肇著『貸本屋、古本屋、高野書店』（論創社、二〇一二年）。

5 沓掛伊左吉「貸本屋の歴史」（『沓掛伊左吉著作集 書物文化史考』八潮書店、一九八二年所収）。